

夜明けを告げる人びと

序文

この本で、シエイキ・アーマドとセイエド・カゼムという偉大な人物に関して入手できた話を最初に述べ、その後で、一八四四年から現在（一八八八年）までの間に起こった主な事件を年代順に述べてみようと思う。これは神の助けがなければできない仕事である。

事件のいくつかはくわしく述べ、そのほかの事件は簡潔に述べてみたい。わたし自身が目撃した出来事、または、信頼できる人たちの報告を述べるが、その場合はすべて、報告者の名前と身分をはっきりとさせたい。この本を書くにあたって大変お世話になる方々は、バブの秘書のアーマド・ガズビニ、エスマイル・ザビ、ゾヌジ、アブトラブ・ガズビニ、そして最後に述べるが同じく重要な方であるバハオラの弟のミルザ・ムサ、すなわちアガ・カリムである。

この最初の部分の完成に援助を下された神に感謝を捧げたいと思う。さらにバハオラの祝福と承認をも得たが、それに対しても神に感謝する次第である。バハオラは最初の部分に注意を向けられ、秘書のアガ・ジャンに朗読させて、満足の意を表されたのである。この仕事を進めてゆく上で、踏み間違えたり、たじろいだりしないように、全能なる神の支持と導きを祈るばかりである。

モハメッド・ザランディ
(称号：ナビル・アザム)

アッカ、パレスチナ

西暦一八八八年

第一章 シェイキ・アーマドの使命

モハメットの宗教に無知と狂信がはびこり、宗派間の争いで真理の輝きがくもってしまった時代に、東方からきらめく星、すなわちシェイキ・アーマドという神の導きをもたらす人が現われた。かれは、イスラム教が分裂し、力が弱まり、目的が墮落し、その聖なる名声が汚されたのを悟った。また、イスラム教のシーア派の腐敗と争いを目にして苦悩に満たされたのである。

そこで、内部できらめく光に鼓舞され、明確なビジョンと確固とした目的をもち、また俗世への愛着を断ち、崇高な心をもって立ち上がった。それはイスラム教が下劣な人びとに裏切られたことへの抗議でもあった。この使命がいかに重大であることを認識していたかれは、シーア派の信者だけでなく、東洋のイスラム教徒全体に熱烈に訴えた。怠慢の眠りから覚め、時満ちて出現される偉大なる御方のために準備をととのえるように呼びかけた。さらに、イスラム教をおおってしまった偏見と無知のもやは、その御方のみが散らすことができると訴えたのである。(pp.1-2)

そのあと、アーマドはバーレーンの島にある実家と親族をはなれ、ペルシャ湾の南方に向かった。全能の神に命じられた通り、イスラム教典の聖句に秘められた意義を解くために出発したのである。その聖句には、新しい神の顕示者（神の使者）の到来が予告されていた。かれは、その道につきまとう危険と責任の重大さをも十分認識していた。

アーマドの魂には燃えるような確信があった。それは、イスラム教内部でどれほど思い切った改革が行われても、このよこしまな人びとを再生させることはできない、という確信である。イスラム教典にも予告されているように、新しい啓示以外には、この墮落した宗教を再生し、その純粹さを復活できるものはないことに十分気づいていたのである。また、このことを実証するのが、神から自分に定められた運命であることも知っていた。

一七八三年、四〇才になったかれは、家屋財産をいっさい残し、神以外のすべてへの愛着を断ち、何かに駆りたてられるように、残りの生涯をこの任務にささげる決心で立ち上がった。まず、ナジャフの町とカルベラの町に行き、そこで、二、三年の間、

イスラム教僧侶の思想や慣習を十分学んだ。

やがて、かれはその地方でイスラム教典の権威ある解説者として認められるようになり、ムジタヒッド（イスラム教法の学者）と呼ばれるようになった。そして、その地方とほかの地方から来ている同僚よりも優位に立つようになった。同僚たちは、かれを神の啓示にかくされた神秘を解き、モハメッドとエマム（モハメッドの後継者）の難解な言葉を解明する資格をそなえた人と見なしたのである。(p.2)

こうして、アーマドの影響と権威がひろがるにつれて、熱心な探求者たちの数もますます増えていった。かれらはイスラム教の複雑な教えの解明を求めてきたのである。アーマドはどれほど難解な質問にも十分答えることができた。その知識と大胆さは、スーフィ派や新プラトン派などの宗派の信者たちを恐怖におののかせるほどであった。かれらはアーマドの学識を羨むと同時にその容赦ない態度を恐れた。このことは、それらの宗派を、あいまいで異端の教義を広める者らであると批判していた僧侶たちを一層よろこばせることになった。このように、アーマドは高い名声を得、深い尊敬を受けていたが、自身は称賛されるのを極度にきらった。称賛者たちの高い地位や階級に対する卑屈な愛着におどろき、そういったものに関与することを堅く拒否したのである。(p.3)

アーマドは、ナジャフとカルベラで目的を果たした後、ペルシャから漂ってくる芳香を嗅ぎ、その地に馳せたいという願望でいっぱいになった。友人たちには、本当の動機はかくして、ペルシャ湾経由でその望みの国に向かった。表向きの理由は、マシユハドの町にあるエマム・レザの廟を訪問することであった。

アーマドの魂には、だれにも漏らしていない秘密が重荷となつてのしかかっていた。その重荷をおろしたいという願いから、自分の秘密を聞いてくれる人を行く先々で必死に探し求めた。シラズの町に到着するとすぐ、その外形がメッカの聖なる廟にひじょうに似ているモスクにおもむいた。シラズは神のかくされた宝物が秘められているところであり、新しい顕示者の先駆者の宣言が聞かれるように定められていた町であった。

そのモスクをじっと見つめながら、かれはつぎの言葉をくりかえした。「実に、この

神の建物にはもろもろのしるしがあらわれているが、洞察力をそなえた者だけが認めることができるものだ。この建物の建築者は、神から靈感を受けた者にちがいない。」

アーマドはシラズの町を大変な情熱をこめて称賛した。その熱烈な語調に人びとはおどろいた。ここを平凡な町だと思っていたからである。アーマドはかれらに述べた。「おどろいてはならない。わたしの言葉の秘密はまもなく明らかにされる。皆のうち何人かは生き延びて、古の予言者たちが待望してきた日の栄光を目撃するであろう。」(pp.4-5)

この町の僧侶たちは、アーマドと言葉を交わし、その知識の深遠さに圧倒された。かれらはアーマドの神秘的な言葉の意味が把握できないことを表明し、それは自分たちの能力不足のせいだとした。

自分の呼びかけに敏感に反応した人びとの心に、神の知識の種を植えた後、アーマドはヤズドの町に向かった。そこにしばらく滞在し、胸中に秘めている真理を休むことなく広めつづけた。かれの著書と書簡の大半はこの町で書かれた。そのうち、ペルシャのファト・アリ国王は、アーマドの高い名声に心を動かされ、テヘランからかれに書簡を送り、イスラム教の複雑な教えに関して解答を求めた。それは、国の指導的な僧侶たちさえも解明できないものであった。

アーマドは国王の質問を快く受け、書簡で解答を送り、レスアレイ・サルタネイという題目をつけた。その解答に十分満足した国王は、すぐ第二の書簡を送り、かれを宮廷に招待した。アーマドはつぎのように返答した。「ナジャフとカルベラを出発して以来、マシュハドのエマム・レザの廟を訪れ、敬意を表したいと望んできました。あえて陛下にこん願いたします。このわたしの誓いを果たさせて下さい。後日、神のおぼしめしがあれば、陛下がわたしに授けられました栄誉に授かりたいと望んでおります。」(p.5)

ヤズドの町で、アーマドは神の光をもたらししたが、それに目覚めた人びとの中に、アブドル・ヴァハブというひじょうに敬虔で、正直で、神を畏れる人がいた。この人は、権威と学識で知られているコーレケという人を伴ってアーマドを毎日訪れた。ところが時折、アーマドはこの学識者に、アブドル・ヴァハブと内密の話があるので席

を外してくれるように頼んだ。すなわち、自分が好意を寄せている弟子と二人きりにしてくれるように要請したのである。このことに、学識者のコーレケはひじょうにおどろいた。つまり、アブドル・ヴァハブのような低い身分の無学者に、アーマドがこれほどの好意を示すということは、自分の方がすぐれており、業績があると思っっているコーレケにとっては大変なおどろきであったのである。

ところが、アーマドがヤズドを発った後、アブドル・ヴァハブは世間から引退し、スーフィとみなされるようになった。しかし、スーフィ派共同体の正統派の指導者たちから、侵入者であると非難され、指導者の地位をうばおうとしているのではないかと疑われた。かれはスーフィの教義に特別惹かれているわけではなかったもので、そのいわれのない非難をさげすみ、スーフィの社会を避けるようになった。そして、親しい友としてハジ・ハサンを選び、かれとだけ交際し、師のアーマドから託されていた秘密をかれに打ち明けた。アブドル・ヴァハブの死後、この友人はかれの模範にしたがい、心を開いている人びとに、差し迫ってきた神の啓示の吉報を告げた。(p.7)

カシャンの町で、わたし(著者)はマムードという人に会ったことがある。かれは、その時かれは九十才を越えており、多くの人びとから深く敬愛されていた。つぎの話は、かれがしてくれたものである。

「わたしがまだ若くてカシャンに住んでいたときのことです。新しい啓示の吉報を告げるためにナイエンの町で立ち上がった人について耳にしました。その人の話を聞いた者は学者でも、政府の役人でも、無学の人でもすべて魅せられてしまうというのです。その人の影響力は大きく、接触した人たちは世俗をすて富をさげずむようになると聞いたのです。

わたしは真実を確かめたいという好奇心から、友人たちには気づかれないようにナイエンに向かいました。そこで、そのうわさが真実であることを確認したのです。その人の顔の輝きが、魂に点された光を証明していました。ある日、朝の祈りの後で、かれはこう語りました。『まもなく、地球は樂園となるであろう。まもなく、ペルシャは廟となり、地上の人びとはそのまわりを回るようになるであろう。』

ある夜明け方に、かれが顔を地面に伏せ、祈りに没頭した状態で、”アラホ・アクバー”(神は最も偉大なり)と、くり返しているのを見ました。びっくりしたことに、か

れはわたし（マムード）の方を向いて、こう言ったのです。『わたしが皆に知らせてきたことが今現わされた。まさしくこの時間に、約束の御方の光が現われ、世界にその光を注ぎはじめたのだ。マムードよ、あなたにぜひこのことを言っておきたい。あなたは生き長らえて、時代の中でもっとも聖なる時代を見ることになろう。』

この聖人（アーマド）の言葉は、わたしの耳にずっと鳴りひびいていました。そしてついに、一八四四年シラズの町から出された聖なる呼び声（バブの宣言）を聞くことができたのです。しかし悲しいことに、体調をくずしていたために、その町に行くことができませんでした。後日、新しい啓示の先駆者であるバブがカシャンに到着され、ジャニ宅に賓客として三日間滞在されたときも、そのことを知らなかったため、バブの御前に入る栄光を失ったのです。その後しばらくたったある日、バブの弟子たちと話を交わしているとき、バブの誕生日は一八一九年十月二十日にあたることを知らされました。ところが、この日が約束の御方（バハオラ）の誕生日としてハジ・ハサンが述べた日と一致しないことに気がついたのです。実際、この二つの日付の間には二年の差があったのです。このことで、わたしはひどく途方に暮れてしまいました。

(p.8)

しかし、それから長い月日がたったある日、カマロドという人が、バグダッドでバハオラの啓示が明らかにされたことを知らせ、バハオラが著わされた〈ナイチンゲールの詩歌〉からいくつかの句と、〈かくされたる言葉〉のベルシャ編とアラビア編から何節かをわたしに紹介してくれました。かれが、それらの聖なる言葉を詠唱するのを聞いて、わたしは魂の奥底から感動したのです。つぎの言葉はいまでもあざやかに思い出されます。『おお実在の子よ。なんじの心はわが住家である。わが降臨のためにそれを清めよ。なんじの精神はわが啓示の場である。わが顕示のためにそれを清めよ。』
『おお地の子よ。なんじわれを欲するならば、われ以外のだれをも求めてはならない。また、わが美を見つめんと欲するならば、世界とそこにあるすべてのものに眼を閉じよ。わが意志と、われ以外のものの意志とは、火と水のごとく、一つの心の中に住むことはできないゆえに。』

そこでバハオラの誕生日を聞いたところ、『一八一七年十一月十二日の夜明けです』という答えがもどってきました。それを聞いた瞬間、ハジ・ハサンの言葉を思い浮かべ、かれがこの日について語っていたことを思い起こしたのです。わたしは無意識に地面にひれ伏して叫びました。『おおわが神よ。わたしにこの約束の日を目撃させて下

さったあなたに賛美あれ。今、あなたのそばに召されても、わたしは満足し、確信をもって死ぬことができます。』」この話をしてくれた年（一八五七年）に、この尊敬すべき、輝く心をもったマムードは魂を神にゆだねた。

わたし（著者）が、マムードから直接聞いたこの話は、現在も人びとの間で話題になっているが、今は亡きアーマドの洞察力がいかに鋭かったかをはっきり証明するもので、またかれが直弟子たちにおよぼした影響力を雄弁に物語るものである。弟子たちにあたえたかれの約束は、その後実現し、かれらの魂に火をつけた神秘は、その栄光をすべて現わしたのであった。

アーマドがヤズドの町で出発準備をしていたころ、もう一人、神の導きの光であるセイエド・カゼムは、アーマドを訪れる目的で、故郷のギラン州を出発した。それは、アーマドがコラサンへ巡礼に行く前であった。二人がはじめて会見したとき、アーマドはこう語った。「おおわが友よ。ようこそ、よくお出で下さった。あなたが、よこしまな人びとからわたしを解放してくれるのを、長い間待ち望んできた。かれらの恥知らずの行動と墮落した性格に悩まされてきたからだ。『われ（神）は、最初、天や地や山々に神の信仰をあずかるように提案したが、みなその重荷を拒み、それを受け取るのを怖れた。人間だけが引き受けたが、たちまち、不正で、無知なることを証明した。』（コーラン）」（p.9）

カゼムは、すでに少年のころから、おどろくべき知性と精神的な洞察力を示していた。かれは同身分と同年代の人たちの中でまれに見る能力をそなえており、十一才のときコーランを全部暗記したほどであった。十四才になるまでに、膨大な数にのぼるモハメッドの祈りと、一般に認められている伝承も暗記した。十八才のとき、コーランの一節について解説文を書き、当時の最高の学識者たちをおどろかせ、感心させた。その敬虔な態度、温和な性格、謙虚さは、あまりにも並外れていたもので、かれを知る人たちは皆、老いも若きも深い印象を受けた。

一八一五年、わずか二十二才のとき、カゼムは家族、親族、友人を残してギランを出た。神の啓示の夜明けが近づいたことを知らせるために勇敢に立ち上がったアーマドに会うためであった。かれがアーマドと共に過ごしはじめて二、三週間がたったある日、アーマドはこのように話しかけた。「あなたは家にとどまり、わたしの講義には

出ないように願いたい。わたしの弟子のうち途方にくれている者らは直接あなたに援助を求めるであろう。あなたは、神から付与された知識により、かれらの問題を解決し、かれらの心を落ち着かせることができよう。あなたの口から発せられる言葉の力で、高名なモハメッドの宗教を、その墮落状態から生き返らせることができよう。」
(pp.10-11)

この言葉を聞いて、アーマドの著名な弟子たちは憤慨し、嫉妬の念にかられた。その中には、ママガニとコーレケがいた。しかし、カゼムがあまりにも威厳にみちており、その知識と英知ははるかにすぐれていたもので、弟子たちは畏敬の念から、かれに従わざるを得ないと感じた。

こうして弟子たちをカゼムにゆだねた後、アーマドはコラサンに向かった。そしてしばらくの間、マシュハドのエマム・レザの聖廟近くに滞在し、その地方で、これまで以上の情熱をもって、探究者たちの心を悩ませてきた難問を解明しながら、神の顕示者の到来準備をつづけた。その町で、約束の御方の出現がそう遠くないことを、ますます強く意識しはじめていた。

アーマドは、マザンデラン州のヌール地方の方向に、約束の時代の夜明けを知らせる最初のきざしを感知した。つぎの伝承に予告された啓示が差し迫っているのを感じたのである。「まもなく、なんじらは満月のように輝く主の御顔を仰ぐであろう。しかも、なんじらはその御方の真理を認め、その信仰を受け入れるために結束することもしないであろう。」「約束の時の到来を知らせる最大のしるしの一つはこうである。＜ある女性が、将来自分の主となる御方を出産することである＞。」

この理由から、アーマドはヌール地方に顔を向け、カゼムと主な弟子たちを伴って、テヘランに進んだ。ペルシャ国王は、アーマドが首都に近づいていることを知り、テヘランの高僧と高官に、かれを出迎えるように命じ、自分に代わって丁重に歓迎の言葉を述べるように指示した。こうして、この著名な訪問客とその同伴者たちは、国王から王侯のもてなしを受けた。さらに、国王は自らアーマドと会見し、かれを「わが国の荣誉であり、国民に名誉をもたらす人である」と宣言したのである。

そのころ、ヌールの高貴な旧家に一人の聖なる子が誕生した。父親の名前はミルザ・

アッバスであったが、ミルザ・ボズルグという名で知られていた。かれは国王から寵愛を受けている大臣であった。この聖なる子こそバハオラ（実名はミルザ・ホセイーン・アリ）である。一八一七年十一月十二日の夜明け時に、計り知れないほどの恩恵を世界にもたらすお方が誕生されたのであるが、そのとき世界はその重要性に気づいていなかった。（pp.12-13）

このめでたい出来事の意義を十分知っていたアーマドは、新しく誕生した聖なる王の宮居の境内で残りの生涯を過ごしたいと熱望した。しかし、それはかれの定めではなかったのである。かれの心の渴望は満たされなかったが、神の絶対的な命に従わざるを得ないと感じ、敬愛する御方の都に背を向けケルマンシャーに向かった。

ケルマンシャーの知事は、国王の長男モハメッド・アリ皇子で、一族のうちだれよりも有能であった。かれは、自らアーマドをもてなしたいと申し出た。国王はこの皇子を寵愛していたのですぐ許可をあたえた。一方、アーマドは運命に完全に身をまかせてテヘランに別れを告げた。出発前に、しずかに祈った。今、人民のなかに誕生された神のかくされた宝物である御方が、保護され、大事に育てられ、人民がその御方の神聖さと栄光を十分認め、それを全世界の人びとに伝えることができますようにと。

ケルマンシャーの町に到着後、アーマドはシーア派の弟子で心が開いている者たちを選び、その教育にとくに力を入れることにした。かれらが来るべき大業を積極的に支持できるようにであった。かれが残した著書には有名な作品があるが、その中で、シーア派のエマムたちの美徳を熱烈に称えている。とくにエマムたちが、約束の御方の到来に関して言及した個所には重点をおいた。また、ホセイーンという名に何度も言及しているが、それはまだ現われていないホセイーンのことを意味した。アリという名にも幾度も言及があるが、それは以前殺害されたアリではなく、最近誕生されたアリを意味していたのである。（p.13）

ガエム（バブ）の出現のしるしについて質問した者たちに、アーマドは約束の時代の到来は避けられないと強調した。アーマドはバブが誕生した年に息子を失った。息子の名前はシェイキ・アリであった。かれはこの息子の死を嘆く弟子たちを慰めてこう語った。「おお、わが友人たちよ。悲しむなかれ。われわれが待ち望んでいるアリの出現のために、わたしは自分の息子を犠牲としてささげたのだ。その子を育て準備し

てきたのはこのためなのだ。」

バブ、実名はアリ・モハメッド、は一八一九年十月二十日にシラズの町で誕生した。かれは先祖がモハメッドにまでさかのぼる高貴な家柄の子孫であった。父モハメッド・リザと母は兩人ともに予言者（モハメッド）の子孫で、身分の高い家系に属していた。バブの誕生日は、忠実なる者の司令官と呼ばれるエマム・アリが語った「われは、わが主より二年年下である」という言葉を確認するものである。しかし、この言葉にひそむ神秘は、新しい啓示の真理を求め、認めた者ら以外にはかくされたままであった。

バハオラに関してつぎの句を述べたのはバブであった。それは、バブが最初に著わしたもっとも重要な書にある。「おお神が残された御方よ。あなたのためにのみ、わたしの命を犠牲にしました。あなたのためにのみ、苦しみを受けることに同意しました。そして、あなたの道に殉教することだけを切望してきました。わたしには、高遠なる者であり、保護者であり、日の老いたる者でありたもう神の証言だけで十分であります」

ケルマンシャーに滞在中、アーマドはモハメッド・アリ皇子からこの上ない献身的なもてなしを受けた。それに感動したかれは皇子に関してつぎのように述べた。「モハメッド・アリはファト・アリ国王の息子であるが、わが息子同然である。」

アーマドの家には多数の探究者と弟子が群がってきて、かれの講義に熱心に参加した。しかし、アーマドはカゼムに対して示した尊敬と愛情を、ほかの者には示したいと思わなかった。アーマドは、自分の死後、任務を引き継ぐ者として、かれの下に集まってきた無数の人びとの中からカゼムを選び、そのための準備をしていたようであった。(p.14)

ある日、弟子の一人が聖なる言葉に関してアーマドに質問した。それは、約束の御方が時満ちて語られる言葉で、それがあまりにもすさまじいため、地上の三十三人の統領と貴人がことごとくその重圧で押しつぶされたようになり、恐怖にかられて逃げてゆくという内容に関する質問であった。アーマドはこう答えた。「地上の統領が耐えられない言葉の重みを、あなたは支えられると思うのか。不可能な望みをかなえよう

としてはならない。このような質問をわたしにするのをやめて、神の許しをこん願いなさい」

その無礼な質問者は、それでもあきらめずに聖なる言葉の意味を明らかにしてもらいたいと言い張った。ついに、アーマドはつぎのように述べた。「神の日が到来したとき、アリが守護者であることを否認し、その正当性を非難するようにいわれたら、あなたはどうしますか。」「そのようなことは絶対にあり得ません。そのような言葉が約束の御方の口から出されるなど、わたしには考えられないことです。」

この男は大変な誤りを犯した。かれの立場はまことにあわれむべきである。かれの信仰は天秤で計られ、不足していることがわかった。というのは、出現される御方には至高の力がそなわっており、だれも問うことはできないということを、この男は認めることができなかつたからである。この御方こそ「望むままに命じ、思いのままに定める」権限をもたれているのである。この御方の權威を認めるのをためらったり、一瞬でもその權威に対して疑問をもったりする者は、その御方の恩恵を失い、墮落した者とみなされるのである。とはいえ、その町でアーマドに耳を傾け、聖典にかくされている神秘の説明を聞いた者らの中に、その意味を理解できた者がいた。その人は、アーマドの有能で卓越した弟子のカゼムであった。

モハメッド・アリ皇子の死で、アーマドは皇子の切なる願いから解放された。それはケルマンシャー滞在を延期するようにとの願いであった。そこで、かれはカルベラに住居を移した。外部の目には、アーマドは<殉教の王子>と呼ばれるエマム・ホセインの廟の回りをまわっているように見えたが、心は唯一の敬愛的である真のホセインに向けられていた。そのうち多数の著名な僧侶と法学者がかれのもとに群がってきた。そのうちの多くは、かれの名声に嫉妬心をもつようになった。そして何人かはいかれの權威を傷つけようとさえした。しかし、かれらがどれほど努力しても、アーマドの高い地位をゆるがすことはできなかつた。(pp.15-16)

やがて、この輝く光であるアーマドは、メッカとメジナの聖なる都に行き、目標達成のために全力をそそいだ。その地でこの世を去ったかれは、予言者（モハメッド）の埋葬地の近くくに葬られた。これまで見てきたように、アーマドはモハメッドの大業を理解するために忠実に努力をつづけたのであった。

カルベラに出発前、アーマドは自分が選んだ後継者のカゼムに、その使命の秘密を打ち明けた。そして、自分の内部に燃えた炎を同じように、心の開いた人たちの心に点すように頼んだ。カゼムは、ナジャフの町まで同行したいと強く望んだが、アーマドはこの要請には応ぜず、つぎの最後の言葉を残した。「もう無駄にする時間はない。過ぎて行く毎時間を、有意義に、また賢く使わなければならないのだ。気をひきしめて立ち上がり、人びとを盲目にしてきた無慮のヴェールを、神の助けにより引き裂くように昼夜努めなければならない。はっきり言うが、その時間は近づいているのだ。わたしはその時起こることを見ないですむように神にこん願してきた。というのも、その最後の時間に起こる地震は恐るべきものであるからだ。あなたもその日の激しい試練を免れるように神に祈りなさい。なぜなら、あなたもわたしもそのすさまじい力に耐えることはできないからだ。われわれより一層強い忍耐力と能力をもった者たちが、この大変な重みを耐えるように運命づけられている。その者らの心は世俗のものすべてから清められており、その力は神の威力によって強められているのだ。」

こう語ったあと、アーマドはかれに別れを告げ、今後の苦しい試練に勇敢に立ち向かうように励ました。その後、カゼムはカルベラで師が始めた仕事に身をささげた。その教えを説き、その大業を弁護し、弟子の心を悩ませた質問にはすべて答えた。ところが、かれの熱心さはかえって無知で嫉妬心をもつ者らの敵意を燃え上がらせることになった。「われわれは四十年間、アーマドの野心的な教えがひろがるのを黙って耐えてきた。また何の反対もしなかった。しかし、かれの後継者が同じ野心的な教えをひろめているのには我慢できなくなった。かれは肉体の復活の信仰を否定し、ミラージュ（モハメッドの天国への上昇）に関する文字通りの解釈を否認し、来るべき日のしるしを比喻と見なし、異端的な教えを説き、イスラム教正統派の最高の教義をくつがえすようなことを説いているからだ。」(pp.16-17)

かれらのやじりと抗議の声が高まれば高まるほど、カゼムの使命感は強まっていった。また、アーマドに書簡を送り、自分が受けている中傷をくわしく述べ、かれらの反対の特徴と程度を知らせた。さらに、この執拗で無知な人びとの狂信にいつまで甘んじていなければならないかを問うた。この質問にアーマドはこう答えた。「神の恩恵に確信をもちなさい。かれらの行動を嘆いてはならない。この大業の神秘は明らかにされなければならないし、またこの聖なるメッセージの秘密も公表されなければならないのだが、これ以上語ることはできない。その時間を定めることもできないのだ。」

神の大業はヒーン(一八五二年)の後知られるようになるであろう。『答えがわかれば、あなた自身が苦しむような質問はもうしないように願う。』(pp.17-18)

神の大業はあまりにも偉大で、カゼムほどの高貴な人物でさえにも、以上のような言葉が宛てられたのである。アーマドのこの答えにカゼムの心は慰められ、力づけられた。その後カゼムは決意を一層強め、嫉妬にかられた陰険な敵の猛襲に耐えつづけた。その後まもなくして、アーマドは一八二六年、八十一才でこの世を去り、聖地メジナのモハメッドの墓地付近にあるバキの墓地に埋葬された。(p.18)

第二章 セイエド・カゼムの使命

敬愛する師の逝去の知らせに、カゼムの心は深い悲しみにみたまされた。しかし、コーランのつぎの句に励まされて、アーマドから委任された任務を果たすために、固い決意をもって立ち上がった。「不信心者は口から吐く言葉で神の光を消そうとする。かれらがどれほど憎んでも、神はその光を完成させたもう……」

自分の保護者であった名高いアーマドの死後、カゼムはまわりの者たちが自分に悪意をもち、毒舌を浴びせかけているのを知った。かれらは、カゼムの人格を攻撃し、その教えをあざけり、その名をののしっていたのである。そしてついに、悪名高いシーア派の指導者エブラヒムに扇動されて団結し、カゼム滅ぼそうと決心した。

そこでカゼムは、ペルシャで最も手ごわく、すぐれた高僧で高名なモハメッド・バゲルの善意ある支援を獲得する計画をたてた。この高僧はイスファハンに住んでおり、その権威は町の境界線を越えてはるか遠くまでひろがっていた。かれの友情と同情を得れば、自分の道を妨害されずに進むことができ、弟子たちへの影響もかなり強まるであろう、とカゼムは考えたのである。そこで弟子たちにくり返し呼びかけた。

「皆のうちだれか世俗への愛着を断ち、イスファハンに旅し、この学識者の高僧に、つぎの伝言を渡してくれる者はいないであろうか。『以前あなたは、今は亡きアーマドに、この上ない尊敬と愛情を示されていました。それなのに今とつぜん、なぜ師の弟子たちから離れられたのですか。なぜわたしどもを敵の掌中に見捨てられているのですか。』だれか、神を信頼して立ち上がり、この高僧の心を悩ませている難問を解明し、かれが弟子たちから離れた原因とみられる疑いを消せる者はいないであろうか。そして、かれからアーマドの権威とその教えが真実で正当であるという宣誓書を得ることはできないであろうか。そのあとマシュハドを訪れ、その聖なる町の最高の宗教指導者アスカリから同様の宣誓書を得、使命を果たしてこの場所にもどってくる者はいないであろうか。」(pp.19-20)

カゼムは機会あるごとに、この訴えをくり返した。しかし、この呼びかけに応えようとする者はいなかった。ただ一人、ムヒットという人だけが、この使命を果たしたいと申し出た。カゼムはかれに警告した。「ライオンのしっぽに触れるには注意が必

要だ。この使命の重大さと困難さを見くびってはならない」つぎに、若い弟子のモラ・ホセインに顔を向けて、つぎのように語りかけた。「立ち上がり、この使命を成し遂げよ。あなたこそはこの任務に耐えられる。全能なる神が慈悲深くあなたを援助され、あなたの努力を成功の栄冠で飾られるであろう。」

モラ・ホセインはうれしそうに立ち上がり、師の衣のすそに接吻し、忠誠を誓った。そして、世俗への愛着をすべて断ち、崇高な決意をもって、この目標を果たそうと出発した。イスファハンに到着直後、その学識ある高僧に会いに行った。旅のほこりのついた質素な服装で、モラ・ホセインはこの高僧の弟子たちの前に現われた。そこに集まっていた大勢の弟子たちは皆立派な服装をしていたが、その中で、モラ・ホセインはいかにも地位が低く取るに足らない人物に見えた。

モラ・ホセインはだれにも気づかれずに、また恐れることもなく、その高名な指導者の座席の前に歩み寄った。そして、カゼムの言葉を思い出して勇気を奮い起こし、自信をもってモハメッド・バゲルにこう呼びかけた。「おお師よ。わたしの言葉に耳を傾けてください。わたしの訴えに応じられるならば、神の予言者の宗教（イスラム教）は安全に守られるであります。しかし、それを否定されるならば、大変な害を受けることになりましょう。」この迫力ある大胆な言葉に高僧はおどろいた。かれはただちに講話を中断し、聴衆を無視してこの見知らぬ訪問者がもたらした伝言にじっと聞き入った。弟子たちは師のいつもとはちがった行動にびっくりしたが、この突然の侵入者に非難の言葉を投げかけ、その主張を攻撃しはじめた。(p.20)

モラ・ホセインは、ひじょうに丁重で威厳のある言葉で、弟子たちの失礼な態度と思慮のなさにそれとなく言及し、そのうぬぼれと尊大な態度におどろきを表わした。高僧はモラ・ホセインが示した態度と主張のすばらしさに深い満足感をおぼえる一方、弟子たちの無礼な態度を遺憾に思い、かれに謝った。高僧は、弟子たちの感謝のなさをおぎなうかのように、モラ・ホセインにできるかぎりの親切をつくした。そして、支援を約束し、伝言を頼んだ。そこで、モラ・ホセインは自分に委任されている使命の内容と目標をかれに知らせた。これに対し、高僧はこう答えた。

「最初、われわれはアーマドとカゼムは兩人共に、知識を進展させ、イスラム教の聖なる利益を守るためにのみ行動されていると信じていました。それで、この兩人を心

から支持し、その教えを称えたいという気持ちをもったのです。ところが後年、二人の著書の中に、矛盾する叙述や、あいまいで不思議な比喩が多数あるのに気づき、しばらく沈黙を守った方がよいと感じ、非難も称賛もしないでいたのです。」

モラ・ホセインはこう答えた。「あなたの沈黙を遺憾に思わざるを得ません。そのため大業を進展させるすばらしい機会が失われていると堅く信じるからです。あなたにお願いしたいことは、二人の書物の中で、とくに不可解と思われる句、またはイスラム教の教えと一致しないと思われる句を指摘してくださることです。そうなれば、神の援助を受けて、それらの句の真意を説明したいと思います。」

この不意に現われた使者の落ち着いた態度、威厳と確信はモハメッド・バゲルに深い印象を与えた。そして、「今それを無理にわたしに要求しないで下さい、後日あなたと二人きりのとき、わたしの疑問と不安に思っている点をお知らせしましょう」と述べた。しかし、モラ・ホセインはこれを延ばすことは、この貴重な大業に害になると感じて、かれとの対話をすぐ行ないたいと主張した。かれには高僧が抱えている重大な質問を解決できるという確信があった。高僧はこの若者の顔から、熱意と誠意とゆるがぬ確信を感じとり、涙がこみあげてくるほど深く感動した。かれはすぐアーマドとカゼムの著書をもってこさせ、納得のいかない句、意外と思った句についてモラ・ホセインに質問をはじめた。モラ・ホセインは特有の力強さと見事な知識で、しかも慎み深く全部の質問に答えた。そして、集まってきていた弟子たちにアーマドとカゼムの教えを解説し、その真理を立証し、その大業を弁護しつづけた。やがて祈りの時間がきて、信者への祈りの呼びかけの声でその解説は中断された。(p.21)

翌日、モラ・ホセインは前日と同じように、集まってきた大勢の弟子たちの面前に出た。そして高僧の方を向きながら、全能の神がアーマドとその後継者に委任された崇高な使命を雄弁に弁護しつづけた。聴衆は静まりかえっていた。かれらは、その説得力ある弁論と語調に驚異の念でいっぱいになっていたのである。高僧は皆の面で、翌日宣誓書を出すという約束をした。その内容は、アーマドとカゼム両人の卓越した地位を証言し、この二人の道からそれる者はすべて、予言者（モハメッド）の宗教に背を向ける者であると断言するものであった。さらに、この両人は鋭い洞察力をそなえており、モハメッドの宗教にかくされている神秘を、正しく理解できると証言するものでもあった。

高僧は自ら筆をとり、宣誓書をしたためて約束を果たした。その宣誓書は詳細に書かれており、その中でモラ・ホセインの人格と学識が称えられていた。高僧はカゼムを賞賛し、自分のこれまでの態度をあやまり、カゼムに対する遺憾な行動を今後改めたいという決意を表明した。そして、自らその宣誓書を弟子たちに読んで聞かせたあと、封をせずにモラ・ホセインに渡した。その理由は、モラ・ホセインがその内容を、思いのまま人びとに知らせることができるためであった。そうすれば、自分のカゼムに対する献身の深さをだれでも認めてくれると思ったのである。(p.22)

モラ・ホセインが別れを告げて立ち去るとすぐ、高僧は信頼できる召使いを呼び、かれの後をつけて滞在場所を見とどけてくるように命じた。召使いが後をつけると、モラ・ホセインは学寮として用いられている質素な建物に入り、自室で感謝の祈りをささげたあと、敷布団に身を横たえた。が、上にかけるものはマントだけであった。それを確認したあと召使いはもどり、主人に見てきたことを全部報告した。そこで高僧は、召使いに一万円ほどをあたえて、それをモラ・ホセインに渡し、ふさわしいもてなしができなかったことを自分に代わって真心から謝罪するように命じた。

この高僧からの申し出に、モラ・ホセインは答えた。「あなたの主人にこう伝えて下さい。あなたの主人がわたしに下さった真の贈り物は、わたしを公平に受け入れて下さった精神そのものであります。また、高い地位にもかかわらず、この低い地位にある者が持参した伝言に応じてくださった心の広さであります。わたしは単なる使者で、報酬も褒美も求めてはいません。このお金はあなたの主人にお返しく下さい。『われは、神のためにのみなんじらの魂に栄養をあたえるのであり、なんじらから報酬も感謝も求めてはいない。』(コーラン)。あなたの主人が、世俗の指導者という地位に妨げられずに、真理を認め、それを証言されるように祈っております。」この学識ある高僧モハメッド・バゲルは、バブの信教が誕生した一八四四年の到来前にこの世を去った。かれは息を引き取る瞬間まで、カゼムをゆるがぬ精神で支持し、熱烈に賞賛しつづけた。一方、最初の使命を果たしたモラ・ホセインは、モハメッド・バゲルの宣誓書をカルベラの師に送った。それからマシュハドに歩を向け、委任された伝言を、最善をつくしてもう一人の高僧アスカリに渡す決心をした。(pp.23)

カゼムはモラ・ホセインの手紙を受けとって大いによろこび、講義を中断して、その手紙と同封されていた宣誓書を弟子たちに読んで聞かせた。カゼムはモラ・ホセインに返事を書き、任務達成という模範的な行動に対して感謝の気持ちを述べたが、そ

の書簡も弟子たちに読んで聞かせた。さらに、同じ書簡の中でモラ・ホセインのすばらしい奉仕を認めただけでなく、その高い業績と能力と人格を、熱烈にほめ称えたため、弟子たちのうち何人かは、モラ・ホセインが約束の御方ではないかと疑ったほどであった。カゼムは、たえずその約束の御方に言及し、その御方はすでに皆の中に生きているが、だれも気づいていないことをたびたび述べていたからである。

カゼムは、モラ・ホセインに宛てた書簡の中で、神を畏れることがどれほど重要であるかを述べた。それは敵の猛襲に耐えるための最高手段であり、この信教を真に信じる者すべての特徴でなければならないことを説明した。この書簡がこの上ない温かい愛情のこもった言葉で書かれていたため、それを読んだ者は、師カゼムが、自分の愛する弟子への別れの言葉を述べているのではないかと感じた。この世ではもうふたたび会う望みはないことを告げているのではないかと疑ったのである。

そのころ、カゼムは約束の御方の出現時が近づいていることを一層強く意識するようになっていた。カゼムは、探求者が約束の御方の偉大さを理解できないのは、あまりにも厚いヴェールが、かれらにかかっているからだ実感した。そこで、神の宝物である御方への道に立ちふさがる障害物を徐々に取り除くために全力を注いだ。それには英知と注意深さを要した。(p.24)

かれが弟子たちにくり返し強調したことは、その御方の出現場所は、ジャボルカーでもジャボルソー（シーア派が信じている出現の場所）でもないということであった。さらにかれは、皆の中にその御方はすでに臨席されているかも知れないとほのめかしたのである。そして、よくつぎのように語った。「皆は自分の目でその御方を見ながら、その御方が約束の御方だと認めることができないでいる。」神の顕示者の特徴についての質問に、かれはいつもこう答えた。

「その御方は高貴な血筋で、神の予言者モハメッドの子孫である。年は若く、天賦の知識をそなえておられ、その知識はアーマドから教えられたものではなく、神から来たものである。その御方の知識の膨大さにくらべると、わたしの知識は水の一滴にしかすぎない。その御方の美德と威力のすばらしさを前にして、わたしの業績はちりの一片にしかすぎない。それどころか、その差は計り知れないのだ。その御方は中背で、喫煙はされず、ひじょうに信心深く敬虔であられる。」

このような説明を聞いたにもかかわらず、弟子の中にはカゼムを約束の御方だと信じた者たちがいた。その一人メヒデイ・コイは、カゼムがその御方と思うと一般に公表さえしたのである。カゼムはこの言動をきわめて不快に思った。かれが反省し許しを乞わなかったならば弟子たちの一団から追い出されていたであろう。ゾヌジもまたカゼムが約束の御方ではないかと思ったことをわたし（著者）に知らせてくれた。ゾヌジはこの思いが本当であるか、誤りであるかが明らかにされるように神に祈った。この推測が正しければ確証がきますように、もしまちがっていれば、そのような空想から解放されますようにと。ある日、ゾヌジはこうわたし(著者)に語った。

「わたしの心の動揺ははげしく、何日も食べることも眠ることもできませんでした。当時わたしは真心から敬愛している師カゼムに仕えるために生きていたのです。ある日夜明け時に、カゼムの従者ノウ・ルーズからとつぜん起こされました。かれはひじょうに興奮していて、わたしにすぐ起きて自分のあとについてくるように言いました。カゼムの家に着くと、かれはマントをすでに身につけて外出しようとしており、わたしにも同伴してくるように命じたのです。『大変立派で重要な方が到着された。あなたとわたしは共にその方を訪問しなければならない。』(p.25)

二人でカルベラの町を歩き出したとき、すでに朝日がさしはじめていました。やがて、ある家に着くと、われわれの到着を待っていたかのように、青年が入り口に立っていました。青年はみどりのターバンをまき、謙虚で温和な表情をしていましたが、それを的確に表現することはできません。青年は静かにわれわれに近づき、腕を差しのべ愛情をこめてカゼムを抱擁したのです。そのやさしさと慈愛に満ちた様子と、カゼムの深い尊敬をこめた態度は、不思議なほど対照的でした。カゼムは黙って頭をたれたまま、青年の愛情をこめたあいさつを受けました。それが済むとすぐ、青年はわれわれを二階の部屋に案内しました。その部屋には花がかざられており、甘い香水のかおりがしていました。青年はわれわれに座るようにすすめました。二人とも強烈なよろこびで圧倒されそうになっていましたので、どの席に座ればよいのかわかりませんでした。やっと座ったあと、青年は部屋の真ん中におかれている銀盃に飲み物をなみなみと注ぎ、カゼムに渡しながらかう言いました。『主はかれらに清らかな飲み物一盃をあたえたもう。』(コーラン) (pp.26-27)

カゼムは、両手にもった盃を飲み干し、うやうやしい気持ちと深いよろこびを抑え

ることができない様子でした。わたしにも盃がしずかに差し出されました。この会見は忘れがたいものでしたが、話された言葉は前述のコーランからの句だけだったので。このあとすぐ青年は席から立ち上がり、われわれを玄関まで送り、別れを告げました。わたしはそのとき、おどろきのあまり一言も出すこともできませんでした。青年の暖かい歓迎、威厳のある挙動、魅力ある顔、香り高い飲み物の美味しさをどう表現していいかもわかりませんでした。師カゼムが何のためらいもなく、その聖なる飲み物を銀盃から飲まれたとき、わたしは仰天したのです。銀盃を用いることはイスラム教の教えで禁じられていたからです。カゼムは青年に対して、どうしてあれほどの深い尊敬を示したのか、わたしにはその理由がわかりませんでした。セイエド・ショーハダの廟さえも、それほどの尊敬の念を起こさせることはなかったからです。

三日後、わたしはその同じ青年がカゼムの弟子たちの集まりに来て席につくのを見ました。かれは入り口の近くに座り、前と同じようにつつましいが威厳のある態度で、カゼムの講義に耳を傾けまし。カゼムは青年に気づくとすぐに講義を中断し、黙ってしまったのです。そこで、弟子の一人が、講義を終わりまでつづけてくれるように頼みました。カゼムはバブ（青年）の方を向いて答えました。『これ以上何が言えようか。真理はあの御方のひざに注いでいる太陽の光線よりも明らかなのだ。』わたしはすぐ、カゼムが言及した光線が、先日訪問した青年のひざに注がれているのを見ました。弟子はふたたび質問しました。『なぜその方の名前も身元も明らかにされないのですか。』
(p.27)

この質問に、カゼムはゆびでのどを指し、もしその方の名前をもらせば、二人共即刻殺されることをほのめかしました。これで、わたしのとまどいは一層深まったのです。以前わたしは師がこう語るのを聞いていました。すなわち、今の世代はあまりにも墮落しているため、もしかれが、約束の御方を指して、『この方こそ最愛なる御方、心の望みの的なる御方である』と断言したとしても、かれらはその御方を認めることも、受け入れることもできないであろう、と。(p.28)

わたしはカゼムがその青年のひざに注がれた光線を指で示したのを見ましたが、そこにいた弟子たちでその意味を把握できた者はいなかったと思います。わたしが確信していたのは、カゼムは絶対に約束の御方ではない、ということだけでした。そして、このだれにも解明できない神秘は、あの不思議で魅力ある青年のうちにかくされたままであったことがあとでわかりました。

数回にわたって、その神秘を解明してもらおうとカゼムに近づきましたが、その度にかれの人格からにじみ出てくる強力な靈感に畏れを感じて、何も聞くことはできませんでした。カゼムは何度もわたしにつきのように言いました。『おおシェイキ・ハサンよ、あなたの名前がハサン（賞賛に値するという意味）であることによるこびなさい。あなたはシェイキ・アーマドの時代に生きるという恩恵を得た。わたしとも親しく交際できた。そして今後くだれの目も見たこともなく、だれの耳も聞いたことがなく、だれの心も想像したことがなかった>ものを見ることができ、計り知れないよろこびを得るであろう。』（pp.29-30）

わたしは、あのモハメッドの子孫である青年の面前に出て、その神秘を突き止めたという衝動に駆られたことがよくありました。この青年がエمام・ホセインの廟の入り口で祈っているのを数回にわたって目にすることがありますが、そのとき、かれは祈りに没頭しており、まわりの人にはまったく気づいていないようでした。かれの目からは涙があふれ、唇からはこよなく美しく、威力あふれる賛美の言葉がもれていました。それは、聖典にある崇高な言葉をはるかにしのぐものでした。青年は、『おお神よ、わが神よ、わが心の望みなる御方よ』という句を何度も熱烈に唱えたので、近くでその声を聞いた巡礼たちは、自分たちの祈りを思わず中断したほどでした。そして、その青年の表情にあふれる敬虔の念を見ておどろくとともに深く感動し、かれらもまた涙を流しはじめたのです。こうしてかれらは、真の礼賛とはどのようなものを学んだのでした。

青年は祈りを終わると、廟の中に入ったり、まわりにいた人たちに声をかけたりせず、沈黙したまま家にもどりました。わたしは、かれに話しかけたいという衝動にかられ、近寄ろうとしましたが、そのたびに、説明できない不思議な力に阻止されたのです。あとで調べた結果、青年はシラズ市出身の商人で、どの宗派にも属していないことがわかりました。さらに、かれと親族はアーマドとカゼムの称賛者でもあったことがわかりました。

その後まもなくして、青年がナジャフに向かったことを知りました。ナジャフはシラズに行く途中にある町です。わたしの心はこの青年にすっかり魅惑され、その姿はわたしの脳裏にやきついていました。わたしの魂はかれの魂に結びつけられてしまったのです。そしてある日、シラズで一人の青年が、自分こそはバブであると宣言した

ことを聞いたとき、すぐにその人物はカルベラで見たわたしの心の望みである青年にちがいないと思ったのです。(p.30)

後日、わたしがカルベラからシラズに旅したとき、その青年（バブ）はすでにメッカとメジナへの巡礼に発ったあとでした。しかし、かれがもどったあと会うことができ、それ以来、いろいろな障害がわたしの道に立ちはだかったにもかかわらず、かれと親しく交わりつづけるように努めました。その後、かれがアゼルバエジャン地方のマーカーの砦に監禁されている間、かれが秘書に書き取らせた文章を写すことができました。その砦での九ヵ月の間、かれは毎夜夕べの祈りをささげたあと、コーランの一節について解説を書きました。そして、各月の末には、聖なるコーラン全体の解説文が完成しました。すなわち、マーカーに監禁中、九つのコーランに関する解説文が著されたのです。これらの解説文の保存は、タブリズでカーリルにまかされました。そのときカーリルは出版の時期が来るまで秘しておくように指示を受けたのですが、その後それらがどうなったのか未だもって不明です。

ある日バブは、わたしにこう聞かれました。『これらの解説文のひとつに関して質問したいが、この解説文と、以前に著したヨセフの章についての解説文のどちらがすぐれていると思うか。』『わたしには、以前のもののほうがより力強く魅力があるように思われます』と答えたところ、かれはその意見を聞いて微笑まれ、こう言われました。『あなたはまだ後で著した解説文の語調と主旨をよく知らないのだ。探求者はこの中に秘められている真理により、探究の目標により早く、より効果的に達することができる。』

その後も、シェイキ・タバルシでの戦い（約三百人が殉教した事件）のときまで、バブと親しく交わりつづけました。この事件を知ったバブは、周りにいた弟子たち全員に、その場所に直行して、勇敢ですぐれた弟子のゴッドスを最大限援助するように指示されました。ある日、バブはわたしにこう言われました。『チェリグの砦に監禁されていなければ、愛するゴッドスにわれ自ら援助の手を差しのぼしたことであろう…。あなたはこの戦いに参加するようには定められていない。カルベラに行き、その聖なる町に住まうようになっている。あなたは自分の目で約束のホセインの美しい御顔を見るように定められているのだ。その輝かしい御顔を見つめるとき、あなたは同時にわたしを思い起こすであろう。その御方に、わたしの敬愛の念を伝えてくれるように願う。』そして、語勢を強めてつぎの言葉を付け加えられました。『はっきり申す

が、あなたに偉大な使命を託した。気弱くなったり、付与された榮譽を忘れたりしないように気をつけよ。』(p.31)

その後すぐ、わたしはカルベラに行き、命じられた通りその聖なる町に住みはじめました。しかし、この巡礼の中心である町に一人で長く滞在すると、住民に疑われるかもしれないので、結婚し、筆写者として生計を立てはじめました。わたしはその町で、アーマドを信じながら、バブを認めることができなかつた者らから、ひどく苦しめられました。しかし、敬愛するバブの勧告を心に留め、受けた侮辱に耐えました。その町に二年間住みましたが、その間、あの聖なるバブは殉教され、この地上の牢獄から解放されたのを知りました。バブは生涯の終わりに襲ってきた激烈な迫害からついに自由になられたのです。

一八五一年十月五日、バブの殉教から十五ヵ月後のある日、エマム・ホセインの廟にある中庭門のそばを通り過ぎようとしていたとき、はじめてバハオラの姿を目にしました。それをどのように述べたらよいのでしょうか。その顔の美しさ、だれも叙述できないほどの優雅な目鼻立ち、人の心を見通すような鋭い目、慈愛にあふれた表情、威厳にみちた態度、やさしい微笑み、ふさふさと垂れた漆黒の髪は、わたしの魂に忘れがたい印象をあたえました。

わたしはそのときもう老齢で、腰もまがっていました。バハオラは慈愛深くわたしに近寄ってこられ、わたしの手を取り、惹きつけるような力強い語調でこう言われました。『今日というこの日、あなたをバビ（バブに従う者）としてカルベラ中に知られるようにしたのだ。』ずっとわたしの手を握りながら、バハオラはわたしとの会話をつつけられました。そしてわたしと一緒に市場通りに沿って歩かれ、最後にこう言われました。『神に賛美あれ。あなたはカルベラに留まり、自分の目で約束のホセインの顔を見ることができた。』そのときすぐ、わたしはバブの約束を思い出しました。バブの約束は遠い未来のことを指していると思って、だれにもそのことを話していませんでしたが、この言葉でわたしの魂は内奥までゆり動かされたのです。その瞬間、わたしは約束のホセインの到来を、全力をつくして無思慮の人びとに宣言しなければと強く感じました。(p.32)

しかし、バハオラはその気持ちを抑え、感情をかくすように命じられたのです。そ

して、わたしの耳にささやくように言われました。『まだその時期ではない。約束の時は近づいているが、まだその時間は打たれていないのだ。確信をもって忍耐せよ。』その瞬間から、すべての悲しみはわたしから消え去り、魂はよろこびで満ちあふれました。そのころわたしは大変貧しく、つねに空腹でしたが、心はひじょうに豊かで、地上のすべての宝物も、わたしが所有しているものに比べれば無に等しく思えたのです。『これこそ神の恩恵である。神は自らあたえたいと望まれる者にあたえたもう。まことに、神は限りなく恵み深き御方でありたもう。』

少々わき道にそれたが、ここで本題にもどろう。これまで、当時の人びとと約束された神の顕示者の間にかかっていたヴェールを引き裂こうとするカゼムの熱意を語ってきた。カゼムはある書の序論で、バハオラの祝福された名前をほのめかしているが、バブの名前は最後の小冊子の中で、「ゼクロラエ・アザム」という言葉に言及して明確にした。それにはこう書かれている。「この高貴なゼッカーなる御方、威力ある神の御声に、わたしはこう申し上げるのです。『わたしは、人びとがあなたに害をあたえないかと心配しております。わたし自身もまた、あなたを傷つけないかと心配しております。わたしはあなたを畏れ、あなたの權威にふるえ、あなたが生きられる時代を恐れております。復活の日まで、あなたをわが目のひとみのように大切にしたいとしても、あなたへの献身を十分に示すことはできないであります。』」(p.33)

カゼムは、邪悪な人びとからどれほど苛酷な苦しみを受け、その下劣な世代の人びとからどれほどの害を加えられたことであろうか。カゼムは何年も黙って苦しみ、侮辱、誹謗、非難に英雄的な忍耐力で耐えた。しかしながら、かれは生涯の終わりに、かれに敵対し陰謀をめぐらした者らが、神の復讐の手で滅ぼされるのを目撃できた。カゼムは、敵たちが「恐ろしい破壊力で滅ぼされた」のを見るように定められていたのである。

そのころ、カゼムの悪名高き敵であるエブラヒムに従う者らは、団結して扇動を起こし、害毒を流して、カゼムの命を危険に陥らせようとした。かれらはあらゆる手段を用いて、カゼムの称賛者や友人の心を毒し、かれの權威を傷つけ、その名声を落とそうとした。しかも、この不信実な者らの扇動に対して、だれ一人抗議の声をあげる者はいなかった。敵は皆、各自自分こそが真の学識者であり、神の宗教の神秘を解明できる者であると公言していたにもかかわらず、このような扇動を起こしたのである。しかも、だれ一人として、かれらに警告をあたえて、目ざまさせようとする者はいな

かった。(p.34)

敵は勢力を集めて大騒動を起こし、トルコ政府を代表する高官の面目を失わせて、カルベラから追い出すことに成功した。そして、卑しくも、その高官が集めた税金をすべて横領したのである。この行動を脅威と見たトルコ政府は、騒動の場に一師団を送り、扇動の火を消すように命じた。指揮官は、一師団で町を包囲させ、カゼムに書簡を送り、民衆の興奮が静まるよう、つぎの勧告を住民に出すように要請したのである。「節度を守り、指揮官の命令を守るように勧告する。皆がこの勧告を聞き入れれば、指揮官は皆の安全に守り、その扇動行為を許し、皆の福利を促進すると約束する。しかし、これに従わなければ、大災難が必ずふりかかり、皆の命は危険にさらされることになる。」

この正式の書簡を受け取ったカゼムは、扇動の主導者たちを呼びよせ、賢明にしかも愛情をこめて、扇動をやめ、武器を放棄するように説きすすめた。この説得力のある雄弁、誠意と私心のない勧告で、かれらの心はやわらぎ、反抗心が鎮められた。翌日、かれらは砦の門を開け、カゼムといっしょにその指揮官のところに出頭した。そこでカゼムが、かれらに代わって調停者となり、平安と福利の確保に意見が一致した。

ところが、反乱の主導である僧侶たちは、カゼムの前から去るとすぐ、この計画をくじくために、皆一致して立ち上がった。カゼムに対して嫉妬心をいだいていたかれらは、カゼムが調停者になれば、かれらの名声は高まり、その権威が強まることを知りつくしていた。そこで、かれらはその町の愚か者や激しやすい者を集めて、夜半に敵を攻撃するように説得したのである。そのとき僧侶たちはかれらに、僧侶の一人が夢をみたので、かならず勝つと確信させたのである。その夢というのは、アッバス（エマム・ホセインの弟）が現われ、信者たちを鼓舞して、包囲軍に対して聖なる戦いをいどむように僧侶に命じ、最終的な成功を約束したというものである。(pp.34-35)

この空しい約束にまどわされたかれらは、賢い助言者の忠告をはねのけ、その代わりに、愚かな指導者の計画を実行するために立ち上がった。カゼムはこの反乱が悪質者によって起こされたことに気づき、その状況をくわしく、ありのままに述べた報告書をトルコ軍の指揮官に送った。指揮官はカゼムに、この問題の平和的解決をふたたび要請してきた。さらに指揮官は、定められた時間に砦の門を奪取するが、そこで敗

北した敵が避難できる場所はカゼムの家しかないと言った。カゼムはこの宣言を町中に知らせたが、住民はあざけり、軽蔑するだけであった。この住民の態度を知らされたカゼムはこう述べた。「まことに、かれらが脅されていることは、朝方に起こるであろう。夜明けは近づいていないであろうか」(コーラン)

明け方、決められた時間に軍は砦の累壁を砲撃して城内に侵入し、かなりの人数の住民を殺戮した。仰天した多くは、エマム・ホセインの廟の中庭に逃げ込んだ。ほかの者らは、アッバスの聖所に避難した。カゼムを敬愛していた者らは、かれの家に逃げてきた。あまりにも大勢の人びとが、かれの家に避難してきたので、全部収容するために、隣接する家屋を何軒も用いなくてはならなかった。このように、多数の人びとがカゼムの家に殺到し、興奮状態にあったので、騒ぎがおさまったとき、約二十二人が踏み殺されていたことがわかった。(p.36)

この聖なる町の住民と訪問者は、どれほど仰天したことであろうか。勝利者はどれほどきびしく敵を扱ったことであろうか。そして大胆にも、これまでイスラム教徒の巡礼が礼拝してきたカルベラの聖所の神聖な権利と特典を無視し、さらにエマム・ホセインの廟とアッバスの聖なる墓を、軍の攻撃から逃げてきた群集の聖域として認めることを拒否したのである。こうして、この二つの聖廟の境内に、犠牲者たちの血が流された。しかし、ただ一カ所だけが、無実で、忠実な人びとの聖域といわれる所があった。それはカゼムの家であった。その家とそれに付属する建物は、ひじょうに神聖であるとみなされた。そこはイスラム教シーア派のもっとも聖なる廟以上に神聖であると考えられたのである。この不思議な神の復讐の出現は、聖人カゼムの地位を軽んじる者らへのいましめであった。この忘れがたい出来事は一八四三年一月十日に起こった。

どの時代にも、神の教えをもたらした者とその準備に現われた者は、強大な敵の反対に会った。敵は、それらの聖なる人物の権威に挑戦し、その教えを悪用した。また、詐欺、虚偽、中傷や抑圧で、無知な人びとをだまし、弱い者たちをあやまり導いてきた。神の教えがかくされている間は、敵は人民の思考と意識を支配しつづけたという欲望から、不安定ながらもある期間権力を保つことができた。しかしながら、教えが明らかにされ、神の日の曙光がさしはじめると、敵の陰險な計画は効果を失っていった。その太陽の強烈な光を前にして、その陰謀と悪行は無と帰し、やがて忘れ去られていったのである。(p.37)

同じように、カゼムの周りにも虚栄心の強い下劣な人びとが集まってきた。かれらはカゼムを敬愛し、献身しているように装った。そして、自分たちは信心深く、敬虔な人間で、自分たちだけが、アーマドとその後継者の言葉に秘められている神秘を解明できると公言した。かれらはカゼムの弟子たちの中で栄誉の座を占めていた人たちであった。カゼムはかれらに特別の尊敬と礼儀を示しながら講演したが、微妙な言葉でそれとなくかれらの盲目さと虚栄心を幾度となく指摘した。かれらが神の言葉の神秘を理解する能力にまったく欠けていることを暗示したのである。

かれが暗示するために用いた言葉の中にはつぎのようなものがある。「わたしから生まれた者以外には、だれもわたしの言葉を理解できない。」この格言もよく引用した。「わたしは幻に心をうばわれ、おどろきで言葉も出なくなっているが、世の人びとは聴力を失っているようだ。わたしは神秘を解明することはできない。人びとがその重さに耐えることができないのがわかるからだ。」ほかの折に、こう述べた。「最愛なる御方と交信できたと宣言する者は多いが、最愛なる御方はその宣言を拒否される。人が本当に最愛なる御方を敬愛しているかどうかは、その人の流す涙で明らかとなる。」さらに、しばしばつぎのようにも語った。「わたしの後に現われる御方は、高貴な血筋で、高名なファテメ（モハメッドの娘）の子孫である。その御方は中背で肉体的な欠陥はない。」(p.38)

わたし（著者）は、アブトラブからつぎのように聞いた。「カゼムは約束の御方は肉体的な欠陥はないとはっきり言われました。しかし、われわれのうち何人かは、カゼムがこの肉体的な欠陥を言及されたのは、同胞弟子の中のとくに三人のことを暗示するためであるとみなしました。われわれはこの三人に、それぞれ肉体的な欠陥を示すあだ名をつけさせましたのです。一人は、エブラヒム・カーンの息子のカリム・カーンで、片目で、うすい髭をはやしていました。もう一人はハサン・ゴーハルで、ひじょうに肥満しており、三人目はムヒットで、異常にやせて背の高い男でした。

この三人の弟子こそ、うぬぼれが強く不誠実な人間であると、カゼムがつねに言及していた者らであることを確信したのです。かれらはやがて正体をあらわして、いかに恩知らずで愚かであるかを暴露するであろう、とカゼムはほのめかしていたのです。カリム・カーンは長年、カゼムの足元に座り、いわゆる学問なるものを学んだ後、師のもとを離れ、ケルマンの町に落ち着きました。そこで、イスラム教の発展を促進し、

エマムにまつわる伝承の普及に専心しました。

ある日、わたしがカゼムの書齋にいたとき、カリム・カーンの従者がきて、主人から頼まれたとあって、本を一冊カゼムに差し出し、『この本に目を通し、その内容を承認する旨を自筆でしたためてください』と要請しました。カゼムはその本の一部を読んだあと、従者にもどしてこう述べました。『あなたの主人にこう言いなさい。だれよりもあなた自身が、自分の書いた本の価値を評価することができる。』

従者が去ったあと、カゼムは悲しげにこう述べました。『カリム・カーンは呪われるであろう。長年わたしと交わり、共に学んできたのに、今、無神論的な異端教義の本を書いて、それをひろめようとしている。その上、わたしにそれを承認させようとしているのだ。かれは利己的な偽善者の何人かと共同して、ケルマンで自分の地位を確立し、わたしの死後、指導権をにぎろうとしている。かれはとんでもない誤った判断をした。導きの夜明けから吹いてくる神の啓示の微風は、かならずかれの光を消し、その影響力を減ぼしてしまうであろう。かれの努力の木は、やがて苦い幻滅の果実と苦しい呵責の果実以外は何も生み出さないであろう。ぜひこのことをあなたに申しておきたい。あなたはこれが実現されるのを自分の目で見ることができよう。約束の啓示に反対するかれが、今後およぼすであろう悪影響から、あなたが守られるように祈るばかりだ。』(pp.39-40)

カゼムはこの予告を復活の日までかくしておくように命じました。そのとき、全能の神の御手が、人びとの胸の中にかくされている秘密を明るみに出されるのです。そして、こう勧告しました。『その日がきたら、神の信教の勝利をめざして不動の目的と決意をもって立ち上がり、これまで見聞したことをすべて、いたるところにひろめよ。』

この人物アブトラブは、バブの宣言ではじまった新しい時代の初期においては、自分が信者であることは一般に知られない方が賢明であると考えた。しかし、胸中では到来された神の顕示者への愛をいつくしみ、岩のように不動で確固たる信念をもちつづけた。しかしついに、かれの魂の中にくすぶりつづけていた火が燃え上がり、行動を起こしはじめた。そのため、バハオラが監禁されていた同じテヘランの地下牢に投獄されることになった。そして、最後の瞬間まで不動の信念をもちつづけ、その愛に

あふれた犠牲の生涯を、殉教という栄光の冠で飾ったのである。

カゼムは自分の生涯が終わりに近づくとつれて、弟子に会う度につきのように勧告した。この勧告は個人的な会話と公開講演会の場であたえられたものである。「わが愛する仲間よ。わたしが去ったあと、この世のはかない虚栄にあざむかれないように十分気をつけよ。ごう慢になって、神を忘れないようにせよ。皆とわたしの心の望みの的なる御方を求める道においては、安楽のすべて、この世の所有物と親族のすべてを断たなければならないのだ。広くあまねく分散し、世俗のものすべてを棄て、自分の努力を支え導いてくれるように、主に謙虚な気持ちで心から祈らなければならない。栄光のヴェールの背後にかくされている御方を探し出す決意を、けっしてゆるめてはならない。その御方の慈悲深い援助を受けて、その御方を認めることができるまで忍耐せよ。その御方こそ、あなたの真の指導者であり、師なのだ。その御方が、あなたを約束のガエム（バブを指す）の勇敢な弟子および支持者として選ばれるまで不動の信念をもちつづけよ。その御方の道において、殉教の盃を飲み干す者は幸いである。皆のうち、聖なる啓示の太陽（バハオラ）の先駆者である聖なる教導の星（バブ）が沈むのを目撃できる者らは、忍耐と不動の確信をもちつづけなければならない。神はかれらが目撃できるように守って下さるのだ。かれらはまた、たじろいだり不安に襲われたりしてはならない。というのも、やがて、地上に死をもたらす最初のラッパが響き、そのあと、もう一つのラッパが鳴り響いて、万物が生き返るからである。そのとき、つぎの聖なる句の意味が明らかにされるであろう。『ラッパが鳴りわたり、神が生きることを許された者以外は、天にあるものも地にあるものもすべて息絶えてしまう。そのあと、もう一度ラッパが吹き鳴らされると、見よ、みな起き上がって、あたりを見回す。そして、大地は主の光で照り輝き、聖なる書がもち出される。そこへ、予言者と証人が現われ、公正な裁きがはじまるが、だれも不当な扱いを受けることはない。』

このことをはっきり告げておきたいが、ガエム（バブ）のあとに、ガイユーム（バハオラ）が現われる。前者の星が沈んだあと、ホセインの美の太陽が昇り、全世界を照らすであろう。そうしてはじめて、アーマドが予告した『神秘』と『秘密』の栄光が完全に明らかにされよう。アーマドはこう述べていた。『この大業の神秘は解明されなければならない。この教えの秘密は明らかにされなければならない』と。(pp.40-41)

このもっとも聖なる時代に生きる者は、過去の世代が頂点に達した栄光ある時代に

生きる者である。そして、この時代のひとつの善行は、無数の世紀間の敬虔な礼拝に匹敵するのだ。かの尊敬すべきアーマドは、わたしが前に言及したコーランの句を何回くり返されたことであろうか。矢継ぎ早に現われ、世界を栄光で満たすように定められている二つの啓示の出現を予言した句の重要性を、どれほど強調されたことであろうか。かれはつぎの言葉を叫ぶようにくり返えされた。『それらの啓示の意味を理解し、その光輝を見る者は幸いである。』かれはまた、何度もこのようにわたしに言われた。『あなたとわたしは、この栄光に輝く啓示を見るまで生きられないのだ。だが、あなたの忠実なる弟子の多くは、それを目撃することができよう。残念ながらわれわれには見ることはできないのだが。』

わが愛する仲間よ。この大業はひじょうに偉大であり、その高遠な地位に皆を召すことができた。皆の使命は言語に絶するほど重大なものである。わたしはそのため皆を訓練し、準備してきたのだ。気を引きしめて、神の約束に目をすえよ。まちがいなく襲いかかってくる試練と苦難の嵐を乗り越え、無傷で脱し、勝利を得て、高遠な運命に導かれるように、神の慈悲深い援助を祈っている。」

毎年、ゼル・カゼの月になると、カゼムは、エマムの廟を訪れるためにカルベラからカゼマインに出向いた。そして、アラフェの日にはエマム・ホセインの廟を訪れることができるように、カルベラにもどるのがつねであった。生涯の最後の年、かれは、これまでの習慣どおりに、一二五九年（一八四三年）ゼル・カゼ月一日に、何人もの仲間や友人を伴って、カルベラを出発した。その月の四日目、正午の祈りの時間に、バグダッドとカゼマインの間にある主要道路のそばにあるモスクに到着した。かれは祈りの呼び出し人に、弟子たちを集めて祈るように命じた。カゼムがモスクに面するやしの木の木陰に立ち、弟子たちの祈りに加わり、礼拝を終えたとき、アラブ人が突然現われた。アラブ人はカゼムに近寄り、抱擁して、こう語った。(p.42)

「三日前、むこうの牧場で羊の番をしていたら突然眠気がして、うとうとと眠ってしまいました。夢の中で、神の使徒モハメッドが現われて、わたしにこう言われました。『羊飼いや、わたしの言葉に耳を傾け、それを胸のなかに大事にしまっておくがよい。この言葉は神から下されたものであり、それをあなたに託すのだ。もし、あなたがこの言葉に忠実にしたがうならば、すばらしい報酬を得るであろう。そうでなければ、ひどい罰がふりかかるであろう。よく聞くがよい。これは、あなたに預ける大事なものであるから。あなたはこのモスクの近くから離れないようにせよ。この夢から三日

目の正午に、わたしの親族であるカゼムという人物が、友人や仲間を伴って、モスク付近のヤシの木陰にやってくる。そこでかれは祈りをささげるが、それを見たらすぐに、その人のところに行き、わたしからの心のこもったあいさつをし、こう伝えよ。<よろこぶがよい。あなたのこの世からの旅立ちの時間が近づいたからだ。あなたはカゼマインでの礼拝が終わったあとカルベラにもどり、三日後のアラフェの日（一八四三年十二月三十一日）に、わたしのところに飛び立ってくる。その直後に真理なる御方が到来され、世界はその御顔の光で照らされるであろう>。』(pp.43-44)

羊飼いの夢の話が終わったとき、カゼムは表情をくずして微笑み、こう述べた。「あなたが見た夢は、うたがいもなく真実である。」これを聞いた弟子たちは悲嘆にくれた。そこで、かれは弟子たちの方を向き、こう言った。「皆のわたしへの愛は、皆が待ち望んでいる真実なる御方のためではないのか。約束の御方が出現されるように、わたしのこの世からの旅立ちを望まないのか。」この出来事は、その場に居合わせたおよそ十人が、まったく実際に起こったことあるとわたしに話してくれたものである。それにもかかわらず、このおどろくべきしるしを目撃した多くの者らは、真理なる御方を否定し、その聖なる教えを拒否したのである。

このふしぎな出来事の話は、広くつたわって行き、カゼムを心から敬愛している人々を悲しませた。カゼムはこの上ないやさしさとよろこびをもって、かれらを元気づけ、なぐさめた。そして、かれらの悩む心をなだめ、信念を強め、熱意の炎を燃え立たした。カゼムは威厳と平静を保ちながら巡礼を終えカルベラにもどったが、その日に病に倒れた。これを知ったかれの敵は、かれはバグダッドの知事に毒を盛られたといううわさをひろめた。しかしこれは、まったくの誹謗であり、まぎれもない作り話でしかなかった。というのは、知事自身もカゼムを完全に信頼しており、つねにかれを、鋭い洞察力と非の打ちどころのない性格をそなえた有能な指導者であるとみなしていたからである。

一八四三年十二月三十一日、六十才の熟年に達していたカゼムは、身分の低い羊飼いの夢どおりに、この世に別れを告げた。後に残された献身的な弟子の一団は、世俗の欲望をすべて捨て、約束の御方を求めて旅立った。カゼムの聖なる遺体は、エマム・ホセインの廟の境内に埋葬されている。前年のアラフェの日の夕方、勝ち誇る軍隊が砦の門を破り、住民の多数を殺戮した騒動が起こったが、かれの死により、同じような騒ぎがカルベラに起こった。前年のその日、かれの家は平安と安全の避難所であっ

たが、かれが死去した翌年の同じ日は悲しみの家となった。カゼムから友情と援助を受けた人たちが集まり、その逝去を深く嘆き悲しんだのである。(pp.45-46)

第三章 バブの使命の宣言

カゼムの死をきっかけとして、敵たちはふたたび活動をはじめた。指導者の地位を渴望していたかれらは、カゼムがいなくなったことと、その弟子たちが意気喪失しているのを見て、いっそう大胆となった。そして、自分たちの要求を再度主張し、その野心を果たす計画を立てはじめたのである。しばらくの間、カゼムの忠実な弟子たちは、恐れと不安でいっぱいであったが、モラ・ホセインがもどってきたとき、憂うつは打ち払われた。モラ・ホセインは、師から委任された使命を首尾よく果たして帰ってきたところであった。

モラ・ホセインがカルベラからもどってきたのは一八四四年一月二十二日であった。かれは、敬愛する師の弟子たちが意気消沈しているのを見て、まずかれらを慰め、励ました。それから、師の固い約束をかれらに思い出させ、かくされている最愛の御方をゆるまぬ警戒心と不断の努力で探しつづけるように求めた。かれは、カゼムが住んでいた家の近くに住み、三日間つづけて多数の会葬者たちを迎えた。かれらは、カゼムの弟子たちの代表であるモラ・ホセインに、哀悼の意を表わすために駆けつけてきた人たちであった。その後、かれは主な弟子で信頼できる者らを集め、今は亡き師の念願と勧告が何であったかを聞いた。(p.47)

かれらは答えた。「カゼムはわれわれに、家を離れ国中にひろく散らばるように、何でも強くすすめられました。そして、われわれの心からすべての空しい欲望を除き、約束の御方の探索に専念するように命じられました。師はくり返し、その御方の到来についてこう言われました。『われわれが求めてきた目標なる御方は、今や出現された。その御方と皆の間にかかっているヴェールはきわめて厚いが、皆の献身的な探索によって除くことができよう。真剣な努力、純粋な動機、誠実な心だけが、そのヴェールを引き裂くことができよう。神はその聖典の中で、くわがために努力をする者らを、わが道に導こう。』と述べられていたであろう。』」

そこで、モラ・ホセインは聞いた。「ではなぜ、あなた方はカルベラにとどまっているのか。なぜ分散して師の熱心な願いを実施するために立ち上がらないのか。」かれらは答えた。「われわれがそうしていないことはわかっています。われわれは皆、あなたの偉大さを認め、あなたを深く信頼していますので、もしあなたがご自分は約束の御

方であると宣言されれば、皆すぐそれを受け入れ、あなたに忠誠を誓い、ご命令には何であれしたがうつもりです。」モラ・ホセインは叫ぶように言った。「とんでもない。わたしは、その御方の栄光からはるかに遠い存在なのだ。主の中の主である御方にくらべると、わたしはちりにすぎない。あなた方がカゼムの語調と言葉に精通していれば、そのようなことは口にしないであろう。わたしと同様、あなた方の最初の義務は、敬愛する師の辞世の言葉をその通り実行することなのだ。」

こう言い終わるとモラ・ホセインは椅子から立ち上がり、ハサン・ゴーハルやムヒットなど、名がよく知られている弟子のところへと行った。そして、一人一人に師の別れの言葉を伝え、かれらの果たすべき義務がいかに重要であるかを力説し、それを実行するようにすすめた。しかし、このこん願にかれらはいまいな言い訳をするだけであった。一人はこう言った。「敵はとても強く大勢います。師が去られた今、わたしはこの場を守らなければなりません。」もう一人はこう答えた。「わたしはここに残って、カゼムが後に残された子供たちの世話をしなければなりません」モラ・ホセインはかれらを説得するのは無駄であることにすぐ気づいた。かれらの愚かさ、無分別、感謝のなさを知り、これ以上話しかけることを止め、自分のことに忙しいかれらを残して、そこを離れた。(pp.47-48)

そのとき、約束の御方が出現される一八四四年が始まったばかりであった。ここで、テーマからそれて、モハメッドとエマムの伝承を述べてみよう。というのは、これらの伝承はとくにこの年に言及されており、ここで述べるにふさわしいと思えるからである。モハメッドの息子エマム・ジャファーは、ガエム（バブ）が顕示される年に関して質問されたとき、つぎのように答えた。「まことに、六〇年（一八四四年）に、かれの大業は顕わされ、その名は広く伝えられるであろう。」

名高い学識者モヘッド・ディン・アラビの著書の中には、約束された顕示者の出現の年と名前に触れた個所がかなりある。そのうちのいくつかを紹介してみよう。「その御方の信教を管理し、支持する人たちは、ペルシャ人であろう。」「守護者（アリ）の名は、予言者（モハメッド）の名をしのぐ……」「その御方の啓示の年は、九で割ることのできる数（二五二〇）の半分である。」(pp.48-49)

モハメッド・アクバリは、自著の詩で顕示者の年に関してつぎのように予言した。「ガ

ーズの年（この文字の数値は一二六〇年）に、地球はその御方の光で照らされるであろう。また、ガラシの年（一二六五年）に、世界はその栄光で満たされるであろう。もし、あなた方が、ガラセの年（一二七〇年）まで生きのびるならば、もろもろの国家、為政者、国民、および神の教えがいかに再生されるかを目撃するであろう。」忠実なる者らの指揮官と呼ばれるエマム・アリ（モハメッドの娘婿）について述べた伝承には、同じくつぎのようなものがある。「ガーズの年に、神の教導の木が植えられるであろう。」

モラ・ホセインは、仲間の弟子たちを目覚めさせ、立ち上がるように勧告したあと、カルベラからナジャフに向けて出発した。かれの弟のモハメッド・ハサンと甥のモハメッド・バゲルが同行した。かれらはモラ・ホセインが故郷のコラサン地方のボシュルエイを訪れたときから同行してきていた。モラ・ホセインはクフェ寺院に到着すると、そこに四〇日間滞在し、世間と交渉を絶ち、祈りに没頭した。断食と寝ずの行で、すぐにも着手しようとしている聖なる冒険の準備をしたのである。弟はこの祈りの期間、かれと行動を共にし、甥は断食しながらも、かれらの世話をし、時間の許すかぎり祈りに加わった。

しかし、この隠遁生活の静けさは、数日後、カゼムの主な弟子であるモラ・アリのとつぜんの到着で破られた。十二人の仲間と共にクフェ寺院に到着したかれは、仲間のモラ・ホセインが冥想と祈りにふけているのを知った。モラ・アリは膨大な知識をもち、アーマドの教えに深く通じていたので、多くの者はかれの方がモラ・ホセインよりすぐれているとみなしていたほどであった。かれは何度かモラ・ホセインに、祈りの期間を終えたあとの目的地について聞き出そうと近寄ったが、モラ・ホセインがあまりにも深い祈りに没頭していたため、質問できなかった。そこで、かれ自身も世間との交渉を絶って、四〇日間隠遁生活をすることにした。仲間もそれにしたがったが、そのうち三人は世話係となった。(p.50)

四〇日間の隠遁生活を終えた直後、モラ・ホセインは二人の仲間と共にナジャフに向かった。夜半にカルベラを発ち、途中でナジャフの廟を訪れ、そのあとペルシャ湾にあるブシュルに直行した。そこでかれは心の望みである最愛なる御方の探索をはじめた。その町ではじめて、モラ・ホセインは、商人としてつつましい市民生活を何年も送られた御方の芳香を吸ったのである。それは甘美で神聖な芳香であった。その芳香は、最愛なる御方の数えきれないほどの祈りにより、町に満たされていたものであ

った。(pp.51-52)

しかし、モラ・ホセインはブシェルに長く留まることはできなかった。かれはあたかも磁石に引かれるように、北方のシラズに向かった。シラズ市に入る城門に着くと、弟と甥にイルカニ寺院に直行し、そこで待つように指示した。そして神の意志であれば、夕方の祈りの時間までには自分も合流できるであろうと付け加えた。そのあと、町の城門外をしばらく歩きまわっていたが、日没二、三時間前ごろ、みどりのターバンをつけて輝かしい表情をした青年に目がとまった。その青年はかれの方に歩み寄り、笑みを浮かべながらあいさつをし、あたかも生涯の友であるかのように親しみをこめて抱擁した。モラ・ホセインは最初、この青年はカゼムの弟子で、自分がシラズを訪れることを知って迎えにきたのだと思った。

後に殉教したアーマド・ガズビニは、モラ・ホセインが初期の信者たちに、バブとの感動にみちた歴史的会見を数回にわたって語るのを聞いた人である。かれはわたし(著者)に、モラ・ホセインが語った話をしてくれた。(p.52)

「わたし(モラ・ホセイン)はシラズの城門外で会った青年の温かい愛情に満ちた歓迎に圧倒された。青年はわたしを自分の家に招き、旅の疲れをとるようにやさしくすすめたのである。わたしは二人の仲間が宿泊の準備をしており、わたしの帰りを待っているので、招きにあずかることはできないと断わった。『二人を神に任せなさい。神はかならずかれらを守ってくれるであろう。』と青年は答え、自分の後についてくるようにうながした。わたしは、この見知らぬ青年の温和でしかも、逆らうことのできない語調に深く感銘した。また、かれの歩き方、魅力ある声、威厳ある態度が、この最初の出会いの印象をますます強烈にしてゆくのを感じた。

まもなく、一見質素な家の門前にきた。青年は立ち止まり戸を叩いたところエチオピア人の召使いが戸を開けた。青年はコーラン書から『平和で安全なこの場所に入れ』という句を引用しながら敷居をまたぎ、わたしにもついてくるように身振りで示した。かれの言葉は力強く、威厳に満ちており、魂を奥底から動かすようなものであった。シラズの町で最初に入る家の敷居に立ちながら、この言葉を聞くのは、よいことが起こる前兆ではないかと感じた。この町の雰囲気はすでに、口では言い表せないような印象をわたしにあたえていた。この家を訪問することによって、わたしの探索の目的

である御方により近づけるように思ったのである。これで、この探索に伴う強烈な切望感とたゆまぬ努力と深まる不安を終わらせることができるのではないかとも感じた。(pp.53-54)

青年につづいてかれの部屋に案内される時、わたしは説明できない喜悅感でいっぱいになった。部屋に入って座ったあと、青年は水差しを持ってこさせ、わたしに手足を洗い、旅の汚れを落とすようにすすめた。そこでわたしは、隣の部屋で手足を洗おうとしたが、かれはそれを許してくれず、自らわたしの手に水を注いだのである。つぎに飲み物が出され、そのあとかれ自ら紅茶を入れてくれた。

わたしは、青年の親切なもてなしに深く感謝しながらも、そこから早く去りたかった。そこで立ち上がり思い切って言った。『夕方の祈りの時間がせまっています。その時間にイルカニ寺院で仲間と会う約束をしているのです。』青年は、静かに、丁重に答えた。『あなたはかれらと会うのを、神の意志であれば、という条件つきで約束された。神は別のことをあなたに命じておられるようだ。約束を破ることを心配する必要はない。』青年の威厳と確信にあふれた言葉に、わたしは黙ってしまった。そして、ふたたび手を洗って祈ることにした。かれもまた、わたしのそばに立って祈りはじめた。祈りで、わたしは魂の重荷をおろしたかった。わたしの魂は、この青年との会見と探索の緊張と心労による負担で押しつぶされそうになっていたのである。わたしはこう祈った。『おおわが神よ。わたしは全力をつくして努力してきましたが、まだ約束の聖なる使者を見つけておりません。あなたの言葉には間違いはないこと、そしてあなたの約束もかならず果たされることを証言いたします。』(pp.54-57)

この忘れがたい夜は一八四四年五月二十二日であった。日没後一時間ほどたって、青年はわたしに話しはじめた。かれはこう質問した。『カゼムの後は、だれが後継者で指導者とみなされますか。』わたしはこう返事した。『わたしどもの師は亡くなられる前に、わたしどもに故郷を離れ、国中に散らばって約束の御方を探し出すように強く勧告されました。それでわたしは、師の望みを果たすためにペルシャに旅し、その御方を探しているのです。』さらに、かれは聞いた。『あなたの師はその約束の御方の特徴について、くわしく教えられなかったのか。』わたしは答えた。『はい、教えていただきました。その御方は高貴な血筋を引くファテメ（モハメッドの娘）の子孫です。年齢は二十才から三十才の間で、生まれながらに知識をそなえておられます。また、中背で肉体的な欠陥はまったくありません。たばこも吸われません。』

青年はしばらく黙っていたが、やがてふるえるような美しい声で言った。『今あなたが述べた特徴のすべてが、わたしにそなわっているのを見なさい。』そして、それらの特徴をひとつずつ取り上げ、すべてが自分にあてはまることをはっきりと示した。わたしはひじょうにおどろいたが、丁重に述べた。『わたしどもがその到来を待望している御方は、この上もなく聖なる人物です。そして、その御方が啓示される大業は、恐るべき力をもたらす。自分が神の顕示者と宣言する御方は、さまざまな条件を満たさなければなりません。カゼムは何回となくその御方の広大な知識に言及されました。こうくり返えされたのです。＜その御方の知識にくらべれば、わたしの知識は一滴の水にしかすぎない。その御方の広大な知識の前では、わたしの学識はちりの一片にすぎない。いや、それどころではない。その差は無限なのだ。＞』

こう述べたとたん、わたしは恐怖と後悔の念にかられたが、それをかくすことも、説明することもできなかった。わたしは自分をひどく責め、今後は態度を変えて口調をやわらげようと決心した。もしこの青年がふたたびこの話題に触れたら、わたしは心から謙虚に、つぎのように答えようと神に誓った。『もし、あなたが本当に約束された御方であるという証拠を示して下さるならば、わたしの魂に重くのしかかっている不安と緊張感は、確実に除かれるでしょう。そうして下さるならば、どれほどありがたいかわかりません。』(p.57)

わたしは、この探索をはじめるとあって、自分が約束された人であると宣言する人物が現われたとき、その真実性を試すために、二つの条件を考えていた。一つは、わたし自身が準備したもので、アーマドとカゼムの難解で不明瞭な教えに関する論文を解明できるかどうかであった。この論文にある神秘的な意味を解明できた人には、つぎの質問を出すことにしていた。それは、今流行の文体や言葉の使用法とはまったく違ったやり方で、ヨセフ（旧約聖書やコーランに出てくる重要人物）の章について、何のためらいもなく、また、前もって考えることもなく解説できる、という条件であった。実は以前、カゼムに、同じヨセフの章について解説を書いてもらうように要請したが、かれはそれをことわり、つぎのように述べたのである。『それはわたしの能力をはるかに超えたことだ。わたしの後に現われる偉大な御方は、あなたに聞かれる前に、それを書いてくれるであろう。その解説文は、かれが真実であることを示す重要なしるしの一つで、また、かれの崇高な地位を表わす明確な証拠の一つでもあるのだ。』

わたしがこのように頭をめぐらしていたとき、威厳をそなえた青年はふたたび話しかけてきた。『カゼムが話していた人物は、わたしではないのかどうか、よく考えなさい。』そこで、持参していた論文を差し出さずにはいられなくなり、かれにこう頼んだ。『わたしが書いたこの本を寛大な目で読んでいただけますか。その際わたしの弱点と誤りを大目に見て下さるようお願いしたいのです。』

青年は親切にもわたしの願いを聞き入れてくれた。かれはその本を開き、数節に目を通したあと、それを閉じ語りはじめた。そして数分のうちに、かれ特有の魅力ある力強さで、その論文の中の神秘をすべて解明し、疑問をすべて解決したのである。わたしの要請はほんの短時間でかなえられたが、それは十分満足のゆくものであった。そのあと、かれはつづけてイスラム教のエマムの伝承にも、アーマドとカゼムの著作にもない知識を明らかにした。それは、これまでに聞いたことがないもので、心にあらたな生命力をあたえるものに思われた。(p.59)

そのあと、青年はこう述べた。『あなたがわたしの客でなければ、あなたは苦しい立場にあった。しかし、神のすべてを包含する恩恵により、あなたは救われたのだ。しもべを試すのは神であり、しもべが自分の不完全な基準で、神を判断するものではない。わたしがあなたの困惑を除けないとしても、わたしの内部に輝く真理が無力だとみなされたり、わたしの知識が不完全だと非難されたりすることはないのだ。神の正義にかけて誓うが、そういうことは絶対にあり得ない。今日において、東西諸国民はこの門口にいそぎ、慈悲なる御方の恩恵を求めなければならない。これをためらう者は、道を失うであろう。地上の人びとは自分たちが創造された目的は、神の知識を得、神を賛美することであると証言していないのか。かれらがすべきことは、あなたがしたように、すぐ自ら進んで立ちあがり、ゆるがぬ決意をもって、約束の御方を探すことである。』

つぎに、かれは『さて、ヨセフの章について解説するときがきた』と言って、ペンを取り、信じがたいほどの速さで、モルクの章全部を書き上げた。それはヨセフの章に関する解説文の最初の部である。かれの書くさまは、強烈な印象をあたえたが、それはまた、かれが書きながら口にするやさしい声の抑揚によって一層強められた。モルクの章が全部終わるまで、ペンの動きは一瞬も止まることはなかった。その神秘的な声とすさまじい力で生み出されている啓示に、心を完全にうばわれたわたしは、茫然として座ったままであった。ようやく、不本意ながらも立ち上がり、別れを告げよ

うとしたとき、青年は微笑みながらわたしに座るように合図し、こう言った。『今、その状態で外に出れば、人びとはあなたを見て、<このあわれな若者は気が狂ったようだ>と言うにちがいない。』

そのとき、時計の針は日没後二時間と十一分を指していた。その日、一八四四年五月二十二日の夕方は、ノウ・ルーズ（新年）から六十五日目の前日の夕方にあたった。青年はこう宣言した。『今夜のこの時間は、将来、すべての祝日中最大で、もっとも意義深い祝日のひとつとして祝われるであろう。神に感謝せよ。あなたは神の慈悲深い援助により、心の望みを果たし、封じられていた神のぶどう酒を飲み干すことができたからである。<それをなし得た者らは幸いである。>』(pp.61-62)

日没後三時間たって、青年は夕食の準備を召使いに命じた。同じエチオピア人の召使いがふたたび現われ、最上の夕食を運んできた。その聖なるごちそうで、わたしの心身は元気づけられた。この時間、聖なる青年の面前での食事は、あたかも楽園の果実を口にしている感じであった。わたしは、このエチオピア人の召使いの献身的で丁重な態度にもおどろかされた。その生活態度すべてが、かれの主人の再生力によって変革されたように見えたのである。そのときはじめて、モハメッドのつぎの有名な伝承の意味が理解できたのである。『われは、わがしもべらのうち、神を敬う者と公正な者のために、だれの目も見ることがなく、だれの耳も聞いたことがなく、だれの心も考えついたことのないことを準備した。』この若々しい青年が、その偉大さを主張するものが何もなかったとしても、かれがわたしを迎え入れたときに示した厚遇と慈愛だけで、その偉大さが十分に証明されたと感じた。実際、かれの厚遇と慈愛のほどは、ほかのだれも示せないようなものだ、とわたしは確信している。

青年の言葉に魅せられたわたしは、時間も、わたしを待っている仲間のこともすっかり忘れて座ったままであった。とつぜん朝の祈りの時間を知らせる声が聞こえてきた。恍惚状態に陥っていたわたしは、はっとわれにかえった。全能なる神が聖典の中で、楽園の人びとの貴重な所有物として述べている喜びと、表現できないほどの栄光をすべて、その夜わたしは体験したのである。わたしがいた場所は、まさしくつぎの言葉どおりであった。『そこには、苦しみも疲れもない。』『そこでは、無駄口や虚言を聞くことはない。<平安あれ>という言葉だけが聞かれる。』『そこでかれらは<栄光あれ、おおわが神よ>と声高く祈り、<平安あれ>という挨拶を交わす。そして、かれらの祈りは<神に賛美あれ、万物の主よ>という言葉で終わる。』(コーラン) (p.62)

その夜、わたしは一睡もできなかつた。青年の歌うような声の抑揚に、まったく心が魅せられていたのである。その声は、ガユモーウル・アズマ（ヨセフの章）を誦むときに高まり、その中の祈りが唱えられるときに天国から下されたもののようによく清らかで、名状しがたい調べとなった。祈りが終わる毎に、かれはつぎの句をくり返した。『全栄光なる主の栄光は、その創造物が認め得る以上にはるかに栄光あるものなり。神の使者たちに平安あれ。万物の主なる神に賛美あれ。』

それが終わると青年はわたしにこう告げた。『われを最初に信じた者よ。まことに、あなたに申すが、われはバブ、神の門である。そして、あなたはバブル・バブ、その門の門である。最初に、十八人が自発的にわれを受け入れ、わが啓示の真理を認めなければならない。かれらは、導かれることも、招かれることもなく、めいめい自分の意思でわたしを探しあてなければならないのだ。そして、十八人がそろったところで、メッカとメジナへのわが巡礼に同行するために一人が選ばれなければならない。そこで、われはメッカの高僧に神の言葉を伝えることになっている。そこからクフェにもどり、その町の寺院で、再度神の大業を宣言する予定である。今夜見聞したことを、あなたの仲間にもそのほかのだれにも漏らしてはならない。イルカニの寺院で祈りと教えの普及に専心しなさい。われもまた、その寺院での会衆の祈りに参加しよう。あなたの信仰の秘密がほかに漏れないように、われに対する態度に注意しなさい。われがヘジャーズに出発するまで、あなたはこれまでどおり行動し、これまでと同じ態度をもちつづけなさい。われが出発する前に、十八人のそれぞれに特定の任務をあたえ、送り出すことにする。そのとき、かれらが神の言葉を教え広め、人びとの魂に生命をあたえることができるように指示を与えよう。』こう語ったあと、バブは別れの言葉を告げた。そして、わたしを家の出口まで案内し、神の保護に託したのである。(p.63)

この啓示はあまりにも突然、あまりにも激しくわたしに突きかかってきた。わたしはあたかも雷に打たれたようになり、しばらく身体の機能がまひしたようであった。そのまぶしい光輝に目がくらみ、その強烈な勢いに圧倒されたのである。興奮、喜び、畏れ、驚嘆の念で、わたしの魂は奥底までかき立てられた。とくに喜悦感と力を得たという感じが強烈で、わたしは変わってしまったようであった。それまでのわたしは、どれほど無力で、どれほど気が沈み、臆病に感じていたことであろうか。それまで手足のふるえが強かったため、書くことも歩くこともできなかつたのである。しかし今、神の啓示の知識を得て生き返った。自分には大いなる勇氣と力がつき、たとえ世界の

すべての人びとと君主たちが攻めてきても、一人でひるむことなくその猛攻撃に耐え得るとさえ感じてきたのである。全宇宙もわたしがつかめる一握りの土に過ぎないように思えた。自分自身が、天使ガブリエルの声になったようにも思えた。その声はつぎのように全人類に呼びかけていた。『目覚めよ。見よ、夜明けの光が射しはじめた。立ち上がれ。神の大業が顕わされた。神の恩恵へのとびらは大きく開けられた。そこに入れ、おお世界の人びとよ。皆が待望していた約束の御方が到来された。』

この状態で、わたしはバブの家を出て弟と甥が待っているところに向かった。イルカニ寺院につくとわたしの到着を知ったアーマドの弟子たちが多数集まってきていた。そこで、新しく発見した最愛なる御方の指示に忠実にしたが、すぐ実行に取りかかることにした。まず講座を準備し、祈りをつづけているうちに、徐々に大勢の人びとがわたしの元に集まってきた。その町の高僧や高官も訪れてきた。かれらはわたしの講話から生み出される精神に驚嘆した。しかし、その知識の源は、かれらがその到来を切望してきた御方であることに気づいていなかった。(p.65)

そのころ、わたしは数回にわたってバブに召された。バブはあのエチオピア人の召使いを寺院に行かせて、慈愛にみちた言葉でわたしを招待したのである。バブを訪問する度に、わたしは一晚中バブの面前で過ごすことができた。夜明けまで眠らずに、かれの魅力ある言葉に魂をうばわれ、この世とその苦労を忘れて、かれの足元に座したまま過ごしたのである。何とすばやくその貴重な時間は過ぎ去ったことであろうか。夜が明けると、自分の気持ちに反してそこを離れなければならなかった。当時、どれほど夕方の時間を待ち望み、どれほど悲しい気持ちと残念な思いで、一日のはじまりを見たことであろうか。

このように夜の訪問がつづいていたが、ある夜バブはつぎのように告げた。『明日、十三人の仲間が到着する。かれらを心から歓迎し、できるかぎりのことをしてあげなさい。かれらは敬愛する御方を探すために生命をささげてきたからである。かれらが神の慈悲深い援助を受けて、その道を確実に歩くことができるように神にこん願いなさい。その道は髪の毛より細く、刀よりも鋭いのだ。かれらのうち何人かは、神から選ばれ、好意を受ける弟子で、ほかの者は中道を歩くが、残りの者の運命は、かくされているすべてが現わされるまで、公言できない。』

その同じ朝、わたしがバブの家からもどってまもない時間に、モラ・アリが、バブが予告したと同じ数の仲間を同行してイルカニ寺院に到着した。そこですぐ、かれらが楽に過ごせるように世話をはじめた。その後二、三日たったある夜、モラ・アリは仲間たちを代表して、これ以上抑えることのできなくなった気持ちをわたしにもらした。『わたしどもが、あなたをどれほど深く信頼しているか、よくご存知のはずです。わたしどもは、あなたに忠誠を誓っております。もし、あなたが約束のガエム（バブ）であると宣言なさるならば、わたしどもは皆、ためらうことなく、あなたを受け入れましょう。あなたの呼びかけにしたがって、わたしどもは家をはなれ、約束の最愛なる御方を探し求めてきました。あなたこそ、最初にわたしどもに貴重な模範を示されたので、あなたの足跡にしたがってきました。探索的なる御方を見つけるまでは、努力をゆるめない決心でいます。わたしどもはこの場所まであなたを追ってきました。あなたが受け入れる御方はだれであれ、認めるつもりでおります。そうすれば、そのお方の庇護の下に入り、最後の時間を合図しなければならない激動を難なく通り抜けられると思っております。なぜ、あなたは今、静かに落ち着いて人びとに教えを説き、祈りと瞑想にふけておられるのですか。あなたの顔から、以前の動揺と期待の様子が消えてしまっているようです。お願いですからその理由を教えてください。わたしどももまた、この不安と疑いの状態から解放されたいのです。』(p.66-67)

わたしはずかに答えた。『あなたの仲間は、わたしの落ち着いた平安な気持ちは、わたしがこの町で優位な立場を獲得したからだと思われるかもしれない。ところがそれは事実からほど遠いのだ。この世の虚栄も誘惑も、このボッシュルエイのホセイン（モラ・ホセイン）を最愛の御方から切り離すことは絶対にできない。この聖なる事業に着手したときから、わたしは自分の生命の血で、自分の運命を定めることを誓った。約束の御方のために、苦難の大洋に沈むことをよろこんで受け入れた。この世のものは望まない。わが最愛の御方が満足されることだけを切望している。その御方の名のために血を流すまでは、心の中に燃える火は消えることはないのだ。あなたがその日まで生きられることを神に祈る。あなたの仲間たちは、こう考えなかったであろうか。すなわち、強烈な熱望とたゆまぬ努力のゆえに、神はその限りない慈悲をもって、その恩恵の門をモラ・ホセインの眼前で、かたじけなくも開けられたが、神はその計りがたい英知により、その事実をかくすために、モラ・ホセインにこれまでどおりに振舞うことを命じられたのではないかと。』

モラ・アリの魂はこの言葉に深く揺り動かされた。かれは即座にその意味を理解し

たのである。そして、目に涙を浮かべ、動揺を平安に、不安を確信に変えた御方がだれであるかを明かしてくれるようにこん願した。『慈悲の御手なる御方が、あなたにあたえた聖なる飲み物を少しでも分かち与えて下さるようお願いいたします。その飲み物は、かならずわたしの渴きをいやし、わたしの苦しい切望を和らげてくれるでしょう。』
『そのことをわたしに求めないように願う。神に信頼を置きなさい。神はかならず、あなたの歩みを導き、あなたの心の動揺を静めてくれるであります。』(pp.67-68)

モラ・アリは、仲間たちのところへいそいでもどり、モラ・ホセインとの会話の内容を知らせた。その内容を聞いて心に熱望の炎を燃え上がらせたかれらは、ただちに散らばり、めいめい個室に閉じこもり断食と祈りに没頭した。最愛なる御方を認めることを妨げているヴェールがすばやく除かれるように、神にこん願したのである。かれらは徹夜でつぎのように祈りつづけた。「おお神よ、わが神よ。あなたのみを賛美し、あなたにのみに援助を乞います。おお、われらの主なる神よ、われらを正しい道に導きたまえ。あなたが、使徒を通して約束されたことを実現し、復活の日にわれらが恥をかくことがないようにしたまえ。まことに、あなたは約束を守られる御方でありたもう。」

隠遁して三日目に、モラ・アリは、祈りの最中に幻を見た。かれの眼前に光が現われたかと思うと、その光が動きはじめたのである。その輝きに魅せられて追っていくと、ついに最愛なる約束の御方にたどりついた。そのとき、真夜中であったが、この上ない喜びに顔を輝かせて、自室のドアを開けモラ・ホセインのところにいそいだ。そして、敬愛する仲間の腕に身を投じた。モラ・ホセインは愛情深くかれを抱擁し、こう述べた。「ここまでわれらを導かれた神に賛美あれ。神の助けがなければ、われらは導かれることはなかったであろう。」

同じ日の夜明けに、モラ・ホセインはモラ・アリを伴ってバブの家にいそいだ。バブの家の入り口に忠実なエチオピア人の召使いが待っていた。かれらを認めるとすぐあいさつし、こう述べた。「夜明け前にわたしは主人から召され、家の門を開けて待つように命じられました。主人は申されました。『二人の客が朝早く訪れてくるので、わたしに代わって温かく迎え入れよ。そして、<神の名にかけて、お入りください>と述べよ』と。」(p.68)

モラ・アリとバブの最初の会見は、モラ・ホセインとバブの会見に似ていたが、一つだけ異なっていた。前の会見では、バブの使命の証拠についてくわしい調査と解説があったが、この度は論証など一切なく、ただ深い敬慕の念と親愛の情でみたされていた。部屋全体が、バブの言葉から生み出される神聖な力で生気をあたえられたようであった。その部屋のすべてが、感動でふるえながらつぎのように宣言しているようであった。「まことに、新しい日の夜明けがはじまった。約束の御方は人びとの心の王座を占められた。その御方は、御手に神秘の不滅の聖杯をもっておられる。それを飲む者は幸いである。」

モラ・アリの十二人の仲間たちは、皆それぞれにだれの助けも受けずに最愛なる御方を捜し出した。ある者は夢で、ほか者は目覚めているときに、何人かは祈っているときに、そして、残りの者は瞑想中に聖なる啓示の光を体験し、その栄光ある威力を認めたのである。モラ・アリに習い、この十二人とほかの何人かは、モラ・ホセインに伴われてバブの面前に出て<生ける者の文字>と名づけられた。こうして、十七人の生ける者の文字が、神の書簡に一人ずつ加えられていったのである。かれらはバブの選ばれた使徒、その信教の管理者、その光の普及者として任命されたのであった。

ある夜、モラ・ホセインとの対話中に、バブはこのように言われた。「これまでに、十七人の生ける者の文字が神の信教の旗のもとに集まった。十八の数がそろうにはあと一人が必要だ。これらの生ける者の文字は、わが大業を宣布し、わが信教を確立するために立ち上がるようになっている。明日の夜、残りの生ける者の文字が到着し、われが選んだ使徒たちの数がそろうであろう。」

翌日の夕方、バブはモラ・ホセインを後ろに伴って家にもどろうとしていた。そこへ、髪はぼうぼうとなり、旅で汚れた服装をした若者が現われた。かれはモラ・ホセインに近づき、あいさつの抱擁をし、目標の御方を探してたかどうかを聞いた。モラ・ホセインはまず、かれの興奮をしずめ、あとで知らせるからと約束して、しばらく休むようにすすめた。しかし、若者はこの助言を聞こうとせず、バブに目をとめモラ・ホセインにこう述べた。「なぜあなたはその恩方をわたしから隠そうとなさるのですか。わたしは、歩き方を見ただけでその御方を認めることができます。その御方のほかに、真実者であることを宣言できる人物は東西どこにもいません。だれも、その聖なる御方にそなわっている威力と威厳を現わすことはできないと思います。」(p.69)

モラ・ホセインは若者の言葉におどろいたが、真実を知らせる時間がくるまで感情を抑えるように願い、若者に別れを告げた。モラ・ホセインは若者から離れ、バブに追いつき若者との会話の内容を伝えた。バブは答えた。「その若者の一風変わった態度におどろいてはならない。われはかれをすでに知っており、精神界で交信してきたのだ。実際、かれの到来を待っていたのだ。かれのところへ行き、すぐここに案内せよ。」モラ・ホセインは、即座にバブの言葉を思い出した。それはつぎの伝承であった。「終わりの日に、見えざる人びとが、精神の翼で限りなく広大な地球を横切り、約束のゴエム（バブ）の面前に達するであろう。そして、その御方から秘密を学び、それにより自分たちの問題を解決し、悩みを取り除くであろう。」

この勇敢な者らは、身体は遠く離れていても、日々最愛なる御方と交信し、その言葉を聞き、その御方と親しく交わるといふこの上ない恩恵にあずかった。そうでなければ、どのようにして、アーマドとカゼムはバブについて知り得たであろうか。どのようにして、かれらはバブに秘められている意義を理解できたであろうか。バブとその最愛なる弟子のゴッドスが神秘の絆で魂が結びつけられていなかったならば、どのようにして二人はあのような言葉を書くことができたであろうか。バブは、その使命の始まりに、ジョセフの章についての解説ガューモーウル・アズマの序論で、バハオラの啓示の栄光と意義に言及した。ジョセフの兄弟がいかに忘恩と悪意をもってジョセフを扱ったかを詳細に述べたが、その目的はバハオラもまた、弟と親族の手によって苦しみを受けることを予告するためであった。ゴッドスは、シェイク・タバルシの砦で大軍の砲火に包囲されながら、昼夜かけてババオラへの賛辞を完成した。その賛辞はサマードのサットと呼ばれ、そのときすでに五十万語からなる不滅の解説文となっていた。このゴッドスの解説文とバブのガューモーウル・アズマを始めから終わりまで公正な目で調べてみると、上述した事実がはっきりと証明されているのがわかる。すなわち、バブとゴッドスは神秘の絆で魂が結ばれていたという事実である。
(pp.70-71)

ゴッドスがバブの啓示を受け入れたことで、バブの弟子の数はそろった。ゴッドスの本名はモハメッド・アリで、母の家系をたどると予言者モハメッドの孫エマム・ハサンまでさかのぼる。生まれ故郷はマザンデラン州のバルフォルージュであった。カゼムの講義に出席した者らの報告によると、カゼムの晩年に弟子の一人となったが、集会には最後に到着して、つねに末席にすわり、集会が終わると、最初にその場を離れた。ゴッドスがほかの仲間たちと違っていた点は、沈黙を守っていたことと態度の

謙虚さであった。カゼムはよくつぎのように述べていた。「弟子の中には、末席を占め沈黙を厳守しているが、神の目にはきわめて高い地位にある者らがあり、わたし自身もかれらと肩を並べる価値はないと感じるほどである。」弟子たちはゴッドスの謙虚さと模範的な振舞いを認めたが、カゼムの意味するものには気づかないままであった。

ゴッドスがシラズに来てバブの教えを受け入れたのは二十二才のときであった。かれは若年であったが、カゼムの弟子のうちだれも匹敵できないほどの不屈の勇気と信念を示した。そして自分の生涯と栄光ある殉教をもって、つぎの伝承の正しさを実証したのであった。「われを求める者はすべて、われを見いだすであろう。われを見いだす者は、われに引きつけられるであろう。われに引きつけられる者は、われを愛するであろう。われを愛する者を、われもまた愛するであろう。われから愛される者は、われのために命を落とすであろう。われのために命を落とす者は、われ自身が、その者の身受け人となろう。」

バブの本名はセイエド・アリ・モハメッドで、一八一九年十月二十日、シラズで誕生した。バブはモハメッドまでさかのぼる名高い貴族の家系に属していた。かれの誕生日は伝統的にエマム・アリを指すと考えられている「われは、わが主より二年若い」という予言が正しいことを証明するものである。かれが使命を宣言したのは、誕生後二十五年四ヵ月と四日たった日であった。かれは幼少のころ父モハメッド・リザを失った。この父はファルス地方の隅々まで、敬虔と徳行で知られ、人びとから深い尊敬と名誉を受けていた。両親共に予言者モハメッドの子孫で、共に人びとから愛され、尊敬されていた。父の死後、バブは、後に信教のために殉教した伯父セイエド・アリに養育された。この伯父は、子供のバブをシェイキ・アベドという教師に教育を依頼した。バブは勉強に気乗りがしなかったが、叔父の意思と指示にしたがった。(pp.71-75)

シェイキ・アベドは、シェイキオナとして生徒たちに知られており、敬虔で学識のある人であった。かれはまたアーマドとカゼムの弟子でもあり、バブについてつぎのように語っている。「ある日、わたしはバブにコーランの冒頭にある『哀れみ深き者、慈愛深き者なる神の御名において』を詠唱するように命じました。かれは、詠唱するのをためらい、その節の意味を教えてくださいと主張したのです。わたしはその意味がわからないふりをしました。すると、わたしの生徒であるかれは、こう言ったのです。『ぼくにはその節の言葉の意味がわかります。先生のお許しがあれば、説明します。』

かれの口から流暢に流れ出すそのおどろくべき知識に、わたしは仰天しました。かれは、〈神〉、〈哀れみ深き者〉、〈慈悲深き者〉という言葉の意味を、それまで読んだことも、聞いたこともない言葉で説明したのです。かれの甘美な言葉は、今でもわたしの記憶に残っています。そこでかれを、伯父に送り返すことにしました。伯父がわたしに委任した大事な子供を、かれの手にもどさなければと強く感じたからです。そして、自分にはこれほどに非凡な子供を教える能力はないことを伝えようと、子供のバブをもどしに行きました。事務所に一人でいた伯父にこう説明しました。『大事なご子息をもどしにまいりましたので、お宅で注意深く保護して下さい。この子を普通の子のようには扱わないようにお願いします。わたしはすでに、かれのうちに神秘的な力を感じますが、それは、〈新しい時代の主〉（約束されたゴエムの称号の一つ）の啓示のみが明らかにすることができるものです。かれにはわたしのような教師は必要としていませんので、お宅で深い慈愛をもって育てられるようにお願いします。』

これを聞いた伯父セイエド・アリは、バブをきびしく叱りました。『わたしが命じたことを忘れたのか。ほかの生徒を見習って、沈黙を守り、先生の言葉に注意深く耳を傾けるように注意したではないか。』伯父はこの忠告にしたがうことをバブに約束させて、学校にもどるように命じました。しかし、このきびしい忠告も、この子の魂を抑えることはできませんでした。どのような規律も、かれの生まれながらにそなわった知識の流れを抑制することはできなかつたのです。かれが毎日のように示した超人的な英知はおどろくべきもので、わたしの能力ではそれを述べることはできません。」ついに伯父は教師の説得により、バブをシェイキ・アベドの学校から退学させ、自分の仕事場で働かせることにした。そこでもまたバブは、だれも近づくことも匹敵もできないほどの威力と偉大さを示した。(p.75)

数年後、バブはセイエド・ハサンとアブール・カゼムの妹と結婚した。子供が生まれてアーマドと名づけられたが、一八四三年に亡くなった。バブの宣言の前年であった。父親のバブはその死を悲しまず、つぎの言葉でその子の命を神に捧げたのである。「おお神よ、わが神よ。千人のイシマエル（アブラハムの息子）がわたしに与えられても、このあなたのアブラハムは、あなたへの愛のしるしとして、息子を全部あなたに捧げるであります。おお、わが最愛の御方よ、わが心の望みの的なる御方よ。あなたのしもべであるこのアリ・モハメッドが、あなたの愛の祭壇にアーマド（バブ

の息子)を捧げても、このしもべの心の熱望の炎を消すことはできません。心をあなたの足元に捧げるまで、全身があなたの道で残酷な虐待の犠牲になるまで、胸があなたのために無数のやりの標的とされるまで、わたしの魂の動揺は静められることはありません。おおわが神よ、わが唯一の神よ。わが息子、わが唯一の息子を犠牲としてあなたに捧げさせたまえ。それを、わたしの命があなたの道で犠牲となる準備とさせたまえ。あなたの道で、わたしが捧げたいと願う生命の血に恩恵を付与したまえ。それを、あなたの信教の種に必要な水や栄養となし、その種にあなたの天上の威力をあたえたまえ。それにより、この神の小さな種がやがて人びとの心の中で芽をだし、成長して大木となり、その木陰に地上の民族と国民をすべて集合させることができますように。おおわが神よ、わたしの祈りに答え、わたしの最高の切望を実現させたまえ。まことに、あなたは全能者、恵み深き者でありたもう。」(p.76-77)

バブは、商いに従事していた期間は、ほとんどブシェルで過ごした。かれは真夏のうだるような暑さの中でも、金曜日ごとに屋上で数時間祈りつづけた。真昼の猛烈な日差しにさらされながらも、心は最愛なる御方に向けられた。強烈な暑さにも気をかけず、まわりの世界も忘れて、その御方と交信をつづけたのである。夜明け前から日の出まで、そして正午から午後おそくまで瞑想と敬虔な祈りに時間を過ごした。毎日夜明けに、北方のテヘランの方向へ顔を向け、心は愛と喜びに満たされて日の出を迎えた。かれにとって日の出はやがて世界に現われる真理の太陽なる御方の象徴であった。最愛の人を見つめる愛人のように、昇る太陽をあこがれの目でじっと凝視した。あたかも神秘的な言葉で、その輝く光体に話しかけ、かくされた最愛なる御方への熱望と愛のメッセージを託しているようであった。かれはその輝く光線を深い喜びで迎えたが、まわりの無知な人びとは、バブはただ太陽に魅惑されているのだと思った。(pp.77-78)

わたし(著者)は、ジャヴァド・カルベラからつぎのように聞いた。「インドに行く途中、ブシェルを通り過ぎました。わたしは、すでにセイエド・アリ(バブの伯父)と知り合っていましたので、数回にわたってバブと会うことができましたが、かれはつねに、言葉では表現できないほど、ひじょうに謙虚で腰が低かったのです。下方に向けられた視線、最高の礼儀正しさ、おだやかな顔の表情は、わたしの魂に忘れられない印象を残しました。わたしはバブと親しく交わった人たちが、かれの清純な性格、魅力的な動作、控えめな態度、この上ない高潔さ、神への深い献身を語っているのをしばしば耳にしました。

たとえば、こういう出来事がありました。あるとき、ある人がバブに品物を渡し、それを一定の値段で売ってくれるように頼みました。しばらくして、バブはその品物の価値に相当する額をその人に支払いましたが、その額が定価よりはるかに高かったため、その人はすぐバブに手紙を書き理由をたずねました。バブの返事はこうでした。『わたしが送った金額は、全部あなたに支払うべき金額です。それ以上のものは一文も含まれていません。あなたがわたしに渡された品物は、一時期かなり高い値段に達したことがあります。そのときあなたは、その値段で売りそこなったので、わたしは今その金額をあなたに差し上げる義務があると感じるのです。』バブの顧客が余分の金額をもどきたいとどれほど頼んでも、バブは断固とことわられたのです。(pp.79-80)

バブはまた、殉教者の王子と呼ばれるエマム・ホセインの徳行を称える集会に熱心に参加され、そこで詠唱されている賛辞にひじょうに注意深く耳を傾けておられました。その賛辞が哀悼と祈りの個所にくると、この上ないやさしさと愛情を示されたのです。かれがふるえる唇で、祈りと賛美の言葉をささやかれるとき、かれの目から涙が雨のように流れ出しました。しかもかれの威厳は何とすばらしく、その顔は何とやさしい哀れみを表わしていたことでしょうか。」

バブが<生ける者の文字>として選び、その啓示の書に記録された弟子たちは最高の恩恵を得ることができた。かれらの名はつぎに示すとおりである。

モラ・ホセイーン・ボッシュルエイ

モハメッド・ハサン (モラ・ホセイーンの弟)

モハメッド・バゲル (モラ・ホセイーンの甥)

モラ・アリ

モラ・コダ・バクシュ・グチャニ (後にモラ・アリと呼ばれる)

モラ・ハサン・バジェスタニ

セイエド・ホセイーン・ヤズディ

ミルザ・モハメッド・ローゼ・カーン・ヤズディ

サイド・ヘンディ

モラ・マムード・コイ

モラ・ジャリル・オルミ

モラ・アーマド・イブダル・マラギ

モラ・バゲル・タブリズ

モラ・ヨセフ・アルデビリ

ミルザ・ハディ (モラ・アブドル・ヴァハブ・ガズビニの息子)

ミルザ・モハメッド・アリ・ガズビニ

タヘレ

ゴッドス(p.80)

以上の者たちのうちタヘレ以外は皆バブの面前に出て、<生ける者の文字>の地位を付与された。タヘレは、妹の夫であるモハメッド・アリがガズビンを出発するのを知って、かれに封書をあずけ、約束の御方に渡すように頼んだ。かの女はかれに、かならず旅行中にその約束の御方に会えるので、その御方につきのように伝えてくれるように頼んだ。「あなたの御顔は輝きできらめいております。そして、あなたの御姿から光が高くのぼっております」と。つづけてこう述べるようにも頼んだ。「『われは、あなたの主ではないか』との質問に、わたしどもは皆『まことに、あなたは主でありたもう』と答えます。」(p.81)

モハメッド・アリはついにバブに会うことができた。そして、バブが約束の御方であることを認め、タヘレの手紙と伝言を伝えた。バブはすぐタヘレを<生ける者の文字>の一人であると宣言した。かの女の父モラ・サレと父の兄モラ・タギは二人共高名な法学者で、イスラム教法の伝承にくわしく、テヘランやガズビンをはじめペルシャの主な都市の住民から尊敬されていた。かの女は叔父のモラ・タギの息子モラ・モハメッドと結婚していた。この叔父は、シーア派の信者たちから、第三番目の殉教者シャヒッド・タレスのようだと呼ばれていた。タヘレの家族は、バラ・サリであったが、かの女だけはカゼムに最初から傾倒した。そして、カゼムに対する賞賛を表わすために、アーマドの教えが正当だとする弁明書を書いてかれに送った。これに対し、かの女はすぐ深い愛情をこめた返事を受け取った。その書簡の初めにはつぎの言葉があった。「おお、わが目の慰めである人(ヤ、ゴルラトル・エイン)よ。わが心の喜びよ。」(pp.82-83)

それ以来、かの女はゴルラトル・エインという呼び名で知られるようになった。後日、タヘレは歴史に残るバダシュトの大会に参加し大胆な発言をした。その大会に参加した者たちは、タヘレの恐れを知らない言葉に仰天し、そのおどろくべき態度についてバブに知らせる必要があると感じた。かれらはタヘレの清純な名前を汚そうとしたのである。この非難にバブは答えた。「威力と栄光の舌がかの女をタヘレ（清純なる者）と名づけられた。これに関して何が言えようか。」この言葉は、かの女の地位を傷つけようとしていた者らを黙らした。そのとき以来、かの女は信者たちからタヘレと呼ばれるようになった。

さて、ここでバラ・サリという言葉について説明をしておきたい。アーマドとカゼムをはじめ弟子たちは、カルベラのエマム・ホセインの廟を訪問するときは、尊敬のしるしとして、その墓から離れた下座に座すのがつねであった。かれらはそこから上座に進むことはけっしてなかった。一方ほかの礼拝者でバラ・サリと呼ばれる人たちは、その廟の上座で祈りをとなえた。シェイキ派の人びとは、「真の信者のすべては、この世とつぎの世の両方に生きている」と信じているため、エマム・ホセインの廟の下座から上座へ歩を向けるのは、適切でないと思っていた。エマム・ホセインは、かれらにとって完全な信者の顕現であったからである。(p.84)

モラ・ホセインは、バブがメッカとメジナに巡礼する際、同伴者として自分が選ばれるであろうと期待していた。バブはシラズ出発を決意するとすぐモラ・ホセインを呼び、こう指示した。「われわれの交わりの時期は終わりに近づいた。あなたとの約束は今果たされた。気を引きしめて立ち上がり、わが大業をひろめるために努力せよ。現世代の人びとの墮落と邪悪を見ても気を落としてはならない。聖約の主がかならずあなたを援助されるからである。実際、その御方はあなたを慈愛深く保護し、勝利から勝利へと導いてくれるであろう。大地に恩恵の雨を降らす雲のように国中を旅し、全能者が恵み深くあなたに付与された祝福を人びとに注ぎかけよ。僧侶や法学者たちには忍耐し、神の意志に身を委ね、つぎのように声高らかに呼びかけよ。

『目覚めよ、目覚めよ。見よ、神の門は開かれ、朝の光が全人類に輝きを注いでいる。約束の御方が出現された。そのお方のために道を準備せよ。おお地上の人びとよ。あなた方を救ってくれるこの恩恵を失わないようにせよ。また、そのさん然と輝く栄光に目を閉じないようにせよ。』(p.85)

この呼びかけに応じる人がいれば、わが書簡を見せるがよい。そのおどろくべき言葉により、かれらが無思慮のぬかるみに背を向け、神の面前に飛翔することができるように。まもなく、われは巡礼の旅に出発するが、同伴者としてゴッドスを選んだ。われはあなたを残し、仮借ない敵の猛襲に直面させることにした。しかし安心するがよい。言語に絶するほどの栄光ある恩恵が、あなたに付与されるであろうから。北に向かって旅し、その途中でイスファハン、カシャン、クム、そしてテヘランを訪れよ。神の恵み深い援助により、その首都で真の主権の座に達し、最愛なる御方の館に入れるように、全能の神にこん願せよ。その都市にこそ秘密がかくされているのだ。それが明らかにされる時地上は樂園に変わるであろう。わが望みは、あなたがその恩恵にあずかり、その光輝を認めることができることなのだ。テヘランからコラサンに向かい、そこで、ふたたび聖なる呼び声をあげよ。そこからナジャフとカルベラにもどり、そこであなたの主から呼び出されるまで待つことだ。確信せよ。あなたはこの崇高な使命のために創造されており、それをすべて成就するようになっているのだ。あなたがその使命を果たすまで、不信心の世界のやりがすべてあなたに向けられても、あなたの髪の毛一本さえも傷つけることはできない。万物は神の威力ある手に捕らわれているからだ。まことに、神こそは全能者であり、すべてを従わせる者でありたもう。」(pp.85-87)

つぎにバブは、モラ・アリを面前に召し、慈愛深く励ました。バブはかれにナジャフとカルベラに直行するように指示し、激烈な試練と苦難が降りかかっても、最後まで確固不拔であるように激励した。「あなたの信念は岩のように不動でなければならない。嵐をすべて乗り越え、災難をすべて切り抜けなければならない。愚か者の非難や僧侶の誹謗に傷つけられないように、また、そのため目的から逸れないようにせよ。なぜなら、あなたは不滅の世界で準備されている天国の宴会に招かれるからだ。あなたは、この神の家を最初に離れ、神のために苦しみを受けるようになっている。もし、あなたが神の道において殺されるならば、そのとき大なる報酬とすばらしい贈り物を受けられることを思い起こすがよい。」

バブが話し終わるやいなや、モラ・アリは立ち上がり、自分の使命を果たすために出発した。シラズからしばらく行ったところで、ある若者が追いついてきた。若者は興奮で頬を紅潮させ、話しかけてもよろしいですか、ともどかしげに聞いた。その若者はアブドル・ヴァハブであった。かれは涙ぐみながらモラ・アリにこん願した。

「あなたの旅に同伴させて下さい。わたしの心はとまどいで悩まされています。わたしの歩みを真理の道に導いて下さるようお願いいたします。昨夜夢を見ました。それは、シラズの市場通りで、町の触れ役が、忠実なる者の指揮官であるエمام・アリが出現されたことを告知している夢でした。触れ役は群集にこのように呼びかけていました。『立ち上がってその御方を探しなさい。見なさい。その御方は、燃えさかる火中より、自由の宣言書を引き抜き、人びとにそれを配布されているのだ。その御方のところにいそぐがよい。その手から自由の宣言書を受け取る者は、懲罰の苦しみを受けないですむのだ。そうしない者は楽園の祝福を失うであろう。』(p.87)

その触れ役の声を聞くとすぐわたしは立ち上がり、店をそのままにしてヴァキルの市場通りを横切りました。そこで、あなたが同じ宣言書を人びとに渡しているのを見たのです。その宣言書をあなたの手から受け取ろうと近づいた各人に、あなたは二、三語ささやきました。その途端その人は仰天して逃げながらこう叫びました。『ああ悲しい。わたしはアリとその親族の祝福を失った。ああみじめだ。わたしは見捨てられ、没落した者らの一人となった。』

わたしは夢からさめて深く考え込みました、店にもどると、とつぜんあなたが通られるのが目に入ったのです。あなたはターバンをつけた同伴者と話しておられました。わたしは椅子から飛び上がり、抑制できない力に駆られて、あなたに追いつきました。びっくりしたことに、あなたは夢で見た同じ場所に立って伝承や聖句を説明しておられました。わたしは少し離れたところで、あなたからも、あなたの友人からもまったく気づかれないで見えていました。あなたが話しかけていた男性が、はげしく抗議するのも聞こえたのです。『あなたの言葉の真理、山でも支え切れないその重さを認めるよりも、地獄の火で燃やされる方がわたしには容易なことだ。』この軽蔑したような拒絶に、あなたはこう答えられました。『宇宙全体がその御方の真理を否定したとしても、その崇高な衣の清純さを汚すことはけっしてできないのだ。』あなたはその男から離れ、カゼランの門に向かわれました。そこでわたしは、後を追ってこの場所までやってきたのです。」

モラ・アリは若者の悩む心をなだめ、店にもどって日々の仕事をつづけるように説得しようとした。「あなたがわたしと交わると困難なことになりかねない。シラズにもどりなさい。そして安心しなさい。あなたは救われた人びとの中に数えられるからだ。

これほど熱烈で献身的な探求者に、神の恩恵の杯が与えられないというのは、神の正義から逸れており、これほど渴望している魂に、神の啓示の波打つ大洋が付与されないというのも、神の正義ではないのだ。」しかし、このモラ・アリの言葉はむだであった。店にもどるように忠告すればするほど、アブドル・ヴァハブの悲痛な泣き声は高まっていった。ついにモラ・アリはその望みを受け入れざるを得なくなり、神の意志に任せることにした。(pp.87-88)

アブドル・ヴァハブの父、ハジ・アブドル・マジドはよく目に涙を浮かべてつぎの話をした。「わたしは自分の犯した行為を深く後悔しています。この罪を神が許して下さいのように祈るばかりです。わたしはかつて、ファルス州知事の館で愛顧を受けていました。わたしの地位はひじょうに高く、だれもあえてわたしに反対したり、傷つけたりすることはありませんでした。だれ一人として、わたしの権威を問うことも、その特権に干渉することはありませんでした。息子のアブドル・ヴァハブが店を見捨てて町を去ったことを聞いたとたん、わたしはかれを追ってカゼランの門に向かって走り出しました。こん棒で息子を打つつもりで、そのあたりにいた人に、かれがどの道を取ったかを聞きました。ターバンをつけた男が道を横切っていたが、そのあとに息子がついて行っており、二人いっしょに町を去るようであった、と知らされたのです。これを聞いて怒りがこみ上げ、知事の館で特権をもつ地位にある自分が息子の不相応な行動を許すわけにはいかない、と思ったのです。息子の不面目な行動をやめさせるのは厳罰だけだ、と感じました。

そのあと探し回ってやっと二人を見つけました。猛烈な怒りから、モラ・アリを打ち、大変な打撲傷を負わせました。ところが、かれはおどろくほど平静にこう言ったのです。『アブドル・マジドよ、打つ手をやめよ。神があなたを見ておられるからだ。目撃者は神であるが、あなたの息子の行動責任はわたしにはない。あなたがわたしに加える苦痛は気にならないのだ。なぜなら、わたしは自分が選んだ道に降りかかる一層はげしい苦難に耐えうるように準備しているからだ。あなたが加える危害は、将来、わたしに降りかかるようになっていくものに比べれば、大海の一滴のようなものだ。このことをぜひ言っておきたいが、あなたはわたしより長生きし、わたしの潔白を認めるようになるだろう。そのとき、あなたは自責の念に苦しみ、悲痛な思いをするであろう。』しかし、わたしはその言葉をあざけり、その訴えを無視して、疲れ果てるまでかれを打ちつづけてきました。かれは黙って勇敢にもこのひどい懲罰に耐えました。そのあと、わたしは息子に後についてくるように命じ、モラ・アリをそこに放ったままその

場を去りました。(pp.88-89)

シラズにもどる途中で、息子は自分の見た夢を語りました。それを聞いて後悔の念が少しずつこみ上げてきました。モラ・アリの潔白がわたしの眼前で立証されたからです。その後、かれにあたえた残酷な行為を思い出し、わたしの魂は長い間苦しんだのです。その痛恨は住居をシラズからバグダッドに移さざるを得なくなったときまで、心から消え去ることはありませんでした。その後、バグダッドからカゼマインに移り、そこで息子のアブドル・ヴァハブは仕事を始めました。そのころ、かれの若々しい顔は、何とも表現できない神秘に包まれたようになっていました。ある秘密をわたしにかくしているに違いないと感じました。かれの生活が変わってしまったからです。一八五〇から五一年に、バハオラがイラクに旅され、カゼマインを訪れたとき、息子はすぐその魅力に惹かれ、永遠の献身を誓ったのです。数年後、息子がテヘランで殉教したとき、バハオラはバグダッドに追放されていましたが、かぎりない愛情と慈悲をこめて、わたしを無思慮の眠りから覚ましてくれました。そして、かれ自ら新しい時代の原則をわたしに教え、わたしが犯した残酷な行為の汚れを、神の許しの水で洗い流して下さったのです。」

この挿話は、バブの宣言後に弟子にふりかかった最初の苦難の記録である。モラ・アリは自分の経験から、師の約束が実現される道は、ひじょうにけわしく、困難であることを知っていた。かれはすべてを神の意志に任せ、この大業のために生命の血を流す決意でナジャフまで旅した。イスラム教シーア派の名高い高僧であるモハメッド・ハサンと、その著名な弟子たちを前にして、モラ・アリは恐れることなく皆が熱烈に待望してきたバブ、すなわち門である御方が出現されたことを宣言した。「バブの証拠はその言葉であります。その証言は、イスラム教徒がイスラム教の真理を立証するときのものと同じです。モハメッドの子孫で、しかも教育を受けていないペルシャ人の若者のペンから、四十八時間のうちに、神の預言者であるモハメッドが二十三年間に啓示したコーランの全巻に匹敵する長さの祈り、説話、科学的論文が流れ出したのであります。」(pp.89-90)

この高慢で、狂信的な高僧モハメッド・ハサンは、暗黒と偏見の時代に新しく誕生した啓示、その生命力をあたえる教えを歓迎するどころか、即座にモラ・アリを異端者と宣告し、集会から追い出した。かれの弟子たちも師の非難を支持した。モラ・アリが敬虔で、誠実な人物で学識がそなわっていることをすでに認めていたシェイキ派

の者らたちでさえ、ためらうことなくかれを非難したのである。この高僧の弟子たちは、敵とさえ手を組んで、言うに言えない侮辱をモラ・アリに加えた。ついにかれらは、モラ・アリを、イスラム教を破壊し、預言者を中傷し、悪影響を広め、イスラム教に恥辱をもたらす者として死刑に値すると断定した。そして、かれの両手にくさりをつけてトルコ帝国の官吏に渡したのである。かれは官吏の護送の下にバグダッドに連行され、知事の命令で投獄された。

アタルという姓のハジ・ハシムは、イスラム教の聖典にくわしい有名な商人であった。かれはモラ・アリの逮捕についてつぎのように語った。「ある日、わたしが政府の建物にいたとき、モラ・アリが町の要人や政府の官吏が集まっているところへ呼び出されました。かれは異端者であり、イスラム教の法律を捨てる者であり、その儀式や習慣を否認する者であるとして告発されたのです。かれが犯したとされる違反や非行が数え上げられた後、町のイスラム教法の主な解釈者であるモフティ（宗教解釈官）がモラ・アリの方を向いて言いました。『おまえは神の敵だ。』

わたしはモフティの隣の席に座っていたので、かれの耳にこうささやきました。『あなたはこの不運な人についてまだ知っておられない。どうしてかれに対してそんな言葉を用いられるのですか。そのような言葉を使われると、かれに反対する民衆の怒りを刺激するということがおわかりにならないのですか。あなたがすべきことは、民衆の根拠のない非難を無視して、あなた自らかれに質問し、イスラム教で認められている正義の基準にしたがって判断することです。』

モフティはひどく不機嫌になって席から立ち上がり、その集会から去って行きました。モラ・アリはふたたび投獄されました。数日後、かれの釈放を願いながら、ある人にかれの行方を聞きました。そこでわたしが知り得たことは、その日の夜、コンスタンチノーブルに追放されたことだけでした。そのあとかれがどうなったかを調査しましたが、行方は不明のままでした。コンスタンチノーブルに行く途中で、病に倒れ死亡したと信じる人もいましたし、殉教したと主張した人もいました。」どのような最後を迎えたとしても、モラ・アリはその生涯と死によって、神の新しい信教の道において苦難を受けた最初の者、聖なる犠牲の祭壇に命をささげた最初の者として不滅の栄誉を勝ち取ったのである。(pp.91-92)

さて、話をもとにもどそう。バブはモラ・アリに任務をあたえて送りだしたあと、残りの生ける者の文字と呼ばれる弟子たちを呼び出し、各人に特定の指示と任務をあたえた。そして、つぎのような別れの言葉で呼びかけた。「おお、わが愛する友らよ。皆はこの偉大な時代に神の御名を伝える者たちである。皆は神の神秘を受け入れる宝庫として選ばれたのだ。各人神の特性を表わし、行動と言葉で神の正義と威力と栄光のしるしを示さなければならない。身体の器官のすべてが、崇高な目的、高潔な生き方、固い信念、高尚な献身を証言しなければならないのだ。なぜなら、はっきり述べるが、この時代こそは、神が聖典（コーラン）の中で予言された日であるからである。『その日、われは、かれらの口を封じるであろう。しかも、かれらの手はわれに話しかけ、足はその行動を証言するであろう。』

イエスが、弟子たちを、神の大業の普及に送り出したときにあたえた言葉を熟考せよ。イエスはつぎのように、弟子たちに立ち上がり、その使命を果たすように命じられた。『皆は真っ暗な夜、山頂にともされた火のようなものだ。人びとの眼前でその光を輝かせよ。地上の人びとが皆を通して、天の御父を認め、御父に近づきたいと思うほどに、清らかな性格をもち、世俗のものへの愛着を絶っていなければならない。天の御父こそは、清純と恩恵の源である御方であるが、だれも天の御父を見たことがないのだ。ゆえに、神の精神的な子供である皆は、その行動で神の美德を示し、その栄光を証言しなければならない。皆は地の塩であるが、もし、塩のききめがなくなれば、何によってその味が取りもどされようか。神の大業を教え広めるために、どの町を訪れても、その町の人びとから肉や報酬を一切期待してはならない。それほどにも世俗への愛着を絶っていなければならないのだ。いやそれどころか、町を出るとき足からさえもちりを払い落とすべきなのである。その町に清らかで汚れない姿で入り、そこから出るときも同様でなければならない。はっきりと告げるが、天の御父はつねに皆と共にあり、また、皆を見守っておられるのだ。もし、神に忠実であれば、神はかならず地上のすべての宝物を皆の手に渡し、皆を世界中の王や支配者をはるかに超えるほど高めて下さるであろう。』 (pp.92-93)

おお、わが生ける者の文字たちよ。まことに、われは誓うが、今日はいにしへの使徒たちの時代をはるかにしのぐ崇高な時代である。それどころか、その違いは計り知れないのだ。皆は約束された神の日の夜明けを目撃する証人であり、神の啓示の神秘の杯にあずかる者なのである。気を引きしめて準備し、神の書に著わされた言葉を心に銘記せよ。『見よ、主なる神が到来された。その面前に天使の一団が整列している。』

世俗的な欲望から心を清め、天使の美德で飾らなければならない。行動をもって、神の言葉の真理を実証するように努力せよ。そして『後を振り返る』ことをしないように気をつけよ。振り返れば神は『皆を他の人びとと取り替えられるであろう』からである。かれらは、『皆と異なる人たちで』、神の王国を皆の手から取り上げるであろう。無為な崇拜で十分であった時代はもう終わった。純粋な動機としみ一つない清らかな行動だけが、最も高遠なる御方の王座に昇り、受け入れられる時が到来したのだ。『立派な言葉は神にまでとどき、正義ある行為は神の面前に引き上げられるであろう。』皆の身分は低い、神は聖典でこのように述べられている。『われは、その地で低い身分で育った者に好意を示し、かれらを人びとの精神的指導者となし、わが継承者となそう。』

皆はこの地位に達するように召されたのである。もし、皆が立ちあがり、この世のあらゆる欲望を足で踏みつけ、『神が語られるまで語らず、その命にしたがう榮譽あるしもべ』となるように努力するならば、その地位に達することができよう。皆はこの原点（バブの称号の一つ）、この啓示の源泉から湧き出た最初の泉から生み出された最初の文字である。世俗のもつれ、この世の愛情、はかない現世の営みが、皆の心に流れる恩寵の清らかさを汚さず、甘さを苦みに変えないように神にたん願せよ。われは皆を偉大なる日の到来のために準備しているのである。今ここで指示をあたえているわれが、来世、神の座の面前で皆の行為に満足し、その成果を称えることができるように、最善をつくして努力せよ。今後出現する偉大な日の秘密は、今かくされている。その秘密をここで明かすことも、計り知ることもできない。その日に生まれた赤子は、今の世でもっとも賢く、もっとも尊敬されている人物をはるかにしのぐ能力をもち、その日のもっとも身分が低く、無学な者も、現在最高の学識をそなえた聖職者よりも、はるかにすぐれた理解力をもつであろう。(pp.93-94)

この地の果てから果てまで隈なく散り、不動の足取りと、清められた心をもって、その御方の到来の準備をせよ。自分の弱さやもろさを気にかけることなく、不屈なる全能者、主なる神の力に目を据えなければならない。神はその昔、アブラハムをして、その無力さにもかかわらずニムロデの軍勢に勝利を得させたではないか。また、つね一本しかなかったモーゼに、ファラオとその軍勢に打ち勝つ力をあたえられたではないか。神はまた、人の目に貧しく、身分が低く映ったイエスに、ユダヤ人の全勢力をしのぐ力をもたされたではないか。さらに、野蛮で戦闘的なアラビアの部族を、預言者モハメッドの聖なる規律に従う者らに変えられたではないか。神の御名のもとに立

ち上がり、神に全信頼を置き、最終的な勝利を確信せよ。」

バブは以上の言葉で弟子たちの信念を強め、使命遂行の旅に送り出した。各人にそれぞれの出身地を活動の場として割り当て、バブの名前と身元にははっきりと言及しないように指示した。また、約束の御方への聖なる門が開かれたこと、その証拠は否定できないこと、その証言は完全であることを伝えるように指示した。その御方を信じる者は、神から下された預言者をすべて信じる者であり、否定する者は神の聖者と神から選ばれた者をすべて否定する者であることを説くように命じた。以上の指示をあたえたあと、バブは弟子たちを自分の面前から去らせ、神の保護に任せた。この生ける者の文字と呼ばれる弟子たちのうち、最初の文字モラ・ホセインと最後の文字ゴッドスは、シラズのバブのもとに残った。あとの十四人はおのおの委任された任務を全部果たす決心で、夜明け時にシラズを出発した。(pp.94-96)

弟子たちが出発したあと、バブはモラ・ホセインに話しかけた。「ヘジャーズへのわが巡礼に同伴者として選ばれなかったことを嘆いてはならない。その代わりに、ヘジャーズもシラズも匹敵できないほど神聖な秘密がかくされている町にあなたを行かせるつもりだ。わが望みは、あなたが神の援助により強情者の目にかかっているヴェールを取り除き、悪意者の心を清めることである。途中で、イスファハン、カシャン、テヘラン、そしてコラサンを訪れよ。そこからイラクに行き、そこで、あなたの主の命令を待つがよい。主はあなたを見守り、御心のままあなたを導いて下さるからだ。われはゴッドスとエチオピア人の召使いを伴って、巡礼のためヘジャーズに向かうつもりである。そこで、ヘジャーズに向けて出帆しようとしているファルスからの巡礼の一団に合流し、メッカとメジナを訪れ、神がわれに委任された使命を果たすつもりである。もし、神の意志であれば、クフェを通ってもどるが、そこであなたに会いたいと思っている。それが定めでなければ、シラズでわれに会ってくれるように願う。見えざる王国の軍勢があなたの努力を支え、強めてくれることを確信せよ。今や、強い力があなたにあたえられ、神の選ばれた天使たちが、あなたの周りをまわっているのだ。その全能の腕があなたを取り巻き、その聖なる精神は、あなたの歩みをかならず導いてくれるであろう。あなたを愛する者は神を愛する者である。あなたに反対する者は神に反対する者である。神はあなたを助ける者を助けられるであろう。そして、あなたを拒絶する者を拒絶されるであろう。」(pp.96)

第四章 モラ・ホセインのテヘランへの旅

モラ・ホセインは、バブの崇高な言葉を耳に残して、危険な旅に出発した。その旅の途中、あらゆる場所で、すべての階級の人びとに、敬愛する師から委任されたメッセージを恐れずに伝えた。イスファハンに到着後はニム・アヴァルドの神学校に落ち着いた。以前、カゼムの使者として、高名なイスラム法学者を訪れたことがあるので、そのことを知っていた人びとが、モラ・ホセインの周りに集まってきた。この法学者はすでにこの世を去り、息子が後を継いでいた。息子はナジャフからもどった後すぐ父親の地位についたのである。

エブラヒム・カルバシも重態におちいり、死に直面していた。モハメッド・バゲルの死で、弟子たちは師から左右されることがなくなった。そして、モラ・ホセインの聞き慣れない教義に警戒心を強めはじめていた。かれらは亡き師モハメッド・バゲルの息子アサドラに、モラ・ホセインに対するきびしい非難を告げ、つぎのように不満を表わした。

「モラ・ホセインは以前の訪問の際、高名なあなたの父上をアーマドの大業の支持者に引き入れました。師の弟子たちは無力で、かれに反対する者はいないのです。モラ・ホセインは今、(カゼムより)一層おそるべき敵対者となり、その教えを大変な熱意と気力をもって弁じています。かれは、自分が信じている大業をもたらした人物は、聖なる書を著わし、それは神から靈感を受けたものであると執拗に主張しています。また、その書はコーランの語調にそっくりであるとも断言しています。さらに、この町の住民に『もし、皆さんが真理の愛好者ならば、これと同様なものを生み出しなさい』という言葉で挑戦してきたのです。イスファハンの全住民がその大業を受け入れる日が迫ってきています。」(pp.97-98)

アサドラはしばらくかれらの不満にあいまいに答えていたが、ついに、はっきりとした返事をせざるを得なくなった。「これ以上わたしに何が言えようか。モラ・ホセインは雄弁かつ説得力のある論証で、わたしの父ほどの高名な人物を黙らせたことを皆認めているのではないか。功績も知識も父よりはるかに劣っているわたしが、父がすでに是認したことに対してどうやって挑戦できようか。各人めいめいモラ・ホセインの主張を冷静に調べてもらおう。それに満足できれば、それはよいことだ。もしそう

でなければ、沈黙を守ってもらい、われわれの信教（イスラム教）の名声を傷つけるような危険を冒さないようにしてもらおう。」

アサドラは動かせないとわかった弟子たちは、モハメッド・エブラヒムにこの問題を持ち込み、さわがしく異議を申し立てた。「われわれに災いが襲ってきました。敵が立ち上がって聖なるイスラム教を分裂しようとしています。」そして、モラ・ホセインが説いている考えはあまりにも挑戦的だと、大げさで、あくどい言葉で非難した。これにモハメッド・エブラヒムは答えた。「黙りなさい。モラ・ホセインはだれにもだまされるような人物ではない。また、危険な教えの犠牲になるような人でもない。もし皆の主張が本当で、モラ・ホセインが実際新しい宗教を信じているのであれば、まずその教えの内容を冷静に調べるのが皆の義務ではないのか。前もって注意深く調べないで非難するのは止めた方がよい。健康と気力が回復し、事情が許すならば、わたし自身この件を調査し真実を確かめるつもりだ。」

アサドラの弟子たちは、このモハメッド・エブラヒムのきびしい譴責に当惑してしまった。あわてたかれらは、市（イスファハン）の知事マヌチュール・カーンに訴えが、この思慮分別をそなえた賢明な知事は、この問題はイスラム学者の権限であると述べて、これに関わることを拒否した。さらに、不和の種をまくことを避け、使者（モラ・ホセイン）の平穏を乱すことを止めるように警告した。知事の痛烈な言葉は、害をもたらそうと企んでいた者たちの望みをくじいた。こうしてモラ・ホセインは敵の陰謀から解放され、しばらくの間自由に目的を追求することができた。(pp.98-99)

イスファハン市で最初にバブの大業を受け入れたのは小麦のふるい手であった。かれは、バブのメッセージを耳にするとすぐ何のためらいもなく、それを受け入れた。そして、モラ・ホセインに献身的に仕え、かれとの親密な交際を通して新しい啓示の熱烈な支持者となった。数年後、シェイキ・タバルシの砦の包囲攻撃について、魂をゆるがされるような話を聞き、信教の擁護に立ち上がったバブの勇敢な弟子たちと運命を共にしたいという衝動に駆られた。そして、即座に手にふるいをもって立ち上がり、交戦の場に向かい、興奮状態のままイスファハンの市場を走りながら通って行った。それを見た友人たちが「どうしてそんなにあわただしく出発するのか」と聞いたとき、かれはこう答えた。「シェイキ・タバルシの砦を守っている榮譽ある一団に加わるのだ。このふるいで、通りすぎる町の人を皆、ふるいにかけるつもりだ。わたしが受け入れた大業を信じる人が見つければ、いっしょに殉教の場に急ぐことを請うつも

りだ。」

バブは、この若者の献身の熱烈さについてペルシャ語のバヤン書につぎのように書いている。「かのすぐれた都市イスファハンの特徴は、シーア派の住民が宗教的熱情をもち、聖職者の学識が深く、また、階級を問わず全住民がサヘオザマン（時代の主）の出現を今か今かと待ち望んでいることである。そして、都市のいたるところに宗教機関が設立されてきた。ところが、神の使者が実際現われたとき、学識の宝庫であり、宗教の神秘を解説できると自認していた者らは、その教えを拒否した。しかし、この学問の中心に住む住民のうちただ一人、小麦のふるい手だけが真理を認め、神の美德という衣を与えられたのである。」(p.99)

イスファハンのセイエド（モハメッドの子孫）のうちアリ・ナリ、かれの弟のミルザ・ハディ、そのほかモハメッド・リダがバブの大業を認めた。アリ・ナリの娘はその後、最大の枝（アブドル・バハ）と結婚した。以前モカダスとして知られていたサディクは、後にエスマラホル・アスタグという称号をバハオラからあたえられたが、カゼムの指示にしたがって、それまでの五年間イスファハンに住み、新しい啓示の出現の準備をしていた。かれもまた、バブの教えを最初に認めた弟子の一人であった。かれはモラ・ホセインのイスファハン到着を知るとすぐ会いに行った。その最初の会見は、アリ・ナリ宅で夜半に行われたが、その模様をつぎのように語った。

「わたしはモラ・ホセインに、約束の顕示者であると宣言する御方の名前を教えてくださいるように頼みました。『その名前を問うことも、それをもらすことも禁じられている』という答えが返ってきました。そこでわたしは聞きました。『生ける者の文字がしたように、独自で、全慈悲者の恩恵を求め、祈りを通してそのお方を発見できるのでしょうか。』かれはこう答えました。『神の恩恵のとびらは、神をもとめる人の前で閉ざされることは絶対はない。』わたしはすぐかれの下を離れ、家の主人に個室を使わせてもらうように頼みました。だれにもじゃまされず、一人で神と交信するためでした。瞑想中にとつぜん、カルベラ滞在中にしばしば目にした若者の顔が出てきました。その若者はエマム・ホセインの廟の入り口で、涙して祈るような姿で立っていました。その同じ顔がわたしの眼前にふたたび現われたのです。幻の中で、その同じ顔、同じ容貌を見たのです。そのよろこびにあふれた表情を描写することはできません。その顔はこちらをじっと見てほほ笑みました。かれの足元に身を投げ出そうと近づき、地面に顔を向けたとき、そのかがやく姿はわたしの眼前からふっと消えたのです。この上

ない喜悦感に満たされたわたしはモラ・ホセインのところに走って行きました。かれはうれしそうにわたしを迎え入れ、わたしがついに望みの目標なる御方を見つけたことをよろこんでくれたのです。しかし、そのよろこびの気持ちを押さえるように命じ、こう警告しました。

「あなたが見た幻をだれにも明かしてはならない。その時間はまだ到来していないからだ。あなたはイスファハンで忍耐強く待ったのでその報酬を得たのだ。すぐケルマーンに行き、そこでカリム・カーンに、この教えを伝えなさい。つぎにシラズに行き、無慮な住民の目をさます努力をなさい。シラズであなたと会おう。そこで最愛なる御方と再会し、その祝福を共にしようではないか。」(pp.100-101)

モラ・ホセインはイスファハンからカシャンに向かった。カシャンで最初に忠実なる信者たちの一団に加わったのはジャニで、称号はパルパという有名な商人であった。モラ・ホセインの友人の中には、名高い僧侶のアブドル・バキがいた。この僧侶はカシャンの住民でシェイキ派共同体に属していた。ナジャフとカルビラに滞在中、モラ・ホセインと親しく交際してバブの教えを聞いたが、そのために僧侶の地位と指導的な立場を犠牲にすることはできないと感じた。

モラ・ホセインはクムに到着してバブの教えを伝えようとしたが、その町の住民はだれも耳をかそうとしなかった。かれがそこで蒔いた種は、バハオラがバグダッドに追放されるまで芽を出さなかったのである。その時期になってクム出身のミルザ・ムサが教えを受け入れ、バグダッドに旅してバハオラに会うことができた。その後かれはバハオラの道で殉教の盃を飲み干した。(p.101)

モラ・ホセインはつぎに、クムから直接テヘランに向かった。テヘラン滞在中は、ある神学校の一室に住んだ。モハメッド・クラサニはシェイキ派の共同体の指導者であり、その神学校の講師をしていた。モラ・ホセインはかれに神の教えを受け入れるように誘ったが、かれはそれに応ぜず、つぎのように述べた。「あなたに期待していたことは、師カゼムの亡き後、世に埋もれた存在になったシェイキ派共同体を救うために尽力してくれることであった。ところがあなたはこの期待を裏切り、破壊的な教義をひろめておられる。それをつづけられるならば、やがて、この都市に残っているシェイキ派の信者は全滅してしまうであろう。」モラ・ホセインは、自分はテヘランに長

居するつもりはないこと、また、アーマドとカゼムが説いた教えを卑しめたり、抑圧したりする意図も一切ないと説明して、かれを安心させた。

テヘラン滞在中、モラ・ホセインは毎日早朝に部屋を出、日没一時間後にもどってくるのをつねとした。もどると一人で静かに自室に入り、翌日まで閉じこもった。バハオラの実弟ミルザ・ムサ（アガ・カリム）は、わたし（著者）に、つぎのように語った。（p.102-103）「わたしは、マザンデラン州のヌール出身のモハメッド・モアレムからつぎのような話を聞きました。かれはアーマドとカゼムの熱烈な賞賛者でした。『当時、わたしは、モハメッド・クラサニから好意をもたれていた弟子の一人で、かれが教えていた学校の寄宿舎に住んでいました。わたしの部屋とかれの部屋は隣り合っており、親密に交際できました。ある日偶然にも、かれがモラ・ホセインと討議しているのを全部耳にしました。そのとき、この見知らぬ若者の熱意、流暢な言葉と学識に深く心を動かされましたが、一方、モハメッド・クラサニのあいまいな返事、尊大さ、ごう慢な態度におどろかされました。その日、この若者の魅力に強く惹かれると同時に、師の見苦しい態度に憤慨したのです。しかし、わたしはその気持ちをかくし、かれとモラ・ホセインとの討議には無関心をよそおいました。モラ・ホセインにぜひとも会いたいと思い、前もって知らせずに真夜中に訪ねたのです。戸をたたいたところ、ランプのそばに座っていたかれは、わたしを愛情深く迎え入れ、ひじょうに丁寧に、親切に語りかけました。そこで、胸の中を打ち明けたのですが、その間、わたしは感動を抑えきれず、目から涙があふれ出てきました。かれはつぎのように言いました。

『わたしが、なぜこの場所を住居として選んだかが今わかりました。あなたの師はこの聖なる教えを拒絶し、その創始者を軽蔑されました。わたしの望みは、かれの弟子がこの真理を認めることです。お名前は？ 出身地は？』わたしは答えました。『わたしの名はモラ・モハメッドで、称号はモアレムです。故郷はマザンデラン州のヌールです。』モラ・ホセインはさらにたずねました。『人格、魅力、芸術と学識で高名であった故ミルザ・ボゾルグ・ヌーリの家族の中で、この家系の高貴な伝統を維持できることを証明した人が現在いるかどうか教えてもらいたいのです。』

わたしは答えました。『今生存している息子たちのうち、父上と同じ特徴をもち、際立ってすぐれた人が一人います。その方は、高潔な生活、高度の学識、慈愛深さと寛大さで、気高い父親にふさわしい息子であることを証明しています。』かれは聞きまし

た。『その方の職業は？』『意気消沈している人をなぐさめ、飢えた人に食べ物を与えることです』とわたしは答えました。『その方の地位と階級は？』『貧しい人と見知らぬ人と親しくなるほかは何の地位もありません。』『その方の名前は？』『ホセイン・アリです。』『その方の父親の書体のうち、どの書体で父親よりすぐれていますか？』『かれの愛好する書体は、シーカステ・ナスタリグです。』『その方は、どのように時間を過ごされますか？』『森を散歩し、田園の美しさを楽しめます。』『年令は？』『28才です。』(pp.104-105)

モラ・ホセインの熱心な質問と、わたしの返事をよろこんで聞く様子に大変おどろきました。かれはこちらを向き、満足感とよろこびで顔をかがやかせながら、もう一度わたしに聞きました。『あなたは、その方とよく会われますか？』『たびたび訪問します』とわたしは返事しました。『では、この預かり物をかれの手に渡してもらえますか？』『もちろん、確かにそういたしましょう。』そこで、かれは布に包んだ巻物をわたしに渡し、翌日の夜明け時にその方（バハオラ）に渡すように頼んだのです。

『もし、その方が返事を下されば、それをわたしに知らせて下さい』と、かれはつけ加えました。そこでその巻物を受け取り、翌日の夜明けにこの要請を果たすために出かけました。バハオラの家近づくと、バハオラの実弟ミルザ・ムサが門のところに立っていましたので、訪問の目的を知らせました。かれは家に入った後、まもなくして現われ、わたしをバハオラの面前に案内しました。ミルザ・ムサに巻物を渡すと、かれはそれをバハオラの前に置きました。バハオラはわれわれ二人に座るように命じました。バハオラは巻き物をひろげ、その内容に目を通し、何節かを声高らかに読みはじめました。わたしはその声の旋律的な美しさにわれを忘れてじっと座っていました。バハオラは巻物の一ページを読み終えると弟の方を向いて、こう述べました。『ムサ、君はどう思うか？ 実際コーランが神から下されたものであることを信じながら、この魂を動かす言葉が、コーランと同じ創造的な力をもつことを一瞬たりとも疑う者は、確かに判断をあやまった者であり、正義の道から遠くそれた者なのだ。』(p.106)

バハオラはそれ以上語りませんでした。そして、わたしを面前から去らせるとき、ロシアの砂糖と紅茶をモラ・ホセインに贈り物として渡し、感謝と慈愛を伝えるようにわたしに託しました。わたしは、よろこびで一杯になって立ち上がり、モラ・ホセインのところへ急いでもどり、バハオラからの贈り物を渡し、その伝言を伝えました。それを受けたモラ・ホセインのよろこびようは大変なものでした。その強烈な感動を

言い表すことはできません。かれは座を立ち、頭を下げて、その贈り物を受け取り、それにうやうやしく接吻しました。それから、わたしを抱擁して目に接吻し、つぎのように述べました。『わが心から愛する友よ。あなたが、わたしの心によるこびをもたらしたように、神があなたに永遠のよろこびをあたえ、あなたの心を不滅の喜悦感で満たされるように祈るばかりだ。』

わたしは、モラ・ホセインのその態度にびっくりしました。この二人（バハオラとモラ・ホセイ）を結び合わせる絆とは一体何であろうかと心の中で考えました。かれらの心にそれほどの熱烈な友情の炎を点けたのは何であろうか。モラ・ホセイの目には、王族の盛儀盛宴はまったく取るに足らないものと映るのに、なぜバハオラからのわずかの贈り物を見て、これほどのよろこびを示すのであろうか。これはひじょうにふしぎに思われましたが、その秘密を知ることはできませんでした。

数日後、モラ・ホセイはコラスンに向かいました。別れを告げるとき、わたしにこう言いました。『あなたが見聞きしたことをだれにも知らせはならない。このことは、秘密としてあなたの胸にしまっておくように願う。かれの名前（バハオラ）を明かしてはならない。なぜなら、かれの地位をねたむ者らがかれを傷つけようとするからだ。瞑想の時間に、全能の神がバハオラを保護され、かれを通して踏みにじられた人びとが高められ、貧しい人びとが富み、没落した人びとが救われるように祈られるように願う。物事の秘密は、われわれの目からかくされている。われわれの義務は、新しい時代の呼び声を上げ、すべての人びとにこの神の教えを宣言することである。この都市の多くの人がこの道において血を流すであろう。その血は神の木の水となり、その木を成長させ、全人類の上にその庇護の影を投げかけるようになる。』

(pp.107-108)

第五章 バハオラのマザンデランへの旅

バハオラはバブの教えを広めるために旅に出た。その最初の目的地はマザンデラン州のヌールにある先祖伝来の故郷であった。かれはまずタコールの村に向かった。そこは父の個人所有の土地で、その景観のいい場所に、豪華に飾られた広大な邸宅があった。ある日、わたしはバハオラ自らつぎのように語られるのを聞いた。

「大臣であった亡きわが父上は、国民の間でひじょうにうらやましい地位をもっていた。その膨大な富、高貴な家系、芸術の手腕、名声と高い地位は、かれを知る人のすべてから賞賛されていた。ヌールからテヘランまでひろがる親族は、二十年以上の間、だれ一人として生活に困ったり、傷害を受けたり、病気になることはなかった。このように、かれらは長期間つづけて富と幸せを享受したのである。しかしとつぜん、一連の災難が襲ってきて、父の物的繁栄の土台ははげしくゆすぶられ、その繁栄と栄光はくずれてしまった。最初の損失は大洪水で、それはマザンデランの山から起こり、その強大な勢いはタコールの村を押し流し、その村の要塞の上方にあった父の邸宅の半分を破壊した。強固な土台で知られていた邸宅の最上の部分は、はげしい奔流で完全に流されてしまった。貴重な家具類はこわされ、精巧な装飾品も修復できないほど破壊されてしまった。その後まもなくして、大臣であった父はその要職からも解職された。これは、嫉妬深いかれの敵の執拗な攻撃の結果であった。このとつぜんの運命の変化にもかかわらず、父は威厳と平静を保ち、限られた資力の範囲内で慈善行為をつづけた。不実な同僚に対しても同じ礼儀と親切さを示しつづけた。同胞に対して態度を変えないのは、かれの特徴でもあった。このように、死の直前まで心に重くのしかかってきた逆境に、見事な不屈の精神で取り組んだのである。」(pp.109-110)

バハオラはバブの宣言前にヌール地方を訪れていた。当時、法学者のモハメッド・タギの権威と影響力は頂点にあった。かれの地位はひじょうに高く、その教えを受けた者は、イスラム教の教えと法律を解説できる権限をもつと自任したほどであった。あるとき、この高僧は二百人以上の弟子たちの前で、エマムが語ったと伝えられている不明瞭な句についてこまかく論じていた。そこへバハオラが仲間数人をともなって入ってき、しばらく足をとめてその講演に耳を傾けた。高僧は弟子たちに、イスラム教の形而上学面に関する難解な理論を説明できる者はいないか、と聞いた。だれもその説明はできないと告白したとき、バハオラは説得力のある言葉で、簡潔にその理論を明確に解説した。高僧は自分の弟子たちの無能さをきわめて不愉快に思い、腹立た

しく叫ぶように言った。

「わたしは何年も皆を指導し、皆の心にイスラム教の深遠な真理と高尚な原理を教え込もうと忍耐強く努力してきた。皆の長年の根気強い研究にもかかわらず、羊皮の帽子をかぶった（僧侶ではない）この若者の方が皆よりすぐれていることを証明した。しかも、この若者は学問もなく、皆の学識にもまったく通じていないのだ。」

バハオラがヌール地方から去った後、ある日この法学者は最近見た夢を二つ、弟子たちに語った。夢で見た出来事が、きわめて意義深いものであると思ったからである。「最初の夢でわたしは大群衆の真ん中に立っていた。その群衆は皆、ある家を指し、サヘオザマン（時代の主）が住んでおられるところだ、と口々に言っていた。わたしはよろこびで狂乱したようになって、その御方に会うためにいそいだ。その家に着くと、大変おどろいたことに、中に入ることを断られたのである。『約束のガエム（バブを指す）は、ほかの聖なる御方と内密の話をされておりますので、近づくことはきびしく禁じられています』と言われたのである。戸口に立っている守衛から、その聖なる御方はバハオラであることを知った。」(pp.111-112)

法学者はつづけてこう語った。「二番目の夢で、わたしはまわりに沢山の箱があるところにいた。どの箱もバハオラの所有物であることが明記されていた。開けてみると、箱いっぱいの本が詰められていた。それらの本に書かれている文字はすべて、この上なく美しい宝石で飾られ、まぶしく輝いていた。その輝きに圧倒されてとつぜん夢からさめた。」(p.112)

西暦一八四四年、バハオラがヌールに到着したとき、以前の訪問の際には強大な権力をふるっていた法学者はこの世を去っていた。多数いた弟子たちの数も減り、皆気力をなくしていた。かれらは後継者モラ・モハメッドの指導下で、今は亡き指導者の伝統を守ろうと努めていた。バハオラが最初訪問したときのかれらの熱意と、落ちぶれた共同体に残っている者らをおおっている陰気さはきわめて対照的であった。近隣に住む多くの役人や名士がバハオラを訪れ、深い尊敬をもって歓迎の意を表した。バハオラが社会的に高い地位にあることを知っているかれらは、国王の生活、大臣たちの活動、政府の業務などについて最近のニュースを熱心に聞き出そうとした。しかし、バハオラはそういうことにはほとんど関心はないことを明らかにした。むしろ雄弁な

説得力で、新しく啓示された教えを弁じ、その啓示が国にもたらす計り知れない利益に、かれらの注意を向けようとした。これを聞いて、かれらは、宗教とは無関係の若者が、主にイスラム教の聖職者に関わる事柄に示す強い関心におどろいた。そして、バハオラのしっかりとした議論に挑戦することも、その教えを見くびることもできないと感じ、かえってその高尚な熱意と深遠な思想を賞賛した。またその控えめな態度にも深く感銘した。

バハオラの叔父以外は、だれもかれの見解に挑戦する者はいなかった。この叔父アジズはバハオラの教えに反対し、その真理に非難をあげた。それを聞いた者たちは、この反対者を沈黙させ、傷つけようとした。そのとき、バハオラは反対者のために仲裁に入り、かれを神の手に任せるように忠告した。警戒心を強めた反対者アジズは、ヌールの法学者モラ・モハメッドのところに行き、即刻援助の手を差し伸べてくれるように訴えた。

「神の預言者の代官様、イスラム教にふりかかったことを見て下さい。僧侶でもない若者が貴族の衣をまとってヌールに来、正統派の拠点に侵入し、聖なるイスラム教を分裂させようとしています。この猛襲を食い止めて下さい。バハオラと会った者はすべて、すぐその魔法にかかってしまい、その威力ある言葉に心をうばわれてしまいます。かれは魔法使いなのか、それとも紅茶に不思議な物質を混ぜ、それを人に飲ませて魅力のとりこにしてしまうのかどうかも、わたしにはわかりません。」法学者は自分にもはっきり理解できなかったが、そのような考えが馬鹿げたことであることを認め、おどけてこう聞いた。(pp.112-113)

「あなたも、その紅茶を飲んだのではないか？ また、かれが仲間たちに話すのを聞いたのではないのか？」「自分もそうしましたが、あなたが親切に守ってくれましたので、その魔力的な威力に影響されずにすんだのです」とかれは答えた。法学者は住民を奮起させてバハオラに反対させることも、この強力な論敵（バハオラ）が恐れを知らずに広めている思想と直接戦うともできないことを知り、つぎのような一文を書いて気を休めた。「アジズよ。恐れるなかれ。だれもあなたを悩ますことはない。」法学者はこの一文を書く際、文法的な間違いをおかしたため、文の意図が曲げられたものになった。そこで、それを読んだタコール村の名士たちは憤慨し、法学者と受取人であるアジズの二人を中傷した。

バハオラからバブの教えの解説を聞いた者は、その真剣さに深く感銘し、すぐそれをヌールの人びとの間に広めるために立ち上がった。その高名な推進者（バハオラ）の美德を称えるためでもあった。一方、弟子たちは師モラ・モハメッドに、タコールに行ってバハオラに会い、この新しい啓示の内容を確かめ、その特質と目的を教えてくださいるようにこん願した。これに対し法学者はあいまいな言い訳をした。弟子たちはその返事に満足せず、師という立場にある人の最初の義務は、自分たちの信仰に影響をあたえるすべての運動の内容を調べることであり、その任務はイスラム教シーア派の高潔さを守ることであり、と主張した。そこでついにモラ・モハメッドは、すぐれた弟子二人を代表に選び、バハオラを訪問させて、その教えの内容を調べさせることにした。この二人はモラ・アッバスとアブール・カゼムで、両人とも前の法学者故モハメッド・タギから信頼されていた弟子であり、また両人とも娘婿でもあった。法学者はこの二人がどのような結論を出そうとも、それを無条件に支持し、この問題を終わりにすることにした。(p.114)

モラ・モハメッドの代表二人はタコールに到着した。しかし、バハオラが避寒地に移っていたので、二人もそこに向かった。到着したとき、バハオラはコーランの「復唱すべき七つの句」という表題の最初の章について注釈をしている最中であった。そこで二人は座ってその講話に耳を傾けることにした。聞き入っているうちに、二人共そのテーマの高遠さ、説得力、すばらしい弁舌に深く心を打たれてしまった。モラ・アッバスは自分を抑えることができなくなり、立ちあがって後の方に行き、窓のそばでうやうやしい態度で立ちすくんだ。バハオラの不思議な力に魅了されてしまったのである。かれは感激でふるえ、目いっぱい涙を浮かべながら、連れのアブール・カゼムに言った。

「わたしの有様を見てくれ。わたしは無力で、バハオラに質問することはできない。準備してきた質問は、とつぜん記憶から消えてしまったのだ。あなたは自由にバハオラに質問されるか、または一人でもどり、わたしがどのような状態になったかを師に知らせてくれ。そして、アッバスはふたたび師の下にもどることはできなくなった、もはやこの敷居をはなれることはできなくなったと告げてくれ。」アブール・カゼムもアッバスと同じ行動をとる決心をし、こう答えた。「わたしも師の弟子であることを止めた。この瞬間、残りの生涯を唯一の真実の師であるバハオラに身を捧げることを神に誓うことにした。」

ヌールの法学者が選んだ使節二人が、共にとつぜん改宗したニュースは、その地方全体におどろくほどの速さでひろがった。そして、気力をなくし睡眠状態にあった人びとを目覚めさせた。高僧、官吏、商人、小作人たちが大勢バハオラの家に来て、かなりの人びとが進んでバハオラの大業を受け入れた。その中で著名な人たちが何人もバハオラを賞賛してつぎのように述べた。「ヌールの住民が立ち上がり、あなたの周りに集まってきた様子を目撃してきました。いたる所で住民がよろこびにあふれています。モラ・モハメッド（ヌールの法学者）もまた、住民に加わるならば、この信教は完全に勝利を収めるであります。」

バハオラは答えた。「われがヌールに来た目的は、神の大業を宣言するため、そのほかの目的はない。ここから五百キロメートル離れたところに、真剣に真理を求めている人がある。その人が、われに会うことができなければ、われはよろこんですぐその人の住居にいそぎ、その渴きを満たしてあげたいと思う。モラ・モハメッドはこの場所からあまり遠くない村に住んでいると聞いた。かれを訪れ、神のメッセージを伝えようと思っている。」(pp.116-117)

バハオラはこの望みを実行するためにすぐ仲間をともなってその村に向かった。モラ・モハメッドはバハオラを仰々しく迎えた。バハオラは述べた。「われはあなたを公式に訪問するためにここに来たのではない。わが目的は、イスラム教に約束されている神からの、新しいすばらしい教えをあなたに伝えるためである。耳を傾けた者は皆、この教えにひそむ威力を感じ、その恩恵の力により変身した。あなたの心を困惑させているもの、または、真理を認める妨げになっているものを知らせていただきたい。」モラ・モハメッドは見くびるように言った。「わたしはまずコーランから助言を得るまでは、実行に移さないことにしている。このような場合は、つねに、神の援助とその祝福を求め、その後、聖典を手当たり次第に開け、目に入ったページの最初の節から助言を求めるようにしている。その内容から、どのような行動をとれば賢明であるかを判断できるのだ。」

バハオラがこの習わしを否認する様子はないことを見た法学者は、コーランを持ってこさせ、それを開いたが、再度閉じた。そこに居合わせた人びとには、開いたページの節の内容を明らかにすることをせず、つぎのように述べただけであった。「わたしは神の書に助言を求めた。その結果、この件に関してこれ以上進むことは賢明でないと考える。」これに同意した者も何人かいたが、大半の人びとは法学者の言葉を聞いて、

かれが恐怖感をいだいていることを悟った。バハオラはこれ以上かれを当惑させないように立ちあがり、誠意をこめて別れの挨拶をした。(p.117)

ある日、バハオラは仲間をつれて田舎に馬で遠乗りに出かけた。その途中、若者が一人で道のわきにすわっているのを見かけた。髪はぼうぼうとし、身には修行僧の衣をつけた若者は、小川のそばで、たき火で料理したものを食べていた。バハオラは近づき、愛情深く聞いた。「修行僧よ、そこで何をしているのかね。」かれはぶっきらぼうに答えた。「神を料理しているのだ。神を燃やしているのさ。」

この若者の気取らない無邪気な態度とその率直な返事に、バハオラは大いに満足した。そして、若者と気軽に親しみをこめて話しはじめ、短い時間のうちに、若者を完全に変身させてしまった。この若者は神の本質を教えられ、それまで心にいっていた無意味な空想を取り除き、この慈愛深い見知らぬ人がとつぜんもたらした神の光をすぐ認めたのである。この若者はモスタファという名の修行僧であったが、新しい教えに深く魅了され、料理道具をそのまま残して、バハオラにしたがった。バハオラの馬の後を、バハオラへの愛の炎で心を燃やし、楽しく歌いながらついて行ったのである。その歌はかれがとっさに作曲したもので、かれの最愛なる御方に捧げたものであった。それは反復句のついたよろこびの歌であった。「あなたは導きの昼の星でありたまう。あなたは真理の光でありたまう。あなた御自身を人類に顕わしたまえ。」後年、この歌は人びとの間にひろまり、モスタファという名の修行僧が、最愛なる御方を称えて、とっさに作曲したものとして知られるようになった。しかし、その最愛なる御方が実際だれを指しているのかを知る者はいなかった。当時バハオラはまだ人びとの目からヴェールでかくされていたが、この修行僧だけはバハオラの地位を認め、その栄光を発見したのである。

バハオラのヌール訪問は大きな成果をあげ、新しく誕生した啓示の拡大に著しいはずみをもたらした。人を惹きつけずにはおれない雄弁さ、清らかな生活、威厳のある態度、反駁できない論理、さまざまな面で示される慈愛深さで、バハオラはヌールの住民を目覚めさせ、心を勝ち取り、信教の旗の下に集まらせることができたのである。かれがヌールの人びとに、大業について説き、その栄光を顕わすにつれて、その土地の石や木も、その精神力で活力を得たようであった。万物も新しい、より豊かな生命をあたえられ、つぎのように声高らかに宣言しているようであった。「見よ、神の美が顕わされた。立ちあがれ。その御方は栄光のうちに到来された。」(pp.118-119)

バハオラがヌールを離れた後も、住民は大業をひろめ、その土台を強化しつづけた。住民の多くは、バハオラのために激しい苦難を耐え抜き、そのうち何人かは殉教の杯をよろこんで飲み干した。概して、マザンデラン州、とくにヌール地方は、神のメッセージを最初に熱心に受け入れた地方として、ペルシャのほかの地方より名が知られているところである。ヌールとは「光」という意味である。この地方はマザンデランの山々に囲まれており、シラズで昇った太陽の光を最初にとらえたところでもある。また、聖なる導きの昼の星が、無慮の谷間の影につつまれていたペルシャ全土を温め、照らすためについに昇ったことを最初に宣言したところでもある。

バハオラがまだ子供のころ、大臣であるかれの父は夢を見た。バハオラは果てしない広大な海で泳いでおり、海は、かれの身体からかがやき出る光で照らされていた。かれの頭から漆黒の長い髪の毛が四方八方にひろがり、波の上にふさふさと浮かんでいた。おびただしい数の魚が、かれのまわりに群がり、それぞれ髪の毛の先端をしっかりとくわえていた。魚はバハオラの顔のかがやきに魅惑されたかのように、どこまでもかれの泳ぐ方についていった。無数の魚がかれの髪を強くくわえていても、髪一本抜けることも、身体がわずかでも傷つけられることもなかった。バハオラは何からも妨げられずに自由に海面を泳ぎ、それにとまって魚の一群も動いていった。(p.117)

この夢に深く感銘したかれの父は、その地方の有名な占い師を呼び、夢の解釈を頼んだ。この占い師はバハオラの未来の栄光を予感したかのようにこう述べた。「あなたが夢で見られた果てしない海は、この世界のことにほかなりません。あなたのご息子は独力で世界の最高主権を得られるでしょう。かれは望みのまま、どこにも邪魔されずに進んでいくことができます。だれからも前進を阻まれたり、繁栄を妨げられたりすることはないであります。おびただしい魚の群れは、かれが地上の国民や民族の間にもたらす動揺を現わしています。かれの周りに人びとが集まり、かれにすがってくるでしょう。しかし、全能なる神の確実な加護により、かれはこの動揺で傷つけられることはなく、また海上での孤独な生活もかれの安全をおびやかすことはいでありません。」

その後、この占い師はバハオラのもとに案内された。かれはバハオラの顔をじっと見つめ、その容貌を注意深く調べた。その結果、かれはバハオラの容姿に魅せられ、激賞せずにはおれなかった。かれは、その顔の表情に秘められた栄光のしるしを認め

たのである。占い師はバハオラを大いにほめ称えたので、父はその日以来、息子にこれまで以上の愛情を注ぎはじめた。占い師の言葉で父親のバハオラに対する希望と確信は強まった。ヤコブ同様、父親は自分の愛するヨセフ（バハオラ）の幸福だけを望み、深い愛情でかれを保護したのである。

モハメッド国王の総理大臣アガシは、バハオラの父親からは完全に遠ざかっていたが、息子のバハオラを深く尊敬し、好意を示していた。その尊敬の念のあまりの深さに、当時国防大臣で、後にアガシの後を継いだアガ・カーンは、羨望を感じた。若者のバハオラが、自分よりすぐれていると思われていることに不快であったのである。それ以来、嫉妬の種がかれの胸に芽生えはじめた。バハオラはまだ若者で、父親も生存中なのに、総理大臣から優位にあると見なされている、もしこの若者が父親を継ぐことになれば、わたしは一体どうなるのだろうかと心配したのである。(pp.119-120)

バハオラの父親の死後も、アガシはバハオラを深く尊敬しつづけた。そして、バハオラの自宅を訪問し、あたかも自分の息子に対するように話しかけたりした。しかしながら、その献身がどれほど誠実なものであるかが試される時がきた。ある日、バハオラ所有のグチ・ヘサールの村を通りすぎているとき、アガシはその場所の魅力ある美しさと水源の豊かさに大変感動した。そこで、その場所を手に入れたくなり、バハオラにその村をすぐ購入したいと伝えた。バハオラはつぎのように述べた。「この地所が、わたしだけの所有であれば、よろこんであなたのお望み通りにいたしましょう。このはかない人生と汚れた所有物には愛着していません。また、この狭く、つまらない地所など価値のあるものではありません。しかし、この地所は何人もの富裕な人、貧しい人、老人、若者がわたしと共有しているものなので、かれらにこの件について相談し、同意を得てください。」

この返事に不満であったアガシは、不正な手段を用いてその地所を手に入れようとした。バハオラはその悪だくみを知らされるとすぐ、地所の所有者たちの同意を得て、その権利証書を国王の妹に移した。かの女は、幾度もその地所を所有したいと言っていたからである。アガシはこの取引に激怒し、自分がすでに最初の所有者から購入したのであると宣言して、その地所を強制的に確保するように代理人に命じた。国王の妹の代理人はアガシの代理人をきびしく譴責し、かの女はその権利をぜったいに譲る気はないことを、アガシに伝えるように要請した。アガシはモハメッド国王に、この件に関して自分が受けた不正な取り扱いを訴えた。その夜、国王の妹は国王につぎの

ように取引の内容を知らせた。

「陛下は、わたしが身につける宝石類を処分し、その収益で地所を購入するように勧められました。やっと地所を手に入れましたところ、アガシがそれをわたしから強制的に取り上げようとしております。」国王は妹を安心させ、一方アガシにはその要求をしないように命じた。アガシは絶望のあまり、バハオラを呼び寄せ、あらゆる狡猾な手段を用いてバハオラの名を汚そうとした。バハオラは、自分に浴びせられたすべての非難に力強く答え、自分の無実を証明した。腹は立ってもどうすることもできない総理大臣（ハジ）は叫んだ。(p.121)

「あなたが楽しんでいる宴会の目的は何なのだ。ペルシャ王の中の王の総理大臣であるわたしでさえ、毎晩あなたの宴会に集まってくるほどの大勢で多様な人びとを迎えたことはない。一体、この贅沢と見栄は何のつもりなのか。わたしに対して陰謀をたくらんでいるにちがいない。」バハオラは答えた。「どんでもないことです。同情心から、自分のパンをほかの人たちと分かち合っているのを、悪事をたくらんでいる者と非難されるのですか。」アガシは狼狽し返事できなくなった。かれはペルシャの僧侶と一般民衆から支持されていたが、バハオラに対していどんだ論争にはことごとく敗北したのである。

ほかの折にも、バハオラは反対者よりも優位にあることが認められ、証明されたことがたびたびあった。このようなバハオラの個人的な勝利により、かれの地位は高まり、その名声は遠くまでひろがっていった。バハオラがきわめて危険な論戦にも傷つけられずに、奇蹟的に相手に打ち勝ってきたことを見て、だれも驚嘆せざるを得なかった。そして、危険な状態に置かれたバハオラを安全に守ったのは神の力にほかならないと信じた。バハオラはどれほどの危険に直面しても、周りの人びとの傲慢、貪欲、裏切りに屈したことは一度もなかった。当時、その地方で最高の地位にあった高僧や政府の高官と交わるときも、かれらの見解や主張をそのまま受け入れることはなかった。集会などで、大業の真理を恐れることなく擁護し、踏みにじられた人びとの権利を主張し、弱者を弁護し、無実の人を保護しつづけたのである。(p.122)

第六章 モラ・ホセインのコラサンへの旅

バブは生ける者の文字（バブの弟子となった最初の一人）に別れを告げるとき、その一人一人に、この信教を受け入れた信者の名前をすべて記録するように指示した。そして、その名前のリストを封筒にいれ、封をして、シラズ在住のバブの伯父セイエド・アリに渡すように命じた。それらの封書は、伯父からバブに渡されるようになっていた。バブは生ける者の文字たちにつきように述べた。「そのリストを、一組十九人として、十八組に分けよう。各一組は一つのヴァヘッド（この言葉の数値は十九で、和合を意味する）を成す。生ける者の文字の十八人とわたし（バブ）を合わせると十九人となり、もう一組できるが、これは最初のヴァヘッドである。したがって、この最初の一組の名前と十八組の名前を全部合わせると、コレシャイ（この言葉の数値は三六一で、万物を意味する）となる。わたしは、この信者全員を、神の書簡に記録しよう。われらの心の最愛なる御方が、栄光の王位につかれるとき、その一人一人に計り知れない祝福を付与し、神の楽園の住民として宣言されるように。」

とくにモラ・ホセインに、バブはより明確な指示をあたえた。それは、イスファハン、テヘラン、コラサンのそれぞれの都市での活動と進歩に関する報告を文書にして、送付することであった。さらに、信教を受け入れ信者となった人たちだけではなく、その真理を否認し、拒絶した人たちをも知らせることであった。バブはこう述べた。「コラサンからあなたの手紙を受け取るまでは、わたしはこの町からヘジャーズへの巡礼に出発することはできないのだ。」(p.123)

バハオラとの接触によって活気づけられ、強められたモラ・ホセインは、コラサンに向かって出発した。その地方を訪問中、かれはおどろくべき力を発揮し、人びとに新生命を吹き込んでいった。その力はバブの別れの言葉から得たものであった。コラサンで最初に信教を受け入れた人は、ミルザ・アーマドで、その地方の高僧の中で最高の学識と英知をそなえた有名人であった。高い地位にある僧侶たちが大勢出席している集会においても、つねにかれのみが主な講演者となった。かれはすでに学識と能力と英知で名声を得ていたが、さらに品格の高さと献身の深さでその名声は一層高められていた。

つぎに、コラサンのシェイキ派の中で信教を受け入れたのはアーマド・モアレムで

あった。かれはカルベラに居住していたとき、カゼムの息子の教師をしていた。つぎに、シェイキ・アリが信者となった。バブはかれにアジムという称号をあたえた。つぎに、モハメッド・フルギが信教を受け入れた。アーマド・モアレム以外は、かれの学識をしのぐ者はいなかった。コラサンの宗教指導者たちのうち、以上述べた傑出した人たちだけがモラ・ホセインと議論を交わす権限と知識をそなえていた。
(pp.124-125)

そのつぎに、バブのメッセージを受け入れた人はバゲルであった。かれは残りの生涯をマシュハドで過ごした人である。かれの魂はバブに対する愛ではげしく燃え上がり、その強烈な情熱をだれも抑えることはできなかった。また、その影響力を見くびることもできなかった。かれの大胆不敵さ、あふれるほどの精力、確固たる忠誠心、高潔な生活は、敵には恐怖心を起こさせたが、友人にとってはインスピレーションの源泉となった。かれは、自宅をモラ・ホセインに提供して自由に使えるようにした。また、モラ・ホセインとマシュハドの高僧たちとの会見を別に準備し、力のかぎり、信教の進歩を妨げるものをすべて除く努力をつづけた。その努力に疲れることも、目的からそれることもなく、無尽蔵の精力をもって、自分の愛する大業のために、死の瞬間まで不屈の精神で努力をつづけた。そしてついに、シェイキ・タバルシの砦で殉教したのである。殉教の時間がせまっていたころ、ゴッドスはモラ・ホセインの悲劇的な殉死のあと、かれに、砦の勇敢なる防御者たちの指揮を命じた。かれはその任務を立派に成し遂げた。マシュハド市のバラ・キヤバンにあるかれの自宅は、現在までバビの家として知られており、その家に入るものは、バビ（バブに従う者）として非難を避けることはできない。かれの魂が安らかに休まれんことを祈る。

モラ・ホセインは、前述した有能で、献身的な人びとを大業の支持者として勝ち取ったあとすぐ、自分の活動報告を書きバブに送った。その報告で、イスファハンとカシヤンへの旅について詳しく書いた。バハオラとの接触の状況、バハオラのマザンダランへの旅、ヌールでの事件、さらにコラサンでの自分の努力の成果についてバブに知らせた。その報告に、自分の呼びかけに応えた人びと、そして、信念が固く、誠実とかれが確信した人たちのリストを同封した。それをヤズド経由で、当時タバスに住んでいたバブの伯父の仲間を通して送った。その手紙は一八四四年十月十日の前夜にバブに届けられた。その夜はイスラム教の全宗派が深い畏敬の念で迎える聖なる日であり、多くの人びとがレイラトール・カドル（威力の夜という意味）に劣らないほど神聖であり、コーランにあるように「一千の月より卓越している」とみなす夜であった。

その手紙がバブに届けられた夜、そばにいたのはゴッドスだけであった。バブは手紙の内容をかれに知らせた。(p.125-126)

わたし（著者）は、ミルザ・アーマドからつぎのように聞いた。「バブの伯父はわたしに、バブがモラ・ホセインの手紙を受け取ったときの状況について語ってくれました。『その夜、バブとゴッドスは、わたしには描写できないほどのよろこびと満足を顔に表わされていました。当時、バブがひじょうにうれしそうに、つぎの言葉をくり返されるのをよく耳にしました。』 ジャマディの月とラジャブの月の間に起こったことは、何とすばらしいことであろうか。何とまったくすばらしいことであろうか。” バブはモラ・ホセインからの通信を読みながら、ゴッドスに向かい、数節を見せ、このすばらしいよろこびの理由を説明されました。しかし、わたしにはそれはまったく理解できないままでした。』」(p.127)

しかし、ミルザ・アーマドはこの出来事を聞いて深く感銘し、その神秘を探る決心をし、わたし（著者）にこう告げた。「シラズでモラ・ホセインに会って、やっとわたしの好奇心は満たされました。バブの伯父から聞いた話をかれにくり返したところ、かれはほほ笑み、ジャマディの月とラジャブの月の間自分は偶然、テヘランにいたことをはっきりおぼえていると述べました。かれはそれ以上何も説明せず、その簡単な言葉だけで満足している様子でした。しかし、わたしにはそれだけで、テヘラン市に神秘がかくされていることを知ったのです。その神秘が世界に明らかにされる時、バブとゴッドスの心に最大の喜びをもたらす、ということをも十分に確信できたのです。」

モラ・ホセインが手紙で伝えたことは、神の教えに対するバハオラの即答、かれがヌールで大胆に着手した精力的な活動、その努力がもたらしたすばらしい成果についてであった。その手紙を受け取ったバブは大変によろこび、この大業がかならず勝利を得るという自信を強めた。バブはこう確信した。たとえ今とつぜん、自分が敵の暴虐の犠牲になったとしても、自分がもたらした大業は生き延び、バハオラの指導の下で、発展、繁栄しつづけ、やがて最高の果実を实らせるであろうと。バハオラはそのすぐれた能力で着実に進路を進み、すべてに浸透する愛の力で、人びとの心にその大業を確立させるであろうと。この確信はバブの精神を強め、心を希望で満たした。その瞬間から、バブは、切迫した危機感から完全に解放された。逆境の火を不死鳥のように歓迎し、その炎の輝きと熱の中でよろこびを感じたのである。(pp.127-128)

第七章 バブのメッカとメジナへの巡礼

モラ・ホセインの手紙を受け取ったバブは、計画していたヘジャーズへの巡礼を実施することにした。母に妻の世話を頼み、さらに伯父にこの二人の世話と保護を依頼して、シラズからメッカとメジナに向かおうとしていたファルスからの巡礼の一団に加わった。ゴッドスだけがバブの同伴者で、バブの世話のためエチオピア人の召使いがともなった。バブはまず、伯父の事業の場所であるブシェルに向かった。そこは以前、伯父と親しく交わりながら身分の低い商人として生活していたところである。そこで、長い困難な船旅の準備をととのえて帆船で出発した。速度ののろい船で荒海を二ヵ月間旅した後、聖地に上陸した。高波の海も、船の貧弱な設備も、バブの規則正しい祈りと瞑想を妨げることはなかった。周りで荒れ狂う嵐にも気を止めず、また、同船していた巡礼たちの病気などにも阻まれずに、バブは祈りや書簡をゴッドスに書き取らせつづけたのである。(pp.129-130)

わたし（著者）は、バブと同じ船で旅をしていたハサン・シラジから、その忘れがたい船旅の状況についてつぎのように聞いた。「およそ二ヵ月間、ブシェルで乗船した日からヘジャーズの港ジャデへの上陸日まで、昼夜にかかわらず、バブとゴッドスはいつも二人いっしょに仕事に没頭していました。バブが口述し、それをゴッドスがいそがしく書き取っていたのです。嵐で船体がゆさぶられ、船客がパニックに陥ったときも、二人はかき乱された様子はなく、落ち着いてその仕事をつづけていました。二人は暴風雨や周りの人たちの騒ぎによって、平静を失ったり、仕事を邪魔されたりすることは一切なかったのです。」(p.130)

バブ自らペルシャ編のバヤン書の中で、この船旅がどれほど困難であったかを述べている。「何日間も飲み水の不足で苦しんだ。われは甘いレモンジュースで満足しなければならなかった。」このつらい体験から、バブは全能なる神にこん願した。海上の旅が迅速に改良されて快適になり、危険性が完全に除かれるようにと。この祈りがささげられてまもなく、どの海上運送にもおどろくほどの改良が加えられた。その結果、当時蒸気船が一艘もなかったペルシャ湾は、現在、毎年巡礼に行くファルスの住民を、二、三日間で快適にヘジャーズまで運ぶ定期船の船団を誇るまでになった。

この大産業革命は最初、西欧の人びとの間に現われたのであるが、遺憾ながら、か

れらはまだこの強大な流れ、この偉大なる動力の源泉にまったく気づいていないのである。この力は物質的生活のあらゆる面に大変革をもたらした。この栄光ある啓示が顕わされた年（一八四四年）に、歴史が証明しているように、とつぜん産業・経済面に革命が起こりはじめた。西欧人自身も、その革命は人類の史上前例のないものであることを認めているのであるが、新しく発明された機械類の働きや調整などに気を取られているうちに、この神から託された威力の源泉と目的を徐々に見失ってきた。その結果、かれらはその目的を誤解し、はなはだしいほどに誤用してきたのである。実際は、西欧人に平和と幸福をもたらすように意図されたものであるが、反対に破壊と戦争を推進するために使用されてきたのである。（p.131）

ジャデに到着すると、バブは巡礼の衣服に着替え、ラクダに乗ってメッカ向かった。ゴッドスは、かれの師（バブ）の再三にわたる要請にもかかわらず、ジャデから聖なる都市まで徒歩でバブに同伴した。バブが乗っているラクダの手綱を握り、徒歩の旅の疲労にもまったく気にかけている様子はない。それどころか、よろこびと敬虔な気持ちであふれ、師の世話をしながら進んでいったのである。そして毎夜、夕方から夜明けまで、休息も睡眠もとらず、敬愛する御方のそばで警戒心をゆるめず見張りをつづけた。

ある日、バブがラクダから降りて、井戸の近くで朝の祈りをささげようとしたとき、一人のベドゥイン（遊牧のアラブ人）がとつぜん現われ、バブに近づいてきた。そして、地面に置かれていた鞍袋をつかむとすばやく砂漠の果てに消え去った。その鞍袋にはバブの書簡類が入っていた。エチオピア人の召使いがベドゥインを追いかけようとしたが、バブは祈りをつづけながら、追いかけるのをやめるように手で合図した。バブは後で、愛情を込めて召使いに説明した。「お前にベドゥインの後を追いかせさせたならば、お前はかならずかれに追いついてかれを罰したであろう。この場合そうしないようになっている。あの鞍袋に入っている書簡類はこのアラブ人を通して、われわれがけっして行けないような場所に届くように定められているからだ。それゆえ、このアラブ人の行為を嘆いてはならない。これは命令者であり、全能の神により定められたことであるのだ。」その後も、これと似た出来事が起こったとき、バブは同じような言葉で同伴者たちをなぐさめた。このようにバブは、後悔と憤慨の苦さは、神の目的を黙って受け入れ、その意志に従うことにより、かがやく心とよろこびに変えられることを教えたのであった。

アラファットの日（祝日の前日）に、バブは、自分の部屋に静かにこもり、瞑想と祈りに没頭した。翌日、ナールの日に、祝日の祈りをささげた後、モナに向かった。そこで、昔の習慣にしたがって、最高品種の羊を十九頭購入し、そのうち九頭を自分の名の下に、七頭をゴッドスの名の下に、三頭をエチオピア人の召使いの名の下に生けにえとしてささげた。バブは、この生けにえで清められた肉を取らず、その近辺に住む貧しい人たちや困っている人たちに惜しげもなく分けあたえた。(pp.131-132)

メッカとメジナへの巡礼の月（一八四四年十二月）は、冬季の最初の月にあたっていたが、その地方はひじょうに暑く、巡礼たちは通常身につける衣服ではその儀式を行うことはできなかった。そこで、薄布のゆったりとしたチュニックに着替えて祝日の祭典に参加した。しかしながらバブは、敬意のしるしとしてターバンもマントも脱がず、通常の上着を身につけ、最高の威厳と平静さ、簡素ながらも深い畏敬の念をもってカーベ神殿をめぐり、定められた礼拝の儀をすべて行った。

バブは巡礼の最後の日に、黒い聖石に向かって立っていたモヒートに会った。バブはかれに近づき、その手を取り、つぎのように語りかけた。「モヒートよ。あなたはシェイキ派共同体の中で、もっとも卓越した人物の一人であり、その教えの解説で名高い者であると自認しておられる。あなたは胸中で、かの偉大なる光であり、神の導きの夜明けを告知した星である二人の人物（アーマドとカゼム）の正当な後継者の一人であると主張しておられる。今、あなたとわたしは共に、このもっとも聖なる廟の中に立っているのだ。この神聖な境内に住まわれている御方の霊は、真実をすぐ明らかにして、嘘を見分け、正義を誤りから区別されるのだ。わたしはこのことをはっきりと述べたい。現在、東西を問わず、わたし以外には、人びとを神の知識へと導く門であると主張できる者はいない。わたしの証拠は、預言者のモハメッドが示した証拠と同じなのだ。思い通り質問するがよい。今ここで、わたしの使命が真実であることを証明できる数節を示そう。あなたは無条件にわたしの大業にしたがうか、それを完全に否認するかのどちらかを選ばなければならない。そのほかにも取る方法はないのだ。もし、あなたが、わたしの宣言する真理を否認される場合は、そのことを公表すると誓っていただきたい。そうされるまでは、あなたの手を放さないつもりだ。これにより、真理を語る御方が人びとに知られ、虚偽を述べる者は永久に不幸と恥にさらされるであろう。そのとき、真理への道が明らかにされ、全人類に示されるのである。」(pp.133-135)

このバブからとつぜん突きつけられた断固とした挑戦に、モヒートはひどく苦しんだ。かれはバブの率直さ、威厳と威力に圧倒された。年令も上で、権威と学識をそなえていたにもかかわらず、この若者（バブ）の面前では、強大なワシに捕われた無力な小鳥のように感じた。混乱し、心配でいっぱいになったかれは、こう答えた。「わたしの主であり、師である御方よ。カルベラであなたの姿を目にして以来、ついに、わたしの探求の的である御方を発見し、認めたと感じてきました。わたしはあなたを認めそこなった者と絶交し、あなたの純粹さと神聖さについて、わずかでも疑っている者を軽蔑します。わたしの弱点を見過ごし、わたしの難問に答えて下さるようお願いいたします。この場所で、この聖なる廟の境内で、あなたに忠誠を誓い、あなたの大業の勝利のために立ちあがれるように神に祈ります。もし、この誓いに忠実でなく、この言葉を信じなければ、わたしは神の預言者の恩恵を受ける価値はないと見なします。そしてまた、そのような行動は、神が選ばれた後継者のアリに不実な行為であると考えます。」

バブはこの言葉に注意深く耳を傾けた。そして、かれの魂の無力さと貧しさを十分悟り、つぎのように答えた。「わたしははっきり告げるが、今すでに真理は明らかにされ、虚偽から区別された。神の預言者の廟よ。そして、わたしを信じたゴッドスよ。わたしは今、証人として、預言者の廟とゴッドスを選んだ。あなた方は、わたしとモヒートとの間に起こったことを見聞された。あなた方に証言していただきたい。神はまことに、あなた方を超越した存在で、確実に究極の証言者でありたまう。神こそは、すべてを見、すべてを知り、すべてに賢きお方でありたまう。モヒートよ。あなたの心を困らせているものを述べるがよい。わたしは、神の助けをかりて、あなたの問題を解決してあげよう。そこであなたは、わたしの言葉がいかに優れたものであるかを証言し、わたし以外にはこの英知を示すことができる者はいないことを認めるであろう。」

モヒートはこの呼びかけに応え、質問を提出したが、メジナにすぐ出発しなければならないので、その前に返事を渡してもらうように要請した。バブはつぎのように述べてかれを安心させた。「あなたの要請に応じて、メジナに行く途中に、神の援助によりあなたの質問に答えよう。もし、そこであなたに会えなければ、あなたがカルベラに到着された後すぐ返事が届くようにしよう。わたしは道義にしたがって約束を果たすので、あなたにもおなじことを期待したい。『よい行為をすれば、あなたのためになり、悪い行動をとれば、あなたの利益に反することになる。』『まことに神はすべて

の創造物から独立した存在でありたまう。』(pp.135-137)

モヒートは出発前に、ふたたび自分の厳粛な誓いをかならず果たすつもりであることを述べた。「あなたとの約束を果たすまでは、何事が起ころうとも、けっしてメジナを離れることはありません。」しかし、強風に吹き飛ばされたほこりのように、かれはバブがもたらした啓示の荘厳さに耐えることができず、恐怖のあまりバブの面前から逃げ出したのである。そして、メジナにしばらく留まったが、誓いを果たさず、良心のたがめも無視してカルベラに向かった。

バブは自分の約束に忠実に、メッカからメジナに行く途中で、モヒートの心を悩ませている質問の答えを書き、それに「二廟間の書簡」と名づけた。モヒートはカルベラに到着後まもなくして、その答えを受け取ったが、その格調の高さに心を動かされることも、その教えを認めることもしなかった。心中にかくしていたが、実際はバブの教えに執拗に反対していたのである。時折かれは、バブの悪名高き敵であるカリム・カーンの弟子であり、支持者であると公言したり、あるいは自分は独立した指導者であると宣言したりした。かれは、自分の死期が近づいたころ、イラクでバハオラに従うように見せかけて、バグダッド在住のペルシャ王子を通して、バハオラとの会見を申し込んだが、そのとき会見は極秘で行われるようにと要請した。この申し込みにバハオラはつぎのように答えた。

「ソレイマニエの山に隠遁中書いた詩で、真理探求の道を行く旅人がそなえていなければならない必要条件を説明したことをかれに伝えよ。そして、その詩からつぎの節をかれに見せよ。『もし、なんじの目的が自分自身を大事にすることであれば、わが宮廷に近づくな。もし、命を犠牲することがなんじの心の望みであれば来れ。ほかの者たちを連れて来れ。もし、なんじの心がバハとの再会を求めるならば、それこそが信教の道である。もし、この道を行くことを拒否するならば、なぜなんじは、われをわずらわせるのか。立ち去れ。』もし、モヒートがこの条件をよろこんで受け入れるならば、ためらわずに、いそいで、わたしに会いにくるであろう。そうでなければ、わたしはかれと会うことを拒否する。」(pp.137-138)

バハオラの断固とした返事に、モヒートは冷静を失った。この返事を受け取った日に、バハオラに反対することも、その要請に応じることもできなくなったモヒートは、

カルベラの自宅に向かった。自宅に到着後すぐ病気になる三日後に死亡した。

バブはメッカへの巡礼に関わる最後の儀式を終えるとすぐ、その聖なる都市の州長官宛てに書簡を書いた。その中で、誤解の余地のない言葉で、自分の使命の特質を述べ、大業を受け入れるように呼びかけた。バブはこの書簡と、ほかの自著からの引用文をゴッドスにあたえ、それを州長官に贈呈するように指示した。しかし州長官は仕事に没頭しており、バブから渡された神の教えに応えることはなかった。

この州長官について、ハジ・ニヤズはつぎのように述べたと伝えられている。「一八五〇年（または五一年）、メッカに巡礼に行き、州長官に会ことができました。かれはこう述べました。『一八四四年の巡礼の時期に、一人の若者がわたしを訪れたことを憶えています。かれから内容は不明ですが本を贈られたので、よろこんで受け取りました。しかし、当時多忙で読むことができませんでした。数日後、ふたたびその若者に会ったとき、その本に関して、返事したいかどうかを聞かれました。しかし、差し迫った仕事があり、その本の内容を見ることはできなかつたのです。結局、満足な返事ではできませんでした。巡礼の時期が過ぎ去り、書簡類を整理していたとき、ふとその本がわたしの目とまりました。それを開いたところ、紹介のページには、絶妙な書体で書かれた感動的な訓戒があり、それにつづいてコーランの語調に著しく似た文章が書かれていました。その本を通読して、ペルシャ人の中から、ファテメとハシム家（モハメッドの先祖）の子孫である人が、約束されたガエム（バブ）の出現をすべての人びとに宣言していることがわかりました。しかしながら、わたしはその著者の名前もその宣言に伴う状況についても知らされていませんでした。』

わたしは州長官にこう述べました。『この数年間に、ペルシャに大変な騒ぎが起きました。モハメッドの子孫で、職業は商人の若者が、自分の言葉は神の声であると宣言したのです。その若者は、モハメッドが二十三年かけて啓示したコーランにある言葉の優雅さとその量をしのぐ句を、二、三日で頭わすことができると宣言しました。ペルシャの住民のうち、身分の高い者も低い者も、一般市民も僧侶も、その若者の旗の下に集まり、よろこんでかれの道に自分の生命を犠牲にしてきています。その若者は、昨年（一八五〇年七月）、アゼルバエジャン州のタブリズで殉教しました。処刑者たちは若者を殺害して、かれがその国に点した光を消そうとしたのです。ところが、かれの殉教以来、かえってその影響はあらゆる階層の人びとに浸透してきました。』この話に注意深く耳を傾けていた州長官は、バブを迫害した者らの行動に憤りを表わし、

叫ぶように言いました。『その邪悪な者らに神の呪いあれ。過去にも、われわれの神聖で栄誉ある先祖を同じように扱った者らに呪いあれ。』こう言って州長官はわたしとの会話を終えました。」(pp.138-140)

バブはメッカからメジナに進んだ。そして、一八四五年一月十日の金曜日に、その聖なる都市の近くまで来た。バブはその都市に近づきながら、その城壁内で生き、亡くなられた御方の名(モハメッド)を不朽にした感動的な出来事を思い起こしていた。その不滅の天才である御方の創造的な威力を雄弁に証言する場面が、眼前でおごそかに再演されるのを見たのである。バブは祈りながら、神の預言者の遺体を納めた聖なる墓に近づき、その聖なる場所を歩きながら、自らの宗教制度のかがやかしい先駆者(アーマド)を思い起こした。モハメッドの廟から遠くない場所にあるバキの墓地にアーマドが埋葬されていることも知っていた。アーマドは困難な生涯の残りをこの神聖な廟の境内で過ごす決心をしたのである。バブの眼前にはまた、聖なる人たち、信教の開拓者たちと殉教者たちの幻が現われた。かれらは戦いの場で名誉ある命を落とし、その生命の血で神の大業の勝利を確実にしたのである。かれらの聖なる遺体は、バブの静かな歩みにより蘇生されたように思えた。かれらの霊はバブの息吹で生気をあたえられたようであった。かれらはいそいでバブに近づき、歓迎の言葉を述べ、つぎのように熱烈にこん願しているようであった。

「われらの最愛なる御方よ。故国にもどられないようにお願いします。われわれの間に住んで下さい。ここは、あなたを待ち伏せしている敵から遠く離れており、安全だからです。あなたのことが心配です。敵の策略と陰謀を恐れています。また、かれらの悪行はかれらの魂に永遠の罰をもたらさないかと気づかっています。」バブの不屈の精神は答えた。「恐れることはない。われがこの世に現われたのは、栄光ある犠牲を示すためである。皆は、わが切望がどれほど強烈で、この世からの超脱がどれほどのものであるかを知っているはずだ。それゆえ、わが殉教の時間が早められ、わが犠牲が受け入れられるように主なる神にこん願せよ。よろこぶがよい。われとゴッドスは共に、栄光の王への奉獻の祭壇で殺害されるからである。その御方の道で流すように定められたわれわれの血は、その不滅のよろこびの庭園に水をあたえ、生気をもたらすであろう。この神聖にされた血は、神の強大な木に育つ種なのである。そのすべてを包含する木陰に、地上の民族と国民は集められるであろう。それゆえ、われがこの土地から去っても悲しむことはない。われは、自分の運命を果たすためにいそいで行くのであるから。」(pp.140-141)

第八章 巡礼後のバブのシラズ滞在

バブのメジナ訪問でヘジャーズへの巡礼は終わりにきた。そこから、バブはジャデに行き、海路により故郷にもどった。ブシエルの港から巡礼に出発し、陰暦で九ヵ月後に同じ港にもどったのである。その港の宿で、バブはかれの帰りを歓迎するために訪れた友人や親族を迎えた。ブシエルに滞在中、バブはゴッドスを呼び、慈愛をこめてシラズに行くように命じた。

「あなたとわたしの交わりは終わりにきた。別離の時間がきたのだ。この別離は、栄光の王の御前、すなわち神の王国で再会するまでつづくであろう。このちりの世界では、わたしとの交わりはわずか九ヵ月しかあなたにあたえられていないのだ。しかしながら、偉大なる来世の岸辺、不滅の世界で、永遠の再会のよろこびがわれわれを待っている。まもなく、運命の手が、神のためにあなたを艱難の海に沈めるであろう。わたしもまた、あなたにつづきその海の奥底に沈められるであろう。大いによるこぶがよい。なぜなら、あなたは苦難の旗の旗手として選ばれ、神の御名の下に殉教者となる高貴な軍隊の先頭に立っているからだ。シラズ市の通りで、あなたは侮辱を加えられ、深い傷を負わされるが、敵の卑しむべき行為を耐えぬき、われわれの敬慕と愛の目標である御方の御前に達するであろう。その御方の御前で、あなたは自分が受けた傷と恥辱をすべて忘れるであろう。見えざる御方の軍勢が援助に駆けつけ、あなたの英雄的行為と名誉を全世界に宣言するであろう。あなたは、神のために殉教の杯を飲み干すというこの上ないよろこびを感じるであろう。わたしもまた、犠牲の道を歩み永遠の世界であなたといっしょになるであろう。」(pp.142-143)

このように述べたあと、バブは伯父セイエド・アリに宛てた手紙をゴッドスに渡した。その手紙で、ブシエルに無事帰宅したことを告げた。バブはまた、「七つの資質」という表題の書簡をゴッドスに託した。これは、新しい啓示を知り、それを受け入れた者たちの基本条件を述べたものであった。バブはゴッドスに最後の別れを告げるとき、シラズ在住の愛する人たちのすべてに、挨拶の言葉を伝えるように頼んだ。

ゴッドスは固い決意で、師の望みを実行するためにブシエルを発った。シラズに到着すると、バブの伯父セイエド・アリから愛情深い歓迎を受けた。伯父はゴッドスを自宅に迎え、愛する甥の健康と活動について熱心にたずねた。ゴッドスはかれが新し

い神の教えを受け入れると感じたので、その啓示の内容を知らせた。その啓示はゴッドスの魂をすでに燃え立たせたものであった。ゴッドスの努力の結果、バブの伯父は生ける者の文字と呼ばれる人びとに次いで、シラズで大業を受け入れた最初の人となった。新しく誕生した信教の意義は、まだ十分に明かされていなかったため、伯父はその内容の膨大さと栄光に気づいていなかった。しかし、ゴッドスとの会話を通してかれの眼にかかっていたヴェールは取り除かれた。バブへの信仰は不動のものとなり、敬愛の念も深まってゆき、全生涯をバブへの奉仕に捧げた。そして、ゆるまぬ警戒心をもって、バブの大業を保護し、バブを守るために立ち上がったのである。また、疲労を無視し、死をものともせず、たゆまぬ努力をつづけた。かれはその都市の著名な事業家として知られていたが、そのような世俗の事柄によって、愛する甥のバブを守り、その大業を促進するという精神的な義務を怠ることはなかった。このように、忍耐して活動をつづけ、ついに、テヘランの七人の殉教者たちの一団に加わり、まれに見る壮烈な状況下でバブのために命を捧げたのである。(p.143)

つぎに、ゴッドスがシラズで会った人はサディクであった。ゴッドスはかれに、書簡「七つの資質」を渡し、そこに述べられている規律をすぐ、すべて実行するように強く勧めた。その中には、忠実な信者はすべて、イスラム教の伝統的な祈りの呼びかけに、つぎの言葉をつけ加えるように、という強い指示があった。「アリ・カブル・モハメッド (バブ) は、バキヤトラ (バハオラ) のしもべであることを証言いたします。」

当時サディクは、説教壇から大勢の聴衆にイスラム教のエマムたちの徳行を賞賛していた。かれはバブの書簡を読んで、そのテーマと言葉に深く感銘したため、その中にある規律をすべて実施する決心をした。そしてある日、モスクで会衆に祈りの呼びかけをしているとき、その書簡にひそむ威力に駆られ、とつぜん、バブが定めた言葉をつけ加えた。それを聞いて会衆は愕然とした。かれらは狼狽し、肝をつぶすほどおどろいたのである。(p.144)

前方の席に座っていた著名な高僧たちは、正統派の信仰で大いに尊敬されていたが、サディクの言葉を聞いて騒ぎはじめ、大声で抗議した。「神の信仰の守護者であり、保護者であるわれわれに災いがきた。見よ。この男は邪教の旗をかかげているのだ。この恥ずべき裏切り者を打倒せよ。神の名を汚したこの男を逮捕せよ。かれはわれわれの信仰の恥である。」かれらは、さらに腹立たしく叫んだ。「一体だれが、イスラム教の法規からこれほど逸脱してよいと許したのか。だれがこの崇高な特権を自分のもの

として用いたのだ。」

民衆も僧侶たちの抗議をおうむ返しにくり返し、騒ぎを大きくしていった。この騒ぎは町全体にひろがり、公共秩序が乱されそうになった。これを見たファルス州の知事ホsein・カーンは、介入の必要性を感じ、このとつぜんの騒動の原因を調べることにした。その結果判明したことは、メッカとメジナへの巡礼からもどり、今はブシエルに住んでいる男がシラズに来て、自分の師バブの教えを広めていることごとであった。知事はさらに、つぎの情報も得た。「この（バブの）弟子は、自分の師は新しい啓示をもたらし、その書は神から来たものであると主張していること。サディクは、その信者となり、大勢の人びとにその教えを受け入れるように大胆に勧めていること。さらに、その教えを認めることは、イスラム教シーア派の忠実で、敬虔な信者の第一の義務であると宣言していること。」

知事は、ゴッドスとサディク両人の逮捕を警察に命じ、手錠をかけて自分の面前に連れてくるように命じた。警察官は二人を知事のところに連行してきたが、そのとき、サディクから没収したガユモーウル・アズマ（バブのジョセフについての評釈書）もかれに渡した。それはサディクが、興奮した群集に声高らかに読んで聞かせたものである。知事は、ゴッドスの若さと普通ではない服装を見て、最初、かれを無視し、威厳のある年配のサディクに注意を向けた。そして、腹立たしそうに聞いた。(p.145)

「あなたは、ガユモーウル・アズマの見開きに、バブが地上の為政者と国王につぎのように呼びかけているのを知っているであろう。『君主の衣を脱ぐがよい。王なる御方が実際現われたゆえに。王国は、高貴なる神のものなり。最高の神はこう命じたまう。』もし、これが真実であれば、わが君主であるカジャール王朝のモハメッド国王にあてはまるはずではないか。わたしはこの地方の行政長官として国王の代理をしている者だ。その書の命令によれば、国王は王冠を脱ぎ、王座を放棄しなければならないのか。」

サディクはためらわずに答えた。「その言葉の著者がもたらされた啓示が真実であることが確実に立証されるとき、その御方の口から出される言葉の真理も同様立証されるであります。もし、それらの言葉が、神の言葉であれば、モハメッド国王とほかの国王の退位は重要なことではありません。だれも神の目的をそらすことも、全能で、永遠の王の主権を変えることもできないのです。」

この返事に、その残酷で不信心な知事は強い不快感をおぼえた。かれはサディクをののしり、従者に、かれの衣服をはぎとって、千回むち打つように命じた。さらに、ゴッドスとサディク両人のひげを燃やし、鼻に穴をあけ、それに細なわを通して、町の通りを引っ張りまわすように命令し、こう宣言した。「これはシラズの住民へのみせしめだ。かれらは邪教の罰がどんなものであるかがわかろう。」サディクは、平静を保ちながら眼を天に向けてつぎのように祈った。「おお、主なるわれらの神よ。まことに、わたしどもは呼び声を挙げられた御方の声を聞きました。その御方は『主なるなんじの神を信ぜよ』と呼びかけられました。そこで、わたしどもはそれを信じたのです。おお神よ、われらの神よ。わたしどもの罪を許し、わたしどもの邪悪な行為をかくしたまえ。そして、正義ある人びとと共に死なせたまえ。」(pp.146-147)

二人は、気高い不屈の精神で運命にしたがった。この残忍な罰をあたえるように命令された者たちは、力いっぱいにかれらをむち打ったが、だれもこの受難者たちを助けようとしなかった。かれらの大業を弁護しようとする者もいなかった。このあとすぐ、二人はシラズから追放された。追放前に、もしシラズにもどってくるようなことがあれば、二人共にはりつけの刑を受けるであろうと警告を受けた。この苦しみを通して、二人は、ペルシャで、信教のために最初に迫害された者として不滅の榮譽を得た。前に述べたモラ・アリは敵の容赦ない憎しみの犠牲になり、迫害を受けた最初の人であったが、それはペルシャ国外のイラクで起こった。その迫害はきわめて激しいものであったが、ゴッドスとサディクが受けた残忍な拷問に及ぶものではなかった。

信者ではないがシラズの住民で、この胸の悪くなるような出来事を目撃した人が、わたしに（著者）つぎのように語ってくれた。「わたしはサディクがむち打たれるのを見ていました。虐待者たちがそれぞれ交替で、血が流れ出している肩にむち打ちつけたのです。かなりの年配で、身体が虚弱なサディクが、その残忍なむちを五〇回も受けても生き延びることができるなど、だれも信じませんでした。ところがかれは、すでに九百回以上のむちを受けていたにもかかわらず、平静を保っていたのです。それを見たわれわれは、その不屈の精神に大変おどろきました。かれは笑みを浮かべながら、手を口にあてていましたが、自分の身体に降りかかっているむちは、まったく感じていないようでした。かれがその都市から追放される時、かれに近づくことができなかったので、手を口にあてていた理由を聞きました。また、かれが笑みを浮かべていたことにおどろいたと述べたところ、かれは力をこめてこう答えました。

『最初の七回のむちは、ひじょうに痛かったのですが、そのあと何も感じなくなりました。本当に、自分の身体はむち打たれているのだろうかと思っただけです。わたしの魂は、この上ない喜び感で満たされていましたが、それを抑え、笑いをこらえていたのです。全能の救済者は一瞬にして苦痛を和らげ、悲しみをよろこびに変えられることを今になってさとりしました。神の力は、人間のむなしい想像をはるかに超えて無限に高遠なのです。』わたし（著者）が、何年か後にサディクに会ったとき、かれは、この感動的な出来事はすべて事実であることを認めた。（pp.147-148）

ホsein・カーンの怒りは、この残忍きわまる不当な懲罰をあたえてもはずまることはなかった。かれの理不尽で、気まぐれの残酷さは、つぎにバブに向けられた。かれは、自分の信頼する護衛隊をブシェルに送り、バブを逮捕してくさりをつけてシラズに連行するように命じたのである。護衛隊の指揮官はアリヨラヒの宗派としてよく知られているノサイリ共同体のメンバーであった。かれは、この事件についてつぎのように語った。

「ブシェルへの旅を三分の一ほど行った荒野の真ん中で、モハメッドの子孫で、商人の身分を示すみどりの肩帯と小型のターバンをつけた若者に会いました。かれは馬に乗り、そのあとをエチオピア人の召使いが荷物をもってついてきていました。近づくると若者はわれわれの目的地を聞きましたが、真実をかくしていた方がよいと思い、ファルススの知事から命令を受けて、この地方の調査にきた、と答えました。かれはほほ笑みながら言いました。『知事はわれを逮捕するためにあなたを送ったのだ。われはここにいる。思うようにせよ。あなたの旅が短縮され、われを見つけやすいように、われの方からあなたに会うためにここまで来たのだ。』（p.148）

わたしはこの言葉にびっくりし、またその率直さにおどろきました。しかし、なぜ官吏の苛酷な懲戒に進んで身を任せ、自分の命と安全を危険にさらすのか理解できませんでした。わたしはかれの言うことを無視し、その場を立ち去ろうとしました。するとかれはわたしに近づき、こう言ったのです。『人間を創造し、ほかの創造物より卓越したものとなし、その心を神の主権と知識の座とされた神にかけて誓うが、われは生まれてこのかた、真理以外の言葉は口にしない。また、同胞人間の幸福と進歩以外の望みをいだいたことはない。これまで自分の安楽を無視し、ほかの人の苦しみや悲しみになるようなことを避けてきた。あなたがわれを探しているのはわかっ

ている。あなたとあなたの護衛隊が、不必要な労力を費やされるよりも、われ自身をあなたに渡したいのだ。』

わたしはこの言葉に深く心を動かされ、思わず馬からおり、かれのあぶみに接吻し、つぎのように話しかけました。『おお、神の預言者の目の光である御方よ。あなたを創造し、あなたに崇高さと威力をあたえられた神に誓って、わたしの願いを聞き入れ、わたしの祈りに答えて下さるようにお願いいたします。この場から逃げ、この地方の無慈悲で卑劣な知事を避けられるようにお願いします。かれの陰謀を恐れているのです。神の預言者の子孫で、これほど潔白で、高貴な御方に対する悪だくみの手先に使われたくありません。わたしの護衛隊員は皆立派な人たちです。かれらは約束を必ず守り、あなたの逃走を口外することはありません。あなたはコラスンのマシュハドの町に行かれ、この残忍な狼の蛮行の犠牲にならないようにして下さい。』

わたしの熱心なお願いに、かれはこう答えました。『あなたの主なる神が、あなたの寛大さと気高い意図に報いられんことを。わが大業の神秘を理解している者はいないのだ。また、だれもその秘密を探ることはできない。われは神の命令に顔をそむけることは絶対にない。神のみがわれの確実な砦であり、われの支えであり、避難所でありたまうのだ。死の時間が来るまで、だれもわれを攻撃することも、全能なる神の計画を妨げることもできない。そして、わが死の時間が到来したとき、神の御名のもとに殉教の杯を飲み干すよろこびは、何と大なるものであろうか。われは今ここにいる。あなたの師の手にわたしを渡すがよい。恐れることはない。だれもあなたを非難したりはしない。』わたしは頭を垂れて同意の意を示し、かれの望みを実行することにしました。」 (pp.149-150)

バブは直ちにシラズへ向かった。かれは護衛隊の前方を、拘束されずに自由に進んで行き、その後を、護衛隊が敬意を表しながらつづいた。バブは神秘的な力を秘めた言葉で、護衛隊員の敵意を除き、その尊大さを謙遜と愛に変えたのである。シラズ市に到着するとすぐ政府の建物に向かった。通りを進んで行く騎馬行列を見た者は皆、そのめずらしい光景におどろかされた。知事のホセイ・カーンは、バブの到着を知るとすぐ自分の面前に連行させ、きわめて横柄な態度で迎え、部屋の中心にある席に自分に向かって座るように命じた。そして公然とバブをなじり、その行動を非難し、腹立たしく抗議したのである。

「お前はどれほど大きな害毒をもたらしたかを知っているのか。お前は聖なるイスラム教と、われわれの恐れ多い国王にとってどれほど恥になったかに気がついていないのか。お前はコーランの聖なる教えを無効にする新しい啓示をもたらした者であると宣言しているのか。」バブは静かに答えた。「『よこしまな人間が何か情報を持ってきた場合には、まずよく確かめよ。(うっかり飛びついて)思わず他人に大変な迷惑をかけ、あとで自分のしたことを悔むような羽目にならないように。』(コーラン)」

この言葉で知事の憤りはいつそうあおられた。かれは叫んだ。「お前は、われわれをよこしまで、無知で、愚かであると言うのか。」そして従者に、バブの顔に一撃を加えるように命じた。それはバブのターバンが地面に落ちたほど強烈な打撃であった。シラズの僧侶の長であるシェイキ・アブトラブは、その会見に出席していたが、知事の行為を強く非難し、落ちたターバンをバブの頭にもどすように命じた。そしてバブを自分の席のそばに座らせた。シェイキ・アブトラブは知事の方を向き、バブが引用したコーランの節が啓示されたときの状況について説明し、かれの憤りをしずめようとして言った。(p.150)

「若者が引用した節に深く感銘しました。この英知ある節は、この事柄に関して注意深く調べ、聖典の教えにそって、かれを判断するようにと教えているものだと感じます。」知事はすぐその意見に同意した。そこでシェイキ・アブトラブはバブに、啓示の内容と特質について質問した。バブは、自分は約束されたガエムの代理でも、神と忠実なる信者を結ぶ媒介者でもないと断言した。シェイキ・アブトラブは答えた。「これでわれわれは十分に満足した。金曜日にヴァキル寺院に来ていただき、そこで、公にあなたの否認の言葉を聞かせてもらおう。」

シェイキ・アブトラブがこの問答を終わりにして立ち去ろうとしたとき、知事は口を出した。「この若者の身許引受人となる信頼できる人物が必要だ。その者は今後、この若者がイスラム教または政府に害をあたえるようなことをすれば、すぐわれわれの手に引き渡さなければならず、また、あらゆる状況の下で、かれの行動に責任をもつという宣誓文をしたためなければならない。」その場にいたバブの伯父セイエド・アリが保証人になることに同意した。かれは宣誓書をしたため、印章をつけ、それに何人かの証人に署名してもらったあと知事に渡した。そこで知事は条件つきでバブを伯父に任せた。その条件とは、知事が要求すればすぐバブをかれの手元に渡すというものであった。

セイエド・アリは神に感謝しながらバブを自宅に連れてゆき、バブをバブの母親の愛情深い世話に任せた。伯父はこの家族の再会をよろこび、自分の愛する大事な甥を悪意に満ちた虐待者の手から救ったことで深い安堵をおぼえた。バブは静かな自宅で、しばらくの間、だれにも邪魔されない生活を送った。妻、母親、そして伯父以外はだれとも交わることはなかった。一方、悪事をたくらむ者らは、バブをヴァキル寺院に召し、約束を果たさせるようにシェイキ・アブトラブに圧力をかけていた。(p.151)

シェイキ・アブトラブは親切な人物として知られており、その気質と性格はテヘランの聖職者の指導者であった故ミルザ・アブール・カゼムにひじょうに似ていた。かれは名が知られている人を無礼にあつかうのを極力嫌った。その人がシラズの住民である場合はとくにそうであった。それを自分の義務と感じて、良心的に守ってきたため、町の住民からひろく尊敬されるようになっていた。したがってこの度も、群集の憤りを和らげるために、あいまいな答えをしてバブを寺院に行かせることを延ばしつづけた。しかし、扇動者たちが、大衆の憤りをあおろうと全力をつくしているのに気がつき、ついに、バブの伯父に極秘の手紙を送らざるを得なくなった。それは、金曜日にバブをヴァキル寺院に連れて行き、約束を果たさせることを要請したものであった。その手紙に、かれはこう付け加えた。「神の援助により、あなたの甥の陳述が、緊迫した状況を和らげ、あなたとわれわれの心に平安がもどることを願う。」

バブは伯父を伴って寺院に入った。そのときシェイキ・アブトラブが説教壇から説教をはじめようとしていた。かれはバブの姿を認めるとすぐ、歓迎の言葉を述べ、説教壇にのぼって聴衆に話しかけるように要請した。バブはその招きに応じて説教壇の一番下の段にあがり、話しはじめようとした。そのときシェイキ・アブトラブは「もっと高い段にのぼって下さい」と声をかけた。バブはそれに応じてあと二段のぼった。バブは頭が説教壇の上段にいたシェイキ・アブトラブの胸をかくすように立った。そして、自分の公の宣言をまず前置きの言葉ではじめた。かれが「まことに、天と地を造りたもうた神に賛美あれ」という言葉を述べはじめたとたん、セイエド・シェシ・パリとして知られている者が横柄な態度で叫んだ。(p.153)

「むだ話はもうたくさんだ。今すぐ言いたいことを言ったらどうだ。」シェイキ・アブトラブはこの男の無礼さに強い憤りを感じ、かれを譴責した。「静かにして、あなたの無礼さを恥ずかしく思いなさい。」その後、かれはバブに向かい、聴衆の興奮をしずめ

るために話を簡潔にするように頼んだ。バブは聴衆に向かって宣言した。「われをエマムの代理、またはその門とみなす者らは神から罪の宣告を受けるであろう。神の一体性を否定し、預言者の封印であるモハメッドが預言者であることを否認し、古の神の使者たちの真理を拒絶し、忠実なる御方の司令官であるアリが守護者であることも、その後継者であるエマムたちも認めない者として、われを非難する者らもまた、神から罪の宣告を受けるであろう。」

こう述べたあと、バブは説教壇の上段までのぼりシェイキ・アブトラブを抱擁し、下において、聴衆に加わって金曜日の祈りをしようとした。シェイキ・アブトラブはバブに寺院から立ち去るように頼んだ。「ご親族があなたのお帰りを待っておられます。皆、あなたに悪いことが起こらないかと心配しておられるのでご自宅にもどられ、そこで祈られるように願います。そうなさることは、神の眼にはより賞賛される行為だと思います。」

シェイキ・アブトラブはまた、バブの伯父に自宅までバブに同伴するように要請した。シェイキ・アブトラブが、この予防手段を取った理由は、集会の終了後、よこしまな心をもつ者らが、バブを傷つけたり、生命を危うくしたりするかも知れないと恐れたからである。実際、それまで、シェイキ・アブトラブが見事に発揮した英知や同情心や細心の注意で、激昂した群集の野蛮行為が阻止されたことが何度もあったのである。シェイキ・アブトラブは、バブとその使命を保護するために、見えざる神の御手の手段として任命された者のようであった。(p.154)

バブは自宅にもどり、しばらくの間、親族と親しく交わりながら比較的静かな生活を送ることができた。その期間中、使命の宣言後最初のノウ・ルーズ（新年）を祝った。その祝日は一八四五年三月であった。

ヴァキル寺院でバブの言葉を聞いた者らの中には、若者のバブが独力で手ごわい敵対者を沈黙させた見事な態度に深く動かされた者らもいた。この出来事のあと、まもなくして、かれらは皆バブの使命を理解し、その栄光を認めた。その中には、シェイキ・アブトラブの甥で成年に達したばかりのアリ・ミルザがいた。かれの心に植えられた種は成長しつづけ、ついに、一八五〇年から五一年の間に、イラクでバハオラに会うことができた。この訪問で熱意とよろこびに満たされ、大いに活気づけられたか

れは、故郷にもどり、一層の精力を傾けて大業の発展に尽くした。その年から現在までのたゆまない努力と、高潔な性格と自国とその政府に対する真心からの奉仕は、人びとに知られるようになった。最近かれがバハオラに宛てた手紙が聖地に届けられたが、その中で、ペルシャにおける大業の進歩に深く満足していることを述べている。

「この国の人民の間に神の威力が表わされているのを見て、おどろきで一言も言えないほどです。この信教を何年も残酷に迫害してきた国で、バビ（バブの信者）として四〇年間ペルシャ中に知られてきた人物が、ある論争事件の唯一の仲裁者とされたのです。その事件は、暴君であり、大業の敵である国王の息子ゼロス・ソルタンと、サヘブ・ディヴァンのミルザ・ファテ・アリ・カーンとの間の論争でした。このバビである仲裁者が下す判決は何であれ、当事者の双方が無条件で受け入れ、即刻実施されなければならないことが一般に公表されたのです。」(p.155)

その金曜日集会の出席者の中にモハメッド・カリムがいたが、かれも同様にバブの立派な態度に惹かれた。かれは、その日に見聞きしたことで、すぐバブの信者となった。その後、迫害を受けてペルシャからイラクに追われ、バハオラの下で理解と信仰を深めていった。後日、バハオラから指示されてシラズにもどり、生涯の終わりまで大業の普及に全力をつくした。アガ・レカブという人も、その同じ金曜日、バブに深く感銘した。それ以来、どれほど激しい迫害を長期間受けても確信をゆるがせることも、大業への愛の火を弱めることもなかった。かれもまたイラクでバハオラに会うことができ、バハオラに「コーランの支離滅裂に見える文字」の解釈と、「ヌールの句」の意味について質問した。その返事として、バハオラから自筆による書簡を受け取った。その後かれはバハオラの道に殉教した。そのほかミルザ・ラヒム・カバズという人物もいた。かれは大胆不敵さと、燃えるような熱意で知られるようになった。かれも死の直前まで大業の発展に努力をゆるめることはなかった。

バブのヘジャーズへの巡礼に同行したハジ・アブル・ハサン・バザズは、バブの使命の偉大さにかすかに気づいていたが、その忘れがたい金曜日に心の奥底から動かされ完全に変わってしまった。そして、バブへの深い愛と献身から涙を流しつづけたのである。かれを知る者は皆その高潔な行動を賞賛し、その慈悲深さと公平無私を称えた。このように、かれは二人の息子同様、行動で信仰の強さを示して、ほかの信者たちから尊敬を得たのであった。その同じ日、故モハメッド・ベサットもまたバブに惹かれた一人であった。かれはイスラム教の形而上的な面の教えに精通し、アーマドと

カゼムを賞賛していた人で、温和な気質をもち、ユーモアに富んでいた。またシェイキ・アブトラブを友人として得、かれと親しく交わり、金曜日の祈りの集会にも欠かさず参加していた。(p.156)

その年の春を告げる新年は、同時に、精神的な再誕生を象徴するものでもあった。全国いたるところで、その精神的春季の最初の躍動がすでに認められはじめていた。ペルシャのもっとも高名で学識のある人たちが何人も、荒涼とした無思慮の状態から抜け出し、新しく誕生した啓示の息吹で生命力をあたえられた。全能の神の御手で、かれらの心に植えられた種は、最高に美しい花を咲かせたのである。神の慈愛と慈悲の微風で、それらの花々の芳香は、国のすみずみまでひろがっていった。それどころか、その芳香はペルシャの国境を越えてひろく放散していったのである。それはさらにカルベラにもとどき、バブの帰りを待ち望んでいた人びとの魂を活気づけた。新年直後バスレ経由で、バブからかれらに書簡がとどけられた。それは、計画の変更があり、ヘジャーズからカルベラを経由してペルシャにもどる約束を果たせないことを知らせるものであった。バブはかれらに、イスファハンに行き、つぎの指示があたえられるまでそこに留まるように指示した。そして、つぎのように付け加えた。「状況がよければ、シラズに行くように。そうでなければ、神の導きが下されるまでイスファハンに留まるがよい。」(pp.157-158)

この思いがけない知らせに、バブのカルベラ到着を待ち望んでいた人たちは動揺した。かれらの忠誠心が試されたのである。不満に思った何人かはこうささやいた。「バブの約束はどうなったのか。神の意志の介入により、約束を破ったというのか。」これら気迷いした者らとちがって、ほかの者らの信仰はいっそう固まり、決意も強まった。かれらは信仰をゆるがせた者たちの批判と抗議をまったく無視して、師の招きによるこんで応じた。そして、敬愛するバブの望みにすべてしたがう決意をもってイスファハンに向かった。その中には信仰を大いにぐらつかせた者も数人いたが、かれらはそれをかくして一団に加わった。

イスファハンの住民のアリ・ナリとその弟のミルザ・ハディは、栄光に満ちた崇高な信教に対する確信を、邪悪な者らの疑念の言葉でくもらせることをしなかった。アリ・ナリの娘は後に最大の枝(アブドル・バハ)と結婚した人である。そのほかにハナ・サブという人もいた。かれもイスファハンの住民で、現在、バハオラの家で奉仕している人である。このバブの忠実な弟子たちの何人かは、シェイキ・タバルシの大

合戦に参加したが、奇蹟的に悲劇的な死をまぬかれた。

イスファハンに行く途中のカーンガヴァルの町で、一団は弟と甥を伴ったモラ・ホセインに出会った。この弟と甥は、モラ・ホセインがシラズを訪れたときの同伴者であり、共にカルベラに向かっているところであった。このとつぜんの出会いに、皆よろこびにあふれ、カーンガヴァルにもっと滞在してくれるように頼んだ。この要請にモラ・ホセインはすぐ応じた。かれはその町で、金曜日の会衆の祈りを先導し、バブの弟子たちがそれにつづいた。そこに居合わせた何人かは、モラ・ホセインが弟子たちから深く尊敬されているのを見て嫉妬の念にかられた。かれらは後日、シラズで信教に対する不実を暴露することになるのであるが、その中にはモラ・ジャバド・バラガニとアリ・ハラティがいた。この二人は指導者の地位を占めたいという野心から、バブの教えを受け入れたように見せかけた。二人共モラ・ホセインが得たうらやましい地位をひそかに傷つけるために、ほのめかしや当てつけを用いて執拗にモラ・ホセインの権威に挑戦した。こうして、かれの名に恥辱をもたらそうとしたのである。

カリムという名でよく知られていたアーマド・カテブは、カズビンの町からモラ・ジャバドに同行して旅をしてきた人であった。わたし（著者）は、かれがつぎのように語るのを聞いた。「モラ・ジャバドはわたしと話しているとき、何度もモラ・ホセインを批判しました。モラ・ホセインへの非難をくり返し聞いたわたしは、かれと交際を絶ちたいと思いました。そのたびに、モラ・ホセインは、モラ・ジャバドに対して寛容な態度をもつようにとわたしに忠告したのです。一方バブの忠実な弟子たちの熱意はモラ・ホセインとの交わりで一層強まっていきました。かれらはモラ・ホセインの模範で教化されたのです。そして、ほかの弟子たちをはるかに凌ぐかれのすばらしい知性と精神性に賞賛を惜しみませんでした。」(pp.159-160)

モラ・ホセインは友人の一団に加わってイスファハンに同行することにした。しかしかれは、仲間の一団より五キロメートルほど前方を一人で行くことにした。日暮れになると休止し、追いついてきた仲間の一団といっしょに祈った。それが終わるとモラ・ホセインは最初に出発し、夜明けに歩を止めて祈るとき、ふたたび熱心な仲間の一団と合流した。仲間たちから強く要請されたときのみ会衆の祈りをしたが、その場合、仲間の一人に祈りをまず唱えさせ、自分はそのあとにつづいて唱えることもあった。このように、モラ・ホセインは仲間たちの心に強い献身の火を点したのであった。そのうち何人かは、歩いて旅をしている人たちに馬を提供し、自分たちは旅の疲れなど

まったく気にかけず、モラ・ホセインの後を徒歩でつづいた。

イスファハンの郊外に近づいたところで、モラ・ホセインは大勢の仲間の一団がとつぜん町に入ると、住民の好奇心をそそり、疑惑を起させるかもしれないと思った。そこで、人目につかないように小人数に分かれて町に入るように忠告した。一団が町に到着後二、三日して、シラズのニュースがとどいた。すなわち、シラズは騒乱状態で、バブとの交際は一切禁止されており、かれらが計画しているその町への訪問はきわめて危険である、というニュースであった。モラ・ホセインは、このとつぜんの悪い知らせにもひるまず、シラズに向かう決心をし、信頼できる少数の仲間だけに、自分の意図を知らせた。そして、身に着ている衣服とターバンを脱ぎ、その代わりに外套とコラサンの住民が用いるペルシャ帽をかぶり、馬の世話係をよそおった。そして、だれも予期しないような時間に、弟と甥といっしょに敬愛する御方の町に出発した。

シラズ市の門に近づいたとき、モラ・ホセインは弟に、真夜中にバブの伯父の家に行くように指示した。伯父を通して自分の到着をバブに知らせてもらうためであった。翌日モラ・ホセインは、バブの伯父が日没一時間後市の城門外で待っているといううれしいニュースを受け取った。モラ・ホセインは約束の時間に伯父に会い、かれの自宅に案内された。バブは数回夜半に伯父の家を訪れ、夜明けまでモラ・ホセインと親しく談話しつづけた。この後すぐ、バブはイスファハンに集まってきていた弟子たちに、徐々にシラズに行き、そこで自分と会えるまで待つように述べた。その際、最大限の注意をはらうように警告し、シラズ市には二、三人ずつ入り、その後すぐ分散して旅人の宿舎に泊まり、めいめい仕事につくように指示した。

モラ・ホセインの到着後二、三日してこの町に到着した最初のグループには、アリ・ナリ、かれの弟のミルザ・ハディ、カリム、モラ・ジャバド、アリ・ハラティ、そしてミルザ・エブラヒムらがいた。バブと交わっているうちに、最後の三人は、徐々に、心が閉じていることを暴露し、卑しい性格をあらわしてきた。バブのモラ・ホセインに対する愛顧が深まっていくにつれて、かれらの怒りははげしくなり、くすぶっていた嫉妬の炎が燃え上がったのである。激怒しても、どうすることもできないかれらは、ついに、詐欺と誹謗という卑しむべき武器に頼った。公にモラ・ホセインに敵意を示すことができなかつたので、あらゆる狡猾な策略を用いて、かれの熱心な賞賛者たちの心をあざむき、敬愛の念を消そうとしたのである。その見苦しい振舞いのため、かれらは仲間の同情を失い、忠実なバブの弟子の一団から切り離されることになった。

その後、かれらは信教の敵と結託し、信教の教えと原則を完全に否定し、その町の住民の間に大騒動を起こしたため、行政当局もその陰謀を恐れて、ついにかれらを追放した。(pp.161-162)

バブは、かれらの陰謀と悪事を詳細に述べた書簡を書いたが、その中で、かれらをサメリの黄金の子牛にたとえた。この子牛は、発言する能力も魂もない、卑しむべき手工品であり、不従順な人びとの礼賛的である。モラ・ジャバドとアリ・ハラティに関して、バブはつぎのように書いた。「おお神よ。この正道を踏みはずした者らの二つの偶像、ジェプトとタグートに罪の宣告が下されますように。」その後、この三人はケルマンに行き、カリム・カーン（バブの悪名高き敵）と結束した。そして、カリム・カーンの陰謀をいっそう進め、かれの信教に対する非難をますます激化するために全力をつくしたのである。

かれらがシラズから追放された後のある夜、バブは伯父のセイエド・アリ自宅で、アリ・ナリ、ミルザ・ハディ、およびカリムと会った。バブはとつぜんカリムに向かって聞いた。「カリムよ。あなたは顕示者を探しているのか。」この上なくやさしく、静かに語られた言葉にカリムは茫然となった。このとつぜんの質問に、はげしく動揺し青ざめたかれは、どっと涙を流しながらバブの足元に身を投げた。バブはかれをやさしく腕に抱きかかえ、額に接吻して、自分のそばに座るように述べ、慈愛にあふれた言葉で、かれの心の動揺をしずめた。

家にもどるとすぐ、アリ・ナリと弟はカリムに、かれをとつぜん襲った激しい心の動揺の原因について質問した。かれはこう答えた。「お聞きください。今までだれにも明かさなかった不思議な体験をお話しましょう。成年になってまだカズビンに住んでいたころのことです。わたしは神の神秘を解明し、その聖者と預言者の本質についてどうしても理解したいという強い熱望を感じていました。ところが、学問を身につけなければこの目標に達することができないことに気がついたのです。そこで父と伯父たちの同意を得て、仕事をやめ、勉学と研究に没頭しはじめました。カズビンの神学校に入学し、あらゆる分野の学問の修得に努力しました。そして、学んだ知識について、ほかの学生とよく討議しました。自分の経験を豊かにしたいと思ったからです。夜になると家に帰り、書齋に閉じこもって、だれにも邪魔されずに何時間も勉強しました。このように学問に没頭したわたしは、睡眠にも空腹にも無頓着になってしまったほどでした。二年内に、イスラム教の複雑な法学と神学を修得する決心をし、カリ

ム・イラバニの講義に欠かさず出席しました。この師は、当時、カズビンで聖職者として最高の地位にありました。わたしは、かれの博識、敬虔、美德を心から賞賛していました。毎夜、論文を書いて提出したところ、それに関心を向け、注意深く修正してくれたのです。かれはまた、わたしの進歩をひじょうによるこんでくれているようで、わたしの修得した学識の深さをよくほめてくれました。(pp.162-163)

ある日、学生たちが集まっているところで、師はこう公表しました。『学識を修得した賢明なカリムは、イスラム教の聖典の解説者として権威を獲得した。かれはもはや、わたしの講義にも、ほかの教師の講義にも出席する必要はない。来る金曜日に、かれが法学者としての地位を得たことを祝い、会衆の祈りの後、かれに修業証書を渡す予定である。』

この言葉を残して師がその場を去った直後、学生たちがわたしの方きて、わたしの業績を心から祝ってくれました。わたしは胸を大きくふくらませて帰宅しました。家にもどると、カズビン中で高く尊敬されている父と伯父の二人が、わたしの卒業を祝うために祝宴を準備していました。わたしは二人に、カズビンの著名人への招待をのぼすように頼みました。かれらはよろこんでこの要請に応じてくれました。かれらは、わたしもそのような祝宴を望んでいるはずだから、長くは延期しないであろう、と思ったのです。その夜、わたしは書齋に入って一人きりになり、考え込みました。(p.163)

わたしは自分にこう問いました。『おまえは清められた精神をもつ者だけが、イスラム教の聖典の解説者として権威ある地位にのぼれる、などとあさはかにも想像していなかったか。おまえはこの地位に達した者は誤りを犯さないと信じ込んでいなかったか。おまえはすでに、その地位を獲得した者とみなされるのではないのか。カズビンのもっとも著名な聖職者がおまえがその地位に達したことを認め、公表したのではないのか。公正に判断せよ。おまえは胸の中で、自分はそのような清純と崇高なる超脱の域に達した者だとみなすのか。その状態は以前、おまえがその高い地位を切望する者の必要条件だとみなしていたものではないか。おまえは自分を利己的な欲望の汚れをすべて捨て去った者だとみなすのか。』

座って考えているうちに、徐々に、自分には価値がないという思いにおそわれてき

ました。わたしはいまだに、心配や困惑、誘惑や疑いに迷わされているのがわかっていました。講義の進め方、会衆の祈りの導き方、イスラム教の法律や戒律の実施方法などを考えると、心が重くなったのです。自分の義務をどのように果たせばよいのか、前任者よりすぐれた業績をどのように成し遂げればよいのか、などと心配しつづけました。そうしているうちに、強い屈辱感におそわれ、神に許しを求めずにはおれなくなりました。学問修得の目的は、神の神秘を解明し、確信に至ることではなかったのか、と心の中で思ったのです。『公正に判断せよ。おまえのコーランの解釈に確信がもてるのか。おまえが公布する法律は、神の意志を反映していると確信できるのか。』と自分に問いました。そのときとつぜん、自分が間違っているのに気づいたのです。はじめて、いかに学識のさびがわたしの魂に食い込み、ヴィジョンをくもらせたかを悟ったのです。わたしは自分の過去を後悔し、これまでの無駄な努力を嘆きました。わたしと同じ地位にある人たちも、同じ苦悩をもっていることを知っていました。かれらは、いわゆる学識なるものを修得したとたんに、イスラム教の法律の解説者となり、その教義を判断する特権を得るからです。

このように、夜明けまで考えにふけていました。その夜、わたしは何も口にせず、また睡眠も取らないで、神に祈りました。『おお、わが神よ。あなたはわたしの苦境を見ておられます。あなたの聖なるご意志とご満足に添わない望みは一切もっていないこともご存知です。あなたの聖なる宗教が、多数の宗派に分かれていることを見て、当惑しております。過去の宗教が分派に裂かれたことを見て深くとまどっております。当惑しているわたしを導き、疑念を取り除いて下さい。慰めと導きを得るためには、どこを向けばいいのでしょうか。』(p.164)

わたしは、その夜、号泣のあまり意識がもうろうとなっていました。そのときとつぜん、大勢の人びとが集まっている幻を見たのです。その人たちの輝く顔にわたしは深い感銘を受けました。セイエド（モハメッドの子孫）の衣を身につけた高貴な人物が、説教壇に座り会衆に向かって、コーランのつぎの聖なる句の意味を解説していました。『わがために努力をする者らを、わが道において導こう。』わたしは、この人物の顔に惹かれて立ち上がり、その方に歩み寄り足元に身を投げようとしたとき、とつぜん、幻は消えました。そのときわたしの心は光で満たされ、言葉では表現できないほどのよろこびで一杯になったのです。

そこですぐ、モハメッド・ジャバド父、アラー・バルディに相談しました。かれは

カズビンの町では、鋭い洞察力で知られている人でした。わたしの見た幻を話したところ、かれは笑みを浮かべ、その幻に現われたセイエドの特徴を、おどろくほど正確に描写したのです。そしてこう言いました。『その高貴な人物は、カゼムにほかなりません。かれは今カルベラに滞在しており、毎日イスラム教の聖なる教えを弟子たちに解説しています。かれの講義を聞いた者は、活気づけられ、啓発されますが、かれの言葉が聴衆にあたえる影響を十分述べることはできません。』

これを聞いてうれしくなったわたしは立ち上がり、かれに真心から感謝の言葉を述べて家にもどり、カルベラへの旅の準備をはじめました。以前から知っている仲間の弟子がきて、わたしに『学者のカリムという人が、あなたに会いたいそうですので、かれの家を訪問していただけますか。それとも、かれに来ていただいた方がよろしいでしょうか』と聞きました。わたしは、こう答えました。『わたしは、カルベラのエマム・ホセインの廟を訪れたいと願ってきました。その巡礼の旅を今すぐはじめることにしましたので、これ以上出発を延ばすことはできません。この町を離れるとき数分間、かれを訪れることができるかもしれません。もし、できなければ、お許しを願い、わたしが正しい道に導かれるように祈って下されば幸いです。』

わたしは親戚の者たちに、わたしの見た幻とその意味を内密に明かし、カルベラへの訪問計画も知らせました。その日、わたしの言葉で、かれらはカゼムを敬愛するようになり、また、アラー・バルディにも強く惹かれ、かれとこだわりなく交わり、かれの熱心な賞賛者となったのです。(pp.165-166)

わたしの弟、アブドル・ハミド（後日、テヘランで殉教）は、わたしのカルベラへの旅に同行しました。カルベラで、わたしはセイエド・カゼムに会い、その講義の様子を見てびっくりしました。幻で見たのとそっくりであったからです。かれは講義の中で、ある節の解説をしていましたが、それも幻で聞いたのとまったく同じ節の解説でしたので、さらに仰天しました。わたしは席につき、講義に耳を傾け、その論説の力強さと思考の深遠さに深く感銘したのです。講義が終わると、かれはわたしを礼儀正しく迎え、大変親切にしてくれました。弟もわたしも、これまでに経験したことのないようなよろこびを感じました。夜明けに、二人でかれの家に行き、かれに同行してエマム・ホセインの廟を訪問しました。

わたしは冬の期間ずっとかれと親しく交際しました。その間、かれの講話に欠かさず出席しましたが、講話の内容はつねに約束されたガエムの顕示に関するものでした。かれはこのテーマを唯一の主題としていたのです。どの文章、またはどの伝承について解説していても、かならず最後には、約束された啓示の出現に言及して講話を終え、公につきのような宣言をくり返したのです。『約束された御方はわれわれの間におられる。その御方の定められた出現時は刻々近づいている。その御方の到来のために準備するがよい。その御方の美を認めることができるように心を清めることだ。わたしがこの世を去るまでは、その御方は現われなくなっている。皆はわたしの死後、その御方を探すために立ち上がらなければならないのだ。その御方を見つけるまでは、一瞬たりとも休んではならぬ。』(p.166)

新年を祝ったあと、カゼムはわたしにカルベラから去るように命じ、別れのあいさつをしました。『カリムよ。安心するがよい。あなたは神の啓示の日に、この大業の勝利のために立ち上がる者らの一人であるからだ。その祝福された日に、わたしを思い起こしてくれるように願う。』わたしがカズビンにもどると、その町の僧侶たちの敵意を刺激するので、カルベラに居残りたいとかれに願いました。答えはこうでした。『神を完全に信頼し、かれらの陰謀をまったく無視して仕事につきなさい。かれらが反対しても、あなたは絶対に傷つくことはないので安心しなさい。』わたしはこの忠告にしたがい、弟といっしょにカズビンに向かいました。

カズビンに到着後すぐカゼムの勸告を実行しました。カゼムの指示にしたがうことにより、わたしは悪意をもった反対者たちをすべて黙らせることができました。日中は仕事にはげみ、夜になると家にもどり、静かな部屋で祈りと瞑想に時間を過ごしました。わたしは涙して神と交信し、つぎのようにこん願したのです。『あなたはこう約束されました。あなたから靈感を受けた者の口を通して、わたしは聖なる日を見、あなたの啓示を目撃できると。あなたはまた、こう約束されました。わたしはあなたの大業の勝利に立ちあがる者らの一人になると。ではいつその約束を果たされるのでしょうか。いつあなたの慈愛ある御手で、その恩恵のとびらを開き、その不滅の恩寵をわたしに付与して下さるのでしょうか。』わたしはこの祈りを毎夜くり返し、夜明けまでたん願しつづけました。

一八四〇年二月一三日の前夜、祈りにふけっているうちに、夢うつつの状態になりました。すると、わたしの眼前に雪のように白い小鳥があらわれ、わたしの頭上を舞

ったあとそばの木の小枝に降りました。言葉では言い表せないような甘美な音調で、つぎのように述べました。『カリムよ。あなたは顕示者を探しているのか。一八四四年まで待つがよい。』そしてすぐ、小鳥はどこかへ飛び去ってゆきました。わたしはこの神秘的な言葉に深く動揺しました。また、その幻のすばらしさは、長い間、わたしの心に残り、まるで楽園のよろこびをすべて味わっている気分でした。このよろこびは抑えがたいものだったのです。(pp.166-167)

このように、小鳥の神秘的なメッセージは、わたしの魂に深く浸透し、わたしから一時も離れることはありませんでした。しかし、それをつねに思いめぐらしながらも、だれにも話すことはしなかったのです。その甘美さがなくなるのを恐れたからです。数年後、シラズでの聖なる宣言がわたしの耳にとどきました。その日にすぐ、わたしはシラズに向かい、その途中のテヘランで、モハメッド・モアレムに会いました。かれは、その宣言の内容を教え、それを受け入れた者たちは、カルベラに集合して、指導者がヘジャーズからもどるのを待っていると知らせてくれました。ところで、この旅できわめて苦痛であったのは、モラ・ジャバド（大業の違反者）がハマダンからカルベラまで同行してきたことでした。カルベラで、幸いあなたやほかの信者たちに会うことができましたが、その間もずっとわたしは、あの小鳥が伝えてくれた不思議なメッセージを胸に秘めていました。その後、バブの面前に出て、かれの口からわたしが以前聞いたと同じ音調の同じ言葉を聞いたとき、その意味をはじめて悟ったのです。その威力と栄光にすっかり圧倒されたわたしは、思わずバブの足元にひざまずき、かれの名を称えました。」

一八四八年のはじめ、一八才になっていたわたし（著者）は、故郷のザランドの村を出てクムの町に行った。そこで、ザビーという称号のエスマイル・ザバレと偶然出会った。かれは後日、バグダッドで、バハオラの道に自らの生命をささげた人である。かれを通して、わたしは新しい啓示を認めることができたのである。かれは当時、シェイキ・タバルシ砦の勇敢なる防御者たちに加わる決心をして、マザンダランへの出発準備をしていた。そのとき、わたしと同年の若者でクム出身のハカクとわたしを連れて行く予定であったが、状況の変化で、それができなくなった。そこで、出発前に「テヘランについた後、いつ合流できるかを知らせる」と約束した。談話中に、かれはカリムの不思議な経験について語った。それを聞いたわたしは、この人物にどうしても会いたいと思った。その後、テヘランに行き、その町の寺院の神学校で、エスマイル・ザバレに会った。かれは、その神学校に住んでいたカリムをわたしに紹介して

くれた。そのころ、シェイキ・タバルシ砦の戦いが終わり、タバルシの仲間に加わろうとテヘランに集合していたバブの弟子たちは故郷にもどったことを知った。カリムは首都テヘランに留まり、ペルシャ編のバヤン書（バブの著作）の複写に専念した。当時、わたしはかれと親しく交際し、その間かれに対する敬愛と賞賛は深まっていった。テヘランでの最初の出会ってから三八年がたった今も、かれの友情とその信仰の深さを感じるのである。このかれに対する愛情と尊敬が、かれの生涯の前半について長々と述べる理由となったのである。これはまた、かれの生涯の転換点となった出来事でもあった。読者も、以上の話を読んで、この偉大な啓示を認められるようになれば幸いだと願っている。(p.168-169)

第九章 巡礼後のバブのシラズ滞在（つづき）

モラ・ホセインがシラズに到着してまもなく、町の住民はふたたび抗議の声をあげだした。モラ・ホセインがバブと親密に交際をつづけているのを知って不安になり、さわぎはじめたのであった。「この男はわれわれの町に来て、またもや反旗をひるがえそうとしている。かしらと共に、われわれの伝統ある機構をこれまで以上に攻撃しようとしているのだ。」不穏な町の状態を見たバブは、モラ・ホセインにヤズドを通して故郷のコラサンに帰るように指示した。シラズに集合していた残りの弟子たちにはイスファハンにもどるように命じた。ただ、カリムだけは残し自分の著述を書き写す仕事をあたえた。

この賢明な予防策によって、怒り狂う住民の暴動の危機はまぬかれた。むしろバブの教えがシラズ市外にもひろがってゆくはずみをあたえたのであった。国中に分散していたバブの弟子たちは、大勢の人びとに、新しく誕生したバブの啓示がもたらす再生力の偉大さを大胆に宣言しはじめた。バブの名声はいたるところにひろがり、首都テヘランと各州の権力者たちの耳にもとどいた。指導者たちも一般大衆も、熱心に質問しはじめた。バブの直弟子から、その出現の先触れとなったしるしや状況を聞いた者たちは、大変におどろき、不思議な思いでいっぱいになった。政界と宗教界の指導者たちは、自ら出かけるか、または、有能な代表者たちを送って、このおどろくべき運動について調べはじめた。(p.170-171)

モハメッド国王も、バブに関する報告が真実かどうかを確かめ、その内容を調べることにした。そこで、臣下の中で、だれよりも学識があり、雄弁で影響力をもつヤヒヤ（呼称ヴァヒド）を代表として選び、バブに会見させ、調査の結果を報告させることにした。ヤヒヤが公正で、すぐれた能力と鋭敏な洞察力をそなえていることを確信していたからであった。ヤヒヤは、ペルシャの有力者たちの中でも最高の地位にあり、宗教界の指導者たちが多数出席した会合では、つねに主な講演者であった。かれに向かって意見などを出す者はなく、皆かれを尊敬して沈黙を守った。皆その英知と比類のない知識と慎重な分別を認めていたからである。(p.171)

当時、ヤヒヤは国王の賓客として、儀式担当のルツ・アリの邸宅に滞在していた。国王はルツ・アリに、ヤヒヤをシラズに送ってバブについて調査させよ、と秘密命令

を出した。「こう伝えよ。われは、かれの高潔さを信じてうたがわない。その高い道德観念と知性は賞賛すべきもので、バブの調査には、聖職者の中で最適任者であるとみなす。かれを、シラズに送り、十分に調査させ、その結果をわれに知らせよ。その後、取るべき方法が分かろう。」

ヤヒヤ自身も、バブが何を主張しているかを直接知りたいと思っていたが、事情が許さず、ファルスへの旅ができないでいた。そこで、よろこんで国王の要請を受け、これで自分の望みも果たせると思い、すぐシラズに向けて出発した。旅の途中、バブに差し出す質問をいろいろと考えた。バブの使命が真実で、正当であるかどうかは、これらの質問への応答次第であると考えた。シラズに到着後、コラサン滞在中親しくなったアジムという呼称をもつシェイキ・アリに会った。そこでアジムに、バブとの会見に満足したかどうかを聞いた。アジムはこう答えた。「バブに実際会われて、ご自分の力でその使命をよく調べられるようにすすめる。友人としてあなたに忠告するが、後になって、バブへの無礼を嘆くことがないように、最高の礼儀をつくしてバブと話されるがよい。」(p.172-173)

ヤヒヤは、セイエド・アリ（バブの伯父）宅でバブに会い、アジムの忠告通りにバブに礼儀を示した。そして、およそ二時間にわたってバブに質問した。それは、イスラム教の形而上学的な教えの難解な論題、コーランの中のあいまいな節、エマムの神秘的な伝承と予言についてであった。バブはまず、ヤヒヤの質問に注意深く耳を傾け、そのあと、各質問に手短ではあるが説得力のある答えで応じた。この簡潔で明晰な答えに、ヤヒヤはおどろき、賞賛の気持ちでいっぱいになった。そして、自分の生意気さと誇りを恥じた。同時に優越感も完全に消え去った。その場から去るときバブにこう述べた。「次の会見で、残りの質問を提出してわたしの調査を終わりたいと思っています。」

そこから離れるとすぐアジムに会い、会見の様子を語った。「バブに自分の知識を必要以上に長々と述べたあと、質問しました。バブは、質問に簡潔に答え、これまで解決できないでいた問題を解いてくれました。わたしは屈辱感でいっぱいになり、かれの面前にいたことがいたたまれなくなって、いそいで別れを告げました。」アジムは、前にあたえた忠告をかれに思い出させ、次回には、それを忘れないようにと念押しした。二回目の会見で、ヤヒヤはバブに提出するつもりであった質問を、完全に忘れてしまっているのに気づき、仰天した。そこで仕方なく、調査とは関係のない質問を出した。

すると、バブはかれが一時忘れていた質問に、以前と同じように、明晰かつ簡潔に答えはじめたのである。これに一層おどろいたかれは、後日、こう述べた。(p.173)

「わたしは、深い眠りにおちっていました。ところが、それまで忘れていた質問に答えているバブの言葉が耳に入り、はっと目が覚めたのです。その声は、わたしの耳にずっとこだましていました。『それは結局、偶然の一致ではなかったのか。』わたしの心はかき乱され、考えをまとめることができませんでした。で、再度、許しを請うてその場を去りました。その後、アジムに会いましたが、かれはわたしを冷たく迎え、きびしく忠告しました。『あなたもわたしも学校に行かなかった方がよかったのだ。われわれがつまらないことに気を取られ、うぬぼれているため、われわれを救ってくれる神の恩恵を受けられないでいるのだ。それどころか、その源泉である御方に苦しみをあたえているのだ。次回の会見前に、バブの面前にふさわしい謙虚さと超脱心をもって出られるように、そして、あなたを悩ませている不安と疑問をバブが慈悲深く除いて下さるように、神にこん願されてはどうか。』

バブとの三回目の会見で、コーサルの章（コーラン）の注釈を要請することにしました。しかし、バブにはその要請を言わないことにしたのです。もし、バブがわたしから求められずに、その注釈を著わしはじめ、しかもそれが、現在コーランの注釈者たちが用いている基準とはまったく違ったものであれば、かれの使命は神から下されたものであることを確信し、よろこんでかれの大業を受け入れようと決めました。そうでなければ、バブを認めないことにしたのです。こう決心して行ったところ、バブの面前に案内されたたん、自分では説明できない恐怖感におそわれました。かれの顔を見てわたしの四肢はふるえ出したのです。国王の面前に何回出ても、少しも臆病になることなどなかったわたしですが、そのときばかりは、畏敬の念でいっぱいになり、胸がドキドキして立っていることもできなくなったのです。これを見たバブは、席から立ち、わたしの方に歩み寄り、わたしの手を取って、自分のそばに座らせました。そして、こう言われました。

『わたしに望んでおられることを述べなさい。よろこんで、それを明らかにしてあげよう。』わたしは、おどろきで何も言えませんでした。理解することも話すこともできない赤子のようになっていたのです。バブはほほ笑みながら見つめ、こう述べられました。『コーサルの章の注釈を著わせば、あなたは、わたしの言葉が神から下されたものであることを認めますか。わたしの言葉は、魔術や魔力とはまったく関係がないこ

とを認めますか。』この言葉を聞いてわたしの眼からは涙があふれ出てきました。そのとき、わたしの口からもれたのは、このコーランの句だけでした。『おお、われらの主よ。われわれは、自分自身を不当に取り扱いました。あなたがわれわれを許されず、哀れにも思ったださらなければ、われわれは、かならず滅びるであります。』
(p.173-174)

昼過ぎに、バブは伯父に筆箱と紙をもって来させ、コーサルの章について注釈を書きはじめられました。そのときの威厳にみちた光景は述べるすべがありません。かれのペンから、おどろくべき速度で言葉が流れ出しました。信じられないほどの筆記速度、おだやかでやさしい声、そして強烈な文体にわたしは仰天してしまいました。バブは、日没まで書きつづけたあと、ペンを置き、紅茶を求められました。その直後、わたしの前で声高らかに読みはじめられたのです。その崇高な注釈に秘められている宝を、この上なく甘美な音調で、流れるように囁かされるのを聞いて、気が狂わんばかりに心が躍動しました。そのあまりの美しさにわれを忘れ、三回以上も気絶しそうになりました。バブは、わたしの意識を回復させるために、バラ香水を顔にふりかけました。そこで元気を取りもどしたわたしは、かれの朗読を最後まで聞くことができたのです。(p.175)

バブは、朗読を終えると席を立ち、伯父にわたしの世話を依頼しました。『この方は、カリムと協力して、この新しい注釈文を書き写し、それが正確になされたかどうかを確認するようになっている。それまで、あなたの客人となるのでよろしく頼む。』カリムとわたしは、三日三晩この仕事に専念しました。注釈文を読む仕事と、それを書き写す仕事を交代でやりながら全文を終え、その中の伝承が正確であるかどうかを確認しました。この仕事にたずさわったことで、わたしの確信は不動のものとなったのです。たとえ地上の勢力が団結して向かってきたとしても、この偉大な大業への確信をゆるがすことはできなかつたであります。

わたしは、シラズに到着以来、ファルスの知事ホセイーン・カーンの家に滞在してましたので、その家を長期間留守にすると、知事はわたしを疑いだし、怒るかも知れないと感じました。そこで、バブの伯父とカリムに別れを告げ、知事の家にもどりました。わたしを探していた知事は、わたしがバブの魔力にとりつかれたかどうかを知りたがりました。わたしは、こう答えました。『人間の心を変え得るのは神だけです。神以外にはわたしの心を取りこにするものはありません。神から下された人だけがわ

たしの心を惹きつけることができます。その人の言葉はまさしく、真理の声だからです。』

この答えに、知事は黙ってしまいました。しかしその後、知事はほかの者たちに、わたしもまた、手のつけようがないほど、かの若者（バブ）の魅惑のとりこになった、と述べていることを知りました。かれはさらに、モハメッド国王に書簡を送り、シラズに滞在中、わたしは市の僧侶たちとの交際をすべてことわった、と訴えたのです。『かれ（ヤヒヤ）は、名目上はわたしの客人ですが、何日もつづけてわたしの家を留守にしました。かれがバビ（バブの弟子）になり、心も魂もバブのとりこになったことは間違いありません。』(p.176-177)

国王自らも、国の式典で、アガシ（総理大臣）につぎのように言われたそうです。『最近、ヤヒヤがバビになったという報告を受けた。もし、それが事実であれば、かのセイエド（バブ）の大業をさげすむことを止めなければならない。』一方、ホセイン・カーン（ファルスの知事）は、つぎのような命令を国王から受けました。『われは臣下に、ヤヒヤの高い地位を損なうような非難の言葉を口にするのをきびしく禁じる。ヤヒヤは、高貴な家柄の出身で、深い学識を身につけ、最高の美德をそなえている。また、いかなる場合でも、国益とイスラム教に役に立たない運動に耳をかすような人物ではない。』知事は、この国王の命令で、公にはわたしに反対できませんでしたが、ひそかにわたしの権威を傷つけようとしていました。知事が敵意をいただいていることは顔に表われていました。しかし、国王がわたしに好意を寄せておられるので、わたしを傷つけることも、わたしの名声を落とすこともできなかったのです。

その後、バブはこう命じました。ボルジェルドに旅し、わたしの父に新しい神のメッセージを細心の注意をはらって伝えるようにと。父は、わたしの話を聞いてバブのメッセージを否認しようとはしなかったのですが、それに関わることはせずに、自分の道を選びました。」(p.177)

もう一人、その国で高い地位にあった人で、バブのメッセージを冷静に調査して受け入れたのは、モラ・モハメッド・アリであった。かれは、ザンジャン出身で、ホッジャトという呼称をバブからあたえられていた。かれは、独立心とすぐれた独創性をもち、伝統的なもの一切から自分を切り離していた。そして、聖職者の階級制度、す

なわち、高い地位のアブヴァブ・アルバエ（不在のエマムと信者の媒介者）から、一番低い地位にある僧侶にいたる階級制度を非難し、聖職者たちの品性を軽べつし、その墮落と悪徳をなげいていた。

ホッジヤトはまた、バビになる前に、シェイキ・アーマドとセイエド・カゼムの兩人をも軽蔑していた。シーア派の歴史を汚した悪行をひどく憎んでいたもので、その派に属する者は、たとえ高い学識をそなえていても、考慮に値しないとみなしていたのである。かれはザンジャンの僧侶たちと激しい論争をすることもあった。国王の仲裁がなかったならば、それらの論争は、危険な騒動と流血になっていたであろう。そしてある日、かれはついに首都テヘランに召されることになった。テヘランとほかの都市の聖職者代表たちの前で、自己の主張の正しさを証明するように求められたのである。かれは独力でその卓越性を証明し、代表たちを黙らせることができた。代表者たちは、胸中ではホッジヤトの意見に反対し、その行為を非難したが、表面では、かれの権威を認め、その意見に同意せざるを得なかった。

同国人を信頼せず、その判断力を軽蔑していたホッジヤトは、他人の賞賛にも、非難にもまったく無関心であった。聖なる呼び声がシラズからとどくやいなや、自分の信頼する弟子の一人、エスカンダールに、シラズに行ってこの件を十分調査し、その結果を報告するようにと命じた。エスカンダールは、バブの面前に出るとすぐ、新しい生命力を感じ取った。そしてシラズに四十日留まったが、その間、バブの栄光ある知識をできるかぎり吸収した。(p.178-179)

エスカンダールがバブの許しを得てザンジャンにもどったとき、その市の有力な僧侶たち全員がホッジヤトのところに集まっていた。かれが姿をあらわすとすぐ、ホッジヤトは、バブの教えを信じたかどうかをたずねた。エスカンダールは、持参したバブの書き物を差し出し、「わたしの師であるあなたの判断にしたがうのが自分の義務だと思います。」と述べた。ホッジヤトは、怒って叫んだ。「何だと？ 名士の方々がおられなければ、お前をきびしく罰するところだ。信仰上の問題を他人の賛否によって決めるとは何ごとだ。」

ホッジヤトは、エスカンダールからガューモーウル・アズマ（バブの書）を受け取り、その一ページに眼を通した瞬間、地面にひれ伏し叫んだ。「この書の言葉は、コー

ランと同じ源泉から来たものだ。この聖なる書が真実であると認めた者は皆、その中の言葉が神から下されたことを証言し、その著者の教えにしたがわなければならない。この集會に集まった方々に証人となってもらおう。わたしはこの書の著者に真心からの忠誠を誓う。たとえ、その御方が夜を昼と呼び、太陽を蔭と宣言されたとしても、わたしはためらわずに、その判断にしたがい、その意見を真理の声とみなそう。その御方を否認する者はだれであれ、神自身を否定する者とみなす。」こう述べて、かれは集會を終えた。(p.179)

前章で、ゴッドスとサディクが、貪欲な暴君ホセイン・カーン（ファルスの知事）からきびしく罰せられ、シラズから追放された件について不十分ながら述べてみた。ここでは、両人がシラズ市から追放されたあとの活動を見ることにする。二人は二、三日間共に旅をした後別れた。ゴッドスはカリム・カーンと会見するためにケルマンに向かい、サディクは、ヤズドに歩を向けた。ファルスで強制的に放棄させられた宣布活動を、ヤズドの僧侶たちの間でつづけるためであった。

ゴッドスはケルマンに到着後、カルベラ滞在中に知り合ったジャヴァドの家に迎え入れられた。この人の学識と能力は、ケルマンの住民にひろく知られていた。ジャヴァドは自宅での集會で、若者の客人（ゴッドス）に、かならず名誉の席をあたえ、最高の敬意と礼儀を示した。ひじょうに若く、一見平凡な人物ゴッドスが特別扱いを受けていることに、カリム・カーンの弟子たちはねたましく思った。そこで弟子たちは、そのことを大げさに誇張して述べ、師（カリム・カーン）の内部にひそんでいる敵意をかき立てようとした。「見て下さい。バブから深い愛情と信頼を受けている弟子（ゴッドス）が、今、ケルマンで最高権威をもつ人物の賓客になっています。ゴッドスと親密に交わったならば、ジャヴァドの魂には毒が盛られるに違いありません。こうして、ジャヴァドが手段となって、あなたの権限は失われ、あなたの名声は消されることになりかねません。」臆病者のカリム・カーンは、その悪口を聞いて不安になった。そこで知事に要請した。ジャヴァドとゴッドスの危険な交わりを止めさせるようにと。知事はその要請をジャヴァドに伝えた。穏健さを欠くかれは、その知事の要求にふんがいし、はげしく抗議した。(p.180)

「この悪質な陰謀者カリム・カーンの毒舌を無視するように、何度あなたに忠告したことか。わたしが我慢していたので、この男は大胆となったのだ。自分の限界を超えないように注意されるべきだ。かれはわたしの地位をうばいたいのか。かれこそ、自

宅に卑劣で恥ずべき者らを一勢迎え、かれらに卑しいおべっかを浴びせかけている男ではないのか。そして、不信心者をほめ称え、潔白な人の発言を封じてきたばかりか、毎年悪人と結託し、物欲を満足させてきた。さらに、神聖なるイスラム教に向かって悪口雑言を吐きつづけてきた。わたしが黙っていたのでますます無遠慮になり、横柄になってきたのだ。自分は大変に汚い行為をしながら、わたしが深い学識と高尚な品性をそなえた人をわが家に迎えることをいやがるのだ。悪行を止めないならば、町の悪党たちを扇動して、かれをケルマンから追放するので、その警告を受けるべきだ。」

知事はこの激しい非難にうろたえ、自分の言ったことを謝った。そして去る前に、自らカリム・カーンを目覚めさせてその愚行に気づかせ、反省させるので心配はない、とジャヴァドを安心させた。知事から報告を聞いたカリム・カーンは、激しいうらみで身もだえした。が、それを抑えることも、発散させることもできなかった。そしてついに、ケルマンで指導権をにぎる望みを一切放棄した。このように、この知事への要請は、長年の野心の消滅を弔う鐘の音となったのである。

ジャヴァドは自宅でゴッドスと二人きりになり、カルベラを出てケルマンに到着するまでの活動を聞いた。ゴッドスがバブの弟子となった状況とバブに同行した巡礼の話に、ジャヴァドの想像力はかきたてられ、心に信仰の炎が点されたが、むしろ自分の信仰をかくすことにした。その方が新しい共同体の利益をより効果的に擁護できると思ったからであった。ゴッドスは愛情をこめてつぎのように述べた。「あなたの高尚な決意は神の大業への大いなる奉仕とみなされます。全能の神はあなたの努力を援助し、つねに勝利をもたらされるであります。」(p.181-182)

上述の出来事をわたしに（著者）に語ってくれたのは、ガウガであった。かれはケルマン滞在中、ジャヴァド自身の口からこのことを直接聞いていた。ジャヴァドの前述の意図が誠実なものであったことが、後日はっきりと証明された。すなわち、尽力を重ねて、ついに陰険なカリム・カーンの攻撃を防ぐことができたのである。このジャヴァドの挑戦がなかったならば、カリム・カーンは、信教に計り知れないほどの害をおよぼしていたであろう。

さてゴッドスは、ケルマンを離れてヤズドに向かうことにした。そこから、アルデカーン、ナイエン、アルデスタン、イスファハン、カシャン、クム、そしてテヘラン

へと進んでいった。いずれの都市においても邪魔者に出会ったが、耳を傾ける人びとに新しい教えの根本原則を理解してもらうことができた。(p.182)

わたしは（著者）はババオラの実弟アガ・カリムが、テヘランでゴッドスと会ったときの状況をつぎのように話すのを聞いた。「ゴッドスの魅力ある人格とひじょうに温和で、しかも威厳のある態度は、それまで無頓着であった人の心をも引きつけました。かれと親しく交わった者は皆、ゴッドスの魅力のとりこになったのです。ある日、かれが祈りの前の洗浄をしているのを見ましたが、そのあたりまえの行為に、ほかの者にはない優雅さがあり、深く心を動かされました。われわれの眼には、かれは清らかさと優雅さの権化に見えたのです。」

ゴッドスはテヘランでババオラの面前に案内された。その後、マザンダランに向かい、生地バルフォルージュの実家で親族の愛情にかこまれて二年を過ごした。かれの父は、最初の妻の死亡後再婚していた。この第二の妻は実母以上にやさしくゴッドスの世話をした。この義母はゴッドスの結婚式を見たいと願っており、その「最大のよろこび」の日を見る前に自分は死ぬのではないかとよく心配していた。これにゴッドスはつぎのように述べた。「わたしの結婚の日はまだです。その日は言葉では表現できないほど素晴らしいものでありましょう。結婚式はこの家でではなく、サブゼ・マイダンの真ん中、天蓋の下で、大衆の面前で行われるでしょう。そのときわたしの望みが果たされるのです。」

この義母は三年後、ゴッドスがサブゼ・マイダンで殉教したのを知らされたとき、ゴッドスの言葉を思い出し、はじめてその意味を理解することができた。さて、ゴッドスは、マーカーの砦に監禁されているバブを訪問してもどってきたモラ・ホセインと合流し、バルフォルージュからコラサンに向かって出発した。この二人の旅での勇敢な行為は忘れがたいものとなった。それは、同国人のだれといえども匹敵できないものであった。(p.183)

ここで、ゴッドスと別行動をとったモラ・サディクについて述べてみよう。かれはヤズドに到着後すぐ、コラサン出身の信頼できる友人に、その地方の大業の進歩についてたずねた。とくに、アーマド・アズガンディの活動について聞いたところ、かれが不活発になっていることを知っておどろいた。というのは、アーマド・アズガンデ

イは信教の神秘がまだ明かされていなかった時期に、大変な熱意をもって活動していたからであった。友人はかれについてつぎのように語った。

「アーマド・アズガンディはかなり長い期間自宅に閉じこもり、約束された新しい宗教制度の到来時期と、その特性に関するイスラム教の伝承と予言の編さんに集中しました。かれは一般に本物であると認められている伝承を一万二千以上収集し、その編さん書を書き写して普及させる手段を講じました。さらに、礼拝集会や会合の度に、その書から引用した句をためらわずに用いるように仲間の弟子たちに勧めました。そうすれば、自分の敬愛する大業の進歩を妨げる障害物を除けると考えたのです。

アーマド・アズガンディはヤズドで、市の最高のイスラム法学者である伯父セイエド・ホセインに温かく迎えられました。この伯父は甥の到着二、三日前に手紙をかれに送っていました。その内容は、ヤズドに急いで来て、カリム・カーンの陰謀から自分を救い出してくれるように、という要請でした。伯父はカリム・カーンをイスラム教の、公然ではないにしても、危険な敵であるとみなしていました。法学者の伯父は甥のアーマド・アズガンディに、あらゆる手段をつくしてカリム・カーンの有害な影響力と戦うように頼んだのです。そして、ヤズドに永住して、敵であるカリム・カーンのひそかな意図を、人びとに悟らせるように求めました。アーマド・アズガンディは、最初の目的であるシラズ行きを伯父にかくし、ヤズド滞在を延期することにしました。そして、自分が編さんした書を伯父に見せ、さらに、市の隅々から集まってきた僧侶たちにその内容を知らせました。僧侶たちは皆アーマド・アズガンディの勤勉と学識と熱意に深い感銘を受けました。(p.184-185)

アーマド・アズガンディを訪れてきた人たちの中に、ミルザ・タギという人がいました。この男はよこしまで、ごう慢な野心家で、最近ナジャフからもどってきたばかりでした。かれはナジャフで学問を修め、イスラム法学者の地位を得ていました。かれはアーマド・アズガンディとの対談中に、その編さん書を詳細に調べ、その内容を十分理解したいので、二、三日借りたいと言い出しました。かれと伯父は、その願いを聞きいれて貸すことにしました。しかし、ミルザ・タギは約束を破ってその書を返却しなかったのです。ミルザ・タギの意図が誠意のないものであることを、すでに察知していたアーマド・アズガンディは、伯父に頼んでその書を返してもらうことにしました。ところが、ミルザ・タギは編さん書を取り戻しに来た使いの者に、横柄な態度でこう答えたのです。『お前の師にこう言え。その編さん書が有害な内容であること

がわかったので処分することにし、昨夜、池に投げ捨てたと。』

この無礼な行為に憤った伯父は、かれに復讐しようと決意しました。が、甥のアーマド・アズガンディは、その激しい怒りを上手に説得して和らげ、復讐をやめさせました。そして、つぎように勧告しました。『あなたが考えておられる復讐は民衆を興奮させ、かえって扇動の原因となりましょう。さらに、カリム・カーンの影響を絶やすためにわたしに頼まれた任務を、大きく妨げるでありましょう。カリム・カーンは、この機会を利用して、あなたがバビ（バブの信者）であることを非難し、あなたの改宗の責任を確実にわたしに負わせるでありましょう。こうして、あなたの権威を損ねると同時に、ひそかに自分の方に人びとの尊敬と感謝を引きつけるにちがいありません。最上の方法は、かれを神の手に委ねることです。』(p.185)

以上の話を聞いたモラ・サデクは、アーマド・アズガンディが今もヤズドに住んでおり、自由に会えることを知ってひじょうによるこんだ。そこでかれは、セイエド・ホセインが会衆の祈りを先導し、その甥のアーマド・アズガンディが説教をしているモスクに行った。モスクで参拝者席の最前方に座り、祈りに加わった。祈りが終わったあと、セイエド・ホセインに近づき、会衆の前ではばからずにかれを抱擁した。その直後、招かれぬのに説教壇にのぼり、信者たちに話しかけようとした。セイエド・ホセインは最初おどろいたが止めることはしなかった。というのは、このとつぜんの侵入者の動機を知り、かれの学識の程度を確かめたいと思ったからである。セイエド・ホセインは甥にも、かれを止めないように身振りで合図した。

モラ・サデクはよく知られ、見事に書かれたバブの説話の一つを用いて説教をはじめた。それが終わって、つぎのように会衆に話しかけた。「学識のある方々よ。神に感謝しなさい。なぜなら、皆さんは神の知識のとびらは閉じていると思っておられるが、今や大きく開かれているからです。永遠の生命の河の水が、シラズ市から流れ出し、わが国の人民に多大な祝福をあたえています。この天国から下された恩恵の大洋から一滴の水を受ける者は、身分が卑しく、無学の者でも、自分の内部に神秘を解明する能力を発見し、昔から難問とされてきたものも理解できると感じるでありましょう。一方、イスラム教の最高の知識をもった人でも、自分の能力と権威だけに頼り、神のメッセージを軽蔑するならば、救いようのないほど墮落し、道を失ってしまうであります。』

この重大な宣言が鳴り響いたとたん、憤りと狼狽の波が会場にひろがった。激怒した会衆は恐怖のあまり「冒涇だ！」と叫びどよめいた。その喧騒の中で、セイエド・ホセインは「説教壇から下りなさい」と命じ、同時に、黙って去るようにモラ・サデクに身振りで合図した。モラ・サデクが説教壇から下りるやいなや、大勢の参拝者たちが押しかけ、かれを殴りはじめた。セイエド・ホセインはすばやく間に入り、かれらを追い散らしてモラ・サデクの手をつかみ、力づくで自分の方に引き寄せた。そして、つぎのように会衆に訴えた。(p.185-186)

「この男はわたしに任せ、皆さんは手を引いてください。わが家に連行し、この件に関してきびしく調べます。あのような発言をしたのは、とつぜん気が狂ったせいかもしれません。わたし自らかれを調べ、その発言が計画的なもので、かれもそのことを堅く信じていることがわかれば、イスラム教の法律にしたがって罰するつもりです。」この堅い約束で、モラ・サデクは敵たちの残忍な攻撃から救われた。かれはマントとターバンをはぎ取られ、サンダルとつえもうばわれた上、打撲傷を負って動揺していた。セイエド・ホセインの従者たちは、モラ・サデクを守りながら、群集の間を力づくで通り抜け、師の自宅に送りどけることができた。

同じ時期に、アルデビリは、モラ・サデクがヤズドの住民から受けた攻撃よりもっと激烈な迫害を受けた。アーマド・アズガンディの介入とその叔父の援助がなかったならば、残忍な敵の怒りの犠牲となっていたであろう。モラ・サデクとアルデビリは、ケルマンに到着後、同じような侮辱と迫害をカリム・カーンとその仲間たちから受けた。しかし、ジャヴァド（ゴッドスを歓待したケルマンの名士）のねばり強い努力により、ついに、迫害者たちから解放され、コラスンにおもむくことができた。(p.187)

バブの直弟子たちとペルシャの各地方に居住していた仲間たちは、敵から追跡され、苦しめられたが、それでもくじけず、任務を達成することができた。確固たる目的と不動の確信をもって、一步進むごとにおそってきた暗黒の勢力と戦いつづけ、たゆまぬ献身と不屈の精神で、信教の高貴な力を多くの同国人に示すことができたのであった。

ヴァヒド（バブがヤヒヤにあたえた呼称、バブの調査のため国王が送った最高の学者）がまだシラズにいたころ、ジャヴァド・カルベラが到着した。セイエド・アリ（バ

ブの伯父)は、かれをバブに紹介した。バブは、ヴァヒドとジャヴァド・カルベラにあてた書簡の中で、この二人の信念の堅さと献身の深さを賞賛した。後者(ジャヴァド・カルベラ)は、バブがその使命を宣言する以前からバブを知っていた。バブが幼少のころから見せていた驚嘆すべき能力を熱烈に賞賛していたのである。後日、かれはバグダッドでバハオラから特別目をかけられた。数年後、バハオラがアドリアノーブルに追放されていたころ、かなり高齢であったがペルシャにもどった。しばらくイラク州にとどまり、その後コラサンに向かった。温和な性質、寛大さ、気取らない素朴さで、かれは「セイエド・ヌール」(輝かしいセイエドという意味)と呼ばれるようになった。

ある日、ジャヴァド・カルベラがテヘラン市の道を横切っていたとき、馬で通り過ぎる国王の姿がとつぜん目に映った。かれは平静を保ちながら国王に近づきあいさつした。その立派な姿と威厳ある態度に国王は大いに満足し、宮殿に招待した。国王がジャヴァドをあまりにも親切に歓待したため、廷臣たちは嫉妬心をあおられ、つぎのように異議をとらえた。「このジャヴァドなる者は、バブの宣言以前にすでにバビであると公言し、バブに永遠の忠誠を誓った者であることを、陛下はご存知ないのですか。」国王はその非難の背後には悪意があることに気づき、きわめて不快に思った。そして、かれらの無遠慮な態度と心の卑しさを叱責した。「わが廷臣たちは、公正で礼儀正しくすぐれている者はすべてバビ教徒であると非難し、国王のわれもその者を罰すべきだと思っておる。」ジャヴァド・カルベラは、ケルマンで残りの生涯を送った。不動の確信をもって大業の普及のために努力を惜しまず、死ぬまで大業を忠実に支持しつづけた。

カルベラの指導的な高僧を先祖にもつソルタンは、セイエド・カゼムの忠実な支持者で、親しい同僚でもあった。かれもまた、当時シラズでバブに会い、後日、バハオラを探すためにソレイマニエに出かけた人であった。さらに、かれの娘は後にアガ・カリム(バハオラの実弟)の妻となった。かれは、この本の冒頭に述べたゾヌジといっしょにシラズに到着した。バブは、ゾヌジに、カリムと共同で、自分が最近著わした書簡を書き写すように命じた。ソルタンはシラズ到着時に、病気のためバブに会えなかったが、まだ病床にあったある夜、最愛の御方(バブ)からメッセージを受け取った。それは、日没から二時間後に、バブ自らかれを訪れるという内容であった。その夜、バブは召使いのエチオピア人にこう指示した。すなわち、住民の注目をそらすために、バブからかなり離れた前方を、ランタンをもって歩き、目的地に着いたら即

刻そのランタンを消すようにという指示であった。(pp.189-190)

わたし（著者）は、ソルタンから、その夜の訪問について聞いた。「バブは、ご自分の到着前にわたしの部屋のランプを消しておくように言われました。家に入るとすぐわたしのベッドのわきに来られました。暗闇の中、わたしはかれの衣の裾にしっかりとすがり、こん願しました。『最愛なる御方よ。わたしの望みをかなえて下さるように願います。あなたのためにわたしの命を捧げさせて下さい。あなた以外にこの恩恵をあたえて下さる方はおられません。』バブは、こう答えられました。『おおシェイキよ。われもまた、最愛なる御方の祭壇に命を捧げるのを切望しているのだ。われわれは共に最愛なる御方の衣にすがり、その御方の道で殉教の喜びと栄光を求めなければならない。安心するがよい。あなたがその御方の面前に出られるように全能なる神にこん願しよう。その偉大なる日に、われを思い起こすがよい。その日は、世界がこれまでに目撃したことのない日なのだ。』

別れの時間が迫ったとき、バブはわたしに贈り物を渡し、わたしのために用いるように言われました。ことわろうとしましたが、ぜひ受け取るようにと強く言われたので、その贈り物を受け取ることにしました。その後すぐバブは出発されました。その夜、バブが「最愛なる御方」に言及されたことを不思議に思い、好奇心をそそられました。その後何年間か、バブが言及された御方はタヘレではないかと思ったこともしばしばありました。また、セイエド・オロヴ（自分が聖霊の権化と宣言して害をおよぼした人物）がその人物ではないかとさえ想像したのです。わたしはまったく途方にくれ、この神秘をどう解明してよいかわかりませんでした。カルベラに着き、バハオラの面前に出たとき、わたしはこの方のみがバブの深い敬愛を受け、この方のみがバブの敬慕にふさわしい人物であると確信しました。」(p.190)

バブの宣言から二年目のノウ・ルーズ（新年）は、一二六二年（一八四六年）のラビオル・アヴァール月の二十一日であった。そのころ、バブはまだシラズの比較的のどかで気楽な環境の中、家族や親戚と交わりながらめぐまれた生活を送っていた。バブは自宅で儀式ばらない静かな新年を祝ったが、それは、これまでの慣習にしたがい、母上と妻にこの上ない思いやりと愛情を注いだものであった。そして賢明な勧告と愛情をこめたやさしさを母と妻を元気づけ、不安を取り除いた。さらに、所有物をすべてかの女らにあたえ、不動産の所有権もかの女らの名義に変えた。すなわち、直筆の文書の中で、家屋と家具、そのほかの不動産を母と妻の所有物とし、母の死後その財

産は妻に渡るように指示したのである。

バブの母は最初、息子の使命の重大さを理解できず、その啓示に秘められた威力にも気がついていなかった。しかし、生涯の終わりが近づくとつれて、自分が宿し、この世に生み出した宝物バブの貴重な特性を認めることができた。母親の眼から長年かくされてきたその宝物の価値を発見させたのはバハオラであった。かの女が残りの生涯を過ごすためにイラクに居住していたとき、バハオラは忠実な信者で、かの女と親交のあったジャヴァド・カルベラとアブドル・シラジの妻二人に、信教の原則をかの女に教えるように指示したのである。その結果、バブの母は大業を認めることができ、一八八二年この世を去るまで、全能なる神から自分に付与された慈悲深い贈り物を十分認識していた。(pp.190-191)

母と違ってバブの妻は、バブの宣言時からその栄光ある使命と比類ない特性に気づき、またその威力をも感じとっていた。同世代の女性のうち、献身と信仰の厚さでかの女をしのぐ者はタヘレ以外にはいない。バブは今後自分にふりかかる苦難を知らせ、現代に起こる出来事の意義を明らかにしたが、この秘密は母には知らせないように注意した。そして忍耐し、神の意志に身を委ねるように助言した。最後に自ら著わした特別の祈りをあたえ、それを読誦すれば、困難が除かれ悲しみが和らげられる、と妻を安心させた。「困ったことが起こったとき、床につく前にこの祈りを唱えるがよい。われ自らあなたのもとにきて不安を取り除いてあげよう。」かの女はその忠告通り、祈りの中でバブに向かった。その度に、かの女の道は確実な導びきの光で照らされ、問題は解決されたのであった。

バブは家事を整理し、母と妻の今後の生活の準備をしたあと、自宅を離れ、伯父のセイエド・アリ宅に移った。そこで苦しみ時間がくるのを待った。バブは自分の身にふりかかろうとしている苦難の時がもはや延ばされないことを知っていた。まもなく、災難の旋風に巻き込まれ、生涯の最後をかざる目標、すなわち殉教の場へとすばやく運ばれていくことを知っていたのである。かれはシラズに定住した弟子たちに、イスファハンに向かい、そこで指示を待つように命じた。弟子の中には、カリムとゾヌジが含まれていた。さらにバブは、最近シラズに着いた「生ける者の文字」の一人、ホセイーン・ヤズディにもイスファハンに行き、その市にいる弟子の仲間に加わるように指示した。(pp.192-193)

一方、ファルス州の知事ホセイン・カーンは、バブをもう一度苦境におちいらせ、公衆の面前でもっと屈辱をあたえようとしていた。バブがだれにも妨げられずに活動をつづけていること、仲間といまだもって交際していること、家族や親族と自由に交わっていることを知って、知事はがまんできなくなったのである。知事はスパイを使って、バブの運動の特質と影響力について正確な情報を入手したり、ひそかにバブの動きを監視したり、かれが人びとにもたらした熱意の程度を確かめ、大業を受け入れた人びとの動機、行為、および数をくわしく調べたりもした。(pp.193-194)

ある夜、ホセイン・カーンの密使団長が報告をもってきた。その内容は、バブに会おうと群がってくる人の数があまりにも多すぎるので、当局は市の安全を守るため、即刻手を打つ必要があるというものであった。団長はつぎのように説明した。「毎夜、バブを訪れてくる熱心な人びとの数は、毎日知事の建物の入り口に群がる市民の数をしのいでいます。かれらの中には、高い地位と学識で有名な人たちも見うけられます。バブの伯父が州政府の官吏たちを上手にあつかい、ひじょうに寛大であるため、あなたの部下はだれも本当のことをあなたに知らせようとしません。許可を下されば、あなたの従者に手伝わせて真夜中にバブを奇襲し、かれの仲間に手錠をつけて連行し、あなたの手にお渡ししましょう。その者はバブの活動をあなたに知らせ、わたしの報告が真実であることを証言するであります。」ホセイン・カーンは、その提案を拒否し、こう答えた。「政府が何をすべきか、わたしの方がよくわかっている。こちらで対処の仕方考えるので、離れたところからわたしを見守っていなさい。」(pp.194-195)

知事はすぐ、シラズ市の警察署長アブドル・ハミド・カーンを呼び出して、つぎのように命じた。「セイエド・アリ（バブの伯父）宅に今すぐ直行せよ。だれにも気づかれないように壁をよじ登って屋根にあがり、かれの家に侵入せよ。バブを即座に逮捕し、同時にそこに居合わせた訪問者を全部逮捕して、この場に連行せよ。また、その家にある書物と書簡をすべて押収せよ。ただセイエド・アリは約束を果たさなかったので、翌日処罰するつもりだ。モハメッド国王の王冠にかけて誓うが、この夜、バブとそのみじめな仲間ともども処刑する。かれらの恥ずべき死は、かれらが起こした火災を消すと同時に、今後、バブの信者になれば、平安を乱す者として処罰されることを住民に見せしめることになる。この処置により、国家に重大な脅威となる異端は根絶されることになる。」

警察署長は任務を果たすためにその場を退いた。かれは助手をともなって、セイエ

ド・アリ宅に侵入した（1845年9月23日の出来事）。そして、バブとバブの伯父とカゼム・ザンジャンニをただちに逮捕した。ちなみに、カゼム・ザンジャンニはその後マゼンダランで殉教した人で、かれの弟モルタダはテヘランの七人の殉教者の一人であった。警察署長は家にあった文書をすべて没収し、バブの伯父には家に残るように命じたが、残りの者たちを州政府の建物に連行した。バブはこの逮捕にひるむどころか冷静にコーランの句をくり返した。「かれらの脅威となるものは朝方起こる。朝はそこまできていないか？」(p.195)

市場を通りかかった警察署長は、住民がパニックにおそわれたかのように、四方八方に逃げ出しているのを見た。また、多数のひつぎがいそいで運ばれており、それぞれのひつぎのあとには、悲痛に泣き叫ぶ男女の行列がつづいていた。この光景に、署長は恐怖を感じた。人びとの悲しみや恐怖におののく表情と叫び声を聞いて署長の心は痛み、通行人に騒ぎの原因を聞いたところ、つぎのような返答がきた。「今夜、ものすごい感染力をもつ疫病（コレラ）が発生して、多数の住民が感染しています。深夜からすでに百人以上が命を失いました。どの家でも不安と絶望におそわれています。住民は家から逃げ出し、苦しい状況の中で、全能なる神に助けを求めているのです。」

アブドル・ハミド・カーン（警察署長）は、このおそろしい情報におびえ、ホセイ・カーン（知事）の家を走って行った。家の門衛をしていた老人は、疫病がこの家を荒らし、家族を苦しめ家は放棄されたことを知らせてくれた。「エチオピア人の女の召使い二人と男の召使い一人が、すでにこの疫病の犠牲となりました。また、家族に危篤状態の人もあります。わたしの主人は、絶望のあまり死人も葬らずにそのまま残し、家を捨て、残りの家族といっしょにバゲ・タク（シラズ市郊外の庭園）に避難しました。」

警察署長はバブを自分の家に連行し、知事の指示がくるまで拘引することにした。自宅に近づくと、家族の悲痛な泣き声が聞こえはじめた。かれは胸がえぐられるように感じた。家に入って、自分の息子が瀕死の状態にあるのを見た。かれは、絶望のあまりバブの足元にひざまずき、かれの衣の裾にすがって涙ながらに、息子の命を助けてくれるようにこん願した。「あなたをこの高遠なる地位に高められた御方にかけてこん願いたします。わたしに代わって、息子が回復しますように祈って下さるようお願いいたします。まだ若い息子の命が取られませぬように、また、父親が犯した罪のために息子が罰せられませぬように。わたしは、自分の行為を反省し、すぐ辞職するつ

もりです。今後、たとえ餓死しそうになっても、そのような要職は一切受け入れないと堅く誓います。」夜明けの祈りの準備に顔と手を洗っていたバブは、署長の願いに応じて洗顔に用いた水をかれにあたえ、息子に少々飲ませればかれの命は助かるであろうと述べた。(pp.195-197)

息子が回復のきざし見せはじめたとき、署長は知事に手紙を書き、今回の事件の全容を知らせ、バブへの攻撃を中止するように要請した。「あなたご自身と、神があなたに委ねられた人たちを哀れんで下さるように願います。この疫病が猛威をふるいつづければ、今日の終わりまで生き延びる者はいないでしょう。」この要請を受けた知事はすぐバブを釈放して、望み通りどこにでも行けるようにした。

この事件の報告を受け取った国王は憤り、即刻、知事ホセイン・カーンに免職命令を出した。免職の日以来、この恥知らずの虐待者ホセイン・カーンはさまざまな災難におそわれ、最後には日々の糧も得ることができない状態になった。窮状にあえぐかれを救おうとする者も救える者もいなかった。後日、バハオラが追放先のバグダッドに在住していたとき、ホセイン・カーンは手紙を送り、悔い改めていることを述べ、自分が前の要職にもどることができれば、自分の過去の悪行をつぐなうと約束した。バハオラは返事を拒んだ。だれからも見放されたかれは、死ぬまで貧窮と恥辱で苦しみつづけた。(p.197)

アブドル・ハミド・カーン（警察署長）宅に滞在していたバブは、セイエド・カゼムを送って、セイエド・アリ（バブの伯父）に自分に会いに来て欲しいとたのんだ。いそいで駆けつけてきた伯父に、自分がシラズから出発予定であることを告げ、母と妻の世話をまかせ、二人に自分の愛情を伝えるように依頼した。さらに、神の援助がかならず下されることを述べ、かの女らを安心させるように頼んだ。バブは、伯父に別れを告げながらつぎのように語った。「母と妻がどこにしようとも、神はそのすべてを包含する愛と保護でかの女らを取り巻きたまうであろう。あなたとはアゼルバエジャンの山中でまた会おう。そこでわたしは、あなたが殉教の王冠を勝ち取れるように送り出そう。わたし自身も、忠実な弟子の一人と共にあなたの後につづき、永遠の領域で再会しよう。」

第十章 イスファハンでのバブ

バブが生まれ故郷のシラズ市に最後の別れを告げ、イスファハンに向かったのは一八四二年（一八四六年）の夏の終わりであった。その旅にカゼム・ザンジャンニが同行した。イスファハンの郊外に近づいたとき、バブはその州の知事、モタメッド・ダオレという称号をもつマヌチェール・カーンに手紙を書き、滞在できる場所を紹介してくれるように頼んだ。バブがセイエド・カゼムに持たせたその手紙の文面はきわめて丁寧で書体も実に見事であったので、知事は心を動かされた。そこで、イスファハンの僧侶の長で、その州の宗教面の最高権威者であるサルタヌール・ウーラマーに、バブのもてなしを依頼した。知事は、その依頼書にバブから受け取った手紙も同封しておいた。ウーラマーは、自分の弟に、お気に入りの仲間たちを連れてバブを迎えに行くように命じた。この弟は残忍な男で、後にバハオラからラックシャー（雌ヘビ）と呼ばれた人物である。バブが近づいてきたとき、ウーラマーは歩みより、自宅まで丁寧に案内した。(pp.199-201)

このように当時バブは大いに敬われていた。ある金曜日、バブが公衆浴場から家にもどろうとしていると、バブが祈りの前の洗浄に用いた水を得ようと多数の人びとが群がってきた。バブの熱心な崇拝者たちは、その水には病気を治す力があると堅く信じていたのである。ウーラマー自身も最初の夜からバブに強く心を惹かれ、自ら従者の仕事を引き受け、バブの世話をしはじめた。従者の手から水差しをうばい取り、自分の地位を高ぶることなく、バブの両手に水をかけたのである。

ある夕食後、この若い客人の並みはずれた性格に好奇心をそそられたウーラマーは、ヴァル・アスルの章（コーランにある章）についての解説を思い切って頼んでみた。バブは快くそれに応じ、ペンと紙をもってこさせ、家の主人の面前で、あらかじめ考えようともせず、その解説をおどろくべき速度で著わしはじめた。真夜中近くになって、バブはその章の最初の文字「ヴァヴ」に含まれるさまざまな意味を説明しはじめた。その文字「ヴァヴ」についてはすでにシェイキ・アーマドが自著のなかで強調していたものである。バブにとって、それは、神の啓示の新しい周期がはじまったことを象徴するものであった。バハオラも後日、ケタベ・アグダス（最も聖なる書）の「大なる逆転の神秘」や「主権のしるし」といった句で言及している。その後すぐバブは、家の主人と仲間たちの面前で、コーランの中のある章について解説した序文を詠唱しはじめた。その威力にみちた言葉にそこに居た人たちは仰天した。そして、あた

かもバブの声の魔力にかけられたかのように立ち上がり、ウーラマーと共にバブの衣の裾にうやうやしく口づけした。著名な高僧のタギ・ハラティは、とつぜん歓喜と賞賛の言葉を述べはじめた。「この（バブの）ペンから流れ出す言葉のすばらしさは比べられるものがない。短時間のうちに、しかも読み取れる書体で、コーランの四分の一、いや三分の一に匹敵する句を著わせたのは、神の援助があったからである。人間の力だけでできることではない。月を裂くことも、海の小石を動かすことさえも、この威力にはかなわない。」

バブの名声がイスファハン市全体にひろまるにつれて、四方八方から訪問者がウーラマーの家に集まってきた。好奇心をみたそうとする人たち、バブの教えの基本となる原理をより深く理解しようとする人たち、そして病氣や苦しみをいやそうとする人たちがいた。知事（マヌチェール・カーン）自らも、ある日バブを訪れ、イスファハンで最高の権限をもつ聖職者たちと同席し、モハメッドの「特定の使命」について解説し、その正当性を実証してくれるように頼んだ。知事はすでに、同じ会合の同席者たちに、この質問を出していた。しかし、その要望に応じられる者はいなかったのである。バブは知事に聞いた。「あなたの質問には、口頭で答えた方がよろしいのか、それとも書簡を好まれるのか？」知事は答えた。「書簡の方がここに集まっておられる皆さんに満足していただけるでしょうし、また、今日と未来の世代の人びとを啓発し、教育することにもなりましょう。」(p.202)

バブはすぐペンを取り書きはじめた。二時間とたたないうちに、イスラム教の起源、特質、影響について、きわめて斬新で詳細な解説を五十ページにわたって書き上げた。バブは、独創性のある論述、迫力のある文体、詳細かつ正確な描写で、この崇高なテーマにあたった。その場に出席していた者たちのうち、だれ一人として、そのすばらしさを認めない者はいなかった。この解説文の結論で、バブは中心となる理念を見事な洞察力で、約束されたガエムの到来とエマム・ホセインの「再来」（バブ自身とバハオラの出現を指す）に結びつけた。(pp.202-203)

この解説文は強烈かつ雄弁に論じられていたので、バブの読誦を聞いた者は、その偉大さに圧倒され、だれ一人として反論する者も挑戦する者もいなかった。知事は、熱意とよろこびを抑えることができなくなり、叫ぶように言った。「お聞き願います。ここに集まられている皆さんに証人になっていただきたいのです。今日にいたるまで、わたしはイスラム教が真実かどうか確信がもてませんでした。皆さんに誓いますが、

この青年（バブ）が著わされた解説文のおかげで、今わたしは、神の使徒（モハメッド）の教えを固く信じる者となりました。また、この青年は、だれの知識も匹敵できない超人的な能力をそなえておられることを真心から証言いたします。」この結びの言葉をもって、知事は集会を閉じた。

バブの人気のますます高くなるにつれ、イスファハンの宗教指導者たちはバブに対してねたみをいだくようになった。無学の青年が、信者たちの考えと意識を徐々に啓発していく勢いを見て、心配と羨望が生じてきたのである。この大衆にひろがった熱意の流れを止めないかぎり、自分たちの存在の基盤がこわされると確信した。賢い人たちは、バブやその教えを直接攻撃することは避けた方がよいと考えた。というのは、そのような行動はかえってバブの威信を高め、その地位を固めると感じたからである。しかし、扇動者たちはすでに、バブの性格と主張に関して根拠のないうわさをまき散らしていた。やがてこのうわさは、テヘランに届きモハメッド国王の総理大臣アガシの耳に入った。この尊大で、横暴な大臣は、国王がバブに理解を示す日がくるかもしれないと心配になった。そうなれば、自分は確実に失脚するであろうと考えた。さらに、国王から信頼されている知事（マヌチェール・カーン）が、バブと国王の会見を取り計らうかもしれないと不安になった。そのような会見が実施されれば、感じやすく、やさしい心をもった国王は、バブの信条の魅力と斬新さに完全に影響されるであろうことを、かれは知り尽くしていたのである。(p.204)

不安に駆りたてられた総理大臣ハジ・ミルザ・アガシは、激しい言葉でつづった手紙をウーラマーに送り、イスラム教を守る義務を怠ったと責めた。「われわれはあなたに、国家と国民の利益に反する運動を全力で阻止することを期待していた。ところがあなたは、あの不可解で卑しむべき運動の創始者と親しくなるだけでなく、かえってかれを賞賛しているのではないか。」さらに総理大臣は、イスファハンの僧侶たちに何通もの激励の手紙を送った。以前はかれらを見捨てていたのであるが、このときばかりは好意をふんだんに示しはじめたのである。ウーラマーは、客人（バブ）に敬意を表することはやめなかったが、総理大臣から受け取った手紙に影響されて、日々増えつづけるバブの訪問者たちの数をへらす案を出すように、同僚の僧侶たちに要請した。故ハジ・カルバシの息子モハメッド・メヒディがその要請に応じた。かれは、総理大臣の要望に応じて、またかれの好意を得るために、説教壇から見苦しい言葉でバブを中傷しはじめた。

この事態を知った知事は、ただちにウーラマーに手紙を送り、知事としてバブを訪問したときのことを思い起こさせた。そして、かれとその客人（バブ）を自宅に招待した。知事は、故バゲル・ラシュティの息子アサドラをはじめ、ジャファル、モハメッド・メヘディ、ハサン・ヌーリとそのほか何人かを招待した。アサドラは招待をことり、ほかの者たちにも出席しないように説得した。

「わたしは、出席はごめんこうむりたいと申し出た。あなた方もそうなさるように強くすすめる。バブと直々に顔を合わせるのには、ひじょうにあさはかなことだと思ふからだ。バブはかならず自分の主張をくりかえすにちがいない。そして、あなた方が求める証拠を実例をあげて示し、自分の主張する真理を証拠づけるために、コーランの半分に匹敵する句を一瞬のためらいもなく著わすであろう。最後に、このような言葉であなた方に挑戦するであろう。『もし、皆が真理を語る者たちであれば、同様に証拠を示すことだ。』われわれは、かれに証拠を示すことなど絶対にできない。もし、かれの要請に応じなければ、われわれの無力さが暴露されてしまう。それかといって、かれの主張を受け入れれば、われわれは名声、特権、権限を失うどころか、今後、かれが主張することも認めなければならなくなるのだ。」(pp.205-207)

この忠告を聞いたジャファルは、知事の招待をことわった。モハメッド・メヒディとハサン・ヌーリとほかの何人かは、アサドラの忠告を無視して、定められた時間に知事宅に行った。そのバブとの会見の場で、プラトン哲学の研究者として名高いハサン・ヌーリは、知事から求められてバブに質問した。それは、モラ・サドラ（ペルシヤの哲学者）の思想に関連する難解な哲学上の学説の解明であった。その学説の意味を解明できたのは、これまでに少数しかいなかった。バブは因襲にとらわれない言葉で、簡潔にすべての質問に答えた。ハサン・ヌーリは、その答えの意味をとらえることはできなかったが、現代のいわゆるプラトン学派とアリストテレス学派の学者たちの学識が、この青年（バブ）の知識にどれほど劣っているかを悟った。

つぎに、モハメッド・メヒディが、イスラム教の法律についてバブに質問した。バブの説明に満足しなかったかれは、とりとめのない論争をはじめたが、すぐ、知事の介入で中止された。知事は従者に、すぐにモハメッド・メヒディを自宅まで送るように命じた。その後知事はウーラマーに自分の心配を打ち明けた。「バブの敵の陰謀を恐れています。国王はバブをテヘランに召喚され、その出発準備をわたしに命じられました。が、バブがこの町（イスファハン）を安全に離れられる時期がくるまで、わた

しの家に留まっていた方がよいと思っています。」ウーラマーはその意見に同意し、一人で自宅にもどった。(pp.207-208)

バブはウーラマーの家に四十日間滞在した。その期間、毎日バブと会うことができたモラ・タギ・ハラティは、バブの同意を得て、バブが著わした「レサレイ・フル・アドリエー」という題名の本をアラビア語からペルシャ語に翻訳した。このようになれば、ペルシャの信者たちに貢献したのであるが、後日とつぜん恐怖におそわれ、仲間の信者たちとの関係を断ってしまったのである。

バブが知事の家に移る前のある夜、ミルザ・エブラヒムはバブを自宅に招いた。かれは、サルタノシ・ショーハダの父親で前述したアリ・ナリ（娘がアブドル・バハと結婚）の兄であった。かれはまた、ウーラマーと親しく、その業務をすべて管理していた。その夜バブのためにすばらしい晩餐会が開かれた。その市の役人も名士もこれほど立派な晩餐会を開いたことはなかった。サルタノシ・ショーハダと兄のマーブブシ・ショーハダ（その後二人共に殉教）は当時九才と十一才の少年であったが、晩餐会で給仕の手伝いをして、バブから特別に目をかけられた。

晩餐中に、ミルザ・エブラヒムはバブにこん願した。「わたしの弟のアリ・ナリには子供がありません。かれに子供ができますように祈願して下さい。」バブは、自分に出された食べ物を少し取り、それを別の皿においてミルザ・エブラヒムに渡し、弟とその妻のところにもって行くように言った。「二人にこれを食べさせるがよい。望みが叶えられるであろう。」アリ・ナリの妻は、バブからあたえられた食べ物のおかげで妊娠し、時が満ちて女の子を生んだ。この女の子は成長して最大の枝と呼ばれる人物（アブドル・バハ）と結婚した。こうして、かの女の両親が抱いていた望みが果たされることになった。(pp.208-209)

イスファハンの僧侶たちの敵意は、バブが高い尊敬を受けているため、激しさを増してきた。バブの影響がいたるところに広がり、イスラム正統派の本拠地にも侵入し、その基盤をくつがえそうとしているのを見てうろたえたのである。かれらは、集会を開き、バブに死刑を宣告した文書を作成した。その文書には市で権力をもつ僧侶たちが署名し、封印がされていた。アサドラとジャファルの二人以外の僧侶全員がこの判決に同意した。この二人はその文書の内容があまりにも白々しく、あまりにも毒舌で

みたされていたので、それに関わることを拒否したのであった。ウーラマーは、署名は拒否したが、臆病者で野心もあったので、直筆でつぎの証言を文書につけ加えた。「この青年と交際し始めて以来、かれがイスラム教の教えに反する行動を取ったのを見たことはありません。それどころか、かれはイスラム教の教えを忠実に守る敬虔な人物です。しかし、かれの途方もない主張と現世の事物を軽視する態度は、理性と判断力を欠いているためであると思わざるを得ません。」(p.209)

イスファハンの僧侶たちが、バブに死刑宣告をしたことを知らされた知事（マヌチェール・カーン）は、その残酷な判決が実施されないように、すぐ救助計画を立てた。その計画というのは、まず、日没時に、バブを五百人の騎兵隊に護衛させてテヘランの方向に向かわせるが、約六キロメートル進むごとに、百人の騎兵隊をイスファハンにもどらせるというものであった。そして、百人の騎兵隊が残った時点で、その先取るべき行動を完全に信頼できる指揮官に内密に知らせた。それは、一キロメートル進むごとに、二十人をイスファハンにもどらせ、残りが二十人になったとき、その半数を税金徴収のためにアルデスタンに向かわせ、確実に信用できる残りの十人に、変装させたバブを人通りの少ない横道を用いてイスファハンに連れもどす、という計画であった。さらに、翌日の夜明け前にイスファハンに到着できるように時間を調整し、到着後すぐバブを自分のところに連れてくるように命じた。

この計画はすぐ滞りなく実施された。だれにも怪しまれない時間に、騎兵隊はバブを市内に連れもどし、知事公舎の横の入り口を通して知事宅に送りどけた。知事宅に落ち着いたバブに、知事は自ら食事を出すなどしてバブの世話をし、快適で安全に過ごせるように万全を整えた。(pp.209-211)

一方、バブのテヘランへの旅について、でたらめなうわさが町中にひろまった。テヘランに行く途中で拷問を受けた、または処刑されたなどのうわさが飛び交った。イスファハンに住む信者たちは、そのうわさを聞いて深く嘆き悲しんだ。それを知った知事はバブに、信者たちに会ってくれるようにこん願した。そこでバブは、カリム（バブの親密な弟子）に宛てて短い手紙を書き、それを知事に託し、信頼できる者を通してカリムの手に渡るように頼んだ。町の神学校に宿泊していたモラ・アブドル・カリムは、その手紙を受け取った一時間後にバブのもとにきた。かれの訪問を知っていた者は知事だけであった。バブはカリムに自著の書簡を何通か渡し、ホセイン・ヤズディとゾヌジと共同で、それらを書き写すように命じた。カリムはバブが安全であると

いううれしいニュースをもって、いそいでこの二人のところにもどって行った。イスファハンの信者たちのうち、バブに会うことを許されたのはこの三人のみであった。

ある日、バブと知事が屋敷内の庭園で休んでいたとき、知事は自分のひそかな願望をバブに告げた。「全能なる神はわたしに巨大な富をあたえて下さいましたが、その使い道がわかりませんでした。しかし今、神の援助により、この大業を認めることができましたので、全財産をその発展のためにささげたいと願っております。そこで、あなたの許しを得てテヘランにおもむき、わたしを完全に信頼して下さいる国王に、最善をつくしてこの大業の教えを伝えたいと思います。国王はこの大業を進んで受け入れられ、その発展を促進されるであります。さらに、放埒な総理大臣ハジ・ミルザ・アガシを免職されるように国王を説得するつもりです。その愚劣な政治で国は破滅寸前になっているからです。つぎに、あなたと国王の妹との結婚が成立しますように、かの女から承諾を得、あなたの結婚式をわたしに準備させていただきたいと望んでいます。最後に、地上の為政者と国王がこの最高にすばらしい大業に心を向けられるように努力し、同時に、イスラム教の清い名を汚している腐敗した宗教組織の影響を根絶したいと願っております。」(PP.212-213)

これに対してバブはつぎのように答えた。「あなたの気高い決意に神が報いられんことを。あなたの崇高な意図は、行為そのものよりももっと貴重なのだが、あなたとわたしは余命いくばくもないのだ。あなたの念願が実現されるには時間があまりにも短いし、たとえ達成されてもそれを見ることはできない。全能の神は、あなたが考えられる方法ではなく、ほかの方法でこの大業に勝利をもたらされるであろう。最高の主権者である神は、この国の身分の低い貧しい人びとが、神の道に流す血で大業の土台を揺るがないものとされよう。神は来世で、不滅の栄光の冠をあなたの頭上に置かれ、計り知れないほどの祝福をあなたに注がれるであろう。この世でのあなたの命は、あと三ヶ月と九日しか残っていない。その期間がすぎれば、あなたは堅い信念をい দিয়ে永遠の住まいにいそがれるであろう。」

知事(マヌチュール・カーン)は、このバブの言葉を聞いてよろこびで満たされた。自らを神の意志に委ね、この世からの旅立ちの準備をしはじめた。旅立ちの日をはっきりと予告されたからであった。かれは家事を整理し、遺書を作成し、全財産をバブに贈与した。しかし、知事がこの世を去った直後、欲の深い甥ゴルジン・カーンが遺書を見つけ、その中の指示を無視して財産をうばい取った。

死期が近づくにつれて、知事は、ひんぱんにバブと親密に対話し、信教に生気を与える精神をより深く理解できるようになった。ある日、かれはバブにこう告げた。「この世から出発する時間がせまるにつれ、わたしの魂は言いようのない喜悦感で満たされてきましたが、あなたのことが心配です。わたしの後継者であるゴルジン・カーンのような無情な男の手に、あなたを委ねなければならないと思うと身ぶるいがしてきます。かれは、あなたがこの家にいることをかならず発見し、あなたを激しく迫害するにちがいません。」(p.213)

バブは、いさめるように言った。「わたしは命を神の御手に任せた。わたしは神だけを信頼している。神はわたしに強大な力をあたえられたので、もしもわたしが望めば、小石でも評価できないほど高価な宝石に変えることができ、極悪犯罪人の心に高尚な道德観念を植えつけることもできるのだ。わたしは『神の意志が成就されるために』(コーラン) 敵に苦しめられることを選んだ。」

バブとの貴重な時間が刻々と過ぎてゆくにつれて、知事の心には熱烈な信仰心がわき、神のそば近くにいるという意識がますます強くなっていった。バブの啓示に秘められた永遠の實在に直面して、現世の虚飾や見せびらかしは無意味なものとなった。現世の野心の空しさと人間の努力の限界に気がつけばつくほど、バブの栄光ある啓示、その無限の可能性と計り知れない祝福のビジョンが、ますます鮮やかとなっていった。このような考えを胸にいだきながら時を過ごしていた知事は、ある日発熱し、それが一晩中つづいたあととつぜんこの世を去った。平安な気持ちと確信に満たされて偉大なるかなたの世界へと飛び立ったのである。(1847年初春)

知事の生涯が終わりに近づいたころ、バブは、ホセイン・ヤズディとカリムを呼び出し、知事の死が間近になったことを告げた。そしてこの二人を通して、イスファハンに集まってきていた信者たちに、カシャン、クム、そしてテヘランに散らばり、神の英知ある導きを待つように命じた。知事の死後二、三日たって、知事がバブの救助を計画・実施したことを知っていたある人物が、後継者のゴルジン・カーンに、バブの居場所と知事がバブを礼遇していたことを告げた。この思いがけない情報を得たゴルジン・カーンは、使者をテヘランに送り、国王に手紙を渡すように指示した。(p.214)

「四ヵ月前、わたしの前任者の知事のご命令にしたがってバブを陛下のもとに送った、とイスファハンでは一般に信じられていました。ところが、バブは公舎内の知事宅に住んでいることが明らかとなったのです。前任者自ら、バブに自宅を提供して世話をし、そのことを市民と役人に極秘にしていたのです。陛下はこれに関してどのような命令を下されますか。わたしはすぐそれに従うつもりでいます。」

国王は、今は亡き知事（マヌチェール・カーン）の忠誠心を堅く信じていたので、この手紙から知事の本当の意図を知った。すなわち、国王とバブの会見の好機を待っていたのであるが、知事のとつぜんの死で、計画が妨げられたことを悟ったのである。そこで、国王はバブを首都テヘランに召喚することにし、ゴルジン・カーンにその指示を文書であたえた。その中で、バブを変装させ、ベッグの指揮する騎兵隊に護衛させてテヘランに連れてくるように命じた。また、この旅は極秘で行い、その途上ではバブに最高の礼をつくすようにとの指示も付け加えた。

ゴルジン・カーンは、ただちにバブに国王の召喚状を手渡した。つぎにベッグを呼び出し、国王の命令を伝え、すぐ旅の準備にかかるように命じた。そしてこう警告した。「バブの身許がだれにも知られないように注意せよ。また、この任務の内容をだれにもうたがわれないようにせよ。あなた以外はだれにも、護衛の者らさへも、バブであることが知られてはならない。もし質問されたら、この人物は商人で首都に連行するように命じられたが、われわれにも身許は知らされていない、と答えよ。」バブは、夜半過ぎに、指示通りにイスファハンからテヘランに向けて出発した。

第十一章 バブのカシャン滞在

バブがカシャン市に着く前夜、その地の知名人で、パルパという名称で知られているハジ・ミルザ・ジャニという人が夢を見た。夢の中で、ある日の午後おそく、市の城門アッタールの前に立っていると、とつぜん馬に乗って近づいてきているバブの姿が見えた。ところが、バブはいつものターバンではなく、商人が通常用いる帽子をかぶっており、前後に騎兵隊が整列して進んでいた。一団が城門に近づいたとき、バブはかれにあいさつをして、こう述べた。「ジャニよ、三日間あなたの客になるのでその準備をするがよい。」

目をさましたジャニは、夢があまりにも鮮やかであったので、それは正夢であると確信した。かれは、この思いがけないバブの出現は神からのお告げであり、それに従うのは自分の義務であると感じた。そこで、バブが快適に過ごせるように用意万端ととのえた。その夜、バブのために晚餐を準備したあと、アッタールの門に行きバブの到着をまった。夢で予告された時間がきたころ、はるか彼方の地平線に、市の城門に向かって近づいてきている騎兵隊の一団が見えはじめた。(p.217)

そこで、一団を出迎えるためにいそいで近づいて行くと、護衛隊にかこまれたバブの姿を認めることができた。バブは、前夜夢で見たのと同じ衣服を身につけ、同じ表情をしていた。ジャニはうれしそうにバブに近づき、あぶみに口づけしようと身体をかがめたところ、バブはそれをとめて、こう述べた。「われは三日間あなたの客人となる。明日はノウ・ルーズ（新年）なので、あなたの家で共に新年を祝おうではないか。」

バブを護衛してきた隊長のモハメッド・ベッグは、ジャニとバブは親密な友であると思い、こう述べた。「バブのお望みには何でも従うつもりです。しかし、わたしといっしょにバブの護衛をしている同僚の意見も聞いて下さるようお願いします。」そこで、ジャニがその同僚に聞いたところ、きっぱりとことわられた。「この青年（バブ）が首都に到着するまでは、どの町にも入ってはならないと強く命じられています。日没時に進行を中止し、夜間は市の城門外で睡眠をとり、翌日夜明けと共に旅をつづけるようにという特別の指示を受けているのです。この命令を変えることはできません。」(pp.218-219)

この同僚の反対ではげしい議論が起こったが、結局、モハメッド・ベッグの意見が勝ち、バブをジャニにあずけることになった。ただし、三日目の朝、バブを安全にかれらのもとに戻すという条件がつけられた。ジャニは護衛隊全員も自宅に招待するつもりであったが、バブはその考えを捨てるようにすすめた。「あなたの家に行くのはわれだけだ。」ジャニは、騎兵隊の三日間のカシャン滞在費を負担させてもらうようにバブに頼んだ。その要請にバブは答えた。「その必要はない。われが望まなかったならば、だれであろうと、われをあなたに手渡すことはできなかつたのだ。この世のすべては、神の威力ある手に握られている。神に不可能なことはない。神はすべての困難を除き、すべての障害を克服したまうのだ。」結局、騎兵隊は市の城門近くの隊商宿に泊まることになった。モハメッド・ベッグは、バブの指示に従い、ジャニの邸宅近くまでバブを護衛し、その場所を確認したあと騎兵隊のところにもどった。

バブがカシャン市に到着した夜は、バブの宣言後三年目の前夜で、一二六三年（一八四七年）ラビオシ・サニ月の二日目であった。その夜、ホセイイン・ヤズディ（バブの信頼する秘書）がその邸宅に招かれ、バブの面前に案内された。かれはバブの指示に従ってカシャンに来ていたのである。バブが、家の主人（ジャニ）のために書簡を書き取らせていたとき、主人の友人が訪れてきた。この人物は、アブドル・バキという名で、学識者としてカシャンで名を知られていた。バブはかれを招き入れ、書き取らせている言葉を聞かせたが、自分の身分は明かさなかつた。その書簡の結びの言葉として、ジャニのための祈りを著わした。それは、ジャニの心が神の知識で照らされ、大業への奉仕とその宣布に際して、雄弁に語るすることができますように、という祈りであった。この祈りのおかげで、かれは無学ながらも、雄弁さでカシャン最高の僧侶を感銘させるほどになった。さらに、その能力はますますみがかれ、バブの教えに挑戦してくるすべての自称学識者らを沈黙させることができるようになった。かの尊大で傲慢なナラキさえも、その雄弁さにもかかわらず、ジャニの議論の勢いに逆らうことはできなかつた。ナラキは心中ではその真理を否定したが、表面では敵の大業の価値を認めざるを得なかつた。(p.219-221)

アブドル・バキは座ったままバブに聞き入った。バブの声を聞き、その動作を見守り、顔の表情を見、その口から間断なく流れ出す言葉に注目したが、その威厳と威力に心を動かされることはなかつた。むなしい想像と学識のヴェールにつつまれたかれは、バブの言葉の意味を理解することができなかつたのである。かれは、自分に紹介された客人の名前と身分も聞こうともせず、また、その家で見聞したことに感動一つ

おぼえることもなく、バブのもとを去った。このまたとない機会を自らの無関心で失ってしまったのである。数日後、その青年の名前を知らされたときはじめて、自分の軽率で無神経な態度を無念に思った。しかし、バブの面前に出て、自分の失礼な態度をつぐなうには遅すぎた。バブはすでにカシャンから出発していた。その後かれは、悲嘆のあまり世を捨て、生涯の終わりまで隠遁生活をつづけた。

ジャニ宅でバブに会うことができた人たちの中に、メヘディという人がいた。一二六八年（一八五一年から五二年）にテヘランで殉教した人である。かれとそのほか何人かは、その三日間にジャニから愛情深いもてなしを受けた。バブさえもジャニの寛大さを賞賛したほどであった。同じもてなしを受けたバブの護衛の者たちは、かれの心の大きさと魅力ある態度に感謝を忘れることはなかった。新年の二日目に、約束どおりジャニはバブを護衛隊に渡し、悲しみに胸は張り裂けそうになりながらバブに最後の別れを告げた。(pp.221-222)

第十二章 バブのカシャンからタブリーズへの旅

護衛隊に守られながらバブはクムの方向へ進んでいった。護衛隊は、バブの魅力と威厳、そして情け深さにすっかり心を惹かれ、態度を変えてしまった。バブの望みに従うために、自分たちの権限と義務をすべて放棄したかに見えた。かれらは、バブに仕えたい、よろこばせてあげたいという熱望から、ある日つぎのように述べた。「わたしどもは、あなたをクム市に入れてはならないときびしく命じられています。また、人通りの少ない道をとおって、テヘランに直行するように指示されており、とくに、ハラム・マスーメ（西暦八一六年に亡くなったファテメの廟）を避けるように厳命されています。その境内は、最悪罪人も逮捕を免れると言われていたところですが、しかし、あなたのためでしたら、わたしどもが受けた命令はすべて無視できますので、お望みであればすぐ、クム市内を通過してその聖なる廟にご案内いたしましょう。」

これにバブは答えた。「『真の信者の心は神の王座なり。』救済の箱舟であり、全能者の難攻不落のとりでである者は今、この荒野をあなたがたと共に旅している。われは、墮落した都市に入るより田園の道を好む。その廟に葬られている清純なる方、その方の兄上と名高い先祖は、この邪悪な人びとの状態を嘆かれているにちがいない。かれらは口先では敬意を表すが、行動でその方の名誉を汚しているからだ。外面では、その方の廟に仕え、尊敬を示しているように見せかけるが、内面ではその方の尊厳を傷つけているのだ。」

バブに随行してきた護衛隊員たちは、バブを心から尊敬し信頼するようになっていたので、バブがとつぜん去ったとしても、だれ一人としてうろたえることはなく、またバブを追跡しようとしなかったであろう。バブと護衛隊の一団はクム市の北端にそって進み、クムルッドの村に立ち止まった。この村はモハメッド・ベッグの親族の所有で、村人はすべてアリヨラヒ派（イスラム教の一派）に属していた。村長の招きでバブは一夜をその村で過ごした。素朴な村人の温かい歓迎に感動したバブは、かれらの祝福を祈り、愛情のこもった感謝の言葉でかれらを元気づけた。

村を出発した二日後の午後、バブと護衛隊はテヘランの南方四十五キロメートルに位置するケナル・ゲルドの要塞に到着した。新年から八日目であった。一団は翌日首都に到着予定で、その夜は要塞の近くで過ごすことに決めた。ところが、とつぜん一

人の使者が現われて、アガシ（総理大臣）の手紙をモハメッド・ベッグに渡した。それは、バブを連れてただちにコライン村に直行せよ、という命令状であった。その村にはオサル・カフィの著者とその父が葬られており、その廟は近隣の人びとから大いに尊敬されていた。(pp.225-226)

モハメッド・ベッグが受け取った命令状にはつぎの指示があった。つまり、その村には適切な宿泊所がないので、バブのために特別のテントを張るように、そして護衛隊はその近くに待機させ、つぎの指示を待つように、というものであった。新年から九日目の朝、一二六三年のラビオシ・サニ月十一日（一八四七年三月二十九日）の朝、村のすぐ近くにバブのためにテントが張られた。その村はアガシ（総理大臣）の所有で、そのテントはかれがその村を訪れるときに使用していたものであった。テントは一面にひろがる果樹園と牧草地にかこまれた丘の上に張られた。その場所の静寂さ、こんもりとした草木、絶え間ない小川のせせらぎにバブはこの上ないよろこびを感じた。

二日後に、ホセイン・ヤズディ、ハサン、その弟のカリム、ゾヌジの四人がバブに招かれ、全員バブのテントの近くに泊まった。新年から十二日目のラビオス・サニ月十四日に、メヒディ・コイとメヒディ・カンディがテヘランから到着した。後者は、テヘランでバハオラと親しく交わっていた人で、バハオラから封印された手紙と贈り物をあずかってきていた。それを受け取ったバブは大いによろこび、顔をかがやかせて使者に深い感謝の意を表した。

その手紙は、不安定な状態に置かれていたバブに、慰めと力をあたえた。バブの心をおおっていた憂慮の陰は消え、確実な勝利感でみたされた。長い間バブの顔をかげらせていた悲しみは、危機をはらんだ監禁生活で一層深まっていたが、たちまち消え去ったようであった。逮捕され、シラズから追放されて以来、かれの目からあふれ出していた苦悩の涙はもはや流れることはなかった。「わが最愛なる御方よ！」と、かれが悲嘆と孤独のなかで叫んだ嘆願の声は、感謝と賞賛、希望と勝利の声と変わった。こうしてかれの顔は歓喜でかがやき、しばらくの間それをくもらすものはなかった。しかし、シェイキ・タバルシの砦で勇敢な信者たちにふりかかった大災難の知らせに、バブの表情はふたたびくもり、心の喜悅感は消え去った。(pp.227-228)

バブがバハオラから手紙を受け取った夜の出来事を、カリムはわたし（著者）に語ってくれた。「わたしは仲間といっしょに、バブのテントの近くで深い眠りにおちいていましたが、とつぜん、馬のひづめの音で目がさめました。やがてわかったことは、テントから姿を消したバブを探しに行った者らが、バブを見つけることができないためさわぎが起こっていたことでした。モハメッド・ベッグは護衛の者らをいさめました。『どうしてあわてふためいているのか。バブの高尚な人格がお前たちはわからないのか。バブは自分の安全のためにも、他人に恥をかかせるような行為をする人ではないことが確信できないのか。かれは、月夜の静けさの中で神と交信するために、だれにも邪魔されない場所に一人でいるにちがいない。かれはかならずテントにもどってくる。われわれを見捨てるようなことはしない。』

こう言って、モハメッド・ベッグは護衛隊を安心させるためにテヘランの方に向かって歩きだしました。わたしもまた、仲間といっしょにかれのあとにつづきました。やがて、護衛隊もそれぞれ馬にのってわれわれのあとを追ってきました。一丁ほど行ったところで曙光のうすがりの中、遠くにいるバブの姿が認められました。バブはテヘランの方角からこちらの方へ歩いてきていました。そして、モハメッド・ベッグに近づくとこう言われました。『われが逃げたとでも思ったのか？』『とんでもありません。そのような考えをいただくはずはありません。』と、モハメッド・ベッグはバブの足元に身を投げるようにして答えましたが、バブの輝く顔に、落ち着きと威厳を見て畏敬の念に打たれ、それ以上の言葉を口にすることはできませんでした。バブの顔は確信に満ち、その言葉は人知を超えた力にあふれていました。われわれは崇敬の念でいっぱいになり、バブの言葉と態度がおどろくほど急変したわけを聞くことさえできませんでした。バブ自身もわれわれの好奇心と驚異の念に応えようとはされませんでした。」(p.228)

その後二週間バブはこの美しい自然に囲まれた場所に滞在した。しかし、その静かな日々はとつぜん一通の手紙で破られた。それはモハメッド国王自らバブにあてたもので、つぎのように書かれていた。「あなたとの会見を大いに望んでいたが、われは首都から即刻出発せねばならないので、あなたを適切に迎えることができない。あなたをマーカーの砦に案内させるが、そこの看守長にあなたを丁寧に扱うように指示している。ここにもどって来次第、あなたを召喚しはっきりとした判決を下そう。今回会見できないが、失望されないように。何か不満なことが起これば、ためらわずにわれに知らせるように願う。わが安寧とわが国の繁栄をつづけて祈られることを切に望ん

でいる。」(一二六三年ラビオス・サニ月 - 一八四七年三月十九日から四月一七日の間)
(pp.229-231)

国王がこのような手紙をバブに出したのは、アガシ（総理大臣）の説得があったからにちがいない。アガシはただ恐怖感からそのような行動を取ったのである。バブと国王の会見が実施されれば、国務に重要な権限をもつ自分の地位がうばわれ、権力の座から追われるかもしれない、と感じたのである。かれはバブには悪感情も恨みもなかったが、国王を説き伏せてバブを遠隔の辺鄙な場所に移すことに成功した。これで、悩みから解放されたと思った。ところが、それはとんでもない誤算であった。この陰謀により、国王も国家も神の教えの恩恵を受けることができなくなったのである。この比類ない神の教えのみが、墮落の淵に落ち込んだ国家を救うことができたのであるが、そのときアガシはそれに気づいていなかった。

こうして、先見の明に欠けた総理大臣は、急速に没落していた帝国を復興できる最良の手段が国王の手に入るのを阻止したのである。同時に、ペルシャが諸国民と諸国家に優位を占め得る精神力をもうばってしまった。その愚行、濫費、国王への不誠実な勧告は、国家の基盤を危うくし、その威信をそぎ、人民の忠誠心を弱め、かれらを不幸のどん底へ突き落とした。アガシは前任者の例からも学ぶことなく、国民の要求と利益を無視して、自分個人の権力の増大を追求してやまなかったのである。さらに、かれの放縦と無節制は、国家を近隣諸国との破壊的な戦争に巻きこませた。
(pp.232-233)

サディ・マージという歴史上の人物は、王家の血を引かず何の権力もなかったが、公正な行為とモハメッドの大業へのたゆまぬ献身の結果、高い地位を得ることができ、今日にいたるまで、イスラム教の長老や指導者は、かれを尊敬しその美德を称えてきた。一方、ボゾルグ・メヒルという人物は、ヌシラヴァン・アデルの家臣たちのうち、もっとも有能で、もっとも賢く、経験の豊富な政治家であったが、不正行為のため公に恥辱を受け、軽蔑とあざけりの的となった。かれは、自分の苦境を嘆き、号泣しつづけたためついに目が見えなくなってしまった。

前者の模範と後者の破滅の例を見ても、うぬぼれの強い総理大臣は自分の地位が危険にさらされていることに気がつかなかった。自分の考えを押し通しつづけた結果、

ついに、かれもまた総理大臣の地位と財産を失い、屈辱を受け面目をつぶされた。身分の低い良民からうばい取った数知れない不動産、高価な家具類、莫大な経費をかけた家屋もすべて失ってしまったのである。それは、バブをアゼルバエジャンの山中に監禁命令を出してから二年後であった。アガシは全財産を政府に没収され、国王の寵を失い、恥辱を受けてテヘランから追放された。その後、病と貧困におそわれ、希望もうばわれたかれは、みじめな生活を強いられてカルベラで最後の息を引き取るまで苦しみ悩んだ。(p.234)

さて、話をバブにもどそう。バブがタブリズに向かうように命じられたことはすでに述べた。この北西のアゼルバエジャンへの旅には、モハメッド・ベッグを隊長とする同じ護衛隊が随行した。その旅には、信者の中から付添い一人と従者一人を選ぶことが許された。そこでバブは、ホセイン・ヤズディとその弟を選んだ。旅の費用は政府から支給されたが、バブは、それを自分のために用いることをことわり、全額を貧しい人びとにあたえた。自分の個人的な必要経費には、ブシェルとシラズで商人として働いていたときに得た金を用いた。タブリズへの途中、町は通ってはならないという命令が下されていたので、ガズビンの町の信者たちは、敬愛する指導者が近づいてくるのを知って、シャ・デハンの村に行き、そこでバブに会うことができた。

バブに会った信者の一人は、エスカーンダールであった。かれはホッジヤトを代表してシラズのバブを訪れ、その大業を調査した人である。バブはかれに、つぎの手紙を故セイエド・カゼムの賞賛者であったソレイマン・カーンに渡すように命じた。「故セイエドがその美德を賞賛されて来た人物、その啓示の接近を絶え間なく言及してきた人物は、今現われた。われこそがその約束された人物である。立ちあがって圧制者の手からわれを救い出すように頼む。」バブがこの手紙をエスカーンダールに渡したとき、ソレイマン・カーンはザンジャンからテヘランに向けて出発しようとしていた。かれは、その手紙を三日後に受け取ったが、バブの要請には応じなかった。(p.235)

二日後、エスカーンダールの友人がバブの要請をホッジヤトに知らせた。そのとき、ホッジヤトはザンジャンの僧侶たちの扇動で、首都テヘランに監禁されていたが、すぐ自分の故郷の信者たちに指示をあたえた。バブを救出するために必要な人数を集め、その準備をせよ、という指示であった。そして、注意深くバブの居場所に近づき、時機がきた瞬間バブを連れ出すように命じた。やがて、カズビンとテヘランから多くの信者たちが集まり、ホッジヤトの指示に従って、その救出計画を実施した。かれらが

真夜中にバブの居場所に着いたとき、護衛隊全員熟睡中であった。そこでバブに近づき、その場所から逃げるようにこん願した。バブは、「アゼルバエジャンの山もわれを要求している」と落ち着いて答えた。そして、かれらに救出計画をすてて故郷にもどるように慈愛深く忠告した。

護衛隊はバブを連れてタブリズ市の城門に近づいた。隊長のモハメッド・ベグは、囚人（バブ）との別れの時間がせまってきたので、バブの面前に出て自分の短所と罪を見逃してくれるようにこん願した。「イスファハンからここまでは長くきびしい旅でした。その間わたしは自分の義務を果たすことも、あなたに十分仕えることもできませんでした。わたしを許し祝福をあたえて下さるように願います。」バブはこう答えた。「安心するがよい。あなたを信者たちの一人であると見なしているからだ。わが大業を受け入れる者らは、あなたを永遠に祝福し、称えるであろう。また、あなたの行為を賞賛し、あなたの名を高めるであろう。」(p.236)

ほかの護衛隊員たちも隊長の例にならい、バブの祝福をこん願し、かれの足に口づけし、目には涙を浮かべながら最後の別れのあいさつをした。バブは隊員全員に、その献身的な働きを感謝し、かれらのために祈ることを約束した。不本意ながらも、かれらはバブをモハメッド国王の後継者（皇太子）であるタブリズ知事に渡さざるを得なかった。バブの超人的な英知と能力を目撃した護衛隊員たちは、その後会う人ごとに、自ら体験した奇跡的な出来事を、畏れと賞賛の気持ちにあふれながら語り聞かせた。こうして自分たちのできる方法で、新しい啓示についての知識をひろめることができたのである。

バブが近づいてきているという知らせに、タブリズの信者たちの気持ちは高まり、敬愛する指導者を歓迎するために集まってきた。しかし、バブを迎えることになっていた市当局は、信者たちがバブに近づいて祝福を受けることを禁じた。ところが、一人の若者が自制できなくなり、裸足で市の城門から飛び出してきた。敬愛する御方の顔を見たい一心から、バブに向かって走った。バブの前方を進んでいた護衛隊に近づくと、若者は隊員の衣服の裾にすがり、そのあぶみにうやうやしく口づけして、涙ながらに叫ぶように言った。「敬愛する御方を護衛されている皆さんは、わたしのひとみのように大事な方々です。」

かれは、バブに会わせてくれるように熱心にこん願した。この若者の異常な行動と熱意に打たれた護衛隊は、そのこん願を聞き入れバブに会わせた。バブを見た瞬間若者は感極まって叫び、そのあと顔をふせて泣きくずれた。バブは馬からおり、若者を抱くようにして涙をふき、かれの心を落ち着かせた。タブリズの信者たちのうち、この若者だけがバブに敬意を表することができ、またバブの手に触れて祝福を受けることができた。残りの信者たちは皆、遠くから敬愛する御方の姿を一瞥するだけで満足しなければならなかった。(pp.237-238)

バブはタブリズ市に到着後、市の高官の家に案内された。その家はバブを監禁するために準備されたものであった。その家の門外の警備をしたのはナセリ連隊の特別班であった。かれらは、セイエド・ホセインとかれの弟以外はバブに会わせなかった。この連隊はカムセの住民から召集され、特別の栄誉を受けていたが、後日、かれらの銃弾はバブを殺害することになるのである。バブのタブリズ到着で市民の動揺は高まった。バブの姿を見ようと興奮した群衆が集まってきた。ある者は好奇心から、ある者はうわさが本当であるかを確認するために、そのほかの者はバブに忠誠を誓うためであった。街路を歩くバブに向かって、群衆の歓呼があちこちであがった。群衆の大半はバブを見て「アラホアクバー」(神は偉大なり)と叫び、ほかの者は声高らかにバブの栄光を称えた。神の祝福を祈った者もあり、バブが踏んだ土にうやうやしく口づけした者も何人かいた。

このように、バブの到着で大騒ぎになったため、当局は町内の触れ役をとおして、バブに会おうとする者は処罰を受ける、と住民に警告した。「バブに近づこうとする者、あるいはかれに会おうとする者は、全財産を没収され、終身監禁の刑を受けることになる。」(pp.238-239)

バブが到着した翌日、その市の有名な商人タギ・ミラニとアリ・アスカルが危険を冒してバブとの会見を試みた。かれらの友人や好意を寄せている人は、そういうことをすれば、財産を失うばかりでなく命も危険にさらされると警告して止めさせようとした。二人はその警告を無視して、バブが監禁されている家の入り口に近づいたところ即座に逮捕された。バブとの会談を終えて出てきたばかりのセイエド・ハサンは、その場ではげしく抗議した。「わたしはバブからこのメッセージを伝えるように命じられました。『この訪問者たちを中に入れなさい。わたしがかれらを招いた。』」

わたし（著者）は、ハジ・アリ・アスカルからそのときの状況についてつぎのように聞いた。「このメッセージを聞いたとたん、逮捕者たちは沈黙しました。そこで、われわれはすぐバブの面前に案内されたのです。バブはわれわれを迎え入れ、つぎのように説明されました。『家の入り口で警備にあたっているみじめで、あわれな者らは、家に群がってきている群衆からわれを守るようにわれが定めたのだ。かれらはわれが会見したいと望む者を阻止することはできない。』

われわれは、二時間ほどバブのそばにいました。その場を去るとき、バブはコーネリアンの指輪用の宝石を二個わたしに渡し、それらに、以前かれがわたしにあたえていた二つの聖句を刻み込み、台にはめ次第持参するように命じられました。だれも妨げたりしないので、何時でも自由に来ると、バブはわれわれを安心させました。数回、わたしは依頼された仕事に関して、バブの意向を確認するために訪れましたが、警備員は、われわれを一度も阻止したり、無礼な言葉を用いたりすることはありませんでした。また、大目に見たことに報酬を期待している様子もまったくありませんでした。

モラ・ホセインと共に過ごした期間、かれのおどろくべき洞察力と異常な能力を何度も目撃して感動したことを、今になって思い出します。わたしはシラズからマシュハドへの旅にかれに同伴し、ヤズド、タバス、ボッシュルエイ、トルバットを訪れました。当時、シラズでバブに会えなかったことをひじょうに遺憾に思っていたわたしに、モラ・ホセインは、つぎのように述べて安心させてくれました。『嘆くことはない。全能なる神はかならず、あなたがシラズで失った機会をタブリズで補って下さるであろう。失った一回の機会に対して一度ならず七度、神はあなたをバブの面前に出させて下さるであろう。』その強い確信をもった言葉に、わたしはびっくりしました。後日、タブリズの困難な状況の中で数回もバブの面前に出ることができてはじめて、このモラ・ホセインのおどろくべき先見の明を思い出したのです。七度目にバブを訪れたとき、バブのつぎの言葉を聞いて仰天しました。『あなたに七度の訪問をさせ、あなたを慈愛深く保護された神に賛美あれ。』」（pp.240-241）

第十三章 バブのマーカー砦監禁

ホセイン・ヤズディは、タブリーズでのバブとの談話をつぎのように語った。「バブがタブリーズで監禁された最初の十日間は、その後バブに何が起こるかを知る人はいませんでしたが、でたらめなうわさが町中にひろがっていました。ある日、わたしは思い切ってバブに、現在の場所にずっとおられるのか、それともほかの場所に移られるのかを聞きました。バブは即座に答えられました。『イスファハンで質問したことを忘れたのか。約九ヵ月間<開かれた山>（マーカーの砦）に監禁され、そこから<嘆きの山>（チェリグの要塞）に移されるのだ。この二つの場所はコイ山岳にあり、これと同じ名の町がこの両要塞の間にある。』この予告から五日目に、命令が下され、バブとわたしはマーカーの砦に移動することになり、われわれの身柄は、アリ・カーン（看守長）に引き渡されることになりました。」

山頂に築かれたマーカーの砦には、堅固な岩石で造られた塔が四つあり、そのふもとにマーカーの町があった。そこに下る道は一本しかなく、最終点には城門があり、それに隣接して町役場があった。その門は砦からかなり離れており、つねに閉ざされていた。砦はオスマンとロシア両帝国の境に位置しており、見晴らしがよく、戦略的に有利な場所であることから偵察本部として用いられてきた。戦時中その場に配置された士官は、敵の動きを観察し、まわりの状況を確認、非常事態が起こると当局に報告していた。砦の西にはペルシャとロシアの境界をなすアラクセス川があり、南はトルコと境を接していた。国境の町、バヤジッドはマーカー山からわずか三十キロメートルほどにあった。(pp.243-244)

砦の看守はアリ・カーンであった。マーカーの町の住民はクルド人で、イスラム教のソンニ派に属していた。ペルシャ国民の大多数はシーア派に属し、長い間ソンニ派の公然の敵であった。クルド人は、とくにシーア派のセイエド（モハメッドの子孫）を忌み嫌っていた。かれらは、セイエドを敵の精神的な指導者であり、主な扇動者であるとみなしていたからである。マーカーの住民は、クルド人を母親にもつ看守のアリ・カーンを大いに尊敬し、かれの言うことなら皆黙って従った。看守を自分の共同体の仲間であるとみなし、心から信頼していたのである。

バブをペルシャの最北端の荒涼とした危険な場所に追放したのは、総理大臣のアガ

シであった。その唯一の目的は、バブの影響の拡大を差し止め、全国の信者とかれを結ぶきずなを断ち切るためであった。総理大臣はこの動乱で荒廃した土地、反抗的な民族で占められている土地に侵入する者などいるはずはないと確信していた。この囚人（バブ）を、信者たちから離してしまえば、その発生地での運動は徐々に息が止まり、ついに消滅してしまうと安易に考えていた。しかし、その後まもなくして、かれはバブの啓示の真の性格を誤解し、その影響力を過小評価していたことに気がついたのである。(p.244)

反抗的なクルド人の激情は、そのうちバブの温厚な態度でしずまり、心はその慈愛でおだやかになった。かれらの自尊心は、バブの謙虚さでつつましさに変えられ、理不尽な横柄さは、バブの英知ある言葉でやわらいだ。こうして、心に熱意の炎を点されたかれらは、毎朝起きるとすぐバブの姿が見えるところに行き、かれと言葉を交わし、日々の仕事に祝福をあたえてくれるように願った。争論が起こると、すぐその場にいき、バブの監禁されている部屋に目を向け、かれの名を唱え、おのおの自分の主張を述べて判決を願った。看守のアリ・カーンはそのような行為を止めるように説得したが、クルド人たちの熱意を抑えることはできなかった。しかし、アリ・カーンは自分の任務を厳格に守り、バブの信者が一夜でさえマーカーの町に宿泊するのを許さなかった。

セイエド・ホセインは、当時の状況についてこう語った。「最初の二週間は、バブとの会見は一切許されませんでした。バブの面前に出ることができたのはわたしと弟だけでした。弟のハサンは毎日必需品を購入するために、警備員の一人に伴われて町に下りて行きました。マーカーに来ていたゾヌジは町の門外のモスクに宿泊して、マーカーに時折訪れてくる信者の訴えを、わたしの弟に渡す役目をしていました。弟はその訴えをバブに提出し、バブはその返事を弟に知らせるのでした。(p.245)

ある日、バブはわたしの弟に、ゾヌジにこう告げるように命じました。それは、マーカーを訪れる信者に対するきびしい態度を変えるように、バブ自ら看守のアリ・カーンに要請するという内容でした。バブは加えてこう言われました。『ゾヌジに伝えなさい。明日、われは、看守に指示して、あなたをわれのところまで案内させると。』

わたしは、この伝言に大変おどろきました。この横暴で頑固なアリ・カーンのきび

しい規則を、どのようにしてゆるめさせることができるのだろうか、とひそかに疑問に思ったのです。翌朝早く、砦の門がまだ閉ざされていた時間に、ドアをノックする音を聞いてびっくりしました。夜明け前にはだれも中には入れてはならないという命令を十分知っていたからです。アリ・カーンが警備員をいさめている声が聞こえてきました。そのうち、警備員が入ってきて、看守がぜひバブに会いたいと主張していることを告げました。この伝言を伝えるとバブはすぐかれを自分のところに案内するように命じられました。わたしがバブの部屋に通じる入口の間から出ようとしたとき、敷居のところに立っているアリ・カーンの様子がまったく変わっているのに気づきました。看守はひじょうにうやうやしい態度でたたずみ、顔にはそれまで見たことがない謙虚さとおどろきを表わしていました。いつもの自己主張と自尊心はまったく消えていました。かれは、わたしのあいさつに丁重に応え、バブの面前に出させてくれるように頼みました。かれをバブの部屋に案内しましたが、そのとき、かれの手足はふるえ、顔には隠せない心の動揺があらわれていました。(p.246)

バブは立ちあがり、アリ・カーンを迎えました。アリ・カーンはうやうやしく頭を下げ、バブに近づくとその足元に身を投げてこん願しました。『わたしの心は混乱しています。あなたの高名な先祖、神の預言者(モハメッド)に誓って、わたしの疑念をはらして下さいをお願いします。その重荷でわたしの心は押しつぶされそうになっています。先ほど夜明け時に、馬に乗って荒野を通りぬけ、町の城門に近づいたところ、とつぜん、川辺りで祈りをささげているあなたの姿が目につりました。あなたは両手をのぼし、天に向かって神の御名をととなえておられました。わたしはじっと立ってあなたを見守りました。祈りが終わったところで、わたしに無断で砦を離れたあなたに戒告をあたえようと思って待っていたのです。あなたは神との交信に没頭し、ご自身さえも完全に忘れておられるようでした。わたしはそっとあなたに近寄りましたが、あなたはわたしがいることに全然気がつかれませんでした。そのときとつぜん、わたしは恐怖感におそわれ、忘我の状態におられるあなたを起こしてはならないと思ったのです。そこで、あなたをそこに残して警備員たちのところへ行き、かれらの職務怠慢をとがめようと決心しました。ところがおどろいたことに、外門も内門も閉ざされていたのです。わたしは門を開けさせ、あなたの部屋にきたところ、不思議なことに、今、あなたはわたしの前に座っておられるのです。わたしの頭はまったく混乱しています。気が狂ったのでしょうか。』

バブはこう答えられました。『あなたが目撃されたことは否定できない真実だ。あな

たはこの大業を見くびり、その創始者を軽蔑した。すべてに慈悲深き神は、あなたを罰するのではなく、あなたの目に真実を明らかにしようと望まれた。その神の介入により、あなたの心に神から選ばれた者（バブ）への愛を入れ、あなたがその信教の威力を認めるようにされた。この信教はだれも滅ぼすことはできないのだ。』(p.247)

このおどろくべき体験は、アリ・カーンの心をすっかり変えてしまった。バブの言葉で、かれの心の動揺とはげしい敵対心はしずめられた。かれは全力をつくして過去の悪行をつぐなう決心をし、つぎのようにバブに自分の望みを伝えた。「貧しい男があなたにお会いしたいと望んでおります。かれはマーカーの門外のモスクに宿泊しております。わたし自ら、その人物をあなたのところに案内し、この行為で、わたしの悪行が許され、あなたの仲間に残酷な態度をとった心を洗い清めたいと望んでいます。」この要請が受け入れられるとすぐ、かれはゾヌジのところへ行き、バブの面前に案内した。

それ以来、アリ・カーンは、自分のできる範囲内で、バブのきびしい監禁生活をやわらげるために努力した。夜間は砦の門は閉められたが、昼間はバブが望む者は会うことを許され、その指示を受けることができた。

バブは、砦内に監禁されている間、ペルジャン・バヤンという本を書くために時間をついやした。その書は、バブの全著作のうち、もっとも重要で、もっとも啓蒙的で、包括的な書である。その中で、バブは自分の宗制の法律や規則を定め、自分のあとに現われる啓示を明確に、力強く宣言した。そして、信者たちに「神が顕わされる御方」（バハオウ）を探し出すようにくり返し力説し、バヤン書の中の理解し難い隠喩に妨げられずに、その御方の大業を認めるようにと警告した。(pp.247-248)

わたし（著者）は、ゾヌジのつぎの証言を聞いた。「バブが、教えや原則を口述されるときの声は、山のふもとの住民にはっきりと聞き取れました。かれの口から流れ出す聖句の快い調べは、われわれの耳をとらえ、われわれの魂にしみ込んでいったのです。山も谷もその威厳にあふれた声にこだましているようでした。われわれはその言葉の魅力にとらわれ、心の奥底まで感動で打ちふるえたのです。」(p.249)

バブに課せられたきびしい規律が徐々にゆるめられていくにつれ、ますます多くの

弟子たちがペルシャの各地方からバブを訪れてくるようになった。アリ・カーンの情けと寛大さにより、敬虔な巡礼たちがつぎからつぎへと砦の門に案内された。三日間の滞在が終わると、バブはかならず、かれらに奉仕の場にもどって信教の強化に尽くすように指示して、自分のもとを去らせた。アリ・カーンは毎金曜日に欠かさずバブのところへ行き、変わらぬ忠誠と献身を誓った。そしてマーカーの近隣で入手できる珍しい選り抜きの果物をしばしばバブに供し、また、そのほかバブの好まれると思われる珍味をつねに食卓に出すようにした。(pp.250-251)

このようにして、バブは夏と秋を砦で過ごした。その冬は格別に冷え込み、銅製品さえもその寒さの影響を受けたほどであった。その冬季の始まりは、一二六四年のモハラム月（一八四七年十二月九日より一八四八年一月八日の間）にあたった。バブが顔と手を洗うために用いた水は氷のように冷たく、そのしずくは顔で凍って光った。祈りが一つ終わるごとに、バブはかならずセイエド・ホセインを呼び寄せ、カマロドの曾祖父、故モラ・メヒディの書いた本の一節を詠唱するように要請した。その本には、エマム・ホセインの美德が称えられ、その死が痛まれ、その殉教の状況が描写されていた。エマム・ホセインの受難の場面が詠唱されると、バブの心は強烈な悲痛感におそわれた。エマム・ホセインが受けた言語に絶する侮辱、不実な敵の手によるはげしい苦難の物語に、バブの目からは涙がとめどもなく流れた。眼前でこの悲劇が展開するにつれて、バブは約束されたホセイン（バハオラ）の出現にともなうさらなる悲劇を思った。しかしこの残虐行為も、バブにとっては、敬愛するホセインがやがて同胞国民の手から受けるであろうはげしい苦しみの前ぶれでしかなかった。神が顕わされる御方（バハオラ）に定められている苦難を心に描くとき、バブは涙を流さずにはおれなかったのである。(p.252)

六十年（一八四四年）に著わした書の中で、バブはつぎのように宣言した。「わが魂を活気づける祈りの精神は、わが使命の宣言の前年に見た夢から来たものである。夢の中で、われはエマム・ホセインの首が木に吊り下げられているのを見た。首から多量の血がしたたり落ちていたが、われはこの上ないよろこびを感じ、木に近寄り、両手を差しのべてその聖なる血を何滴か受け、うやうやしく飲んだ。夢からさめて、われは神の聖霊がわが魂に充満したことを感じ、わが心は神のそば近くにいることを喜悅した。そして神の啓示に秘められた栄光がすべて、わが眼前で明らかにされた。」(p.253)

モハメッド国王が、バブをアゼルバエジャンの山中の砦に監禁を命じた直後、国家の基盤をくつがえすような災難がとつぜん降りかかってきた。それは、国王が経験したことのないものであった。国内の秩序を守ってきた警察軍は、想像を絶する動乱に仰天した。コラサンで反抗の旗があげられ、その反乱に恐怖を感じた政府は、予定していた国王のヘラトへの旅を中止した。総理大臣のアガシの無謀さと浪費は、人びとの中でくすぶっていた不満の炎を燃え上がらせ、大衆の反感を悪化させ、暴動の原因となったのである。コラサン州のクチャン、ボジヌアルド、およびシラヴァンの住民の不平分子たちは、国王の伯父アセフド・ダオレの息子、州知事のサラールと結束して、中央政府の権威を否認し、反旗をひるがえした。中央政府が送った軍隊はすぐ反乱軍に打ち負かされた。コリ・カーンとサラールの息子、アルスラン・カーンは、国王軍との戦いを指揮して、極度の残虐さをみせた。かれらは敵軍を撃退したあと、捕虜を容赦なく殺害したのである。(pp.253-254)

当時、モラ・ホセインはマシュハドに滞在していた。反乱軍が引き起こした暴動にもかわらず、新しく啓示された教えを広めるために全力を尽くしていた。モラ・ホセインは、サラールが反乱を拡大するために、自分の支持を求めようとしていることを知ってすぐ町を去る決心をした。傲慢で反抗的な首領の陰謀に巻き込まれることを避けるためであった。モラ・ホセインは人の寝静まった時刻に、従者のカンバル・アリだけを伴って、徒歩でテヘランに向かった。そこからアゼルバエジャンを訪れ、バブとの会見を願っていた。モラ・ホセインの出発の事情を知った仲間たちは、その困難な長旅を少しでも楽にさせるようなものを持参してかれに追いついた。しかし、モラ・ホセインは、仲間の援助を拒み、つぎのように述べた。「わたしは、最愛なる御方とわたしを隔てている道のりを歩いて行く誓いを立てた。目的地に達するまで、この決意はゆるがせない。」モラ・ホセインは、従者のカンバル・アリにもマシュハドにもどるよう説得したが、従者のこん願により、アゼルバエジャンへの巡礼の旅に同行させることにした。

テヘランへの旅の途中で通過した町々で、モラ・ホセインは信者たちから熱烈な歓迎を受けた。信者たちはそれぞれ同じ願いごとをしたが、モラ・ホセインは同じように応えた。わたし(著者)は、アガ・カリム(バハオラの実弟)のつぎのような証言を聞いた。「モラ・ホセインがテヘランに到着したとき、わたしは多数の信者たちといっしょにかれを訪問しました。かれは不動の信仰と美徳を体現している人に見え、その高潔な行動と高度の忠誠心に、われわれは鼓舞されました。かれの品格のすばらし

さと信仰の深さを見て、かれこそは、だれからも援助を受けずにただ一人で神の信教に勝利をもたらすことができると確信したのです。」テヘランで、モラ・ホセインは内密でバハオラの面前に案内された。そして、会見が終わるとすぐアゼルバエジャンへと向かった。(pp.254-255)

マーカーに到着前夜、アリ・カーン(看守)は夢を見た。それは、バブの宣言から四年目の新年の前夜であり、一二六四年(一八四八年)のラビオシ・サニ月の十三日であった。アリ・カーンはその夢をつぎのように語ってくれた。「神の預言者であるモハメッドがまもなくマーカーに到着され、砦に直行してバブを訪れ、新年の祝辞を述べられるという情報を受けてびっくりしました。わたしはその聖なる方に真心から歓迎の意を表したいと、家から走り出しました。言葉では言い表せないようなよろこびを感じながら、いそいで川の方に向かい、マーカーの町から百メートルほどのところにある橋にさしかかったとき、こちらへ近づいてきている二人の人物を目にしました。一人は預言者だと思いました。そのあとに歩いているもう一人は、預言者の高名な弟子のようでした。わたしはいそいで預言者に近寄り、その足元にひざまずき、衣のすそに口づけしようとしたとき目がさめました。そのとき、わたしの魂はこの上ないよろこびでいっぱいになり、あたかも楽園がそのままわたしの心に入ってきたような気がしました。翌朝、夢が正夢であると確信し、顔と手を洗って祈り、正装して香水をつけ、夢で預言者を見た場所に向かいました。前もって、足の速いすぐれた馬三頭を橋のところに連れてくるように従者に命じておきました。わたしが、マーカーの町から川の方へ一人で歩き出したとき、ちょうど太陽がのぼったところでした。橋に近づいたとき、夢で見た二人の男性がこちらの方に進んできているのを見て、わたしの心臓はおどろきではげしく鼓動しました。わたしは無意識に預言者と思われる人物の足元にひざまずき、うやうやしく足に口づけしました。そして、その人物とその仲間に準備した馬に乗るようにこん願しましたが、つぎのような返事がもどってきました。『いや、そうすることはできない。わたしはこの旅を徒歩で終えると誓ったからだ。この山の頂上まで歩いてのぼり、そこで、あなたの囚人を訪れたいと思っている。』」(p.256)

この不思議な経験で、アリ・カーンのバブに対する畏敬の念は一層深まった。バブの啓示にひそむ威力への信念はより不動のものとなり、敬愛の念もますます深まっていった。アリ・カーンは、あたかも従者であるかのように砦の門までモラ・ホセインのあとにしたがった。モラ・ホセインは、門の敷居に立っているバブの顔を見るとす

ぐ歩みを止め、深く頭を垂れ、立ちすくんだ。バブは両手を差しのばして愛情深くモラ・ホセインを抱擁したあと、かれの手を取り自室に案内した。つぎに弟子たちを呼び集め、新年のフィーストを祝った。バブは砂糖菓子や選り抜きの果物などを弟子たちに配り、モラ・ホセインにはマルメロやりんごをあたえながら言った。「このおいしい果物は『楽園の地』と呼ばれるミランから送られてきた。モハメッド・タギがこのフィーストにささげるために摘んだものだ。」

そのときまで、ホセイン・ヤズディとその弟以外の弟子はだれも砦内で夜を明かすことは許されていなかった。その日、看守のアリ・カーンはバブにこう述べた。「もし、モラ・ホセインを今夜お泊めになりたいと望まれるならば、どうぞそうして下さい。わたしには自分の意思というのがありません。何日でもモラ・ホセインを泊めて下さって結構です。わたしはあなたのご命令に従います。」その後もマーカーに到着した弟子の数は増していったが、かれらは阻止されるようなことは一切なく、すぐバブとの会見を許された。(pp.257-258)

ある日、バブはモラ・ホセインを伴って砦の屋根から周辺の景色を見下ろしていた。バブは西の方を向き、アラクセス川が遠くまでうねって流れている様子を見て、モラ・ホセインにこう言った。「あれが詩人のハフェズが詩に歌った川であり、川岸なのだ。『おお、西風よ。アラクセスの川岸を通るならば、その谷間の土に口づけし、なんじの息吹で芳香をあたえよ。なんじに幸いあれ。永久に幸いあれ。おお、サルマの住まいよ。なんじのラクダ追い人の声は何といとしく、なんじの鈴の音は何と心地よいことか。』この地でのあなたの滞在は終わりに近づいてきた。あなたの滞在が長ければ、<アラクセス川岸>を見せたように、<サルマの住まい>をもあなたに見せたであろう。」

バブが言及した<サルマの住まい>は、サルマスの町を意味した。その町はチェリグの近郊にあり、トルコ人によってサルマスと名づけられた。バブはさらに、つぎのように説明をつづけた。「詩人の口から、このような言葉を出させるのは、聖霊の力にほかならない。詩人自身も言葉の意味を理解できないことがしばしばある。つぎの言葉もまた神から靈感を受けたものである。『シラズ市は大騒ぎとなるであろう。甘美な言葉を話す青年が現われるからである。その若者の息吹はバグダッドを動揺させるであろう。』これらの言葉にひそむ神秘はまだかくされたままである。しかしそれは、ヒンの年（一八五二年）の翌年に明らかにされるであろう。」その後で、バブはつぎの有

名な伝承を引用した。「神の王座の下に宝物がかくされている。それらの宝物を探し出すかぎは詩人の言葉である。」

それからバブは、つぎからつぎへと将来起こるべきもろもろの事件について述べ、だれにもそれを明かさないように命じた。そして、今後すぐ起こることをつぎのように知らせた。「あなたがこの場所を離れた後、二、三日して、わたしはほかの山に移されるであろう。あなたが目的地に到着する前に、わたしがマーカーから出発した知らせがとどくであろう。」(pp.258-259)

バブの予示はすばやく実現した。アリ・カーン（看守）の行動をひそかに監視するように命じられた者らは、総理大臣のアガシに詳細な報告を出した。その中でかれらは、アリ・カーンの囚人に対する異常と思われるほどの献身を長々と説明し、それを裏付ける出来事を述べた。「マーカーの砦の看守は、昼夜を問わず囚人と自由に親しく交じ合っているのが見られます。アリ・カーンは、自分の娘とペルシャの国王の継承者である皇太子との結婚を頑固に拒絶してきました。娘を結婚させれば、ソンニ派に属する母方の親族を激怒させ、自分と娘はすぐ死刑に処せられると弁解して拒絶してきたのです。それにもかかわらず、その娘をバブと結婚させようと熱心に望んでいるのです。バブはそれを拒絶しましたが、それでもなお、たん願しつづけています。バブが拒まなかったならば、その結婚はすでに成立しているはずです。」事実、アリ・カーンはバブにそのような要請をしており、モラ・ホセインにまで執り成しを頼んだが、バブの同意を得ることはできなかった。この悪意に満ちた報告は効果を生み出した。気まぐれなアガシは、恐怖感と怒りに駆られて、バブをチェリグの要塞に移動させるというきびしい命令を出したのである。(p.259)

新年から二十日後、バブはマーカーの住民に別れを告げた。住民はバブの九ヵ月にわたる監禁の間に、バブという人物の威力と立派な品格にはっきり気がついたのであった。バブの予示したチェリグへの移動の知らせを聞いたとき、モラ・ホセインはバブの指示にしたがってすでにマーカーを離れ、タブリズに滞在中であった。モラ・ホセインとの最後の別れの際、バブはつぎのように語っていた。「あなたは生まれ故郷からこの場所までずっと歩いてきた。帰りも同じく徒歩で目的地に着かなければならない。あなたが乗馬の腕前を見せる日はまもなく到来する。あなたは過去の英雄が見せた偉大な行為をしのぐ手腕と武勇を示すように定められているのだ。あなたの大胆不敵な行為は、永遠の王国に居住する人びとの賞賛を得るであろう。途中で、コイ、ウ

ルミエ、マラゲ、ミラン、タブリーズ、ザンジャン、ガズビン、そしてテヘランの信者たちを訪れ、一人一人にわたしの心からの愛を伝え、かれらの心が神の美への愛の火であらたに燃え立ち、神の啓示への信念が強まるように努力せよ。テヘランからマゼンダランに行けば、神のかくされたる宝物があなたに明らかにされるであろう。あなたはそこで、過去の最大の業績も小さく見えるほどの偉業を為すように求められるであろう。また、そこで任務の内容が明らかにされ、神の大業への奉仕に必要な力と導きがあたえられるであろう。」

新年から九日目の朝、モラ・ホセインはバブから命じられたとおり、マゼンダランへの旅に出発した。カンバル・アリ（モラ・ホセインの従者）に、バブはつぎの言葉をあたえた。「過ぎし日のカンバル・アリは、神の日を実際に目撃した同じ名前のあなたを称えるであろう。この神の日は、主のなかの主である御方（モハメッド）さえも見るができなかった日である。モハメッドは、自らの強い願望をこう述べていた。『神の日に生き、その光栄を得たわが同胞の顔をこの目で見ることができれば！』」

第十四章 モラ・ホセインのマザンデランへの旅

アリ・カーン（看守）は、モラ・ホセインがマーカーを出発する前に、二、三日間自分の家に滞在してもらいたいと思った。そこで、かれを招待し、マザンデランへの旅に必要な備品をすべてかれのために整えた。しかし、モラ・ホセインは出発を延ばすことも、アリ・カーンが心をこめて準備した備品を用いることも拒否した。モラ・ホセインはバブが指示した町や村に立ち寄り、信者たちを集めてバブの愛情と激励の言葉を伝え、熱意をあらたにし、神の道に確固不動でありつづけるように勧告した。テヘランではふたたびバハオラの面前に出る光栄を得、精神的な糧を受け取った。この糧により、生涯の終わりにおそってきた危機に勇敢に立ち向かうことができたのであった。

バブが約束したかくされた宝物が明るみに出されるのをこの目で見たいと願ひながら、モラ・ホセインはテヘランからマザンデランに向かった。当時、ゴッドスはバルフォルージュ市内の父親所有の家に住み、階層をとわずいろいろな人びとと自由に交わっていた。また、その温和な性格と深い学識で、町の住民の敬愛と賞賛をも集めていた。モラ・ホセインはその町に到着後すぐゴッドスの家に向かった。ゴッドスはいかれを愛情深く迎え、かれが快適に過ごせるように最善をつくしてかれの世話をした。自分の手でモラ・ホセインの衣服についたちりをはらい、水ぶくれのした両足を洗ったりもした。ゴッドスはまた、信者たちの集会でモラ・ホセインに名誉の座をあたえ、丁重にかれを皆に紹介したのである。(p.261)

モラ・ホセインが到着した日の夜、夕食会に招かれた弟子たちが去ったあと、ゴッドスはマーカーの砦でのバブとの親密な交わりについてくわしく教えてくれるように頼んだ。モラ・ホセインはつぎのように答えた。「バブとの九日間の交わりの期間にさまざまなことを見聞しました。バブは信教に直接または間接に関わることを話されましたが、わたしが大業の拡大のためにどのような行動をとるべきかについては、はっきりした指示はあたえられませんでした。ただわたしにこう申されました。『テヘランに行く途中、すべての町村の信者たちを訪れよ。テヘランからマザンデランに行けば、そこでかくされた宝物が明らかになろう。その宝物によって、あなたに定められている任務の内容が明らかにされるであろう。』

このバブの暗示的な言葉で、わずかながらもこの啓示の栄光を感じ取り、今後の大業の勝利を確信しました。そしてやがて、この取るに足らない自分が、神の道の犠牲になることを知ったのです。以前バブと会って別れる際、かならずつぎの会見を約束されましたが、今回の別れではそのような約束も、この世でかれと顔を会わせる可能性さえもほのめかされませんでした。バブの最後の言葉はこうでした。『犠牲の宴会はすばやく迫ってきている。立ち上がり、気を引き締めて準備せよ。あなたの運命を成就するまでは、何によっても妨げられてはならない。目的地に到達したならば、われを迎えるために準備せよ。われもまた、まもなくあなたを追ってくるであろう。』
(p.262)

ゴッドスはモラ・ホセインに、バブの著わした文書を持参したかどうかを聞いた。持参していないことが分かると、かれは自分の所有していた文書をモラ・ホセインに見せ、その中の何節かを読むようにたのんだ。一ページに目を通すやいなや、モラ・ホセインの表情が変わった。その表情には賞賛とおどろきが表われていた。文書の言葉の崇高さ、深遠さ、とくに心の奥底まで浸透するような力に、強烈な感動をおぼえたモラ・ホセインは最高の賛辞を口にせずにはおれなかった。かれは文書をそばに置き、こう述べた。「この文書を著わした人物は、聖なる源泉から靈感を得ていることが明らかです。それは人間が普通修得する学問の源泉をはるかに超えたものです。よってわたしは、この文書の崇高な言葉を心底から認め、その中の真理を無条件に受け入れます。」

ゴッドスが沈黙したままであることと、その表情から判断して、この文書を書いたのはゴッドス自身であるとモラ・ホセインは察した。そこですぐ席を立ち、入り口の敷居のところに行き、頭を垂れ尊敬の念をこめて宣言した。「バブが言及されてきたかくされた宝物が今、わたしの眼前で明らかになりました。この光でわたしの困惑と疑問の暗闇は消滅しました。現在、わたしの師であるバブは、アゼルバエジャンの山中の砦にかくれておられますが、その光輝と威力のしるしは、眼前ではっきりと示されています。わたしはマザンダランでついにバブの栄光の反映を発見しました。」

総理大臣は何と重大な間違いを犯したことであろうか。この愚か者は、バブをアゼルバエジャンの辺鄙な場所に追放し、望みなき生活を強いれば、同胞国民の目からこの神の不滅の炎をかくせると自慢げに思っていたのである。それどころか、神の光(バブ)を山の上に置いたため、かえってその光輝はあまねく注がれ、その栄光ある大業

は広範囲に宣言される結果となったのであるが、かれ自身はそれにはまったく気づいていなかった。策略とあきれほどの誤算を通して、かの聖なる炎を人びとの目からかくすどころか、一層有名にし、ますます輝きあるものとしたのである。(pp.262-263)

一方、モラ・ホセインの行動はいかに公正で、その判断はいかに鋭敏で確実なものであったろうか。かれに会った人はだれも、その学識、魅力、高潔さ、そしておどろくべき勇気を疑わなかった。もしモラ・ホセインが、セイエド・カゼムの死後、自分こそが約束されたガエムであると宣言したとしても、主な弟子たちは異口同音にその主張を受け入れ、その権威に従ったであろう。シェイキ・アーマドの弟子で著名な学識者のママガニは、タブリズでモラ・ホセインから新しい啓示の出現を知らされたとき、つぎのように述べた。「神はわたしの証言者でありたまう。バブの宣言が、モラ・ホセインによってなされたのであれば、その人格のすばらしさと知識の深さを見て、わたしはだれよりも先にその大業を支持し、それを全国民に広めるであろう。しかしかれはほかの人物に従うことを選んだゆえに、かれの言葉を信じることができなくなり、その訴えにも応じられなくなったのだ。」

さらに、バゲル・ラシュティは長い間悩まされてきた難問を、モラ・ホセインが見事に解明するのを聞き、その高い業績を賞賛してつぎのように証言した。「わたしはセイエド・カゼムを困らせて、沈黙させることができると安易に考えていた。ところが、かれの弟子にすぎないモラ・ホセインにはじめて会い、言葉を交わしたとき、どれほど自分の判断が誤っていたかに気がついた。この若者はひじょうにすぐれた能力をそなえており、もしかれが昼を夜であると断言したとしても、それを推論で証明でき、それを学識ある聖職者たちに明確に示すことができると、いまだにわたしは信じているほどだ。」

バブとはじめて会った夜、モラ・ホセインは自分の方がはるかにすぐれていると感じ、シラズ出身の名もない商人の息子の主張を軽視しようとした。しかし、バブがそのテーマ（ジョセフの章）を展開しはじめたとたん、そこに秘められている計り知れない恩典を認めることができたのである。そして、バブの大業を進んで受け入れ、それを正しく理解し、その促進を阻むものをすべて無視した。その後、ゴッドスの人知を超えた高尚な書き物を読んだときも、いつもの明敏さと誤りのない判断力で、ゴッドスの人物と言葉にそなわっている能力の真の価値を理解できたのである。(pp.263-264)

モラ・ホセインの広範囲にわたる深い知識も、この若者（ゴッドス）のすべてを包含する知識の前では、意味のないものとなった。ゴッドスの知識は神から付与されたものであったからである。その瞬間、モラ・ホセインは敬愛する師（バブ）の光輝を強烈に反映しているゴッドスに永遠の忠誠を誓った。自分の最初の義務は、ゴッドスに完全に服従し、その模範にならい、その意志にしたがい、あらゆる手段をつくしかれの安全を守ることであると感じ、殉教の時までこの誓いを忠実に守った。それ以後、モラ・ホセインはゴッドスに最高の敬意を示したが、それはほかの仲間の弟子をはるかにしのぐ神秘的な能力を確信していたからである。それ以外には、自分と同等と見なされるゴッドスに尊敬と謙遜な態度を示す理由はなかった。このように、モラ・ホセインはその鋭い洞察力ですばやくゴッドスの内部にひめられている力の偉大さを理解して、それを態度で表わしたが、それはかれの人格の高潔さゆえであった。

翌朝、ゴッドスの家に集まってきた信者たちは、モラ・ホセインの態度が極端に変わったのを見ておどろいた。前夜、栄誉の座を占め、懇切なもてなしを受けていた客人が、その座を家の主人であるゴッドスにゆずり、敷居のところに謙遜な態度で立っていたからである。集まっている信者の前で、ゴッドスがモラ・ホセインに語った最初の言葉はこうであった。「今、この時間に立ち上がり、英知と威力のついで、神の信教の聖なる名を傷つけようとする多数のよこしまな陰謀者たちを沈黙させなければならない。かれらに立ち向かい、敗北させなければならないのだ。神を完全に信頼し、かれらの陰謀は大業の光輝をさえぎる無駄な試みであることを理解すべきである。あなたは、かの悪名高く、信義のない圧制者であるサイドル・オラマー（高僧）と会見し、この啓示のすぐれた特性を恐れずに明らかにしなければならない。つぎに、コラサンに向かい、マシュハドの町に、われわれの個人用住居と、客人用の家を建てよ。まもなく、われわれもその町に向かいその家に住むつもりだ。その家に心の開いた人びとを招待せよ。その人たちが永遠の生命の川に導かれるように。われわれは、かれらが団結して神の大業をひろめるように勧告するつもりだ。」(pp.265-166)

翌日夜明けに、モラ・ホセインはサイドル・オラマー（高僧）との会見に出かけた。だれの助けも受けずに一人でかれと会い、ゴッドスから命じられた通り、新しい時代のメッセージを伝えた。サイドル・オラマーの弟子たちが集まっている中で、敬愛する師バブの大業を、恐れることなく大胆に弃じた。そしてかれに、無駄な想像で彫られた偶像を粉碎し、その粉々になった断片の上に神の教導の旗を立てるように要請し

た。さらに、過去の教義の束縛から心を解き放して自由になり、永遠の救済の岸にこそぐように求めた。

モラ・ホセインは、かれ特有の力強さで、その見かけ倒しの妖術師が神のメッセージを否定するために持ち出したすべての議論をくつがえし、反ばくできない論理で、その教義の誤りをすべて明らかにした。自分の弟子たちが皆一致して、モラ・ホセインのまわりに集まってゆくのではないかという恐怖感におそわれたサイドル・オラマー（高僧）は、ついに卑劣な手段に訴えた。すなわち、自分の地位を守るために悪態をつきはじめたのである。モラ・ホセインの顔に誹謗をあびせかけ、かれが提出した証拠をさげすむように無視し、何の理由もあげずに、この大業は無用であると自信たっぷりに主張した。

モラ・ホセインは、この高僧が神のメッセージの意義を理解する能力がまったくないことを悟るとすぐ、席から立ってこう述べた。「わたしの論証は、あなたを怠慢の眠りから覚ませることはできなかった。将来、わたしの行動そのものが、あなたが蔑んだ神のメッセージの威力を証明するであろう。」はげしい情熱をもって語られたこの言葉に、高僧はすっかり狼狽した。仰天したかれは返事することさえできなくなった。モラ・ホセインは聴衆の中で自分の言葉に共鳴したと思われる一人に、この会見の状況をゴッドスに伝えるように頼み、つぎの言葉を加えた。「ゴッドスにこう伝えて下さい。『あなたに会う指示はべつに受けていませんので、すぐコラサン州に向かうことにしました。あなたから与えられた任務をすべて実施するために出発します』と。」
(pp.266-267)

モラ・ホセインは一人で、神以外のすべてへの愛着を断ち、マシュハドに向かつて出発した。ゴッドスの望みを忠実に果たす願いをもってコラサンへ向かったのである。かれを支えたのは、ゴッドスの確かな約束を思い起こすことであった。マシュハドに着くとすぐ、バゲルの家を訪ねた。その家はバラ・キヤバンにあった。その近くに土地を購入して、ゴッドスから命じられた通り、そこに家を建てバビイエという名をつけた。この家は現在もその名で呼ばれている。家の完成後まもなくして、ゴッドスはマシュハドに到着しそこに住みはじめた。モラ・ホセインが全力をそそいで、信教を受け入れまでに準備した人たちが、後を絶たずその家を訪れてきた。かれらはゴッドスと会見し、大業の教えを認め、進んでその旗の下に参加した。モラ・ホセインが細心の注意をはらって新しい啓示の知識を普及し、ゴッドスが見事な手腕で増えつづけ

る信者たちを教化した結果、人びとの熱意と興奮の波が、マシュハド市全域にまでおよんだ。さらに、その波はコラサン州の境を越えて急速にひろがっていった。バビエの家はやがて大勢の信者たちの集会所となり、かれらは信教にひそむ偉大な力を、全力をつくして普及させる決意で燃え立った。(p.267)

第十五章 タヘレのカルベラからコラサンへの旅

バブの信教の基本原則をおおっていたヴェールがはがされる時がついに来た。コラサン州の中心で、大業の発展を阻む最大の恐るべき障害を強烈な炎が燃え尽くしたのである。その火は人びとの心の中で燃えさかり、その勢いはペルシャの遠隔の地においてさえ感じる事ができた。信者たちは心に残っていた不安と疑問のため、信教の威力を十分理解できないでいたが、それも消え去った。敵は神の美を顕わす御方（バブ）を終身監禁の身となし、信者たちの愛の火を消そうとした。こうして悪人たちの一団がバブを陥れようと陰謀をめぐらせていた間、神の手はかれらの策略をくじき、その努力を無にするためにいそがしく動いていたのである。ペルシャの東側の州で、全能の神がゴッドスの手を通してコラサンの住民の心に点した火は、激しい炎となって燃え上がった。また、西側の国境を越えたカルベラでは、神はタヘレ（女性の信者）という光を点したが、その光はやがてペルシャ全体に輝きわたるようになっていた。

(p.268)

見えざる神の声は、このペルシャの東と西の二つの偉大な光に向かって、ターの地（テヘラン）にいそぐように呼びかけた。その地は栄光の発祥地であり、バハオラの故郷であった。神はこの二人に、その真理の昼の星である御方（バハオラ）に近づき、その忠告を求め、その活動を助け、その大業が顕わされる準備をするように命じたのである。

ゴッドスがマシュハドに滞在している間、バブは神の命令に従いペルシャの信者全員に書簡を顕わした。それは、忠実な信者全員に、コラサン州、すなわち「カーの地にいそいで行くように」と命じたものであった。このニュースはおどろくほどの速度でひろがり、信者たちは熱く興奮した。それはカルベラに住み、信教の発展に全力を注いでいたタヘレの耳にもとどいた。タヘレはセイエド・カゼムの死後、故郷のガズビンの町を離れ、その聖なる都市に来ていた。師のセイエド・カゼムが予言していたしるしを求めてその都市に来ていたのである。前の章で、かの女が直観力でバブの啓示を発見し、自ら進んでその真理を受け入れた経過について述べた。タヘレはだれからも教えられず、だれからも招かれないうで、約束された啓示の曙光がシラズ市に輝き出すのを認め、その光の啓示者である御方（バブ）に忠誠の誓いを立てたのであった。

(p.269)

タヘレはバブに実際に会わずに信仰の誓いを立てたが、それに対するバブの答えに、熱意と勇気は一層強まった。そして、バブの教えを広めるために立ち上がり、同世代の人びとの腐敗と邪悪をはげしく非難し、国民の習慣と態度に根本的な革新が必要であることを大胆に唱導した。その不屈の精神は、バブへの愛の火で一層燃え立ち、その遠大なビジョンは、バブの啓示にひそむ計り知れない恩恵を発見してより高められた。生まれつきの大膽不敵さと性格の強さは、大業の最終的な勝利を確信して百倍の強さとなった。その尽きることのない精力は、大業の永続的な価値を認めてさらなる力を得た。カルベラでかの女に会った人はすべて、その魅惑的な雄弁のとりことなり、だれもその魅力に逆ことはできなかった。大半の人びとは、かの女の信仰の感化力のがれることはできなかった。皆、かの女の人格のすばらしさを証言し、そのおどろくべき個性を賞賛し、その確信が誠実なものであることを信じたのであった。

タヘレは故セイエド・カゼムの未亡人に大業を教えた。この未亡人はシラズで生を受け、カルベラの女性の中では最初にその真理を認めた人であった。ソルタンは、かの女はタヘレに真心から献身し、タヘレを自分の精神的な導きとして、また愛情深い仲間として尊敬していたと述べている。ソルタンは、この未亡人の人格を心から称え、そのやさしさに賞賛の言葉を惜しまなかった。そして、よくつぎのように語っていた。「未亡人はタヘレをひどく慕っておられた。かの女の家客人として滞在していたタヘレから、一時間でも離れるのを大変いやがられました。それを見て、いつもかの女の家を訪れていたペルシャ人とアラブ人の女友達は、好奇心をそそられ、信仰をもつようになったのです。未亡人はバブの教えを受け入れた年にとつぜん病にかかり、三日後に主人のセイエド・カゼムと同じようにこの世を去られました。」(pp.269-270)

カルベラで、タヘレの努力でバブの大業を受け入れた人たちの中にシェイキ・サレがいた。かれはその町に住むアラブ人で、後日テヘランで最初に殉教した人であった。タヘレはかれを大いに賞賛したので、多くの人たちが、かれはゴッドスと同じ地位にあるのではないかと思った。ソルタンもまたタヘレの魅力に惹かれた一人であった。シラズからもどって信者となり、大業を大胆に、たゆみなく促進し、タヘレの指示を実施するために最善をつくした。もう一人の賞賛者は、モスタファアの父親のシェブルであった。かれはバグダッド出身のアラブ人で、その市の僧侶の中で高い地位を占めていた。タヘレはこれらの忠実で有能な支持者たちの助けにより、かなりの数にのぼるイラクのペルシャ人とアラブ人を信者となすことができた。信者の大半は、タヘレの導きでペルシャの仲間と団結し、やがて模範的な行為で、神の大業の運命を定め、

生命の血をもってその勝利を確立することになった。

バブの要請はもともとペルシャの信者に向けられたものであったが、まもなくしてイラクの信者たちにも伝えられたので、タヘレはそれに大変な熱意をもって応じた。やがて、忠実な賞賛者たちが多数、かの女の模範に従い、コラサンへの旅を希望した。カルベラの僧侶たちは、タヘレがその旅に出ないように説得にかかったが、その背後の悪意ある陰謀に気づいたタヘレは、詭弁者である僧侶たちの各人にあてて、長い書簡を書いた。その中で、かの女は自分の動機を説明し、かれらの偽装を暴露した。(p.271)

タヘレはカルベラからバグダッドに進んだ。その都市で、イスラム教のシーア派とソンニ派、キリスト教、ユダヤ教の有能な指導者たちから構成された代表団が、タヘレに会見を申し込み、かの女の行動の愚かさを悟らせようと努力した。しかしかの女は、かれらの反対の声を黙らせ、強烈な論証でかれらを仰天させたのである。幻滅を感じたかれらは、頭は混乱したまま、自らの無能さを強く感じてかの女のもとを去った。

ケルマンシャーの僧侶たちは、タヘレを歓迎し、尊敬と賞賛のしるしにさまざまな贈り物をおくった。しかしハマダンでは、宗教の指導者たちの態度は二つに分かれた。何人かはひそかに住民を扇動して、かの女の威信を傷つけようとした。また、ほかの者たちは公にかの女の高貴な模範を称え、その勇気を賞賛し、説教壇からこう呼びかけた。「われわれはかの女の高貴な模範に従わなければならない。そして、コーランの神秘をわれわれに説明し、その聖典の難解な点を解明していただくように頼まなければならない。なぜなら、われわれの最高の知識もかの女の広大な知識に比べれば単なる水の一滴にすぎないからだ。」

タヘレがハマダンに滞在中、かの女の父モラ・サレは、ガズビンから使者を送って、故郷の町にもどって長期間滞在するように説得させた。かの女は気がすまなかったが、それに同意した。出発前に、かの女はイラクから同行してきた信者たちに、それぞれ自分の故郷にもどるように命じた。その中には、ソルタン、シェブルとその息子のモスタファ、アベドとその息子ナセルがいた。ナセルは後日、ハジ・アッバスという名をあたえられた。さらに、ペルシャに住んでいたかの女の仲間たち、すなわち、タエルというペンネームをもち、タヘレがファタル・マリという呼称をあたえたモハ

メッド・ゴルペイエガニとほかの者たちも故郷にもどるように指示された。仲間のうちサレとエブラヒム・ゴルペイエガニの二人だけがかの女に同行するために残った。後日、この二人はそれぞれテヘランとガズビンで殉教した。かの女の親族の中では、「生ける者の文字」の一人で、かの女の義兄にあたるモハメッド・アリとかの女の娘と結婚したアブドル・ハディが、カルベラからガズビンまでかの女に同伴した。

タヘレが父親の家に到着後、かの女の従兄弟で夫のモラ・モハメッドは、自分の家に住む女性を使いを送り、タヘレに自分の家に移ってくるように説得しようとした。この尊大で、不実な夫は、モラ・タギの息子で、自分をペルシャの僧侶たちの中で父親と叔父に次いで、学識を身につけている者であると考えていた。タヘレは使いの者にきびしい返事をした。「ごう慢で、厚かましいわたしの親族にこう伝えなさい。『あなたの望みが、本当に忠実な伴侶となることでしたら、あなたはいそいでカルベラに来てわたしを迎え、ガズビンまでわたしの荷車を押して行ったはずです。そうしたら、旅の途中で、わたしは眠っているあなたの心を覚醒し、真理の道を示すことができました。しかし、そういう定めではなかったのでしょうか。わたしたちが別れて三年がたちました。現世においても来世においても、今後あなたと交わることは一切できません。わたしの生涯からあなたを永遠に除いたからです。』」(pp.273-275)

この断固としたきびしい返事に、モラ・モハメッドとかれの父親は激怒した。かれらはすぐにかの女を異端者であると宣告し、昼夜問わずかの女の地位を傷つけ、その名声を汚そうとした。タヘレは熱烈に自分の正当性を主張し、かれらの性格の邪悪さをさらした。平和を愛し、公正な心をもったかの女の父は、このはげしい論争をなげき、両者を和解させようとしたがむだであった。(pp.275-276)

この緊張状態は、シラズ出身でシェイキ・アーマドとセイエド・カゼムの熱心な賞賛者であるモラ・アブドラがガズビンに到着するまでつづいた。その到着日は、一二六三年ラマダンの月（一八四七年八月十三日から九月十二日の間）の初旬であった。その後、モラ・アブドラは裁判中に、サヘブ・ディヴァン（調停者）の前でつぎのように述べた。「わたしは、確信をもったバビ（バブの信者）ではありませんでした。バブを訪問してその大業を調べようとマーカーに行く途中、ガズビンに立ち寄りました。ところが町中が大騒ぎになっていました。市場を通りすぎていると、悪党らしき一団がある男のターバンと靴をはぎ取り、それを男の首に巻きつけて街路を引きずっているのが目に入ったのです。怒った群衆がその男をなぐったり、ののしったりしていま

した。何が起きているのですか、というわたしの質問に、つぎのような答えがかえってきました。『この男が犯した罪は、シェイキ・アーマドとセイエド・カゼムの美德を公の場で称えたことだ。そのため、僧侶の長モラ・タギ（タヘレの義父）が、かれを異端者として町からの追放を命じたのだ。』

この説明にわたしはおどろきました。シェイキ（長老）と呼ばれる人が、どうして異端者とみなされ、残酷な扱いを受けなければならぬのであろうか、と思ったのです。そこで、モラ・タギ本人から真実を教えてもらおうと、かれの神学校へ行き、その男に異端者の宣告をしたかどうかを聞きました。かれはきっぱりと答えました。『そうだ。故シェイキ・アーマドが崇拝していた神は、わたしには絶対信じられない神なのだ。かれと、かれの弟子たちは、大きな誤りを犯している。』これを聞いたとたん、わたしは、かれの弟子たちの前で、かれの顔をぶん殴ってやろうと思いました。そのときは自制しましたが、機会があれば、もう二度と悪態をつけないように、かれの唇をやりで突き刺そうと誓ったのです。(p.276)

そこですぐ市場に向かいました。短剣と鋭いやりの穂を買い入れ、それらを胸にかくして、腹の中で煮えくり返っている怒りをはらす準備をしました。ある夜、モラ・タギが会衆の祈りを先導していた寺院に行き、かれが来るのを待ちました。夜明けごろ、老女が入ってきて、寺院の重要な場所に持参したじゅうたんを敷きました。その後すぐモラ・タギが一人で寺院に入ってきて、じゅうたんのところに行き祈りを唱えはじめました。わたしは音を立てないようにかれの後を追いました。そして、床にひれ伏しているかれに飛びかかり、やりの穂でかれの首をうしろから突き刺しました。大声をあげたかれを仰向けにし、短剣を抜いてかれの口にずぶりと刺しました。その後、同じ短剣で胸と横腹を数回刺し、血を流しているかれをその場に残して、すばやく寺院の屋根に上がりました。

わたしは屋根の上から大騒ぎをしている群衆を見守っていました。大勢の人が寺院に入り、モラ・タギを担架にのせて、かれの家に運びました。人びとは殺人犯が不明なため、このときとばかり卑しい本能をむきだしにし、知事の前でお互いにはげしく責め合いました。その結果、多数の罪のない人たちが逮捕され、投獄されたのです。それを見たわたしは良心の呵責から知事のところに行き、こう聞きました。『殺人犯をあなたの手へ渡せば、投獄されている人たちを全員釈放して下さいますか？』知事の同意を得るとすぐ罪を告白しましたが、かれはわたしを信じようとしなかったのです。つぎに、寺院にじゅう

たんを敷いた老女を証人として呼んでもらいましたが、かの女の証言も聞き入れられませんでした。最後に、死に際にあったモラ・タギのそばに連れて行かれました。かれは、わたしを見ると興奮し、こちらを指してわたしがかれを襲った犯人であることを示しました。かれは、その場からわたしを去らせるように合図した後、まもなくして息を引き取りました。わたしは即座に逮捕され、有罪の宣告を受け投獄されたのですが、知事は約束を守らず、囚人たちを釈放しませんでした。」(pp.277-278)

サヘブ・ディヴァン（調停者）は、モラ・アブドラの率直さと誠実さに好感をいただき、従者に命じてひそかにかれを監獄から逃走させた。真夜中ごろ、モラ・アブドラはセパ・サラールの妹と結婚したばかりのレザ・カーンの家に逃げ込んだ。そこでシェイキ・タバルシの砦での戦いを知り、その砦を勇敢に防御している者たちと運命を共にしたいと念願して、マザンダランに向かった。そしてついにタバルシの砦で、後を追ってきたレザ・カーン共に殉教したのであった。

モラ・タギ（タヘレの義父）が殺害されたので、親族は怒りをつのらせ、タヘレに復讐をはじめた。親族はタヘレをかの子の父親の家に厳重に監禁し、数人の女性に監視させた。かの女らの任務は、タヘレが日々の洗淨以外には部屋を離れないように見張ることであった。モラ・タギの息子たちはタヘレを殺人の扇動者であると非難し、つぎのように主張した。「われわれの父上を殺害するような者は、お前以外にいない。父上の暗殺を命令したのはお前だ。」かれらはこの事件で逮捕した者たちをテヘランに連行し、区長の家を監禁した。モラ・タギの友人と息子たちは全国いたるところを訪れ、この囚人たちはイスラム教の教えを否認する者らであると非難し死刑を要求した。(p.278)

当時テヘランに在住していたバハオラは、タヘレの支持者たちが区長の家を監禁されていることを知った。バハオラは区長とすでに面識があったので、囚人たちを訪れ援助の手を差し伸べようとした。この区長はひじょうに欲が深く、ずる賢い人間であった。かれはバハオラが寛大であることを知っていたので、財政上の援助を受け、それを自分のものとするために、囚人の苦しみを誇張して述べた。「囚人たちはひじょうにあわれな状態にあります。いつもお腹を空かしており、着る物もほとんどありません。」

バハオラは囚人たちの生活を楽にするためにすぐ財政的な援助をあたえ、区長に禁規則をやわらげるように頼んだ。区長はそれに同意し、重たいくさりに耐えられない者たちからくさりをはずし、残りの者たちの苦痛をできるだけやわらげるようにした。区長はさらに、欲にかられて、囚人たちの状況を上官たちに知らせ、かれらの食べ物とお金はバハオラから定期的に支給されていることを強調した。この報告を受けた上官たちも、バハオラの寛大さを存分利用しようと考えた。かれらはバハオラを召喚し、その行動に異議を申し立て、囚人たちとの共謀関係を非難した。それに対して、バハオラは、つぎのように応じた。「区長自ら囚人たちの苦しみと貧窮を誇張してわれに訴えてきたのだ。かれ自ら囚人たちの無実を証言し、わが援助を要請したのだ。その要請に応えたわれを非難されるのか。」

かれらはバハオラを処罰するとおどし、帰宅させず監禁した。これはバハオラが神の大業の道で最初に受けた苦しみであり、かれの愛する人たちのために受けた最初の監禁であった。二、三日後、コリ・カーンとそのほかの友人たちが援助にくるまで、バハオラは監禁されたままであった。コリ・カーンは総理大臣となったアガ・カーンの弟であった。かれらは手きびしい言葉を使って区長を脅し、バハオラを釈放させた。バハオラを監禁した者らは、釈放の報酬として十万円ほどを受け取れると信じていたが、それどころか、コリ・カーンの要請に従わなければならなくなった。もちろん、バハオラからも、コリ・カーンからも、報酬は一切もらえなかった。最後に、かれらは自分たちの行動を後悔して何度も謝り、バハオラを引き渡した。(pp.278-279)

一方、モラ・タギ（殺害されたタヘレの義父）の親族たちは、父親の復讐に全力をそそいでいた。これまでにした復讐（タヘレの監禁など）に満足できず、モハメッド国王に直訴し、同情を得ようとした。国王はつぎのように答えたと言われている。「あなたの父上モラ・タギは、＜忠実なる者の司令官＞であるエマム・アリ（モハメッドの後継者、六六一年に殉教）よりすぐれているはずはない。エマム・アリは弟子たちに、もし敵から殺されたらその殺人者本人だけが死刑を受けて罪をつぐなうべきだと教えたではないか。モラ・タギの殺人犯をわたしに知らせよ。そうすれば、その者を捕らえてあなたに渡すので適切な罰を与えたらよかろう。」

国王の断固たる態度に、かれらはこれまで抱いてきた野望を捨てざるを得なくなった。そこで、シェイキ・サレを殺人犯であるとして逮捕し、死刑に処した。シェイキ・サレは、ペルシャ国内において、神の大業の道で血を流した最初の殉教者であった。聖なる信教の勝利を、生命の血で決定的なものにした勇敢なる一団の最初の人であっ

たのである。殉教の場に連行されていくとき、かれの顔は熱意とよろこびでかがやいていた。かれは絞首台に足早に近づき、死刑執行人に親しい生涯の友であるかのようにあいさつした。かれの口から勝利と希望の言葉がもれつづけ、死の直前それは歓喜の声となった。「あなたを認めた瞬間、わたしはこれまでの願望や信仰を捨てました。あなたこそわたしの望みであり、信仰の的であります！」かれの遺体はテヘランのエマム・ザデ・ザイド廟の境内に葬られている。(p.280)

モラ・タギの親族はシェイキ・サレを死刑に処したが、それでもかれらの憎しみはあくことを知らなかった。さらに陰謀を進めるために、アガシ（総理大臣）に訴えたが拒否された。総理大臣は調停者から、かれらの裏切り行為を聞いていたからであった。それでも思いとどまらずに、サドル・アルデビリ（高僧）にこの殺人事件を訴えた。この高僧はペルシヤの宗教的指導者の中でも、厚かましきで知られている尊大な男であった。かれらはつぎのように申し立てた。

「イスラム教の法を擁護すべき僧侶たちが、どれほど侮辱されているかを見て下さい。イスラム教の指導者であるあなたは、イスラム教に大きな恥辱をもたらしている者らを処罰なさらないのですか。あなたは殺害された高僧の復讐はおできにならないのですか。これほどの凶悪な犯罪を黙認していると、イスラム教の教えと原理の宝庫であるべき僧侶たちに、誹謗がどっと押し寄せてくることがお分かりにならないのですか。沈黙を守っておられると、敵は大胆になり、あなたの築かれた機構を破壊しかねません。その結果、あなたご自身の命まで危険にさらされるのではないですか。」

サドル・アルデビリ（高僧）は恐怖感におそわれたが、自分では何もできないので、国王をだますことにした。そして、つぎのように要請した。「殉教された方（モラ・タギ）の親族がガズビンにもどるとき、囚人たちを同行させて下さるようお願いいたします。そうすれば、親族はガズビンで囚人たちの罪を許し、自由の身となすことができます。それによってかれらの地位は高まり、住民からさらなる尊敬を得るでありましょう。」この狡猾な高僧の陰謀に全然気づかなかった国王は、その要請にすぐ同意した。ただし、釈放後の囚人たちが安全な生活ができ、今後もかれらに危害が加えられない、という保証つきの文書をガズビンから国王に送るという条件つきでその要請は許可された。(pp.280-281)

ところが、モラ・タギの親族は、囚人たちが自分たちの手に渡されるやいなや、根深い憎悪感をもって囚人たちに復讐しはじめたのである。最初の夜、まずハジ・アサドラを情け容赦なく殺害した。かれはアラー・バルディの弟で、モハメッド・ハディとモハメッド・ジャバドの叔父であり、著名な兄同様、敬虔で正直な生活態度でガズビンで知られた商人であった。モラ・タギの親族たちは、ハジ・アサドラを故郷の町ガズビンでは殺害できないことを十分承知していたので、殺人の疑惑がかからないテヘランでかれの命を取ることにしたのである。真夜中にその恥ずべき行為を犯し、翌朝ハジ・アサドラは病死したと発表した。かれの友人や親戚の者らの大半はカズビン出身であったが、だれもハジ・アサドラの高貴な生命を消した犯罪に気づかないまま、かれにふさわしい埋葬を行った。

バジ・アサドラの残りの仲間のうち、学識と人格で深い尊敬を受けていたタヘルとエブラヒム・マハラッティは、ガズビンに到着直後惨殺された。前もって扇動されていた住民は二人の姿を見ると、すぐ処刑せよと大声で叫んだ。恥知らずの悪党の一団が、ナイフ、剣、やり、斧で二人に襲いかかり、めった切りにした。この残虐行為でかれらの身体は細かく裂かれたため、埋葬しようにも身体の断片さえ見つからないほどであった。

何たることであろう。このような信じがたい残忍な犯罪行為が、イスラム教の最高指導者が百人も居住すると誇るガズビンで発生するとは！ しかも、全住民のうちだれもこの卑劣な殺人に抗議する者はいなかった。これほど極悪で、恥ずべき罪を犯す権利があるのかどうかを質問する者もいなかった。自分たちだけがイスラム教の神秘に通じていると主張する者らによる野蛮行為と、イスラム教の光を最初この世にもたらした者らによる模範的な行為にある矛盾に、だれも気がついていなかった。さらに、だれ一人として、憤慨してつぎのように叫ぶ者もいなかったのである。「おお、よこしまで強情な世代の者らよ。おまえらは何という汚名と恥辱の深みに落ちたことか。おまえらの忌まわしい行為は、卑劣きわまる人間の行為より残忍である。どの野獣も生き物も、おまえの行為の獰猛さに匹敵できないことがわかっているのか。おまえはいつまで無思慮でいるのか。会衆の祈りを先導する人物が高潔でなければ、その祈りは効果がないことを信じていないのか。その祈りは、それを先導する者の心が清められないかぎり神には受け入れられない、とおまえ自身くり返し宣言してきたではないか。しかもおまえらは残虐行為を扇動し、それに加わる者らをイスラム教の真の指導者であり、正義を体現する者らであるとみなすのか。おまえらは自分の宗教をかれらに支

配させ、自分の運命をかれらに牛耳らせているではないか。」(pp.282-283)

この残虐行為のニュースはテヘランにとどき、市のすみずみまでおどろくべき速度でひろがった。総理大臣のアガシは、これにはげしく抗議しつぎのように叫んだと伝えられている。「一人の殺害に復讐するために、何人もの人びとを虐殺してよい、とコーランのどの節にあるのか！」モハメッド国王もまた、サドル・アルデビリとその共犯者たちの裏切り行為に強い不満の意を表明した。国王はその卑怯行為を非難し、かれを首都テヘランからクムの町に追放した。総理大臣はかれの没落を試みてきていたが、いずれも成功しなかったのでこの左遷を大いによろこんだ。このとつぜんの解任で、かれの権威がひろがる不安が除かれたからであった。総理大臣がガズビンでの虐殺を非難した理由は、防御のすべのない犠牲者たちの大業に同情するというよりも、サドル・アルデビリを苦境に陥らせ、その解職を望んでいたからである。

しかしながら、国王と政府は、犯行者たちに直接罰をあたえなかった。そこで自信をつけたかれらは、ほかの復讐方法を探しはじめた。そしてついにタヘレに目を向け、仲間と同じ運命をたどらせることを決めたのである。監禁中のタヘレは敵の陰謀を知らされるとすぐ、モラ・モハメッド（タヘレの前夫）につぎのメッセージを送った。かれは父親（殺害されたモラ・タギ）の後を継いでガズビン町の僧侶の長となっていた。

『かれらは、口にもものを言わせて神の光を消そうとする。だが、神の方では、その光をますます見事に輝かせたまう。信仰なき者はそれを忌みきらうのであるが。』（コーラン）もし、この大業が真実のものであり、わたしの賛美する主が唯一真実の神でありますならば、神は九日以内にあなたの暴虐からわたしを自由にして下さるでしょう。もし神がそうして下さらなければ、あなたは思い通りにわたしを扱って下さって結構です。そのときあなたは、わたしの信仰の誤りを最終的に証明されるでしょう。」この大胆な挑戦を受けることができないことを悟ったモラ・モハメッドは、タヘレのメッセージを完全に無視することにし、自分の目的を達成するために陰険な方法をさがしはじめた。

タヘレが自由の身になると定めた時間前に、バハオラはタヘレを監禁状態から救い出し、テヘランに連れ出すことにした。バハオラはタヘレの言葉が真実であることを

敵に証明し、敵が企てているかの女の殺害計画をくじく決意をした。そこで、バハオラはモハメッド・ハディ（タヘレの親族から殺害されたハジ・アサドラの甥）を呼び、タヘレを助け出してすぐテヘランのバハオラの家に移動させるように指示した。それに従い、モハメッド・ハディは、妻カチュヌにバハオラからの封書を渡し、乞食に変装してタヘレが監禁されている家に行き、その封書をタヘレに手渡し、家の門のところでしばらく待つように指示した。そして、タヘレが出てきたら、待機している自分（モハメッド・ハディ）のところにいそいで連れて来るように指図した。

バハオラはさらに、使者のモハメッド・ハディにつぎのように命じた。「タヘレがきたらすぐテヘランに向かうがよい。今夜、ガズビンの城門の近くに一人の使いと三頭の馬を送っておくので、その使いと馬をガズビンの城壁外の場所に待機させよ。タヘレが出てきたならば、かの女をその場所まで案内し乗馬させて、めったに人の通らない道を通り抜け、夜明けにテヘランの郊外に到着するようにせよ。城門が開いたらすぐテヘラン市内に入り、タヘレの身許がだれにも知られないように細心の注意をはらいながらわが家に直行するがよい。全能なる神はかならずあなたの歩みを導き、あなたを間違いなく守って下さるであろう。」(pp.283-284)

モハメッド・ハディは、バハオラの言葉で確信を強め、その指示を実行するためにすぐ出発した。かれは何にも妨げられずに、指示通り定められた時刻にタヘレをバハオラの家案内することができた。タヘレがガズビンからふしぎにもこつ然と姿を消したので、かの女の友人も敵も同様に仰天した。かれらは夜中家々を探し回ったが、かの女を見つけることはできなかった。かの女の予言の的中で、敵の中でも一番猜疑心の強い者もおどろいた。タヘレの信じる信教には神秘的な力があるにちがいないと思って信者となった者もいた。タヘレの実弟ヴァハーフもその日大業を認めたが、その後の行動で、その信仰が不誠実なものであることが明らかとなった。

タヘレは、自分が定めた救出時間が到来したとき、すでにバハオラの家保護されていた。かの女はだれの面前に自分が案内されたかを十分知り尽くしていた。そして、自分が受けている手厚いもてなしが神聖なものであることも深く感じ取っていた。バブの信教をだれからも知らされずに受け入れたと同様、将来のバハオラの栄光を直観力で感知したのである。六十年（一八四四年）、カルベラで書いた詩の中で、かの女はバハオラが将来顕わす真理をすでに受け入れたことを暗示している。わたし（著者）も、テヘランのセイエド・モハメッドの自宅で、タヘレ直筆の詩句を見せてもらった

ことがあるが、その詩の句のすべては、バブとバハオラの崇高な使命へのかの女の信念を雄弁に表わしていた。つぎの句もその一つである。(pp.285-286)

「アブハの美（バハオラ）の光輝は、暗闇のヴェールを破った。見よ！ その御顔からかがやき出た光の中で、蛾のように踊るかれの愛人たちの魂を。」かの女が確信をもって予言したり、敵に向かって大胆に挑戦できたりしたのは、バハオラの威力を堅く信じていたからであった。その威力への不動の信仰があつてこそ、監禁されていた暗黒の期間に、勝利が近づいていることを勇氣と確信をもって主張できたのである。

テヘラン到着後二、三日して、バハオラはコラサンに向かおうとしていた信者たちに、タヘレを同行させることにした。バハオラ自身も二、三日後にテヘランを去り同じ方向に向かうことにした。かれはアガ・カリム（バハオラの実弟）を呼び、タヘレと付添いの女性ガネテをすぐテヘラン郊外のある場所に連れて行き、そこからコラサンに向かうように指示した。そしてこう警告した。テヘラン市の城門の守衛は、許可証のない女性は門を通さないように命じられているので、タヘレの身許が知られて出発を阻まれないように細心の注意を払うようにと。

わたし（著者）は後日、アガ・カリムからつぎのように聞いた。「タヘレと付添いの女性とわたしは、神を信賴して郊外まで馬に乗って行きました。城門に配備されている守衛たちは、われわれの通過を止めたり目的地を聞いたりしませんでした。テヘランから五キロメートルほど行ったところで馬からおりました。そこは山のふもとにある果樹園で、その真ん中に家がありましたが、だれもいないようでした。持ち主を探していたところ、草花に水をかけている老人を見かけました。わたしの質問にかれはこう答えました。家の持ち主と借家人との間に争いが起こり、その結果借家人が去ってしまったと。そしてこう付け加えました。(pp.286-287)

『わたしは争いが解決するまで、この土地と家の番をするように持ち主から頼まれております。』これを聞いたわたしは大変うれしくなり、かれを昼食に招きました。その日の午後、わたしはテヘランにもどることにしました。この老人はわたしのいない間、タヘレと付添いの女性を守ってくれることになりました。夕方には信用できる者が来ること、また翌朝には、わたしもコラサンへの旅に必要な備品をたずさえてもどつてくることをかれに約束しました。

テヘランに到着後、生ける者の文字の一人であるバゲルと従者を、タヘレのいる場所に送りました。バハオラに、タヘレがテヘランから無事出発したことを報告したところ、大変よろこばれ、その果樹園を「楽園」と名づけられました。そして、こう言われたのです。『その家は、あなたのために神が準備されたものだ。あなたが神から愛される人たちをもてなすことができるようにと。』タヘレはその場所に七日間滞在した後、ファタという呼び名のモハメッド・ハサンとほか数人と共にコラサンに向かいました。バハオラはわたしに、タヘレの旅に必要な備品をととのえるように命じていました。』

第十六章 バダシュトの大会

タヘレの出発直後、バハオラはコラサンへの旅の準備を、実弟のアガ・カリムに指示した。さらに、家族が安全に不自由なく生活できるように、その世話もかれに頼んだ。バハオラがシャー・ルッドに到着すると、ゴッドスが迎えにきていた。かれはバハオラがシャー・ルッド近づいているのを聞いてすぐ、それまで住んでいたマシュハドから出てきて、バハオラを待っていたのである。当時、コラサンの全州は、激動の最中であつた。ゴッドスとモラ・ホセインがはじめた活動と、かれらの熱意、勇気、雄弁は、住民を眠りから覚まし、多数の人びとの心に、気高い信仰心と献身の炎を点したが、一方、ほかの者らの胸は、狂信と悪意でいっぱいになった。多数の探求者たちが、絶えず四方八方からマシュハドに来て、モラ・ホセインの家を訪れた。そこでモラ・ホセインは、かれらをゴッドスの面前に案内したのである。

市当局は、探求者の数がますます増えてきたので不安になってきた。警察署長は、この聖なる都市のいたるところに流れ込んでくる興奮した大勢の人びとを見て、心配し、うろたえたのである。かれは、自分の権威を誇示するために、モラ・ホセインを脅迫して、その活動を抑えようと決心した。そこで、モラ・ホセインの従者ハサンを逮捕し、酷い刑をあたえるように命じた。命令を受けた部下たちは、ハサンの鼻に穴を開け、それにひもを通して、道路上を引っ張りまわした。(p.288)

モラ・ホセインは、従者ハサンが受けた屈辱的な苦しみを知らされたとき、ゴッドスの面前にいた。この悲痛なニュースが、敬愛する師ゴッドスの心を苦しめないように、モラ・ホセインは静かに立ち上がり、そこを離れた。仲間たちはすぐ、かれのまわりに集まってきて、潔白な信者をおそった残虐行為を憤り、それに復讐するようにせき立てた。モラ・ホセインは、かれらの怒りをなだめてこう言った。「ハサンが受けた侮辱に心を痛めたり、動揺したりしてはならない。ハサンはまだ生きていて、明日、皆のところに安全に引き渡されるからだ。」

モラ・ホセインの断固とした言葉に、仲間たちは沈黙したが、胸中では、このむごい傷に仕返ししたくてたまらなかつた。やがて、仲間の多くが団結して立ち上がり、マシュハドの街路を「おお、この時代の主よ！」と大声で叫びまわりはじめた。これは、かれらの信教に加えられた侮辱に抗議するものであつた。この叫びは、神の大業

の名のもとで、コラサンで最初にあげられたものであった。その叫び声は、町を越えて、その州の最遠隔の地方までひびきわたり、住民の心を大きく動揺させた。それはまた、その後起こるべき大事件のはじまりを合図するものであった。

そのあとの混乱状態の中で、モラ・ホセインの仲間、ハサンを道路上で引っ張りまわした者らを切り殺した。そして、救い出したハサンを、モラ・ホセインのところに連れて行き、虐待者たちを殺害したことを知らせた。モラ・ホセインはこれを聞いて、つぎのように言ったと伝えられている。「皆は、ハサンが受けた試練にさえ耐えられなかった。では、どのようにホセインの殉教に耐え得るといえるのか。」(p. 289)

マシュハド市は、サラールが起こした暴動のあと、平和と静穏を取りもどしたばかりであったが、ふたたび、混乱と苦難に陥ったのである。ミルザ王子は軍団を従えてマシュハド市から十五マイルほどのところに駐屯していたが、このあらたな騒動の知らせを聞き、緊急事態に対処しはじめた。まず、特別班を即刻マシュハド市に送り、知事の援助をかりて、モラ・ホセインを逮捕し、自分のもとに連れてくるように命じた。そのとき、砲兵隊長のカーンが、こうこん願した。「わたしはモラ・ホセインを敬愛し、賞賛しています。かれを傷つけようとされているのならば、まず、わたしの命を取り、その後何なりとあなたの計画を進めて下さい。わたしが生きているかぎり、モラ・ホセインが、わずかでも無礼に扱われることに耐えられないからです。」

王子は、この突然のこん願にはたと困った。どれほどこの隊長を必要としていたかがわかっていたからである。そこで、かれの不安を取り除こうと、こう述べた。「わたしもまた、モラ・ホセインを深く敬愛している。野営地に来てもらうことにより、騒動の拡大を防ぎ、かれの身も安全に守られると思っているのだ。」王子はさらに、自筆でモラ・ホセインに手紙をしたため、「数日間本営に移っていただくことを心から望んでいます。激怒している反対者たちの攻撃から、あなたをかならずお守りします」と約束した。王子は、モラ・ホセインのために、自分個人用のこった飾りのついたテントを自分のテントの近くに張らせた。

モラ・ホセインは、受け取った手紙をゴッドスに見せた。ゴッドスは、王子の招きに応じるように助言した。そして「危害を加えられることはない」と安心させ、こう述べた。「わたしは、今夜、生ける者の文字の一人であるモハメッド・アリを伴ってマ

ザンダランに向かう。神の御意ならば、後日あなたもまた、大勢の忠実なる信者たちの先頭に立って、〈黒旗〉をかかげてマシュハドを出、わたしと合流できよう。全能の神が定められたところで再会しよう。」(pp.289-290)

モラ・ホセインはよろこんでこの助言に応じた。そして、ゴッドスの足元に身をかがめ、自分にあたえられた任務を忠実に果たすことを約束した。ゴッドスは、愛情深くモラ・ホセインを抱擁し、眼と額に口づけし、全能の神がかならず守ってくれると、安心させた。同じ日の午後はやく、モラ・ホセインは馬に乗り、平静に、威厳をもって王子の野営地に向かった。到着すると、砲兵隊長のカーンがおごそかにかれを迎えた。王子は、砲兵隊長と数人の士官に、モラ・ホセインを歓迎し、特別に張られたテントに案内するように命じていたのである。

その夜、ゴッドスはバビの家を建てたバゲルをはじめ、とくにすぐれた弟子たちを何人か呼び寄せ、モラ・ホセインに真心からの忠誠をちかい、かれの望みにはすべて従うように命じた。そして、こう述べた。「われわれの前には大嵐がまっている。はげしい動乱がすばやく迫ってきている。かれに忠実であれ。かれの指示に従えば、皆救われるであろう。」ゴッドスは以上の言葉で仲間たちに別れを告げ、モハメッド・アリを伴ってマシュハドに向かった。二、三日後、ゴッドスはソレイマン・ヌーリと出会い、タヘレがガズビンの監禁から解放され、コラサンに向かったことと、そのあとバハオラが首都テヘランを離れたことなどを知った。(pp.290-291)

ソレイマン・ヌーリとモハメッド・アリは、バダシュトに到着するまでゴッドスに同伴した。夜明けにバダシュトに着いたところ、その小さな部落に大勢の信者の仲間たちが集まっていたのがわかった。しかし、かれらは旅をつづけることにしてシャー・ルードの村に向かった。村の近くまできたとき、かなり後を歩いていたソレイマン・ヌーリは、バダシュトに行く途中のハナ・サブに出会った。なぜ大勢がバダシュトに集まっているのかをたずねたところ、二、三日前に、バハオラとタヘレがシャー・ルード村を出てその部落に向かったこと、多数の仲間がすでにイスファハン、ガズビン、そのほかの町々から到着し、バハオラのコラサンへの旅に同行するために待機していることを知らされた。ソレイマン・ヌーリは、ハナ・サブに言った。「バダシュトにいるアーマド・イブダルにこう伝えて下さい。『まさしく今朝、光があなたを照らしたが、あなたはその輝きを認めることができなかった』と。」(光とはゴッドスを指す。)ハナ・サブからゴッドスのシャー・ルード到着を聞いたバハオラはすぐ、ゴッドスに会うこ

とにした。同じ日の夕方、バハオラはモハメッド・モアレムを従えて、馬で村に行き、翌日の夜明けに、ゴッドスを伴ってバダシュトにもどってきた。(p.292)

夏のはじまりであった。バハオラはバダシュトで三つの庭園を借りた。一つはゴッドスの専用で、一つはタヘレと従者、もう一つは自分のためであった。バダシュトに八十一人が集まってきていたが、皆到着の日から解散の日までバハオラの客であった。バハオラは毎日書簡を顕わし、それを、ソレイマン・ヌーリが皆の前で唱えた。バハオラはまた、各人に新しい名前を与えた。バハオラ自身はそのとき以来「バハ」と呼ばれるようになり、最後の生ける者の文字は「ゴッドス」という名前を授かり、ゴルラトル・エインは「タヘレ」の名を与えられた。その後、バブはバダシュトに集まった各人に、特別の書簡を書いたが、そのとき、それらの新しい名前を用いた。後日、弟子たちの中の頑固で保守的な何人かが、タヘレが昔からの伝統を捨てたことを非難し、バブにその不満を訴えた。そのとき、バブはこう答えた。「タヘレに『純粹なる人』と名づけた威力と栄光の舌なる御方（バハオラ）に関して、われに何が言えようか。」

毎日、その忘れがたい集まりで、昔からの伝統が一つずつ廃止され、新しい法律が紹介されていった。イスラム教法の尊厳を守ってきたヴェールが容赦なく引きはがされ、盲目の崇拜者たちが長い間賛美してきた偶像が荒々しく壊された。しかし、これらの大胆な革新がどこからきているのか、その源泉は何なのか、だれにもわからなかった。自分たちの道を誤りなく導いている聖なる手に、だれも気づいていなかったのである。その村に集合してきた各人に、新しい名前を与えた人物（バハオラ）の身元さえも、皆にはわからないままであった。もし気づいた者が少数いたとしても、この遠大な変革をもたらした人はバハオラではないかと、おぼろげに思った位であった。(p.293)

バダシュトでの状況に一番よく通じている一人、アブドラブはそこで起こったことを、つぎのように述べた。「あるとき、バハオラは病気で床につかれました。それを聞いたゴッドスは、バハオラのところに駆けつけました。バハオラの面前に案内されると、その右側に座りました。残りの仲間たちも徐々に歩いてきてバハオラのまわりに集まってきました。皆が集まった直後、タヘレの使者、モハメッド・ハサンがとつぜん来て、タヘレの伝言をゴッドスに伝えました。それは、タヘレのところに来てくれるようにという願いでした。ゴッドスは断固とした口調でこう答えました。『かの女とは完全に関係を断った。かの女と会うのはおことわりだ。』使者はすぐそこを去りました。」

たが、まもなくしてもどってきて同じ伝言を伝え、タヘレの緊急な願いを聞いてくれるように訴えました。『タヘレさんは、あなたのお出でを強く望んでおられます。そうなさらなければ、タヘレさん自らあなたのところにいらっしゃいます。』それでもゴッドスの態度が変わらないのを見た使者は、剣を抜き、ゴッドスの足元に置いて言いました。『あなたが行かれるまで、わたしはここから離れません。タヘレさんのところにわたしといっしょに行って下さるか、この剣でわたしの首をはねて下さるかどちらかにして下さい。』『タヘレのところには行かないとすでに言ったであろう。』と、ゴッドスは腹立たしく答え、こう述べました。『むしろ、お前が申し出たように、お前の首をはねることにしよう。』

ゴッドスの足元に座っていたモハメッド・ハサンは、首がはねられやすいように頭を前にのぼしました。そのとき、とつぜん盛装したタヘレがヴェールなしで現われました。それを見た瞬間、皆仰天しました。ヴェールをつけないタヘレの顔を見るなど想像もおよばなかったのです。かの女の影を見ることさえもつたいないと思われていたからです。仲間たちは皆、タヘレを純潔の最高の象徴であるファテメ（モハメッドの娘、エマム・アリの妻）の顕現とみなしていたのです。(pp.294-295)

タヘレは威厳をもって静かに進み、ゴッドスの右側に座しました。かの女のまったく冷静な態度は、そこに集まっていた仲間たちのおどろいた顔と著しい対照を示していました。皆の魂は、恐れと怒りと当惑で、奥底までかき乱され、身体の機能がまひしてしまっただけでした。アブドル・コーレケは、タヘレを見て、強烈な衝撃を受け、それに耐えきれずにのどを切り、血まみれになり、興奮で悲鳴をあげながら逃げ去りました。そのほか、同じようにその場から去り、信仰を捨てた弟子たちもいました。仲間の大半は、おどろきと狼狽のあまり口がきけなくなり、タヘレの前に立ちすくんだままでした。その間ゴッドスは、剣のさやに手を置き、言葉では表現できない怒りを顔に浮かべて、その場に座ったままでした。その様子は、あたかもタヘレを切る機会を待っているかのようでした。

しかし、タヘレはこの威嚇的な態度に左右されずに、最初に来たときと同じ威厳と自信を保っていました。それだけでなく、その顔はよろこびと勝利でかがやいていたのです。タヘレは仲間たちの心を動揺させたことには気をとめないで、席から立ち、その場に残っていた仲間たちに話しはじめました。コーランの言葉にきわめて似た言葉で、大変な熱意をもって雄弁に訴えたのです。しかも、その言葉は前もって準備し

たものではありませんでした。そして最後に、つぎのコーランの句を引用しました。『まことに、敬虔なる者は、庭園と川にかこまれた真理の場である強大な王の面前に住まうであろう。』タヘレは、この句を口にしながらバハオラとゴッドスの兩人にそっと目を投げかけました。が、どちらを指しているかはだれにもわかりませんでした。その直後、タヘレはこう宣言しました。『わたしの言葉はガエム（バブのこと）が話される言葉です。それは地上の統領と貴人を逃げ出させるほどのものです。』（原文第一章十五ページ参照）（p.295）

つぎに顔をゴッドスに向け、コラサンでのかれの行動をいましめました。それは、かの女が信教のために重要だと思ったことをかれがしなかったからでした。そこでゴッドスは言い返しました。『わたしは自分の良心に自由に従えるのだ。同じ弟子の意に服従しないでよいのだ。』タヘレはゴッドスから目を離し、その場にいる人たちに、この大いなる出来事を祝うように招きました。『今日は祝日で、世界中の人びとがよるべき日です。これまでの束縛が断ち切られた日です。この大いなる業績にあずかる皆さんは、立ち上がって抱擁し合おうではではありませんか。』

この忘れがたい日からしばらくの間、その場に集まっていたバブの弟子たちの生活態度と習慣に大きな変革が起こった。かれらの礼拝の仕方がとつぜん根本から変わったのである。敬虔な信者たちが、それまでに習慣としていた祈りや儀式の方法が最終的に廃止されたのであった。（p.296）

しかし、この変革を熱烈に唱導してきた弟子たちの間に大混乱が生じた。何人かは、これほど徹底的な改革は異端であると非難し、イスラム教の神聖な法律を棄てることはできないとした。ある者たちは、これに関して判断を下すのはタヘレだけであるとみなし、かの女は、弟子たちに無条件の服従を求める資格があるとした。ほかの者たちは、タヘレのゴッドスに対する態度をとがめ、ゴッドスこそバブの代表であり、そのような重要な事柄に関して判断を下す権威があるとした。さらに別の者たちは、タヘレとゴッドス両人の権威を認め、この出来事はすべて神から送られた試練であるとみなした。つまり、真理と誤りを分け、忠実者と不忠者を区別するために下されたものであるとみなしたのである。

タヘレは、幾度かゴッドスの権威を否定し、つぎのように述べたと伝えられている。

「ゴッドスは、皆を啓発し、導くためにバブが送られた弟子とみなされます。しかし、その以上の権威はかれにありません。」ゴッドスの方も、タヘレを「異端をもたらす者」と非難し、かの女の説を支持する者らに「誤謬の犠牲者」という汚名を着せた。この緊張状態はバハオラが仲裁に入るまで二、三日つづいた。バハオラは見事な手腕で、二人の間に完全な和解をもたらした。はげしい論争で受けた傷をいやし、両人の努力を建設的な奉仕の道へと導いたのであった。(p.297)

この忘れがたい集会の目的は達成された。新しい秩序を知らせるクラリオンの音がひびいた。人間の良心を束縛していた因襲が大胆に問われ、一掃された。こうして、新しい時代の法律や教訓を宣布するための道が開けたのである。そこで、バダシュトに集まった残りの仲間たちはマザンデランに向かう決心をした。ゴッドスとタヘレは同じハウダ（馬に乗せられた屋根つきの座席）に座した。それはバハオラが二人のために準備したものであった。旅上で、タヘレは毎日歌を作り、従者たちに歌わせた。山も谷も、その熱烈な一団の歌声にこだました。かれらは古い時代の消滅と新しい時代の誕生を祝いながらマザンデランに向かったのである。

バハオラはバダシュトに二十二日間滞在した。マザンデランに向かう途中で、バブの弟子の何人かが、イスラム教の法律や規律から自由になったことを濫用しようとした。かれらは、ヴェールを棄てるという前例のないタヘレの行動を、節度を無視して利己的な欲望を満たしてよい、という合図とみなしたのである。そして、何人かが極端な行動に走ったため、全能の神の怒りをかい、即刻分散となった。ニヤラ村で、かれらはきびしい試練を受け、敵から重傷を負わされた。この分散で、無責任な弟子たちが起こそうとした騒動の火は消され、大業の荣誉と威厳は保たれた。(p.298)

わたし（著者）はバハオラから、この出来事をつぎのように聞いている。「われわれは皆ニヤラ村に集まり、山のふもとで休んでいた。夜明けにとつぜん小石を投げつけられて目をさました。近隣の住民が山の頂上からわれわれに向かって小石を投げつけていたのである。その攻撃があまりにもはげしくなったので、仲間たちはおどろき恐れて逃げ去った。ゴッドスにわれの服を着せ、安全な場所に行かせ、あとで自分もそこに行くことにした。ところが、あとでそこに行ったところ、かれの姿はなかった。この攻撃で、われわれのキャンプ場は荒らされてしまった。そこに残っていた者は、タヘレとシラズから来た若者ミルザ・アブドラだけであった。タヘレの保護を頼める者は、この若者しかいなかった。かれはこの事件で実におどろくべき勇氣と決断力を

示した。剣を手にし、村人の猛烈な襲撃にもひるまず、前に飛び出して、われわれの所有物を略奪しにきた敵の手を阻止した。かれ自身は数カ所の傷を負いながらも、われわれの所有物を命がけで守ったのである。われは、かれにその行動を止めるように命じた。騒動がおさまったとき、われは、村の住民のところに行き、かれらの行動は残酷で恥ずべきものであることを納得させた。その後、略奪された所有物の一部を取り返すことができた。」

バハオラはタヘレと従者を伴ってヌールに向かった。バハオラはアブトラブに、タヘレを安全に守る役目をあたえた。その間、敵たちは、モハメット国王がバハオラに対して怒りをいさぐように全力をつくしていた。バハオラこそシャー・ルッドとマザンデランの暴動の主導者であると報告し、ついにバハオラを逮捕させることに成功したのである。国王は怒りをこめてつぎのように言ったと伝えられている。「これまでバハオラに対する非難は黙認してきた。それは、バハオラの父上がわが国に大いなる貢献をしたからである。しかし今、バハオラを死刑に処する決意でいる。」(p.299)

国王は、従者の一人にこう命じた。「マザンデラン在住のおまえの息子に、バハオラを逮捕させ、首都に連行させよ。」その息子は、バハオラのために準備した歓迎会の前日に、その命令状を受け取った。かれはバハオラを深く敬愛していたので、大変心を痛めたが、だれにもそのことは知らせなかった。しかしバハオラは、かれの悲しみを察し、神に信頼を置くように助言した。翌日、バハオラが、かれに伴われて家に向かっているとき、テヘランの方から馬に乗って近づいている使者に出会った。かれはその使者と話したあと、バハオラのところへ急いでもどりながら「モハメッド国王は亡くなりました。」とマゼンデランの方言で叫んだ。そして国王の命令状を出してバハオラに見せた。その命令状は無効となった。その夜、バハオラは、平穏でよろこびに満ちた時間をほかの客と過ごすことができた。

一方ゴッドスは敵にとらえられ、サリの高僧モハメッド・タギに監禁されていた。残りの仲間は、ニヤラで分散した後、四方八方に散らばり、めいめいバダシュトで起こった重大な出来事のニュースをほかの信者たちに伝えた。(p.300)

第十七章 バブのチェリグ牢獄監禁

ニヤラの事件は一八四八年七月中旬に起こった。その月の下旬に、バブはタブリズに連行され、圧制者から屈辱的な傷を負わされた。バブの尊厳に対する侮辱と、ニヤラの住民が、バハオラとその仲間に向けた攻撃は、ほとんど同時に起こった。ニヤラでの攻撃は無知でけんか好きな住民による投石であったが、バブが受けたのは残忍で、不信実な敵によるむち打ち刑であった。

ここで、迫害者がバブにひどい侮辱をあたえるようになった状況について説明してみよう。バブは総理大臣アガシの命令により、チェリグの牢獄に移され、看守ヤーヤ・カーンに引き渡された。この看守の妹は、モハメッド国王の妻で、ナエブス・サルタネの母親であった。看守は、総理大臣から、だれもバブに会わせてはならないというきびしい命令を受けていた。とくに、マーカー砦の看守アリ・カーンのように、命令を無視して徐々に監視をゆるめてはならない、と強く警告されていた。(pp.301-302)

権力を牛耳っていた総理大臣アガシのバブに対する敵対感は強烈で、その命令は絶対的であったが、看守ヤーヤ・カーンは、命令を守りつづけることはできないと感じた。かれもまた、囚人バブに惹きつけられていった。バブの精神に接触したとたん、自分の義務を忘れたのである。バブと会った最初の瞬間から、その愛は心に深く浸透し、全身とらわれてしまったのである。チェリグの住民のクルド人さえ、バブの影響で変わってしまった。マーカーの住民はクルド人を嫌っていたが、クルド人は、それ以上に狂信的な憎しみをシーア派に対していただいていた。しかし、バブから愛の火を心に点されたかれらは、毎朝仕事をはじめの前に、牢獄に歩を向け、遠くからそこにとらわれているバブの名前を唱え、祝福を願った。さらに、地面に身を伏し、魂を活気づけてくれるようにこん願したのである。

かれらはお互いに、バブのおどろくべき威力と栄光を語り合った。看守のヤーヤ・カーンは、牢獄にだれが入ってきても阻止しなかった。やがて牢獄の門に群がる訪問者の数が、あまりにも増してきたため、チェリグの町では皆を収容することはできなくなった。そこで、牢獄から一時間のところにある旧チェリグ街に宿泊所を確保した。バブの生活備品は、この古い町で入手され、牢獄に運ばれたのである。(p.302)

ある日、バブは、従者に蜂蜜を購入させた。ところが、従者が払った値段がひじょうに高すぎると思われたので、バブはそれを受け取することを拒否し、言った。「これよりも上等の蜂蜜さえ、もっと低い値段で買えるはずだ。あなたの模範であるわれは、以前商人であった。今後の取引はすべてわれの模範に従うがよい。隣人からだまし取ることも、隣人にだまし取られることもしてはならない。これが、あなたの師であるわれが取った道なのだ。どれほど抜け目のない者も、われをだますことはできなかった。しかし、そのような卑劣な者も、無力な者も寛大に扱ったのだ。」バブは従者に、その蜂蜜を返却し、もっと上等で安い値段の蜂蜜を買ってくるように命じた。

バブがチェリグの牢獄に監禁されている期間に、つづけさまに、おどろくべき出来事が起こったため、政府はきわめて不安になってきた。コイ町のセイエド（モハメッドの子孫）や僧侶や政府の高官といった著名人の多くが、囚人バブの大業を心から信奉していることがやがて明らかになった。その中には、セイエドで、高い業績をもつミルザ・モハメッド・アリとその弟ブユク・アガがいた。この二人は、あらゆる階層の人びとに、熱心にバブの信教をひろめた。その結果、コイ町とチェリグ町の間は、探求者と信者がいそがしく行き交うようになった。

そのころ、つぎのような出来事が起こった。ミルザ・アサドラという著名な官吏ですぐれた文筆能力をそなえた人がいたが、かれは後日バブからダヤンという称号をあたえられた人でもある。かれはバブの教えをはげしく非難していたため、かれを信者にしようと努力していた人たちは困ってしまった。ミルザ・アサドラはある日夢を見た。しかし、夢のことはだれにも話さないことにした。そして、コーランの二つの句を選び、バブにつきの要請を書いた。それをバブに渡してもらうように、ミルザ・モハメッド・アリに頼んだ。それは、「わたしは三つのことを心に抱いています。その意味を明かしてくださるようお願いいたします。」という内容であった。二、三日して、バブから直筆の返事を受け取った。その中で、バブはミルザ・アサドラの夢を全部説明し、かれが選んだコーランの句をその通り書いた。ミルザ・アサドラは、その内容がまったく正確であったので、すぐ信者となった。かれは歩きなれなかったが、コイから牢獄までのけわしいごつごつとした小道を歩きはじめた。友人たちはチェリグまで馬に乗っていくようにすすめたが、それをことわった。バブとの会見で、かれの信仰は固まり、生涯の終わりまで燃えるような熱意をもちつづけた。(pp.303-304)

同じ年、バブは四十名の弟子たちに、聖句や伝承を参照して、バブの使命が正当で

あることを証明する論文を書くように要請した。弟子たちはこの要請にすぐ従い、書き上げた論文をバブに提出した。その中で、ミルザ・アサドルの論文は、バブの賞賛を得、最高であると評価された。バブはかれに、ダヤンという名をあたえ、かれのために「文字の書簡」を著わし、その中で、つぎのように述べた。「バヤンの点（バブ）の教えが、真理であることを証明するものがほかにないとしても、これだけで十分である。すなわち、どれほど学識があっても、だれも書けないような書簡を著わしたことである。」

バヤンの人びと（バブの弟子たち）は、この書簡の根本にある目的を完全に誤解し、易学の解説にすぎないと思った。後日、バハオラがアッカの牢獄都市に監禁されはじめたころ、シラズ在住のジェナブ・モバレグが、バハオラにその書簡のかくされた意味を解明してくれるように頼んだ。バハオラはこれに応じて説明を書いた。バブの言葉を誤解した者たちは、この説明を深く考えるべきであろう。バハオラは、バブの文章から、反駁できない証拠をあげ、「ヨゼロホラ」（バハオラのこと）の出現はバブの宣言後十九年後でなければならないことを証明した。「モスタガス」（祈願される御方）の秘められた意味は、バヤンの人びと（バブの弟子たち）の中でも、熱心に探求している人たちを長い間悩ましてきていた。かれらは、その障害を乗り越えられないため、約束の御方を認められないでいたのである。バブ自らその書簡の中で、かくされた意味を解明したが、だれもそれを理解できないでいた。そこで、バハオラが皆の目にその神秘を解き明かすことになったのである。（pp.304-305）

ミルザ・アサドラがバブの大業にひじょうに熱心なのを見て、かれの父親は、親友である総理大臣アガシに、息子の改宗について報告し、同時にかれが政府の任務を怠っていることを告げた。さらに、有能な政府の官吏であるこの息子が、大変な熱意をもって新しい師に仕え、その努力が実っていることもくわしく述べた。

政府の懸念は、インドの修道僧が、チェリグを訪れたことによって強まった。かれはバブに会見したとたん、その使命が真実であることを認めたのである。この修道僧がエスキ・シャハールに旅した際、バブは、かれにガハルラという名前をあたえた。ガハルラに会った者は皆、その熱意を感じ取り、強い確信に動かされた。かれの魅力に惹かれ、その信仰の力を認める人がますます増えてきた。その影響力の強さに、信者の中には、かれを神の啓示の解説者であると言いはじめた者もいたが、もちろん、かれ自身はそれをまったく否定した。

ガハルラは、よくつぎのように述べていた。「わたしがインドで高い地位を占めていたころ、バブが夢に現われ、わたしをじっと見つめました。わたしの心は完全にとらわれてしまいました。立ち上がってバブのあとにつづこうとしたとき、かれはわたしを愛情深く見つめ、こう言われました。『その立派な衣を脱ぎ、故郷を離れ、アゼルバエジャンのわれのところに、徒歩で急いで来るがよい。チェリグで、あなたの心の望みはかなえられよう。』わたしはバブの指示に従い、目標に達することができました。」
(p.305)

身分の低い修道僧が、チェリグのクルド人の指導者たちを動揺させたニュースは、タブリズに届き、そこからテヘランへと報告された。このニュースを受け取った政府は、すぐバブをタブリズに移す命令を下した。バブの長引く滞在で、チェリグの住民が興奮状態になっていたのを静めるためであった。このあらたな命令がチェリグに届く前に、バブはアジムを通して、ガハルラにインドにもどり、大業の奉仕に身をささげるように命じた。「ガハルラは一人で歩いて故国にもどり、ここへ巡礼に来たと同じ熱意と超脱心をもって、大業の発展に尽くさなければならない。」

つぎにバブは、コイ在住のアブドル・ヴァハブに、あとで自分も合流するので、ウルミエに直行するように指示した。アジムが受けた指示は、タブリズに行き、カリールにバブの到着が近づいていることを知らせることであった。バブはこう付け加えた。「かれにこう伝えよ。『まもなくタブリズでニムロデの火が点けられるが、その猛烈な火炎にもかかわらず、わが友らは安全である。』」

ガハルラは、師（バブ）の指示を受けるとすぐ、インドに発つ準備をした。同伴したいと申し出た者らに、つぎのように忠告した。「皆は、この旅の試練に耐えることはできない。同行の望みを棄てることだ。かならず途中で倒れる。バブはわたしに一人で故国に帰るように命じられたからだ。」この強い言葉に、同行をこん願した者らは黙ってしまった。ガハルラはだれからもお金や衣服を受け取らず、質素な服を身に着け、つえを手に持ち、一人で故国へと旅立った。その後、かれに何がふりかかったかを知る者はいない。

モハメッド・アリ・ゾヌジは、アニスとも呼ばれるが、タブリズでバブのメッセー

ジを聞いた者らの一人であった。バブの言葉に鼓舞されたかれは、チェリグに行き、バブに会うことを熱望し、かれの道に自分を犠牲にしたいという抑えきれない願望を感じた。タブリズの名士であった継父セイエド・アリ・ゾヌジは、アニスが町を離れるのに極力反対し、ついに自宅に監禁し、厳重に監視した。アニスの苦しい監禁は、バブがタブリズの到着し、ふたたびチェリグの牢獄に入れられるまでつづいた。(p.306)

わたし（著者）は、シェイキ・ハサン・ゾヌジ（バブの秘書）からつぎのように聞いた。「バブがアジムを送り出したころ、わたしもバブから指示を受けました。それは、バブがマーカーとチェリグの牢獄に監禁されている期間に著わした書簡をすべて集め、タブリズ在住のカリールに手渡すことでした。エブラヘムは、細心の注意をはらってそれらの書簡をひそかに保存しました。

タブリズに滞在中、わたしは親戚のセイエド・アリ・ゾヌジをよく訪ねましたが、そのたびに、かれは息子にふりかかったことを嘆き、強い不満をもらしていました。『息子は理性をなくしたようだ。かれの行動は父親のわたしに恥辱と不名誉をもたらした。興奮をしずめ、その信念をかくすように、かれを説いてくれないか。』わたしは親戚であるその息子アニスを毎日訪ねましたが、かれはいつも涙にくれていました。

バブがタブリズを離れられたあとでした。ある日、アニスを訪れたところ、かれの顔がよろこびで輝いているのを見てびっくりしました。その端正な顔は、わたしを迎え、ほほ笑みに変わったのです。かれは、わたしを抱擁しながらこう言いました。『最愛なる御方がわたしを見つめ、わたしもその御方を見つめました。わたしがよろこんでいる理由をお話ししましょう。バブがチェリグに連れもどされたあと、監禁されている部屋で、バブに向かいこん願しました。＜わが最愛なる御方よ。あなたはわたしが監禁され無力であることをごらんになっています。そして、どれほどあなたの御顔を仰ぎたいと願っているかをご存知です。あなたの御顔の光で、わたしの心をおおっている陰鬱を打ち払って下さい。＞そのとき、苦悶の涙がとめどもなく流れました。そのうち、胸がいっぱいになり、意識がもうろうとしてきました。するととつぜん、バブの声が聞こえてきたのです。バブはわたしを呼び、立ち上がるように命じられました。かれの荘厳な御顔がわたしの眼前に現われたのです。かれは、わたしの目を見つめてほほ笑まれました。そこでバブの方に急いで近づき、その足元に身を伏せました。かれはこう申されました。＜よろこぶがよい。まさしくこの都市の大群衆の眼前で、わたしは吊り上げられ、敵の射撃の犠牲となるときが近づいているからだ。殉教

の杯をわれと分かち合う者としてあなたを選んだ。この約束はかならず果たされるので安心せよ。>

この幻のすばらしさに、わたしはうっとりとなっていました。意識を取りもどしたとき、自分がよろこびの大洋に浸っているのがわかったのです。このよろこびの光は、世界中の悲しみによっても、くもらすことはできないものでした。バブの声は、わたしの耳にひびきつづけました。バブの幻は、昼夜とわずわたしに現われつづけたのです。その神聖なほほ笑みで、監禁中のさびしきは追い払われました。バブの約束が果たされる時間はもはや遅らすことはできないと確信しています。』

わたしはかれに、忍耐し、感動をかくしておくように忠告しました。かれもこの秘密をだれにも明かさないことを約束しました。そして、継父に対しても寛大な気持ちをもちつづけました。わたしは、かれの継父のところに説得に行き、息子の決意を告げ、監禁を解いてもらうことができました。その後、アニスは殉教の日まで、両親と親族と交わりながら、まったく平静でよろこびに満ちた日々を過ごしました。このような態度に、かれが最愛なる御方のために命をささげた日、タブリズの住民は皆、かれのために嘆き悲しんだのです。」(p.308)

第十八章 タブリズでのバブの取り調べ

バブは、近づく苦難の時を察知して、チェリグの牢獄周辺に集まっていた弟子たちを分散し、タブリズへの召集命令をしずかな心でまった。バブの護送団は、途中のホイ町を迂回し、ウルミエ湖畔を經由してアゼルバエジャン州の州都（タブリズ）に向かうことにした。そうすれば、政府の暴政に抗議するホイの住民の暴動を避けることができると考えたからである。バブがウルミエに到着すると、その地に住むカゼム・ミルザ（王子）は、バブを丁重に迎え、手厚くもてなした。王子はバブを大変敬い、バブとの面会を許された人たちに、わずかでも無礼にならないようにと注意した。

ある金曜日、バブが公衆風呂に出かけようとしていた際、客人（バブ）の勇気と威力のほどを試そうと考えた王子は、一番のあばれ馬をバブのために準備するように馬丁に命じた。この馬が、馬術にたけた勇敢な人たちを落馬させていたのを知っていた馬丁は、バブがけががしないかと心配し、その馬に乗らないようにひそかに進言した。バブは答えた。「恐れることはない。命じられた通りにせよ。われに関しては、全能なる神に委ねるがよい。」

王子の計画を知ったウルミエの住民は、バブの落馬を見ようと広場を埋めつくした。馬が連れてこられると、バブはしずかに近寄り、馬丁から手綱を受け取って、馬をしずかになで、あぶみに足をかけた。馬は、自分を支配している威力を感じとっているかのように、微動だにしなかった。この馬のあまりにもふしぎな様子に群集は驚嘆した。素朴な町の住民には、この異常なできごとは奇跡以外のなにものでもなかった。かれらは熱狂のあまり、バブのあぶみに口づけしようと駆け寄ってきたが、王子の従者たちにさえぎられた。大勢の人が突進してくれば、バブに危害が加えられるかもしれないからであった。王子自ら徒歩で、浴場の近くまでバブに同行したが、入り口に着く前に、バブは王子に、家にもどるように求めた。行く途中、バブを一目見ようと、道の両側から押し寄せてくる住民を、王子の従者たちは‘懸命に制止した。浴場に着くと、バブは、同行してきた者らをすべて立ち去らせたが、王子の召使いとセイエド・ハサンだけを脱衣場まで同伴させ、脱衣を手伝わせた。入浴を終えたバブは、ふたたび同じ馬に乗り、同じ群集から歓呼で迎えられながら帰途についた。王子もまた、徒歩でバブを迎えに出て、家まで伴った。(pp.309-310)

バブが帰途につくとすぐ、ウルミエの住民は浴場に殺到し、バブが顔と手を洗った水を最後の一滴まで持ち去った。大変な興奮が終日つづいた。その光景を見て、バブはイスラム教の有名な伝承を思い起こしていた。それは、エマム・アリ（モハメッドの後継者）が、とくにアゼルバエジャン地方について語ったものとされているものである。その伝承の終わりに、ウルミエの湖水が沸騰し、町をはんらんさせると記されている。その後、ウルミエの住民の大半が、バブの教えを全面的に信じたいと言っていることを聞いたバブは、冷静につきのようにならぬように述べた。「人間は、『信じます、信じます』と言いきえすれば、もうそれで干渉されず、試されることもなかろうと考えているのか。」（コーラン）

後日、この言葉の真理が証明された。すなわち、バブに忠誠を誓った同じ人びとが、タブリーズでバブが受けた残酷な仕打ちを知らされたとき、態度を一変させたのである。バブに見栄をはって信仰を誓った人びとのうち、試練に直面して、バブの教えに忠実でありつづけた者は数えるほどしかいなかった。その中で、最初にあげられるのは、イマム・ヴァルディである。かれの信仰はあつく、同じウルミエ出身で、生ける者の文字（バブの最初の弟子十八人）の一人であったモラ・ジャリル以外には、比べられる者はいなかった。かれの熱意は、試練を受けてますます強まり、自分の受け入れた大業の正しさに確信をもった。後年、かれは、バハオラに会い、その教えの真理をすぐ認めた。そして、その大業の促進のために、以前と同じ熱意をもって身をささげた。バハオラは、ヴァルディと、その家族の長年の奉仕を称えて、直筆の書簡を数多く送った。その中で、バハオラは、ヴァルディの業績をほめ称え、からの努力が神に祝福されることを祈っている。八十余年の生涯を閉じるまで、ヴァルディは、ゆるがぬ決意をもって、信教の発展に努力をつづけた。（pp.311-312）

バブにかかわる不思議な現象は、多くの人びとに目撃され、人から人へと伝えられていった。それはやがて、これまでだれも経験したことのないほどの熱狂と興奮の波となり、おどろくべき速度で全国にひろがった。首都テヘランをも飲み込んだこの波は、国の宗教上の指導者たちに衝撃をあたえ、バブの影響力を阻止するために、ふたたび、立ち上がらせることになった。かれらは、バブの運動が発展していくのをおそれた。そのまま放置しておけば、かれらの権力と存在の基盤となっている制度がやがて押し流されてしまうことを確信したからである。かれらはさらに、自分たちでは呼び起こすことができなかった信仰と献身の精神がいたるところにひろがっているのを見た。また、自分たちが築いてきた制度をくつがえそうとする忠誠心が、人びとの中

で強まっていくのを見たが、あらゆる手段を用いても、その精神の波をさえぎることはできなかった。

とくにタブリズは、興奮のるつぼと化していた。バブの到着が間近にせまっているという知らせに、住民は何が起こるかと思いをめぐらせていた。一方、アゼルバエジャン州（タブリズはその州都）の宗教上の指導者たちの心には、はげしい敵意の炎が燃え上がっていた。タブリズ市民のなかで、バブの二度目の来訪に感謝とよろこびを示さなかったはかれらのみであった。民衆のあまりの興奮ぶりに、当局はバブをタブリズの郊外の民家に置くことにした。バブ自身から許可を受けた者だけがかれと会うことができ、それ以外の者は、バブに近づくことはできなかった。(p.312)

タブリズ到着二日目の夜、バブはアジムを呼び、自分こそ約束のガエム（救世主）であると力強く宣言した。しかし、アジムはその主張を素直に受け入れようとはしなかった。かれの心の迷いに気づいたバブは言った。「明日、われは皇太子の前で、またこの都市の僧侶や名士の前でわが使命を宣言しよう。われが著わした聖句以外の証拠をわれに求める者は、自分が空想の世界で作りに上げたガエムに満足するしかないのだ。」

わたし（著者）は、アジムが当時のことをつぎのように語るのを聞いた。「あの夜、わたしはひどく動揺していました。眠ることはおろか、じっとしていることさえできずに夜明けを迎えたのです。朝の祈りを唱えた直後、自分の心に大きな変化が起こっているのに気づきました。新しい門戸がわたしの眼前でひろく開け放たれたようでした。わたしの中に確信がめばえてきました。すなわち、もし神の使者であるモハメッドに忠実であるためには、バブの主張を無条件に認め、バブの定めには恐れもためらいもなく、従わなければならないという確信でした。この確信から、わたしの心の動揺はしずまりました。そこで、バブのもとにいそいでもどり、許しを乞いました。バブはこう述べられました。

『アジム（偉人という意味）と呼ばれる者さえ、この大業の威力と、その主張の強さに心をひどく悩まされ、混乱させられた。それ自体、この大業の偉大さのもう一つの証拠である。』バブはつづけて言われました。『安心せよ。全能なる神の恩寵により、あなたは弱き心の者に力をあたえ、ためらう者の歩みを確固となすであろう。あなた

の信仰はひじょうに強力なものとなり、敵があなたの身体をずたずたに切り裂いても、あなたの愛の熱意をわずかでも変えることはできないであろう。あなたはまた、来るべき日に、かならず諸々の世の主なる御方（バハオラ）に直々に会うことになる。そして、その面前のよろこびにあずかるであろう。』このバブの言葉で、わたしの心をおおっていた不安の暗雲は消滅しました。その日以来、恐怖と動揺は、わたしからまったく去ってしまいました。」(p.313)

バブがタブリズの郊外に足止めされても、市内の興奮はおさまることはなかった。当局は、できる限りの規制を敷き、予防策を講じたが、すでに険悪になっていた状況を悪化させるばかりであった。そのとき、総理大臣のミルザ・アガシは命令を下した。それは、タブリズの宗教面の指導者を、ただちにアゼルバエジャン州知事の公邸に召集するものであった。その目的は、バブを法廷に召喚することと、その影響力を消滅させるための最上策を見いだすことであった。召集されたのは、「学問の長」の称号をもち、皇太子の個人教授をつとめるモラ・マムード、ママガニ、「イスラムの長老」の称号をもつアリアスギャルであった。ほかシェイキー派の長老や僧侶たち数人が集まった。皇太子のナセルディン・ミルザも会合に出席した。議長をつとめたのは「学問の長」のモラ・マムードであった。会合が始まるとすぐ、議長は、バブを会場につれてくるように軍の指揮官に要請した。会場の入り口にはすでに大勢の人がバブを一目見ようとじりじりして待っていた。指揮官は、押し合う群集の間に分け入って通路を確保しながらバブを会場へと案内した。(p.314-315)

会場に入ったバブは、皇太子の席以外には空いた席はないのに気づいた。そこで、会場の全員にあいさつをし、一瞬のためらいもなく、その空いている席に向かった。バブの威厳ある足取り、自信に満ちた表情、全身にあふれる威力は、瞬間、会場の全員を圧倒した。とつぜん、不思議な静けさが会場をおおった。名士たちのうち、だれも一語さえ口にすることはできなかった。ついに、議長のモラ・マムードが長い沈黙を破ってバブに質問した。「あなたは、ご自分をだれだと主張しているのですか。あなたは、何を伝えるために来られたのですか。」

「われこそは、約束された者なり、約束された者なり、約束された者なり。」と三度バブはくりかえした。「われこそは、皆がその名を一千年間唱えつづけてきた者、皆がその名を聞き起立した者である。皆がその到来を待望し、その啓示の 때가早められるように、神に祈ってきたのだ。まことにわれは言うが、洋の東西をとわず、人びとはす

べて、わが言葉に従い、われに忠誠を誓わなければならない。」この言葉に、だれも答えようとはしなかったが、ママガニただ一人が反論にあたった。かれは、シェイキー派の長老で、カゼムの弟子でもあった。生前、カゼムは弟子のママガニの不誠実を涙ながらに訴え、そのつむじ曲がりの性格を嘆いていた。このカゼムの嘆きを直接聞いていたハサン・ズヌジは、わたし（著者）につきのように語ってくれた。

「師のカゼムが、ママガニについて話すときの批判的な口調に、わたしは大変おどろいていました。そして、かれは、そのような批判に値するような行動を将来とるのであろうかと疑問に思っていました。かの日（タブリズで）、かれのバブに対する態度を見るまでは、わたしは、その傲慢さと盲目のほどに気づいていなかったのです。そのとき、わたしは、ほかの人たちと共に、会場の入り口あたりにいましたが、中の会話を聞くことができました。ママガニは皇太子の左手の席を占め、バブはこの二人の中間に座っていました。バブが自分は約束された者であると宣言された直後、出席者全員が畏敬の念に打たれたようでした。そして、狼狽して頭を垂れ、沈黙したままでした。蒼白になったかれらの顔から、心の動揺がうかがわれました。そのとき、片目で白ひげをたくわえた裏切り者のママガニが、横柄な態度でバブを非難しました。(p.316)

『この恥知らずの未熟なシラズのやつ！ おまえは、すでにイラクの地に騒動を起こし、墮落させた。アゼルバエジャンでも同じ騒動を起こす気か。』バブは答えました。『閣下、わたしは、自分の意思でこの地に来たのではありません。この場所に召喚されたのです。』ママガニは怒りのあまり叫ぶように言いました。『だまれ、この強情者、おまえは卑劣な悪魔の手先だ！』バブは再度答えました。『閣下、わが主張に変わりはありません。』

議長のコラ・マームドは、バブの主張に直接挑戦した方がよいと考えて、こう言いました。『あなたの（約束された者という）主張は、途方もなく大きな意味をもつものです。その主張は、まったく論争の余地のない証拠を必要とします。』これにバブはこう答えられました。『神の予言者を証明するのは、その言葉です。これが、最上でもっとも説得力をもつ証拠です。＜われ聖典をあらわしたが、それだけではまだかれらには足りないのか＞とコーランにもある通りです。神は、このような証拠を示す力をわたしにあたえられました。二日と二晩のうちに、わたしはコーランの全巻に匹敵する量の聖句をあらわすことができます。』

これを受けて議長は要請しました。『あなたが真実を申しておられるのならば、コーランの聖句と同じような言葉と表現方法を用いて、この会合の議事について口頭で述べてください。そうして下されば、ここにおられる皇太子殿下も僧侶の方々も、あなたの主張が真実であることを証言されるであります。』バブは、この要請を進んで受け入れ、陳述をはじめました。(p.317)

『慈悲者、憐れみ深き者なる神の御名において、天と地を創造された神に賛美あれ。』この言葉を聞いたとたん、ママガニは、バブを止め、文法上のあやまりを指摘して、横柄でさげすむような声をはりあげて言いました。『この自称ガエムは、冒頭からして初歩的な文法さえ知らないことを暴露したではないか！』これに対し、バブはつぎのように弁護しました。『コーラン自体、通常の決まりや慣例とまったく一致していません。神の言葉は人間のかぎられた能力で推しはかることはできません。否むしろ、人びとが定めた決まりや基準は、神の言葉に由来するものであり、また、それに基づいて作られています。人びとは、コーランの中に、今あなたが批判しておられると同じような文法上のあやまりが三百箇所以上あることを発見しました。しかし、それは神の言葉であるゆえ、それを受け入れて神の意志に従うしかなかったのです。』(pp.318-319)

こう説明して、バブはふたたび前と同じ言葉をくり返しました。それに対してママガニは、前と同じように反論しました。その後すぐ、ほかの者が思い切ってバブに質問しました。『イシタルタンナという動詞の時制は何か言ってみてください。』これに応じて、バブはコーランからつぎの聖句を引用しました。『もろもろの偉大さの主になすなんじらの主の栄光は、人間が主に帰するすべてをはるかに超えたものである。かれの使徒に平安あれ。もろもろの世の主になす神に賛美あれ。』バブは、この言葉を終えてすぐ席を立ち、会場を去られました。」議長（モラ・マムード）は、取り調べの方法と経過をきわめて不満に思った。後になって、かれはこう述べた。「あのタブリズ市民の無礼な態度はまったくの恥である。あのような無意味な質問と、われわれが検討しようとしていた最も重大な問題とは一体どう結びつくというのか。」(p.319)

そのほかにも、そのときのバブに対する屈辱的な扱いを非難した者が何人かいた。しかし、ママガニの猛烈な攻撃はつづいた。かれは、声高らかに断言した。「皆に警告したい。この青年の活動をそのまま放っておけば、タブリズの全市民が、かれの旗の

下に結集する日が来る。その日が来て、かれが、タブリズのすべての僧侶と皇太子殿下を追放し、政府とイスラム教の全権力を独占しようとしたらどうなるであろうか。今はかれの運動に無関心な皆のうちだれも、それを防ぐことはできないようになろう。その時がきて、タブリズの全市だけでなく、アゼルバエジャンの全住民が一致して、かれを支持するようになろう。」

この悪質な陰謀者（ママガニ）の執拗な攻撃は、やがてタブリズ市政を動かした。そこで、権力の座にある者たちが、バブの教えの拡大を阻止するための最良策について相談した。その結果、つぎのような案が出された。バブは皇太子の席にことわりもなく座り、また、会合の議長にことわりもせず会場を去って無礼を重ねた。これを理由に、バブをふたたび召喚して、同じような会合を開き、査問会議のメンバーが直接バブに屈辱的な罰を加える、という案であった。しかし、皇太子は、この案を拒否した。結局、知事の護衛にたのんで、バブに懲罰を加えさせることに決定した。その場所は、バブをタブリズ市の「イスラムの長老」の地位にあり、セイエド（モハメッドの子孫）であったアリアスギャルの自宅に決まった。しかし、護衛は、市の僧侶だけに関する問題に関与したくないという理由からこの依頼を拒んだ。そこで、アリアスギャル自ら刑を執行することにし、バブを自宅に連行させて、かれの足にむちを十一回あてた。(p.320)

その同じ年、この横柄な圧制者（アリアスギャル）は、身体がまひし、長い間激痛におそわれたあと、悲惨な死をとげた。かれの不信実で、食欲で、自己本位の性格は、タブリズ市民にひろく知れわたっていた。人びとは、かれの残虐さと卑劣さを恐れ憎み、その圧制から解放されることを願っていた。その無残な死を見て、敵も味方も同じことを思い起こした。つまり、神を恐れず、良心の声も無視して、同胞である人間に残酷な仕打ちをあたえる者は、かならず罰を受けるということを思い起こしたのである。かれの死後、タブリズでは「イスラムの長老」という称号は廃止された。人びとは、かれを憎むあまり、その汚名と関連のある制度の存続を認めなかったのである。

ところが、それほど卑劣で不誠実なアリアスギャルの悪行も、バブに対する国の宗教指導者たちの極悪行為の一例に過ぎなかった。公正と正義の道から、かれらはどれほどそれてしまったことであろうか。かれらは、予言者（モハメッド）とエマムたち（モハメッドの後継者）の忠告を軽蔑し、投げ捨てた。その忠告は、つぎのように明確なものであった。(p.321)

「ハシェム家（モハメッドの先祖）から若者が出、新しい聖典と新しい法をもたらしたならば、すべての人びとは、かれのもとに集まり、その大業を受け入れなければならない。」また、エマムたちは、「その若者の敵の大半は僧侶たちであろう」とはっきりと述べていたにもかかわらず、それらの盲目で、下劣な人びとは、僧侶たちの例にならうことを選び、かれらの行動を公正と正義を示す手本であると見なした。僧侶たちの命令に盲目的に従いながら、人びとは自らを「救済の人民」、「神から選ばれた者ら」、「神の真理の擁護者」とみなしたのであった。

一方バブは、タブリズからチェリグの牢獄にもどされ、看守のヤーヤ・カーンにふたたび身柄をあずけられた。迫害者たちは、バブを召喚し、脅迫しさえすれば、かれはその使命を断念するであろうと甘く考えていた。しかし、タブリズでの集会で、バブはその市の名士たちを前に、自分の主張の重要点を力説し、簡潔で説得力のある言葉で、敵の攻撃に反論することができた。そのときの重大な意味をはらんだバブの宣言は、たちまちペルシャ全土にひろがり、バブの弟子たちにも以前より一層深い感銘をあたえた。その宣言で、かれらの熱意は高まり、使命感は強められた。それはまた、やがてペルシャの国を震撼させることになる大事件の幕開けをしるすものであった。

(p.322)

チェリグにもどったバブは、すぐ総理大臣のミルザ・アガシに、大胆で、感動的な言葉で、かれの人格と行動を非難する書簡を書いた。「怒りの説法」と呼ばれるこの書簡の冒頭で、バブは、モハメッド国王の総理大臣につぎのように呼びかけた。「神を信ぜず、そのしるしに顔をそむけた者よ！」この長文の書簡は、まず、テヘランに軟禁されていたホジャットに届けられた。バブはかれに直接ミルザ・アガシに手渡すように命じた。

わたし（著者）は、牢獄の町アッカで、バハオラ自身からつぎのような話を聞くことができた。「ホジャットは、ミルザ・アガシにあの書簡を届けた後、まもなくしてわれを訪ねてきた。そのとき、われは、マシー・ヌーリとほかの信者何人かと共にいた。ホジャットは、書簡を届けたときの様子を話し、その書簡の全文を暗唱した。それは三枚ほどあったが、全部を暗記していたのである。」ホジャットについて話すときのバハオラの語調を聞いて、バハオラは、ホジャットの純粹さと気高さにどれほど満足し、かれのひるむことのない勇氣、不屈の意志、解脱の精神、そしてゆるがない誠実さを

どれほど賞賛していたかを伺い知ることができた。(323)

第十九章 マザンデランの動乱

バブがタブリーズで侮辱（むち打ち刑）を受け、バハオラとその仲間たちがニヤラで災い（投石）に会ったと同じ月、モラ・ホセインはハムゼ・ミルザ王子の野营地からマシュハドにもどった。七日後、同伴者を選び、共に、マシュハドからカルベラに向かうことになっていた。王子は旅の費用をモラ・ホセインにあたえたが、かれは「困窮者のために用いていただくように」というメッセージをつけて、そのお金をもどした。マラゲイもまた、モラ・ホセインの巡礼に必要な備品をすべてととのえ、同伴者の費用ももちたいと申し出た。しかし、モラ・ホセインは、剣と馬だけを受け取り、ほかのものは一切ことわった。この二つは、後日かれが、見事な勇気と達人の技で、不実な敵の襲撃を撃退するために用いることになった。

モラ・ホセインが、マシュハドの住民の心に点した献身の火を適切に述べることはできない。また、かれの影響の大きさを計ることもできない。当時、かれの家には、旅に同伴したいと願う熱心な人びとが詰めかけていた。母親は息子を、姉妹は兄弟を、真心からの贈り物として受け入れてくれるように、涙ながらにこん願したのである。

モラ・ホセインがマシュハドに滞在中、一人の使者がバブのターバンもって到着した。使者はまた「セイエド・アリ」という新しい名前がモラ・ホセインに与えられたことも告げた。バブのメッセージにはこう書かれていた。「わが血統のしるしである緑のターバンで頭を飾り、黒旗をかかげて『緑の島』にいそげ。そこでわが愛するゴッドスを援助せよ。」(p.324)

このメッセージを受け取ったモラ・ホセインは、すぐ師の望みを果たすために立ち上がった。マシュハドから五キロメートルほど離れたところに黒旗を立て、バブのターバンを頭につけ、仲間を集めた。そして馬に乗り、「緑の島」に向かって出発の合図をした。仲間の数は二百二人いたが、皆熱心にモラ・ホセインにしたがった。この忘れがたい日は一八四八年七月二十一日であった。

旅の途中にある村に止まるたびに、モラ・ホセインと仲間は、新しい時代のメッセージを大胆に宣言し、その真理を信奉するように呼びかけた。そして、呼びかけに応じた者たちの中から、何人かを選んで旅に加わるように求めた。ニシャプールの町で、

バディの父親で著名な商人のアブドル・マジドが、モラ・ホセインの旗の下に加わった。かれの父は、その町で有名なトルコ石の鉱山の所有者であったが、名誉も物質的な利益も棄て、モラ・ホセインに忠誠を誓ったのである。ミヤマイ村では三十名の住民が信者となり、一団に加わった。そのうち、モラ・イサ以外は皆、シェイキ・タバルシの戦いで殉教した。(p.325)

マザンデランに行く途中のガムガン町の近くで、モラ・ホセインは二、三日休むことにした。小川のほとり、大木の陰の下に野営することにし、仲間に告げた。「分かれ道に来た。神がどの方向に進むべきかを知らせてくれるまで待とう。」一八四八年九月の下旬に、はげしい突風が起り、その木の太枝が折れた。そのときモラ・ホセインが言った。「モハメッド国王の木が神の意志により根こそぎにされ、地面に投げ倒された。」それから三日後、マシュハドに向かう使者がテヘランから到着し、国王の死を知らせた。

翌日、一団はマザンデランに出発することにした。一団のリーダー（モラ・ホセイン）は立ち上がり、マザンデランの方を指して言った。「われわれをカルベラに導く道はこの方向である。前途に横たわる大なる試練に耐えられない者は、今すぐ、旅を中断して家にもどるがよかろう。」モラ・ホセインはこの警告を何度かくり返し、サヴァド・コーに近づいたとき、はっきりと宣言した。「われは、七十二名の仲間と共に、最愛の御方のために命をささげることになる。現世を棄てられない者は、ただちにここから離れるがよい。後で逃れることはできないからだ。」そこで、二十名が家にもどることを選んだ。モラ・ホセインがくり返し警告した試練に、打ち勝つことはできないと感じたからであった。(p.326)

バルフォルージュの町に一団が近づいてきているという知らせに、サイドル・オラマー（高僧）は不安になった。モラ・ホセインの名声がますます広がっていること、かれのマシュハドからの出発の状況、かかげている黒旗、とくに仲間たちの数と規律と熱意などが、この残酷でごう慢な高僧の執念深い悪意を刺激したのであった。高僧は、触れ役に、イスラム教に忠誠を誓う者はだれも無視できない重大な説教をするので、町民をモスクに集合させるように命じた。男女からなる大群衆が、モスクに詰めかけた。高僧は、説教壇にのぼると、ターバンを床に投げ、シャツの襟を開き、イスラム教が陥った苦境をなげき、大声で言った。「目覚めよ。敵が入り口まで来て、われわれが大事にしてきたイスラム教を一掃しようとしているのだ。阻止しなければ、そ

の猛攻撃に耐えられる者はいなくなる。以前、敵の一団のリーダーが一人で来て、われの講話に出席した。その男はわれを完全に無視し、わが弟子たちの眼前で、われをひどく軽蔑した。期待していた荣誉が与えられなかったので、かれは怒って立ち上がり、われに挑戦してきた。この男は無鉄砲だ。モハメッド国王の權威が頂点にあったときにさえ、われに対して深い恨みで攻撃してくるとは。この男は大変な騒動を起こす扇動者で、野蛮な一団を率いて進んできており、国王の保護がなくなった今、何をしでかすかわからないのだ。そこで、バルフォルージュの住民は、老若男女とわず全員、このイスラム教の卑劣な破壊者たちに対して武器を取り、あらゆる手段をつくしてその攻撃を阻止しなければならない。明日夜明けに、皆立ち上がり、この勢力を根絶しようではないか。」(p.328)

この呼びかけに聴衆の全員が応えた。町民は、高僧の熱弁とその絶対的な權威、さらに自分たちの生命や財産が失われるかもしれないという恐れから、懸命に戦いの準備をした。そして、入手した武器や手作りの武器をもって、夜明けにバルフォルージュの町を出た。イスラム教の敵を殺害し、その所有物を略奪するために、堅い決意をもって出かけたのである。

モラ・ホセインはマザンデランに向かう決心をした。そして、朝の祈りをささげた直後、仲間に所有物をすべて棄てるように命じた。「馬と劍以外の持ち物を放棄せよ。われわれが、どれほど世俗への愛着を断っているかを全町民に目撃させ、この神から選ばれた一団が、他人の所有物を欲しがるところか、自分の物さえ守る望みがないことを知らせよ。」そこで仲間は、すぐ馬の荷をおろし、よろこんでモラ・ホセインの後に従った。バディの父親が最初に皮袋を捨てた。それには、かれの父親の鉱山から持参したトルコ石が大量入っていたが、モラ・ホセインの一語で、その貴重な所有物を捨てることのできたのであった。(pp.328-329)

バルフォルージュからニキロメートル進んだところで、モラ・ホセインとその仲間は敵に出くわした。大勢の町民が、武器や弾薬をそろえて集合し、一団の進行を阻止したのである。かれらは残忍な表情で、汚らわしいのろいの言葉を吐きつづけていた。一団の仲間たちは、この怒った大衆を前にして、劍を抜こうとした。リーダーのモラ・ホセインは命じた。「まだ抜いてはならない。敵が攻撃をはじめるとは剣はさやにおさめておかなければならない。」こう言ったとたん、敵の射撃がはじまり六名が地面に倒れた。仲間の一人が叫んだ。「敬愛するリーダーよ、われわれは大業の道で命をささ

げる望みをもってあなたに従ってきました。お願いですから、防衛させて下さい。敵から撃たれて不名誉な死を遂げさせないで下さい。」モラ・ホセインはこう答えた。「その時間はまだだ。数がそろっていないのだ。」

その直後、弾丸が一人の仲間の胸をつらぬいた。この仲間は、ヤズド出身のひじょうに忠実な信者で、マシュハドからずっと歩いて来ていた。モラ・ホセインは、この献身的な仲間が、自分の足元で倒れたのを見て、目を天に向け祈った。「おお神よ、おお神よ、あなたは選ばれた仲間たちの窮状を見ておられます。民衆が、あなたの愛する人びとを、どのように迎えたかも目撃されました。われわれの唯一の望みは、かれらを真理の道に導き、あなたの啓示の知識を与えるためだということは、あなたもご存知です。あなたは、敵の攻撃から自分の身を守るように命じられました。その命令に従い、敵がはじめた襲撃を食い止めるために、仲間と共に立ち上がります。」
(pp.329-330)

モラ・ホセインは、剣を抜き、馬に拍車を入れ、敵の最中に突進した。そして、仲間を倒した者を大いなる勇気をもって追った。その敵は、モラ・ホセインと戦うのを恐れ、木の後ろにかくれ、銃をもち、身を守ろうとした。モラ・ホセインは、すぐその男を見つけ出し、突進して剣の一振りでも木の幹と銃身と敵の身体をふたつに切り裂いた。この一振りのはげしさに、敵どもはうろたえ、一瞬動けなくなった。そして、この異常な技能と力と勇気を眼前にしてパニックにおそわれ、皆逃走してしまった。このめざましい技は、モラ・ホセインの勇気と英雄行為を証言する最初のものであり、バブの賞賛を受けたものであった。ゴッドスもまた、モラ・ホセインが、そのとき示した冷静な豪胆さをほめ、コーランのつぎの句を引用したと伝えられている。「かれらを殺したのはなんじらではない。神が殺されたのだ。槍はなんじのものではなく、神のものである。これは信者たちに恩寵を体験させるためにされたことである。まことに神はすべてを聞き、すべてを知りたまう。神は信仰なき者どもの計略をすべて無効にしたまう。」

シェイキ・タバルシの戦いの終結から一ヵ月後、西暦では一八四八年から一八四九年にかかるころ、わたし（著者）は、ガズビニがこの戦いの状況を、多数の信者の前で語るのを聞いた。その中には、モハメッド・ホセイン、モラ・エスマイル、ハビボラ・エスファハニ、およびモハメッド・エスファハニがいた。(pp.330-331)

後日、わたし（著者）は、コラサン州のマシュハドの町で大業を教え広めるように招かれ、サディク宅に滞在していた。そのころ、ナビル・アクバールやバディの父親をはじめとする信者が大勢集まっている前で、タバルシの戦いに関するおどろくべき報告が、事実であるかどうかを、フォルギにたずねた。かれはきっぱりと言った。「わたし自らモラ・ホセインの技を目撃したのです。この目で見ていなかったならば、決して信じられないことです。」そしてかれは、つぎのように語った。「ヴァス・カスの戦いの後、メヘディ・ゴリ王子が完敗し、バブの弟子たちの眼前から素足で逃げ去ったとき、総理大臣のタギ・カーン（アガシの後任）は、王子をひどく叱り、つぎのような手紙を送りました。『卑劣な若僧の学生少数を鎮圧する任務をあなたにあたえ、国王軍を思い通り使えるようにした。それにもかかわらず、不面目にも敗北してしまった。ロシヤとトルコの連合軍鎮圧の任務をあたえていたならば、どんなことがあなたに降りかかっていたことであろうか。』

王子は、モラ・ホセインが剣で二つに割った銃身の破片を使者にもたせ、総理大臣に直接渡させるのが最善だと考えました。総理大臣へのメッセージにはこう書かれていました。『卑劣な敵の力は相当なもので、木と銃と男を一振りの剣で六つの断片に断ち割ったほどです。』(p.332)

総理大臣は、敵の力がいかに強大であるかを聞いて、自分ほどの地位と権限をもつ者は、この挑戦を無視できないと感じました。そこで、自分の軍隊に刃向かってきた敵の力を抑える決心をしました。しかし、大勢の兵士でも、少数のモラ・ホセインの一団を征服できないのを見て、卑劣な手段に訴えることにしました。かれは王子に命じて、コーランに総理大臣の印章を押し、今後、軍は、砦の一団に対して敵対行動は一切取らないと、誓わせたのです。これにより、モラ・ホセインの一団は武器を放棄せざるを得ませんでした。防御のすべを失った一団は、不名誉にも敗北してしまったのです。」

しかし、モラ・ホセインが示した驚異的な手腕と力は、偏見や悪意にまだ染まっていなかった多数の人びとの注目を引いた。またペルシャのさまざまな都市に住む詩人たちの熱意を呼び起こし、その大胆不敵な行動を祝う詩を書かせたのである。それらの詩によって、モラ・ホセインの偉大な行為はひろく知られることになり、かれに不朽の名誉をあたえることになった。その武勇を称えた者の中に、レザ・ゴリがいた。かれは詩の中で、モラ・ホセインの驚異的な力と無類の腕前を大いに賞賛している。

わたし（著者）は、フォルギに思いきって聞いた。ある文献に、モラ・ホセインは少年のころから剣術を学び、長い期間訓練を受け、すぐれた技術を身につけたと書いてあることを知っているかどうかと。かれはこう答えた。「それはまったくの作り話です。わたしはモラ・ホセインを子供のころから知っており、同級生の友人として長い間交際してきました。かれが、あれほどの力と技能をもっているなどまったく知りませんでした。わたしの方が、精力と忍耐力ですぐれていると思っている位です。かれは、書くときも手がふるえ、思う存分書けないとよく言っていました。かれはこの身体面の障害で、マザンデランに行くまで苦しんでいました。ところが、あの残忍な攻撃に反撃するために剣を抜いた瞬間、神秘的な力がかれを変えてしまったのです。その後につづいた交戦で、かれは、馬に拍車を入れて敵の陣営に一番先に乗り入れました。そして、だれからも助けを受けずに、一人で相手の総力に立ち向かい勝利をおさめました。かれの後方につづいたわれわれは、かれによってすでに無力となされた敵と戦うしかありませんでした。かれの名前を聞いただけで敵の心は恐怖に打たれ、逃走してしまっただけです。かれとずっといっしょに行動を共にした仲間たちも、おどろきで言葉を失ってしまったほどでした。その恐るべき力と不屈の決意と大胆さに肝をつぶされたのです。われわれ全員が確信したことは、モラ・ホセインは、われわれが以前知っていた人ではなくなり、神のみが付与できる精神でみなぎった人になっていたことでした。」(pp.333-334)

フォルギはまた、つぎのようにも語った。「モラ・ホセインは、あのおどろくべき一撃を敵に加えたあと、姿を消しました。われわれには、かれがどこに行ったのか見当がつかせませんでした。かれを見つけることができたのは、かれの従者ガンバル・アリだけでした。後で、この従者は、モラ・ホセインが敵中に突入し、攻撃してきた敵の一人一人を、剣の一振りですべて倒していったことを知らせてくれました。かれは、雨と降ってきた弾丸にも気をとめず、敵軍を押し分けてバルフォルージュに向かいました。そして、サイドル・オラマーの家に行き、家のまわりを三回まわり、叫びました。『この町の住民を扇動して、われわれに聖戦をしかけておきながら、自分は自宅にかくれこもっている卑怯者よ、恥ずべきかくれ場から出て来い。その大業が公正であることを自ら模範を示して証明せよ。聖戦をはじめめる者は、最前線で指揮し、自らの行動で、従者たちの心に献身の火を点し、熱意を持ちつづけさせなければならないのだ。』」(pp.335-336)

モラ・ホセインの声は、群衆のどよめきを打ち消した。町の住民は降伏し、「平和を！平和を！」と叫びはじめた。この降伏の声があげられたとたん、モラ・ホセインの仲間たちの歓呼があちこちにひびいた。かれらはバルフォルージュに大急ぎで駆けつけてきていたのである。かれらの「おお、この時代の主なる御方よ！」という高々とひびきわたる呼び声に、人びとは不安におそわれた。モラ・ホセインは死亡していると思っていた仲間たちは、かれが背を伸ばして馬に乗っているのを見ておどろいた。かれは、はげしい攻撃にも、傷ひとつ負っていなかったのである。仲間たちは一人づつかれに近づき、あぶみに接吻した。

同じ日の午後、町の住民が求めていた平和が受け入れられた。モラ・ホセインは、自分のまわりに集まってきた群衆に、つぎのように語った。「神の予言者（モハメッド）を信じる者らよ。なぜわれわれを攻撃してきたのか。なぜわれわれの血を流すことが、神の目に称賛に値すると見なすのか。皆は、われわれがイスラム教を否定したと思っているのか。神の使徒（モハメッド）は、信者と異教徒両方を厚遇するように教えなかったか。このような非難を受けるようなことをわれわれがしたのか。考えてみるがよい。わたしは一人で、剣だけをもって、町の住民が浴びせかけた弾丸の雨に立ち向かい、火炎に取り巻かれたが、そこから傷ひとつ受けずに出てきた。つまり、わたしも馬も、皆のはげしい攻撃で傷つくことはなかったのだ。ただ、顔にかすり傷を負っただけだ。神はわたしを保護し、皆の眼前で、この信教の威力を示されたのだ。」(p.336)

その後すぐ、モラ・ホセインはサブゼ・マイダン（市場）の隊商宿に向かった。そこに着くと馬からおり、宿の入り口に立って仲間たちの到着を待った。皆が集まり、宿に落ちつくとすぐ、何人かの仲間にはパンと水を手に入れるために使いに出した。ところが、かれらは何ももたずにもどってきて、パンを購入することも広場で水を汲むこともできなかったと報告した。「あなたは神を信頼し、神の意志に身を任せるようにと勧告されました。『神がわれわれに定めたもうたこと以外は何もふりかかることはない。われわれの主は神でありたもう。信仰する者は神を信頼せよ』（コーラン）と。」

モラ・ホセインは宿の門を仲間たちに閉めさせ、皆を集めて、日没の時間まで自分のそばにるように言った。夕闇がせまってきたとき、モラ・ホセインは、「信仰のために命をかけて、屋根に上がり、祈りの呼びかけをする者はいないか」と皆に聞いた。ひとりの若者がよろこんで応えた。この若者は「アラホ・アクバール（神は偉大なり）」と言いはじめたとたん、飛んできた弾丸に倒れ、命を落とした。モラ・ホセインは残

りの仲間にも強く求めた。「だれか、この若者と同じ犠牲の精神で立ち上がり、祈りをつづけたい者はいないか。」別の若者が出てきて、「モハメッドは神の予言者なり」と唱えはじめたとき、敵に撃たれた。モラ・ホセインの指示で、三番目の若者が、前の二人が終えることができなかつた祈りを、「神のほかに神は存在しない…」という言葉で終えようとしたとき、同じようにかれも弾丸で命を断たれたのである。(pp.337-338)

三人目の仲間が倒れたとき、モラ・ホセインは宿の門を開き、仲間と共に、卑劣な敵を撃退する決断をした。馬に飛び乗り、仲間にも突撃の合図をして、門前につめかけていた敵に向かった。剣を手にし、あとにつづいた仲間とともに、攻撃してきた敵軍を多数殺害した。命拾いをした者らは、パニックになって、平和と慈悲を再度請いながら逃げていった。あたりが暗くなったころには、敵はすべて消えてしまっていた。二、三時間前まで、大勢の殺気立った敵であふれていたサブゼ・マイダン（市場）は、すっかり見捨てられてしまった。こうして群衆のさわぎはしずまった。死体が散らばったマイダンとその周辺は悲哀を感じさせたが、それはまた、神の勝利を証言する光景でもあった。(p.338)

モラ・ホセインの圧倒的な勝利におどろいた町の名士や指導者は、市民に代わって和解を求めてきた。かれらは歩いてモラ・ホセインのところまで嘆願書をもって来たのである。「われわれの目的は、ただ平和と和解をもたらしたいことを、神はご存知です。馬に乗ったままで、われわれの説明を聞いていただきたい。」かれらの嘆願が真剣なのを見て、モラ・ホセインは馬からおり、かれらを隊商宿に招き入れた。「この町の住民とちがって、われわれは見知らぬ人びとをどう迎えるかを知っている。」と言って、かれらを自分のそばに座らせ、お茶をもって来るように従者に指示した。

かれら（名士や指導者）は、こう述べた。「この大騒動を起こしたのはサイドル・オラマー（悪名高き高僧）です。バルフォルージュの住民は、かれの犯罪には関わっていません。もうこれまでのことは忘れましょう。双方のために、あなたは仲間とアモルに向かうようにお勧めします。バルフォルージュの住民は興奮状態にあり、再度そそのかされて、攻撃に出る恐れがあります。」モラ・ホセインは、かれらの不誠実さを感じたが、その提案に同意した。そこで、アッバス・ゴリ（敵の指揮官）とモスタファ・カーンの二人が立ち上がり、持参してきたコーランに誓った。「今夜、あなたと仲間を客として扱い、翌日コスローに命じて、百人の騎馬隊に護衛させて、シール・ガーを通過させましょう。」と約束した。そして、つぎのように付け加えた。「もし、あ

なたとその一団がわずかでも傷つけられるようなことがあれば、現世と来世において、神とその予言者の呪いが、われわれにふりかかるであります。」(p.339)

この誓いをした直後、一団と馬のために食物が運びこまれた。モラ・ホセインは、仲間に食事するように命じた。その日は一八四八年十月十日の金曜日で、だれも夜明けから飲食をとっていなかったからである。隊商宿には、多数の名士や従者が群がってきたため、モラ・ホセインと仲間は差し出された茶を飲むことはできなかった。

モラ・ホセインと仲間が、アッバス・ゴリとモスタファ・カーンと共に食事したのは、日没後四時間たってからであった。夜中に、サイドル・オラマー（悪名高き高僧）はコスローを呼び出し、ひそかに命じた。すなわち、都合のよい場所と時間を選んで、モラ・ホセインの一団の所有物を全部略奪し、全員殺害せよと命じたのである。コスローは質問した。「この人たちは、イスラム教徒ではないのですか。そして、祈りの呼びかけを終わらすために、三人も仲間を犠牲にしたのではないのですか。ではなぜ、かれらを殺害することがイスラム教の名に値するというのですか。」、恥知らずの悪党サイドル・オラマーは、この質問を無視して命令を忠実に守るように命じた。そして、自分の首を指しながらこう言った。「自分が責任を取るから、恐れずに殺せ。審判の日に、神に対してお前に代わって責任を取る。権力の座にあるわれわれは、お前よりも情報をもっており、この異端者どもを絶やす最上の方法を知っているのだ。」

夜明けに、アッバス・ゴリは、コスローを呼び出し、モラ・ホセインとその仲間に不自由させないで、安全にシール・ガーを通過させるように命じた。また、かれらから報酬を出されても絶対に受け取らないように命じた。コスローはこの指示に従うふりをし、自分も騎馬隊員も警戒をゆるめずに、かれらの世話をすることを約束した。「われわれの待遇に満足した旨をモラ・ホセインに書いてもらい、もどってきたときに、それをお見せしましょう。」(pp.340-341)

アッバス・ゴリをはじめ、町の名士たちは、コスローをモラ・ホセインに紹介した。そのとき、モラ・ホセインはこう述べた。「『お前たち善いことをすれば、わが身のためになり、悪いことをすれば、それはわが身の悪となる。』(コーラン) この男がわれわれをよく扱えば、大いに報いられるであろう。われわれを裏切るような行動をとれば、大きな罰がふりかかろう。われわれは神の大業のためにだけ仕え、神の意志に身

を任せるのみである。」

この言葉を残してモラ・ホセインは出発の合図をした。従者のガンバル・アリは、その合図にしたがってかけ声をあげた。「神の英雄たちよ。馬に乗れ！」この声に応えて、仲間は急いで馬に乗った。コスローの特別班が最前方を進み、そのあとコスローとモラ・ホセインが一団の中心を並んで行進した。後方に仲間たちが進み、その両側に百人の騎馬隊が陰謀（殺害）を実行するために武装して行進した。この一団はバルフォーシュを早朝に出発し、同日正午にシール・ガーに到着すると約束されていた。夜明けから二時間後、一団は目的地に向かった。コスローはわざと森を抜ける道をえらんだ。（殺害の）計画が実行しやすいと考えたからであった。（pp.340-341）

森の中に入るとすぐ、コスローは攻撃の合図を出した。この合図に、騎兵隊はモラ・ホセインの仲間をはげしく攻撃しはじめ、持ち物を略奪し、多数を殺害した。その中にサデクの弟がいた。かれの苦悶の叫びを聞いたとたん、モラ・ホセインは、行進をやめ、馬からおりてコスローの裏切り行為に抗議した。「正午はずっと前に過ぎた。だが、まだ目的地に着いていない。あなたといっしょに行くのはおことわりだ。あなたの案内も騎兵隊の護衛も必要でない。」つぎに従者のガンバル・アリに、祈りのためのじゅうたんを敷くように命じた。モラ・ホセインが祈りの準備に手と顔を洗っているとき、コスローも馬からおり、従者に、モラ・ホセインにつぎのように知らせるように命じた。「目的地に安全に着きたければ、あなたの剣と馬を渡しなさい。」と。モラ・ホセインは答えずに、祈りはじめた。そのあとすぐ、すぐれた文筆家で、剛勇なモハメッド・タギが、タバコの水パイプを準備していた従者のところに行き、水パイプをコスローのところに運ばせてくれるように願った。その願いはすぐ入れられた。モハメッド・タギは、水パイプに火を点けるふりをして腰をかがめたとき、さっとコスローの胸に手を突っ込み、短刀を抜いて、コスローの急所を深く刺した。

「この時代の主なる御方よ！」という仲間の叫び声が聞こえたとき、モラ・ホセインはまだ祈りの最中であつた。かれらは卑劣な敵に反撃し、一回の攻撃で、水パイプを準備した従者以外の者全部を倒した。この従者は恐ろしくなり、モラ・ホセインの足元にひれ伏し、助けを求めた。モラ・ホセインはかれに、コスローの所有物であつた宝石で飾られた水パイプをあたえ、バルフォーシュにもどって、アッバス・ゴリに自分が見たすべてのことを話すように命じた。「コスローは任務を忠実に果たしたことを知らせなさい。あの悪党は、おろかにも、わたしの使命が終わり、わたしの剣と馬

の仕事も終わったと思ったのだ。ところが、仕事ははじまったばかりであり、それが完全に終わるまでは、かれも、そのほかの者も、わたしから剣と馬をうばい取ることはできないことを、かれは知らなかったのだ。」(pp.341-342)

夕闇がせまってきていたので、一団は夜明けまでそこに留まることにした。翌朝、モラ・ホセインは祈りをささげたあと、仲間を集めて言った。「われわれは、最後の目的地であるカルベラに近づいてきた。」その直後、カルベラに向けて出発した。そのあとを仲間がつづいた。モラ・ホセインは、仲間の何人かが、コスローとその仲間の所有物を持っているのを見て、剣と馬以外はすべて捨てるように命じた。「皆は、俗世への愛着を完全に断った状態で、かの聖なる場所に到着しなければならないのだ。」

しばらくして、一団はシェイキ・タバルシの聖堂に着いた。ここに葬られているシェイキは、イスラム教のエマムに関する伝承を伝えた者であった。この聖堂は近隣の住民が訪れてくるところであった。モラ・ホセインはそこでコーランのつぎの聖句を詠唱した。「おおわが主よ、この聖堂を訪問したわれを祝福したまえ。あなただけが祝福を授けることができたまう。」(p.343)

一団が到着した前夜、聖堂の管理人は夢を見た。エマム・ホセインが七十二人の戦士と多数の仲間とともに聖堂に到着した夢であった。この一団はその場所に留まり、雄々しく戦い、すべての会戦で敵軍を倒した。さらに夢の中で、ある夜、予言者自ら現われて、その聖なる一団に加わったのである。翌日、モラ・ホセインが到着したとき、管理人は、かれが前夜夢で見た英雄であることにすぐ気づき、足元にひざまずいてうやうやしく接吻した。モラ・ホセインは管理人をそばに座らせ、夢の話聞いたあと、つぎのように述べた。「あなたが夢で見たことはすべて起こる。その栄光ある場面は、あなたの眼前で実際に演じられるであろう。」これを聞いた管理人は、その後、この砦（聖堂）を守って戦った勇敢な一団と運命をともにし、砦内で殉教した。(pp.344-345)

一団が到着した日は、一八四八年十月十二日であった。その日、モラ・ホセインは以前バビの家を建てたバゲルに、防御用の砦の設計について指示をあたえた。その夕方、馬に乗った者らが大勢森から出てきて、一団を取り巻き、銃をかまえ、叫んだ。「われわれは、ガディ・カラの村民だ。コスローの復讐をしにきた。お前たちを皆殺しに

するまではやめないぞ！」今にも襲いかかろうとしている野蛮な大勢に取り囲まれて、モラ・ホセインとその仲間は身を守るために剣を抜かざるを得なかった。「この時代の主なる御方よ！」と叫び、前方に突入し、敵を撃退した。その叫び声の壮烈さに圧倒された敵は、とつぜん出現したと同じ速度で、見る間に消え去った。この戦いを指揮したのは、自らこの任務を申し出たモハメッド・タギ（コスローを殺した本人）であった。(pp.345-346)

モラ・ホセインの一団は、敵がふたたび攻撃をしかけ、大虐殺をしかねないことを恐れ、近くの村までかれらを追跡した。一団は、この場所を敵の村ガディ・カラと思ったのである。一団を見た村の男たちは皆恐怖にかられて一目散に逃げ去った。しかし、村の所有者ナザール・カーンの母親は、暗闇の混乱の中であやまって殺された。「わたしたちは、ガディ・カラ村民とは何の関係もない！」とはげしく抗議している女たちの叫び声が、やがてモハメッド・タギの耳にとどいた。かれはすぐ、仲間、攻撃をやめて、その村の名を確かめるように命じた。調査の結果、その村はナザール・カーンの所有で、殺された女性はかれの母親であることがわかった。モハメッド・タギは、自分の仲間が大変な失策をしてしまったことに心を痛め、叫んだ。「男女にかかわらず、この村の住民を苦しめるつもりはなかった。唯一の目的は、われわれを皆殺しにしようとしているガディ・カラの住民の暴力行為を抑えることであつたのだ。」モハメッド・タギは、仲間が知らずに起こした惨事を真心から謝った。

一方、自宅に身をかかしていたナザール・カーンは、モハメッド・タギの後悔は誠実なものであると確信した。母親を失って悲しみに打ちひしがれながらも、モハメッド・タギを自宅に招いた。そして、モラ・ホセインに紹介していただきたい、と頼んだ。また、信者にこれほどの熱意をおこさせる大業の教えをぜひ知りたいと願った。(p.346)

夜明けに、モハメッド・タギは、ナザール・カーンを伴ってシェイキ・タバルシの聖堂の到着した。そのとき、モラ・ホセインは会衆の祈りを導いており、その顔は歓喜でかがやいていた。それを見て、ナザール・カーンは、会衆に加わって、いっしょに祈りの言葉を唱えたいという衝動にかられた。祈りが終わったあと、モラ・ホセインは、ナザール・カーンの母親が殺害されたことを知らされた。かれは、真心から弔いの言葉を述べたが、それは、人の心に深い感動をあたえるものであつた。それはまた、仲間の全員が、深い悲しみにあるかれに対して感じたものであつた。「われわれの

唯一の目的は、命を守るためであり、近隣の平安を乱すためではないことを神はご存知である。」と、モラ・ホセインはナザール・カーンを納得させ、バルフォルージュの住民が一団を攻撃した状況とコスローの裏切り行為を説明した。さらに、「母上の死で大変悲しんでおられるであろう」と弔意を表した。ナザール・カーンはとっさに答えた。「心配はご無用です。わたしに百人の息子があたえられたとしても、よろこんで息子全部をあなたのところに送り、『この時代の主なる御方』のために犠牲としてささげるでありましょう。」かれはモラ・ホセインに変わらぬ忠誠をちかった。そして、一団に必要な備品を運んでくるために、自分の村にいそいでもどった。

モラ・ホセインは、仲間に設計通りに砦の建造をはじめると命じた。グループに分けて、それぞれ仕事をあたえ、早急に完成するようにはげました。砦の建造中に、近隣の村々の住民は、サイドル・オラマーにしつこくけしかけられて、攻撃をしかけてきたが、そのたびに失敗に終わり、恥をかいた。このように、敵の度重なる猛攻撃にもかかわらず、モラ・ホセインの仲間は勇敢に戦い、ついに四方から取り巻いてきた敵を一時的に抑えることができた。砦が完成したとき、モラ・ホセインは敵の包囲攻撃にそなえる準備に取りかかった。邪魔が入って困難であったが、砦にこもる一団の安全に必要な備品を整えることができた。(pp.346-347)

砦がほとんど完成したとき、アブトラブが現われ、バハオラがナザール・カーンの村に到着したことを知らせた。かれは、バハオラの伝言をモラ・ホセインにこう伝えた。「今晚、皆バハオラの客として招かれております。午後にバハオラご自身が砦に来られます。」わたし（著者）は、フォルギがつぎのように語るのを聞いた。「アブトラブのうれしい知らせは、モラ・ホセインにこの上ないよろこびをもたらしました。かれは、いそいで仲間のところに行き、バハオラを迎える準備をするように言いました。かれ自ら、仲間といっしょに、聖堂の入り口までの道を掃き、水をまいて清めました。そして、敬愛する御方を迎えるために必要な準備をすべて自分で整えたのです。

バハオラがナザール・カーンを伴って近づいてこられるのを目にしたモラ・ホセインは、すばやく前を出て、バハオラを温かく抱擁し、特別に準備した席に案内しました。当時、われわれには見る目がなく、バハオラの栄光を認めることはできませんでした。われわれのリーダーであるモラ・ホセインが、バハオラを深い尊敬と愛情をこめてわれわれに紹介されたのですが、われわれの鈍い視力は、かれのように、バハオラを認めることができないでいたのです。どれほどの敬愛の念をこめて、かれはバ

ハオラを抱擁したことでありましようか。バハオラを目にしたとき、かれの心は、どれほどの喜悦感で満たされたことでしょうか。かれは深い感動で、まわりのわれわれをまったく忘れてしまったようでした。かれの魂はバハオラの思いでいっぱいになってしまったのです。その間、われわれは長い間立ったままで、『座れ』という命令を待っていました。ついに、バハオラご自身が、われわれに座るように命じられました。やがて、われわれもまた、バハオラという言葉に魅惑されてしまいましたが、だれもその言葉にひそむ無限の威力に気がついた者はいませんでした。(pp.348-349)

訪問中に、バハオラは建造が終わった砦を調べ、満足の意を表されました。また、一団の安全保護に何が必要であるかを、こまかくモラ・ホセインに説明され、最後にこう言われました。『この砦と仲間に必要なものが一つだけある。それはゴッドスである。かれが皆と交わることによって、この砦は完成するのだ。』バハオラは、モラ・ホセインにつぎの指示をあたえられました。メヘディ・コイほか六名をサリに送り、モハメッド・タギ（高僧）に要請して、ゴッドスを即刻釈放してもらうことでした。バハオラはさらに、つぎのように言って、モラ・ホセインを安心させられました。『モハメッド・タギは、神とその懲罰を恐れ、監禁していたゴッドスをすぐ引き渡すであろう。』

バハオラは去る前に、忍耐し、神の意志に身をまかせるように励まされました。そして、こう付け加えられました。『神のおぼしめしであれば、この場所をまた訪問し、皆を援助しよう。皆は神の軍勢の前衛であり、その信教を確立する者たちである。神の軍勢はかならず勝利を得よう。いかなることが起ころうとも、皆の勝利は確実である。』この言葉で、バハオラは勇敢な仲間の一団を神に委ね、ナザール・カーンとアブドラブを伴って村にもどられました。そこからヌール経由でテヘランに向かわれました。」(p.349)

モラ・ホセインはバハオラの指示をすぐ実施しはじめた。メヘディ・コイを呼び、六名の仲間と共にサリに行き、モハメッド・タギに、監禁されているゴッドスの釈放を要請するように指示した。モハメッド・タギは要請を聞くとすぐ、無条件でゴッドスを釈放した。要請の言葉にひそむ威力で、かれは力を完全にうばわれたようであった。そして、使いの者たちにこう言った。「わたしは、ゴッドスを大事な客人とみなしています。かれを釈放するなど言うのは、ふさわしくないことです。かれは、自由に思いのまま行動できます。かれが望めば、わたしは同伴することもできます。」

一方、モラ・ホセインは、ゴッドスが近づいてきていることを仲間に知らせた。そして、バブに対して示すと同じ尊敬の念で、かれに接するように指示し、こうつけ足した。「皆はわたしをゴッドスのしもべとみなさなくてはならない。皆はかれに忠誠を誓わなければならないが、それは、かれがわたしの命を取れと命じられたら、一瞬のためらいもなく、それを実行するほどのものでなければならないのだ。もしためらえば、皆は信教に対して不忠を示すことになるのだ。かれから呼び出されるまでは、けっして、かれを邪魔してはならない。皆は自分の欲望をすて、かれの望みに従わなければならない。また、かれの手足に接吻しないように。かれの清らかな心は、そのような尊敬の表現を好まれないからだ。わたしが誇りに思えるような態度でかれに接するように。かれには栄光ある権威があたえられており、どれほど身分の低い仲間でもそれを当然認めなければならないのだ。この訓戒の精神に背く者には、ひどい懲罰が下されるであろう。」(pp.349-350)

ゴッドスは、サリの著名な高僧で、親戚にあたるモハメッド・タギ宅に九十五日監禁されていた。監禁中であつたが、尊敬をもって厚遇され、バダシュトの大会に参加した仲間の大半の訪問を受けることができた。しかし、ゴッドスは、どの仲間にもサリに滞在させなかつた。そして、モラ・ホセインのかかげる黒旗の下の一団に加わるように、強く勧めたのである。神の予言者モハメッドは、この黒旗について、つぎのように語っていた。「黒旗がコラサンから出てゆくのを見たならば、雪の上を這ってでも、その旗の下に急げ。その旗は、約束されたメヘディ、神の使者の出現を宣言するものであるから。」

この旗は、バブの命令により、ゴッドスの名前の下に、モラ・ホセインがマシュハド市からシェイキ・タバルシの聖堂まで、高くかかげて運んできたものであつた。一八四八年七月初旬から一八四九年五月下旬まで十一ヵ月間、天上の主権の象徴である黒旗は、小人数ではあるが勇敢な一団の頭上にひるがえりつづけた。そして、多数の人びとに、俗世への愛着を断つて神の大業を受け入れるように呼びかけつづけた。

サリに滞在中、ゴッドスはモハメッド・タギに、この新しい神のメッセージを信じてもらおうと努めた。ゴッドスは、バブの啓示に関する未解決の重要問題について思う存分討議した。かれは大胆で挑戦的な見解を述べたが、そのとき丁重で、温和で、しかも説得力のある言葉を用い、また親切な態度でユーモアを交えながら提出したの

で、聞き手を怒らせることはまったくなかった。かえって、かれの聖典への言及は、聞き手を楽しませるためのユーモアに富んだ所見であると誤解されたほどであった。モハメッド・タギは、残酷で邪悪な性質をもっていた。それは後日、シェイキ・タバリスの砦の戦いで生き残った者たちを皆殺しにすることを主張したことで明らかになった。しかし、ゴッドスを自宅に監禁していた間、無礼な態度をとることはなかった。さらに、ゴッドスをサリの住民の攻撃から守り、かれらの態度をしばしば非難させたのである。(p.351)

ゴッドスの到着がせまっているニュースに、タバリスの砦の仲間はずい立った。ゴッドスは使者を送って、砦に自分が近づいていることを知らせたのである。このうれしいニュースに、皆はあらたな勇気と力を得た。モラ・ホセインは、わきあがってくる熱意を抑えきれず、およそ百人の仲間をともなって、ゴッドスを迎えるために歩きだした。各人に二本のローソクを持たせ、自ら火をつけ、前進するように命じた。夜の暗闇も、よろこびにあふれて進む一団の明かりで消散した。こうして、マザンデランの森の中で、かれらは、待望してきた方の顔を認めることができたのである。皆ゴッドスの馬のまわりに集まり、心から敬愛を示し、変わらぬ忠誠をちかった。かれらは両手にローソクをもったまま、ゴッドスの後につづいて砦に向かって歩いた。ゴッドスが、一団の真ん中を馬に乗って進む光景は、あたかも衛星の真ん中でかがやく太陽のようであった。

ゆっくりと砦に向かう一団の中から、賛美の歌声が聞こえはじめた。「聖なるかな、聖なるかな、主なるわが神よ。もろもろの天使と創造物の主よ。」モラ・ホセインが唱えた句を一団が反復した。マザンデランの森は、この歓呼の歌声で鳴りひびいた。(p.352)

この状態で、一団はシェイキ・タバリスの聖堂（砦）に到着した。ゴッドスは馬からおり、聖堂に寄りかかって最初の言葉を口にした。「皆のためには神が残された御方が最高である。皆が本当に信じる者らであれば。」この句で、つぎのモハメッドの予言が満たされたのである。「メヘディ（神の使者）が出現される時、その御方は聖所に背をもたれかけ、集まってきた三百十三人の弟子に、こう語られるであろう。『皆のためには神が残されたお方が最高である。皆が本当に信じる者らであれば。』」ゴッドスが「神が残される御方」と呼んだ人は、バハオラのことであった。フォルギは、これを証言して、わたし（著者）につぎのように語ってくれた。

「ゴッドスが馬からおりたとき、わたしもそこにいました。この目で、かれが聖所に背をもたれかけるのを見、この耳でその言葉を述べるのを聞きました。そしてすぐ、モラ・ホセインの方を向いて、バハオラについてたずねました。そこでゴッドスが知ったことは、神のおぼしめしであれば、バハオラが一八四八年十一月二十七日前に、この聖堂にもどられる予定であることでした。

まもなくして、ゴッドスはモラ・ホセインに説話を何枚か渡し、皆に読んで聞かせるように頼みました。最初の説話はバブに捧げたもので、つぎのはバハオラに関するもので、三番目はタヘレに言及されたものでした。われわれは思いきってモラ・ホセインに質問しました。二番目の説話はバハオラにあてはまるかどうかを聞いたのです。その方は高貴な衣を着た方として描写されていたのです。質問はゴッドスに渡されました。ゴッドスは、時がくれば、この秘密は明らかにされると、われわれを納得させました。当時、バハオラの使命がいかなるものであるかにまったく気づいていなかったわれわれは、その意味を把握できず、とりとめのない推測をするしかありませんでした。約束されたガエム（バブを指す）に関する伝承の秘密を知りたいと思い、数回ゴッドスに教えてくれるように頼みました。最初は気が進まないようでしたが、そのうち、わたしの望みをかなえてくれました。納得力のあるその説明を聞いて、畏れと尊敬の念は高まるばかりでした。かれは、われわれの心に残っていた疑問を取り除いてくれたのです。そのすぐれた洞察力を前にして、かれには、われわれが奥底にひめている思いを読む力と、われわれの胸中の、はげしい動揺をしずめる力があたえられていると確信しました。(pp.352-353)

わたしは、モラ・ホセインが、ゴッドスが休んでいる聖堂の境内の周りをまわるのを夜毎に見ました。そして、ゴッドスを迎えたときに皆で詠唱した句をささやくのを見たのです。わたしが、しずまった夜中に、一人で祈りと瞑想にふけていたとき、モラ・ホセインが近寄ってきて、つぎのようにささやきました。今でもそのときのこと、深い感動で思い出されます。「フォルギよ。あなたを悩ませている疑問を払いのけ、心を解放させるがよい。そして、わたしと共に殉教の杯を飲み干そうではないか。そうすれば、今はかくされている事柄の神秘が、一八六三年（バハオラの使命宣言の年）に理解できるであろう。」

さて、シェイキ・タバルシの聖堂に到着したゴッドスは、モラ・ホセインに、集ま

った仲間の人数を調べさせた。一人ずつ数えながら門内に入らせたところ総数三百十二人いた。数え終わって、その結果をゴッドスに知らせようと、門の中に入ろうとしたとき、バルフォルージュから徒歩で駆けつけてきた若者が飛び込んできた。かれはモラ・ホセインの衣のすそにすがり、仲間に入れてくれるようにこん願した。敬愛する御方の道に、いつでも命をささげさせて下さいと、こん願したのである。このこん願はすぐ受け入れられた。ゴッドスは、仲間の総数を聞いて、つぎのように述べた。「神の予言者が、約束された御方に関して述べた予言は実現されなければならない。自分たちだけが、イスラム教の法や伝承の解釈ができている僧侶の目に、予言の実現が証明されるように。かれらを通して、イスラム教徒たちは真理を受け入れ、予言が満たされたことを認めるであろう。」(pp.353-354)

当時、ゴッドスは毎日、朝と午後にモラ・ホセイんと主な仲間を呼び出し、バブの書簡を詠唱するように求めた。ゴッドスは、砦に隣接する広場に座り、忠実な仲間囲まれて、師であるバブの言葉に熱心に聞き入った。そして、時折、注釈を入れた。敵の脅しとそれにつづいたはげしい攻撃にもかかわらず、祈りと瞑想は定期的につづけられた。危険がせまる苦しい状況の下でも、自分のことは忘れ、敬愛する御方と交信し、その御方への賛美を書き、砦の仲間を元気づけた。敵の弾丸が雨と降り注ぐ中もまったく平静を保ち、敬愛する御方につぎのように呼びかけたのである。「わたしの魂はつねにあなたを思いはせております。それがわたしの生命の支えであり、なぐさめであります。わたしは、あなたのためにシラズで最初に屈辱を受けたことを榮譽に思っています。あなたの道に、あなたの大業にふさわしく命をささげたいと念願しております。」(p.355)

ゴッドスは時折、イラク出身の仲間に、コーランのさまざまな聖句を唱えるように求めた。かれは、熱心に聞き入り、その意味を説明することもしばしばであった。あるとき、つぎの聖句に出くわした。「われらは、皆を少々こわい目に合わせたり、飢えで苦しめたり、また財産、人命、収穫などの損傷を与えたりして、試みることがある。が、忍耐強く耐えている者らにはよろこびの音信を与える。」ゴッドスは、この聖句を説明した。「これは、本来ヨブと、かれにふりかかった苦難を述べたものである。しかし今日、われわれに当てはまるものであり、われわれはヨブと同じ苦難を受けるように定められているのだ。その苦難はあまりにも激烈で、ゆるがぬ確信と忍耐をそなえた者しか耐えることができないものである。」(p.356)

ゴッドスの知識と明敏さ、確信に満ちた言葉、そして仲間にあたえた賢明な指示は、かれの権威と威信を高めた。モラ・ホセインがゴッドスに示した深い敬意は、心から自然に生じてきたものではなく、急迫した事情の下でそうせざるを得なかったものではないかと、最初思われた。しかし、ゴッドスの著作や態度で、その疑いは徐々に消され、仲間からより深い尊敬を受けるようになった。

ゴッドスは、サリ町に監禁中、モハメッド・タギから求められて、コーランのある章について論文を書いた。その一部でさえ、コーランよりも三倍になるほどの大作であった。モハメッド・タギは、その余すところのない見事な解説に深く感動し、ゴッドスへの敬意を深めた。しかし、後日、かれはサイドル・オラマー（悪名高き高僧）と手を組み、シェイキ・タバルシの砦の勇敢な防御者たちの殉教をたくらむことになる。

ゴッドスは、敵の猛烈な攻撃にもかかわらず、砦の中で、コーランの同じ章について解釈を書きつづけた。そして、以前書いたものと同じ量の文章を完成することができた。ゴッドスの書く速度とおびただしい量と計り知れないほど貴重な内容に、仲間は驚嘆し、かれが指導者であるのは正当だとみなした。仲間は皆、モラ・ホセインが毎日、ゴッドスから運んでくる解説文を熱心に読んだ。モラ・ホセインも同様にそれに称賛を惜しまなかった。(pp.356-357)

砦の建造が完成し、防御に必要な備品がそろったとき、モラ・ホセインの仲間は、あらたな熱意をもったが、それは同時に、近隣の住民の好奇心を刺激した。ある者は単なる好奇心から、ほかの者は物質的な利益を求めて、何人かは、その砦が象徴している大業に献身したいという望みから、門内に入る許可を求めた。かれらは、砦があまりにも迅速に完成したので不思議に思ったのである。

ゴッドスは、仲間の数を確認したあとは、訪問者が中に入ることを禁じた。その前に砦を調べた人たちは大いにほめ称えたので、それは人から人へと伝わり、ついにサイドル・オラマーの耳にとどいた。これを聞いたかれの胸中には、嫉妬の炎がはげしく燃え上がった。この砦を建造した責任者たちに対する憎しみから、かれは住民がその砦に近づくことを禁じ、モラ・ホセインの仲間をボイコットするように命じた。

この厳重な命令にもかかわらず、それを無視して、不当に迫害された人たちに、できるかぎり援助の手を差しのべた人たちもいた。砦内のモラ・ホセインとその仲間の苦しみは大きく、最低限の生活必需品にもことかいた。しかし、この暗い艱難の日々に、とつぜん神の援助の光が射し、思いがけない救済の門が開くことになるのである。

砦の一団に重くのしかかっていた苦難が、神の援助により緩和されたことで、強情で横柄なサイドル・オラマーの怒りは再度あおられた。憎しみに駆られ、王座についたばかりのナスル・ディン国王に強い言葉で訴え、王朝が脅威にさらされていることを長々と説明した。「卑しむべきバビ派が反旗をひるがえしております。この無責任な扇動者の一団は、陛下の權威をくつがえそうとしております。かれらの本部近くの村々の住民はすでに、その旗の下に集結し、その大業に忠誠を誓っております。そして頑丈な砦を建造し、その中に立てこもり、陛下に向かって攻撃準備をしているのです。かれらは、主権の独立宣言をしようと固く決心しています。そうなれば、陛下の高名な先祖代々の王冠が屈辱を受け、葬られるでありましょう。陛下は統治をはじめられたところでは、陛下に対して陰謀を企てているこの憎むべき一派を根絶し、その功績で統治を開始されることはすばらしいことです。それにより、人民の陛下への信頼も深まるでありましょう。陛下の威信も高まり、王冠に、不滅の榮譽をもたらすことになりましょう。もし陛下が、何の方策も取らず、わずかでもかれらを大目に見たりされるならば、わたしの義務として、こう警告させて下さい。マザンデラン州だけでなく、ペルシャ全国が隅から隅まで、陛下の權威を否定し、バブの大業に身を委ねる日がすばやく近づいてきておることを警告いたします。」(pp.357-359)

国王は、国政に未経験であったので、この件を、マザンデランの軍を指揮した将校たちに委託した。国内の騒動を起こしている者らを、適切な手段を用いて根絶せよと命じたのである。モスタファ・カーンは、自分の見解を国王に提出した。「わたしはマザンデラン州の出身で、この一団が、どれほどの力をもっているかを判断できます。かれらは、訓練も受けていないきゃしゃな身体をもつ神学生たちで、陛下の軍力に対抗できる力はまったくありません。陛下が送ろうとされている軍団は必要ないと思います。特別派遣隊だけで、かれらを絶滅させるに十分です。かれらには思いやりは不要です。もし、陛下のご希望であれば、わたしの弟アブドラ・カーンに、権限をあたえ、その一団を征服させることもできます。二日とたたないうちに、反乱は鎮圧され、かれらの願望はくじかれるでありましょう。」(pp.359-360)

国王はこの提案を受け入れ、ただちに全国から徴兵し、その一団（バビ）を全滅させよという命令書をアブドラ・カーンに出した。国王はまた、かれの能力に信頼を置いているというしるしに、王家の記章をあたえた。アブドラ・カーンは、国王からの命令と榮譽の記章に勇気づけられ、使命を果たそうと、短期間に、およそ一万二千人の兵士を集めた。兵士の大半は、オサンルとアフガンとクダール地方出身者であった。そして、兵士に必要な武器を与え、アフラ村に配置した。この村はナザール・カーンの所有で、タバルシの砦を眼下に見下ろす地であった。その高台に野営を設置するとすぐ、モラ・ホセインの仲間毎日運ばれるパンを途中でうばいはじめた。やがて、砦の一団は水も得られなくなった。敵の攻撃で砦を出ることができなくなったからである。(pp.360-361)

兵士たちは、砦の前にいくつものバリケードを置き、砦から出てくる者はだれであれ発砲するように命じられた。ゴッドスは、仲間、外に出て水を汲まないように指示した。仲間の一人バネミリは、不満そうに言った。「敵はわれわれのパンをうばっています。水も得られなければどうなるというのですか。」そのとき日が沈もうとしていた。モラ・ホセインといっしょに砦のテラスから敵軍を偵察していたゴッドスは、ふり向いて言った。「水の不足で仲間は苦しんでいる。神のおぼしめしがあれば、今夜、われわれの敵に、どしゃぶりの雨が降り注ぎ、それにつづいて大雪が降ってくるであろう。そうなれば、かれらの攻撃を撃退することができよう。」

その夜、雨が滝のよう落ちてきて、砦近くに駐屯していたアブドラ・カーンの兵士たちをおどろかせ、かれらの武器の大半は破壊された。砦の内部では、長期間使用できる水が確保できた。翌日、近くの住民が、真冬でも見たこともないほどの大雪が降って、大雨で困っていた軍隊をさらに苦しませた。つぎの日、一八四八年十二月一日の夜、ゴッドスは砦の門の外に出ることにした。門に近づきながら、バネミリに言った。「神に賛美あれ。神はわれわれの祈りに答え、敵に大雨と大雪を降らされた。それにより、敵の陣営は破壊されたが、われわれの砦はうるおった。」(p.361)

敵の大軍は、雨と雪で打撃を受けたが、全力で再攻撃を準備していた。攻撃の時間がせまってきたとき、ゴッドスは、反撃して敵軍を追い散らす決心をした。夜明けから二時間たって、ゴッドスは馬に乗り、モラ・ホセインほか三人の仲間と共に横に並び、門を出た。その後方に、一団全員が徒歩でつづき、門を出るやいなや「この時代の主なる御方よ！」という叫び声をあげた。それは敵軍の陣営にひびきわたり、兵士

たちを仰天させた。このバブの勇猛な弟子たちが、マザンデランの森であげたとどろきに、待ち伏せしていた兵士たちは恐れおののいて逃散した。弟子たちが抜いた剣のきらめきで、兵士たちの目はくらみ、肝をつぶし、武器と持ち物をすべて残して逃げ去ったのである。四十五分とたたないうちに、勝利の叫び声があげられた。ゴッドスとモラ・ホセインは敗北した敵の生存者を支配下においた。この戦いで、アブドラ・カーンと二人の士官をはじめ、四三〇名以上の兵士が戦死した。(pp.361-362)

ゴッドスが砦にもどったあとも、モラ・ホセインは勇敢な戦いをつづけていた。そこで、アブドル・アジムがゴッドスに代わって、モラ・ホセインに砦にすぐもどるよう呼びかけた。ゴッドスは言った。「われわれは敵を撃退した。これ以上の罰を加える必要はない。目的は、人びとの再生につくすことができるように、われわれの身を守ることにある。だれにも不必要な害をあたえるつもりはないのだ。すでに達成したことだけでも、神の無敵の威力を示すのに十分である。小人数の信者の一団が、神の恩寵に支えられて、訓練された敵軍を鎮圧することができたのだ。」この戦いで、バブの信者の中で命を落とした者はいなかった。ただ一人、ゴッドスの前方にいたゴリという者だけが重傷を負っただけであった。かれらは、剣と馬以外は敵軍から何も取ってはならないと命じられた。

アブドラ・カーンが指揮していた軍団が、ふたたび集結しはじめたのを知ったゴッドスは、仲間に、再攻撃から身を守るために、砦のまわりに濠を造るよう命じた。十九日後に濠は完成した。皆早期完成のため、昼夜努力したからであった。濠の完成直後、メヘディ・ゴリ王子が、大軍をひきいて、砦に進軍してきている知らせがきた。王子はすでに、シール・ガーに野営していたのである。二、三日後、王子はヴァス・カスに本部を移した。そこから、使いの者をモラ・ホセインに送り、「国王から依頼されて、あなたの活動の目的を確認しにきた」と告げた。モラ・ホセインはこう答えた。「国王にこう報告して下さい。われわれは、君主制の土台をくつがえしたり、国王の権威をうばったりする意図はまったくありません。われわれの大業は、約束されたガエムの啓示に関するもので、主にわが国の僧侶階級の利益に関わるものです。われわれは、明確な論証で、(バブの) 教えが正当であることを立証することができます。」

モラ・ホセインは、誠意と熱意をこめて大業を弁護し、その正当性を詳細に説明した。これに感動した使者は目に涙を浮かべ、叫ぶように言った。「どうすればよいのでしょうか。」モラ・ホセインは答えた。「王子に、サリとバルフォルーシュの僧侶たち

を、この場所におもむかせ、バブがもたらした啓示の正当性をわれわれに問わせることです。だれが真理を語るかは、コーランに決めさせましょう。王子自らこの件の判事となり、判決を下します。もし、われわれがこの大業の真理を、聖句や伝承によって証明できなかった場合、われわれをどう扱うかは王子が決めます。」使者は、この答えに満足し、三日以内に、僧侶たちを召集することを約束した。

使者の約束は果たされない運命にあった。三日後、メヘディ・ゴリ王子は、これまで以上の規模で砦の一団を攻撃することにした。砦を見下ろせる高台に、歩兵の三連隊と騎兵の数連隊を置き、発砲の命令を下した。夜明け前に、ゴッドスは「神の英雄たちよ、馬に乗れ！」と合図を出し、砦の門を開かせた。モラ・ホセインと二百二人の仲間は馬に飛び乗り、ヴァス・カスに向かうゴッドスにつづいた。圧倒的多数の敵軍にもひるまず、道路に積もった雪やぬかるみにもちゅうちょすることなく、暗闇の中を、敵の陣営へと突進した。(pp.364-365)

モラ・ホセインの動きを偵察していた王子は、かれが近づいてきているのを見て、兵士たちに発砲を命じた。しかし、その射撃もモラ・ホセインの突撃を止めることはできなかった。かれは敵軍の陣営の門を突き抜け、王子の宿営場所に突進した。王子は身の危険を感じて、後ろの窓から濠に飛び込み、はだしで逃げ去った。司令官を失った軍隊は、パニックにおそわれ敗走した。圧倒的に多数の兵士と国王から供給された十分な兵器をもってしても、少数のモラ・ホセインの一団を征服することはできなかったのである。

仲間の一団が王子専用の部屋へと突入しようとしたとき、別の二人の王子が向かってきたが、二人共倒された。一団が王子の部屋にはいり、金銀がいっぱいつまった箱を発見したが、それに手をつけたりはしなかった。かれらは王子が残っていた高価な装飾品などは無視したが、ただ、火薬の入ったビンと王子が愛用していた剣を、勝利の証拠として、モラ・ホセインのところに持っていった。ところが、モラ・ホセインは、自分の剣に銃弾があたったので、ゴッドスが戦いに用いた剣と交換して、それで敵軍を撃退していたのがわかった。(pp.366-367)

モラ・ホセインの仲間の一団は、敵の手中にあった監獄の門を開けようとしていたとき、砦に行く途中とらえられて監禁されていたアルデビリの声を聞いた。アルデビ

りは、ほかの苦しんでいる囚人たちも釈放されるようにこん願したので、全員すぐ解放された。

かの忘れがたい戦いの朝、ヴァス・カスのふもとで、モラ・ホセインは仲間をゴッドスのまわりに召集した。しかし、かれは敵の再度の攻撃を予期して、馬に乗ったまま敵の動きを見守っていた。とつぜん、大軍が左右の方向からこちらに向かって突撃してくるのが見えた。仲間は全員立ち上がり、「この時代の主なる御方よ！」の叫び声をあげながら、敵に向かって突進した。モラ・ホセインは一方向に拍車を入れ、ゴッドスと仲間は別の方向に進んだ。モラ・ホセインに向かってきていた一隊は、とつぜん向きを変えてかれから逃れ、ほかの軍団に加わってゴッドスと仲間を取り巻いた。敵軍が同時に一千の弾丸を発射したとき、その一つがゴッドスの口に当たり、歯を折り、舌とのどを傷つけた。一千の弾丸の大轟音は二十キロメートル離れたところまで聞こえたほどであった。この音で心配になったモラ・ホセインは、急いで仲間の援助にかけつけた。その場につくとすぐ馬からおり、従者のガンバル・アリに馬をあずけ、ゴッドスのところに走った。敬愛する指導者の口から大量にしたたる血を見たかれは、恐怖と不安におそわれた。両手をあげ、頭を打ちつけようとしたとき、ゴッドスは止めるように命じた。モラ・ホセインはその動作を止めて、ゴッドスの剣を使わせてもらうようにこん願した。剣を受け取るやいなや、さやから抜いて、百十人の仲間と共に、まわりに群がってきていた敵軍に向かった。一方の手に敬愛する指導者ゴッドスの剣をふるい、別の手に面目を失った敵（王子）の剣を使いながら必死に戦った。三十分以内に敵軍を全部敗走させたが、その間モラ・ホセインは見事な武勇を示した。

メヘディ・ゴリ王子の軍隊の敗走で、モラ・ホセインと仲間は砦にもどることができた。かれらは、後悔の念で苦しみながら、傷ついた指導者のゴッドスを砦に避難させた。砦に到着したゴッドスは、自分が傷を受けたことで悲しんでいる仲間に、文書ではげました。「われわれは神の意志に従わなければならない。この試練のときこそ、ゆるがぬ確信を持たなければならない。不信心者の石は、神の予言者の歯を折った。わが歯は敵の銃弾で折れた。わが身体は苦しくても、わが魂はよろこびに浸っている。神への感謝の念ははかりしれない。われを愛するならば、このよろこびがうすれないように、悲しまないでくれ。」

この忘れがたい戦いの日は、一八四八年十二月二十一日であった。同じ月のはじめに、バハオラは、モラ・ホセインにあたえた約束どおりに、数人の仲間と共にヌール

からタバルシの砦に向かった。同伴した仲間の中には、ジャニと生ける者の文字の一人であるバゲルとバハオラの弟ヤーヤがいた。バハオラはかれらに、途中で止まらずに、砦に直行するように指示していた。バハオラの意図は、夜半に砦に到着することであった。その理由は、アブドラ・カーンが指揮しはじめて以来、砦の一団を援助してはならないというきびしい命令が出されており、一団を孤立させるために、監視人があちこちに置かれていたからである。しかし、バハオラの同伴者たちは、旅の途中で、二、三時間だけでも睡眠を取りたいと要請した。バハオラは、この休息のため到着がおくれると、敵の不意打ちにあう危険があることを知っていたが、かれらの熱心な願いを聞き入れた。一行は、道路近くの一軒家で泊まることにした。夕食後、皆睡眠についたが、バハオラだけは疲労にもかかわらず寝ずに見張っていた。自分と仲間がさらされている危険に十分気づいていたからであった。(pp.368-369)

その間、敵の密使が、バハオラとその仲間が近くに来ていることを、その区域に配置されていた監視団に知らせた。かれらは一行のところに来て、バハオラが指導者であることをすぐ認めてこう言った。「このあたりで見つかった者を皆逮捕するように命じられています。取り調べはせずに、アモルに連行し、知事に渡すように指示されているのです。」バハオラは警告した。「あなた方は、われわれの目的を誤解している。あとで後悔しないような行動を取るように忠告する。」このバハオラの威厳ある忠告に、監視団の主任は心を打たれ、バハオラと仲間を丁重に扱うことにした。主任は、一行に馬に乗り、自分についてアモルに向かうように命じた。川岸に近づいたとき、バハオラは、監視団から離れて進んできていた仲間に、持参している書簡をすべて川に捨てるように合図した。(pp.368-369)

夜明けがきて、一団が町に近づいた。知事代理は、タバルシに行く途中に逮捕された一団が到着することを、前もって知らされていた。知事自身は、知事付の護衛団と共にメヘディ・ゴリ王子の軍団に加わるように指示されて不在であった。また、その留守中は、血族の者を代理に置いておくように命じられていたのである。知事代理は、知らせを聞くとすぐアモルの寺院に行って、町の高僧と有力者を呼び集めて、一団と会うように命じた。知事代理は、一団の指導者がバハオラであることがわかったとたん、自分が出した命令を深く後悔した。かれは、バハオラの行動をとがめるふりをした。そうすることで、騒ぎがしずまり、寺院に集まってきた人びとの興奮がおさまるだろうと思ったからであった。バハオラは強く言った。「われわれのせいになされている罪は犯していない。われわれの潔白はやがて、皆の目に明らかになるであろう。あと

で後悔しないような行動を取るように忠告する。」

知事代理は、高僧たちに質問はないかと聞いた。そこで出された質問に、バハオラは明白で納得のゆく答えをした。バハオラが質問を受けている最中に、仲間の一人がもっていた書簡が監視人たちにみつかった。かれらは、それをバブの書簡だと思い、高僧に渡した。高僧は、その書簡を何行か読んだあと、そばに置き。皆を見まわして声をあげて言った。「途方もない要求をしているこの者たちは、今読んだ書簡で明らかであるが、正しい綴字方の基本的な規則さえも知らないことを暴露した。」バハオラは答えた。「学識ある僧侶の方々よ。皆さんが批判されているこれらの言葉は、バブのものではない。エمام・アリが、仲間に語った言葉である。」(pp.370-371)

このバハオラの答えと、その威厳ある態度に、ごう慢な高僧は自分のへまに気づいた。その重大な供述に反論できないので、沈黙を守ることにした。有力者の一人が腹立たしそうに言葉を入れた。「この書簡の内容そのものが、著者がバビだという決定的な証拠であり、また、その教義の解説者であることを示している。」かれは、信者たちは処刑されるべきだと主張し、叫ぶように言った。「このわけのわからない宗派は、国家とイスラム教の憎い敵である。この異端をぜひとも根絶しなければならない！」そこに居たほかの有力者たちも、大胆になってこの非難に同意し、知事は自分たちの願いを聞き入れるべきだと主張した。

知事代理はひじょうに当惑し、少しでも一団を大目にみれば、自分の地位があぶなくなることに気がついた。かれらの興奮をしずめるために、捕らえられた一団に、むち打ち刑をあたえるように命じ、こうつけ足した。「そのあと、この一団を知事が帰られるまで監禁する。知事はかれらをテヘランに送り、そこで、国王から罰を受けるであろう。」(p.371)

最初にむち打ちの刑をうけたのは、バゲルであった。かれはこう主張した。「わたしはバハオラの馬丁です。マシュハドに向かっていたところ、とつぜん逮捕されてここに連れて来られたのです。」バハオラは間に入って、バゲルを釈放させた。ジャニについては、「ただの商人で、自分の客であり、かれに対する容疑は、自分の責任だ」と言って解放させた。ヤーヤはしばられはじめたが、バハオラが「自分の従者だ」と強く言ったところ釈放された。バハオラは知事代理にこう説明した。「これらの者は、何の

罪も犯していない。刑罰をあたえたければ、わたしが進んで犠牲になって受けよう。」知事代理は、気が進まなかったが、仕方なくバハオラだけに刑罰をあたえることを命じた。本当は、バハオラの仲間にあたえるつもりであったのであるが。

五ヵ月前、タブリズでバブが受けたと同じ刑罰を、バハオラは、アモルの高僧たちの前で受けた。バブが敵の手で最初に監禁されたのは、シラズの警察署長ハミド・カーン宅であった。バハオラの最初の監禁は、テヘラン政府の要人の自宅であった。バブの二番目の監禁は、マーカーの砦であった。バハオラの二番目の監禁は、アモルの知事宅であった。バブはタブリズの祈りの家でむち打たれた。バハオラは、同じ侮辱をアモルの高僧の前で受けた。バブの三番目の監禁はチェリグの砦であった。バハオラの三番目の監禁は、テヘランのシア・チャール（暗黒の地下牢）であった。ほとんどの場合、バブは試練と苦難をバハオラの前に受け、バハオラの貴い生命を危険から救うために自らを犠牲としてささげた。一方、バハオラは、自分を深く敬愛するバブだけが苦しむのをよしとせず、すべての苦杯を分かち合ったのである。この大いなる愛は、これまでだれも見ることがなく、その献身は想像を超えたものであった。すべての木枝がペンになり、海が全部インクとなり、天と地が羊皮紙に巻かれても、二人の間の愛と献身の深さをはかることはできなかつたであろう。(pp.372-373)

バハオラと仲間は、寺院の一角にある部屋に監禁された。知事代理は、バハオラを執念深い敵から守ろうとして、だれにも気づかれない時間に、かれが監禁されている部屋の壁から抜け出せる通路の門を開け、かれを自分の家にすぐ移すように従者に命じた。知事代理自らバハオラを案内しているとき、町の有力者が飛び出してきて、はげしくののしり、こん棒でバハオラをなぐろうとした。知事代理はすばやく間に入り、「神の予言者にかけてこの方を助けてあげよ。」と言いながらかれの手を止めた。男は叫んだ。「何をするのだ。先祖の宗教の憎い敵を釈放するというのか！」その間、ごろつきが有力者のまわりに群がってきて、あざけったり、悪態をついたりしたため、さわぎが大きくなっていった。この騒動の中で、知事代理の従者たちは、バハオラを知事宅に安全に案内することができた。その間、従者たちはおどろくほどの勇気と平静さを見せた。

群衆の抗議にもかかわらず、監禁されていた残りの一団は政府の建物に移されたため、危機をのがれた。知事代理は、アモルの住民のバハオラに対する仕打ちを、深く謝った。「神の介入がなかったならば、悪意をもった住民から、あなたを救うことはで

きなかったであります。命をかけてもあなたを守ります、という誓いの力がなかったならば、わたしもまた、かれらの暴行の犠牲となり、踏みつけられたと思います。」知事代理は、アモルの有力者たちの無礼行為を強く批判し、かれらの卑しい性格を非難した。そして、自分もかれらの陰謀で苦しまされていることを述べ、深い敬愛の念をこめてバハオラの世話をしはじめた。かれはよくバハオラにつきのように語った。「あなたを、わが家の囚人などと思うのはとんでもないことです。この家は、敵の陰謀からあなたを守るために建てられたものだ」と信じています。」(P.374)

わたし(著者)は、バハオラ自らからつぎのように聞いた。「これほどの待遇をアモルの知事代理から受けた囚人は、われのほかにはいない。わかれは最高の思いやりと尊敬をもってわれを扱った。われは寛大なもてなしを受け、安全に快適に過ごせるように最善の注意がはらわれた。しかし、家の門から出ることはできなかった。知事代理は、アッバス・ゴリの親戚である知事が、タバルシの砦からもどってきて、われを傷つけるかもしれないと恐れたからである。われは、その不安を取り除くために、こう言った。『アモルの扇動者たちからわれを救い、この家であなたからすばらしいもてなしを受けるようにされた神は、知事の心を変え、同じような思いやりと愛情をもってわれを扱うようにされるであろう。』

ある夜、家の門外でのざわめきでとつぜん目がさめた。戸が開いて、知事が帰宅した知らせがあった。われの仲間、ふたたび攻撃がはじまると思ったが、かれが、われわれをはげしく非難した者たちを叱っていたのでおどろいた。かれは大声で、つぎのようにいさめていた。「このあわれでみじめな者らに、客人を無礼に扱わせた理由は何なのか？ その方の両手をしばりあげ、弁護する機会もあたえたかではないか。どのような正当な理由があってその方を死刑にしようとしているのか。証拠があるのか。かれらが、イスラム教を真心から信じ、その利益を擁護しているというのなら、タバルシの砦におもむき、イスラム教を守れるかどうかを示したらどうか。」(p.375)

この知事は、砦で身を守っている一団の勇敢な行動を見て心が変わっていたのである。かれは以前、バブの大業を軽蔑し、その発展を阻もうと尽力していたのであるが、砦からもどって以来、大業に対する称賛の気持ちで満たされていたのである。砦で見た光景で、怒りは和らぎ、自尊心は除かれた。謙虚になったかれは、尊敬の念をいだいて、バハオラのところに行き、町の住民の無礼さを謝った。そして、自分が高い地位にあることも無視して、バハオラに真心から仕えた。かれはまた、モラ・ホセイ

を高く称賛し、その知恵と大胆さ、その手腕と人格の高貴さをくわしく述べた。二、三日後、知事は、バハオラと仲間たちをテヘランに向けて安全に出発させることができた。

バハオラは、タバリスの砦の仲間と運命を共にし、砦の仲間にも最大限の援助をしたいと望んだが、そういう定めではなかった。神秘的な神の定めにより、バハオラは、その直後の戦いで、仲間にもふりかかった悲壮な最期を免れるようになっていたのである。もしバハオラが砦に到着し、勇敢な一団に加わったならば、その後展開してゆく偉大なるドラマで、定められた役割を果たすことができたであろうか。荘厳に計画され、見事に着手された大業を、どのように成就することができたであろうか。シラズからバブの呼び声がとどいたとき、バハオラはまだ青年であった。二十七才で大業に献身するために立ち上がり、恐れなくその教えを支持し、その普及のため、模範的な役割を果たして著名となった。かれには、どれほどの努力が求められても、それに対応する能力があたえられており、また、どれほどの犠牲が要求されても、それを満たす信仰の力が付与されていた。目的成就のためには、名声も富も地位もすべて捨て去った。友人のあざ笑いや敵のおどしも、大業の促進を阻むことはできなかった。かれらは皆、この大業を、わけの分からない禁止された分派とみなしていたのであったが。

(pp.375-376)

以下の出来事は、バハオラの独特な地位を示すものである。ガズビンで逮捕された仲間を援助して監禁されたこと。これは最初の監禁であった。タヘレ救出の手腕。バダシュトでの困難な議事進行を、見事に導いた模範的態度。ニヤラでゴッドスの命を救った方法。タヘレの性急な行動から起されたきわどい事態に対する英知ある処置と、タヘレの保護にあたっての注意深さ。タバリスの砦の仲間にあたえた忠告。モラ・ホセインと仲間の一団に、ゴッドスを加える案を編み出したこと。砦の勇敢な一団の支援に自ら立ち上がったこと。侮辱的な処罰を、仲間にも代わって自分が受けた高潔さ。仲間によるナセルディン国王の暗殺未遂の結果、バハオラは懲罰を受けたが、そのときの平静さ。ラヴァサンから軍本部、さらに首都へと連行された際受けた数々の屈辱。テヘランの暗黒の地下牢シア・チャールでつけられたくさりの重圧。以上は、バハオラが占める独特の地位を雄弁に証言するいくつかの例である。その地位とは、ペルシャを再生する諸力の主な推進者としての地位である。それらの諸力をもたらし、その進路をみちびき、その活動を調和させ、最後に、大業へと成就させたのはバハオラであった。バハオラはその大業を後日、明らかにするようになっていたのである。

第二十章 マザンデランの動乱（つづき）

一方、メヘディ・ゴリ王子の率いる軍隊は、士気喪失から回復し、タバルシの砦の一団への再攻撃を用意周到に準備していた。砦の一団はふたたび、大軍勢に包囲された。その先頭に立って、アッバス・ゴリとソレイマン・カーンが進撃してきた。かれらは、歩兵隊と騎兵隊を率いて王子の兵士団を増援しにきていたのであった。この二つの軍団は合同で砦の近くに野営し、その周りに七つのバリケードを配置した。そして、ごう慢な態度で、最初自分たちの軍勢の大きさを誇示し、日々の演習に熱心にはげんだ。（p.378）

一方、包囲されている砦の一団は、水が不足してきたので、砦内で井戸を掘った。一八四九年二月一日、井戸掘りの完成予定日に、その仕事を見守っていたモラ・ホセインは、こう述べた。「今日、風呂に必要な水が十分手に入る。俗世の汚れをすべて洗い落とし、全能の神の宮居を求め、永遠の住いに急ごう。殉教の杯にあずかりたい者は、その準備をし、生命の血で大業への信仰を固める時間を待とう。今夜、夜明け前に、わたしと行動を共にしたい者は、この砦から出、われわれの道を阻んできた暗黒の勢力をふたたび散らし、自由に栄光の高みに昇る準備をせよ。」

その日の午後、モラ・ホセインは身を清め、新しい衣服を着、バブのターバンを頭につけ、せまってきた戦いの準備をした。その顔は、言いようのないよろこびでかがやいていた。かれは、しずかに自分の出発の時間を仲間知らせ、かれらを励ました。そして、この世から去る前の時間、ゴッドスと二人きりになり、かれの足下に座して、抑えがたい熱望をすべて打ち明けた。モラ・ホセインにとって、ゴッドスは、まさしく、最愛なる御方（バブ）を思い起こさせる人であったのである。夜半過ぎ、明けの明星が現われるとすぐ、馬に乗り、砦の門を開けるように合図した。この明星は、最愛なる御方との永遠の再会を知らせる光でもあった。三百余人の仲間の先頭に立って、砦から出てきた瞬間、ふたたび「この時代の主なる御方よ！」という叫び声があげられた。その強烈な叫び声は、森と砦と軍の野営陣地に大きくこだました。（p.379）

モラ・ホセインはまずバリケードに向かって突撃した。このバリケードは、敵の勇敢な指揮官の一人、ガディが守っているものであった。モラ・ホセインはすぐバリケードを破り、指揮官を片付け、兵士たちを追い払った。同じ速度と大胆さで、第二と

第三のバリケードを破り、突進していった。それを見た敵軍は仰天し、絶望感におそわれた。その後の混乱の中、敵のアッバス・ゴリは木に登り、木の葉のかげに身をひそめ、モラ・ホセインの仲間を待ち伏せて襲うことにした。暗がりのかくれ場所から、モラ・ホセインと仲間の動きを追うことができた。敵が起した大火炎で、かれらの姿がはっきり見えたのである。そのとき、モラ・ホセインの馬が近くのテントのロープに足をからませた。そこから抜け出そうとしているとき、敵の弾丸がかれの胸に当たった。発砲したのはアッバス・ゴリであったが、だれに当たったのかはわからなかった。モラ・ホセインは多量の血を流しながら馬からおり、二、三步あるいて力つき地面に倒れた。コラサン出身のゴリとハサンという二人の若い仲間が、モラ・ホセインを助け出し、砦に運んだ。(p.380)

わたし(著者)は、サディクとフォルギからつぎのように聞いた。「われわれは、ゴッドスと共に砦に残っていました。モラ・ホセインが運び込まれるとすぐ、部屋を離れるように指示されました。そのとき、モラ・ホセインは意識を失っているように見えました。ゴッドスはバゲルにドアを閉めてだれも入れないように指示して、こう言いました。『モラ・ホセインと二人切りにしてもらいたい。かれに内密に話したいことがある。』二、三分後、モラ・ホセインがゴッドスの質問に答えている声を聞いておどろきました。その後、二時間ほど二人は対話をつづけました。その間、バゲルがひじょうに興奮しているのを見てふしぎに思いましたが、後で、こう話してくれました。『ドアの裂け目からゴッドスを見守っていました。かれが、モラ・ホセインの名を呼んだところ、かれは、直ちに起き上がり、いつものように、ひざをまげて、ゴッドスのそばに座りました。頭を垂れ、目を伏せて、ゴッドスの言葉に聞き入り、質問に答えていました。ゴッドスがこう言っているのが聞こえました。『あなたはこの世からの出発の時間を早められた。そして、わたしを敵の掌中に置かれた。わたしも、まもなく、あなたと合流し、天国の甘美なよろこびを味わいたいと願っている。』わたしは、モラ・ホセインの言葉も聞き取ることができました。『わたしの命があなたの身代わりになれますように願います。わたしに満足していただけるでしょうか。』

長い時間が過ぎ去ったあと、ゴッドスはバゲルにドアを開け、仲間を中に入れるように指示しました。われわれが部屋に入ろうとしているとき、ゴッドスはこう言いました。『以前話せなかったことを今かれと話すことができた。』そのとき、モラ・ホセインはすでに息を引き取っていましたが、かすかなほほ笑みが残っていました。ひじょうにおだやかな表情をしていましたので、眠っているように見えました。ゴッドス

はモラ・ホセインに自分の上着を着せ、シェイキ・タバルシ聖堂のすぐ南側に埋葬するように指示しました。ゴッドスはモラ・ホセインの額と目に別れの接吻しながら、こう言いました。『神の聖約に最後まで忠実であったあなたは幸いである。あなたとわたしは絶対離れないように祈る。』ゴッドスのこの言葉には強烈な思いが込められていたので、そこに立っていた七人の仲間は号泣し、自分たちが犠牲になりたかったと思ったほどでした。ゴッドスは自分の手で遺体を墓に安置しました。そして、そばに居た仲間に、墓の場所を一切秘密にしておくように、仲間にも知らせないように警告しました。その後、ゴッドスは、同じ戦いで殉教した三十六名の遺体を、シェイキ・タバルシ聖堂の北側に全部いっしょに埋葬するように指示しました。遺体が安置されているとき、ゴッドスは述べました。『神から愛される者らは、これらの殉教者の模範を心に留めよ。かれらがつぎの世でも和合しているように、皆もこの世において和合していなければならない。』

その夜、仲間のうち少なくとも九十人が負傷し、そのうち大半は死亡した。仲間の一団がバルフォルージュに到着後、最初に攻撃された日の一八四八年十月十日からモラ・ホセインが亡くなった日、一八四九年二月二日までに殉教した仲間の数は、バゲルの計算によると、七十二名になっていた。

敵の攻撃開始からモラ・ホセインが殉教するまでの期間は百十六日であった。その間のモラ・ホセインの武勇は忘れられないもので、最悪の敵でさえ、その腕前に驚嘆したほどであった。四回にわたって、かれは最高の勇氣と威力を見せた。最初は、一八四八年十月十日のバルフォルージュ近郊の戦いであった。二回目は、一八四八年十二月一日のタバルシの砦近くでの戦い、三回目は、一八四八年十二月二十一日のヴァス・カスで、メヒディ・ゴリ王子の軍隊と対決したときであった。最後のもっとも忘れがたい戦いは、アッバス・ゴリ、メヒディ・ゴリ王子、ソレイマン・カーンの合同軍勢に対する抗戦であった。この軍勢には、四十五名の有能で経験を重ねた将校が参加していた。(p.382)

モラ・ホセインは、これらの圧倒的な軍勢との激しい戦いで、傷ひとつ負わず勝利を収めた。モラ・ホセインの見事な勇氣と武芸の腕前は、一回の戦いだけでも、この信教が人知を超えたものであることを証明した。かれは、信教を守るために勇敢に戦い、その道で気高い死を遂げたのである。若いころから見せた知性と品格、学識の深さ、信仰の固さ、剛勇、一つの目的への専心、高度の正義感、不動の献身によって、

モラ・ホセインは、新しい啓示の栄光と威力を認めた者らの間で、傑出した人物となったのである。そして三十六才で殉教した。カルベラでカゼムと知り合ったのは十八才のときで、九年間カゼムのもとで知識を吸収したが、それは、バブの教えを受け入れるための準備であった。その後の九年間は、一時も休むことのないはげしい活動をつづけ、最後には殉教の場へと運ばれ、故国の歴史に不滅の光輝を注いだ。(p.383)

敵軍は、屈辱的な敗北で、ある期間動けなくなった。再軍備して攻撃ができるまで四十五日かかったのである。その期間は正月までつづいた。その間、きびしい寒さがつづいたため、敵は、自分たちに大変な恥をかかせ、面目を失わせた砦の一団を攻撃するのをひかえた。しかし、敵軍の指揮官は、必需品が砦に運ばれるのを阻止せよとの命令を受けた。ゴッドスは、食糧がほとんど底をついたとき、モラ・ホセインが緊急時のためにそなえていた米を、バゲルに頼んで仲間に配分させた。各人分け前を受け取ったあと、ゴッドスは全員を集め、つぎのように勧告した。「まもなく災難がおそってくるが、それに耐え得ると思う者は砦に残るがよい。少しでも恐怖感やためらいを感じる者は、この場所から離れよ。敵がふたたび軍力を集めて、攻撃にうつる前に、すぐ発つことだ。すぐしなければ、逃げる道は閉ざされてしまう。この後まもなく、最悪の苦難がわれわれに襲いかかるであろう。」(p.384)

この警告が出された日の夜、モタヴァリという男が、仲間を裏切って、敵の司令官アッバス・ゴリにつぎのような手紙を書いた。「司令官は、なぜ攻撃を途中で止められているのですか。あなたの軍はすでに、おそるべき敵であるモラ・ホセインを殺害された。砦の主動力であったかれが除かれ、砦の力と安全を守る柱が倒れたのです。もう一日忍耐されておれば、確実に勝利の栄冠を得られたでしょう。砦には百人ほどしかいません。誓って申しますが、あなたの連隊は二日以内に砦を占拠でき、一団は無条件降伏をするでしょう。皆、食べ物がなく、疲れ切っており、ひどく苦しんでいます。」

この手紙は密封され、もう一人の男ザルガールに渡された。かれは、ゴッドスからもらった米をもって、夜半に砦からこっそり抜け出した。すでに知り合いになっていたアッバス・ゴリに手紙を渡すためであった。そのとき、アッバス・ゴリは砦から十五キロメートルほど離れた村に避難していた。そこで、テヘランにもどって、不面目な敗北を受けた身で、国王の面前に出頭すべきか、それとも、故郷にもどって親族や友人の非難を受けるべきなのか思案中であった。(p.385)

アッバス・ゴリが手紙を受け取ったのは、夜明けで、起床時であった。モラ・ホセイン死亡を知って、勇気を出し、あらたな決意をした。しかし、この使者が、モラ・ホセイン死亡のニュースを広めるのではないかと恐れて、その場で殺害した。そのあと策略をめぐらして殺人の疑いが自分にかからないようにした。砦の一团が困窮状態にあり、人数も減っているのは最適の機会だと、すぐ攻撃準備にかかった。新年の十日前には砦から二キロメートル離れたところに野営し、裏切り者がもたらしたニュースが正確かどうかを確かめた。砦の一团を降伏させたときの功績を自分一人占めにしたと思い、モラ・ホセイン死亡のニュースを、一番親しい士官にも明かさなかった。

夜明けに、アッバス・ゴリは旗をかかげて、歩兵隊と騎兵隊の二師団の先頭に立って進み、砦を包囲し、小塔にいた見張り人に向かって発砲するように命じた。緊急事態を知らせるために駆けつけたバゲルに、ゴッドスは言った。「裏切り者がモラ・ホセインの死をアッバス・ゴリに知らせた。このニュースに勇気づけられ、われわれの砦を襲撃し、唯一の征服者となって榮譽を得ようとしているのだ。十八名の仲間を横に並ばせて進撃せよ。そして、侵略者とその軍勢に懲罰をあたえよ。モラ・ホセインはいなくとも、神の無敵の威力は仲間を援助しつつ、敵の勢力に打ち勝つことができることを知らせよ。」(p.386)

バゲルは仲間を選び、すぐ砦の門を開くように命じた。皆馬に飛び乗り、「この時代の主なる御方よ！」と叫びながら、敵の陣地へと突撃した。そのあまりの凄さに、敵の全軍はあわてて逃げ去った。かれらは完全に士気を失い、面目をつぶされてバルフォーシューに着いた。指揮官のアッバス・ゴリは、あまりの恐怖感に馬から落ちた。そして、片一方の長靴をあぶみに残したまま、兵士たちが向かった方向に逃げ去った。失望したかれは、王子のところに急ぎ、不面目ながらも状況が逆転したことを告白した。一方、バゲルは傷一つ負わず、十八人の仲間と共に、敵が残っていた旗をもって、意気揚々と砦にもどってきた。そして、勇気をあたえてくれた指導者のゴッドスに勝利を伝えた。(pp.387-388)

敵が完全に敗走したあと困窮に陥っていた仲間はほっとした。この戦いは、和合を強め、信教がかれらにもたらした力の効果をあらたに思い出させた。食べ物は、敵の陣地から運んできた馬の肉だけとなった。かれらは、あらゆる方向から襲ってきた苦難に、不屈の精神で耐え、心をゴッドスの望みに向けた。どれほど苦しくても、どれ

ほど敵の攻撃がつづいても、殉教した仲間が勇敢に歩いた道からわずかでもそれることはなかった。災難の苦しみの最中、気の弱い少数の者がつまずき、仲間を裏切ったりしたが、それは、大半の勇気のある仲間が殉教の時間に放った光輝の前に、意味のないものとなった。(p.388)

サリに野営していたメヘディ・ゴリ王子は、同僚の指揮官アッバス・ゴリの率いる連隊が敗走したことを知って大変うれしく思った。もちろん、かれ自身も砦の一団を根絶したかったのであるが、自分の手で勝利をおさめたかったので、競争相手が失敗したことをよろこんだのである。かれはすぐ、テヘランの中央政府に手紙を出し、強情な砦の一団の完全征服に必要な爆弾と大砲を、砦の近くまで即刻送るように要請した。

こうして敵が再度の大攻撃の準備をしている一方、ゴッドスと仲間は、極度の苦しみにも気かけず、新年をよろこびと感謝の気持ちで迎えた。そして、全能なる神があたえてくれたもろもろの祝福を感謝と賛美の気持ちで自由に語り合った。空腹感におそわれながらも、迫ってきた危険を無視して、歌などで楽しんだのである。昼も夜も、砦はよろこびにあふれた一団の神への賛美の詠唱でこだました。「主なるわれらの神、天使と聖霊の主は、まことに聖なるものなり。」という仲間の口からもれる聖句で、熱意は高められ、勇気が奮い起こされた。(p.389)

仲間の一団が砦に連れてきた家畜のうち、一匹の牛だけが残った。それはナシロッド・ディンが保管しておいたもので、かれは毎日その牛の乳をしぼってゴッドスのためにプディングを作っていた。ゴッドスは、そのプディングをほんの少し取り、残りは空腹の仲間に分け与えた。かれは、しばしばつぎのように言った。「モラ・ホセイが去ったあと、仲間が作ってくれる食べ物も飲み物もおいしくなくなった。飢えで苦しみ、疲れ果てている仲間を見て心が痛むのだ。」この逆境にもかかわらず、ゴッドスは「サマードのサット（自著の解説書）」の意味を説明しつつ、最後まで忍耐するように仲間を激励した。朝と夕、バゲルは仲間の集まりで、その解説書を読んだ。それを聞いて、かれらの熱意は強められ、希望で満たされたのである。

わたし（著者）は、フォルギからつぎのように聞いた。「われわれは食べたいと思わなくなりました。このことは神がご存知です。日々の糧に関することは考えなくなっ

たのです。ゴッドスの解説書の言葉に魂が完全に魅せられてしまったのです。この状態が何年もつづき、どれほど疲労と倦怠におそわれても、われわれの熱意が弱まったり、よろこびが損なわれたりすることはなかったでしょう。食べ物の不足で体力や気力がおとろえたとき、バゲルはゴッドスのところに行き、われわれの状態を知らせました。そこで、ゴッドスはわれわれの間を歩きまわり、激励の言葉をかけたのです。そのときの顔の表情と、不思議な力に満ちた言葉で、われわれの意気消沈は歓喜となったのです。こうして、強大な力を得たわれわれは、敵の大軍がとつぜんおそってきても、その軍勢を征服できると感じました。」(pp.389-390)

一八四九年の元旦に、ゴッドスは仲間らに書簡を書き、その中でまもなく激烈な試練がふりかかり、多数の仲間が殉教することを暗示した。二、三日後、メヘディ・ゴリ王子の大軍とソレイマン・カーン、アッバス・ゴリ、ゴリ・カーンの合同軍、そのほか、およそ四十名の士官が砦の近くに野営し、付近に塹壕やバリケードを造りはじめた。新年九日目に、司令官は砲兵隊に、砦に向かって発砲するように命じた。攻撃がつづいている最中に、ゴッドスは部屋から砦の真ん中に出てきた。かれは顔にほほ笑みを浮かばせており、態度はまったく平静であった。歩いているかれの面前にとつぜん砲弾が落ちてきた。かれは落ち着き払ってその砲弾を足で転がしながら言った。

「尊大な侵略者たちは、神の復讐の威力にまったく気づいていない。ぶよのような取るに足りない生き物さえも、強大なニムロデの命を終わらせることができたことを忘れてしまったのか。大嵐のとどろきだけで、アッドとサマードの部族（古代アラビアの部族）とその軍勢を滅ぼすのに十分であったことを聞かなかったのか。神の英雄たちを残酷にも脅迫しようとするのか。神の目には、王位の華麗さは、空虚な影にしかすぎないのだ。」ゴッドスは仲間らに向かってこう付け加えた。「皆は、神の使者モハメッドが語っていた仲間なのだ。『世の終わりに現われるわが同胞の顔を見たいと、われはどれほど切望していることであろうか。われわれは幸いであり、かれらも幸いである。しかし、かれらの方が、われわれより幸いである。』自我と欲望で、これほど栄光ある地位を失わないようにせよ。邪悪なる者のおどしを恐れたり、不信心者の騒ぎで狼狽したりしないようにせよ。皆それぞれに時間が定められている。敵の攻撃も仲間の援助も、その時間を遅らせることも早めることもできないのだ。地上のもろもろの勢力が一斉に向かってきても、その時間がくるまで、皆の生命をわずかでも縮めることはできないのだ。はげしさを増すこの銃声のとどろきで、一瞬でも心をかき乱されるならば、神の保護の砦から出ることになるのだ。」

この強烈な訴えで、仲間の心は確信に満たされた。しかし、少数はためらいと恐怖感を顔にあらわし、砦の片隅に集まり、ほかの仲間の熱意をうらやましそうに、またおどろきをもって見守った。(pp.390-392)

メヘディ・ゴリ王子の軍隊は、二、三日間砦に向かって発砲しつづけた。しかし、その銃弾のとどろきも、砦の一団の祈りと歓喜の声をしずめることはできなかった。これは、兵士にとっておどろきであった。軍は一団の無条件降伏を期待していたが、聞こえてきたのは、祈りの呼びかけとコーランの聖句の詠唱と感謝と賛美の歌声であったのである。

この一団の胸に高まる熱意をどうしても消さなければ、という強烈な思いで、指揮官のゴリ・カーンは、塔を建て、そこに大砲を置き、そこから砦の真ん中に向けて発砲するように命じた。ゴッドスは、直ちにバゲルを呼び、再度の出撃を命じた。そして、「ごう慢な新来者」である指揮官に、アッバス・ゴリにあたえたと同じ屈辱をあたえるように指示したのである。そして、こう付け加えた。「ライオンのように勇敢な神の武士は、飢えに駆られると、普通の間人ではできない武勇を示し得ることを、かれに知ってもらおう。また飢えが激しければ激しいほど、武勇の効果も偉大であることも知ってもらおう。」

そこで、バゲルはふたたび十八名の仲間に、馬に乗り自分のあとにつづくように命じた。砦の門は大きく開かれ、一団は「この時代の主なる御方よ！」と、これまで以上に激烈で、体中をつきぬけるような叫びをあげながら突進した。敵軍はこれに仰天し、パニックとなった。ゴリ・カーンと、その連隊の三十名の兵士がバゲルの率いる一団の剣に倒れた。一団は塔にのぼり、大砲を地面に投げ落とし、バリケードの多くを壊していった。あたりが暗くならなければ、残りのバリケードも破壊してしまっていたであろう。

バゲルの率いる十八名は、無傷で勝利を得、敵が残していったたくましい馬を何匹か率いて、砦にもどってきた。その後二、三日は敵の反撃はなかったが、とつぜん敵の武器倉庫の一つが爆発し、数人の砲兵隊の士官と多数の兵士が死亡した。このため、一ヵ月間攻撃を中止せざるを得なかった。この間、砦の仲間とはときどき外に出て、野

原の草を集めることができた。それは飢えをしのご唯一の道であった。馬の肉も、鞍の皮さえも空腹の仲間が食べてしまっていたのである。かれらは草を煮て、痛ましくも、それをむさぼったのである。ゴッドスは、体力がおとろえ、疲労で苦しんでいる仲間のところにひんぱんにきて、激励の言葉をかけて元気づけ、苦しみをやわらげようと努めた。(pp.394-395)

一九四九年の四月から五月にかけて、敵の砲弾が砦に向かってとびはじめた。大砲のとどろきと同時に、多くの士官を先頭に、数個隊の歩兵隊と騎兵隊が突撃してきた。その大轟音を聞いたゴッドスは、すばやく勇敢な副官バゲルに、三十六名の仲間をともなって、敵を撃退するように命じた。そして、こう述べた。

「この砦に来て以来、われわれは、いかなる状況にあっても、敵を攻撃したことは一度もない。敵が攻撃してきたので、自分の身を守るために立ち上がらざるを得なかった。もし、われわれが敵に対して聖戦をしかける野心をもち、不信心者たちを武器で征服しようと望んだのなら、われわれは、この砦に今日までとどまっていなかったであろう。われわれの武力はすでに、以前モハメッドの弟子たちがしたように、地上の国民を震撼させ、神のメッセージを受け入れる準備をさせたであろう。ところが、われわれが選んだ道はそうではないのだ。この砦に避難して以来、われわれの唯一の目的は、行動と信仰の道において生命の血を流すことにより、使命の高貴さを立証することにあつた。今や、この任務を達成する時間がすばやく近づきつつある。」

バゲルはふたたび馬に飛び乗り、自分で選んだ三十六名の仲間と共に、攻めてきた敵軍を追い払った。かれは、「この時代の主なる御方よ！」という叫びにおどろいた敵が捨てていった旗をもって砦に入ってきた。この戦いで五人の仲間が殉教した。遺体は全部砦内の運びこまれ、ほかの殉教者たちの墓地近くに五人いっしょに葬られた。

メヒディ・ゴリ王子は、一団の疲れを知らない活力を見て仰天した。そこで、参謀を集めて、経費のかかるこの戦いをすばやく終わらせる方法について相談した。三日間相談し、最上と思われる方法を編み出した。それは、数日すべての攻撃を中止し、一団が飢えで疲労し、絶望と苦しみに耐えられなくなって、砦から出て、無条件降伏をするのを待つことであつた。(p.396)

王子が、この計画が思い通りに行くのを待っているとき、国王の勅令をたずさえた使者が、テヘランから到着した。この使者は、首都テヘランの近郊、カンド村の住民であった。かれは、王子から砦に入る許可を得た。その目的は、砦内の二人、メヘディ・カンディと弟のバゲル・カンディに、危険のせまっている砦から逃げるように説得するためであった。砦の外壁に近づくと見張り人を呼び、メヘディ・カンディに、友人が会いにきたことを知らせてくれるように頼んだ。見張り人から知らせを受けたメヘディ・カンディは、ゴッドスにそのことを伝えて、友人と会う許可を得た。

わたし（著者）は、アガ・カリム（バハオラの実弟）からつぎのように聞いた。かれは、テヘランでその使者本人から聞いたことを話してくれたのである。「その使者はわたしにこう語りました。『メヘディ・カンディは砦の外壁の上に現われました。その顔はどう描写したらよいか迷うほどの断固たる決意をあらわしていました。顔つきはライオンのようにけわしく、アラブ人が着る長い白色の外衣を着て、剣をさげ、頭には白色のハンケチを巻いていた。かれはもどかしげに聞きました。＜君は何が欲しいのか？ 早く言ってくれ。わたしは師からいつ呼び出されるかわからないのだ。＞かれの目にかがやく決意を見て、わたしはとまどいました。その表情と態度に圧倒されたのです。とつぜん、ある考えが浮かんできました。それは、かれの心に眠っている情感を呼び起こすことでした。そこで、かれが村に残してきたラーマンという幼児のことを思い出させました。モラ・ホセインの旗の下に参加したときに、かれが残してきた子供であった。以前、かれはその子供に深い愛情をいだいており、歌を作って、その歌を歌いながら子供を寝かせていたのです。わたしは言いました。＜君のかわいいラーマンは、父親の愛情を欲しがっている。前のように可愛がってもらいたいのだ。一人ぼっちのかれは父親に会いたがっている。＞かれは即座に答えた。＜あの子にこう答えてくれ。真のラーマン（神）への愛、俗世のすべての愛を超えた愛で、わたしの心は満たされた。わたしの心には神への愛だけしかない。＞この言葉の強烈さに、わたしの目には涙が浮かんできました。そして、憤慨してこう叫びました。＜君と君の仲間を神の道からそれた者とみなす者にのろいあれ！＞(p.397)

わたしは、かれに聞きました。＜もしわたしが、思い切って砦の仲間に入るとしたら、君はどう思うか？＞かれはずかしくこう答えました。＜君の動機が真理を求めることであれば、よろこんで案内しよう。もし、生涯の友としてわたしを訪れるのであれば、モハメッドが不信心者であっても客を歓迎せよ、と述べられたように、君を迎え入れよう。そして、その教えにしたがい、君にゆでた草と骨の粉の食事を差し上げ

よう。それはここで最高の食事なのだ。しかし、君の目的がわたしを傷つけることであれば、今、警告しておくが、わたしは自分を守るために、君をこの外壁から地面に投げ落とすつもりだ。>

わたしは、これ以上どれほど努力しても、かれの固い決意を変えることはできないと確信しました。かれの熱意は強烈で、国中の僧侶が集まって、かれを説得したとしても、かれ一人で、その努力をくじいたにちがいありません。また、地上のすべての王さえも、かれの心にある最愛なる御方をあきらめさせることはできないと思いました。わたしは感動し、こう言いました。<君が飲み干した盃が、君の求める祝福をもたらすように願うばかりだ。>

それから、王子の伝言を伝えました。<王子はこう誓われた。砦から出る者は全員、身の安全を保障し、家までの旅費も支払うと言っておられる。>かれは、王子の伝言を仲間に伝えると約束し、こう言いました。<ほかに言いたいことがあるか。わたしは師のところは早くもどりたいたいのだ。>わたしは答えました。<君の目的達成を神が援助されるように祈る。>これに、かれは歓喜の声をあげました。<神は実際わたしを援助された。神のほかにだれが、わたしをカンドの牢獄のような暗い家から救ってくれることができたであろうか。神の援助がなければ、どうやってこの貴重な砦に来ることができたであろうか。>こう言い終わったあと、かれはわたしから目を離し、去って行きました。』

メヘディ・カンディは仲間のところへもどるとすぐ、王子の約束を伝えた。同じ日の午後、モタバリという仲間の一人が、従者をともなって砦を出て、王子のところへ直行した。翌日、バネミリとそのほか数人が、飢えの苦しみに耐えきれず、また、王子の約束を信じて、渋々仲間に別れを告げ、砦を出た。外に出るやいなや、アッバス・ゴリの命令で、即座に殺害された。(pp.398-399)

この事件後二、三日は、砦の近くに野営していた敵は、ゴッドスとその仲間への攻撃をひかえた。一八四九年五月九日、水曜日の朝、王子の使者が砦に来て、和解の取り決めをするために、砦の一団から二人の代表者を出すように要請した。そこでゴッドスは、アルデビリとレダイの二人を代表として選び、要請に応じたい旨を、王子に伝えるように命じた。王子は二人を丁重に迎え、準備していた紅茶を出した。二人は

それをことわり、こう言った。「われわれの指導者が、砦内で飢え苦しんでいるとき、ここで飲食することは不忠行為だとみなします。」王子はこう述べた。「われわれの間の敵対関係はあまりにも長くつづいた。双方ともに長い間戦い、ひどい損害を受けた。ここで、和解に達したいと念願している。」王子は、そばに置いていたコーラン書を取り上げ、最初のページの欄外に、つぎのように書き込んだ。「この最も聖なる書と、それを顕された神の正義と、その聖句によって靈感を受けた御方の使命に誓って申す。われは、われわれの間の平和と親愛の促進だけを望んでいる。これ以上の攻撃はひかえるので、安心して砦から出てくるがよい。あなた方は全員、神とその予言者であるモハメッド、そしてナセルディン国王の保護下にあるのだ。わが名誉にかけて誓うが、兵士もこの辺りの住民も、皆に害をあたえるようなことはしない。もし、われが、今述べた以外の考えをいだいておれば、全能なる復讐者である神ののろいが、われにふりかかるであろう。」(pp.399-400)

王子はこれに署名し、捺印した。そして、そのコーランをアルデビリに渡し、挨拶を添えて、その正式の文書をゴッドスに渡すように頼み、こう言った。「わが誓いにしたがって、今日の午後、多数の馬を砦の門に送らせるので、ゴッドスと仲間はそれに乗り、この軍の野营地近くのテントに来ていただきたい。皆が故里に帰れるように準備するので、それまでわが客として、そこに留まっていたいただきたいのだ。」

ゴッドスは、アルデビリからコーランを受け取り、それにうやうやしく接吻し、こう言った。「おお、わが主よ。われわれとこのわれわれの一族との間を真実もお裁き下さい。あなたこそ、最上の判決者でありたまう。」(コーラン)そしてすぐ、仲間に砦を離れる準備をするように命じた。「かれらの招待に応じれば、かれらの意図が誠実なものであるかどうかはわかるのだ。」

出発の時間がせまったとき、ゴッドスは、バブから送られたみどり色のターバンをつけた。ちなみに、バブは、同じようなターバンを同時にモラ・ホセイにも送っており、かれはそれをつけて殉教している。さて、皆、砦の門まで出てきて、準備された馬に乗った。ゴッドスは王子の愛馬に乗った。ゴッドスの後に、主な仲間が馬ののって従った。その後に、残りの仲間が、持ち合わせの武器や所有物をもって徒歩でつづいた。合計二百二人の一団は、ゴッドスのために準備されたテントに到着した。それは、ディズバ村の公衆浴場の近くで、敵の陣地を見下ろせるところにあった。一団は馬から降り、ゴッドスのテントの近くに泊まることになった。(p.400)

到着してすぐ、ゴッドスはテントから出て、仲間を集め、つぎのように述べた。「皆、模範となるような超脱心を示さなければならない。その立派な態度は、われわれの大業を高揚し、その榮譽を高めるであろう。世俗への愛着を完全に断たなければ、大業の清らかな名を汚し、その光輝をくもらせることになる。最後の時間まで、皆が神の信教を高めることができるように、全能なる神の援助を祈ろう。」

日没後二、三時間して、王子の陣地から夕食がはこばれてきた。食べ物は三十人分づつ別々の盆に入れられていたが、貧弱で不十分であった。そのときゴッドスといっしょにいた者が、後日、つぎのように語った。「仲間のうち九名が夕食を共にするために、ゴッドスのテントに呼ばれました。しかし、ゴッドスは食べ物に口をつけようとされませんでしたので、われわれも食べませんでした。そこにいた給仕人たちは、われわれが手をつけなかった夕食を、感謝しながらよろこんでむさぼるように食べました。」テントの外で夕食を取っていた仲間の何人かは、給仕人に、いくらでも払うのに、どうしてパンを譲ってくれないのか、と抗議していた。ゴッドスはその態度を強くいましめた。バゲルの執り成しがなかったならば、かれらは、ゴッドスの勧告を完全に無視したことに対して、重い罰を受けたであろう。(pp.401-402)

夜明けに使者がきて、バゲルに王子の面前に出るように要請した。ゴッドスの許可を得て、その呼び出しに応じた。一時間後にもどってきたバゲルは、王子がソレイマン・カーンの前でした誓いをくり返したことをゴッドスに告げ、こう述べた。「王子は『わが誓いは絶対変わることはなく、神聖なものである。』と言ってわたしを安心させようと思いました。王子は、ゴリ・カーンが、サラールの暴動の際、国王軍の兵士を何千人も殺害にもかかわらず、モハメッド国王から赦免されたところか、榮譽まで付与されたことに言及しました。明朝、王子は公衆浴場まであなたに同行し、帰りにあなたのテントまで送る予定です。その後、王子は馬を準備して、仲間全員をサング・サールに移動させ、そこで解散させて、めいめい自由にイラクの故郷にもどらせるか、コラサンに行かせる計画でした。ところが、ソレイマン・カーンが、サング・サールは要塞地で、そこに大勢の一団が集まれば危険だと警告したため、王子はフィルズ・クーで皆を解散させることに決めました。わたしは、王子の言葉と内心は違うと感じています。」

ゴッドスはこの意見に同意し、仲間全員にその夜、分散するように命じた。そして、

自分はすぐバルフォールシュに向かうことを知らせた。かれらは、ゴッドスに「われわれから離れないで下さい」とこん願したが、かれは、今後どんな苦難がふりかかっても、かならず再会できるので、落ち着いて忍耐するように忠告した。そして、最後の言葉をつぎのように残した。「この別離後の再会は、永遠につづくものなので、嘆かないように。われわれは、この大業を神の保護に任せた。神の御心が何であれ、われわれはよろこんで従うのだ。」(p.402)

王子は約束を守らなかった。ゴッドスのテントに来る代わりに、かれと仲間何人かに、隊長のテントに行くように命じた。そして、正午に自分のところに呼ぶと知らせた。まもなくして、王子の従者数人が、仲間のところに行き、「ゴッドスは軍本部におり、皆に会いに来てよいと言っている。」とうそをついた。この知らせに、数人がだまされて軍本部に向かい、捕虜となり、最後には奴隷として売られた。これらの不運な犠牲者たちは、シェイキ・タバルシの砦の仲間生き残った者らとなった。かれらは勇敢な戦いを生き延び、その苦難と試練の悲痛な体験を国民に伝えるために助命されたのであった。

その直後、王子の兵士たちは、アルデビリに圧力をかけて、残りの仲間に、「ゴッドスが、武器をすぐ放棄せよと命じている。」と言わせようとした。そのとき、アルデビリは軍本部からかなり離れたところに連行されていた。かれらはアルデビリに聞いた。「お前が仲間に伝えるべきことを言ってみろ。」かれは大胆にこう答えた。「おまえたちが、指導者に代わって伝えることは、すべて真っ赤なうそである、とかれらに警告するつもりである。」この言葉を言い終わらないうちに、アルデビリは無情にも殺害された。

この残忍行為のあと、兵士たちは砦に行き、物品を略奪し、建物を爆破して完全に破壊した。そのあと、残りの仲間を取り巻き、かれらに向かって発砲した。砲弾が当たらなかった者は、剣や槍で殺害された。死の苦悶の間も、これらの不屈の英雄たちは、つぎの句をととなえつづけた。「主なるわれらの神、天使と聖霊の主は、まことに聖なるものなり！」この言葉は、歓喜に満たされているとき、かれらの口からもれたものであったが、今、生涯の最後をかざる時間に、同じ熱意でくり返えされたのである。(pp.403-404)

この虐殺のあとすぐ、王子は、捕虜を一人ずつ自分の面前に連れてくるように命じた。その中で、社会的地位の高い者ら、すなわち、バディの父親とフォルギとナシレ・ガズビニをテヘランに連行し、それぞれの能力と富に比例して身の代金を取ってくるように従者に命じた。そのほかの者らには即刻、処刑を命じた。かれらは剣で切断されたり、裂かれたり、木にしばられたまま射殺されたりした。大砲の口から吹き飛ばされ、焼き殺された者もいた。(p.404)

この恐ろしい虐殺につづいてすぐ、サング・サール出身のゴッドスの仲間三人が王子の前に連れ出された。一人はセイエド・アーマドで、父親のミル・モハメッド・アリは、シェイキ・アーマドの熱心な賞賛者で、深い学識と高い功績のある人であった。バブの宣言の前年に、かれは二人の息子、セイエド・アーマドとその弟アブル・カゼムを師カゼムに紹介するために、カルベラに向かった。ちなみに、弟のアブル・カゼムは、モラ・ホセインが殉教した夜に命を落としている。カルベラに着く前に、師カゼムはこの世を去っていた。そこで、すぐナジャフに行った。その町で、ある夜、予言者モハメッドが夢にあらわれ、忠実なる者の司令官であるエمام・アリに、つぎのように命じた。「ミル・モハメッド・アリにこう告げよ。『あなたの死後、二人の息子は約束されたガエム（バブ）の面前に出ることができ、二人ともその道において殉教するであろう。』」目を覚ますとすぐ、息子のセイエド・アーマドを呼んで自分の最後の望みを伝えた。その夢から七日してかれはこの世を去った。(p.405)

サング・サール村に、カルベラエ・アリとカルベラエ・アブという敬虔で洞察力をそなえた二人の男が住んでいた。二人は約束された啓示の出現が近づいていると感じ、人びとがそれを受け入れる準備ができるように努力していた。一八四七年に、二人はつぎのことを公表した。「年内に、セイエド・アリという名の男が、黒旗をかかげ、多数の選ばれた仲間を率いて、コラサンから出てマザンデランに向かう。そこで、忠実なイスラム教徒はすべて立ち上がり、最大限の援助をすべきである。かれがかかげる旗は、まさしく約束されたガエムの旗である。旗をひるがえす者は、ガエムの大業の主なる推進者である。その人に従う者は救われ、背を向ける者は墮落するであろう。」カルベラエ・アブは、二人の息子、アブル・カゼムとモハメッド・アリに、新しい啓示の勝利のために立ち上がり、その目的のために物質的な利益をすべて犠牲にするように励ました。カルベラエ・アリとカルベラエ・アブは兩人とも同じ年の春にこの世を去った。

この息子二人が、セイエド・アーマドと共に、王子の面前に連れ出された仲間であった。学識と信頼のある政府の顧問の一人、アベディンは、かれらのことを王子に説明し、また、かれらの父親たちが、どのような活動をしていたかも知らせた。王子はセイエド・アーマドに聞いた。「何の理由から、おまえは自分と親族の名誉を、あさましくも傷つけるような道を選んだのか。この国とイラクにいる多数の学識ある著名な僧侶たちの教えで満足できなかったのか。」セイエド・アーマドは大胆に答えた。「わたしは、この大業を人のまねをして信じているのではありません。その教えを冷静に調べて、真理であると確信したからです。ナジャフで、名高い高僧モハメッド・ハサンに、イスラム教の土台である第二次的な原理に関する教えを、解釈してくれるように要請しましたが、かれはそれに応じてくれませんでした。重ねて頼んだところ、かれは怒ってわたしを叱るだけでした。このような経験をしたわたしが、どれほど高名であっても、簡単であたりまえの質問にも答えずに、かえって、質問したわたしに腹を立てるような僧侶から、イスラム教の難解な教えについて解明を求めることができましようか。」

そこで王子は聞いた「ハジ・モハメッド・アリをどのように思っているのか？」セイエド・アーマドはこう答えた。「モラ・ホセインは、モハメッドが、『コラサン地方から黒色の旗が出ていくのを見たならば、雪の上を這ってでも、その旗のもとにいそげ』と予言した旗をかかげる人です。この理由から、われわれは世俗をすて、この旗のもとに集まったのです。この旗はわれわれの信教の象徴にすぎません。恩恵を施してくださるのならば、死刑執行人に命じて、この命を終わらせ、不滅の仲間の一団に加わらせて下さい。この世のいかなるものにも魅了されることはなくなりました。この世を去り、神のもとにもどることだけを切望しています。」王子は、セイエド・アーマドの処刑は気が進まなかったので、命令を出さなかった。しかし、共に出頭した二人の仲間は即座に処刑された。セイエド・アーマドと弟のセイエド・アブタレブは、アベディン（政府の顧問）に渡され、サング・サールに連行された。(pp.406-7)

一方、モハメッド・タギは、サリのイスラム学者七名と共に村を出て、ゴッドスの仲間を死刑にすることがいかに称賛に値する行為であるかを知らせることにした。ところが、かれらはすでに殺害されていたのが判明した。そこで、モハメッド・タギは、王子にセイエド・アーマドをすぐ処刑するように主張した。かれがサリに来れば、あらたな暴動がはじまり、それは以前よりももっとひどいものになるにちがいないと説得につとめた。そのうち王子もそれに同意したが、サリに到着するまでは客人として

扱い、また、かれが近隣の平安を乱さないように見守るという条件をつけた。

モハメッド・タギは、サリに向かいはじめるとすぐ、セイエド・アーマドと父親を中傷しはじめた。セイエド・アーマドはこん願した。「なぜあなたは、王子があなたに委任した客人を虐待されるのですか。『異教徒であっても客人を礼遇せよ』というモハメッドの命令をなぜ無視なさるのですか。」モハメッド・タギは怒りを爆発させ、七名の仲間と共に、剣を抜いてセイエド・アーマドの身体をめったぎりにした。かれは「この時代の主」の援助を祈りながら息を引き取った。かれの弟セイエド・アブタレブは、アベディンに連行されてサング・サールに無事到着した。そして、今日にいたるまで、マザンデラン州に、弟モハメッド・レザといっしょに住み、兩人共に、大業に熱心に奉仕している。(pp.407-8)

一方、王子は、僧侶たち集めて、そこにゴッドスを連れてくるように命じた。砦を放棄して以来、ゴッドスは執行官に保護されていたが、王子に召されたことはなかった。ゴッドスが現われるとすぐ、王子は立ち上がり、自分のそばに座るように招いた。そして、サイドル・オラマー（凶悪な高僧）に向かい、ゴッドスとの討論を冷静かつ良心的に進めるように強調した。「討論は、コーランの聖句とモハメッドの伝承に基づいたものでなければならない。そうでなければ、あなたの論点の真偽が明らかにされないからだ。」

サイドル・オラマーは無作法に聞いた。「お前はどんな理由があって、予言者モハメッドの子孫だけに許されている緑色のターバンを、自分のものとして頭につけているのか。この神聖な伝統をあなたなどの者は、神にのろわれることを知らないのか。」ゴッドスは静かに応じた。「著名な僧侶が皆称賛し尊敬しているセイエド・モルタダは、予言者モハメッドの子孫ですが、それは、父方を通してですか、それとも母方を通してなのですか？」その場にいた一人が、母方だ、と即座に答えた。ゴッドスは言った。「ではどうしてわたしに反対なさるのですか。わたしの母は、エマム・ハサンの直系子孫であることが、この町の住民に認められています。この家系により、母親は皆さんに大いに尊敬されてきたのではないのですか。」(pp.409-410)

これに反対するものはいなかった。サイドル・オラマーは激怒と絶望から自分のターバンを地面に投げつけ、集会の場を去ろうと立ち上がった。そして、大声でどなっ

た。「この男はエマム・ハサンの子孫であることを証明した。そのうち、かれは神の代弁者で、その意志の啓示者であると主張するにちがいない。」そこで、王子は宣言した。

「今後、この男に加えられる危害の責任はもたない。思うようにかれを取り扱ってよい。しかし、審判の日に神に対して責任を取るのはお前たち自身だ。」こう述べたあとすぐ、馬を連れてこさせ、従者たちと共にサリに向かった。王子は、僧侶たちののろいにおどされ、また、自分の誓いも忘れて、あさましくもゴッドスを無慈悲な敵の手に渡したのであった。復讐心と憎悪で、えじきを襲う瞬間をねらっていた狼のような敵に渡したのである。(p.410)

王子が手を引いて、けん制する者がいなくなったとたん、僧侶たちとバルフォルージュの住民は、サイドル・オラマーの命令のもと、えじきとなったゴッドスの身体に飛びかかった。その残虐行為は、言語に絶するものであった。バハオラの証言によると、この雄々しい若者ゴッドスは、最後の息を引き取るまで、残忍な拷問を受けたが、それは、イエスが死に直面して受けた極度の苦しみを超えたものであった。

ゴッドスの殉教には残忍きわまる行動が見られたが、それは、政府当局から何のけん制もなかったこと、バルフォルージュの拷問屋たちの残虐行為、シーア派の住民たちの胸に燃え立つ狂信、首都テヘランの宗教面、政治面の指導者たちから受けた精神的支援、そして、何よりも、被害者のゴッドスと仲間たちの英雄行為に対するはげしい怒りなどが原因であった。

この悲痛なできごとに、チェリグの砦に監禁されていたバブは、六ヵ月間、書くことも口述することもできなかった。深い悲しみから、バブは啓示の声を出すことも、ペンを動かすこともできなかったのである。かれは、ゴッドスの死をどれほど深く悼んだことであろうか。シェイキ・タバルシでの包囲攻撃、言い表せないほどの苦難、敵の破廉恥な裏切り行為、仲間たちの大量無差別虐殺のニュースに、バブはどれほどの苦悶の叫びをあげたことであろうか。自分の愛するゴッドスが、バルフォルージュの住民から受けた恥ずべき取り扱いに、どれほどの悲痛さを感じたことであろうか。ゴッドスは衣服をはがれ、バブがあたえたターバンは汚され、素足で、頭には何もつけず、重いくさりをかけられて街路を歩かされた。そのあとを全町民があざけりながら追った。群衆はわめき合い、かれをののしり、つばを吐きかけた。町のくずのような女たちは、ナイフや斧でかれに襲いかかり、身体を刺し、手足を切断し、最後には火炎に投げ入れたのである。(pp.410-411)

ゴッドスは、苦悶の中で、神が敵を許されるように祈った。「おお神よ。この人たちの罪を許したまえ。慈悲をもって対処したまえ。かれらは、われわれが探し出した貴い信仰を知らないからです。かれらに救済への道を示そうと努力してきましたが、ごらん下さい。かれらはわたしを苦しめ、殺そうとしています。おお神よ。かれらに真理への道を示し、かれらの無知を信仰に変えたまえ。」

ゴッドスが苦しんでいる最中に、砦を放棄した裏切り者のセイエド・ゴミが通りかかった。かれは、ゴッドスの無力さを見て、顔をなぐり、ごうまんな態度でさげすみ、叫ぶように言った。「お前は、自分の声を神の声だと主張した。それが真実であれば、くさりを引きちぎって、敵から自由になれ。」ゴッドスは、かれの顔をじっと見、深くため息をついて述べた。「神があなたの行為に報いられるように願う。あなたは、わたしの苦しみに一層の苦しみを加えたからである。」

サブゼ・マイダン（殉教の場所）に近づいたとき、ゴッドスは声をあげて言った。「母上がここにおられれば、わたしの壮麗な結婚式を見ることができられたであろう。」この言葉が終わるか終わらないうちに、激怒した群衆がかれに襲いかかり、身体を引き裂き、前もって準備していた火炎の中に投げ込んだ。真夜中に、忠実な仲間の手で、焼け焦げた身体の断片が集められ、その近くに埋葬された。

ここで、シェイキ・タバルシ砦の防御に参加した殉教者の名前を記録しておきたいと思う。未来の世代が、これらの先駆者たちの名前と行動を、誇りと感謝の念をもって思い起こすことができるように。かれらは、生命をかけて、神の永遠なる信教の歴史をかざったのである。これらの名前は、さまざまな資料から集めたもので、とくに、ミム、ジャバド、アサドの三人の方々に負うところが大きい。かれらの魂が来世で、不朽の榮譽でかがやいているように、かれらの名前も、未永く人びとの口からもれつづけると信じている。また、かれらについて語ることによって、この貴重な伝統を受け継いだ人びとの心に、同じような熱意と献身の精神を呼び起こすであろうと確信しているのである。情報を提供してくれた人びとから、あの忘れがたい攻囲攻撃中に命を落とした仲間たちの大半の名前を集めることができた。同時に、一八四四年から現在、すなわち一八八八年十二月までに、神の大業の道に命をささげた殉教者たちのリストも入手することができた。もちろん、これは完全なリストではない。各人の名前は、その人が関わった事件とともに述べるつもりである。タバルシ砦の防御中に殉教

の杯を飲み干した人たちの名前は、つぎに述べるとおりである。(pp.413-414)

一．最初に述べるべきもっとも重要な人は、ゴッドスである。バブはかれに「神の最後の名」という称号をあたえた。かれは、生ける者の文字と呼ばれるバブの弟子のうち最後の人で、メッカとメジナの巡礼に、バブの同伴者として選ばれた人である。そして、サディクとアリ・アクバーと共に、神の大業のために、ペルシャで最初に迫害を受けた人でもある。ゴッドスは、十八才のとき、故郷のバルフォルージュを離れてカルベラの町に行き、約四年間、師カゼムに学んだ。二十二才のとき、シラズで、最愛の御方（バブ）に会い、その地位を認めた。五年後、一八四九年五月十六日、バルフォルージュのサブゼ・マイダンで、敵の残忍きわまる野蛮行為の犠牲となった。バブとバハオラは、多くの書簡と祈りの中で、ゴッドスの死を悼み、賛辞を惜しまなかった。バハオラは大いなる栄誉をゴッドスにあたえ、バグダッドで著したコーランの一節に関する評釈の中で、かれに、だれも匹敵できない地位をあたえた。それは、バブのつぎにくる地位である。(p.415)

二．モラ・ホセインは、新しい啓示を認め、受け入れた最初の人である。バブからバボル・バブ（門の門）という称号をあたえられた。かれもまた、十八才のとき、故郷のコラサン州のボッシュルエイからカルベラに出てきた。そして、九年間、師カゼムと親密に交わった。バブの宣言の四年前、イスファハンの学識のある高僧バゲルとマシュハドの高僧アスカリに、師カゼムから委任されたメッセージを、威厳をもって堂々と伝えた。モラ・ホセインの殉教は、バブに深い悲しみをもたらした。その悲しみを故人への賛辞と祈りの中で表現したものは、膨大な数にのぼり、コーランの三倍ほどになった。バブは、参拝の書の中で、モラ・ホセインの遺体が葬られている地面の土は、悲しみにある人をよろこばせ、病んでいる人をいやす力をもっていると述べている。バハオラは、ケタベ・イガン（確信の書）の中で、バブ以上に、モラ・ホセインの美德をほめたたえている。「モラ・ホセインがいなかったならば、神は、慈悲の座にも、永遠の栄光の王座にもつかれることはなかったであろう」と。

三．ミルザ・モハメッド・ハサン。モラ・ホセインの弟。

四．ミルザ・モハメッド・バゲル。モラ・ホセインの甥。モラ・ホセインの弟と共に、ボッシュルエイからカルベラに、さらにそこからシラズまで、モラ・ホセインに同行した。シラズで、二人ともバブの弟子となり、生ける者の文字となった。マーク一の砦への旅以外は、兩人とも、モラ・ホセインに同伴し、ついにタバルシの砦で殉教した。

五．モラ・ホセインの義弟。アブル・ハサンとモハメッド・フセインの父親。息子

二人は、現在ボッシュルエイに在住し、モラ・ホセインの妹の世話にあたっている。二人とも献身的な信者である。

六．モハメッド・フォルギの兄であるモラ・アーマドの息子。この人は、伯父フォルギと違って殉教した。かれはひじょうに敬虔で、深い学識をそなえた高潔な若者であると、フォルギは証言している。(pp.415-1416)

七．ミルザ・モハメッド・バゲル。かれは、ガイエンの出身であるが、ハラティという名で知られている。また、ナビル・アクバールの父親の近親で、マシュハドで最初に大業を受け入れた人である。マシュハドでバビの家を建て、その町を訪れたゴッドスに献身的に仕えた。モラ・ホセインが、黒旗をかかげたとき、かれは子供であった息子を連れて、その旗の下に集結した一団に加わり、マザンデランに行った。息子の命は助かり、現在大人になって、マシュハドで熱心に大業のために活動している。バゲルは、その一団の主導者となり、砦とその外壁と小塔、および、まわりの濠を設計した。モラ・ホセインの殉教後、仲間を組織して、先頭に立ち、敵に向かって進撃した。かれは、大業の道で殉教するまで、ゴッドスの懇親の仲間であり、代理であり、信頼された顧問であった。

八．ミルザ・モハメッド・タギ・ジョヴァイニ。サブゼヒヴァール出身。すぐれた文筆家で、モラ・ホセインから、たびたび敵への進撃を先導するように頼まれた。敵は、かれの頭と仲間のバゲルの頭を槍に突き刺して、興奮した群衆が叫びわめくバルフォルージュ町の道路をねり歩いた。

九．ガンバル・アリ。モラ・ホセインの恐れを知らない忠実な従者。かれは、モラ・ホセインのマーカーへの旅に同行した。モラ・ホセインが敵の弾丸に倒れた日の夜に、かれもまた、殉教した。

十．ハサンおよび

十一．ゴリ。この二人は、ザンジャン出身のエスカンダールとともに、倒れたモラ・ホセインを、砦のゴッドスの下に運んだ。ハサンはマシュハドの警察署長の命令で、はずなをつけられて、町の道路を引っ張りまわされた。

十二．モハメッド・ハサン。モラ・サディクの子。バルフォルージュとタバルシの間で、コスロー（悪党）の仲間殺害された。かれは、不動の信仰で知られ、また、エマム・レザの廟の管理人でもあった。(pp.417-418)

十三．セイエド・レザ。かれは、アルデビリとともに、ゴッドスに頼まれて、王子に会いに行き、王子が宣誓の言葉を書き入れたコーランをもつてもどってきた。かれは、コラスンのセイエド（モハメッドの子孫）の一人で、学識とすぐれた人格で知ら

れていた。

十四．モラ・マルダン・アリ。コラサン出身の仲間の一人。強固な砦のあるミヤマイ村の住民。モラ・ホセインがこの村に着いた日に、三十三人の仲間とともに、モラ・ホセインの一団に加わった。モラ・ホセインは、金曜日の会衆の祈りをささげるために、その村のモスクに行き、そこで演説し、人びとの心に深く訴えた。かれは、コラサンでかかげられる黒旗の伝承が実現したことを強調し、自分がその旗をかかげる者であると宣言したのである。この雄弁な演説を聞いて深い感動をおぼえた者の大半は、その日のうちに、モラ・ホセインに従うために立ちあがった。三十三人のほとんどが著名人で、そのうち、モラ・イサという人だけが生き残った。かれの息子たちは現在ミヤマイ村で、大業のために大いに活動している。この村の出身者で殉教した人たちはつぎに示すとおりである。

十五．モラ・モハメッド・メヒディ

十六．モラ・モハメッド・ジャファル

十七．モラ・モハメッド・エブネ・モラ・モハメッド

十八．モラ・ラヒム

十九．モラ・モハメッド・レザ

二十．モラ・モハメッド・ホセイン

二一．モラ・モハメッド

二二．モラ・ユソフ

二三．モラ・ヤグブ

二四．モラ・アリ

二五．モラ・ザイノル・アベディン

二六．モラ・ザイノル・アベディンの息子のモラ・モハメッド、

二七．モラ・バゲル

二八．モラ・アブドル・モハメッド

二九．モラ・アボル・ハサン

三十．モラ・エスマイル

三一．モラ・アブドル・アリ

三二．モラ・アガ・ババ

- 三三． モラ・アブドル。ジャバド
- 三四． モラ・モハメッド・ホセイン
- 三五． モラ・モハメッド・バゲル
- 三六． モラ・モハメッド
- 三七． ハジ・ハサン
- 三八． カルベラ・アリ
- 三九． モラ・カルベラ・アリ
- 四十． カルベラ・ヌール・モハメッド
- 四一． モハメッド・エブラヒム
- 四二． モハメッド・サエム
- 四三． モハメッド・ハディ
- 四四． セイエド・メヘディ
- 四五． アブ・モハメッド

サング・サール村出身の仲間のうち、十八人が殉教した。殉教者の名前はつぎのとおりである。

四六． セイエド・アーマド。かれの身体は、ミルザ・モハメッド・タギとサリの七名の僧侶たちによりばらばらに切断された。かれは高名な聖職者で、人びとは、かれの雄弁と敬虔を大いに尊敬していた。

四七． ミル・アボル・ガセム。セイエド・アーマドの弟。モラ・ホセインが殉教した夜に、殉教の冠を勝ち得た。

四八． ミル・メヘディ

四九． ミル・エブラヒム

五十． サファール・アリ。カルベラ・アリの息子。かれは、カルベラ・モハメッドとともに、サング・サール村の住民が眠りから覚めるように、最善をつくした。この二人は、病弱のため、タバルシの砦に行くことができなかった。

五一． モハメッド・アリ。カルベラ・アブ・モハメッドの息子。

五二． アボル・カセム。モハメッド・アリの弟。

- 五四. アリ・アーマド
- 五五. モラ・アリ・アクバー
- 五六. モラ・ホセイン・アリ
- 五七. アッバス・アリ
- 五八. ホセイン・アリ
- 五九. モラ・アリ・アスガー
- 六十. カルベラ・エスマイル
- 六一. アリ・カーン
- 六二. モハメッド・エブラヒム
- 六三. アブドル・アジム。

シャー・ミルザド村からつぎの二人が砦の防御中に殉教した。

- 六四. モラ・アブ・ラヒムと
- 六五. カルベラ・カゼム

マザンデラン州の信者たちのうち、二十七名が殉教したことが記録されている。

- 六六. モラ・レダイ・シャー
- 六七. アジム
- 六八. カルベラ・モハメッド・ジャフアー
- 六九. セイエド・ホセイン
- 七十. モハメッド・バゲル
- 七一. セイエド・ラザッグ
- 七二. オスタッド・エブラヒム
- 七三. モラ・サイド・ゼレー・ケナリ
- 七四. レダイ・アラブ
- 七五. ラスル・バハネミリ
- 七六. モハメッド・ホセイン。ラスル・バネミリの弟

- 七七. タヘル
- 七八. シャフィ
- 七九. ガゼム
- 八十. モラ・モハメッド・ジャン
- 八一. マシイ。モラ・モハメッド・ジャンの弟
- 八二. エタ・ババ
- 八三. ユソフ
- 八四. ファドロラ
- 八五. ババ
- 八六. サフィ・ゴリ
- 八七. ネザム
- 八八. ルホラ
- 八九. アリ・ゴリ
- 九十. ソルタン
- 九一. ジャファル
- 九二. カリル

サヴァド・クヒの信者たちのうち、つぎの五名が確認されている。

- 九三. カルベラ・ガンバル・カレシュ
- 九四. モラ・ナッド・アリ・モタヴァリ
- 九五. アブドル・ハグ
- 九六. イタバキ・チュウパン
- 九七. イタバキ・チュウパンの息子

アルデスタン町出身の殉教者はつぎのとおりである。

- 九八. ミルザ・アリ・モハメッド。ミルザ・モハメッド・サイドの息子
- 九九. ミルザ・アブド・ヴァセ。ハジ・アブドル・ヴァハブの息子

- 一〇〇. モハメッド・ホセイン。ハジ・モハメッド・サデグの息子
- 一〇一. モハメッド・メヒディ。ハジ・モハメッド・エブラヘムの息子
- 一〇二. ミルザ・アーマド。モヒセンの息子
- 一〇三. ミルザ・モハメッド。ミル・モハメッド・タギの息子

エスファハン市出身のうち、これまでに三十人が記録されている。

一〇四. モラ・ジャファー。麦のふるい手。バブが「ペルシャ語のバヤン書」の中で述べている人。

一〇五. オスタッド・アガ。称号はボゾルグ・バンナ

一〇六. オスタッド・ハサン。オスタッド・アガの息子

一〇七. オスタッド・モハメッド。オスタッド・アガの息子

一〇八. モハメッド・ホセイン。オスタッド・アガの息子。末弟のオスタッド・ジャファーは、敵の手で数回売られ、最後に故郷にもどり、現在そこに住んでいる。

一〇九. オスタッド・ゴルバン・アリ・バンナ

一一一. アブドラ。オスタッド・ゴルバン・アリ・バンナの息子

一一二. モハメッド・バギル・ナグシュ。セイエド・ヤーヤの叔父でミルザ・モハメッド・アリ・ナリの息子。モラ・ホセインが死亡した夜に、十四才で殉教。

一一三. モラ・モハメッド・タギ

一一四. モラ・モハメッド・レザ。二人とも、アッカのレズワン庭園の庭師であった故アブドス・サレの兄弟。

一一五. モラ・アーマド・サファール(p.421)

一一六. モラ・ホセイン・メスカール

一一七. アーマド・パイヴァンディ

一一八. ハサン・シャール・バフ・ヤズディ

一一九. モハメッド・タギ

一二〇. モハメッド・アタール。ハサン・シャール・バフの弟

一二一. モラ・アブドル・カレグ。バダシュトでのどを切った人で、タヘレはからザビーという名をあたえられた。

一二二．ホセイン

一二三．アボル・ガセム。ホセインの弟

一二四．ミルザ・モハメッド・レザ

一二五．モラ・ハイダー。ミルザ・モハメッド・レザの弟

一二六．ミルザ・メヘディ

一二七．モハメッド・エブラヒム

一二八．モハメッド・ホセイン。称号はダストマル・ゲレ・ザン

一二九．モハメッド・ハサン・チット・サズ。バブに会ったことのある有名な織物業者

一三〇．モハメッド・ホセイン・アタール

一三一．オスタッド・ハジ・モハメッド・バンナ

一三二．マムード・モガレ。有名な織物商人。結婚直後チェリグの砦でバブに会った。バブはかれに、ジャジレ・カドラに行き、ゴッドスを援助するようにすすめた。テヘランで、弟から、息子の誕生を知らせる手紙を受け取った。その中で、弟は、かれにぜひエスファハンに行ってその子に会い、その後自由に行動するようにとこん願した。かれはこう返事した。「おれは、この大業に対する愛で燃え上がっているのです、息子に心を向けることはできない。ゴッドスのところにすぐ行き、その旗の下に加わりたいのだ。」

一三三．セイエド・モハメッド・レダイ・パ・ゴレイ。著名なセイエドで、深く尊敬を受けている聖職者。モラ・ホセインの一団に加わる宣言をしたことで、エスファハンのイスラム法学者たちの間に大混乱を起こした。

シラズの信者たちのうち、殉教の栄冠を勝ち得たのはつぎの人たちである。

一三四．モラ・アブドラ。ミルザ・サレの名でも知られている。

一三五．モラ・ザイノル・アベディン

一三六．ミルザ・モハメッド(p.422)

ヤズドの信者たちのうち、つぎの四人が記録されている。

一三七．コラサンからバルフォルーシュまでの道のりを歩き、そこで敵の弾丸に倒

れた人。

一三八．セイエド・アーマド。バブの秘書セイエド・ホサイン・アジズの父。

一三九．ミルザ・モハメッド・アリ。セイエド・アーマドの息子。砦の入り口に立っていたとき、大砲の砲丸で頭を撃ちぬかれた。ゴッドスは、この少年を深く愛し、ほめたたえていた。

十四〇．シェイキ・アリ。シェイキ・アブドル・カレグ・ヤズディの息子。マシュハドの住民。モラ・ホセインとゴッドスは、この若者の熱意と疲れを知らないエネルギーを大いにほめたたえた。

ガズビンの信者たちのうち、殉教した人たちはつぎのとおりである。

一四一．ミルザ・モハメッド・アリ。有名な聖職者で、かれの父ハジ・モラ・アブドル・ヴァハブは、ガズヴィンの著名な高僧の一人であった。かれは、シラズでバブと会い、生ける者の文字の一人となった。

一四二．モハメッド・ハディ。ハジ・アブドル・カリムの息子。名高い商人で、称号はバゲバン・バシ

一四三．セイエド・アーマド

一四四．ミルザ・アブドル・ジャリル。有名な聖職者

一四五．ミルザ・メヘディ

一四六．ハジ・モハメッド・アリ。ラハルド村出身。ガズビンでモラ・タギ（タヘレの義父）が殺害された結果、ひじょうな苦しみにあった。

コイの信者のうち、つぎの人たちが殉教した。

一四七．モラ・メヘディ。著名な聖職者。かれは、セイエド・カゼム弟子で大いに尊敬されていた一人であった。かれはまた、学識と雄弁と堅い信仰で知られていた。

一四八．モラ・マムード・コイ。モラ・メヘディの弟。生ける者の文字の一人で、著名な聖職者であった。

一四九．モラ・ユソフ・アルデビリ。生ける者の文字の一人で、学識と熱意と雄弁で有名。ケルマンで、ハジ・カリム・カーンの不安をかきたて、敵たちの心に恐怖をもたらしたのはかれであった。ハジ・カリム・カーンは、集会で、つぎのように語った。「この男は、この町から追放されなければならない。かれが、ここに居つづければ、

シラズですでにやったように、ケルマンでも同じような騒動をかならず起こすにちがいないからだ。かれがもたらす害は、修復できないであろう。かれの魔術的な雄弁と強力な個性は、モラ・ホセインの力に劣るものではない。」こうして、かれのケルマン滞在は短縮され、説教壇から住民に講演することもできなくなった。バブは、かれにつぎの指示をあたえた。「ペルシャ中の町や都市を訪れ、住民を神の大業に召喚せよ。一八四八年十一月二十七日に、マザンデランに行き、全力でゴッドスを援助せよ。」モラ・ユソフは、師の指示に忠実にしたが、訪れた先々の町や都市で一週間以上留まることはなかった。マザンデランに到着直後、メヒディ・ゴリ・ミルザ王子の軍に捕われた。王子は、かれの身元をすぐ認め、監禁を命じた。その後かれは、ヴァス・カスの戦いの日、モラ・ホセインの仲間に助けられた。

一五〇．モラ・ジャリル・オルミ。生ける者の文字の一人。学識と雄弁と堅い信仰で知られている。

一五一．モラ・アーマド。マラゲの住民で、生ける者の文字の一人。セイエド・カゼムのすぐれた弟子。

一五二．モラ・メヒディ・カンディ。バハオラの側近で、バハオラの家族の子供たちの家庭教師。

一五三．モラ・バゲル。モラ・メヘディの弟。二人とも学識が深く、バハオラは、この二人の業績をケタベ・イガン（確信の書）の中で述べている。

一五四．セイエド・カゼム。ザンジャンの住民で名高い商人。シラズでバブに会い、エスファハンまでバブに同伴した。かれの弟セイエド・モルタダは、テヘランの七人の殉教者の一人である。

一五五．エスカンダール。ザンジャンの住民で、名を知られた商人。ハサンとゴリとともに、瀕死のモラ・ホセインを砦に運んだ。

一五六．エスマイル

一五七．カルベラ・アブドル・アリ

一五八．アブドル・モハメッド

一五九．ハジ・アッバス

一六〇．セイエド・アーマド。以上はすべてザンジャンの住民

一六一．セイエド・ホセイン・コラ・ドウズ。バルフォルージュの住民。敵は、かれの頭をやりで突き刺し、街路をねり歩いた。

一六二．モラ・ハサン・ラシュティ

一六三．モラ・ハサン・バヤジマンディ

一六四．モラ・ネマトラ・バルフォルーシュ

一六五．モラ・モハメッド・タギ・ガラキリ

一六六．オスタッド・ザイノル・アベディン

一六七．オスタッド・ガセム。オスタッド・ザイノル・アベディンの息子

一六八．オスタッド・アリ・アクバー。オスタッド・ザイノル・アベディンの弟。上述の三人は石工であった。ケルマン出身であったが、コラサン州のガーインに住んでいた。

一六九と一七〇．モラ・レダイ・シャーとバーネミル出身の若者。この二人は、バルフォルーシュのパンジ・シャンベール・バザールの砦からゴッドスが離れた二日後、殺害された。通称シャリアット・マダールという人が、二人の遺体を、モスクの近くに埋葬した。そして、殺人犯を後悔させ、許しを乞わせた。

一七一．モラ・モハメッド・モアレム・ヌーリ。ヌール、テヘラン、マザンデランでバハオラと親密に交わった人。かれは、高い知性と学識で名高く、ゴッドスは別として、タバルシ砦の一団のうち、敵からもっとも激しい残虐行為を受けた人であった。王子は、ゴッドスの名をのろえば、釈放してやると約束した。さらに、信仰を否認すれば、テヘランに連れもどし、自分の息子たちの教師としてやると約束したのであるが、かれはこう答えた。「あなたのような男の命令で、神から愛される御方をそしめることは絶対にできません。ペルシャ国をそのままわたしに与えと言われても、一瞬でも、わたしの敬愛する指導者に背を向けることはありません。わたしの身体は、あなたの掌中にありますが、わたしの魂を服従させることはできません。わたしを、思うように苦しめなさい。そうすれば、『それであれば、死を願ってみたらどうか。もしお前たちの言うことが本当であるならば。』という句の真理を、あなたに示すことができます。」この返事に激怒した王子は、かれの身体をバラバラに切り裂き、屈辱的な罰をあたえるように命じた。

一七二．ハジ・モハメッド・カルラディ。かれの家は、バグダッドの旧街に隣接するヤシ園のひとつに建っていた。かれは、ひじょうに勇敢で、エジプトのエブラヒム・パシャとの戦いで、百人の兵士を率いて戦ったことがあった。また、セイエド・カゼムの熱烈な弟子で、師の美德と業績を詳細に述べた長い詩を書いている。バブの教えを受け入れたのは七十五才のときであった。バブを雄弁にほめたたえる詩も書いている。砦が包囲攻撃されたとき、武勲を立てたが、やがて敵の弾丸に倒れた。(p.425)

一七三．サイド・ジャバヴィ。バグダッド出身で、砦が包囲攻撃されたとき、おど

ろくべき勇気を示した。腹部を撃たれ重傷を負ったが、ゴッドスの居るところまで歩いた。ゴッドスの足下にうれしそうに身を投げ、息を引き取った。

最後の二人の殉教の状況は、セイエド・アブ・タレブ・サング・サリが、バハオラにあてた通信に書いたものである。かれは、砦の包囲攻撃で生き残った一人であった。この通信で、自分と二人の兄弟の話も書いた。かれの兄弟は、二人とも、砦を防護中に命を落としている。「コスローが殺害された日、わたしは、砦近くの村の村長カルベラ・アリ・ジャンを訪れていました。村長は、コスローを援助するために出かけていましたが、そこからもどり、かれが殺害されたいきさつについて語りました。同じ日に、使いの者から、二人のアラブ人が、その村に来て、砦の一团に加わりたくいと熱心に望んでいたことを知らせてくれました。かれらは、ガディ・カラ村の住民を恐れており、砦まで案内してくれる者には報酬を十分にあたえると約束していました。わたしは、父ミール・モハメッド・アリの勧告を思い出しました。父は、バブの大業の推進に立ち上がるようにと勧告していたのです。即座に、わたしは、この機会を捕らえる決心をしました。この二人のアラブ人と、村長の援助により砦に到着し、モラ・ホセインに会い、生涯の残りの日々を、大業の奉仕にささげることにしたのです。」

ゴッドスの仲間の敵で、名をあげた士官たちの名前はずぎに示すとおりである。

- 一、メヒディ・ゴリ・ミルザ。故モハメッド国王の弟
- 二、ソレイマン・カーン・アフシャール
- 三、ハジ・モスタファ・カーン・スル・ティジ
- 四、アブドラ・カーン。ハジ・モスタファ・カーンの弟
- 五、アッバス・ゴリ・カーン・ラリジャニ。モラ・ホセインを撃った男
- 六、ヌロラ・カーン・アフガン
- 七、ハビボラ・カーン・アフガン
- 八、ドール・ファガー・カーン・カラヴォリ
- 九、アリ・アスガー・カーン・ド・ドンゲイ
- 十、コダ・モラッド・カーン・コルド
- 十一、カ rilル・カーン・サヴァド・クヒ
- 十二、ジャファー・ゴリ・カーン・ソルク・カルレイ
- 十三、ファウジ・カルバットのサルティップ？

十四．ザカリヤイ・ガディ・カライ。コルソーの従兄弟で、その後継者

かの忘れがたい砦の防御に参加し、悲劇的な結末を生き抜いた信者たちについては、その人数も名前も十分に確かめることはできていない。したがって、不完全ではあるが、そこで殉教した人たちの名前のリストで今は満足している次第である。将来、信教を推進する勇敢な人たちが、綿密に調査し、この記録を完全なものにしてくれると信じている。これは、現代における、もっとも感動的な出来事のひとつとして歴史に残るにちがいないのである。

第二十一章 テヘランの七人の殉教者

タバリスの砦の勇敢なる一団にふりかかった悲劇的な運命のニュースは、バブの心にはかり知れない悲しみをもたらした。チェリグの砦に監禁され、弟子たちからも切り離されていたバブは、かれらの努力を見守り、その勝利を熱烈に祈っていた。一八四九年六月下旬に、弟子たちを襲った試練、かれらの苦悶、憤慨した敵の裏切り、それにつづく残忍非道の虐殺を知ったバブの悲しみの深さをはかることはできない。

バブの秘書アジズは、後日つぎのように述べている。「バブは、この思いがけないニュースに、悲痛な思いをされました。深い悲しみで、声を出すことも、ペンを動かすこともありませんでした。九日間だれとも会おうとされませんでした。バブと親密な従者であったわたしでさえも、部屋に入るのをことわられたのです。差し出された食べ物と飲み物にも手をつけようとされませんでした。かれの眼から涙がとめどもなく流れ、かれの口から苦悩の言葉が出されつづけました。個室で最愛なる御方と交信される時、カーテンの後ろから、悲嘆の言葉を聞き取ることができました。わたしは、その傷ついた心からほとぼしる悲しみの言葉を、書きとめようと思いました。ところが、バブは、それに気づかれ、記録したものを全部破棄するように言われました。そのため、かれの苦悩する心から出された嘆きの言葉を残すことはできなかったのです。こうして五ヵ月間、バブは意気消沈と悲しみの大洋に浸っておられました。」(p.430)

一八四九年十一月に、バブは中断していた執筆の仕事をはじめた。最初のページは、モラ・ホセインにささげられた。その参堂の書の中で、タバリスの砦が包圍攻撃されていた期間、モラ・ホセインがゆるがぬ忠誠心をもって、ゴッドスに仕えたことを、感動的な言葉で賞賛している。また、その気高い行為と偉業を称え、来世で師のゴッドスとかならず再会することを約束し、バブ自身も、やがて、この不滅の二人といっしょになるであろうと書いた。この二人は、それぞれ、生存中も死後も、神の信教に不朽の光輝を注いだのである。バブは、一週間、ゴッドスとモラ・ホセイン、そのほかのタバリスで殉教の冠を得た弟子たちについて賞賛の言葉を書きつづけた。

このように、バブは、砦の防御で不滅の名前を残した弟子たちの賛辞を書いたが、それが終わるとすぐ、一八四九年十一月二十六日、マラゲ町の信者であるゴザルを呼んだ。ゴザルは、それまでの二ヵ月間、ホセイン・アジズの弟ハサンの代わりに、バ

ブの世話をしていた。バブはゴザルを温かく部屋に迎え、サイヤという称号をあたえた。そして、タバルシの殉教者たちのために著した参堂の書をかれに渡し、自分に代わって詣に出るように命じた。「世俗への愛着を完全に断ち、旅人をよそって、マザンデランに向かうがよい。そして、わが大業への信仰を、生命の血で証明した不滅の人物が葬られている場所を、わたしに代わって訪れよ。その聖なる場所の近くまできたら、靴をぬぎ、頭を下げたかれらの名前をととなえ、冥福を祈り、廟の回りを巡回せよ。訪問の思い出に、わが愛するゴッドスとモラ・ホセインの遺体をおおっている聖なる土を一握りほど、わたしのところに持参せよ。わたしと共に新年を祝えるように、その前にもどって来るがよい。わたしが今後ふたたび会えるのはあなただけであろう。」(pp.431-432)

サイヤは、指示通りにマザンデランに向かい、一八五〇年一月十五日に到着した。そして、モラ・ホセインの殉教一周記念日にあたる一月二十三日までに廟を訪れ、委任された使命を立派に果たした。その後、テヘランに向かった。

わたし（著者）は、テヘランのバハオラの邸宅の入口で、サイヤを迎えたアガ・カリムから、つぎのように聞いた。「サイヤが、巡礼を終えて、バハオラを訪れたのは真冬の最中でした。雪の降る極寒の中、かれは修行僧のうすい衣を身につけ、はだしで、髪はぼうぼうとしていました。しかし、心は巡礼によって点された火で燃えていました。バハオラの家の人であったヴァヒドは、サイヤがタバルシの砦からもどってきたことを聞いて、自分が高い身分であることも忘れて、サイヤの下にいそぎ、その足下に身をかがめました。そして、ひざまで泥でおおわれていたサイヤの足を両腕で抱き、うやうやしく接吻したのです。その日、わたしは、バハオラがヴァヒドに示された温かい気遣いにおどろきました。それほどの愛情をバハオラが示されたのを見たことがなかったのです。バハオラの話し方から、まもなくヴァヒドは、タバルシの砦で不滅の名を残した人たちにおとらない業績を為すであろうと確信しました。」(p.432)

サイヤは、バハオラの家で二、三日滞在した。しかし、ヴァヒドのように、家の主人（バハオラ）がひめている威力を認めることはできなかった。かれは、バハオラから深い愛情を注がれたが、その祝福の意義を理解することはできなかったのである。わたし（著者）は、サイヤがファマゴスタに旅行中、つぎのように語るのを聞いた。「バハオラはわたしを大変親切にあつかって下さいました。ヴァヒドも、その高い地位にかかわらず、バハオラの面前では、かならずわたしを自分よりも上位の者としてあつ

かわれたのです。マザンデランに到着した日に、わたしの足に接吻されたほどでした。バハオラの家での歓迎ぶりに、わたしはびっくりしました。このように、わたしは恩恵の海に浸されたのですが、当時、バハオラの地位を理解することができませんでした。また、バハオラがその後、どのような使命を果たされるようになっていくのかもまったく気づかなかったのです。」

サイヤがテヘランから出発する前に、バハオラは一通の書簡をかれに託した。それは、バハオラがヤーヤ（バハオラの異母弟）に書き取らせたもので、ヤーヤの名前で送られるものであった。まもなくして、バブの自筆で返事がきた。その内容は、ヤーヤの教育と訓練を、バハオラに託したものであった。この通信から、バヤンの人びと（ヤーヤの追従者たち）は、リーダーのヤーヤの主張（バブの後継者であるという）が裏づけられたと誤解した。その返事には、そのような主張はまったく述べられていなかったし、また、ヤーヤの要求する地位への言及もなかった。そこに書かれていたのは、バハオラへの賞賛とヤーヤの教育についてだけであったが、追従者たちは、ヤーヤの権限を主張したものだと思いきや空しい想像をしたのであった。(p.433)

これまで一八四八から一八四九年にかけて起こった主な出来事を述べてきたが、ここで、同じ時期にわたし（著者）自身の生活に起こった重要な出来事を述べておきたい。それは、わたしの精神的な再誕生と、過去の因襲から解放されたことと、バブの啓示を受け入れたことである。わたしの若年時代の状況を長く述べすぎたり、わたしの改宗にいたった出来事を詳細に語りすぎたりするかも知れないので、前もって読者諸君にお許しをいただきたいと思う。わたしの父は、タヘリ族に属し、コラサン州で遊牧生活をしてきた。ゴラム・アリという名で、ホセイーン・アラブの息子であった。カルブ・アリの娘と結婚し、三人の息子と三人の娘にめぐまれた。わたしは次男として、一八三一年七月二十九日、ザランド村で生まれ、ヤル・モハメッドと名づけられた。仕事は羊飼いで、少年のとき、初等教育だけを受けた。もっと勉強したかったが、それができる境遇ではなかった。コーランを熱心に読み、何節かを暗記し、草原で羊の群れを追っているときとなえた。一人でいるのが大好きで、夜は星をながめて楽しんだり、また不思議に思ったりした。静かな草原で、エマム・アリの祈りをとなえ、ケブレの方に顔を向け、真理を発見できるように、わたしの歩みが導かれるようにと神に祈った。

父はときどき、わたしをクム町に連れて行った。そこで、イスラム教の教えと、そ

の指導者たちの状態を知った。父は、熱心なイスラム教徒で、その町に集まる僧侶たちと親密に交わった。父がエمام・ハサンのモスクで、祈り、定められた儀式を細心の注意をはらって、敬虔に行うのを見守った。また、ナジャフから来た著名な高僧数人の説教も聞き、かれらの講話に出席し、その討論に耳を傾けた。そうしているうちに、徐々に、かれらの偽善に気づき、その卑劣さに胸が悪くなりはじめた。高僧たちが、わたしに押しつけようとしている信条や教義が信頼できるものであるかどうかを確認したかったが、時間もなく、調査できる設備も得られなかった。父は、わたしが無鉄砲で落ち着きがないと、よく叱った。「高僧たちをけぎらいしていると、将来、お前は、大変な困難にまき込まれ、非難を受け、恥をかくことになる。」(p.435)

ロバト・カリム村の叔父を訪れていたときである。一八四七年の新年から十二日目に、その村のモスクで、二人の男が話しているのをふと耳にした。この会話から、バブの啓示をはじめて知ったのである。一人の男が言った。「バブはケナル・ゲルド村に連れて行かれ、今テヘランに向かっていることを知っているか？」もう一人の男が、このことを知らなかったので、かれは、バブについて最初から話しはじめた。バブの宣言にまつわる状況、シラズでの逮捕、エスファハンへの出発、エمام・ジョミエ（僧侶の長）とマヌチェール・カーン（知事）から受けた歓迎、かれが示した超人的で不思議な力、かれに敵対するエスファハンの僧侶たちの評決などをくわしく述べたのである。これらの出来事のすべてに、わたしの好奇心は刺激された。そして、国民をそれほど魅惑した人物に対して、強烈な賞賛の気持でいっぱいになった。わたしの魂は、バブの光でみたされ、すでに、その大業の信奉者となったような気がした。

ロバト・カリムからザランドにもどってきたとき、父は、わたしが落ち着きがなくなり、態度が変わったと、おどろいた様子であった。食欲がなくなり、眠れなくなっていたが、心の動揺を父からかくすことにした。このことが父にわかれば、わたしのひそかな望みが果たせなくなると思ったからである。この状態は、ホセイーン・ザバレという人がザランドに到着するまでつづいた。この人は、わたしの心の願望に光をあたえてくれた。かれとの交わりが友情に発展したとき、わたしは心にひめている熱望を打ち明けた。大変おどろいたことに、かれ自身もすでに、このことに魅了されており、つぎのように語ってくれた。(p.435)

「わたしの従兄弟エスマイル・ザバレから、バブのメッセージが真実であることを聞いて確信しました。かれはこう知らせてくれました。かれは、エスファハンの僧侶の

長宅で、バブに数回会いました。バブは、その僧侶の眼前で、ヴァル・アスル（コーランの一節）について解説しましたが、そのときの作文の速さと強力で独創的な文体に、驚嘆したのです。もっとおどろいたことに、バブは、同じ速度で解説を書きながら、その場にいた人たちの質問に答えたのです。この従兄弟は、どんな危険も恐れずにバブの教えをひろめたため、ザヴァレ町の町長と名士たちの敵意をあおり、最近まで住んでいたエスファハンにもどらざるを得なくなりました。わたしもまた、ザヴァレに居つづけることができなくなり、カシャンに移りました。その町で、冬を過ごし、ジャニと会いました。この人については、従兄弟から話を聞いていました。ジャニは、バブが著した論文をわたしに渡し、精読したら、二、三日後にもどすように言いました。わたしは、この論文のテーマと文体に強く惹かれ、全文をすぐ書き写すことにしました。論文をジャニにもどしたとき、かれから、バブに会う機会を失ったことを知らされて大変残念に思いました。『バブは、新年の日夕方に到着され、わたしの客人として三晩を過ごされました。バブは今、テヘランに向かっておられます。すぐ出発すれば、バブにかならず追いつくはずです。』

すぐカシャンを離れ、ケナル・ゲルド近郊にある砦まで歩きました。砦の外壁の蔭で休んでいると、愛想のよい男が砦から出てきて、『あなたはどのような方ですか。どこに行かれようとされているのですか。』と聞きました。『わたしは貧しいセイエド（モハメッドの子孫）で、この土地に不慣れな旅人です。』と答えました。かれは、わたしを自分の家に案内し、一夜を過ごすように招きました。会話中に、かれはこう述べました。『あなたはバブの弟子でしょう。バブはこの砦で二、三日を過ごされ、コライン村に移られました。そして三日後に、アゼルバエジャンに向かわれました。バブと離れたくなかったのですが、かれはわたしに、こう命じられました。<この場所に残り、わたしに代わって弟子たちを愛情深く迎え、わたしの後をつけないように言いなさい。そして、かれらがこの大業に献身するようにはげましなさい。この信教の進歩を妨げている障害物が除かれ、弟子たちが、安心して思う存分神を礼拝し、その教えを守ることができるように。>わたしは即刻、バブの後を追うことをやめ、クム町にももどらずに、この場所に来ることにしたのです。』(pp.436-437)

ホセイン・ザバレの話を知り、わたしの不安感はやわらいだ。かれが見せてくれたバブの書簡の写しに、わたしの魂は活気づいた。当時、わたしは、ある師の下でコーランを学んでいたが、この師はイスラム教の教義について解説する能力に欠けていることが、ますます明らかになってきた。ホセイン・ザバレに、バブの大業について

もっと情報が欲しいと述べたところ、かれは、エスマイル・ザバレに会うようにすすめた。この人は、毎春かならず、クム町のエمام・ザデの廟に参拝するのを習慣としていた。父は、わたしが離れるのをいやがったが、アラビア語を習得するためにクム町に行きたいとこん願して、許可をもらった。しかし、本当の目的を父に知られないように慎重に行動した。それがわかれば、ザランドの判事や僧侶たちの前で恥をかくことになり、わたしの目的も達せられなくなるからであった。

クム町に住んでいるとき、母と姉と弟が、新年を祝うために一ヵ月ほど滞在した。その期間、母と姉に、新しい啓示について知らせ、かれらの心にバブへの愛を燃え立たせることができた。家族がザランドに帰った後、わたしが待ちあぐんでいたエスマイル・ザバレが到着した。かれは、大業について詳細に説明してくれたため、完全に信じるできるようになった。かれは、神の啓示が継続して下されること、過去の予言者たちは、基本的には同じであること、かれらとバブの使命が密接に関連していることを説明した。かれはまた、アーマドとカゼムが成し遂げた仕事の内容について知らせてくれた。わたしは、それまで、この二人について聞いたことはなかった。わたしは、現在、この信教に忠実に従う者は、何をすべきかについて聞いた。かれは答えた。「この教えを受け入れた者はすべて、マザンデランに向かい、ゴッドスを援助すべきだというのがバブの指示です。ゴッドスは今、無慈悲な敵軍に取り囲まれているからです。」かれがタバルシの砦に行く予定であることを知ったわたしは、同行を願った。しかし、かれは、わたしと同年の若者ハカクといっしょに、テヘランからメッセージを受け取るまで、クム町に残るようにすすめた。ハカクは最近大業を受け入れた人である。(pp.437-439)

そのメッセージを待ったが、何も来ないので、テヘランに向かうことにした。友人のハカクも、わたしにつづいた。その後、かれは逮捕され、一八五一年から一八五二年に、国王の暗殺未遂事件で処刑された人たちと運命を共にした。テヘランに着くとすぐ、神学校の向かい側にあるモスクに行った。その入り口で、偶然にエスマイル・ザバレに出会った。かれは、わたしに手紙を書き、ちょうどクムに送るところであると、知らせてくれた。

かれとわたしがマザンデランに向かう準備をしているとき、ニュースが伝わってきた。タバルシ砦を防御していた仲間たちは、裏切られて虐殺され、砦は破壊されたというニュースであった。この恐ろしいニュースに、われわれは悲嘆にくれ、最愛の大

業を勇敢に防御した仲間たちの痛ましい運命を悲しんだ。ある日、とつぜん叔父と出くわした。かれは、わたしを連れもどしにきたのであった。エスマイル・ザバレに、このことを告げたところ、かれは、親族の敵意を刺激しないように、ザランドにもどるように忠告した。

故里の村にもどって、弟を大業の信者にすることができた。母と姉はすでに信者となっていた。さらに、父を説得して、わたしがふたたびテヘランに行くことを許してもらった。テヘランで、前の訪問時に滞在していた同じ神学校に住むことにした。そこで、カリムという人に会った。この人は、バハオラからミルザ・アーマドという名前をもらっていたのをあとで知った。かれは、わたしを温かく迎え、「エスマイル・ザバレから、あなたの世話をするようにと頼まれています。かれがテヘランにもどるまで、わたしといっしょに過ごして下さい。」と述べた。ミルザ・アーマドと過ごした日々は決して忘れられないものとなった。かれは、まったく愛と親切の権化のような人であった。わたしを鼓舞し、わたしの信仰を活気づけたかれの言葉は、わたしの心に永久に刻まれたままである。(pp.439-440)

ミルザ・アーマドは、わたしをバブの弟子たちに紹介した。かれとの交わりから、信教の教えに関して十分な情報を得ることができた。当時、ミルザ・アーマドは筆者として生計を立てていた。夜は、バブの書いたバヤン書とほかの本の筆写に専心した。こうして写した本は、ほかの弟子たちに贈られた。わたし自身も数回、それらの贈り物を、メヘディ・カンディの妻にもっていったことがある。メヘディ・カンディは、幼児の息子を残して、タバルシ砦の一団にはいった人である。

この期間中に、バダシュトの大会後ヌールに住んでいたタヘレが、テヘランに来て、マムード・カーンの家に監禁されていることを知った。しかし、かの女は、丁重にあつかわれているということであった。(p.440)

ある日、ミルザ・アーマドは、わたしをバハオラの家案内した。最大の枝（アブドル・バハ）の母である、バハオラの妻は、わたしの目を治したことがあった。かの女は自分で処方した目薬を、ミルザ・アーマドを通してわたしに送ってくれたのである。バハオラの家で最初に会ったのは、当時六才であったかの女の最愛の息子であった。かれは、バハオラの部屋の入り口に立って、ほほ笑んでわたしを迎えてくれた。

わたしはその部屋の入り口を通りすぎて、ヤーヤの面前に案内された。そのとき、わたしは、今通りすぎた部屋の住人が、どれほどの地位にある方であるかに気づいていなかった。ヤーヤと向かい合って、その容貌を見、話すのを聞いて、かれが主張している地位にはまったく値しない人物であることを知っておどろいた。

別の日に、同じ家を訪れ、ヤーヤの部屋に入ろうとしたとき、アガ・カリム（バハオラの実弟）が、近づいてきて、つぎのことをわたしに依頼した。市場にでかけた召使いがまだもどって来ていないので、師（アブドル・バハ）を神学校に連れていき、その後、ここにもどってきてくれないか、という依頼であった。わたしは、よろこんで承諾し、出かける準備をしていたとき、ひじょうに上品で美しい少年、最大の枝（アブドル・バハ）が、羊皮の帽子をかぶり、コートを着て、父上の部屋から出てきた。そして、階段をおりて、出口に向かった。わたしは、かれのそばに寄り、かれを抱えようと両腕を差し出したところ、かれは、「いっしょに歩きましょう。」と言って、わたしの手を取り、家を出た。手に手をとって、おしゃべりしながら、神学校の方へ歩いた。当時、この神学校はパ・メナールの名で知られていた。教室に着いたところで、かれは、わたしの方を向きこう言った。「午後にわたしを迎えにきて、家まで送ってください。父上の用事で、エスファンディヤール（召使い）が今日はこられないからです。」わたしは、よろこんで承諾し、すぐバハオラの家にもどった。その家でまた、ヤーヤに会った。かれは、わたしに、サドル神学校に行き、バゲル・バスタミの部屋に居るバハオラに手紙を渡し、返事をすぐもらってくるように依頼した。わたしは、この依頼を果たした後、アブドル・バハを迎えに行き、家に連れ帰った。(440-441)

ある日、ミルザ・アーマドは、わたしを招いて、バブの伯父セイエド・アリに会わせた。かれは、最近チェリグからもどり、チャパルチの家に滞在していた。この家はシェミラン門の近くにあった。セイエド・アリの高貴な姿と穏やかな表情に深く印象づけられた。その後の訪問によって、かれの温和な気質と神秘的な敬虔さと強い性格への賞賛の気持ちは高められた。わたしがよくおぼえている出来事につぎのことがあった。あるとき、アガ・カリムは集会で、大騒ぎになっているテヘランを離れ、その危険から逃れるよう、かれにすすめた。これに、かれは確信をもって答えた。「なぜ、わたしの安全を心配なさるのですか？ わたしもまた、神の御手が、選ばれた人びとのために用意している宴会にあずかりたいのです。」(p.442)

まもなくして、扇動者たちは、その町に大騒動を起こすことに成功した。その直接

の原因は、カシャン出身で、神学校に住んでいるある男の行動であった。名を知られているセイエド・モハメッドは、この男を信用し、かれはバブの信者となったと主張していた。同じ神学校に宿泊し、イスラム教の抽象的教義で有名な講師であったモハメッド・ホセインは、自分の弟子であるセイエド・モハメッドに、この男との交際を絶つように、数回忠告した。この男は信用できないので、信者の集会には入れないようにと忠告したのである。しかし、セイエド・モハメッドは、この警告を無視し、一八五〇年二月の中旬まで、この男と交際しつづけた。この不信実な男は、その時期に、カシャンの僧侶セイエド・ホセインのところに行き、当時テヘランに住んでいた約五十名の信者の名前と住所を渡した。セイエド・ホセインは、すぐそのリストをマムード・カーンに提出した。かれは、全員の逮捕を命じ、その結果十四名が捕らえられて、当局に連行された。(P.442-443)

かれらが逮捕された日、わたしは、ザランドから来て、ノウの門外にある隊商宿に泊まっていた弟と伯父といっしょにいた。翌朝、この二人はザランドに向かった。神学校にもどると、わたしの部屋に小包が置かれていた。その上には、ミルザ・アーマドからわたしに宛てた手紙があった。その手紙は、かの不信実な男がついにわれわれを密告し、首都で大変な騒ぎを起こしていることを知らせるものであった。「この小包には、わたしが所有している聖なる書き物が全部入っています。あなたが、この場所に安全にもどることができれば、隊商宿に泊まっているナッド・アリに、その小包と手紙を渡してください。この人は、ガズビン出身です。その後すぐ、シャーのモスクに行かれれば、そこで、あなたに会うことができますよ。」わたしは、指示通りに、小包をナッド・アリに渡し、モスクに到着してミルザ・アーマドに会うことができた。かれは、襲われてモスクに避難したこと、モスク内ではもう襲われる心配がなくなったことを話してくれた。

その間、バハオラは、サドル神学校からミルザ・アーマド宛てにメッセージを送った。それは、アミール・ネザム（総理大臣）は陰謀を企てており、かれの逮捕を僧侶の長にすでに、三回要求していたことを知らせるものであった。さらに、総理大臣は、モスクに避難した者を襲うことはできないという規約も無視して、避難者たちを逮捕するつもりでいるので、ミルザ・アーマドは変装してクムに向かい、同時に、わたしはザランドの故郷にもどるように、というのがバハオラからの指示であった。

一方、モスクでわたしを見た親族は、わたしにザランドに帰るように強く忠告した。

父は、わたしが逮捕され、処刑寸前であるという、あやまった知らせを受け、心を痛めているので、急いでもどり、父の不安を除いてあげなさい、と説得したのである。この神から送られた好機をとらえるようにとのミルザ・アーマドの勧告通りに、ザラントにもどり、家族といっしょに新年のフィーストを祝うことができた。このフィーストは、一八五〇年のジャマディヨル・アヴァール月の五日目で、ちょうどバブの使命宣言の記念日にあたるため、二重のよろこびに満ちたものであった。この年の新年は、バブの最後の著作に、つぎのように述べられている。「バヤンの点（バブ）の宣言から六年目の新年は、太陰暦で、七年目のジャマディヨル・アヴァール月の五日目にあたる。」同じ節で、バブは、この年の新年は、地上で祝う最後の新年であろうと、ほめかしている。(pp.444-445)

ザラントで家族と共に新年を祝いながらも、わたしの心はテヘランに向けられていた。動乱中のテヘランで、どんな運命が友人の信者たちに降りかかっているであろうか、と心配であった。かれらの安全を知りたかった。父の家で、両親の愛情にかこまれながらも、自分は、仲間の一団から断たれているという思いで心が痛んだ。かれらがどんな危険にさらされているかが十分想像できた。わたしもまた、かれらの苦しみを分かち合いたいと切望した。しばらく、家に閉じこもったままの宙ぶらりんの生活がつづいていたが、サディク・タブリズのとつぜんの訪問で、それから解放された。かれは、テヘランから来て、父の家に迎えられたのである。かれは、わたしに重くのしかかっていた不安を除いてくれた。しかし、かれの残酷な話で、わたしは恐怖心かられた。その恐ろしい話がわたしの心に投げかけた青白い光の前で、それまでの宙ぶらりんの不安さえも、うすくなったのである。

ここで、テヘランで逮捕された同胞の殉教について述べてみたい。逮捕されたバブの弟子十四名は、一八五〇年二月中旬から二十日間ほど、マムード・カーン宅に監禁されていた。タヘレも、同じ家の上階に閉じ込められていた。虐待者たちは、さまざまな手段を用いて弟子たちを虐待し、責め立てたが、必要な情報を得ることはできなかった。逮捕された弟子の一人、マラゲは、とくにはげしい拷問にかけられたが、頑固に沈黙を守り、一言も口にするとはなかった。このあまりの頑固さに、虐待者たちは、この者は、口がきけないのではないかと思った。そこで、マラゲにバブの信教を教えたモラ・エスマイルに、「この者は話す能力があるのか？」と聞いた。「かれは無言だが、口がきけないのではない。流暢に話すことができ、身体の障害は何もない。」とモラ・エスマイルは答えた。そして、マラゲの名を呼ぶと、かれは直ちに返事をし、

モラ・エスマイルの指示に応じる準備があることを示した。(pp.445-446)

弟子たちから何の情報を得ることができないと確信した虐待者たちは、この件をマムード・カーンに訴えた。これを受けたマムード・カーンは、これを、アミール・ネザム、すなわち、ナセルディン国王の総理大臣タギ・カーンに提出した。当時、国王は、迫害されているバブの共同体の諸事については直接関与しなかった。したがって、バブの弟子たちに関してどのような決定がなされたかを知らないことが多かった。総理大臣は、絶対的な権限をもち、バブの弟子たちを思いのまま処することができた。だれ一人かれの決定にうたがいはさむ者はいなかった。また、その権限のふるい方をあえて非難する者もいなかった。総理大臣は即刻、決定的な命令を出し、この十四人のうち、信仰を取り消さない者は、処刑するとおどしたのである。七人は圧力に耐えきれず信仰を取り消し、すぐ釈放された。残りの七人は、テヘランの七人の殉教者となった。この七人について一人ずつ説明してみたい。

一. ハジ・ミルザ・セイエド・アリ。称号はカル・アザム。バブの伯父で、シラズの有力な商人の一人。バブの父親の死後、この伯父がバブの保護者となった。バブがヘジャーズへの巡礼からもどって、ホセイン・カーンに逮捕されたとき、バブの身元引き受け人となって宣誓書をしたためたのもこの伯父であった。伯父はまた、自分の保護下にあったバブをつねに愛情と思いやりをもって世話し、献身的にバブに仕え、バブに会おうとシラズに集まってきた大勢の信者たちとバブの間の仲に立った。かれの唯一の子供は幼児のとき死亡した。一八四八年から一八四九年にかけて、この伯父は、シラズを離れて、チェリグの砦にバブを訪ねた。そこから、テヘランに行き、特定の仕事にはつかなかったが、暴動が起こるまでテヘランにとどまった。その暴動で殉教したのである。(pp.446-447)

かれの友人は、迫ってきている騒動から逃れるように忠告したが、かれは聞き入れず、最後の息を引き取るまで、完全な諦観をもって、はげしい虐待に直面した。かれの知人である裕福な商人の多くが、身の代金を申し出たが、かれはそれをことわった。ついに、かれは、アミール・ネザム（総理大臣）の前に連行された。総理大臣はこう言った。「この国の君主は、予言者の子孫にわずかでも危害を加えることを嫌っておられる。シラズとテヘランの著名な商人たちは、あなたのために身の代金を払いたいと願っている。マレコット・トツジャーは、あなたが許されるようにこん願している。『信仰を取り消す』というあなたの一言さえあれば、あなたは自由になり、榮譽をも

って故郷にもどれるのだ。そうすれば、残りの生涯は、国王の保護の下で、榮譽と威厳をもって過ごせるのだ。」バブの伯父は大胆にこう答えた。「閣下、これまでに殉教の杯をよろこんで飲み干した人たちは、あなたが今されている要請を拒否しました。わたしもまた、そのような要請をはっきりことわります。この啓示に秘められている真理を否認することは、その前に下された啓示をすべて拒絶すると同じです。バブの使命を認めないことは、わたしの先祖の信仰を捨てることになり、モハメッド、イエス、モーゼ、そのほかすべての過去の予言者たちがもたらした聖なる教えを拒絶することになります。神はご存知です。神の使者たちの言動に関して聞いたり、読んだりしたことのすべては、わたしの愛する親族であるこの若者（バブ）の行動に見てきました。それも、かれが少年時代から三十才になる現在までの期間ずっと目撃してきたのです。かれの言動はすべて、記録に残されているかれの高名な先祖（モハメッド）と後継者のエマムたちの言動を思い起こさせます。わたしの願いは一つです。わたしの愛する親族（バブ）の道に、わたしの命をささげる最初の者としてくださることです。」(p.447)

総理大臣は、その答えに仰天した。絶望感から逆上して、無言のまま、従者に、かれを連れ出して、斬首するように身振りでも合図した。処刑の場に連行される途中、かれは、何度もつぎのハフェズ（ペルシャの詩人）の言葉をくり返した。「おおわが神よ、あなたへ深い感謝をささげます。わたしの願いをすべて惜しみなくかなえて下さったからです。」かれは、まわりに集まってきた群衆に向かって声をあげた。「わたしは、神の大業の道に、よろこんで命をささげた。ファルス全州とペルシャ国境を越えたイラクの人びとでさえ、わたしの公正な行為、真心からの敬虔さ、高貴な血統を進んで証言するであろう。一千年以上、皆は約束されたガエム（バブ）の出現を祈りつづけてこられた。この名前を口にするとき、皆は、心の奥底から何度叫んだことであろうか。『おお神よ、約束の御方の到来を早めたまえ。その御方の出現を阻んでいる障害をすべて除きたまえ。』ところが、その御方がついに到来されたところ、皆はその御方を、遠方のアゼルバエジャンの片隅に追放し、その弟子たちを皆殺しにしようと立ちあがった。神の呪いが皆に下されるようにこん願するならば、神の復讐の大いなる怒りが、皆に降りかかることは確かである。しかしながら、わたしは、そのようなことは祈らない。最後の息を引き取るとき、わたしは、全能の神が、皆の罪の汚れを清め、皆を思慮なき眠りから覚ましてくれるように祈ろう。」

この言葉を聞いた死刑執行人は、心の奥底から動揺した。かれは、自分の手にもつ

ている刀を再度研ぎに行くふりをして、急いでその場を去り、けっしてもどってくるまいと決意した。その間、かれは号泣しながら不平をもらした。「この仕事に任命されたとき、殺人と追いはぎで有罪となった者だけを、処刑するように言われていた。ところが今、エマム・ムセイ・カゼム（七番目のエマム）に劣らず聖なる方の血を流すように命じられたのだ！」その後まもなくして、かれはコラサンに行き、そこで運搬人と触れ役の仕事について生計を立てた。その地方の信者たちに、かれは、その悲痛な話をし、強制的にさせられた行為を悔いていることを述べた。その出来事を思い出すたびに、セイエド・アリの名前を聞くたびに、かれの目からは涙があふれてきた。この涙は、聖なる人セイエド・アリが、かれの心に注いだ愛情を証言するものであった。(pp.448-449)

二. ミルザ・ゴルバン・アリ。マザンデラン州のバルフォルージュ出身で、ネマトラヒという名で知られている共同体のすぐれた人物。かれは、ひじょうに敬虔で、高貴な性格をそなえていた。かれの清らかな生活を見て、マザンデラン、コラサン、およびテヘランの名士たちの多くが、かれを高徳の人だとみなし、忠誠を誓った。このように、多くの人びとから大変な尊敬を受けていたかれは、カルベラへの巡礼途上で、大勢の賞賛者たちに取り囲まれた。ハマダンでも、ケルマンシャーでも、大多数の人びとがかれの人格に影響を受け、弟子となった。どこへ出かけても、人びとは歓呼してかれを迎えた。しかし、この熱狂的な人に、かれはひじょうな不快感をもった。そこで、かれは群衆を避け、虚飾と見せびらかしの指導者の地位をいさぎよしとしなかった。カルベラに向かう途中、マンダリジを通りすぎていたとき、かなり影響力のある人が、かれに惹かれ、自分のもっていたものをすべて捨て、友人も弟子も残して、ヤグビエまで、かれのあとをつけてきた。しかし、ミルザ・ゴルバンは、この人にマンダリジにもどり、残してきた仕事をつづけるように説得することができた。(p.449)

巡礼からもどったミルザ・ゴルバンは、モラ・ホセインに会い、かれを通してバブの大業を信じるようになった。病気のため、タバルシ砦の一団に加わることはできなかったが、健康であったならば、マザンデランに旅し、その一団に最初に参加していたであろう。バブの弟子たちの中で、モラ・ホセインのつぎにかれが愛着をいだいていたのはヴァヒドであった。

テヘランを訪れていたとき、わたしは、ヴァヒドが大業に身をささげる決心をして、その発展のために立ちあがったことを知った。当時、テヘランにいたミルザ・ゴルバ

ンが自分の病気をなげいて、つぎのように語るのをわたしは何度も耳にした。「モラ・ホセインとその仲間たちが飲み干した殉教の杯にあずかることができなくて、どれほど悲しんだことであろうか。この失敗をおぎなうために、ヴァヒドの旗の下に参加したいと念願している。」ところが、かれがテヘランから出発しようとしたとき、とつぜん逮捕されたのである。かれは、アラブ人の着るチュニックの衣に、地のあらい織物で作られたマンとを着、イラク人の帽子をかぶっていた。この簡素な衣服で街路を歩くかれの姿から、かれは、俗世への愛着を断った者だというのがはっきりとわかった。かれは、几帳面に信教の教えを守り、敬虔に祈りをささげた。そして、つぎのようによく言っていた。「バブは、自分の信教の教えを細かなところまで守られました。わたしの師が守った教えを、わたし自身が守らないでおられるのでしょうか。」(PP.449-450)

ミルザ・ゴルバンが逮捕され、総理大臣の前に連行されたとき、これまでなかったような騒動がテヘランで起こった。ミルザ・ゴルバンの身に何が起こるかを見ようと、大群衆が政府の建物の入り口に群がったのである。総理大臣は、かれを見るとすぐ、こう言った。「昨夜から、政府の高官から官吏までのあらゆる階層の者たちがわれを取り囲み、あなたを許すようにこん願した。あなたの占めている地位とあなたの言葉の影響力について聞いたところによると、あなたはバブよりも劣っていないようだ。あなたより劣った知識をもっている者（バブ）に忠誠を誓うよりも、あなた自身が指導者であると主張された方がよいのではないか。」かれは大胆にこう返事した。「その御方（バブ）の知識により、わたしはその御方に頭を下げ、忠誠を誓うことになったのです。その御方こそは、わたしの主であり、指導者であります。大人になって以来、正義と公正をわたしの人生をみちびく主な動因とみなしてきました。この御方を公正に判断し、こう結論づけたのです。すなわち、敵味方両方が証言しているこの御方の超絶的な威力が、にせものであれば、古代から現代までの神の予言者はすべて、まさしく、にせものであると非難されなければなりません。わたしを敬慕する人たちは一千人以上いることは確かです。しかし、わたしにはかれらの心を変える力はありません。ところが、この御方は、その愛の霊薬により、もっとも墮落した人びとの魂を変え得る威力をそなえていることを証明されてきたのです。この御方は、だれからも援助を受けずに、自分の力だけで、わたしをはじめ、多数の人びとに大きな影響をあたえました。この御方と会わずに、自分の欲望をすて、その望みに熱烈にしたがってきた人も多くいます。かれらは、自分たちの犠牲が不十分なものであると知りながらも、その御方のために生命をささげてきたのです。かれらは、自分の献身がその御方の宮廷で、受け入れられるようにという望みをもっていたのです。」(pp.450-451)

そこで、総理大臣はこう述べた。「あなたの言葉が神から下されたものであっても、そうでなくても、あなたほどの高い地位を占められている方に死刑の宣告を言い渡したくないのだ。」ミルザ・ゴルバンは、もどかしくなって、叫ぶように言った。「なぜ、ためられるのですか。すべての名前は天から下されたことをご存知ないのですか？アリ（バブ）という名前をもつ方の道に、わたしは命をささげました。そのお方は、太古から、ゴルバン・アリというわたしの名を、かれの選ばれた殉教者の名簿に記録されているのです。この日こそは、ゴルバン祭日を祝う日です。バブの大業へのわたしの信仰を、生命の血で固める日です。ですから、いやがらずに、わたしを処刑して下さい。あなたの行為を非難するようなことはありませんからご安心下さい。」これを聞いた総理大臣は叫んだ。「この男を、ここから連れ出せ！ もう少しで、この狂った僧に、魔法にかけられるところだ。」ミルザ・ゴルバンは答えた。「あなたは魔法にかけられることはありません。心の清らかな者だけが魅せられるのです。あなたをはじめ、あなたのような人たちは、神の霊薬の威力を感じることはできません。その威力は、一瞬のうちに、人びとの魂を変えることができます。」

この答えに憤った総理大臣は、席から立ちあがり、全身を怒りでふるわせながら叫んだ。「この妄想にかられた者らを黙らせるのは剣の刃だけだ！」つづけて、かれはそこに居た死刑執行人に命じた。「この憎むべき宗派の信者らはもう出頭させないでよい。どれほど話しても、この者たちの強情さを変えることはできないからだ。お前の方で、信仰を取り消すように説得できる者は釈放し、残りの者は、首を切り落とすがよい。」

殉教の場が近づくにつれて、ミルザ・ゴルバンは、最愛なる御方との再会を期待して、大いなるよろこびでいっぱいになった。そして、歓喜のあまりこう叫んだ。「早くわたしを殺すがよい。そうすることにより、あなたは、永遠の生命の聖杯を、わたしに差し出すことになるからだ。わたしの息は絶えてしまうが、最愛なる御方は、わたしに数知れぬ生命を報酬としてあたえて下さるのだ。それは、死ぬ運命にある人間には想像できないものなのだ。」それから、かれは、群衆の方を向き、こん願した。「神の使徒（モハメッド）の信者の皆さん、わたしの言葉をよく聞くがよい。神の導きの昼の星であるモハメッドは以前、ヘジャーズの地平線上に昇られた。そして今、シラズの昼の星アリ・モハメッドとして、ふたたび同じ光を投げかけ、同じ温かみを注がれているのだ。バラの花はどの庭園に、いつ咲いてもバラの花である。」この呼びかけに耳をかそうとしない群衆を見て、かれは高らかに声をあげた。「ああ、強情な世代の人びとよ。皆は、不滅のバラの花から漂ってくる芳香にまったく気づいていない。わ

たしの魂は、歓喜であふれているが、残念なことに、その魅力を分かち合える人はなく、その栄光を理解できる人もいない。」(pp.451-453)

首を切られて出血しているセイエド・アリ（バブの伯父）の遺体を、足下に見て、かれの興奮は最高に達した。その遺体に身を投げるようにして、かれは叫んだ。「共に喜び合える日に幸いあれ！ われわれの最愛なる御方との再会の日に幸いあれ！」そしてかれは、遺体を両腕にかかえ、死刑執行人に向かって叫んだ。「こちらにきて、わたしの首を打て。この忠実な仲間、わたしに抱かれたままで、最愛の御方の宮居に共にいそぎたいのだ。」そう言った直後、死刑執行人の剣がかれの首を打った。二、三分後、この偉大な人物は息絶えた。この残酷な処刑を目撃した傍観者たちの心には、憤慨と同情が交錯した。悲痛な叫び声が、群衆からあがった。それは、毎年、アシュラ（エマム・ホセインの殉教）の日を迎えるとき、民衆が示す深い嘆きを思い起こさせるものであった。

三．つぎに殉教したのは、ファラハン出身のハジ・モラ・エスマイル・ゴミである。若者のかれは、真理を真剣に探求して、ついにカルベラに向かった。ナジャフとカルベラの主な僧侶のすべてと交わり、カゼムの弟子となった。そこで、知識と理解力を身につけ、その結果、二、三年後、シラズでバブの啓示を認めることができた。かれは、不動の信仰と献身の深さできわ立ち、コラサンに急ぐようにとのバブの指示を知るとすぐ、熱意をもってその要請に応じた。バダシュトに向かっていた一団に加わり、セルロール・ヴォジュドという称号をもらった。この一団とすごしているうちに、大業にたいする理解はいっそう深まり、その促進のための熱意も高まった。世俗への愛着を完全に断ち、自分に靈感をあたえてくれた信教の精神を、身をもって示したいという熱望にかられた。また、コーランとイスラムの伝承の句を、だれも匹敵できないほどの洞察力で解説することができたが、その雄弁は仲間の弟子たちから賞賛された。タバルシ砦が、バブの弟子たちの集合中心となった際、病床にあったため、その防御に参加できず、思い悩んだ。病気から回復後、タバルシ砦で、仲間の弟子たちが大虐殺されたことを知るとすぐ、いっそうの決意と献身をもって、その損失をおぎなうために立ち上がった。この決意により、かれはやがて、殉教の冠を獲得することになるのである。(pp.453-454)

断頭台に連行され、処刑の瞬間をまっている間、かれは、自分の前に処刑された二人の殉教者の遺体に目を向けた。二人は、抱き合ったまま横たわっていた。かれらの

血だらけの頭を見て、かれは叫ぶように言った。「わが愛する仲間よ、よくやった。あなた方は、テヘランを樂園とされた。しかし、わたしの方が、先に処刑されたかった。」こう言って、かれはポケットから硬貨を取り出し、死刑執行人に渡して、何か甘いものを買ってくれるように頼んだ。それがくると、少し取り、残りを死刑執行人にあたえ、こう言った。「わたしは、あなたの行為を許した。わたしに近づいて一撃を加えるがよい。三十年間、この祝福された日を見たいと切望してきたのだ。この望みがかなえられずに、墓場に行くのではないかと心配してきたのだが。」そして、天を向き、声をあげて祈った。「おお、わが神よ。わたしを受け入れたまえ。取るにたらないわたしの名前を、犠牲の祭壇で命をささげた不滅の人びとの名簿に、刻まれたまえ。」かれは、祈っている最中に、執行人に処刑してくれるように要請し、とつぜん命を断たれた。(p.454)

四．エスマイル・ゴミの息が絶えるか絶えないうちに、高僧のセイエド・ホセイン・トルシジが断頭台に連れてこられた。かれは、コラサン州の村トルシズの出身で、敬虔と公正な行為で大いに尊敬されていた。かれは、ナジャフで長い間学び、同僚の高僧たちから、コラサンに行って、修得した教えを広めるように依頼された。カゼマインに到着したとき、以前からの知人モハメッド・タギに会った。かれは、ケルマン最大の商人で、コラサンに支店をもっており、ペルシャに行く途中であったので、ホセイン・トルシジに同行することにした。モハメッド・タギは、バブの伯父セイエド・アリの親密な友人であった。かれは、一八四七年、シラズからカルベラに巡礼に行く準備をしていたときに、セイエド・アリからバブの大業を聞いて、信者になった人である。セイエド・アリが、バブを訪問するためにチェリグに行く予定であることを知ったモハメッド・タギは、ぜひ同行させてくれるように頼んだ。しかし、セイエド・アリは、「最初の目的を達するためにカルベラに向かい、そこで、わたしと合流できるかどうかを知らせる手紙を待つがよい。」と言った。チェリグに着いたセイエド・アリは、バブからテヘランに向けて出発するように指示された。テヘランに短期間滞在したあと、再度、甥のバブを訪れることができると期待した。チェリグで、かれは、シラズには帰りたくない意向を示したが、それは、町の住民がますますごう慢になっているのが耐えられなかったからである。テヘランに着いて、かれはモハメッド・タギに合流を要請した。そのとき同行したのがホセイン・トルシジで、かれはバグダッドからテヘランまでの途上で、バブの教えを受け入れた。(pp.455-456)

ホセイン・トルシジは、自分の処刑と殉教を見るために集まってきた群衆に向かっ

て、声をあげてこう言った。「イスラム教徒たちよ、わたしに耳を傾けよ。わたしの名前はホセインで、セイエド・ショーハダ（エマム・ホセイン）の子孫だ。聖なる都ナジャフとカルベラの高僧は皆、わたしが、イスラム教の法律と教えの権威ある解説者であることを認めてきた。最近、バブの名前を聞くまではそうであった。イスラム教の複雑な教えを研究したことで、バブがもたらしたメッセージの価値を理解できた。わたしは、こう確信する。バブが明らかにした真理を否定するならば、その以前の啓示すべてを捨てることになるということを。皆に願いたいことは、めいめいこの都市の僧侶と高僧に呼びかけ、集会を開いてもらうことだ。そこで、わたしは、この大業の真理を説明いたそう。わたしが、バブの主張が真実であることを証明できるかどうかを、かれらに判断してもらおう。もし、わたしの提出する証拠に、かれらが満足すれば、無実の者の血を流すことをやめていただきたい。もし、証明できなければ、わたしに罰をあたえてもらおう。」

かれが話を終わる前に、総理大臣に仕える執行人が、つぎの言葉をごう慢に間に入れた。「おれは、テヘランの著名な高僧七名が署名し、封印した死刑執行令状をもっている。かれらは、自筆で、お前が異端者であることを宣言した。おれは、審判の日に神の御前で、おまえの血を流す責任を負う覚悟だ。おれは、指導者たちの判断を信頼し、その決定を実行するのだ。」こう言った直後、剣を引きぬき、力いっぱいホセイン・トルシジを突いた。トルシジは息絶え、執行人の足下に倒れた。(p.456)

五. その直後、ハジ・モハメッド・タギ・ケルマニが処刑場に連れてこられた。その場の不気味な光景を見たかれは、はげしい怒りをおぼえ、死刑執行人に向かって叫んだ。「卑劣で、無情な虐待者よ！ 早くわたしを殺せ。わが最愛のホセインといっしょになりたいのだ。かれが逝ったあとで生きつづけることは、わたしにとって耐えられない拷問なのだ。」

六. モハメッド・タギが以上の言葉を終えた直後、ザンジャンの有名な商人セイエド・モルタダがいそいで出てきた。そして、モハメッド・タギの身体におおいかぶさるように身を投げ、「自分はセイエド（モハメッドの子孫）なので、神の目には、自分の殉教の方が、モハメッド・タギの殉教よりも賞賛に値する」と訴えた。死刑執行人が、剣を引きぬこうとしているとき、モルタダは、殉教した兄の思い出を口にした。この兄は、モラ・ホセインのそばで戦った人であった。その話を聞いた群衆は、かれの断固とした不動の信仰に驚嘆した。(pp.457-458)

七. モルタダの言葉が引き起こした動揺の最中に、モハメッド・ホセイン・マラゲが前方に走り出て、自分の仲間が殺害される前に、自分に殉教させてくれと願い出た。そして、深く敬愛していたエスマイル・ゴミの遺体を見たたん、衝動的にその遺体の上に身を投げ、遺体を抱いて、こう叫んだ。「この最愛の友人と離れることはできない。わたしは、かれを深く信頼してきた。かれも、真心からの愛情を注いでくれた。」

この三人がめいめい、自分が先に信教のために、生命を犠牲にしたいと念願していることを見た群衆は、仰天し、だれが最初に処刑されるであろうかと思った。ところが三人共に、自分たちの殉教を熱心にこん願したので、ついに、三人全員、同時に首を切られた。

この堅い信仰と、目にあまる残忍さを見ることは、めったにないことである。殉教者の数は少なかったにせよ、その殉教の状況を思い起こすとき、これほどの自己犠牲の精神を呼び起こした威力を認めざるを得ない。殉教者たちが保持していた高い地位、かれらの超脱心と信仰の活力、影響力のある人たちがかれらの命を救うために加えた圧力、そしてとくに、無情な敵の残虐行為を物ともしなかったその精神、これらの事実を考慮するとき、この事件は、バブの大業の歴史上、もっとも悲劇的なもののひとつとして見なされなければならない。(p.458)

この時点で、わたし（著者）は、これまでに改訂し、完成した原稿をバハオラに提出する光栄を得た。わたしの労力にたいして、バハオラは大なる報酬を与えてくれた。わたしは、バハオラの恩恵のみを求め、その満足のためにのみ、この仕事にかかったのである。バハオラは、情け深くわたしを召され、祝福をあたえてくれた。わたしの敬愛する御方（バハオラ）から呼び出されたとき、わたしは、牢獄の町アッカの自宅に居た。わたしの家は、アガ・カリムの家の近くにあった。それは、一八八八年十二月十一日で、けっして忘れられない日である。その折、バハオラが語られた要旨を、ここに再現したいと思う。

「われが、昨日著した書簡で、バダシュトの大会の状況に言及した際、『なんじの目をそむけよ。』という言葉の意味を説明した。われが、多数の名士たちとテヘランの王子の婚礼を祝っていたとき、バブの秘書セイエド・ホセインの父アーマド・ヤズディが、

とつぜん、入り口に現われ、われに、自分の方に来るように合図した。すぐ渡したい重要な伝言をもってきているようであった。しかし、われは、そのとき、集会の場を離れることができなかつたので、待つように合図した。閉会后、タヘレが、ガズビンで嚴重な監禁の下に置かれ、命が危機にさらされていることを知った。即刻、モハメッド・ハディを呼び、タヘレを救い出し、テヘランまで護送するように指示した。かの女がテヘランに到着したとき、敵が、わが家を押収していたので、タヘレをいつまでもわが家に住まわせることはできなかつた。したがって、かの女を国防大臣の家に移すことにした。国防大臣は、当時、国王の寵を失い、カシャンに追放されていた。そこで、そのときまだわが仲間であったかれの妹に、タヘレの世話を依頼した。(pp.459-460)

タヘレは、ある期間、この国防大臣の妹のところで過ごした。ある日、バブから、コラサンに向かうようにとの指示がわれのところに来た。われは、タヘレも、そこへすぐ出発すべきだと決め、ミルザ・ムサ（バハオラの実弟アガ・カリム）に、かの女を市の城門外のある地点まで案内するように依頼した。そこから、その付近で、かれが適切だと思うところに連れて行くように指示した。かれは、タヘレを果樹園の近くにある空き家に案内した。留守番の老人はかれらを歓迎した。ミルザ・ムサは、われのところにもどり、老人の歓迎を告げ、その周辺の景色の美しさをほめ称えた。その後、タヘレのコラサン行きを準備し、われも二、三日後に到着すると約束した。

まもなく、バダシュトでタヘレと合流した。そこで、かの女のために庭園を借り、かの女の救出にあたったモハメッド・ハディを、かの女の護衛とした。わが仲間は七十名ほどいたが、皆その庭園の近くに宿泊した。

ある日、われは病にかかり、床についていた。タヘレから、われに会いたいというメッセージが寄せられたが、われは返答に窮した。とつぜん、かの女が顔のヴェールをはずしたまま、入り口のところに現われた。アガ・ジャン（バハオラの秘書）は、この出来事を評しているが、まことに至言である。『ファテメは、審判の日に、人びとの眼前で、顔のヴェールを取って現われなければならない。その瞬間、見えざる御方の声が聞こえるであろう。<なんじが目にしたものから目をそむけよ。>』(p.460)

その日、仲間たちはどれほど仰天したことであろうか。かれらの心は、恐怖と困惑

でいっぱいとなった。恐怖で、タヘレの眼前から逃げ去った者らもいた。(女性が顔のヴェールをとるといふ) イスラム教の慣習に反する行為を見て、胸が悪くなり、耐えられなくなったからである。心をかき乱されたかれらは、だれも住んでいない近くの城に避難した。タヘレの行動に憤慨し、かの女との関係を完全に断った者たちの中には、セイエド・ナハリと弟のミルザ・ハディがいた。われは、メッセージを送り、仲間を捨てて、城に避難すべきではないと忠告した。

やがて、わが仲間たちは分散し、残されたわれは、敵のなすがままとなった。その後、われがアモルに行ったとき、住民が大変な騒ぎを起こし、四千人以上の群衆がモスクに集まった。また、家々の屋根にも大勢群がっていた。町の高僧が、われをばげしく非難し、マザンデラン方言で叫んだ。『おまえは、イスラム教を邪道に陥らせ、その名声を汚した。昨夜、おまえがモスクに入ってきた夢を見た。おまえの到着を見ようと、大勢が集まってきた。群衆がおまえの周りに押しかけてきたとき、ゴエム(バブ)が、隅に立ち、おまえの顔を凝視しているのを見た。その顔はひじょうなおどろきを現わしていた。この夢は、おまえが、真理の道からそれたことの証拠だと見なす。』

『その顔がおどろいていたのは、あなたと住民が、われを冷遇していることを、ゴエムが強く非難している証拠である』と、わたしは高僧に説明した。かれは、バブの使命についてわれに質問した。われはこう知らせた。『バブに直接会ったことはないが、深く敬愛している。強い確信をもって言えるが、いかなる場合でも、バブはけっして、イスラム教の教えに反するような行動を取ったことはない。』(P.461)

しかし、高僧もその弟子たちもわれを信じようとせず、わが証言を真理の逸脱だとして拒絶した。その後、かれらはわれを監禁し、仲間に出会うことを禁じた。しかし、アモルの知事代理がわれを釈放してくれた。かれは、従者たちに、壁に穴をあけさせ、われを監禁部屋から出して、自宅に案内した。住民が、このことを知ったとたん、われに敵対して立ちあがり、知事の邸宅に押しかけ、小石をわれに投げつけ、わが顔に毒舌をあびせかけた。

われが、モハメッド・ハディをガズビン町に送って、タヘレを救出させ、テヘランに案内するように計画していたとき、アブトラブから手紙を受け取った。それは、そ

のようなタヘレの救出はひじょうに危険であり、大騒動を引き起こしかねないことを力説したものであった。しかし、われは目的を変えなかった。アブトラブは親切で、おだやかで謙虚な気質をもち、威厳をもって行動する男であった。しかし、勇気と決意に欠けており、時折、その弱さをみせることがあった。」

ここで、七人のテヘランの殉教者たちに、どのようなことが起こったかを付け加えよう。三日三晩、かれらの遺体は、宮殿に隣接するサブゼ・マイダンに放置されていた。その間、無慈悲な敵の侮辱にさらされていた。何千というシーア派の熱烈な信者たちが、それらの遺体を足でけったり、顔につばをかけたりした。また、怒った群衆から石をなげつけられ、ののしられ、あざけられた。かれらはまた、それらの遺体に、大量のごみを投げかけ、目に余る残忍行為をしかけたのである。しかし、抗議の声をあげる者も、残忍な虐待者の腕を抑える者もいなかった。(pp.462-463)

激情の念がおさまったあと、かれらは、遺体をテヘランの城門外に埋めた。その場所は、公共墓地の外で、ノウとシャー・アブドル・アジムの門の間にある濠に隣接していた。七人の遺体はすべて、同じ墓に安置された。こうして、生存中、精神で結ばれていたかれらは、死後の身体も同じように一体となった。

七人の殉教のニュースは、バブにとって再度の打撃であった。バブは、すでに、タバルシの勇敢なる弟子たちにふりかかった悲運を悼んでいたからであった。かれらについて詳細に書いた書簡で、かれらの高遠なる地位を証言し、かれらこそ、イスラムの伝承にある「七頭の山羊」であると述べている。これらの山羊は、審判の日に、「約束されたガエムの前を歩くであろう」と書かれているのである。かれらは、生き方で、高貴な英雄的精神を現わし、その死で、神の意志に完全にしたがうという態度を示した。ガエムに先行するというのは、かれらの殉教は、かれらの羊飼いであるガエムの殉教に先立つという意味であるバブは説明した。それから四ヵ月後、バブはタブリズで殉教し、その予言は実現した。

その忘れがたい年には、バブとその弟子七名のテヘランでの殉教のほかに、ナイリズで重大な事件が起こり、ついに、ヴァヒドの死で最高潮となった。その年の終わりごろ、ザンジャンも同様、その地方に吹きまくった暴風の中心となった。その結果、バブの忠実な弟子たちの多数が虐殺されることとなった。かれらの気高い英雄的行為

と、バブ自身の殉教にともなう驚嘆すべき出来事で忘れられないものとなったこの年は、信教の血まみれの歴史に記録されたもっとも栄光ある章のひとつとして残されなければならない。

ペルシャの全土は、残忍貪欲な敵が執拗につづけた残虐行為で暗黒化した。ペルシャ東部のコラサンから、バブの殉教地である西部のタブリズまで、そして、北部都市のザンジャンとテヘランから南部ファルス州のナイリズまで、全国が暗黒におおわれたのである。この暗やみは、待望されていたホセインがやがて顕わす啓示の夜明けの光を予告するもので、それは、バブが宣言したものより、一層強大で、一層栄光あるものであった。(p.464)

第二十二章 ナイリズの動乱

タバルシの砦が包囲されはじめたころ、ヴァヒドは、ボルジェルドと、クルデスタン州で大業の教えを広めていた。かれは、それらの地方の住民大半を、バブの信教の信者となそうと決意し、そのあと、ファルス州に向かい、そこで努力をつづけるつもりでいた。モラ・ホセインが、マザンデランに向かったことを知るとすぐ、テヘランに急ぎ、タバルシ砦への旅の準備にかかった。出発しようとしていたとき、マザンデランから到着したバハオラから、タバルシの仲間のところに行くのは不可能であることを知った。このニュースに大変落胆したかれは、バハオラをひんぱんに訪ね、かれの英知ある貴重な忠告を得ることでなぐさめられた。

ヴァヒドは、やがてガズビンに行き、これまでしてきた普及活動をつづけた。そこからクムとカシャンに向かい、ここで、仲間の弟子たちと会い、かれらの熱意を高め、努力を強めることができた。つぎにイスファハン、アルデスタン、アルデカンに旅した。それらの町で、バブの基本的な教えを、熱意をもって大胆に伝え、かなりの数の有能な人たちを信者にすることができた。それからヤズドに向かい、新年の祝賀を同朋たちと祝うことができた。かれらは、ヴァヒドの到着をよろこび、大いにはげまされた。かれは影響力のある知名人であり、妻と四人の息子が住んでいるヤズドの家のほか、ザラビに先祖の家一軒、豪華な家具で飾られている家をナイリズにも所有していた。(pp.465-466)

ヴァヒドは、一八五〇年ジャマディオル・アヴァール月の最初の日に、ヤズドに到着したが、その月の五日目は、バブの宣言の記念日にあたり、また新年の祝宴日でもあった。その日に、都市の主な僧侶や名士が、ヴァヒドところに新年のあいさつに来た。そのとき、かれの敵のうち、もっとも卑劣な著名人ナヴァーヴも来て、その祝宴が豪華でぜいたくなことを、悪意をもってほのめかした。「国王の宴会でさえも、ここに並べられた豪勢なごちそうにはおよばない。今日の国家的な祝賀のほかに、あなたは、べつの祝宴を開くのではないのか。」これに対し、ヴァヒドは皮肉をこめて大胆に言い返したため、その場に居た人たちは笑い出し、皆一斉に拍手した。その悪意に対するヴァヒドの応答が適切だったからである。これほど大勢の著名人たちのあざけりを受けたことがなかったナヴァーヴは、ヴァヒドの言葉に怒りがこみ上げてきた。かれは、それまでヴァヒドへの敵対心を抱いてきたが、そのいぶる火炎はそのとき、強烈に燃え上がったのである。そこでかれは復讐を誓った。(pp.466-467)

ヴァヒドは、この機会をとらえて、恐れずに思う存分、信教の基本原則を宣言し、それが真理であることを証明した。その集まりに出席していた大半の者は、大業の主な教えを部分的に知っただけで、その重要性に気づかなかった。何人かは、大業に惹かれ、すすんで信者となった。残りの者は、公に大業の教えに挑戦することができなかつたが、心中ではそれを非難し、あらゆる手段に訴えて抹殺する決心をした。ヴァヒドが大業の真理を雄弁に説明するのを聞いて、かれらの敵意の炎はあおられ、即刻、かれの影響を消そうと覚悟した。この日、ヴァヒドに敵対する勢力が集結したのである。その結果、大変な苦難と悲嘆をヴァヒドにもたらすことになった。

かれらは、ヴァヒドを消すことを活動の最大目標となし、つぎのよううわさを広めた。すなわち、元旦に集まって来た政治面と宗教面の著名人たちの前で、ヴァヒドは、無遠慮にも、バブの教えを明らかにし、コーランとイスラム教の伝承から集めた証拠をあげて、その真実性を論じた。そして、つぎのようにせき立てた。「聴衆には、その町最高の高僧たちがいたが、だれも、かれの熱烈な主張に、あえて異議をさしはさむ者はいなかった。高僧たちが沈黙していたので、ヴァヒドを支持する熱狂の波が町中にひろがり、住民の半数がかれの意のままになり、残りの者たちもかれに強く惹かれているのだ。」(pp.467-468)

このニュースは野火のように急速にヤズド市とその周辺地域にひろがった。それにより、はげしい憎しみの炎が点される一方、信教にかなりの数の信者を加えるのに役立つ。アルデカンとマンシャドから、さらに、もっと遠方の町や村から多くの人びとが、新しい教えを聞くために、ヴァヒドの家に群がってきた。かれらは聞いた。「われわれは何をすべきですか。われわれは真心からバブの教えを信じ、献身したいと念願していますが、その方法を教えて下さい。」ヴァヒドは、朝から夜まで、この人たちの質問に答え、奉仕の道へとみちびいたのである。

女性を含めたこれらの熱狂的な支持者の活動は四十日間つづいた。ヴァヒドの家は、無数の信者たちの集会センターとなった。かれらは、自分たちの魂に燃え上がった信教の精神を、行動に移して役に立てたいと切望したのである。一方、ナヴァーヴは、つづいて起こった騒動をあらたな口実にして、知事の支持を求めた。この知事は、若年で、国事には経験がなく、すぐこの邪悪な策略者の陰謀にはめられた。ナヴァーヴは、ヴァヒドの家を包囲するために、知事に軍隊を送らせることに成功したのである。

一連隊がヴァヒドの家に向かっている間、町のならず者たちからなる暴徒が、ナヴァーヴから扇動されて、同じ方向に向かった。その家の住人たちをのろって、脅迫しようとしたのである。(p.468)

四方八方から敵に包囲されても、ヴァヒドは、自宅の二階の窓から、つづけて支持者たちの熱意を活気づけ、かれらの胸中に残っていた不明な点を明らかにした。支持者たちは、一連隊と激怒した暴徒を見て、どうしてよいかわからず、ヴァヒドに指示を求めた。かれは、窓際に座したまま、こう答えた。「わたしの前に置かれている剣は、ガエム（バブ）自ら贈られたものである。これらの者らと聖なる戦いをせよ、と命じられたのならば、わたしは、だれの助けも借りず、一人で敵軍を全滅させることができる。このことは神もご存知である。しかし、そのような行動は避けるように命じられているのだ。」そして、召使いのハサンが家の前に連れてきた馬に目をやりながら、こう付け加えた。

「この馬は、故モハメッド国王がわたしに下さったものだ。この馬に乗って、バブが宣言している信教について公平な目で調査する任務を与えられたのだ。国王は、調査の結果を個人的に報告するように要請された。テヘランの宗教指導者たちの中で、国王が信頼を置かれていたのはわたし一人だけだったからである。わたしは固い決断をもって、その任務に取りかかった。それは、バブの議論をやり込め、その思想を捨てさせ、わたしの方が指導者であることを認めさせ、わたしの勝利を証言させるために、テヘランに同行させようと決断していたからである。ところが、バブの面前に出て、かれの言葉を聞いたとき、わたしが想像していた状況と反対のことが起こったのだ。最初の面会で、わたしはまったく恥じ入って、狼狽してしまったのである。二回目の面会が終わったとき、自分は、幼児のように無力で、無知に感じた。三度目には、自分は、バブの足下の土のように卑しい存在であることがわかったのだ。かれは、わたしが以前想像していた卑劣なセイエド（モハメッドの子孫）ではなくなった。わたしにとって、かれは神ご自身の顕示者であり、神の聖霊の生きた権化なのである。その日以来、わたしは、かれのために、命をささげたいと切望してきた。それが実現される日がすばやく迫ってきているのでよろこんでいるのだ。」(pp.468-469)

ヴァヒドは、仲間たちの動揺を見て、落ち着き、忍耐するように、また、まもなく、神の愛する人びとを攻撃しようとする軍勢を、神はその見えざる手で、敗北させるので安心するようにはげました。こう言い終わらないうちに、知らせがきた。だれも

生きているとは思っていなかったアブドラという男が、同じく行方不明であった多数の仲間を連れて、とつぜん現われ、「この時代の主なる御方よ！」と叫びながら、敵軍の中に突進し、軍勢を追い散らした。アブドラの剛勇さに仰天した連隊の兵士は皆、武器をすて、知事と共にナリンの砦に避難した。(pp.469-470)

その夜、アブドラはヴァヒドに面会を求めた。かれは、自分は大業を固く信じていると、ヴァヒドを安心させ、敵を征服するための計画を知らせた。これにヴァヒドは答えた。「今日、あなたの介入で、この家は不慮の災難をのがれることができた。しかし、あなたに知ってもらいたいが、これまで、住民たちとの争いは、「この時代の主」の啓示に関する議論にかぎられてきた。ところが、ナヴァーヴは、わたしが、全州の実権をにぎり、さらに、それをペルシャ全体に拡大しようとしているとして、住民を扇動してわれわれと戦わせつもりだ。」ヴァヒドはつづけて、かれに勧告した。「すぐ、この町を離れ、全能なる神の保護に身を任せるがよい。定められた時間が来るまでは、敵は、われわれをわずかでも傷つけることはできないのだ。」

アブドラは、この勧告を無視した。その場を去りながら言った。「仲間を見捨てて、かれらを激怒している残忍な敵の掌中に渡すわけにはいかない。そうすれば、アシュラの日（エマム・ホセインの殉教日）に、カルベラの野に、エマム・ホセインを見捨てた者らと、わたしは同じではないか。慈悲深い神は、わたしの行動を大目に見て、許して下さるにちがいない。」こう言って、かれはナリンの砦に向かい、砦内に避難しようと集まっていた軍勢を制した。そして、知事をほかの者らといっしょに監禁することに成功した。もし増援隊がくれば、すぐそれを阻止しようとかれ自ら見守った。

一方、ナヴァーヴは、町全体に多数の住民を参加させ、大騒動を起こした。かれらが、ヴァヒドの家の攻撃準備をしているとき、ヴァヒドは、アブドル・アジムを呼び寄せた。かれは、タバルシの砦の防御に二、三日参加した人であり、かれの威厳のある態度は、多くの人びとの注目を引いていた。ヴァヒドはかれに、馬に乗り、街路や市場で、全住民に「この時代の主」の大業を受け入れるように、わたしに代わって、呼びかけるように頼んだ。そして、こう付け加えた。「わたしは、住民に対して聖戦をしかけるつもりは毛頭ないことを知らせよ。しかし、かれらにこう警告せよ。もし、かれらが、わたしの地位と家柄を無視して、わたしの家を包囲し、攻撃しつづけるならば、自己防衛のために、かれらの勢力に対抗し、追い散らさざるを得ないと。さらにもし、わたしの忠告を聞かず、悪巧みにたけたナヴァーヴのさそいに乗るならば、

七人の仲間を命じて、かれらの軍勢を撃退させ、かれらの望みを砕かすと。」

アブドル・アジムは、馬に飛び乗り、四人の仲間を護衛されて、市場に向かった。そして、威厳をもってヴァヒドの警告を高々と宣言した。それだけでは満足せず、宣言の効果を高めるために、自分独特の言葉を大声で付け加えた。「この訴えを無視しないようにせよ。おまえらに警告するが、この高々とひびきわたるわが声は、おまえらの砦の壁をふるわせ、強大なわが腕は、その強硬な門を破ることができるのだ。」かれの大声は、ラッパのようひびき渡り、人びとを仰天させた。この一声で、恐れをなした住民は、武器をすて、ヴァヒドへの攻撃をやめ、その血統を認め、尊敬すると宣言した。

住民がヴァヒドと戦うのを頑として拒否したため、ナヴァーヴは、砦の近くに留まっていたアブドラとその仲間を攻撃するように仕向けた。この衝突で、避難していた知事ははげまされ、砦の連隊に命じて、ナヴァーヴの一団と手を組んで出撃するように命じた。アブドラが町から攻めてきた群衆を追い払いはじめたとき、知事の命令で兵士が発砲した弾丸が足に当たり、地面に倒れた。仲間の多くも負傷した。かれの弟が、急いでかれを安全な場所に移し、そこから、かれの要請で、ヴァヒドの家に運ばれた。(pp.471-472)

敵は、かれを殺害しようと、ヴァヒドの家まで追ってきた。ヴァヒドは、家のまわりに群がってきた住民の騒ぎに、仕方なく、レザに、六人の仲間と出撃して、敵を追い散らすように命じた。レザは、マンシャドの最高の学識をもつ僧侶の一人であったが、今はヴァヒドの家の門衛として仕えていた。ヴァヒドは、こう命じた。「皆それぞれ、声高らかに、<アラホ・アクバール（神は最も偉大なり）！>と七回くり返し、七回目をとなえた瞬間、敵中に突進せよ。」

レザは、指示を受けたとたん、六人の仲間と共に、その任務を果たすために立ちあがった。六人の仲間は、貧弱な身体で、剣術の訓練も受けていなかったが、信仰の炎で燃え上がり、敵を大いに恐れさせた。その日、一八五〇年五月十日、敵のうち、もっとも恐れられていた七人が命を落とした。レザは、後日、つぎのように語っている。「敵を敗走させたあとすぐ、ヴァヒドの家にもどってきました。そこには、アブドラが負傷して横たわっていました。かれは、われわれの指導者のところに運ばれ、指導者自

ら、かれに食べ物をあたえていたのです。その後、かれは隠れ場所に運ばれ、そこで傷が癒えるまでいましたが、最後には、敵にとらえられ、殺害されました。」

さて、その夜、ヴァヒドは仲間に、分散し、細心の注意をはらって、安全な場所に行くように命じた。妻には、子供と所有物を全部もって、かの女の父親の家に移るように指示した。ただし、自分の所有物だけは残して置くように言い、こう説明した。「この宮殿のような家は、大業の道において破壊されるために建てたのだ。そして、この家をかざる豪華な家具類は、わが最愛なる御方のために、いつか犠牲にできるだろうと思って購入したのだ。わたしが、家と家具を犠牲にすれば、敵味方同様に、つぎのことに気づくであろう。すなわち、この家の持ち主は、この上なく貴重なものを授けられているので、どれほど豪華で壮麗な邸宅も、かれの目には価値のないものとなり、犬だけが興味をもつ骨の山のようになったのだと。この超脱の精神を見て、これらのよこしまな人びとが目を開き、その精神をもたらしした人に従いたいと、望んでくれないであろうか。」

同じ夜の午前〇時過ぎに、ヴァヒドは立ち上がり、所有していたバブの文書と、自著の論文のすべてを集め、召使いのハサンにあずけた。そして、市の城門外の道路がメヘリズ方面に分かれているところに持って行き、そこで、自分の到着を待つように命じた。さらに、指示通りにしなければ、再び自分と会えないであろう、と警告した。

ハサンが馬に乗り、出発しようとしていたとき、砦の入り口を監視していた番兵たちの叫びが聞こえてきた。番兵たちに捕らえ、貴重な文書を奪われないかと恐れたハサンは、師から指示された道ではなく、ほかの道を通ることにした。砦の裏を通りすぎようとしたとき、番兵に見つかり、馬は撃たれ、かれは捕らえられた。

一方、ヴァヒドは、ヤズドを離れる準備をしていた。息子のうち二人を残し、あとの二人と仲間二人を伴って出発した。この二人の仲間はヤズド出身で、ヴァヒドと同行したいと願ったのであった。一人は、ゴラム・レザという名前の大変な勇気を持ち主で、もう一人は、レザ・クチェックという名で、射撃の名人であった。ヴァヒドは、召使いのハサンに指示したと同じ道を通り、その場所に安全に着いたが、ハサンが居ないのでおどろいた。ヴァヒドは、ハサンが指示を無視して敵に捕らえられたことにすぐ気づいた。かれは、ハサンの運命をなげき、アブドラの行動を思い出した。アブ

ドラも同じように、ヴァヒドの指示を無視して、その結果、傷を負ったからである。ヴァヒドの一行は、その日の朝、ハサンが大砲から吹き飛ばされたことを知らされた。ヤズド市内の祈りの先導者で、敬虔の深さで知られていたミルザ・ハサンという人も、一時間後に捕らえられ、同じ運命にあった。(pp.474-475)

ヴァヒドのヤズドからの出発で、ふたたび活気づいた敵は、かれの家に乱入し、物品を奪い、家を完全に壊した。その間、ヴァヒドはナイリズに向かっていた。かれは徒歩になれていなかったが、その夜、二十キロメートルほど歩いた。二人の息子は、途中で、同行した二人の仲間から背負われて進んだ。翌日のうちに、ヴァヒドは近くの山のくぼみに身をかくした。その近くに、ヴァヒドに深い愛情をいただいている弟が住んでいた。かれは、ヴァヒドの到着を知るとすぐ、必需品をひそかに送らせた。同じ日に、ヴァヒドを追ってきた知事の騎馬隊が、村に到着し、ヴァヒドの弟の家を搜索したが、ヴァヒドを見つけることはできなかった。そこで、多くの物品を横領して、ヤズドにもどった。

その間、ヴァヒドは、山中を通過して、バヴァナット・ファルス地区に着いた。ヴァヒドの熱烈な賞賛者であったその地区の住民の大半が、大業の信者となった。その中には、バヴァナットのイスラムの長老セイエド・エスマイルがいた。この地区の信者の多数が、ファサ村までヴァヒドに同行してきたが、この村の住民は、ヴァヒドのメッセージに応じなかった。(pp.475-476)

旅の途上で休むたびに、ヴァヒドが最初に考えたのは、近くにモスクを探し出し、そこで、新しい時代の吉報を人びとに告げることであった。モスクでは、旅の疲れもまったく気にせず、すばやく説教壇にのぼり、自分が擁護している信教の教えを大胆に宣言した。もし、大業を受け入れる人たちが見つかり、その人たちが、自分が去ったあと、大業を広めることができると確信すれば、一晩だけ泊まった。そうでなければ、旅をつづけ、住民と交わるのを拒否した。かれは、たびたびこう言った。「旅の途中で通りすぎる村の住民から信仰の芳香を嗅ぐことができなければ、その村の食べ物も飲み物もいやな味がした。」

ファサ地区のルニズ村に到着したヴァヒドは、二、三日そこに留まることにした。自分の呼びかけに応じる人たちの心に、神の愛の火を点そうとつくしたのである。か

れの到着が、ナイリズに伝わると、チェナル・スクテ区域の全住民が、急いでかれに会いにきた。ヴァヒドを敬愛しているほかの区域の住民も、同様に会いにきた。しかし、ナイリズの知事ザイノルの反対をおそれて、大半は夜に出かけた。チェナル・スクテ区域からだけでも、ヴァヒドの義父で有名な判事シェイキ・アブドルの弟子百人以上が、ナイリズ最高の著名人たちに加わり、ヴァヒドが自分たちの町に到着する前に、歓迎のあいさつに出かけた。(この人たちの名前は省略) (pp.476-477)

かれらは皆、昼間または夜半に、ルニズ村まで出かけ、ヴァヒドを歓迎し、変わらぬ献身を示した。バブは、ナイリズで、とくに新しく大業を受け入れた人たちに宛てた書簡を著したが、かれらは、大業の意義とその基本的な原則については知らないままであった。大業の真の目的とその特徴を、かれらに説明する仕事はヴァヒドにあたえられたのである

ヴァヒドの到着を歓迎するために、多数の人びとが町を出たのを知った知事は、ただちに、特使を送り、かれらに追いつかせ、「ヴァヒドに忠誠を誓う者らは処刑し、妻たちを逮捕し、財産を押収する」と警告した。しかし、だれ一人これに耳を傾ける者はなく、かえって、リーダーのヴァヒドへの愛着を深めた。知事は、かれらの断固たる決意と、自分の警告が無視されたことを知って不安になった。自分がかれらから攻撃されるのではないかと恐れ、ゴトレー村に移った。その村は、ナイリズから十五キロメートルほど離れており、自分の最初の家もあった。その村を選んだ理由は、その近くに強固な砦があり、危険がせまった場合、避難できるからであった。さらに、村の住民は、剣術の訓練を受けており、必要な場合は、かれを守ってくれるという確約があったからであった。

一方、ヴァヒドは、ルニズを出て、エスターバナット村はずれにあるピルモラッドの廟に向かった。その村の僧侶たちは、ヴァヒドが村に入ることを禁止したが、二十人ほどの村民が、ヴァヒドを迎えに行き、ナイリズまで同行した。一行が到着したのは一八五〇年五月二十七日の午前中であった。ヴァヒドは、故郷のチェナル・スクテ区域に着いてすぐ、自宅にはもどらず、モスクに入り、集まってきた人びとにバブのメッセージを受け入れるように呼びかけた。かれは、自分を待っている人たちに、すぐ話しかけたいと思い、衣服のほこりも落とさずに、説教壇にのぼったのである。聴衆は皆、かれの説得力のある雄弁に、強烈な感動をおぼえた。そして、一千人ほどのチェナル・スクテ区域の住民と、ナイリズのほかの地域から集まって来た五百人がそ

の呼びかけに応じた。かれらは、歓喜に酔ってこう叫んだ。「メッセージを確かに聞きました。われわれはそれに従います！」こう言いながら、前に進んで、ヴァヒドに忠誠と感謝の念を表した。感動的な呼びかけで、これほど聴衆が魅惑されたのは、ナイリズでは、これまでに見られなかったことである。(pp.478-479)

聴衆の興奮がしずまるとすぐ、ヴァヒドはこう説明した。「わたしが、ナイリズに来た目的は、神の大業を宣言することだけである。神のメッセージが、皆の心に感動をあたえることができたことを、神に感謝するばかりだ。もはや、皆さんといっしょに、ここに留まる必要はない。滞在をのばせば、知事が、わたしのゆえに、皆さんを虐待するであろう。知事は、シラズから増援隊を呼び寄せ、皆の家を破壊し、口では表現できないほどの侮辱を皆にあたえるであろう。」これを聞いて、聴衆は皆いっせいに答えた。「われわれは、神の意志に従う準備ができています。われわれにふりかかってくる災難に耐えうる力を、神はあたえて下さいますが、今とつぜん、あなたと別れることはできません。」こう言った直後、かれらは、男女共に手をつなぎ、興奮とよろこびにあふれ、歓呼の声をあげながらヴァヒドを自宅に送りとどけた。(pp.479-480)

ヴァヒドは、二、三日ナイリズに留まることにし、ほとんどの時間をモスクで過ごした。そこで、雄弁に、少しのためらいもなく、自分の師（バブ）から受けた基本的な教えを解説した。毎日、聴衆の数は増してゆき、そのおどろくべき影響があちこちでいっそう明らかに見られはじめた。

ヴァヒドの努力で、住民がますます魅惑されているのを見た知事ザイノルは、眠っていた敵意の炎をふたたびあおられた。そこで、大業を滅亡させるために、軍隊の編成を命じた。かれは、この大業は、自分の地位をすばやく覆そうとしていたと感じたのである。まもなく、かれは、騎兵隊と歩兵隊を編成する一千の兵士を募ったが、かれらはすでに、戦闘の訓練を受けており、十分な武器もそなえていた。かれの計略は、急襲して、ヴァヒドを捕らえることであつた。

ヴァヒドは、知事の策略を知るとすぐ、自分を迎えるためにエスターバナットから来て、ナイリズまで同行した二十人の仲間に、チェナル・スクテ区域近くにあるカジェ砦に入るように命じた。そして、シェイキ・モシェンの息子シェイキ・ハディを一団のリーダーに任命し、その区域に住む信者たちに、砦の門と小塔と外壁を補強する

ように指示した。

一方、知事は、自分の事務局をバザール区の自宅に移した。かれは、募集した兵士たちと共に、近くの砦に入り、その小塔や外壁を補強しはじめた。その砦から町全体を見下ろすことができた。知事は、その区の区長で、ヴァヒドの仲間の一人であるセイエド・アブタレブを、強制的に自家から立ちのかせ、その家の屋根を補強して、何人も兵士を配置した。そして、指揮官アリ・カーンに命じて、バビたちに向かって発砲させた。最初に撃たれたのは、アブドル・ホセインで、この人は、高齢にもかかわらず、ヴァヒドを迎えるために町を出て、歩いて行った人であった。かれは、自家の屋根の上で祈りをささげていたとき右足を撃たれ、大量に出血した。ヴァヒドは、かれが受けた負傷に深く同情し、文書でお見舞いの言葉を送った。そして、高齢で、大業の道に最初に身を犠牲にするように選ばれたことは幸運であると、かれを元気づけた。(pp.481-482)

バブの教えを急いで受け入れ、まだその意義を十分に理解していなかった仲間たちは、とつぜん攻撃されてうろたえた。かれらは、信仰に大衝撃を受けたが、中には、真夜中に、仲間から離れて敵軍に加わった者もいた。ヴァヒドは、そのことを知られるとすぐ、夜明けに起き、馬に乗り、支持者の一団をともなって、カジェの砦に向かった。そして、そこに住居をかまえることにした。

ヴァヒドが来たことで、あらたな攻撃がはじまった。ザイノル（ナイリズの知事）はすぐ、兄アスガール・カーンと千人の訓練された兵士を送り、砦を攻囲させた。砦には、すでに七十二人のヴァヒドの仲間たちが避難していた。日の出に、そのうち何人かが、ヴァヒドの指示に従って出撃し、おどろくべき速さで包囲軍を追い散らした。この戦いで、三人の仲間が命を落とした。最初の仲間はタジョッド・ディンで、大胆不敵さで知られ、ペルシャ帽子の製造業者であった。つぎは、農業を営むエスカンダールの息子ザイニルで、最後は、アブール・ガゼムで、高い業績をもった人であった。

兵士たちのとつぜんの敗走で、シラズの知事フィルズ・ミルザ王子は不安になった。そこで、砦のヴァヒドの仲間たちを直ちに全滅させる命令を出した。ザイノル（ナイリズの知事）は、王子の従者をヴァヒドに送り、両者間の関係が緊迫してきたゆえ、ナイリズを離れるように要請した。そうすれば、騒動がまもなくおさまるであろうと、

説得にかかったのである。ヴァヒドはこう答えた。「知事ザイノルに伝えよ。わたしに同伴しているのは、二人の子供と二人の従者だけだと。わたしがこの町にいることが、騒動の原因となるならば、進んでここを離れよう。しかし、なぜ、予言者モハメッドの子孫にふさわしくわれわれを迎えないのか？ なぜ知事は、われわれに水もあたえず、兵士たちにわれわれを包囲させて攻撃しようとしているのか？ われわれの生活必需品をうばうならば、知事に警告する。かれがもっとも浅ましい人間だとみなしているわたしの仲間七人を出撃させ、知事の総合軍勢に恥ずべき敗北をもたらすつもりだと。」(pp.482-483)

知事が、この警告を無視したのを知ったヴァヒドは、仲間たちに、砦から出て、攻撃者たちをこらしめるように命じた。かれらは、若年で、武器を用いたこともなく、また、訓練され、組織された軍隊の士気をくじくことにも無経験であった。しかし、見事な勇気と確信をもって、敵に敗北をあたえたのであった。この戦いで、アスガール・カーン（知事の兄）は命を落とし、二人の息子は捕虜となった。知事は、不面目にも、分散した残りの軍勢とともに、ゴトレー村に退却した。そして、王子に状況の重大さを告げ、増援隊を直ちに送ってくれるように求めた。とくに、大砲、および歩兵隊と騎兵隊の大連隊を要請したのである。

一方、ヴァヒドは、敵が、自分と仲間を皆殺しにしようとしているのを見て、仲間
に指示した。それは、砦の防護体制を強化し、砦内に水槽を備え、テントを門外には
ることであった。その日、仲間の何人かは、それぞれ特定の仕事をあたえられた。ミ
ルザ・モハメッドは砦の門衛となり、ユソフは基金係となり、カルベラ・モハメッド
は砦とバリケードに隣接する庭園の管理者となった。ミルザ・アーマドは、水車塔担
当となった。この水車塔は、砦の近くにあり、チェナールという名で知られていた。
シヴェは刑の執行人となり、ザイノル（ナイリズの知事）の従兄弟ジャファーは記録
係となり、ファオドロラは記録の校正係、バツガルは看守、タギは登録官、ヤズディ
は軍の指揮官となった。ヴァヒドは、エスターバナット村からナイリズまで同伴した
砦内の七十二名の仲間に加えて、有名な僧侶ジャファーとヴァヒドの義父アブドル・
アリの要請で、バザール区の多数の住民と、自分の親族数人を砦に入れることにした。
(pp.483-484)

知事は、再度王子に訴えた。今回は、増援隊を緊急に要請した嘆願書に、五千ドル
に相当する額を個人的な贈り物として同封した。その封書を親密な友人モラ・バゲル

に託し、自分の馬を使用させて、王子に直接渡すように指示した。知事がモラ・バゲルを選んだ理由は、かれが大胆で、能弁で、気転のきく男であったからであった。モラ・バゲルは、人影のない道を通り、一日の終わりに、フダシュタクという場所に到着した。その近隣に砦があり、そのまわりには遊牧民族がテントをはっていた。

モラ・バゲルは、一つのテント近くで馬からおり、そのテントの住人と話しているとき、バヴァナットのイスラムの長老セイエド・エスマイルが到着した。かれは、ある緊急な用事のため、ヴァヒドから許可を得て故郷に行き、そこからナイリズにもどるところであった。昼食後、かれは、盛装させた馬が近くのテントのロープにつながれているのを見たが、その馬は、知事の友人がナイリズから乗ってきたもので、シラズに向かう途中であることを知った。まれに見る勇気をもったセイエド・エスマイルは、直ちにそのテントに行き、馬からおり、剣をさやから抜いて、モラ・バゲルが話しかけていたテントの所有者にきびしく言った。「このならず者を逮捕せよ。この男は、時代の主の面前から逃げた者だ。両手をしばり、わたしのところに連れて来い。」この強い言葉と態度にびっくりしたテントの住人は、すぐその命令に従った。そして、モラ・バゲルの両手をロープでしばりあげ、そのロープの端をセイエド・エスマイルに渡した。そのロープを手にとるとすぐ、馬に拍車をかけ、ナイリズに向かった。モラ・バゲルは、ロープで引っ張られながら、その後に従わざるを得なかった。町から七マイルほどで、ラスタク村に着き、モラ・バゲルを、ハジ・アクバーという区長に渡し、ヴァヒドの面前に連れて行くように頼んだ。ヴァヒドの質問に、モラ・バゲルはシラズへの旅行目的を率直に、また詳細に説明した。ヴァヒドは、かれを許すつもりでいたが、かれの態度が変わらなかったため、ヴァヒドの仲間たちの手で命を断たれた。(pp.484-485)

知事ザイノルは、シラズへの援助要請の決意をゆるめるところか、一層の熱意を込めて王子に訴えた。この地域の安全をおびやかしている重大な脅威を根絶するために、援助を倍加されるようにと、こん願したのである。それだけでは満足できず、信頼できる従者数人に、さまざまな贈り物をもたせてシラズの王子のもとに送った。さらに、成功を確実なものにするために、シラズの主な僧侶と長老に、数通の嘆願書を提出した。その中で、ヴァヒドの目的をひどく曲げ伝え、その破壊活動を長々と述べ、かれらに、増援隊の迅速な派遣を王子にこん願してくれるように頼んだのであった。

要請を受けた王子はよろこんで応じ、アブドラ・カーンに、数人の士官を先頭に、

二連隊を引き連れてすぐ、ナイリズに向かうよう命じた。この二連隊に砲兵隊もともなわせた。王子はまた、ナイリズの代理人に、その地区の周辺の村々に住む強壯な男たちを集めるように指示した。さらに、ヴィスバクラリエという名で知られている部族の男たちも、知事ザイノルの軍隊に加わるように命じたのである。(p.485)

とつぜん、大軍がヴァヒドと仲間たちが避難している砦を取り巻いた。そして、砦のまわりに、塹壕を掘り、それにそってバリケードを置きはじめた。それが完成するとすぐ発砲しはじめた。最初の弾丸が、門前で監視していた仲間の馬にあたった。つぎの弾丸は、門の上方の小塔をつらぬいた。この砲撃中に、仲間の一人が、小銃で砲兵隊長を撃ち、即死させた。その瞬間、銃声のとどろきは止まり、兵士たちは退却して塹壕にかくれた。その夜、仲間も、攻撃者も出撃することはなかった。

しかし翌晩、ヴァヒドはヤズディを呼び寄せ、十四人の仲間と共に、出撃して敵を追い払うように命じた。選ばれた十四人のほとんどは高齢者で、かれらに、はげしい戦いができると思った者はいなかった。その中には、若者以上に熱意と気力をそなえていた九十才以上になる靴屋がいた。残りは若者で、危険に直面したり、突撃にともなう緊張に耐えたりする準備などまったくなかった。しかし、かれらは不屈の決意と大業の崇高な運命にゆるがぬ確信をもっており、年令など問題ではなかったのである。ヴァヒドはかれらに、砦を出て、「アラホ・アクバール！」（神は偉大なり！）と一斉に叫びながら、敵軍に向かって突進するように命じた。(pp.485-486)

出撃の合図が下されるとすぐ、かれら馬に乗り、小銃を手にして砦の門を出た。火を吹く大砲にも、雨と降ってくる銃弾にもひるまず、敵陣の中に突入した。このとつぜんの戦いは、八時間ほどつづいた。この戦いで、この恐れを知らない仲間の一団が見せた見事な武術と大胆さは、敵軍の老練兵たちをおどろかせたほどであった。ナイリズ町とその周辺から、敵の合同大軍に勇敢に耐えた仲間の小一団を援助するために、人びとがかけつけてきた。戦いの規模が拡大されるにつれて、ナイリズの女性たちは、自家の屋根にのぼり、見事な武勇をたたえる叫びをあちこちであげた。その声援とともに、銃声のとどろきも高まっていった。それはまた、仲間の一団が、激動の中で興奮のあまり口にした「アラホ・アクバール」の叫びで一層強烈となった。女性群の叫び声と、仲間たちのおどろくべき大胆さと自信で、敵は完全に士気をくじかれ、その努力は無となった。敵軍の基地は見る影もなくなり、勝利者たちが砦にもどるときには悲惨な光景をあらわしていた。かれらは、重傷を負った者らのほかに、六十人の死

者を運んでいったが、その中には、つぎに示す二十七名が入っていた。

- 一. ゴラム・レザ・ヤズディ
- 二. ゴラム・レザ・ヤズディの弟
- 三. カユロラの息子、アリ
- 四. カジェ・ガニの息子、カジェ・ホセイン・ガンナド
- 五. モラ・メヘディの息子、アスガール
- 六. カルベライ・アブドル・カリム
- 七. マシュハディ・モハメッドの息子、ホセイン
- 八. マシュハディ・バゲル・サバグの息子、ザイノル・アベディン
- 九. モラ・ジャファル・モダヘブ
- 十. モラ・ムサの息子、アブドラ
- 十一. マシュハディ・ラジャブ・ハッダッドの息子、モハメッド
- 十二. カルベライ・シャムソッド・ディン・マレキ・ダズの息子、カルベライ・ハサン
- 十三. カルベライ・ミルザ・モハメッド・ザリ
- 十四. カルベライ・バゲル・カフシュ・ダズ
- 十五. ミルザ・ホセイン・カシ・サズの息子、ミルザ・アーマド
- 十六. モラ・アブドラの息子、モラ・ハサン
- 十七. マシュハディ・ハジ・モハメッド
- 十八. ミル・アーマド・ノクホド・ベリズの息子、アブ・タレブ
- 十九. モハメッド・アシュルの息子、アクバール
- 二十. タギエ・ヤズディ
- 二一. モラ・ジャファールの息子、モラ・アリ
- 二二. カルベライ・ミルザ・ホセイン
- 二三. シャリフの息子、ホセイン・カーン
- 二四. カルベライ・ゴルバン
- 二五. カジェ・アリの息子、カジェ・カゼム

二六． ハジ・アリの息子、アガ

二七． ミルザ・モイナの息子、ミルザ・ナワラ (pp.486-487)

この完敗で、知事ザイノルと幹部は、ヴァヒドとその仲間を軍力で征服することはできないと確信した。メヘディ・ゴリ王子の軍隊も同様に、バブの仲間たちとの戦いでみじめに敗北した。これらの卑怯な者らが、無敵の敵を征服できたのは、裏切りと欺きという武器を用いたからであった。知事とその幹部が最後に取った同じ手段で、かれらの無力さが暴露されたのであった。強大な軍力とファルス知事と住民からの精神的支援があったからにもかかわらず、かれらの目には、無訓練の卑しむべき者らとしか見えない小人数の一団を負かすことができないという無力さであった。かれらは心の中で、砦内の有志者の一団を負かすことは不可能なことを確信していたのである。

敵は、平和を求めふりをして、砦内の清らかで高貴な心をもつ人びとをだますことにした。二、三日、攻撃を中止したあと、砦の一団に、厳粛な訴えを文書にして提出してきた。内容はつぎのようであった。「これまで、われわれは、あなた方の信教の真の特性を知らなかったため、扇動者たちにそそのかされて、あなた方は皆、イスラム教の神聖な教えにそむいていたと信じてきた。この理由で、あなた方の信教を根絶しようとしてきた。しかし、この二、三日間に、皆の活動は、政治的な目的をもつものでなく、また国家をくつがえそうとするものでもないことがわかった。さらに、あなた方の教えは、イスラム教の基本的な教えからそれほど離れたものでないことも確信した。あなた方は、このように主張しているようだ。すなわち、ある人物が現われ、その人の言葉は靈感を受けたもので、その教えは確実に、イスラム教徒はすべてその人物を認め、支持しなければならいと。われわれが、あなた方に要請したいことは、われわれの誠実さを信じ、代表者を砦からわれわれの軍本営に二、三日送ってもらうことだ。そこで、あなた方の信仰の内容を確かめたい。この要請を受け入れてくれないければ、われわれは、あなた方の要求が正しいと確信することはできない。あなた方の信教が正当であると証明されれば、われわれもまた、それをよろこんで受け入れよう。なぜなら、われわれは、真理の敵ではなく、また真理を否定しようなどだれも思っていないからだ。われわれは、あなた方の指導者をイスラム教の闘士であり、われわれの模範であり、導きであるとみなしてきた。われわれの印章を押したこのコーランは、われわれの意図が誠実であるという証拠である。この聖典により、あなた方の主張が真実であるか、誤りであるかを決められよう。もし、われわれがあなた方をあ

ざむくならば、神とその予言者たちののろいがわれわれに下されよう。このわれわれの要請に応じられるならば、全軍の兵士たちは破滅から救われよう。拒否されれば、かれらは不安とうたがいの状態にされたままであろう。われわれは誓うが、あなた方の教えが真実であると確信したら、直ちに、あなた方がすでに見事に示されたと同じ熱意と献身で行動するつもりである。あなた方の友はわれわれの友となり、あなた方の敵は、われわれの敵となろう。あなた方の指導者が命令されることにはすべて、われわれも従うことを誓う。一方、われわれが、あなた方の主張が真実であると確信できなければ、あなた方が安全に砦にもどれるようにし、戦いをつづけることを厳粛に約束するが、あなた方の大業の真理が明らかになるまでは、流血を避けるように願う。」
(pp.488-489)

ヴァヒドは、そのコーランをうやうやしく受け取り、尊崇の念をこめてそれに接吻した。そして、こう述べた。「いよいよ定められた時がきた。かれらの要請に応じれば、かれらは、自分たちの裏切り行為の卑劣さを感じるにちがいない。」かれは仲間たちに向かい、こう付け加えた。「わたしは、かれらの陰謀に十分気づいているが、この機会をとらえ、かれらの求めを受け入れることは、わたしの義務であると感じる。それにより、わが最愛の信教の真実性をふたたび明らかにできるからだ。」そして、各人仕事をつづけ、敵の言葉を信用しないように、さらに、つぎの指示を出すまでは、すべての戦いを中止するように命じた。

ヴァヒドは、以上の言葉で仲間たちに別れを告げ、五人の従者と共に、敵の本営に向かった。従者の中には、モザヒエブと裏切り者のアベドがいた。知事ザイノルがアブドラ・カーンとほかの幹部全員をともなってヴァヒドを迎えに出てきた。かれらは、仰々しくかれを迎え、特別に張られたテントに案内し、残りの士官たちに紹介した。ヴァヒドは椅子に座り、知事とアブドラ・カーンと一人の士官に座るように合図した。そのほかの者たちは皆、かれのそばに立ったままであった。ヴァヒドがかれらに宛てた言葉は、強烈で、石のような心をもった者でさえ、その力を感じずにはいられなかった。バハオラは、「スレエ・サブル」という書簡の中で、ヴァヒドの気高い訴えに不朽の名誉をあたえ、その意義を明らかにしている。ヴァヒドはこう宣言した。「われは、わが主がわれに託された証拠で身を固めてここに来た。われは、神の予言者の子孫ではないのか？ それでは、何ゆえにわれを殺そうとするのか？ 何の理由でわれに死刑の宣告をし、わが家系がわれに授けた権利を認めようとししないのか？」

かれの威厳ある態度と、心に浸透する雄弁に、そこに居た者らは狼狽した。三日三晩、かれらはヴァヒドを歓待し、大いなる尊敬をもって遇した。会衆の祈りでは、皆、かれの後に従い、その説話に注意深く耳を傾けた。外面では、かれらは、ヴァヒドに従うように見えたが、実際は、ひそかにかれの命を取り、またかれの残りの仲間たちを皆殺しにする策略を立てていたのである。かれらは、つぎのことを十分に知っていた。すなわち、仲間たちが砦内にいるかぎり、かれにわずかでも傷を負わせれば、前に直面した以上の危機に見舞われるであろうと。かれらは、女性たちの怒りと復讐と、男性たちの勇猛さと武術を思っ恐怖でおののいた。さらに、大軍と十分な武器を用いても、小人数の未熟な若者と老人の一団を征服することができなかつたことを知っていた。大胆で慎重に案出された策略以外には最終的に打ち勝つことができないと考えたのである。かれらの心を満たした恐怖感、大部分、知事言葉でそそのかされたものであった。知事は、断固とした決意をもって、憎しみをもちつづけ、その炎をかれの心に燃やしつけたのであった。ヴァヒドの度重なる勧告で、知事は不安になり、その魅惑的な言葉で、かれらが、ヴァヒドに忠誠をつくすようになるのではないかと心配になったのである。(pp.490-491)

知事とその同僚たちは、ついにつぎのことをヴァヒドに要請することにした。すなわち、自筆で、砦内に居る仲間たちに宛ててメッセージを書かせることであった。その内容は、和解が成立したので、軍本営に来て、ヴァヒドと合流するか、あるいは自家にもどるようにと勧めるものであった。ヴァヒドは、その要請に応じたくなかつたが、最後には強いられて、そうせざるを得なくなった。このメッセージのほかに、かれは第二の手紙を書き、ひそかに敵の悪質な策略を知らせ、あざむかれないように警告した。そしてこの二通の手紙をアベドに託し、最初の手紙を破棄し、第二の手紙を仲間たちに渡すように指示した。さらに、仲間たちにこう伝えるように頼んだ。すなわち、仲間の中から、強壯な者らを選んで、真夜中に突撃し、敵軍を散らすようにと。

アベドは、この指示を受けるとすぐヴァヒドを裏切って、そのことを知事ザイノルに告げた。そこで知事は、アベドに、砦の仲間たちをヴァヒドの名のもとに分散させるように命じ、十分な報酬をかれに約束した。この不実なアベドは、最初の手紙を仲間たちに渡し、指導者のヴァヒドは、敵の全軍隊を信教の信者となすことに成功したゆえ、皆に自宅に帰るよう忠告していると伝えたのである。(pp.490-491)

仲間たちは、そのメッセージをもらって、はたと困ったが、ヴァヒドの明らかな指

示を無視できないと思った。そこで、気はすすまなかったが、砦を無人にして、皆分散することにした。数人は、ヴァヒドの命令に従い、武器をすて、ナイリズに向かった。

知事は、ヴァヒドの仲間たちが砦を離れるのを予期して、一分隊を派遣して、かれらが町に入るのを妨害させることにした。やがて、仲間の一団は、多数の兵士たちに取り囲まれた。兵士の数は、本営から送られてくる増援隊でますます増していった。仲間たちは、とつぜん敵に囲まれたので、仕方なく、全力をはらって敵を撃退し、できるだけ速くモスクに入ることにした。ある者らは持参していた剣や小銃で、ほかの者らはこん棒や小石だけで、敵を追い払いながら町に入ってきた。「アラホ・アクバー！」の叫びが、これまで以上に強烈にあげられた。不真実な敵の中を押し分けて行く途中で殉教した者もいたが、残りは、負傷したり、あらゆる方向から襲ってきたあらたな増援軍に苦しまされたりしながら、最後にはモスクの避難所にたどりついた。

一方、知事の軍隊の士官で、名うてのモラ・ハサンは、兵士をひきつれて、ヴァヒドの仲間よりかなり前にモスクに着き、小塔にかくれ待ち伏せしていた。そして、ちりじりになった仲間の一団がモスクに到着するやいなや、かれらに発砲したのである。仲間の一人がモラ・ハサンを認め、「アラホ・アクバー！」と叫びながら小塔にのぼり、その卑怯な士官を撃ち、地面に投げ落とした。兵士たちは、モラ・ハサンを傷の手当てができるところに運んでいった。

仲間たちは、モスクに避難できなくなったため、ヴァヒドの運命を確認するまで、ほかの安全な場所を見つけてかくれることにした。かれらが裏切られたあと、最初に考えたことは、ヴァヒドに会い、その指示を受けることであった。しかし、ヴァヒドに何が起こったかを知ることができず、もしかして、処刑されたかも知れないと思って不安になった。(p.493)

その間、知事と幹部は、ヴァヒドの仲間たちが分散したことで勇気づき、誓いを回避し、相手の指導者（ヴァヒド）を邪魔されずに殺害できる方法を見つけようと必死になった。つまり、もっともな理由をつけて、長い間心にいだいてきた欲望を果たそうとしたのである。相談中に、残忍さで知られているアッバス・ゴリがこう提案した。すなわち、皆が、誓いを立てたことで困っているのなら、自分はまったくその誓い

に加わっていないので、皆ができないでいることを実行できると。そして、怒りを爆発させて、こう言った。「われが、国の法律にさからう罪を犯したとみなす者は、何時であれ、逮捕し、処刑することができるのだ。」かれは、その後すぐ、戦いで命を落とした者らの親族を集め、ヴァヒドに死の宣告を出すように求めた。最初に、兄が捕らえられたモラ・レザが応じた。つぎに、弟が戦死したサファーが出てきた。三番目は、同じく父が戦死したアガ・カーンが志願してきた。この父は、知事ザイノルの兄であった。

かれらは、アッバス・ゴリの求めによるこんで応じようと、ヴァヒドのターバンを引ったくった。そして、それをかれの首に巻きつけ、その端を馬につなぎ、路上を引きずらせた。このヴァヒドに加えられた侮辱を見た者らは、エمام・ホセイン（三代目のエمام、六八〇年に殉教）の悲劇的な死の状況を思い起こした。その遺体は、激怒した敵の餌食となり、騎馬隊の大軍に無情にも踏みにじられたのであった。ナイリズの女たちは、殺害者たちの勝利の叫びに興奮し、四方八方から遺体のまわりにひしめき、ドラムやシンバルに合わせて、自制できなくなった狂信的な感情を思う存分はきちらした。(p.494)

かれらは、遺体を取り囲んでお祭り気分で踊り、ヴァヒドが苦悶の最中で語った言葉をあざけた。それは、エمام・ホセインが以前、同じ状況の中で語った言葉であった。「おお、わが最愛なる御方よ。あなたは、わたしがあなたのためにこの世をすて、あなただけを信頼していることをご存知です。あなたのもとにいそぎたいと願っております。あなたのうるわしい御顔がわたしの目に明かされたからです。あなたは、迫害者がわたしに対していただいている邪悪な陰謀を見ておられます。わたしは決して、迫害者の望みに従ったり、かれに忠誠を誓ったりすることはありません。」

こうしてヴァヒドの気高い、英雄的な生涯は終わった。その波瀾に富んだ輝かしい生涯は、膨大な知識、不屈の勇氣、まれにみる自己犠牲の精神できわだっていたが、それはまた、殉教という栄光ある死の王冠を必要としたのである。この死は、同じ信教を信じる者たちの生命と財産に猛攻撃がはじまる合図でもあった。およそ五千人がその下劣な任務を命じられた。男たちは捕らえられ、くさりをつけられ、虐待され、惨殺された。

女たちと子供たちは、捕らえられ、描写できないほどの残虐行為を受けた。かれらの財産は略奪され、家屋は壊され、カジエの砦は焼き払われた。男たちの大半は、まず、くさりをつけられたままシラズに連行され、ほとんどが、そこで虐殺された。ザイノル（ナイリズの知事）は、個人的な利益を得るために、何人かを暗い地下牢に入れたが、目的が達せられると、かれらを野蛮な手下たちに渡した。かれらが受けた残虐行為のひどさは言葉では言い表せない。ザイノルの手下たちは、かれらをまずナイリズの街路を行進させたあと、かれらから何らかの利益を引き出そうと、拷問をかけた。それに成功して満足すると、残忍なやり方で殺害したのである。復讐のために、あらゆる拷問道具が用いられた。男たちは焼印を押され、爪ははがれ、身体はむち打たれた。さらに、鼻には穴を開けられ、そこにひもを通され、両手足にはくぎを打たれた痛ましい状態で、路上を引っ張りまわされたのである。こうしてかれらは、人びとの軽蔑とあざけりの的とされたのであった。(pp.495-496)

男たちの中にはジャファーという人がいた。かれは、以前強大な影響力をもち、人びとから深く尊敬されていた。その尊敬は大変なもので、ザイノルも、かれを自分よりすぐれているとみなし、この上ない敬意と礼儀をもって接していたのである。しかし今、ザイノルは、その同じ人物のターバンを汚し、火にくべるように命じたのである。血統を示すしるしをはぎとられ、大衆の目にさらされたかれに、ののしりとあざけりの言葉が投げつけられた。(pp.497-498)

残虐行為の犠牲者には、タギもいた。かれは以前、正直と公正で高い名声を得ており、裁判官は、かれの判断に頼って決定を下していたほどであった。これほど高い尊敬を受けていたタギは、真冬の最中に衣服をはぎとられ、池に投げ込まれ、ひどい切り傷を負った。ジャファーとヴァヒドの義父で、ナイリズの高僧で、高い名声をもつ判事のアブドル・アリと、ナイリズの名士であるセイエド・ホセイも同じ運命に会った。町の悪漢たちがやとわれ、極寒にさらされているかれらに、残忍非道の侮辱をあたえたのである。そのほか、報酬を受け取るために、かれらに拷問を加えようと集まってきた貧しい男たちが多数いたが、その拷問の内容を知って、嫌悪感と軽蔑感をいただいて去って行った。

ヴァヒドは一八五〇年六月二十九日に殉教した。十日後にバブはタブリズで射殺された。(pp.498-499)

第二十三章 バブの殉教

ナイリズの動乱は悲劇的な終末を遂げたが、その物語はペルシャ全土にひろがり、それを聞いた者の心に、おどろくほどの熱意を呼び起こしていった。中央政府はこの状況を憂慮し、絶望感さえおぼえた。とくに、ナセルディン国王の総理大臣をつとめるタギ・カーンは、バビ教徒の不屈の精神に圧倒されていた。かれらの意志がいかに強く、その信仰がいかに熱烈でねばり強いかをふたたび見せつけられたからであった。(p.500)

たしかに、政府軍はどここの戦いでも勝利をおさめていた。たしかに、モラ・ホセインの一団と、それにつづいたヴァヒドの一団は、軍の手によって容赦なく抹殺されていった。それにもかかわらず、テヘランの抜け目のない指導者たちは、そのまれにみる英雄的行為のもととなった精神は健在で、その威力はくじかれていないことをはっきりと知っていた。戦いに生き残ったバビ教徒たちは、各地に散らばって行ったが、捕われの身になっている指導者（バブ）に対する忠誠心は不動のままであった。かれらは想像以上の敗北を受けたが、忠誠心は弱まることはなく、また、信仰も損なわれることはまったくなかったのである。それどころか、かれらの精神は、以前にもまして強烈に燃え上がった。迫害され、侮辱を受けて苦しんだかれらは、バブの教えに、それまで以上の熱烈さをもってすがり、バブに対する熱意と期待も一層深まったのである。(pp.500-501)

バビ教徒の中に熱意の炎を点し、その精神をはぐくんだバブは、辺境の牢獄に隔離されていたにもかかわらず、いまだに十分な影響をおよぼすことができた。昼夜にわたる厳重な警戒も、全土をおおった熱狂の渦を食い止めることはできなかった。その渦の源泉であるバブが健在であったからである。そこで、総理大臣のタギ・カーンはこう考えた。バブが点した光は消さなければならない。これほど大混乱と破壊をもたらした渦は元から断たなければならない。バブを抹殺することこそが、恥辱を受けた国の威信を取りもどすための最善の策であると。これが、愚かな総理大臣の結論であった。(p.501)

総理大臣は、さっそく閣僚を召喚し、自分の懸念と希望を伝え、自分の計画をつぎのように説明した。「バブの信教がわが国民の心に引き起こした嵐を見よ！ バブを公

衆の面前で処刑する以外には、この混乱した国に平穏と平和を取りもどす方法はない、と考えている。タバリスの戦いで、数え切れないほどの軍団が滅亡した。勝利を得るために計り知れないほどの犠牲を要した。マザンデラン州の動乱が鎮圧されたのもつかのま、別の州ファルスで暴動の火の手があがり、住民に大変な苦しみをあたえた。この南部地方を荒らした反乱が静められたと思ったとたん、北部に暴動が起こり、ザンジャンとその周辺を渦中に巻き込んだ。皆の中で解決策を提案できる者がいれば、ぜひわたしに知らせていただきたい。わたしの唯一の目的は、平和を保障し、国民の名誉を回復することにある。」(p.502)

この提案に応じようとする者は一人もいなかった。その中で、国防大臣のアガ・カーン・ヌーリだけが発言した。一部の無責任な扇動者たちの行動のため、追放の身にあるバブを死刑に処すことは、あまりにも残酷すぎる、というのがかれの意見であった。国防大臣はつづけて、今は亡きモハメッド国王の模範を引き合いにだした。国王は、バブを誹謗する敵の報告を、一切無視していたことを思い出させたのである。

総理大臣は、この反対意見をひじょうに不快に思い、つぎのように反論した。「あなたの意見は、今われわれが直面している問題にはまったく関係がない。現在、国益がおびやかされているのであり、たびかさなる動乱を黙認しておくことはできない。エマム・ホセイン（モハメッドの孫）の例を見よ。かれは、国家の統一を守るという最大の重要事のために処刑されたではないか。処刑した者たちは、いずれも、エマム・ホセインが祖父のモハメッドから寵愛を受けていたことを、一度ならずとも目の当たりにしていたではないか。そのとき、血筋のゆえにエマム・ホセインにあたえられた権利を考慮に入れたであろうか。わたしが、ここで提案する解決策以外には、この害悪を絶やし、平和をもたらす方法はない。この平和こそわれわれが切望しているものではないか。」

結局、総理大臣は、国防大臣の忠告を無視し、アゼルバエジャン州知事のハムゼ・ミルザに、バブをタブリズに移すように命じた。しかし、命令の本当の意図は王子である知事に明かさなかった。この知事は、王族の中でも心やさしく公正な人物として知られていた。知事は、総理大臣の意図は捕われの身になっているバブを故郷にもどすことであると思った。そこで、信頼のおける指揮官に、騎兵隊をともなって、バブをチェリグの牢獄からタブリズに連れてくるように命じた。途中、最大の注意をはらって、バブに不自由させないようにと勧告した。

知事の迎えがチェリグに到着する四十日前、バブは、所有していた書簡とそのほかの書類をすべて集め、筆箱、印鑑、瑪瑙の指輪といっしょに箱におさめ、生ける者の文字の一人であったバゲルに託した。同時に、自分の秘書を長年つとめたミルザ・アーマドにあてた手紙をも渡した。その手紙には箱の鍵が同封されていた。バブは、箱の中身は神聖な意義をもつものであることを強調し、細心の注意をはらってそれを守るように指示した。そして、その中身については、ミルザ・アーマド以外にはだれにも明かさないように命じた。(pp.504-505)

バゲルは、直ちにガズビンに向かって出発した。十八日後にガズビンに到着したが、ミルザ・アーマドはすでにクムの町に向かったあとであった。バゲルはすぐ出発し、六月の下旬にクムに到着した。当時、わたし（著者）は、サデグ・タブリズという者といっしょにいた。わたしが、郷里のザランドにいたころ、ミルザ・アーマドは迎えをよこし、わたしをクムに呼び寄せたが、そのとき迎えにきた者がサデグ・タブリズであった。わたしは、ミルザ・アーマドの家に住んだが、それはかれが「綿畑」と呼ばれるところに借りた家であった。そのころ、シェイキ・アザム、セイエド・エスマイルほか、数人の仲間が同じ屋根の下に住んでいた。モラ・バゲルは、バブから託された箱をミルザ・アーマドに渡した。かれは、仲間のシェイキ・アザムが、その箱を開けるように強く要請したため、開けることにした。箱に入っていたものの中で、とくに目を見張ったのは、一本の青色の巻物であった。そのきわめて上質の紙をひろげてみると、そこにはバブの絶妙な直筆で、およそ五百行の聖句が星の形に書き記されていた。それらの聖句はすべて、「バハ」（栄光）という言葉の派生語から構成されていた。その巻物は、しみ一つない完全な状態で保存されており、一見したところ手書きではなく、印刷されているように見えた。筆跡はひじょうに細かく、入り組んでおり、遠くから見ると、それは一枚の紙に描かれた一筆の絵のように見えた。われわれは、そのすばらしい筆跡を見て、驚嘆するばかりであった。だれが、これに匹敵するものを書き得ようかと。

巻物が箱にもどされてミルザ・アーマドに渡されると、その日のうちに、かれはテヘランに向かった。出発前に、かれは、箱の中の手紙は、テヘラン在住のバハオラが届け先であることを知らせてくれた。そしてわたしに、父が待ちわびている郷里のザランドに帰るように指示した。(pp.505-506)

騎兵隊の指揮官は、州知事からの指令に忠実に従い、バブに尊敬を示して、かれが不自由しないように細心の注意をはらいながらタブリズまで案内した。知事である王子は、前もって友人の家に迎え入れられるように準備していた。ここでも、バブに最上の礼儀をつくすように友人に命じていた。バブの到着後三日して、新たな命令が総理大臣から知事のもとに送られた。それは、正式な命令状を受け取り次第、バブを処刑し、同時に、バブに従う者も死刑に処するようという内容であった。そこで、ウルミエに駐屯するアルメニア人からなる連隊が、バブの射殺を命じられた。場所はタブリズ市の中心にある兵舎前の広場と決定された。連隊長はサム・カーンというアルメニア人のキリスト教徒であった。

総理大臣の実弟のハサン・カーンが、この命令を知事に伝えた。知事は、その命令に仰天して、激しい口調で抗議した。「総理は、このような任務よりも、もっと価値のある任務をわたしにあたえて下さらないのか。わたしに下った命令は、下劣な者ら以外はだれも実行する者はいない。わたしは、エブネ・ジャドやエブネ・サート（モハメッドの子孫を迫害した人物）ではない。よって、わたしに神の予言者の血を引く無実の者を処刑するように求めるのはもってのほかだ。」

ハサン・カーンは、知事の反対の言葉を、兄の総理に伝えた。そこで総理は、指示通りにすぐ、自らバブを処刑するように弟に命じ、つぎのようにせき立てた。「われわれの心に重くのしかかっている心配を取り除いてくれるように頼む。ラマダン（断食）の月がくる前に、この問題に終止符を打ってければ、邪魔されずに落ち着いて断食ができよう。」

ハサン・カーンは、この新しい命令を知事に知らせようと試みたが失敗した。知事は病気をよそおい、かれに会うことを拒んだからである。知事から拒否されてもひるまずに、ハサン・カーンは、バブとその仲間を、ただちに知事の友人の家から兵舎の一室に移動させるよう指示した。さらに、サム・カーンに命じて、兵士十人をバブの部屋の入り口に立たせ見張らせることにした。(pp.506-507)

バブは、その高貴な血筋を示すターバンと帯をはぎとられて、秘書のセイエド・ホセインと共に、ふたたび別の監禁場所移された。バブは、兵舎への移動が、宿願の目標に達する最後の段階であることを十分知っていた。その日、タブリズ市街は興奮の

るつぼと化していた。住民は、「最後の審判」のときに世界を襲う大混乱がついに到来したという思いであった。バブが殉教の場に連行されたその日、タブリズをとらえた興奮は、これまでにないほど激しく、かつ不思議なものであった。

バブが兵舎前の広場に近づいたとき、若者がとつぜんバブの前に飛び出してきた。身の危険をかえりみず、必死に人垣をかきわけて、バブのところに向けよってきたのであった。若者の顔はやつれ、裸足で、髪も乱れたままであった。興奮で息をはずませ、疲れきった様子で、バブの足もとに身を投げた。そして、バブの衣服のすそをにぎりしめ、熱烈にたん願した。「師よ、わたしを追いやらないで下さい。あなたが行かれるところには、どこまでもわたしをお伴わせて下さい。」バブは答えた。「モハメッド・アリよ。立ち上がるがよい。あなたはわれと共にいられるので安心せよ。明日、あなたは、神が定められたことを目撃するであろう。」これを見て、自制できなくなったほかの弟子二人も、バブのもとに向けより、不動の忠誠を誓った。結局、この二人と若者のアリ・ズヌジは逮捕され、バブとセイエド・ホセインと同じ部屋に監禁された。(p.507)

わたし（著者）は、セイエド・ホセイン（バブの秘書）がつぎのように語るのを聞いた。「あの夜、バブの御顔はよろこびで輝いていました。そのよろこびの表情は、これまで見たことがないものでした。周辺で荒れ狂っている嵐はまったく気にならない様子で、かれはわれわれと楽しく談話されていました。かれに重くのしかかっていた悲しみは、完全に消えてしまったようでした。目前の勝利を意識されているバブには、悲しみの影さえ見えませんでした。かれは、われわれにこう言われました。『明日こそわが殉教の日である。だが、皆のうちわが命を断ってくれる者はいないか。敵の手で命をうばわれるよりも、友の手で命を断たれる方を望むからだ。』この言葉を聞いて、われわれの目から涙があふれてきました。われわれの手で、バブの貴重な命をうばうなど身が縮まる思いでした。われわれは、バブの要望を拒み、沈黙したままでした。ところが、アリ・ズヌジがとつぜん立ち上がって、バブのお望みであれば、自分はそのようなことでも従います、と宣言したのである。われわれは、かれを抑えて、その考えを思いとどまらせました。その直後、バブはこう言われました。『わが要望に応じて立ち上がったこの若者は、われと共に殉教するであろう。殉教の冠を分かち合う者として、われはかれを選んだ。』」

翌日の早朝に、ハサン・カーンは執行官に、バブを連れて市の判事を兼任する僧侶

たちの家をまわるように命じた。それは、刑の執行に必要な承認書をかれらから取得するためであった。バブが兵舎を出ようとしたとき、秘書のセイエド・ホセインは、今後どのような行動を取ればよいかについてバブに聞いた。バブはこう忠告した。「信仰を告白しないようにせよ。そうすれば、将来、あなたと出会うように運命づけられている人たちに、あなたのみが知っている事実を語ることができよう。」その後も、バブはかれと内密の言葉を交わしていた。そこに、執行官がとつぜん割り込んできてセイエド・ホセインの腕をつかみ、横に引き寄せ、激しい口調で叱りつけた。バブは執行官に警告した。「わたしが秘書に伝えようとしていることを語り終えるまでは、地上のいかなる勢力も、わたしを黙らすことはできないのだ。全世界が、わたしに対して刃向かってきたとしても、最後の言葉を言い終わるまでは、かれらにはわたしを阻む力はないのだ。」この大胆な主張に執行官はおどろいたが、何も返事をせず、セイエド・ホセインに自分のあとについてくるように命じた。(pp.507-509)

モハメッド・アリ（バブと共に殉教した弟子）も、バブと同様に判事たちの家をまわっていた。かれの義父は、タブリズで高い社会的地位にあった。このため、どの判事もかれに、信仰を取り消すように強くすすめたが、かれはこう答えた。「わたしの主であるバブを否定することは決してできません。主はわたしの信仰の真髄であり、わたしが真心から敬慕する御方です。わたしは、主の中に樂園を見だし、その教えに従うことは、救済の箱舟であることを知ったのです。」

その若者を取り調べていたモラ・ママガニは、それを聞いて声を張り上げでどなった。「だまれ！ その言葉は、お前が正気でない証拠だ。よって、言葉の責任は問わずに、お前を許してやろう。」若者は答えた。「わたしはまったく正気です。約束されたガエムという聖なる御方に死刑を宣告したあなたこそ、正気を逸しています。約束された御方の教えを信じ、その道に自分の命をささげたいと切望している者は愚かではありません。」(pp.509-510)

つづいて、バブがモラ・ママガニのところに連行されてきた。かれは、戸口に立っているのがバブであることを知るとすぐ、前もって準備していた死刑執行令状を使用人にもたせ、執行官に渡すように命じた。そして、大声で言った。「バブの顔を見る必要はない。皇太子が立ち会われた取り調べの際、かれに会い、その日にこの令状を書いたのだ。かれは、間違いなく、そのときわたしが見た男だ。その後も、かれは主張を変えていないのだ。」

つぎに、バブはミルザ・バゲルに家に連れて行かれた。かれは、最近父ミルザ・アーマドの後を継いだ判事であった。バブの一行が判事の家に着いたときには、すでに使用人が署名済みの死刑執行令状を手にして門のところで立っていた。使用人はこう説明した。「お入りになる必要はありません。主人は、今は亡き父上が下された死刑の宣告は正しいとして満足されています。息子としても父上の例に従いたいと申されております。」

最後に訪問したモルタザ・ゴリも、ほかの二人の判事にならって前もって令状を準備していた。かれは、自分が恐れている敵のバブに会おうとしなかった。執行官が、必要な令状をすべて整えたところで、バブを連隊長のサム・カーンに引き渡した。かれは、サム・カーンに、政府とイスラム教会双方の承認が得られたので、心配なく任務を遂行するように命じた。

その間、秘書のセイエド・ホセインは、前夜バブと共にすごした部屋に監禁されたままであった。判事との面会を終えたモハメッド・アリも、その部屋に連行されてきた。しかし、この若者は涙を流して自分の師であるバブのそばにいたいとこ願したため、連隊長のサム・カーンに引き渡された。若者が信仰を捨てることを拒みつづけるならば、かれをも処刑せよ、という指示をサム・カーンは受けた。

一方、サム・カーンは、ひどい取り扱いを受けている中でのバブの振舞いや態度に、ますます深く心を動かされるようになっていた。そして、バブの命を断つようなことをすれば、神の怒りを招くにちがいないと、恐怖感におそわれた。そこでバブにこう説明した。「わたしはキリスト教徒であり、あなたに対して何の悪意も持っていません。あなたの教えが真実であれば、あなたの血を流さなければならないような任務からわたしを解放してくださるようお願いいたします。」バブは答えた。「命令どおり執行するがよい。もしあなたの願いが誠実なものであれば、全能なる神はかならず、あなたを窮地から救って下さるであろう。」(p.511)

そこでサム・カーンは、兵士に命じて、セイエド・ホセインが監禁されていた部屋の入り口と、隣接する部屋の入り口の間にある柱に釘を打たせた。その釘に二本のロープをかけ、バブとモハメッド・アリを別々にしばり、吊りさげた。若者は、サム・

カーンに、自分の身体が盾になってバブを守るような形に吊り下げてくれるようにこ願した。この願いが入れられ、若者の頭部がバブの胸部にあたるように整えられた。ロープが固定された直後、三列に配列された兵士たちが射撃体制に入った。一列は二百五十名の兵士からなっていた。「打て」という命令に、各列が順番に発砲した。七百五十丁のライフル銃が放った硝煙はものすごく、正午の太陽の光線をさえぎり、あたりは闇につつまれた。その日、一万人の市民が兵舎の屋根や、周辺の家々の屋根に群がり、この悲痛で、心を深く動揺させる情景を目撃したのであった。(pp.512-513)

立ち込めていた硝煙が消え去ったとき、群衆は信じがたい光景を見ておどろいた。群衆の前に、バブと共に吊り下げられた若者が無傷のまま立っていたのである。しかし、バブの姿はなかった。二人を吊り下げていたロープは銃弾で切断されていたが、二人は奇蹟的に傷ひとつ負わなかったのである。若者が着ていた衣も硝煙によるくすみすら認められなかった。おどろいた群衆は叫んだ。「バブの姿が消えた！」

執行官と護衛たちは、必死になってバブを探しまわった。ついにバブは、前夜すごした部屋で、秘書のセイエド・ホセインとの会談を終えようとしていたところを発見された。その日の朝、バブと秘書との会談は執行官によって中断させられたため、バブはまだ言い残すことがあったのである。バブは、まったく平静で、落ち着いた表情をしていた。兵士たちがバブに向けて銃弾の雨を降らしたにもかかわらず、バブにはかすり傷ひとつ負わせることはできなかった。バブは、部屋に入ってきた執行官につきのように述べた。「セイエド・ホセインとの話は終わった。これであなたは計画どおりに実行するがよい。」

執行官が受けた衝撃はあまりにも強烈で、バブをふたたび処刑することなどできなかった。かれは、任務を果たすことを拒否し、同時に、辞意を表してその場を去った。そして、自分が目撃したことを隣人で、タブリズの名士であったのミルザ・モーセンに語った。ミルザ・モーセンは、この話を聞いた直後信者となった。(pp.513-514)

後日、わたしはミルザ・モーセンに会う機会を得た。かれは、バブの殉教の場にわたしを案内し、バブが吊るされた兵舎の壁を見せてくれた。バブがセイエド・ホセインと最後に談話した部屋にも案内され、バブが座していた場所も教えてくれた。敵は壁に釘を打ち込み、それに固定したロープでバブの身体を吊るしたのであるが、その

同じ釘も見る事ができた。

サム・カーンも同様に、この思いがけない結果に茫然となった。かれは、兵士たちに直ちに兵舎から退去するように命じた。そして、自分も連隊も、バブにわずかな傷を負わせるようなことを一切拒絶した。サム・カーンは、自分が殺されるようなことがあっても、二度とバブの処刑の命令に従うことはない、と公言して兵舎前の広場を去った。

サム・カーンが広場を去ったあと、近衛師団の隊長をつとめるカムセという軍人が、刑の執行を申し出た。そこで、バブとモハメッド・アリは、ふたたび前回と同様に、同じ壁の釘からロープで吊るされた。連隊も前回同様配列して発砲命令をまった。命令が下されると、銃弾でロープだけが切れた前回とちがって、二人の身体は打ち砕かれた。肉と骨は粉碎され、両者の身体は一つのかたまりと化した。連隊が射撃準備の体制に入ったとき、バブは広場の群衆に向かって、つぎの最後の言葉を残した。「おお、よこしまな世代の者たちよ。皆がわれを信じたならば、一人残らずこの若者の模範に従い、わが道に進んで命をささげたであろう。この若者は、皆のほとんどの者より高い地位にあった。皆が、われを認める日はかならず到来するであろう。しかし、そのときわれは皆と共にはおれないのだ。」(p.514)

銃声とともに、竜巻のような突風が起こり、タブリズ市全域を襲った。信じがたいほど猛烈な粉塵が吹き上げられ、太陽の光はさえぎられ、住民を盲目にした。市全体は正午から夜まで暗闇につつまれた。サム・カーンの連隊がバブを傷つけることすらできなかったというおどろくべき出来事と、それにつづく奇妙な大気現象にもかかわらず、タブリズの市民の心を動かすことはできなかった。かれらは、その重大な出来事の意味を少しでも考えようとしなかったのである。かれらは、この不思議な出来事がサム・カーンにもたらした変化を目撃し、執行官の仰天ぶりと職務を捨てる決意をしたことを見、雨と降ってきた銃弾にもかかわらず、若者の衣服にはしみ一つつかなかったことを確認し、セイエド・ホセインとの談話を終えて、ふたたび広場にあらわれたときのバブの落ち着きはらった表情を見逃してはいなかった。それにもかかわらず、だれ一人としてこれらの異常で奇跡的な出来事の意味について尋ねる者はいなかったのである。(PP.515-517)

バブが殉教したのは、一二六六年シャーバン月二十八日の日曜日（一八五〇年七月九日）の正午であった。シラズでの誕生のときから陰暦で、三十一年とセヵ月二十七日が経過していた。

同じ日の夕方、バブと弟子のずたずたになった遺体は、兵舎の広場から市の城壁を取り囲む外堀のふちに移された。十名から構成される四組の見張りが交代で監視にあたった。殉教の日の翌朝、タブリズ市のロシア領事が、絵描きをともなってその場所を訪れた。絵描きは、領事の指示で、外堀のふちに横たわる遺体を一枚の絵におさめた。(pp.517-518)

わたしは、アスカルからつぎのように聞いた。「ロシア領事館の役人で、わたしの親戚にあたる者が、その絵を、写生された当日わたしに見せてくれました。その絵はバブの顔を正確に描写したものでした。バブの額、頬、そして口元には銃弾のあとはありませんでした。その顔にはほほ笑みがいまだに残っているように見えました。しかし、身体はずたずたになっていました。バブと殉教を共にした若者の両腕と頭を確認することができました。若者は、ちょうどバブを両手で抱きかかえているように見えました。その恐ろしい絵を見て、わたしは恐怖にふるえました。あの高貴な姿のあまりの変わりように、わたしの心は悲しみに打ちひしがれたのです。苦しみのあまり、その絵から顔をそらし、帰宅して部屋に鍵をかけて閉じこもりました。衝撃のあまり、三日三晩飲食も睡眠もできなかったのです。バブの波瀾に富んだ短い生涯を埋め尽くしたさまざまな出来事が思い起こされました。かれを襲いつづけた深い悲しみと苦悩、たびかさなる追放、そして生涯をかざった殉教の場面が、ふたたびわたしの眼前で再演されたのです。わたしはベッドに身を投げ、もだえ苦しみました。」(p.518)

バブの殉教から二日後の午後、ソレイマンがテヘランから到着した。かれは、ヤーヤ・カーンの息子で、タブリズ郊外の町長の家を迎え入れられた。この町長は、スーフィ教団に属する神秘主義者で、ソレイマンが信頼を寄せている友人であった。ソレイマンは、バブに生命の危機が迫っているのを知り、バブを救出するためにタブリズに向かったのであった。しかし、その決意を果たすにはあまりにも遅く到着したことに悔し涙をのんだ。かれは、友人からバブの逮捕と起訴の背景となった状況や、殉教の様子を聞いて決心した。命の危険をおかしても、バブと弟子の遺体を運び出そうと。友人は、今行けば命があぶないから待つように忠告し、別の案を立てた。友人はかれにほかの家に移り、そこでアラヤールという、頼まれたことは何でもするという男を

待つようにすすめた。その日の夕方、約束の時刻に、ソレイマンはアラヤールに会った。男は、ソレイマンの指示に従い、その日の夜半、堀のふちに放置されていた遺体を、ある信者の経営する絹織物工場に運び出すことに成功した。翌日、特別に作らせた木の棺におさめられ、ソレイマンの指示により、安全な場所に再度移された。一方、遺体の監視にあたっていた見張りたちは、睡眠中に野獣が遺体を持ち去ったと弁解した。その上司たちも、とがめられることを恐れ、真実をかくして、当局には報告をすることはなかった。(pp.518-519)

ソレイマンは、遺体が安全な場所に移されたことをテヘランのバハオラに報告した。そこでバハオラは、アガ・カリム（バハオラの実弟）に指示して、使者をタブリズに送り、遺体を首都テヘランに移させることにした。この決定は、バブ自身が「シャー・アブドル・アジム参堂の書」のなかで述べた希望にそったものであった。この参堂の書は、バブがシャー・アブドル・アジムという寺院の近くで著わされたものである。バブは、それをソレイマン・カティブに渡し、ほかの何人かの信者たちと共に、その寺院で唱えるように指示した。参堂の書の最後に、その寺院に眠る聖者にあてて、つぎの言葉が記されている。「わが最愛なる者の下影にあるレイの地（テヘランの近くにあった古代都市）に永眠の場を得たあなたは、まことに幸いなり。われもまた、その聖なる地に葬られんことを切望する。」（註：最愛なる者とはバハオラを指す。）

わたしがミルザ・アーマドと共にテヘランに滞在中、バブとその弟子の遺体がテヘランに到着した。しかし、バハオラは、国防大臣の勧告により、すでにカルベラに向かっていた。タブリズからテヘラン市内の寺院に運ばれた遺体は、アガ・カリム（バハオラの実弟）とミルザ・アーマドの手によって、ある秘密の場所に移されたが、この二人以外はだれもその場所を知ることはなかった。その何年か後、バハオラがアドリアノーブル追放されるまで、その場所は秘密のままであった。バハオラの出発にあたって、遺体のかくし場所を確認するために、アガ・カリムは仲間の弟子であるモニルにその場所を教えたが、モニルはいくら探しても遺体を見つけることはできなかった。結局、遺体は後日、ジャマールという古い信者によって発見された。バハオラがアドリアノーブル滞在中に、ジャマールはそのかくし場所を知らされたのであった。現在も、その秘密の場所を知る信者はいない。また、最終的にどこに移されるかも推測さえできない。(pp.520-522)

バブの殉教の報告は、まず総理大臣に伝えられた。つぎにアガ・カーン（国防大臣）

が知らせを受けた。アガ・カーンは、前の国王の時代に都から追放されてカシヤンの町に住んでいたことがあった。そのころ、バブはカシヤンに立ち寄った。アガ・カーンは、ジャニという信者からバブの教えの内容を知り、一つの誓いを立てた。それは、もし、バブがもたらした新しい啓示を受け入れることによって、以前の地位に復帰できれば、迫害されているバビ共同体の安全を保護するために、全力を尽くすという誓いであった。ジャニは、このことをバブに報告した。バブは、失脚した大臣につきのように告げて、安心させるように指示した。つまり、かれはまもなくテヘランに召され、国王に次ぐ地位をあたえられるであろうと。バブはさらに、そのときになって約束を忘れずに、全力をつくして自分の誓いを果たすようにとも警告した。アガ・カーンは、バブの言葉を聞いてよろこび、誓いを守ることを確約した。

バブの殉教の知らせがアガ・カーンに届けられたとき、かれはすでに國務大臣の地位に昇進していて、総理大臣の座につくことを望んでいた。かれは、バハオラと親密であったので、この悲報を急いでバハオラに伝えた。そして、バブがもたらした動乱の炎は、いつかバハオラに大変な苦難を降りかからせるであろうと恐れていたが、その火炎がついに消されたので安心したと告げた。これに対して、バハオラはつぎのように答えた。「そうではない。もし報告が真実であれば、点された火炎は、その事件（バブの処刑）によって、これまで以上に猛烈に燃え上がるであろう。確実に言えるが、その大火炎は、この国の政治家全員が力を合わせても、消すことはできないほどになるだろう。」

アガ・カーンが、バハオラの言葉の真理を理解できたのは、ずいぶん後になってからであった。かれは、この予言の言葉を聞いたときは、大打撃を受けた信教が、生き残れるなどまったく想像もしていなかった。かれは、以前バハオラから不治の病を治療してもらったことがあったにもかかわらず、バハオラの言葉を信じることはできなかったのである。(p.522)

ある日、アガ・カーンの息子が父親に質問した。すなわち、バハオラは、大臣の家に生まれ、兄弟の中でももっとも有能であったにもかかわらず、父親の後を継がず、家の伝統にそむいて家族の期待を裏切ったと思わないかと。アガ・カーンは息子にこう言った。「息子よ、バハオラは父親の期待を裏切ったと本当に信じているのか。要職にあるわれわれには、人民のつかのまの忠誠を得る以外には何もできないのだ。人民の忠誠は、われわれの時代が終わり次第消え去るものである。われわれの人生は、野

心の道につきまとう栄枯盛衰から逃れることはできない。生涯のうち榮譽と名声を築いたとしても、死後、人民の誹謗中傷で名声を汚され、生前の業績も台無しにされるのではないか。だれもそうならないとは言えない。われわれが活着している間でも、口先でわれわれに敬意を表する者らは、われわれが一瞬でもかれらの利益にならないことをすれば、心中で、われわれを非難し、罵倒する。しかし、バハオラの場合はちがう。人種や地位を問わず、この世の権力者たちとはちがって、バハオラは人びとの愛と献身的であり、それは、時の流れによって薄れたり、敵の攻撃によって滅ぼされたりするものではない。バハオラの主権は、死の影によってくもらされることも、敵の中傷によって損なわれることはないのだ。バハオラの人びとにあたえる影響力は大なるもので、かれを慕う者はだれも、夜の静寂な時間にも、かれの意に反するようなことをほんのわずかでも心に描いたりすることはない。かれを慕う者の数は日毎に増えていくであろう。かれらの愛はけっして薄れることはなく、世代から世代へと引きつがれ、ついには全世界がその光輝に満たされるであろう。」

残忍な敵は、バブを執拗に虐待し、最後にはその命までもうばったが、その結果、ペルシャの国と国民に大変な災難がふりかかった。これらの残虐行為を犯した者たちは、後悔の念にさいなまれ、信じられないほど短い期間のうちに、つぎつぎと不名誉な死をとげた。一方、眼前にくりひろげられた惨劇を冷淡にながめ、その残虐行為に対し、抗議一つしなかった国民の大多数についてはどうであろうか。かれらもまた、苦境におちいり、国家の財源も政治家の努力もかれらの苦しい生活を楽にすることはできなかつた。逆境の嵐がかれらに襲いかかり、繁栄していた物質生活の土台をゆるがしたのである。迫害者がバブを攻撃しはじめ、その信教の抹殺に取りかかったその日から、数かぎりない不運と不幸が、感謝することを忘れた国民に襲いかかってきた。かれらの精神は砕かれ、国家全体は破産寸前まで追いつめられたのである。(pp.523-524)

ちりでおおわれ、読む者もない書物に記録されている以外は、ほとんどだれも知らないような疫病が猛威をふるい、だれもそれから逃れることはできなかつた。疫病がひろがるにつれて死者も増えていった。病魔は、王子であろうと農夫であろうと区別なく、容赦なく襲いかかり、その勢いを減じることはなかつた。このとつぜん降りかかってきた苦難は、全土を荒らしつづけ、ギラン州では、悪性の熱病のため人口が激減した。それほどの災難にもかかわらず、神の怒りの猛襲は、よこしまで、信仰のない人民をとらえて放そうとしなかつたのである。その影響はやがて、国内に生息する

あらゆる生き物にもおよんだ。植物と動物の生命までも侵しはじめたのを見た国民は、その災難の規模の大きさに圧倒された。このはげしい苦難の重荷にあえぐ国民に、さらに飢餓という新たな恐怖が加わり、そのゆっくりとしのびよる死の影におびえた。政府も国民も、どこに救済を求めてよいかすら分からなかった。かれらは、このように苦悩の杯を飲み干したのであるが、それが、だれの手によってもたらされたのか、そして、その苦しみが聖なる人物のためであることを理解できなかったのである。

最初にバブを迫害したのは、シラズの知事ホセイン・カーンであった。かれは、バブを監禁して屈辱を負わせたが、かれの治めるファルス州では、かれの悪行を見て見ないふりをした何千もの人が命を落とした。その州で疫病が猛威をふるい、全州が破壊のふちに立たされたのである。貧窮と疲労でうちひしがれたファルスの住民は、近隣と友人の援助を求めて辛うじて生き長らえることができた。知事自らも、長年築き上げてきたものがすべて崩壊するのを苦い思いで目撃するしかすべがなかった。そして、友人にも敵にも見捨てられ、忘れられた状態で残された日々を過ごし、無名のまま葬られたのである。(p.524)

つぎにバブの教えに挑み、その発展を食い止めようとしたのは、アガシ（モハメッド国王の総理大臣）であった。かれは、利己的な理由から、当時の下劣な僧侶たちを味方につけるために、バブと国王との会見を阻止した。自分が恐れているバブを、アゼルバエジャンの辺境の牢獄への追放させたのもかれであった。そして、バブを隔離しておくために、監視の目を休めることはなかった。バブが、警告の書簡（怒りの書簡）をあてたのも、かれであった。バブはその書簡の中で、アガシの悪行をあげ、その没落を予告した。神の怒りの御手が、アガシをとらえたのは、バブがテヘランを通過したときから、わずか一年半後であった。アガシは権力の座から追われ、民衆の追跡からも逃れて、テヘラン郊外の寺院に身をかくした。しかし、さらに神の怒りの手により、国外に追い出され、度重なる災難に見舞われ、最後には、貧窮と苦しみのうちにこの世を去った。

バブの生命をうばった兵士たちにはどのような運命が待っていたであろうか。かれらは、サム・カーンとその兵士たち（アルメニア人の連隊）がバブの処刑に奇しくも失敗したことを知りながら、再度の処刑を執行するために志願し、バブの身体を銃弾で引き裂いた兵士たちであった。連隊の二百五十名はその指揮官と共に、バブの殉教と同じ年に、大地震に遭って全滅した。その出来事は、ある暑い夏の日起こった。

アルデビルからタブリズに向かう途中で、兵士たちは高い塀の影で休息し、ゲームなどで楽しんでいた。とつぜん地震が起こり、塀が崩れ落ちて一人残らず下敷きとなって死滅した。残りの五百名は、バブと同様に銃殺刑に処せられた。バブの殉教後三年目に、連隊は反乱を起こしたが、鎮圧され、サデク・カーンの命令により全員が銃殺刑となったのである。反乱兵士たちが射撃で倒れたあとも、一人も生き残らないように、二度目の射撃が行われた。そのあと、死体をやりで突き、タブリズ市民の目にさらした。その日、タブリズの住民の多くは、バブの殉教の状況を思い起こしていた。そして、バブの命をうばった兵士たちが、バブと同じような運命に会ったことを不思議に思い、互いにささやき合った。

「連隊全体が、このような辱めを受け、悲惨な最後を遂げたのは、もしかすると神の報復かも知れない。もし、あの青年（バブ）が本当に詐欺師であったのならば、かれを処刑した者たちにこれほどのむごい天罰が下るはずはないのではないか。」この不安の声は、タブリズ市の指導的立場にある僧侶たちの耳にはいった。かれらは、人びとの心の動揺を大いに恐れ、そのような疑問をもつ者をすべて厳罰に処すように命じた。ある者はむち打たれ、ほかの者は罰金を科され、全市民はうわさを広めないように警告を受けた。そのようなうわさは、市民にバブの敵たちの残酷な行為を思い起こさせ、バブの教えに対する熱意をふたたび点すことを、僧侶たちは心配したからであった。

バブを殉教に追いやった主導力は、時の総理大臣のタギ・カーンであった。そして、その命令を実行に移した共犯者は、総理大臣の実弟であった。この二人は、その凶行のあと二年内に、恐ろしい処罰を受け、みじめな死をとげた。総理大臣の血痕は、今日までフィンの風呂場の壁に残っているのが見られる。それは、大臣が自らもたらした残虐行為を証言するものである。

第二十四章 ザンジャンの動乱

バブがタブリズで殉教したとき、すでに、マザンデランとナイリズに大火炎をもたらした火花は、ザンジャンとその周辺をも燃え上がらせていた。バブは、タバルシ砦の勇敢な弟子たちにふりかかった悲痛な運命を深く悼んでいたが、ヴァヒドとその仲間たちが受けたと同じような苦難の知らせに、バブの心はさらなる打撃を受けた。それまですでに、かれの心には、さまざまな苦悩が重くのしかかっていた。すなわち、自分のまわりに危機が迫ってきているという意識、タブリズに連行されたときに受けた侮辱の記憶、アゼルバエジャン山岳の要塞での長期間にわたる厳重な監禁による過労、マザンデランとナイリズの動乱での虐殺、そしてテヘランの七人の殉教者たちを迫害した者らによる残虐行為は、バブの残り少なくなった生涯の日々をくもらせていたのである。それらに加えて、あらたにザンジャンでの事件の知らせを受けて、バブの苦悩は極点に達した。死の影がすばやくしのびよる中、バブはどれほどの苦悩に耐えなければならなかったであろうか。南北のあらゆる地方で、バブの信教の闘士たちは、不当な苦しみを受け、破廉恥なやり方であざむかれ、財産は略奪され、虐殺された。そして今、バブの悲痛の杯をあふれ出させるかのように、ザンジャンで動乱の嵐が起こったのである。それは、これまで以上に激烈で破壊的な嵐であった。(pp.527-529)

ここで、この事件が、バビ教の史上、もっとも感動的なもののひとつとなった状況について述べたい。その中心人物はホッジヤトで、本名はモラ・モハメッド・アリであった。かれは、当時の有能な高僧で、バブの大業を擁護する強大な闘士の一人であった。かれの父ラヒムは、ザンジャンの指導的な高僧の一人で、敬虔で、学識があり、堅固な性格をそなえていたため、高く尊敬されていた。ホッジヤトは 1812 年から 1813 年の間に生まれた。幼少のころからすぐれた能力を示したため、父はひじょうに大事にかれを養育した。父はかれを教育のためナジャフに送ったが、そこで、かれは洞察力、知力、熱意で抜きん出た。かれの学識と知性に、友人たちは賞賛を惜しかなかったが、一方、敵たちは、かれの無遠慮さと強い性格を恐れた。父は、かれにザンジャンにもどらないように忠告した。敵たちがかれに対して陰謀をくわだてていたからである。そこで、かれはハマダンに住居をかまえ、親族の女性と結婚したが、二年半後に、父の死の知らせを受け、故郷にもどることにした。僧侶たちは、帰郷したかれが大歓迎を受けているのを見て敵意を強めた。僧侶たちからの公然の反対にもかかわらず、かれは、かれらを高く尊重し、できるかぎり親切にあつかった。(pp.529-530)

ホッジャトは、友人たちが建ててくれたモスクの説教壇から、集まってきた大群衆に向かって、放縦をやめ、中庸をもって行動するように勧告した。そして、あらゆる種類の悪習を容赦なく禁止し、自ら手本を示して、コーランの説く原則を固く守るようすすめた。このように、最善をつくして弟子たちに教えたので、かれらは、ザンジャンの有名な僧侶たちよりも、すぐれた知識と理解をもつようになった。この十七年間の努力の末、ホッジャトはイスラム教の精神と教えに反するものをすべて、仲間の町民の心からのぞくことに成功した。(p.530)

シラズからバブの宣言のニュースがとどくとすぐ、ホッジャトは信頼できるエスカンダールを使いとして送り、新しい啓示について調べさせた。その結果、バブの教えに熱心に応じたため、これを知った敵たちは、いっそうはげしくかれを攻撃しはじめた。それまで、敵たちは、政府や住民の前ではかれの体面を汚すことはできなかったが、今、異端の信奉者であり、イスラム教が大事にしてきたものをすべて否認する者として、かれを非難できるようになったのである。かれらはお互いにささやき合った。「かれは、公正、敬虔、英知、学識で高い名声をもっていたため、その地位をゆるがせることはできなかった。モハメッド国王の面前に召されたときも、かれは、その魅惑的な雄弁で、国王をも自分の熱烈な賞賛者となしたではないか。しかし今、かれは公然とバブの大業を擁護するようになったため、政府から逮捕状を得て、かれをわれわれの町から確実に追放できるのだ。」

そこで、かれらは嘆願書を作成して国王に提出した。その中で、悪意ある狡猾な心が生み出したあらゆる方法を用いて、かれの名声を落とそうとした。そして、このように苦情を申し立てたのである。「イスラム教を信じると公言しながら、かれは弟子の助けにより、われわれの権威を否認しました。かれはバブの大業の信者となり、その憎らしい信仰にザンジャンの三分の二の住民を味方に引き入れた今、どれほどの屈辱をわれわれにあたえるかわかりません。モスクは、かれの門に集まってくる大群衆を全部入れることはできなくなりました。その影響は大きく、ますます増えてきている熱心な群衆を収容するために、かれの父所有のモスクと、かれのために建てられたモスクを連結してひとつの建物としたほどです。ザンジャンだけでなく、近隣の村々の住民も、かれの支持者となる日がすばやく近づいてきています。」(pp.530-531)

国王は、嘆願者たちの語調に大変おどろいた。そこで、側近のナザール・アリにそのことを知らせ、ザンジャンを訪れた多くの人びとが、ホッジャトの能力と高潔さを

高く賞賛したことを思い起こした。そこで、ホッジヤトと反対者たちをテヘランに召すことにした。その特別の集まりに、国王自らと総理大臣アガシ、政府の高官およびテヘランで高名な僧侶何人かが参加した。その場に、国王はザンジャンの僧侶たちを召し、かれらの主張を説明するように言い渡した。かれらは、ホッジヤトにイスラム教の教えについていろいろ質問したが、答えはすべて、その場にいる人たちの賞賛を得るものであった。国王もまた、ホッジヤトが無実であることを信じた。国王は、完全に満足したことを述べ、ホッジヤトが敵の非難を見事に論破したことに十分な報酬をあたえた。そして、かれにザンジャンにもどり、国民への貴重な奉仕をつづけるように命じた。また、いかなる場合にも、かれを支援しつづけることを約束し、今後困難に直面した場合は知らせるように述べた。

ホッジヤトがザンジャンにもどったとき、屈辱を受けた敵たちの怒りは爆発した。かれらが敵意を深めると同時に、ホッジヤトの友人たちと支持者たちの献身も増していった。ホッジヤトは、敵たちの陰謀を一切無視し、熱意を弱めることなく活動をつづけた。かれが、大胆不敵に唱導した慣習にしばられない原則は、凝り固まった敵たちが苦心して作り上げた組織の土台に打撃をあたえるものであった。かれらは、自分たちの権威が侵され、組織が崩壊するのを目前にして、はげしい怒りをおぼえたが、どうすることもできなかった。(pp.531-532)

そのころ、ホッジヤトが、バブに嘆願書と贈り物をもたせて、極秘にシラズに送り出していた特使がザンジャンにもどってきた。特使は、弟子に講話をしていたホッジヤトに、バブから預かってきた封書を渡した。その書簡には、バブが自分の称号の一つである「ホッジヤト」という名をあたえることが書いてあり、また、説教壇から率直に、バブの信教の基本的な教えを公表するようにとの指示があった。ホッジヤトは、師であるバブの望みを知るとすぐ、その書簡にある指示をすべて実行する決心をした。そして、弟子たちに、講義を中止するので、本を閉じ、解散するように言った。「すでに真理を発見した者らにとって、勉学と研究が何の益になろうか。あらゆる知識的である御方が現われた今、なぜ学問を追求する必要があるか。」

ホッジヤトが、バブに命じられたとおり、金曜日の会衆の祈りを先導しようとしたとき、これまで、その役目にあたってきた僧侶の長が、はげしく抗議しはじめた。その役目は、国王からあたえられた先祖からの特権で、どれほど高い地位の者もれをうばうことはできないと抗議したのである。ホッジヤトは答えた。「その特権は、ゴエム

(バブ) 自らわたしにあたえられた。かれは、わたしにその任務を公にするように命じられた。だれもその特権を侵害できないのだ。攻撃を受ければ、わたしは自分と仲間の命を守るために、手段を講じよう。」(pp.532-533)

バブからあたえられた任務の遂行を大胆不敵に主張したことで、ザンジャンの僧侶たちは、僧侶の長に味方した。そして、ホッジャトは伝統ある組織に挑戦し、その特権を踏みにじっていると、総理大臣アガシに不平を訴えた。「われわれは、家族と財産ぐるみで、この町から逃げ出し、町民の運命をかれ一人にゆだねるか、もしくは、モハメッド国王から勅令を出していただいて、かれをこの国から即刻追放させるしかありません。かれをこの国に残させるならば、災難を招くばかりであると確信しています。」総理大臣は、心中では国の宗教組織に不信の念をいだき、その信条やしきたりをけげらいしていたが、最後にはかれらの強い要求を受け入れざるを得なくなり、この件を国王に提出した。そこで国王は、ホッジャトをザンジャンから首都に移すように命じた。

ゲエリジ・カーンというクルド人が、国王の命令状をホッジャトに渡す任務をあたえられた。一方、バブはタブリズに行く途中で、テヘラン近郊に到着していた。国王の使者がザンジャンに到着する前に、ホッジャトは友人を師(バブ)のところに送り、バブを敵の手中から救出したい旨を伝えた。バブは、自分を救出できるのは、全能の神だけであり、また、だれも神の命令を逃れたり、その定めを避けたりすることはできないことを確信させた。そして、こう付け加えた。「まもなく、あなたとわたしは、来世の滅びざる栄光の館で会うようになっているのだ。」

このメッセージを受け取った日に、国王の使者がザンジャンに到着した。ホッジャトは国王の命令を知らされ、使者と共にテヘランに向かった。二人がテヘランに到着したと同じころ、バブは、数日間引き止められていたコライン村を出発した。

政府当局は、バブとホッジャトが会えば、あらたな騒動が起こることを心配して、バブがザンジャンを通り過ぎるとき、ホッジャトがその町にいないように配慮していた。テヘランに向かうホッジャトの後をかなり離れたところから追ってきていたかれの仲間たちに、ホッジャトはザンジャンにもどってバブに会い、かれを救出する準備があることを告げるように指示した。仲間たちは、ザンジャンにもどる途中でバブに会った。バブは、再度、

だれも自分を監禁から救出しないように命じた。さらに、町の信者たちにこう伝えるように指示した。つまり、自分のまわりに群がらないように、いやむしろ、どこにおいても自分を避けるように命じたのである。バブを歓迎しようと町を出ていた信者たちに、この指示が伝えられると、かれらは悲嘆にくれたが、バブを迎えたいという衝動を抑えることができず、バブの一行に向かって進んでいった。しかしかれらは、囚人（バブ）の前方を進んでいた護衛隊に容赦なく解散させられた。(pp.534-535)

一行が道路の分岐点にきたとき、護衛隊長のベッグとその同僚との間に激論が起こった。ベッグは、アゼルバエジャンへの旅をつづける前に、バブを町の隊商宿で一夜過ごさせるべきだと主張した。その宿は、殉教したアリ・タビブの父マスムの所有であった。ベッグはさらに、町の門外で一夜を過ごすことは、敵の攻撃を受けやすくし、一行の生命を危機にさらすことになるかと力説した。ついに、かれは同僚を説得し、バブを隊商宿に連行することになった。その途中で、街路の家々の屋根に、囚人（バブ）の顔を一目見ようと群がっている大勢の人びとを見て、護衛隊の一行はおどろいた。

宿の所有者であったマスムは、最近亡くなり、長男のアリが、父を弔うためにザンジャンにきていた。アリはハマダンの著名な医師で、信者ではなかったが、バブを心から敬愛していた。そして、バブを前もって準備していた宿に愛情を込めて丁重に迎え入れた。その夜おそくまでバブの面前にいたかれは、完全にバブの大業を信じる者となった。

その後、わたし（著者）は、かれからつぎのように聞いた。「わたしがバブの信者となった夜、夜明けに起き上がり、ランタンを点し、父の従者を前にして、隊商宿に向かいました。入り口にいた守衛は、わたしを認め、中に入らせてくれました。バブの面前に案内されたとき、かれは祈りのための洗浄を行われていました。かれが祈りに没頭されるのを見て、わたしの心は深く動かされました。わたしはかれの後ろに立って祈りましたが、そのとき敬虔でよろこばしい気持ちでいっぱいになりました。お茶を準備してかれに差し出そうとしたとき、かれはわたしの方を向き、ハマダンに向けて発つように命じられました。『この町で大動乱が起こり、街路には血が流れよう。』そこで、バブの道に自分の血を流すことを念願していることを述べたところ、かれは、自分の殉教の時間はまだ来ていないので、神が命じられることに身を任せるように言って、わたしを安心させました。日の出に、バブが馬に乗り、出発されようとしているとき、随行させてもらうように頼んだところ、それはできないが、わたしのために

かならず祈っていると約束してくれました。わたしは、バブの意思に従いながらも、残念な思いで、その姿が見えなくなるまで見守っていました。」(pp.535-537)

テヘランに着いたホッジャトは、総理大臣アガシのところに案内された。総理大臣は国王に代わって、ホッジャトの言動が、ザンジャンの僧侶たちの間に強い敵意を起こしていることに迷惑していると告げた。「国王とわたしのところに、あなたに対する非難が押し寄せてきている。それも口頭と文書で。あなたが先祖の宗教を棄てたという理由で起訴されているのを信じることはできない。国王も、そのような主張を信じておられないのだ。国王は、そのような起訴に対して、論ばくできるようにあなたをここに召されたのだ。国王は、あなたを召す任務をわたしに命じられた。バブよりもはるかに知識と能力においてすぐれていると、わたしが思っているあなたが、バブの教えを信じるようになったなどと聞くのは悲しいことだ。」これに、ホッジャトは答えた。「わたしがバブよりすぐれているなどとんでもないことです。神はご存知ですが、バブが、その家でわたしにもっとも卑しい仕事をあたえられれば、わたしはそれを荣誉とみなします。それは、国王が付与される最高の荣誉もしのぐことができないほどのものです。」総理大臣は怒り声を上げた。「そんなことは絶対にあり得ない！」ホッジャトはふたたび断言した。「わたしはこう確信しています。シラズのセイエド(バブ)は、あなたご自身と、世界のすべての人びとが、その到来を待望してきた御方なのです。この御方こそわれわれの主であり、約束された救世主なのです。」

総理大臣はこの件を国王に報告し、自分の懸念を述べた。それは、国王自ら全国で最高の僧侶と信じてきたこの恐るべき敵の活動を防がなければ、国家は重大な危機にさらされるであろうという心配であった。国王は、そのような報告は、ホッジャトの敵の悪意と羨望によるものだとし、それを信じようとしなかった。そして、特別の会合を準備し、テヘランの僧侶たちの前で、ホッジャトに自分の立場を弁護させるように命じた。(p.537)

そこで数回会合が開かれた。ホッジャトはすべての会合で、自分の信教の基本的な教えを雄弁に説明し、反対者たちの議論を打ち負かした。かれは、このように大胆に宣言したのである。「シーア派とスンニ派の双方が認めているこの伝承『われは、あなた方に二つの証拠を残す。一つは神の書で、もう一つはわが家族である』と。あなた方の意見では、第二番目の証拠は消滅したゆえに、唯一の導きの手段は、聖なる書に含まれている教えであるということでありましょう。そこで、あなた方とわたしが提

出するすべての主張を、聖典の基準にそって判断するように願います。その聖典にこそ最高の権威があり、それによりわれわれの議論の正しさが判断できるからです。」敵たちは、自らの主張を守れなくなり、最後の手段として、ホッジャトに、その主張の真実性を証明するために、奇蹟を示すように要請した。かれは声をあげて言った。「わたしが、だれからの援助もなく一人で、議論の力だけで、テヘランの高僧と僧侶全員の総力に、バブの援助により打ち勝ったという奇蹟よりも大なる奇蹟があるでしょうか。」

ホッジャトが、敵たちの根拠のうすい要求を見事に論ばくしたことに、国王は好意をもった。それ以来、国王は、ホッジャトの敵たちの巧みな提案に左右されなくなった。ザンジャンの僧侶たち全員とテヘランの高僧の多くは、ホッジャトを異端者とみなし、死刑の宣告を下した。しかし、国王は、かれに好意を示しつつ、支援を約束した。総理大臣は心中では、ホッジャトを心よく思っていなかったが、国王のかれに対する愛顧があきらかであったので、公に反対することはできなかった。このずる賢い大臣は、ホッジャトの家をひんぱんに訪れ、贈り物を惜しみなく与えて、心中のうらみとねたみを隠したのである。(pp.537-538)

ホッジャトはテヘラン内に監禁同様となった。市の門外に出ることも、友人と交際することもできなくなった。故郷の信者たちは、代表を送って、信教で守るべき法律や原則についてあらたな指示をかれから仰ぐことにした。かれは、バブから受け取った法律に忠実に守るように命じた。それらは、バブの大業を調査するために送った使者たちを通して受け取ったものであった。かれは、一連の法律をあげたが、そのうちいくつかはイスラム教の伝統から離れたものであった。そして皆を安心させるために、つぎのように述べた。「カゼム・ザンジャンは、シラズとエスファハンで、わたしの師バブと親密に交わってきた。わたしがバブと会見させるために送ったエスカンダールとマシュハド・アーマドと同様、かれもまた、バブ自ら信者に命じられた法律を、身をもって守っていることを明言している。したがって、バブの支持者であるわれわれも、その高貴な模範に従わなければならない。」

これを受け取った仲間たちはすぐ、ホッジャトの指示に従いたいという熱望に燃えた。そして、これまでの慣習をすて、熱心に新しい時代の法律を実施しはじめた。幼い子供さえも、バブの法律を忠実に守るようにはげまされた。かれらは、つぎのように述べるように教えられたのである。「われわれの敬愛する師自ら、身をもってそれら

の法律を守っておられる。バブの弟子という特権をもつわれわれも、それらの法律にそって生活しようではないか。」

タバルシ砦の攻囲の知らせがとどいたとき、ホッジャトはまだテヘランに監禁中であつた。かれは、信教の解放のために、勇敢に戦っている仲間たちと運命を共にしたいと熱望したが、それができないことで嘆いた。当時、かれの唯一のなぐさめは、バハオラとの親密な交わりであつた。そのときバハオラから与えられた精神力で、その後すばらしい行為を示し、名をあげたのである。その行為は、タバルシ砦の仲間たちが激烈な戦いで示した行為に劣らないものであつた。

ホッジャトがテヘランに滞在中にモハメッド国王がこの世を去り、息子のナセルディン国王が王座についた。新しい総理大臣（タギ・カーン）はホッジャトの監禁をいっそう嚴重にし、さらにかれを殺害することにしたのである。命に危機がせまっていることを知ったホッジャトは、変装してテヘランを去り、かれの帰りを待ち望んでいた仲間たちと合流した。(pp.538-539)

ホッジャトの帰郷がカルベラ・ヴァリによって仲間たちに知らされると、数多くの賞賛者たちが熱烈な忠誠心を示しにきた。男女、子供を問わず、群れをなして集まってきた、かれに対する敬愛心が変わらないものであることを証明したのである。ナセルディン国王の叔父にあたるザンジャンの知事は、住民の熱烈な歓迎にびっくりし、どうすることもできない怒りから、カルベラ・ヴァリの舌をすぐ切り取るように命じた。この知事は、心中ではホッジャトをひじょうに嫌っていたが、表面では、友人で、好意を寄せているようにみせかけた。そして、しばしばかれを訪れ、この上ない思いやりを示したが、実際はひそかにかれの命を取ろうと陰謀を企て、実行できる瞬間を待っていたのである。

この心の中でくすぶっていた敵意は、あるとるに足らない事件で火炎となって燃え上がった。その事件は、ザンジャンの子供二人がとつぜんけんかしたことから起こつたものであつた。子供の一人は、ホッジャトの仲間の親戚であつたので、知事は、すぐその子供をとらえ、嚴重に監禁するように命じた。信者たちは、子供を釈放してもらおうと、まとまった金を知事に提供したが、かれはそれを拒否したのである。そこで、かれらはホッジャトに不満を訴えたところ、かれは、つぎの断固とした異議の申

し立てを知事に送った。「あの子供は自分の行動の責任をとれる年齢ではありません。罰する必要があるならば、子供ではなくて、父親が罰を受けるべきです。」(pp.540-541)

この訴えが無視されたのを知ったホッジャトは、ふたたび抗議の手紙を書き、影響力をもつ友人に託し、知事に直接手渡すように指示した。この友人はメエル・ジャリルで、アシュラフの父親で、信教のために殉教した人である。知事宅の門衛は、最初かれが中に入るのを阻んだ。これに憤ったかれは、力づくで門を突破するぞと剣を抜いて門衛をおどし、中に入って激怒している知事に強いて子供を釈放させた。

知事が、メエル・ジャリルの要求に無条件に従ったことで、僧侶たちの怒りはいっそう激しいものとなった。かれらは猛烈に抗議し、知事が敵のおどしに従ったことを非難した。そして、自分たちの懸念をこう知事に伝えた。知事の行動で敵は自信をつけ、今後より大きな要求をし、また近い将来、権力を得て政府の行政から知事を追い出すことになるであろうと。ついに、かれらは、ホッジャトの逮捕を知事に同意させることに成功した。かれらは、この逮捕で、ホッジャトの影響がひろがるのを阻止できると確信したのであった。

しかし、知事はしぶしぶ同意したのであった。そこで僧侶たちは、ホッジャトの逮捕によって町の平和と安全がおびやかされることは絶対ないと、何度も知事を安心させた。残忍と異常な体力で名うてのアサドラとサファー・アリの二人が、ホッジャトをとらえ、手錠をつけて知事に引き渡す仕事を申し出た。その仕事のため二人に相当な報酬が約束された。そこで、二人は武装し、頭にはヘルメットを着け、墮落した下層階級から集めた悪党の一団を引き連れて出発した。僧侶たちは、その間、住民をそそのかし、その一団の仕事を手伝うように激励した。(pp.541-542)

悪党の一団が、ホッジャトの居住している屋敷に着いたとたん、ホッジャトの強力な支持者であるミール・サラールがとつぜん、かれらに立ち向かった。かれと七人の武装した仲間は、一団が中に入るのを懸命に阻んだ。かれは、アサドラに、「どこに行こうとしているのか。」と聞いた。これにアサドラが侮辱的な答えをしたため、かれは剣を抜き、「この時代の主なる御方よ！」と叫びながらアサドラに飛びかかり、からの額を切った。一団は武装で身を固めていたが、メール・サラールの大胆不敵な行動におびえ、ちりじりになって逃げ去った。

メンバーが絶望して天に向かって出す苦しい叫び声と、敵がかれらに向かってあびせる悪態の叫び声が交錯した。家族や親族から身を引き離し、ホッジャトの大業の支持者となった者たちが呼びかける歓喜の叫びが、いたるところで聞かれた。敵の陣営は、ひそかに決意していた大闘争の準備で大わらわであった。知事の命令と、知事を支持する高僧や名士や僧侶たちの要請で、近隣の村々から増援隊が急遽送られてきた。
(pp.543-544)

大騒ぎになってきたにもかかわらず、ホッジャトは説教壇にのぼり、高らかに会衆に呼びかけた。「今日、全能者の御手は、真理を誤りから離し、教導の光と誤りの暗黒を分けられた。わたしのために、皆が傷つけられるのは不本意である。知事と僧侶たちの意図は、わたしを捕らえ、殺害することにある。そのほかの野心はいだいていない。わたしの血だけを渴望しているのだ。皆の中で、切迫してきた危機から自分の命を少しでも守りたいと思っている者、この大業のために命をささげたくない者は、時間があるうちに、この場所を離れ、故里に帰るがよい。」(p.544)

その日、知事は、ザンジャンの近隣の村々から三千人以上の男たちを集めた。一方、ミール・サラーとその仲間たちは、敵が不穏になってきたのを見て、ホッジャトのところに行き、予防手段として、アリ・マルダン・カーンの砦に移るように強く勧めた。その砦は、ホッジャトが居住している場所に隣接していた。ホッジャトはその勧めに同意し、女子供と必需品をその砦に移すように命じた。その砦には住人がいたが、説得して引き渡してもらい、その代償として、自分たちが住んでいた何軒かの家屋を与えた。

その間、敵は大攻撃の準備をしていた。そして、一部隊がホッジャトの仲間たちが造ったバリケードの向かって発砲するとすぐ、格別の勇気をもつミール・レザが、ホッジャトに聞いた。知事を捕らえ、砦の囚人としてホッジャトのところに来て来てもらい、その代償として、自分たちが住んでいた何軒かの家屋を与えた。ホッジャトは、その要請に応ぜず、命を危険にさらさないようにと忠告した。(pp.544-545)

知事は、ミール・レザの意図を知って恐怖感におそわれ、即刻ザンジャンを離れることにした。しかし、名士の一人の説得により、それを断念した。知事が去れば、大騒動となり、恥をかくことになろうと説得したのである。その名士は、自分の真剣さ

を示すために、自ら砦の一団に向かって攻撃をすることにした。攻撃の合図を出し、三十名からなる一団の先頭に立って行進しはじめたとき、とつぜん、こちらの方に、剣を抜いて進んできている二人の敵（ホッジヤットの仲間）に出会った。名士は、この二人が自分に襲いかかるものと思ひ込み、仲間の一団と共に、パニックにおそわれ、自宅に逃げもどった。そして、知事にあたえた説得も忘れて、一日中自室に閉じこもった。残りの者たちも、すぐ分散し、攻撃をあきらめた。後で、かれらは知ったが、途中で出会ったこの二人は、攻撃の意図はまったくなく、ある任務を果たすために出かける途中であったのである。

この不面目な事件のあとすぐ、知事の支持者たちは、同じような攻撃をしかけてきたが、どの攻撃も失敗に終わった。砦に攻撃をしかける度に、ホッジヤットは三千人の仲間の何人かに命じて、敵を敗走させたのである。攻撃の命令を出すとき、ホッジヤットはかならず、敵の血を不必要に流してはならないと、仲間たちに警告した。すなわち、これは防衛の戦いであり、唯一の目的は、女子供の安全を守ることであることを忘れてはならないと言いつづけたのである。「われわれは、いかなる状況においても、不信心者に対して聖戦をしかけてはならないと命じられている。かれらがどのような態度とってもだ。」(pp.545-546)

この状態は、政府軍の将軍サドロッド・ダオレが、総理大臣の命令で二連隊を引き連れてザンジャンに到着するまでつづいた。総理大臣はかれに、予定の旅行を中止し、すぐザンジャンに向かい、そこで、政府が召集した軍隊の援助をするようにと命じたのである。さらに、その命令書にはこう書かれていた。「国王は、ザンジャンとその周辺で騒動を起こしている一団を鎮圧する任務を授けられた。その一団の野望をつぶし、その勢力を全滅する特権を付与された。この緊急時にあたって、あなたの重要な奉仕は国民の賞賛と尊敬だけでなく、国王の最高の愛顧を勝ち得ることになるろう。」(p.547)

この励ましの命令に、野心家の将軍は奮起した。即刻、二連隊の先頭に立ってザンジャンに進行し、知事から任された軍力を編成し、砦とその一団に向かって一斉攻撃を命じた。砦周囲の戦いは三日三晩つづいた。包囲された仲間の一団は、ホッジヤットの指揮下で、敵の猛攻撃に大胆不敵に耐え抜いた。敵の圧倒的な軍勢も、すぐれた武器も訓練もこの勇敢な仲間たちを無条件降伏させることはできなかった。大砲から矢継ぎ早に発射される砲火にも思いとどまることなく、睡眠も空腹も忘れ、危険にも気を止めず、砦から飛び出して突撃した。敵ののろいの言葉に、かれらは「この時代の

主なる御方よ！」と大声で応じ、その祈願の言葉にわれを忘れ、敵に突進し、軍勢を追い払ったのであった。

敵はひんぱんに攻撃をしかけてきたが、その度、砦の一団の反撃で敗北させられたため、敵軍は士気を失い、戦ってもむだだと思いはじめた。決定的な勝利を得ることはできないことを認めたのである。将軍自らも、九ヵ月間の持続戦で、自ら引き連れてきた二連隊のうち、残ったのは三十名ばかりの負傷した兵士だけになったのを告白せざるを得なかった。ついに将軍は、屈辱を感じながらも、砦の一団の精神をひるませることができないことを認めざるを得なかった。国王は、将軍をきびしく叱責し、左遷した。こうして将軍が抱いてきた念願は、この敗北で完全にくじかれたのである。
(pp.547-548)

この無残な敗北に、ザンジャンの住民は狼狽した。この敗北のあと、勝つ望みのない戦いに命をかける者はほとんどいなかった。戦いを強いられた者だけが、砦の一団にあらたな攻撃をしかけてきたが、その主力は、テヘランから引きつづき派遣されてきた連隊であった。町の住民、とくに商人たちは、大勢の兵士たちの到来で多いに利益を受けた。一方、ホッジャトの仲間たちは、砦内で必需品の欠乏で苦しんだ。かれらの備えはたちまちなくなったからである。食糧を手に入れるためには、外部の女たちが、いろいろな口実を使って、ひそかに持ち込んできたものを、法外な値段で購入するしかなかった。

砦の一団は、空腹に苦しみ、敵がとつぜんしかけてくる猛攻撃でなやまされながらも、一瞬もひるむことなく、砦の防御にあたった。どれほどの苦難がふりかかっても、一団は希望をもちつづけ、二十八のバリケードを造った。各バリケードは、十九人からなるグループに任された。さらに、別の十九人がそれぞれのバリケードの見張りとして配置され、敵の動きを見守り、報告する役目をもった。

一団は、砦近くにきた敵の触れ役の声でしばしばおどろかされた。触れ役は、一団に、ホッジャトとその大業をすてるように呼びかけた。「知事と司令官は、皆のうち、砦と信仰をすてる者をすべて許し、安全に家に帰れるように保証する。その者は国王からも十分な報酬を受けよう。もろもろの褒美のほか、高い地位も授けられよう。国王もその代理も、この約束を破ることはない」と誓われた。」一団は皆口をそろえて、こ

の呼びかけをさげすみ、それに従う意志はまったくないことを知らせた。(p.549)

この事件で示された砦の勇敢な一団の超脱心は、さらに、村の若い女性の行動によっても証明された。この女性は、自ら進んで、砦内の女性・子供たちと運命を共にするために一団に加わってきたのである。女性の名前はザイナブで、ザンジャン近くの小村出身であった。顔立ちのととのった美しいこの女性は、崇高な信仰心で燃え立ち、また恐れ知らずの勇気をそなえていた。一団の男性たちが苦難に耐えているのを見て、自ら男に変装して、共に敵を撃退したいという抑えがたい願望をもった。そこで、髪を短く切り、頭も身体も男性の仲間と同じような格好をし、剣を腰につけ、小銃と楯をもって、男性の仲間たちに自己紹介した。ザイナブがバリケードの後方にすばやく身を置いたとき、だれもかの女が女性であることに気づかなかった。敵が攻撃をしかけてくるやいなや、かの女は剣を抜き、「この時代の主なる御方よ！」と叫び、おどろくべき大胆さで、敵に向かった。その日、かの女が見せたすばらしい勇気と技能に、敵も味方も感嘆した。敵は、かの女を、怒った神が、自分たちに投げかけたのろいだと思った。絶望感におそわれた敵は、バリケードを捨て、かの女の面前から逃走していった。

砦の小塔から敵の動きを見守っていたホッジャトは、ザイナブの姿を認め、その勇敢な行動に驚嘆した。かの女は敵を追跡しはじめていたが、ホッジャトは、男たちに、かの女を砦にもどさせるように命じた。そして、かの女めがけて飛んでくる敵の砲弾の中を突撃する姿を見て、ホッジャトはこのように言った。「これほどの活力と勇気を示した者はいない。」

ホッジャトはかの女に、女性でありながら、なぜ戦いに出たのかを聞いた。かの女わっと泣き出し、こう答えた。「仲間たちの苦労を見て、わたしの心は悲痛な思いでいっぱいになったのです。衝動を抑えきれず、行動に出ました。男性の仲間と運命を共にするのを、あなたは許してくれないと思ったからです。」ホッジャトは質問した。「あなたは、たしかに、砦の一団に進んで加わってきた同じザイナブだな。」「そうです。わたしは確信していますが、これまでだれもわたしが女性であることに気づいた者はいません。あなただけです。バブに誓ってお願いいたします。一生の望みである殉教の冠を獲得する恩恵を取り上げないで下さい。」(pp.550)

ホッジヤトは、この訴えの語調と態度に深く感動した。そこで、かの女の魂の動揺をしずめ、かの女のために祈りをささげることと約束し、かの女に、ロスタム・アリという名をあたえた。これは、かの女の気高い勇気をしるしであった。そして、こう述べた。『今は復活の日で、秘密がすべて発見される時である。』(コーラン) 神は、男であれ、女であれ、その外面の姿ではなく、信仰の質と生活態度で、人間を判断されるのだ。あなたはまだ若く、経験もあまりないが、大変な活力と技能を示した。それよりすぐれる男性はほとんどいないほどだ。」こう言ってホッジヤトはかの女の願いを聞き入れ、信教が定めた教えを守るように警告した。「われわれは、不実な敵の攻撃から自分たちを守るように命じられている。しかし、相手に聖戦をしかけてはならないのだ。」

五ヵ月間、ザイナブは敵の勢力に、だれも匹敵できないほどの武勇で対抗した。睡眠も空腹も忘れて、愛する大業のために、真剣に戦ったのである。その見事な剛勇さは、迷っていた者たちに勇気をあたえ、各人が果たすべき義務を思い起こさせた。その期間ずっと、かの女は剣をはなすことはなかった。短時間睡眠できたが、その間も、剣に頭をおき、盾で身体を守った。仲間はめいめい特定の場所に配置され、そこで防御にあたるように指示されていたが、かの女だけは、自由に動き回ることができた。ザイナブはつねに、戦いの真っ只中に身をおいて、とくに攻撃の激しい場所に駆けつけ、その部署の仲間を激励し、支援した。かの女の死が近づいてきたころ、敵は、かの女が女性であることに気がついたが、かの女が接近してくると恐れでふるえた。そのかん高い叫び声を聞いただけで、肝をつぶし、勝つ望みを失ったのである。(p.552)

ある日、ザイナブは、仲間がとつぜん敵軍に包囲されたのを見て心を痛め、ホッジヤトのところに駆けつけた。その足下にひざまずき、涙ながらにこん願した。「仲間の援助に行かせて下さい。わたしの命は終わりに近づいていると感じます。敵の剣で命を落としたいのです。わたしの罪をお許し下さい。そして、師(バブ)にもわたしの罪を許して下さい。師のために、わたしの命をささげたいのです。」

ホッジヤトは、胸がいっぱいになり返事に困った。ザイナブは、その沈黙を承諾のしるしだと解釈して、門から飛び出し、すでに多数の仲間たちを殺害した敵の攻撃を阻止するために、「この時代の主なる御方よ！」と七回叫んだ。そして、「なぜ、皆はこんな行動で、イスラム教の名声を汚そうとするのですか！ 皆が真理を語る者であ

れば、なぜ、われわれの面前から意気地なく敗走するのですか！」と叫びながら、敵に向かって突進した。敵の三つのバリケードをつぎからつぎへと破壊し、四つ目のバリケードを倒そうとしていたとき、雨のように降ってきた弾丸にあたり、即死した。敵の中には、ザイナブの純潔さをうたがう者も、その信仰の崇高さと不朽の品性を無視する者もいなかった。このすばらしい献身のおかげで、かの女の死後、かの女の知り合い二十名の女性がバブの信者となった。これらの女性たちにとって、ザイナブはもはや昔の農家の娘ではなくなっていた。かの女は、人間行為の高貴な原則を体現した者、強い信仰のみが生み出し得る精神を体現した者となっていたのである。(p.552)

あるとき、ホッジャトは使いの者を通して、バリケードを守っている仲間たちに指示を出した。それは、バブが信者に命じた祈願の言葉をくり返すことであった。つまり、各祈願の言葉、「神は偉大なり！」、「神は最大なり！」、「神は最高の美なり！」、「神は全栄光者なり！」、「神は最も純粹なり！」を十九回ずつ唱えるように指示されたのである。この指示を受けたその夜、バリケードの防御者たちは皆一斉に大声で唱えた。その声のあまりの強烈さに、敵はとつぜん目をさまし、恐れて宿营地をすて、知事宅の方向に逃げ、その近くの家々に避難した。少数の者は、恐怖のあまり突然死した。かなりの数のザンジャン住民はパニックに襲われ、隣の村に逃げた。多数の者は、その大きな叫び声は審判の日を告げるしるしだと信じた。ほかの者たちは、ホッジャトの陣地から、これまで以上に激しい攻撃がしかけてくる前触れだと感じた。(pp.552-553)

仲間が出したとつぜんの祈願の声が、敵の間にもたらした恐怖を知らされたとき、ホッジャトはつぎのように述べた。「この卑怯な悪党に聖戦をしかける許しを師から受けていればどうなったであろうか。しかし、師は、人びとの心に、慈善と愛の高貴な原則を教え込み、不必要な暴力をすべてやめるように命じられた。わたしと仲間の目的は、国王に忠誠をつくし、国民の幸福を願うことであり、将来もそうである。もし、ザンジャンの僧侶たちの例に習えば、わたしも一生涯、住民から卑屈な敬慕を受ける者となっていたであろう。わたしは、バブの大業に対する不朽の忠誠を、この世で得られるすべての宝物や榮譽と引き換えるようなことは一切ない。」

その夜の出来事は、畏敬と恐れを感じた人びとの心に今でも残っている。わたし（著者）は、目撃者数人が、敵の陣地に起こった騒動と混乱、それと砦を満たした敬虔な雰囲気との違いを熱心に語るのを聞いた。砦の仲間は、神の御名を唱え、その導きと

慈悲を祈っていたが、一方敵の将校や兵士は、恥ずべき酒色にふけていた。砦の団は疲れ切っていたが、徹夜で、バブが指示した賛美の言葉をくり返し唱えた。同じ時間に、敵の陣地から騒々しい笑い声とのろいと冒瀆の言葉がひびいてきた。これが、双方陣地の状況であったのである。そして、その夜、祈願の聲がとつぜん鳴りひびいてきたとき、放縦な士官たちは、その大音響に肝をつぶし、手にしていたワイングラスを地面に落とし、裸足のまま大急ぎで飛び出してきた。その混乱の中で、賭博のテーブルはひっくり返された。多数の者が、衣服も十分身につけず、頭にも何もつけず、荒野に逃げ込んだ。ほかの者らは、僧侶たちの家に逃げ込み、睡眠中のかれらを起こした。驚愕と恐れに駆られたかれらは、この大混乱はおまえたちが起したのだと、相互にはげしく非難しはじめたのである。(pp.553-554)

そのうち敵は、その大きな叫び声の目的を知って安心し、すぐ自分たちの持ち場にもどってきた。もちろん、この出来事で大いに恥をかかされたのであるが。将校は、兵士たちを待ち伏せさせ、ふたたび、叫び声が聞こえてくれば、その方向に向かって射撃するように命じた。このようにして、毎夜、敵はホッジヤットの仲間を何人か殺害することができた。しかし、仲間を失っても残った者らは、同じ熱意で、危険を無視して、祈願の言葉を大声で唱えつづけた。仲間の人数は減少していったが、祈願の聲はますます強大となり、切迫感もましていった。差し迫った死に直面しても、勇敢な砦の防御者たちは祈願をやめることはなかった。祈願により、最愛なる御方を強烈に思い起こすことができたからである。

まだ激戦がつづいていた最中、ホッジヤットはナセルディン国王に書簡を送った。それにはこう書かれていた。「陛下の臣下たちは、あなたをこの国の統治者であり、かれらの信教の保護者であると思っております。かれらは正義を求めております。あなたは、かれらの権利を守ってくれる最高の擁護者だとみなしております。われわれが争っているのは、主にザンジャンの僧侶たちとだけで、決してあなたの政府と国民が関わるようなものではありません。前国王は、わたしをテヘランに召され、わたしの信教の基本的な教えを説明するように要請されました。前国王は、その説明に十分満足され、わたしの努力を大いに褒められました。わたしは故郷にもどることをあきらめ、テヘランに住むことにしました。それは、わたしに対する怒りをしずめ、扇動者たちが点した火を消すため、ほかの意図はまったくありませんでした。自由に故郷にもどれたのですが、国王の公明正大さに頼って、テヘランに残ることを選んだのです。あなたが統治されはじめたころ、それはマザンデランで動乱が起きていたころですが、

総理大臣は、わたしを反逆罪で処刑しようとしていました。テヘランではだれもわたしを保護できないことがわかり、自己防衛のため、ザンジャンに逃げました。そこで、イスラム教の発展につくしましたが、知事がわたしに反対しはじめました。わたしは数回にわたって、かれに中庸と公正を守るように要請しましたが、拒否されました。さらに、ザンジャンの僧侶たちにそそのかされ、また、かれらのお世辞に自信をつけて、わたしを逮捕しようとしたのです。それは、わたしの友人たちの介入で阻止されましたが、住民を扇動して、わたしに敵対させようとしていました。その結果、住民は立ちあがり、現在の混乱となったのです。陛下は、これまで、残虐行為の犠牲者であるわれわれに援助の手を差しのばすことを控えてこられました。敵は、われわれの大業は、王座の転覆を企てているとさえ主張しています。われわれがそのような意図をいっていないことは、公正な目をもつ者には明らかです。われわれの唯一の目的は、陛下の政府と人民の利益を推進することだけです。わたしと主な仲間は、陛下と反対者たちの前で、われわれの大業が安全なものであることを証明するために、テヘランに向かう準備ができております。」

ホッジャトは、この嘆願書だけでは満足せず、ほかの主な仲間にも、同様な嘆願書を出すように命じ、その中でとくに正義をもって対処してくれることを強調するように指示した。使者が、それらの嘆願書をもってテヘランに出発した直後、かれは逮捕され、知事の面前に連れ出された。激怒した知事は、使者をすぐ処刑するように命じた。そして、嘆願書をすべて破り捨て、その代わりに、国王にあてて暴言と侮辱の言葉であふれた手紙を書き、ホッジャトと仲間たちの署名をつけ、テヘランに送ったのである。国王は、それらの無礼な嘆願書に目を通したあと、大いに憤慨し、装備した二連隊を即刻ザンジャンに送り、ホッジャトの支持者は一人残らず全滅させるよう命じた。(pp.554-555)

その間、砦で困難に陥っている仲間に、バブの殉教の知らせがきた。それは、バブの秘書ホセイーン・ヤズディの弟がアゼルバエジャンからカズビンに行く途中でもたらしたものであった。それは敵の間にもひろがり、かれらは気が狂ったようによろこんだ。そして、砦に急ぎ、バブの信者たちの努力をあざけり、ののしった。「今後、お前たちは何のために身を犠牲にするつもりだ。お前たちが命をささげたいと望む者自ら敵の弾丸に倒れたではないか。その遺体さえも敵にも友人にもわからなくなっているのだ。一語だけで、悲しみから解放されるのに、なぜ頑固でありつづけるのか。」かれらは、バブを失って悲嘆している者たちの信念をゆるがそうとしたが、どの試みにも失敗した。一番信念の弱い者にさえ、砦を捨てさせることも、信仰を否定させること

もできなかったのである。

一方、総理大臣は、ザンジャンに増援隊を送るように国王に強く要請していた。ついに、モハメッド・カーンが、多量の軍需品を装備した五連隊を率いて、砦を破壊し、その中の全員を全滅するように命じられた。

二十日間戦いが中止された。その間、軍用地域に行く途中のアジズ・カーンという将軍が、ザンジャンに着いた。この将軍は、宿の主人アリ・カーンを通して、ホッジヤトと連絡を取ることができた。アリ・カーンは、ホッジヤトとの感動的な会見の状況と、砦の一団の意図と訴えについて、将軍に十分な情報をあたえた。ホッジヤトは、アリ・カーンにこのように語ったのである。「政府当局が、わたしの訴えを退けられるならば、許可を得て、家族と共に国外に移る準備があります。しかし、この要請までも拒否され、攻撃をつづけられるならば、われわれもやむを得ず自己防衛に立ち上がらなければなりません。」これを聞いた将軍は、アリ・カーンに、この問題がすばやく解決できるように、全力をつくして当局を説得するつもりでいると約束した。アリ・カーンが去るやいなや、総理大臣の従者が現われ、将軍を逮捕してテヘランに連行した。将軍は恐怖感に襲われ、自分にかかった嫌疑をはらすために、その従者の前で、ホッジヤトをののしり、非難しはじめた。こうして、将軍は、自分の命をおびやかしていた危機を避けることができたのであった。(pp.556-557)

司令官モハメッド・カーンの率いる大連隊の到着は、それまでに見られなかった規模の戦いがザンジャンではじまる合図となった。騎兵隊と歩兵隊からなる十七の連隊が、司令官の指揮のもとに勢ぞろいした。十四個の大砲が砦に向けて配置された。司令官が近隣から集めた五連隊が増援隊として訓練されていた。司令官は、到着した夜、攻撃再開の合図としてラッパを鳴らすように命じた。大砲隊は、すぐ砦に向けて発砲するように命じられた。そのとどろきは、三十キロメートル離れたところまではっきりと聞こえた。ほとんど同時に、ホッジヤトは仲間に、自製の二つの大砲を使用するように命じ、一つは、司令官の本部を眼下に見下ろせる高い場所に移させた。その大砲の砲弾は、司令官のテントに的中し、軍馬に致命傷を負わせた。一方、敵は、砦に向かって猛攻撃をかけ、多数の仲間を殺害した。(pp.557-558)

しかし、何日か過ぎるうちに、司令官の指揮下にある軍勢は、その数、軍備、訓練

においてはるかにすぐれていたにもかかわらず、望んでいたような勝利を得ることができないことがますます明らかになった。敵の将官の一人ファルロック・カーンが戦死したが、かれは、ヤーヤ・カーンの息子で、ソレイマン・カーンの弟であった。これに総理大臣は憤慨し、司令官に強い語調の手紙を送り、砦の一团に、無条件降伏をさせなかったことを叱責した。それには、こう書かれていた。「あなたは国の名を汚し、軍隊の士気を落とし、有能な士官たちの命を無駄にした。」そして、兵士たちにきびしい規律をあたえ、宿営地を放蕩と不品行から清めるように命じた。さらに、ザンジャンの有力者たちと相談するように勧告し、この命令に従い、目的を達成しない場合は、左遷を警告した。そして、こう付け加えた。「それでも、かれらを降伏できなければ、わたし自らザンジャンに行き、地位や信仰にかかわらず、全住民の虐殺を命じる。国王にこれほどの屈辱をもたらし、国民に苦しみをあたえるような町は、国王の恩恵を受けるにふさわしくないからだ。」

絶望した司令官は、区長や長老をすべて呼び寄せ、総理大臣からの手紙を見せ、熱心に説得した。その結果、かれらを即刻立ち上がらせることに成功した。翌日、ザンジャンの頑丈な身体をした男たちは、司令官の旗の下に集まった。四連隊のあと、区長たちが先頭に立ち、そのあとに、ラッパとドラムの音に合わせて、大勢の住民が、砦に向かって行進した。ホッジヤットの仲間も、その騒音にもひるまず、「この時代の主なる御方よ！」という叫び声を一斉にあげ、門から飛び出して、敵に向かって突進した。これほど、激烈で、必死の戦いはこれまでなかった。その日、ホッジヤットの支持者たちの華は、残酷な虐殺行為の犠牲となった。母親たちの眼前で、多くの息子たちが惨殺された。姉妹たちは、敵の兵器で醜くなった兄弟たちの頭がやりの先につきさされ高くかかげられるのを、恐怖と苦悩をもって見つめた。ホッジヤットの仲間が、残忍な敵と戦っていた騒ぎの最中、男たちと並んで戦っていた女たちの声ときどき聞かれたが、それにより、仲間の熱意はいつそう高まった。その日、奇蹟的に勝利を得たのは、強大な敵の前で、女たちがあげた歓喜の叫びによることが大きかった。それは、女たちの勇敢な行動と自己犠牲で、より強烈となった叫びであった。何人かの女たちは、男の姿に変装し、倒れた仲間にならわって突撃し、ほかの女たちは、水をいっぱい入れた皮の袋を肩にかつぎ、負傷者たちののどの渇きをいやし、力を回復させた。一方、敵の陣地は混乱状態であった。水もなくなり、上官たちの逃走で、退却も征服もできない負け戦を戦っていたのである。その日、三百名ほどが殉教の杯を飲み干した。

ホッジャトの仲間たちの中に、モヒセンという人がいた。この人の任務は、祈りの呼びかけをすることであった。かれほどの温かみのある豊かな声をもっている者は近隣にはいなかった。その呼び声は、隣の村までひびき、それを聞いた者の心を深く感動させた。しばしば、その近くのイスラム教徒たちは、耳にひびくモヒセンの声を聞きながら、ホッジャトとその仲間に向けられた異端の嫌疑に怒りを示した。かれらの抗議の声は、いっそうはげしくなり、ついにザンジャンの主な高僧の耳にとどいた。しかし、この高僧もかれらを黙らすことはできなかった。そこで、かれは司令官に、ホッジャトとその仲間は、敬虔でも高潔でもないことを、住民に確信させる方法を見出すように要請した。さらに、こう不平を訴えた。「ホッジャトの一団は、予言者モハメドの敵であり、イスラム教を滅ぼす者らであることを、昼夜、公私の場で住民に確信させようと努力してきた。が、あの邪悪者モヒセンの声で、わたしの言葉の力はなくなり、努力は無に帰した。あのひどい男を消すのはあなたの第一の義務だ。」

司令官は最初、この訴えを聞き入れず、こう返事した。「あなたたちこそ、ホッジャトの一団に聖戦をしかけた責任をもっているのだ。われわれは、政府に仕える身で、その任務は、あたえられた命令を遂行することだけだ。しかしながら、モヒセンを殺害したいのであれば、それ相当の犠牲をはらわなければならない。」高僧は、その意味をすぐ理解した。家にもどるとすぐ、使いの者に贈り物として一万円をもたせて司令官に渡させた。

そこで、司令官は射撃の名手何人かに、モヒセンが祈りの呼びかけをしている最中に射殺するように命じた。夜明け時に、モヒセンが「神のほかには神はなく……」と声をあげたとたん、砲弾が口に当たり、即死した。ホッジャトは、その残虐行為を知らされるとすぐ、別の仲間に、小塔にのぼり、モヒセンが言い残した祈りの言葉をつづけるように命じた。この仲間は、戦いが終わるまで命を落とさなかったが、ほかの仲間たちと共に苦しまされ、最後には、モヒセンと同じように虐殺された。

砦の包囲が終わりに近づいたころ、ホッジャトは、婚約している者らに結婚をすすめた。独身者には配偶者を選んだ。そして、新婚者たちのために、できるかぎりの私財を用いた。妻の宝石さえ全部処分し、それから得たお金も、新婚者たちに好きなものを購入させた。婚礼の祝いは三ヵ月以上つづいたが、その間も、長引く包囲の恐怖と困難が入り混じったものであった。花婿と花嫁がお互いを迎えるときの歓呼の声が、敵の突撃の轟音で幾度も聞こえなくなった。また、かれらの喜びの声が、侵入軍に反

撃せよと合図する「この時代の主なる御方よ！」という叫びで、幾度も消された。花嫁は花婿に、どれほどの愛情をこめて、殉教の冠を勝ち取るための出撃を、少しでも延ばしてくれるように願ったことであろうか。それに対し、花婿はこう答えるのであった。「もう時間の余裕はない。栄光の冠を得るために急がなければならない。来世でかならず再会しよう。来世こそ、よろこびに満ちた永遠の再会の住家なのだ。」
(pp.560-561)

この激動の期間に、二百人ほどの若者が結婚した。ある者は一ヵ月間、ほかの者は数日間、また、ほかの者は短時間だけ邪魔されずに花嫁といっしょに過ごすことができた。突撃の時間を合図するドラムの音が聞こえたとき、皆よろこんで応じた。一人残らず最愛の御方にすすんで身をささげたのである。こうして皆殉教の杯を飲み干すことになった。口では言い表せないほどの苦しみと英雄的行動の舞台となったこの場所が、バブによって「高められた場所」と呼ばれたのは少しも不思議ではない。この名称は、バブ自身の聖なる名前と関連してきているのである。

仲間の一団に、アブドル・バギという者がいた。かれには七人の息子がおり、そのうち五人はホッジャトの勧めで結婚した。結婚式が終わる前に、とつぜん、敵の攻撃が再開した。息子たちはすばやく立ち上がり、敵を撃退するために飛び出した。その戦いで、五人の息子は皆引きつづき命を落としていった。頭脳明晰さと勇気で大いに尊敬されていた長男は、捕らえられ、司令官の前に連れ出された。怒った司令官はこう叫んだ。「その男を地面に寝かせ、生意気にもホッジャトに深い愛をいただいたその胸に火をつけ、その愛を燃やしてしまえ。」それにもひるまず、若者はとつぜん叫んだ。「不幸な人よ、あなたの従者が燃やせる火は、わたしの心に燃えさかる愛の火を消すことはできないのだ。」こうして、この若者は、息を引き取るまで最愛なる御方を賛美しつづけた。(pp.561-562)

固い信仰をもちつづけた女性の中に、オナム・アシュラフがいた。ザンジャンの動乱が起こったとき、かの女は結婚したばかりであった。砦内で、息子アシュラフが誕生し、母親と息子兩人ともに、砦の大虐殺をのがれた。後年、息子が前途有望な若者に成長したとき、バハイの仲間たちを襲った迫害にまき込まれた。敵は、かれに信仰を取り消すように強いたが、それに応じないため、母親にかれを説得させようとした。息子の前に連れ出された母親は、こう叫んだ。「そのような悪質な誘惑に心に向け、真理に背を向けるならば、お前をわたしの息子と認めません。」母親の忠告に忠実に従い、

アシュラフは恐れることなく、平然として死にのぞんだ。母親は、息子に加えられた残忍行為を目撃しても、悲嘆せず、涙も流さなかった。この恥ずべき行為を犯した者らは、母親のおどろくべき勇気と不屈の精神に仰天した。母親は、息子の遺体に別れの視線を投げかけながら、声高らかに言った。「包囲された砦内でお前を生んだ日、わたしが立てた誓いを今、思い出しました。神が授けて下さった唯一の息子が、その誓いを果たせて、これほどうれしいことはありません。」(pp.562-563)

仲間たちの勇敢な心に燃える熱意を、わたしのペンでは描くことができないし、また、それに対して適切な賞賛の言葉を見つけることもできない。苦難の嵐ははげしく吹きまくったが、かれらの心の炎を消すことはできなかった。男女共に、砦の防備を強化し、敵が破壊した個所の修理に全力をそそいだ。少しでもひまになれば、その時間は祈りにささげられた。すべての思いは、自分たちの砦を、敵の猛襲から守ることに集中された。この仕事に貢献した女性の役割は、男性が果たした役割におとらず困難なものであった。地位や年齢にかかわらず、女性は皆、共同作業に力をそそいだのである。衣服を縫い、パンを焼き、病人と負傷者を世話し、バリケードを修理し、敵が撃った弾丸などを中庭やテラスから除き、弱気になっている者を元気づけ、ためらっている者の信仰を強めた。子供たちも共同作業に加わって手伝い、両親の熱意におとらない熱意で燃えているようであった。

この共同一致の精神の高まりと、勇敢な行動の見事さに、敵は、砦内には一万人ほどがいると思った。生活必需品は、何らかの神秘的な方法で砦に届けられ、増援隊もナイリズ、コラサン、そしてタブリズから送られてきていると信じられていた。敵には、一団の力はゆるぎないもので、その資源は無尽蔵に思えたのである。(p.563)

司令官は、一団の強固な粘り強さにいら立ち、また、中央政府からのけん責と抗議に拍車をかけられ、一団を完全に征服するために、あさましくも裏切り手段に訴えることにした。戦場で堂々と戦っても勝利を得ることはできないことを確信した司令官は、まず、たくみに停戦を呼びかけることにした。そして、国王はこの戦いの全面中止を命じられているというニュースを流した。さらに、国王は最初から、マザンデランとナイリズの軍隊支援に賛成されなかったし、また、取るに足らない運動のために多量の血を流すことを悲しんでおられたと伝えたのである。そこで、ザンジャンとその近隣の村々の住民は、国王が実際に、ホッジャトとの和解を司令官に命じ、この不幸な事件をできるだけ迅速に終わらせる意図であると信じたのである。

司令官は、住民がこの陰謀にだまされたのを確認したあと、和解のための宣言書を作成した。その中で、ホッジャトに、自分は永続する和解を真心から求めていると述べた。そして、その誓約が神聖なものであるという証拠に、コーランを添えたのである。さらに、つぎのように付け加えた。「国王は、あなたを許された。したがって、あなたと仲間は、陛下の保護のもとにあることを厳粛に宣言する。この神の書コーランが証人である。砦から出てくる者は皆安全に守られよう。」

ホッジャトは、使者の手から、コーランをうやうやしく受け取り、その宣言書に目を通した。そのあとすぐ、翌日返事を出すと司令官に告げるように指示した。その夜、ホッジャトは主な仲間を集め、敵の宣言書の誠意に疑念をいただいていることを述べた。「マザンデランとナイリズでの裏切り行為は、今もわれわれの記憶に生々しい。同じように、ここでもわれわれを裏切ろうとしているのだ。しかし、コーランに敬意をはらって、この提案に応じ、こちらから何人かをかれらの陣地に送ろう。それにより、かれらの策略があきらかになるであろう。」(pp.564-565)

わたし（著者）は、ザンジャンの虐殺をまぬかれて生き残ったアリ・バダッドからつぎのように聞いた。「わたしは、ホッジャトが、司令官のもとに送った代表一団にともなった子供の一人でした。子供は全部十才以下で九人いました。大人は皆八十才以上の老人でした。その中には、アガ・ダダシュ、ダービッシュ・サラール、モハメッド・ラヒムとモハメッドが含まれていました。ダービッシュ・サラールは、印象深い容姿をしており、背が高く、白ひげをつけ、神秘的な美しさをそなえた人でした。かれは、高潔さと公正な行動で大いに尊敬されており、虐げられた人びとのために尽力したため、当局からも敬意と好意を受けていました。バブの信者になって以来、それまでに受けた栄誉のすべてをすて、高齢にもかかわらず、砦の一団に参加したのです。かれが先頭に立ち、コーランをもって、司令官のところに進んで行きました。

司令官のテントに着き、その入り口の前に立ち、かれの指示を待ちました。司令官は、わたしたちを軽蔑し、あいさつにも答えませんでした。半時間も立たせたあと、きびしく叱るような語調で、声を張り上げて言いました。「お前たちほど卑劣で、恥知らずの人間を見たことがない。」つづけて、非難の言葉を浴びせていたとき、一団のうち一番高齢で、弱々しい老人が、少し話させてくれるように頼みました。老人は無学でしたが、許可を得て話し出しました。それは、賞賛せずにはおれないすばらしいも

のでした。『われわれは、現在も今後も国王に忠節で、法を守る臣民であり、政府と人民の利益を促進する以外の望みをもっていないことを神はご存知です。われわれに敵意をいだく者たちにより、われわれのことが、ひどく誤り伝えられてきました。国王の代理はだれも、われわれを保護することも、理解を示すこともありませんでした。国王の前で、われわれの大業を弁護する者もいませんでした。われわれは幾度も国王に訴えましたが、無視され、耳を傾けてくれることはありませんでした。敵は、支配者たちの無関心に自信をつけ、四方八方からわれわれを攻撃し、財産を略奪し、妻たちや娘たちを辱め、子供たちを捕らえました。政府からの保護はなく、敵から取り巻かれたわれわれは、自己防衛に立ちあがることを余儀なくされたのです。』(pp.565-566)

司令官は副官に向かい、この件の処置に関して意見を聞きました。そして、こう付け加えました。『この老人にどう返事をしたらよいか困っている。もし、わたしに宗教心があれば、この大業をためらいなく信じるであろう。』副官は答えました。『このいまわしい異端からわれわれを救ってくれるのは、剣だけしかありません。』そのとき、ダービッシュ・サラールがつぎの言葉をさしはさみました。『わたしは、コーランをまだ手にしており、また、あなたご自身で作成された宣言書ももっています。今聞いた言葉が、あなたの要請に応じた報いなのですか。』

この言葉に、司令官は怒りを爆発させ、ダービッシュ・サラールのひげを引きはがし、ほかの仲間といっしょに地下牢に投げ込むように命じた。わたしとほかの子供たちは怖くなり、逃げ出しました。『この時代の主なる御方よ！』と叫びながら、バリケードに向かって走りました。何人かは追いつかれ、捕らえられて投獄されました。男が追ってきて、わたしの衣の裾をつかみましたが、それを振りきり、疲れ切って砦の門にたどりついたのです。仲間の一人であるエマム・ゴリが、敵に残酷にも手足を切断されたのを見たとき、どれほど仰天したことでありましょうか。そのぞっとする光景に、身の毛がよだつばかりでした。その同じ日に、停戦が宣言され、今後一切暴力行為は犯さないという厳粛な誓いが立てられたことを知っていたからです。やがて、わたしは、その殺された人は、かれの兄から裏切られたことを知りました。その兄は、かれに話しがあるからと呼び出して、迫害者に渡したのです。(p.566)

わたしは、急いでホッジヤトのところに行きました。ホッジヤトはわたしを愛情深く迎え、顔のほこりをふき、新しい衣服を着せてくれました。そして、かれのそばに座り、ほかの仲間がどうなったかを語るように命じました。そこで、見たことをすべ

て述べたところ、ホッジャトは、こう説明しました。『今は復活の日の嵐なのだ。これまで、世のだれもが見たことのないはげしい嵐なのだ。この日はまさしく自分の兄弟から逃げ、また、母親と父親、妻と子供たちから逃げる> (コーラン) 日なのだ。この日は、自分の弟をすてるだけでは満足せず、近親の血を流すために、財産まで犠牲にする日なのだ。『乳飲み子をかかえた女は、その乳飲み子をかえりみず、子をはらんだ女は、その子を落とすであろう。男たちは酔っているように見えるが、本当は酔っているのではない。それは、神の大なる懲罰なのである。』(コーラン)

ホッジャトは中庭の中心に座し、仲間を集めた。皆が集まると立ちあがり、つぎのように語った。「わが愛する仲間よ。皆のたゆまぬ努力に十分満足している。敵は、われわれを滅亡させようと必死である。皆をだまして砦から出させ、思う存分惨殺するつもりであった。その裏切り行為があばかれたので、腹を立て、仲間のうち最高齢者たちと子供たちを虐待し、投獄したのだ。この砦を占領し、皆を追い散らすまでは、戦いをつづけ、迫害もやめないことがあきらかだ。皆がこの砦に居つづければ、そのうち、敵の捕虜となり、妻たちは辱められ、子供たちは殺されることは確かだ。したがって、皆は、真夜中に、妻と子供たちを連れて逃れるがよい。この暴虐行為がしづまるまで、各人、安全な場所に避難するがよい。わたし一人がここに残り、敵に立ち向かおう。皆が全部殺されるよりも、わたしの死で、敵の復讐心をしずめる方がよいのだ。」(p.567)

仲間は深く感動し、目には涙をうかべ、最後まで、ホッジャトと共に居残りたいという固い決意を宣言した。「あなたを、人殺しの敵のなすがままにさせることはできません。わたしたちの命はあなたの命よりも貴いではありません。あなたの親族よりも高貴な家柄であるわたしたちの家族も同じです。あなたが受けられる災難はすべて、わたしたちも受けたいのです。」ほとんど全員が誓いを守ったが、少数は、長引く包囲でますます困難になっていく生活に耐えられず、ホッジャトの勧告に従って、砦外の安全な場所に移った。こうして、この者たちは、ほかの仲間から離れたのである。

司令官は、奮起して、ザンジャンの強壮な男たちに、自分の本営近くに来るように命じた。かれは、自分の連隊を再編成し、指揮官を任命し、町であらたに募集した軍勢に加えた。それぞれ十個の大砲をそなえた十六連隊に、砦に向かって進軍するように命じた。そのうち八連隊は、毎日午前中に砦への攻撃を命じられ、午後夕方までは、残りの連隊が攻撃するように命じられた。司令官自身も戦場に出て、毎日午前中

に連隊を指揮しているのが見られた。かれは兵士たちに、戦いに勝てば、報酬が得られると元気づけ、負ければ、国王から罰が下されると警告した。

この包囲攻撃は一ヵ月つづいた。敵は、昼間の攻撃だけでは満足せず、夜間にも数回攻撃してきた。敵の猛撃、圧倒的な兵士の数、矢継ぎ早の攻撃で、仲間の数は減ってゆき、困難さもましていった。敵軍には、増援隊が多方面から送られてきたが、砦の仲間は苦難と空腹で弱っていった。

一方、総理大臣は司令官を援助するために、ハサン・アリに、ソンニ派の二連隊を率いてザンジャンに向かうように命じた。この二連隊の到着で、砦への集中砲撃は始まり、そのすさまじさで、砦の崩壊がおびやかされてきた。砲撃は何日間もつづき、ますます頻度をましていったが、その間、ホッジャトの仲間は、見事な武勇と腕前を見せ、それは最悪の敵さえも賞賛せずにはおれないほどであった。(pp.568-569)

砲撃がつづいていたある日、ホッジャトが祈りの前の洗浄を行っているとき、右腕に砲弾があたった。ホッジャトは従者に、自分の受けた傷を妻には知らせないように命じた。しかし、従者の嘆きは深く、感情をかくすことができなかった。かれの流す涙で、ホッジャトの妻は、夫が傷ついたことを知り、すぐ、かれのもとに駆けつけてきた。ところが、ホッジャトは動じた様子はなく静かに祈りにふけていた。腕の傷口から大量の血が流れ出していたが、落ち着いた表情で、つぎのように祈っていた。「おおわが神よ。これらの者らを許したまえ。かれらは、自分たちが何をしているのかわからないからです。かれらに慈悲を与えたまえ。かれらを誤り導き、非行を犯させた者らだけに責任があるからです。」

ホッジャトは、自分の血だらけになった身体を見てかき乱された妻と親族の者らを落ち着かせようとして、こう述べた。「よろこびなさい。われはまだ皆といっしょにいるのではないか。皆が、神の意志に完全に身を任せるように願う。今、皆が目にしてるのは、わが死に際して襲ってくる激しい苦難に比べると一滴にすぎないのだ。神の定めがどのようなものであれ、われわれの義務は、それにいさぎよく従うことである。」

ホッジャトが負傷したことを聞いた仲間は、すぐ武器をおいて、かれのもとに駆けつけてきた。その間、敵は、反撃する者たちがいなくなったという有利な立場を利用

して、攻撃を倍増し、砦の門を押し開けて中に侵入した。その日、女子供百人ほどを捕らえ、かれらの所有物を略奪した。かれらは、十五日間、ザンジャンでは異常なほどの極寒の中に置き去りにされていた。うすい衣以外には身体をおおうものはなく、食べ物も屋根もなく、荒野にさらされたままであった。頭をおおう薄織の布を顔にかけ、無情に吹きつける寒風を避けようとしたがむだであった。ザンジャン市のあちこちから、多数の女たちが群がってきて、苦しんでいる女性たちに、軽蔑とあざけりの言葉を投げかけ、かれらのまわりを狂ったように踊りながら、さげすむように叫んだ。「お前たちは神を見つけたが、その神に報いをたっぷり受けているのだ。」さらに、かの女らの顔につばをかけ、下品な悪口雑言をあびせたのである。(pp.569-570)

砦が敵に占拠されたため、ホッジヤットの仲間は主な防御手段を失った。しかし、かれらの精神をひるませることも、落胆させることもできなかった。仲間の所有物は全部略奪され、防御のすべのない女子供は捕虜となった。仲間と残った女子供は、ホッジヤットの家の近くにある家々にぎっしり詰め込まれた。かれらは、五つの組に分けられた。一つの組は三六一名（十九 x 十九）から成っていた。各組から十九人が一斉に飛び出て、「この時代の主なる御方よ！」と叫びながら、敵中に突入し、相手を敗走させた。これら九十五名の意気盛んな叫び声だけで敵の力をまひさせ、その精神を打ちひしぐのに十分であったのである。(pp.569-570)

この状態は数日つづき、すばやく大勝利をおさめると信じていた敵に屈辱と敗北をもたらした。敵の多数が戦死した。将校に悲しみをあたえたのは、士官たちが、持ち場を見捨てはじめ、砲兵隊の隊長は武器を放棄しはじめ、一方、兵士たちは士気を失い、疲労困憊したことであった。司令官自身も、兵士の規律を維持し、その能率と気力を保つために用いてきた高圧的な手段に疲れ切っていた。かれは再度、残った士官たちと協議し、事態を改善するために、非常手段を見出すことにした。この事態を放っておけば、ザンジャンの住民だけでなく、かれ自身の命まで危なくなりそうであった。かれは言った。「実を言うと、ホッジヤットの仲間の頑として動かない抵抗に疲れたのだ。かれらは、ある精気で鼓舞されていることはあきらかだ。国王がどれほど兵士を激励しようとしても、これほどの効果は絶対生み出せないのだ。これほどの自己犠牲を示せる者は、われわれの軍隊にはいないことは確かだ。わたしの力では、失望の泥沼に落ち込んだ兵士たちを奮起させることはできない。勝っても負けても、兵士たちは、永遠の罪を受ける運命にあると信じているのだ。」(pp.570-571)

慎重な協議の結果、軍の陣地からホッジヤットの仲間の居住地まで地下通路を掘る決心をした。それにより建物を爆破し、ホッジヤットの仲間を無条件降伏させようと決断したのである。そこで一ヵ月間地下通路を掘りつづけ、そこにさまざまな種類の爆薬を置いた。同時に、まだ立っている家々を残酷に取り壊していった。司令官は、破壊を速めるために、砲兵隊に、ホッジヤットの家を砲撃するように命じた。その家と軍の陣地の間に立っていた家屋は全部完全に破壊されてしまっていたので、妨害されることなく砲撃できたのである。

ホッジヤットの家の一部は破壊されていたが、かれはまだそこに住みつづけていた。かれは、幼児のハディを抱いていた妻カディジェに向かい、お前と息子が捕らえられる日がせまっているので、その準備をするように警告した。かの女が苦しい思いをもらしていたとき、飛んできた砲弾で即死した。かの女が胸に抱いていた息子は、そばにあったひばちに落ち、まもなくして、ザンジャンの高僧ミルザ・アボルの家で死亡した。

ホッジヤットは悲痛な思いであったが、悲しみに身をゆだねることを拒み、こう叫んだ。「おおわが神よ。あなたの最愛なる御方を発見し、その御方が、あなたの永遠なる聖霊の顕示者だと認めた日、あなたのために、わたしが受けるべき苦悩を予知しました。これまでも大変悲しい思いをしてきましたが、それは今後あなたの名のもとに、わたしが進んで受ける苦悶には比較できないものです。妻と息子を失い、親族や仲間が犠牲になったこのみじめなわたしの命と、あなたの顕示者を認めたことでわたしに付与される祝福を比べることができましようか。わたしが無数の命をもっていたとしても、世界中の富とその榮譽をもっていたとしても、わたしは、あなたの道にすべてを惜しげなく、よろこんで棄てるでありますよう。」(p.572)

敬愛する指導者が、重傷を負い、妻と子供を失ったことで、仲間のはげしい怒りでいっぱいになった。そして、殺害された同胞の血に復讐するために、最後の命がけの攻撃を決心した。しかし、ホッジヤットは、その決意を思い切らせ、戦いを早めないように忠告した。そして、神の意志に身をまかせ、最後がいつ来ようとも、落ち着いて固い信念をもちつづけるように命じた。

時間がたつにつれて、仲間の人数は減少してゆき、苦難は増していった。また、安

全と感ずる場所もせまくなつてきた。一八五一年一月八日の朝であつた。それまでの十九日間、受けた傷の激痛を耐えてきたホッジャトは、祈りのために身を伏せて、バブの名を唱えていたとき、とつぜん息絶えた。

ホッジャトの突然死は、親族と仲間にとって大きな衝撃であつた。これほど有能で、これほど熟達し、これほど心を奮起させてくれる指導者の死がもたらした嘆きは深かつた。この死は償ふことができないものであつた。仲間のディン・モハメッドとミール・レザイの二人は、敵がホッジャトの死に気づく前に、すぐ遺体を、親族にも仲間にも知られないところに埋葬することにした。真夜中に、遺体はディン・モハメッドの部屋に移され、そこに埋められた。そのあと、遺体が汚されないように、その部屋は破壊され、埋葬場所がだれにも見つからないように注意がはらわれた。

悲壯な事件を生き抜いた五百人以上の女性たちは、ホッジャトの死後すぐ、かれの家に集まつた。指導者であつたホッジャトの死にかかわらず、仲間たちは、同じ熱意をもつて敵の軍勢に対抗した。ホッジャトの旗のもとに集合していた大多数の仲間のうち、残つていたのは二百人の強健な男たちで、そのほかの者らは、戦死するかまたは負傷して動けなくなつていた。(p.573)

敵は、一団を大いに鼓舞してきた指導者がいなくなつたことを知り、奮起した。これまで征服できなかつたおそろべき一団の残りを抹殺する決意を固めたのである。そこで、これまで以上に激烈で、決定的な総攻撃を開始した。ドラムとラッパの音と住民の声援にはげまされた敵は、一団が全滅するまでやめない覚悟で、凶暴に突撃してきた。この猛攻撃に対して、仲間はふたたび「この時代の主なる御方よ！」と叫びをあげて、恐れずに突進し、勇敢な戦いをつづけたが、ついに、全員が殺害されるか、または捕虜となつた。

虐殺が終わらないうちに、略奪の合図が出された。それは、これまでになつた規模で、狂暴きわまるものであつた。司令官が、家に残されているホッジャトの所有物を略奪してはならない、また、かれの親族に暴行を働いてはならないとの命令を出さなかつたならば、貪欲な軍隊の襲撃は、より卑劣なものになつていたのであろう。司令官は、中央政府に事態を知らせ、勧告を求めたいと思つたのであるが、殺気立つた兵士たちの暴力行為をいつまでも抑えておくことはできなかつた。ザンジャンの僧侶たちは、

勝利で得意になり、捕らえられた男たちに最悪の暴行を加え、女たちを辱めるように住民をそそのかした。この勝利は、僧侶たちの大変な努力と生命の損失によるもので、また、かれらの名声と信望が、先例のないほどかかっていたものであった。ホッジャトの家を見張っていた番兵は、その後の騒動の中で、持ち場を追われた。住民は軍隊と手を組んで、ホッジャトとその仲間の所有物を略奪し、戦いを生きのびた少数の者たちに暴行を加えた。司令官も知事も、町全体を捕らえた略奪と復讐への渴望をすくめることはできなかった。この大混乱の中では、秩序も規律もなくなってしまったのである。(p.574)

しかしながら、知事は軍の士官を納得させて、捕虜をハジ・ゴーラムの家に集め、テヘランから指示が来るまで拘留させておくことができた。捕虜の一団は、羊の群れのように、厳冬の冷気にさらされたひどい場所に詰め込まれた。一団が入れられた建物には屋根も家具もなかったのである。二、三日間、食べ物もあたえられずに放置されたままであったが、その後、女たちは高僧ミルザ・アボルの家に移された。自由の身になることを条件に、信仰を取り消させるためであった。ところが、貪欲な高僧は、妻や姉妹や娘たちに手伝わせて、女たちの所有物をうばい、衣服をはぎとり、その代わりにぼろ着を着せた。そして、うばった所持品のうち、貴重品だけは自分が横領したのである。

言語に絶する苛酷な苦しみを受けたあと、女たちは、親族のところにもどることができた。しかし条件として、親族は、かの女らの今後の行動に全責任をもつことになった。残りの女たちは、近隣の村々に分散させられたが、村民は、ザンジャンの住民とちがって、かの女らを歓迎し、真心からの愛情を示した。ただし、ホッジャトの親族は、テヘランから明確な指示がくるまでザンジャンに留められた。負傷者たちも、テヘランの政府当局から処置方法について指示がくるまで拘留された。その間、酷寒にさらされ、残忍な仕打ちを受けたかれらは、二、三日のうちに全員死亡した。(pp.574-575)

司令官は、残りの捕虜を、カルルシ、カムセ、およびイラキの三つの連隊に渡し、即刻処刑するように命じた。かれらは、ラッパとドラムの鳴物入りで、軍の駐屯地まで連行されたが、この合同連隊は、あわれな受難者たちに最悪の残虐行為をはたらいたのである。長短のやりを振りまわして、七十六人の捕虜に飛びかかり、容赦なくかれらの身体をやりで突き通し、手足を切断したのである。それは、国内の拷問屋によ

るもっとも手の込んだ残虐行為をしのぐものであった。その日、残忍な兵士たちは、常軌をはるかに逸した復讐の執念で行動していたのである。兵士たちは、巧みに工夫した残虐行為を連隊同士で張り合い、あわれな犠牲者たちに、ふたたび飛びかかろうとしていたとき、アバ・バシールの父親モハメッド・ハサンがとつぜん立ち上がり、祈りの呼びかけの言葉を唱えはじめた。それは、まわりに集まってきていた群集に深い感動を与えるものであった。そして、死に直面したかれが「神は最も偉大なり！」という言葉を高らかに叫んだとき、その強烈な熱情と威厳に心を打たれたイラク連隊の全員は、その恥ずべき蛮行には加わりたくないと宣言し、自分の持ち場を放棄し、「おお、アリよ！」と叫びながら、恐怖と吐き気をもよおすほどの嫌悪感をもってその場から逃げ去った。かれらは、その忌まわしい流血の光景に背を向けながら、「司令官にのろいあれ！」と絶叫した。「あの卑劣漢はわれわれをだましたのだ。これらの捕虜が、エマム・アリとその親族に不実であるなどと、執拗にわれわれに信じ込ませようとしたのだ。われわれ全員が殺されても、今後絶対そのような犯罪行為を援助するつもりはない。」(pp.575-577)

大砲で吹き飛ばされた捕虜も多数いた。裸にされ、氷のように冷たい水をかけられ、むちで激しく打たれた者たちもいた。また、糖蜜を身体になすりつけられ、息が絶えるまで雪の中に置き去りにされた者たちもいた。このように、捕虜たちは、屈辱と虐待を受けて苦しんだが、だれも信仰を取り消す者はいなかった。また、迫害者たちに対して、怒りの言葉を一言も口にすることはなかった。不満をささやくこともなく、表情からも、後悔や嘆きの気配さえ感じられなかった。どれほどの苦難がふりかかっても、かれらの顔を照らす光をくもらすことはできず、どれほどの侮辱的な言葉も、表情の平静さを乱すことはできなかつたのである。

迫害者は、捕虜を処分したあと、ホッジヤトの遺体をさがしはじめた。しかし、仲間ホッジヤトの埋葬場所を用心深くかくし、どれほど冷酷な拷問を受けても、そのかくし場所を明かすことはなかった。いら立った知事は、七才になるホッジヤトの息子ホセインを連れて来るように命じ、埋葬場所を聞き出そうとした。知事は、かれをやさしくなでながら言った。「わが息子よ。お前の両親が受けた苦しみを知って大変悲しんでいる。悪行を犯したのは、ザンジャンの僧侶たちで、わたしではないのだ。今、わたしはお前の父上の遺体を手厚く埋葬し、父上に対する恥ずべき行為の償いをしたいのだ。」知事は、このようにやさしい態度で子供にうまく取り入って、遺体のかくし場所を語らせた。そこで知事は、従者に、遺体を自分のところに運ばせ、それにロー

プをくくりつけて、ザンジャンの街路をドラムとラッパの鳴物入りで引きずりまわすように命じた。そのあと三日三晩、遺体は広場に放置され、公衆の目にさらされたが、その間、言語に絶する侮辱行為が遺体に加えられたのである。三日目の夜半に、馬に乗った男たちの一団が現れて、遺体をガズビン町の方角にある安全な場所に運んでいったと伝えられている。ホッジヤトの親族に関しては、テヘラン当局から、シラズに連行し、知事の手へ渡すようにとの司令が下された。知事は、かれらの持ち合わせの所有物を横領し、シラズの荒れ果てた家で、みじめな生活を強いたのである。ホッジヤトの末の息子メヘディは、その窮乏生活のため死亡し、荒廃した家の中心に埋葬された。(pp.577-578)

この忘れがたい戦いの終末から九年後に、わたし（著者）は、ザンジャンを訪れ、あの恐ろしい虐殺の場を目にすることができた。廃墟となったアリ・マルダン・カーンの砦を悲痛な思いと恐怖感をもって見つめ、その不滅の防御者たちの血がしみ込んだ地面に足を踏み入れることができた。砦のくずれかかった門や壁に、虐殺の痕跡を認めることができたが、それは、一団の降伏をしるすものであった。また、バリケードとして使用された石にも、おびただしく流された血痕を見つけることができた。(p.579)

砦の戦いで命を落とした者らの数に関しては、今のところ正確には推定されていない。この戦いに加わった者の数は膨大で、包囲期間がひじょうに長引いたため、参加者の名前や数を確かめる仕事は、わたしもためらっている位である。ミムとアサドの二人が、一応仮の名簿を作成しているので、かれらと相談するのもよかろう。ザンジャンで、ホッジヤトの旗の下で殉教した者らの正確な数については、多くの報告があるが、それらは一致していないのである。殉教者の数は千人と推定した者らもいれば、それよりもっと多かったと述べている者らもいるのである。が、わたしは、つぎのように聞いた。殉教者の名前を記録していたホッジヤトの仲間の報告書によると、ホッジヤトの逝去以前に殉教した者の数は千五百九十八名、死後の殉教者の数は二百二人と推定されると。

ザンジャンでの出来事の記述は、主にアリ・タビブ、アバ・バシル、セイエド・アシュラフから得た情報による。この三人は皆殉教したが、それぞれわたしと親交があった。ほかの部分には、ホセイン・ザンジャンが記録し、バハオラのもとに送った原稿にもとづく。その中で、かれはザンジャンの戦いに関して、多方面から集めた情報

を全部記録している。

マザンデランの戦いに関する記述は、同じく感動を与えるものであるが、その大部分は、アブタレブ・シャームルザデが聖地に送った記録と、信者のハイダール・アリが、ここで準備した簡潔な調査結果にもとづくものである。さらに、実際に戦いに加わった人たちからも情報を得ることができた。すなわち、モハメッド・サディク、フォルギ、バディの父で殉教者のアブドル・マジドである。(pp.579-580)

ヴァヒドの生涯と業績に関して、ヤズドで起こった出来事については、ヴァヒドの親密な友人レダール・ルーから情報を得た。ナイルズ戦いの終わりごろの出来事についての記述は、その町の信者モラ・シャフィが聖地に送った詳細な記録から取ったものである。かれは、慎重に調査してバハオラに報告していたのである。記録からもれた出来事については、今後の世代が情報を集めて、後世のために記録を残すことを望んでいる。この物語には多くの空白が残されているが、そのことについては大目に見て下さるよう読者をお願いする次第である。わたしの後に、それらの感動的な出来事について余すところなく情報をまとめ、編さんする人が出てくるであろう。それにより、空白が埋められることを願ってやまない。それらの出来事の意義は、現在のわれわれにはまだ、ほとんど理解できないのである。

第二十五章 バハオラのカルベラへの旅

この啓示の初期の出来事について書きはじめて以来、わたしは、バハオラの口から時折聞いた計り知れないほど貴重な言葉を含めようと固く決心していた。それらの言葉は、バハオラからわたしにだけ宛てられたものもあるし、バハオラの面前で、わたしが仲間の信者たちに語ったものもあるが、それらは主に、すでに叙述した出来事に関するものであった。たとえば、バダシュトの大会についてのバハオラの見解、その最後の段階で起こった騒ぎへのバハオラの言及などで、それらを含めることにより、わたしの物語を豊かで、貴重なものにしたいと願っているのである。

わたし（著者）は、ザンジャンの戦いの叙述を終えたとき、バハオラの面前に案内され、ほかの多数の信者たちと共に、祝福を受けた。かたじけなくも、二回にわたってその祝福を受けたのである。二回ともに、バハオラがアガ・カリム（バハオラの実弟）の家に滞在された四日間に起こった。それは、バハオラが実弟の家に到着されて二日目と四日目の夜であった。四日目は一八八九年一月九日にあたる。その日、サルヴェスタンとファランから来た巡礼の一群と土地の信者何人かと共に、バハオラの面前に案内されたのである。（p.582）

バハオラはつぎのように述べられた。「神に賛美あれ。この啓示で、信者に語るべき基本はすべて明らかにされた。わが書で、信者の義務は明確に定められ、取るべき行動は明白に説明されている。今こそ立ち上がり、義務を果たすときである。われが与えた勧告を行動で示すときだ。皆の神に対する愛、心に燃え立つ愛によって、中庸の度を越さないように、また、われが定めた限界を踏み越えないように気をつけよ。これに関して、われはイラク滞在中に、ムセイ・ゴミにつぎのように書いた。『もし、信仰と確信の泉から、知識の川をすべて飲み干しても、友人にも敵にも、そのおどろくべき内容を口からもらさないように自制しなければならない。心が神への愛で燃え上がっていても、ほかの人の目には内部の興奮がわからないように、そして、魂が大洋のように波立っていても、表情は平静に、また、強烈な感情を態度に現わさないように気をつけなければならない。』

われは、何時であれ、自分自身もこの大業もかくそうとしたことはないことを神はご存知である。学識者の衣は身につけていないが、ヌールとマザンデランで、高い学

識をもつ者たちと何度も論じ、この啓示が真実であることを納得させることができた。われは、決断をひるませたことはなく、だれが挑戦してきても、すべてためらわずに受けた。当時われが語りかけた者はすべて、われの呼びかけに応じ、その教えを信じる準備ができていた。バヤンの人びと（バブの信者）が恥ずべき行動を取り、われが成就した仕事を汚さなかったならば、ヌールとマザンデランの住民は全部この大業を受け入れ、今では、重要な拠点となっていたであろう。(pp.582-583)

メヘディ・ゴリ王子の率いる軍隊が、タバルシの砦を包囲したとき、われはヌールを出て、その勇敢な防御者たちを援助しようと決心した。アブドル・ヴァハブという仲間を先に送り、われの到着を砦の一団に知らせてもらう予定であった。敵軍に包囲されていたが、われは、不動の信念をもった砦の仲間と運命を共にし、危険を冒す決意であった。しかしながら、そのような定めではなかったのである。全能者は、われを砦の一団と運命を共にさせず、今後の事業のためにわれを守られたのである。神の計りがたい英知により、わが意図は、砦にわれが到着する前に、ヌールの住民たちを通して、アモルの知事（代理）ミルザ・タギに伝えられたのである。そこで、ミルザ・タギは兵士を送ってわれと仲間を捕らえた。われが紅茶を飲みながら休んでいると、とつぜん、騎兵隊が現われてわれを取り囲み、われと仲間の所持品と馬を略奪した。その代わりに、きわめて乗り心地の悪い貧弱な馬をあたえたのである。わが仲間は、手錠をかけられ、アモルに連行された。われの到着で、住民の間に騒動が起こり、僧侶の反対にもかかわらず、ミルザ・タギはわれを救い出し、自宅に案内して、手厚くもてなしてくれた。時折、ミルザ・タギは、僧侶の執拗な圧力に屈することもあった。かれらが、われに害をあたえるのを阻止できないと感じたのである。われがまだ知事の家滞在していたとき、マザンデランで軍隊に参加していたサルダール（知事）がアモルにもどってきた。われが虐待を受けたことを知ると、知事は、ミルザ・タギを叱責した。かれが、われを敵から守れなかったからであった。そして、憤慨してこう言った。『これらの無知な者らを非難してどうするのか。そんなに重要なのか。なぜ、僧侶の抗議に左右されたりするのか。（バハオラの）一団が目的地に行くのを阻止するだけで十分であった。かれらをこの家に留めないで、すぐテヘランに安全にどらすべきであったのだ。』

サリでも、われは住民から侮辱を受けた。この町の名士の大半は、われの友人であり、数回にわたってテヘランでわれに会ったことがあったが、われが、ゴッドスといっしょに街路を歩いていると、われわれをののしりはじめたのである。どこへ行って

も、『バビだ！ バビだ！』という叫びを聞いた。かれらのはげしい非難を避けることはできなかった。(pp.583-584)

テヘランで、われは二度投獄された。それは、残酷な迫害者から、無実の人びとを守るために立ち上がったためであった。最初の投獄は、モラ・タギ（タヘレの義父）が殺害されたあと、無実の者らが捕らえられ不当な厳罰を受けたので、その者らに援助の手を差しのべたときであった。二回目の投獄はより苛酷なものであった。それは、無責任な信者が国王の命をうばおうとしたのが原因であった。投獄の後、われはバグダッドに追放されたが、そこに到着後まもなくして、クルディスタンの山に入り、ある期間、完全に孤独の生活を送った。人家から三日間かかる遠隔の山の頂上に宿った。まったく不自由な生活であった。シェイキ・エスマイルという者が、わが住居を発見し、必要としていた食料品を持参するまで、われは完全に孤独であった。

バグダッドにもどって、大変おどろいたことに、バブの大業は極度におろそかにされ、その影響力は弱まり、その名さへほとんど忘れられていた。そこでわれは、バブの大業を再生し、墮落から救い上げるために立ち上がった。当時、恐怖と困惑で混乱していたわが仲間たちに、バブの大業の基本的な真理を、固い決意で大胆にくり返して説き、熱意を失った者らすべてが、ふたたびバブの信教を熱烈に支持するように呼びかけた。われはまた、世界の人びとにも呼びかけ、バブの啓示の光に目をすえるように勧めた。

アドリアノーブルから出発後、コンスタンチノーブルの政府役人の間で、われとわが仲間を海に投げ入れるべきかどうかという論議が起こった。この論議が、ペルシャにとどき、われわれが実際に海に投げ入れられたといううわさが生じた。とくにコラサンでは、わが仲間はひじょうに不安になった。アーマド・アズガンディは、この知らせを聞くとすぐ、そのよううわさは、いかなることがあっても信用できないと、断言したと伝えられている。『もし、そのうわさが真実であれば、バブの啓示は、まったく根拠のないものであるとみなさなければならない。』われわれがアッカの牢獄都市に無事到着したとの知らせを受けて、わが友人たちはよろこび、コラサンの信者たちのアーマド・アズガンディの信念に対する賞賛も高まり、また、かれに対する信頼感も深まった。(pp.585-586)

最大牢獄から、われは世界の為政者と国王数人に書簡を送り、神の大業を信奉するように呼びかけた。ペルシャ国王には、バディという使者に書簡をもたせ、国王に手渡すように命じた。バディは、その書簡を群衆の前で高くかかげ、声をあげて国王に書簡の言葉に注意するように求めた。ほかの書簡も、それぞれの受取人とどいた。フランス皇帝にあてた書簡に、かれの大臣から返事を受け取った。その原文は、今、最大の枝（アブドル・バハ）が保有している。フランス皇帝には、つぎの言葉を宛てた。『おお、フランス皇帝よ。僧侶らに、もはや鐘を打たないように命ぜよ。なぜなら見よ。最も強大な鐘が、主なる神の御手で打たれているからである。それは、神が選ばれた者に顕示されている。』ロシア皇帝にあてた書簡だけは送り先にとどかなかったが、かれに宛てたほかの手紙はとどいた。この書簡もやがて皇帝の手に渡されるであろう。

皆がこの大業を認めることができたことを神に感謝せよ。この祝福を受けた者は、以前ある行いをし、神の定めにより、それを通して、真理に導かれ、受け入れることとなったのである。しかし、本人は、その行いの性格については何も気づいていない。この祝福を失っている者について言うと、かれら自身の行いのみが、この啓示の真理を認めることを妨げているのである。この光を受けた皆は、人びとの中から、迷信と不信の暗やみを一掃するために全力をつくすように念願している。行いで信仰を示し、誤りにある人たちを永遠の救済の道に導くことができるように祈る。この夜のことは、けっして忘れ去られることはない。時間の経過によっても消されることはない。永遠に人びとに語り継がれるであろう。」(p.586)

バブの宣言日から七回目の新年は、一八五一年三月二一日で、ザンジャンの戦いの終末から一ヵ月半がたった。同じ年の春が終わりを告げる六月の初旬、バハオラはテヘランを離れ、カルベラに向かわれた。当時、わたし（著者）はバブの秘書ミルザ・アーマドと共にケルマンシャーに住んでいた。ミルザ・アーマドは、バハオラから、聖なるバブの書き物をすべて集め、書き写すように命じられていた。かれは、バブの原文の大半を所有していたのである。テヘランでの七人の殉教者が残酷な運命に会ったとき、わたしはザランドの父親の家に滞在していた。その後、聖なる廟に参拝に行くという理由をつけてクムに行くことができた。しかし、そこでミルザ・アーマドを見つけることができなかつたので、カシャンに向かった。ムセイ・ゴミが、ミルザ・アーマドの居所を知っているのはカシャンに住んでいるアジムだけであると知らせてくれたからである。アジムに会い、かれといっしょにふたたびクムにもどった。

そこで、セイエド・アボルとい人に紹介された。かれは以前ミルザ・アーマドのケルマンシャーへの旅に同行した人である。アジムは、セイエド・アボルに、わたしを町の門に案内するように指示した。そこで、かれはわたしにミルザ・アーマドの滞在場所を教え、わたしのハマダンに行きを準備してくれることになった。セイエド・アボルは、わたしに、ハマダンでアリ・タビブに会えば、かれは、わたしがミルザ・アーマドと会える場所に案内してくれると言った。わたしは、この指示に従い、アリ・タビブの案内で、商人のゴーラム・ホセインという人に会った。この人が、ミルザ・アーマドが住んでいる家に案内してくれたのである。(p.587)

到着して二、三日後、ミルザ・アーマドは、クム町で、カンラール・ミルザの兄イルデリム・ミルザに大業を教えることができたことを知らせてくれた。ミルザ・アーマドは、この人にバブの書を贈呈したいので、わたしにその役目を受けてくれるように頼んだ。イルデリム・ミルザは、当時、ロレスタン州のゴルラム・アバドの知事で、カヴェ・ヴァレシュタール山中に、自分の軍隊と野営していた。わたしは、ミルザ・アーマドの要請をよろこんで受け入れ、すぐ出発する用意があることを述べた。クルド人の案内人と共に、六日間山を越え、森を通りぬけて、知事の本営に到着した。そこで、頼まれた書を渡し、ミルザ・アーマドへの返事ももらった。その返事は、贈り物に対する感謝と大業への献身を約束するものであった。

もどるとすぐ、バハオラがケルマンシャーに到着されたといううれしい知らせを、ミルザ・アーマドからもらった。バハオラの面前に出ると、ラマダン月であったので、かれはコーランを読まれていた。われわれは、バハオラがその聖なる書を朗読されるのを聞いて祝福を受けた。わたしは、イルデリム・ミルザが、ミルザ・アーマドに宛てた手紙をバハオラに差し出した。バハオラは、それを読まれたあと、このように言われた。「カジャール王朝に属する者が公言する信仰は信頼できない。その者の信仰の告白は偽りである。かれは、バビたち（バブの信者）が、いつか国王を暗殺し、そのあと自分が後継者となる願望を抱いている。バブに対するかれの愛は、そういった動機に駆られているのだ。」二、三ヵ月内に、このバハオラの言葉が真実であることがわかった。イルデリム・ミルザは、セイエド・バシールという熱心な信者の処刑を命じたからである。(pp.587-588)

この時点で、話題からそれて、この殉教者がどのように信者となり、死にいたった状況を簡潔に述べてみたいと思う。バブは、宣言後まもなく弟子たちに分散して大業

を普及するように命じられた。弟子の中に、生ける者の文字の一人、シェイキ・サイドがいた。かれは、インド全国に旅し、バブの教えを広めるように指示された。旅行中に、ムールタン町を訪れ、そこで、セイエド・バシールに会った。かれは、盲人であったが、内なる目で、シェイキ・サイドがもたらした教えの意義をすぐ認めることができた。

かれの深い学識は、大業の価値を認める妨げにはならず、かえって、それにより、大業の意味を把握し、その威力を理解することができた。指導者の地位にあるなどという虚飾をすて、友人と親族からも離れ、固い決意で、大業の奉仕に自分の役割を果そうと立ち上がった。まず、最愛なる御方に会うために、シラズに巡礼に出た。シラズで、バブがアゼルバエジャンの山に追放され、孤独の生活を送っていられることを知っておどろき、嘆いた。そこで、テヘランにおもむき、そこからヌールに行き、バハオラに会った。この会見で、バブに会えなかったことで悲嘆していたかれの心は重荷から解放された。その後、会う人にはすべて、その人の階級や信条にかかわらず、バハオラからあり余るほど受け取ったよろこびと祝福を分かちあたえた。また、バハオラとの交わりを通して、魂の奥底に注ぎ込まれた力をかれらにあたえることができたのであった。

わたし（著者）は、シェイキ・シャヒドがつぎのように語るのを聞いた。「わたしは、真夏に、セイエド・バシールに会うことができました。かれは、カシヤンの名士たちが避暑に行くガムサールを通過中でした。昼夜、その村に集まってきた指導層の僧侶たちと議論するのを見ました。かれは、イスラム教の難解な点を見事な洞察力をもって論じ、恐れたりためらったりすることなく、バブの大業の基本的な教えを説明し、かれらの議論を完全に論破しました。どれほどの学識と経験をもつ者も、かれが提出した大業の教えが真実であるという証拠を否認することはできませんでした。イスラム教の教えと法規についてのかれの見識と知識はひじょうに深く、そのため敵は、かれを妖術師とみなし、その有害な影響で自分たちの地位を失うのも時間の問題だとおそれたのです。」(pp.589-590)

わたしはまた、モラ・エブラヒムが、セイエド・バシールから受けた印象をつぎのように語るのを聞いた。かれの称号はモラ・バシで、ソルタン・アバドで殉教した人である。

「セイエド・バシールが晩年、ソルタン・アバドに立ち寄った際、わたしはかれに会うことができました。そのころかれは、主な僧侶たちと交わりつづけておりましたが、かれのコーランについての知識、モハメッドのものだとされる伝承の知識をしのぐ者はだれもいませんでした。その理解力の見事さに敵は恐れをなしたのです。かれの敵は、しばしば、かれが引用した句が正確であるかどうかを問うたり、論点を支えるために用いた伝承の存在を否定したりしました。それに対して、かれは、イスラム教の伝承を収めた二つの編纂集から、直ちに必要な句を引き出して、自分の論点の正しさを証明したのです。同様に、かれの議論の流暢さと、論題を支える証拠を引き出す手早さに匹敵する者はいませんでした。」

セイエド・バシールは、ソルタン・アバドからロリスタンに行き、そこで、イルデリム・ミルザの野営を訪れ、特別待遇を受けた。ある日、二人で会話中に、大変度胸のあるセイエドがモハメッド国王に言及したとき、イルデリム・ミルザは猛烈に怒った。かれは、セイエドの語調と熱意に激怒して、セイエドの舌を首の後ろから引き抜く刑を命じたのである。セイエドは、この残酷な拷問におどろくほどの不屈の精神で耐えたが、苦痛のあまり息絶えてしまった。同じ週に、イルデリム・ミルザが弟カンラール・ミルザを虐待したという手紙が、その弟によって発見された。弟はすぐ国王に知らせ、兄を思うように処分してよいという許しを得た。この弟は、兄に対して抜きがたい憎しみを抱いていたのである。そこで、兄の衣服をはぎとり、裸のままくさりをつけてアルデビルに連行し、そこで投獄するように命じた。この兄は、やがて獄死した。(p.590)

バハオラは、ラマダン月をケルマンシャーで過ごされた。親族の一人であるショクロラ・ヌーリとタバルシの戦いを生き抜いたモハメッド・マザンダラニの二人だけカルベラに同行させた。わたし（著者）は、バハオラから直接、テヘランから離れた理由を聞いた。「あるとき、総理大臣はわれに、面会にくるように要請した。かれは、われを丁重に迎え、われを召した目的を明らかにした。つぎのように、おだやかにほめかしたのである。『あなたの活動の特質とその影響に十分気がついている。また、あなたが、モラ・ホセインとその仲間を支持し、援助をあたえなかったならば、戦いの経験もない学生の一団が七ヵ月間も、国王の軍隊を阻止することはできなかつたと確信している。一団の戦いを指揮し、学生たちを激励したあなたのすぐれた手腕に賞賛の意を表さずにはおれない。しかし、この事件にあなたが共謀したという証拠を得る

ことができないでいる。あなたほどの知謀に富んだ者が、国家と国王に仕える機会をあたえられずに、何もしないでいることは残念だと思う。そこで思いついたのだが、国王がエスファハン訪問を考慮されているこの時期に、あなたにカルベラを訪れていただきたい。わたしの意図は、国王がもどられたとき、あなたに知事の地位（または政府の高官の地位）を付与されるように準備することである。あなたは、その職務を見事に果してくれるであろう。』われは、そのような非難に強く異議を申し立て、かれが提供した地位を受け入れることを拒否した。この会見の二、三日後、われはテヘランからカルベラに向かった。」

ケルマンシャーを出発する前に、バハオラは、ミルザ・アーマドとわたしを呼び出し、テヘランに向かうように命じられた。わたしの任務は、テヘランに到着後すぐヤーヤに会い、かれをシャルッド近くの砦に連れて行き、そこで、バハオラの帰りを待つことであった。ミルザ・アーマドは、バハオラの帰りまでテヘランに留まるように指示され、同時に砂糖菓子箱とアガ・カリムに宛てた手紙を託された。アガ・カリムはその箱を、最大の枝（アブドル・バハ）とかれの母親が住んでいるマザンデランに送るようになっていた。(p.591)

わたしはヤーヤにバハオラのメッセージを伝えたが、かれはテヘランを離れることを拒否した。そして、わたしにガズビンに行くように指示し、何通かの手紙をガズビンの友人たちに渡すように強制したのである。テヘランにもどったわたしは、親族の要請で、やむを得ずザランドに行くことになった。そのとき、ミルザ・アーマドは、わたしが再度テヘランにもどれるように手配すると約束してくれ、後日その約束を果してくれた。

二ヵ月後、わたしは、ふたたび、ミルザ・アーマドと共にノウ門の外にある隊商宿で冬を過ごした。その間かれは、バブが著わした「ペルジャン・バヤン」と「ダラエル・サベ」の二冊を大変熱心に写した。そして、わたしに「ダラエル・サベ」の写本二冊を、ママレクとタファルシの二人に渡すように頼んだ。ママレクはそれを読んで深く感動し、信者となった。しかし、タファルシの見解はまったく異なっていた。アガ・カリムが出席した集まりで、信者の活動について否定的な感想を述べたのである。

「この宗派は、いまだに活発で、弟子たちは懸命に、その教えをひろめている。先日、若者の弟子がきて、わたしに一冊の論説書を渡した。わたしは、この本をきわめて危険なものであると見ている。一般の人がそれを読めば、かならずその語調にまどわさ

れるであろう。」

アガ・カリムは、タファルシが言及している本は、ミルザ・アーマドが贈ったもので、自分がその使いとなってかれに渡したものであることをすぐ悟った。その日のうちに、アガ・カリムは、わたしにタファルシを訪問し、そのあとザランドの故郷にもどるように忠告した。同時に、ミルザ・アーマドには、すぐクムに向かうことを勧めるように、わたしに頼んだ。かれとわたしの二人は危険にさらされていると、アガ・カリムは見たからである。ミルザ・アーマドの指示に従い、わたしはタファルシから、その本を返してもらうことができた。その後まもなくして、ミルザ・アーマドに別れを告げたが、それ以来かれに会っていない。つまり、ある地点までかれに同行し、そこから、かれはクムに向かい、わたしはザランドに向かったのである。(p.592)

一八五一年の八月、バハオラはカルベラに到着された。この聖なる町に向かう途中で、バハオラはバグダッドに二、三日滞在された。バグダッドは、バハオラがその後もまもなく再訪することになっていた都市で、そこでかれの大業が熟し、世界に明らかにされる運命にあった。バハオラがカルベラに到着されたとき、その町の名士の多くが、セイエド・オロヴの有害な影響の犠牲となり、かれの支持者となっていた。その中には、シェイキ・ソルタンとジャヴァドがいた。かれらは、迷信におぼれ、オロヴを聖霊の顕現だと信じていた。シェイキ・ソルタンは、オロヴの弟子の中でも、もっとも熱心で、自分はオロヴに次ぐ国民の重要な指導者であると思っていた。バハオラは、かれに数度会い、慈愛と勧告により、そのむだな空想をのぞき、みじめな隷属状態からかれを解放して、バブの大業の固い信者となし、信教普及の熱望を心に燃え立たされたのである。かれの同胞弟子たちは、そのおどろくべき即座の改宗を見て、つぎからつぎへと、オロヴへの忠誠をすて、バブの大業を受け入れた。弟子たちから見捨てられ、軽蔑されたオロヴは、ついに、バハオラの権威とその高い地位を認めざるを得なくなった。そして、自分の行動を後悔し、今後一切、自分の理論や主義の唱導を中止すると誓いさえたのである。

このカルベラ訪問中のことである。バハオラは散歩の途中でゾヌジに出会い、後日バグダッドで使命を宣言する予定だという秘密を打ち明けられた。バハオラは、ゾヌジが「約束されたホセイン」を熱心に探しているのを見られたのである。バブは、深い愛情を込めてその御方に言及しており、ゾヌジに、カルベラでその御方に会えると約束していたのである。前の章で、ゾヌジとバハオラの出会いについての状況はすで

に述べた。その日以来、ゾヌジは、新しく発見した聖なる師の魅力に魅されていった。もし自制するようにと忠告されなかったならば、カルベラの住民に、かれらが待望してきた「約束されたホセイン」が再来されたことを公言していたであろう。(pp.593-594)

バハオラの内部にひそむ威力を感じ取った者らの中には、アリ・タビブがいた。かれの心にまかれた種は、成長し、強固な信仰に開花した。激烈な迫害も、その信仰を消すことはできなかった。バハオラも、かれの献身、高潔さ、目的遂行への専心を証言している。この信仰により、やがて、かれは殉教の場へとみちびかれることになった。アブドル・マジドの息子、アブドル・ヴァハブも同じ運命を共にした。かれは、カルベラで店を開いていたが、聖なる師（バハオラ）に従うために、全財産を放棄したいという衝動に駆られた。しかしバハオラは、テヘランに召されるまで、仕事を離れず、生計を立てるようにかれに忠告し、忍耐するように励まし、いくらかのお金をあたえて、店を拡大するようにすすめた。それでも仕事に専心できなかったかれは、テヘランに行き、そこでバハオラが投獄された地下牢に投げ入れられ、バハオラのために殉教したのである。

ミルザ・シラジもまたバハオラに惹かれ、最後の息を引き取るまで大業の熱心な支持者となった。かれは自己をすて、深い献身をもって大業に奉仕した。それは十分に称賛できないほどのもので、友人にも見知らぬ人にも同じように、バハオラから受けた影響がいかにおどろくべきものであったかを語り、信者になる前後に目撃したもろもろの不思議な出来事を熱心に述べたのであった。(p.594)

第二十六章 国王の暗殺未遂事件とその結果

一八五二年、バブの宣言から八回目の新年、バハオラはまだイラクに滞在中で、教えをひろめながら、新しい啓示の基盤を固めていた。かれは分散したバブの弟子たちの気力復活と人材組織と活動の指導に専心しつづけていたが、その熱意と能力は、この運動の初期に、かれがヌールとマザンデランで示した活動を思わせるものであった。敬愛する指導者（バブ）の残酷な殉教と仲間たちの悲劇的な運命を目撃して方向を失った弟子たちは、暗黒に取り巻かれていたが、その中で唯一の光はバハオラであった。バハオラだけが、かれらに勇気と不屈の精神をあたえて鼓舞し、それにより、数々の苦難に耐えることができたのである。バハオラだけが、今後定められている重荷に耐え得るようにかれらを準備し、また、まもなく直面するであろう嵐と危機に立ち向かわせることができたのであった。（p.595）

その年の春に、ナセルディン国王の総理大臣タギ・カーンが、カシャン近くのフィンの公衆風呂で死亡した。（国王の命令で処刑されたのである。）かれは、バブとその弟子たちに、恥ずべき蛮行を加え、信教の急速な発展を必死になってつぶそうとしたが、みじめにも失敗した。かれの名声と荣誉は、死とともに消滅する運命にあったが、かれが抹消しようとしたバブの影響は消えることはなかった。かれがペルシャの総理大臣であった三年間、その職務は最悪の破廉恥行為で汚された。バブが築いた組織を破壊するために、何という残忍な方法を用いたことか。大業を恐れ、憎んでいたかれは、その活力をうばうために、何という裏切り手段に訴えたことか。総理大臣に就任した年に、国王軍を送って、タバルシの砦の防御者たちに非道な猛攻撃をかけ、神の信教を守る無実な人びとを、どれほど残酷に抑圧しようとしたことか。どれほどの怒りと大胆さをもって、ゴッドスとモラ・ホセインをはじめ、国民の中で最も高貴な三百十三人の処刑を主張したことか。任期二年目は、首都テヘラン内の信教を根絶するために、どれほどの残忍きわまる決意をもって奮闘したことか。テヘラン内に住む信者たちの逮捕を認可したのもこの総理大臣であった。テヘランの七人の殉教者の処刑を命じたのもかれであった。ヴァヒドとその仲間に対する攻撃を許可したのもかれであった。かれは、ヴァヒドに対して復讐運動を起こし、ヴァヒドの迫害者たちをそそのかして、忌まわしい非行を犯させたのである。この事件へのかれの関わりは永久に変わることはない。さらに同じ年に、それまでの迫害よりもはるかに激しい打撃をバブの共同体あたえた。それは、バブの命を悲劇的に終わらせるという打撃であった。かれは、努力しても抑圧できなかったバビ共同体の力の源泉であるバブを殺害したの

である。かれの晩年の運動は、自ら巧妙に編み出した大規模な迫害運動の中でも、最も残忍で、永久に残るものである。それは、ホツジャトと仲間千八百人の虐殺にかかわる運動であった。これが、ペルシャでもめったに見られない恐怖政治で始まり、恐怖政治で終わった総理大臣の生涯の著しい特徴であった。(pp.595-598)

後継者のアガ・カーンは、総理大臣になるとすぐ、政府とバハオラの間には解をもたらず仕事にとりかかった。かれは、バハオラをバブの弟子の中で最も有能な人物だとみなしていた。そこでバハオラに温かい手紙を送り、テヘランにもどって自分と会見するように求めた。バハオラは、その手紙を受け取る前に、すでにイラクからペルシャに向かうことを決めていた。

バハオラは、一八五二年のラジャブの月（四月二十一日から五月二十一日の間）にテヘランに到着した。総理大臣の弟ゴリ・カーンがバハオラを出迎えた。かれはその任務を命じられていたからである。丸一カ月間、バハオラは総理大臣の賓客であったが、その接待は、総理大臣に代わってその弟が担当した。多数のテヘランの名士や高官が、バハオラに会見するために群がってきたため、バハオラは自宅にもどることができなかった。そのため、シェミランに向けて出発するまでゴリ・カーンの家に滞在しつづけた。(pp.598-599)

シェミランへの旅の途中で、バハオラがアジムに会ったことを、わたし（著者）はアガ・カリムから聞いた。アジムはバハオラに会うため長い間努力してきていた。バハオラはアジムに、かれの計画（ナセルディン国王暗殺計画）をすてるように、ひじょうに強い言葉で忠告した。バハオラは、アジムの陰謀を非難し、かれが犯そうとしている非行から自分を完全に切り離し、こう警告した。それを実行すれば、これまで以上の大災難がふりかかってくるであろうと。

バハオラが、ナセルディン国王暗殺未遂事件を知らされたのは、ラヴァサンに行き、総理大臣所有のアフチャー村に滞在しているときであった。ゴリ・カーンはつづけて総理大臣に代わってバハオラを接待していた。その事件は、一八五二年八月十五日に起こった。低い身分の無責任な二人の若者による犯行であった。二人の名前はサディク・タブリズとファソラ・ゴミで、共にテヘランで生計を立てていた。国王自ら率いる国王軍がシェミランで野営中に、このおろかな二人が、虐殺された仲間のために復

讐しようとして、絶望のあまり狂乱状態となり犯行におよんだのであった。これがいかに愚行であったかは、かれらが用いた銃で明らかになった。国王の命を狙うのに、効果的な武器を用いる代わりに、理性のある人であれば絶対用いないようなピストルを使ったからである。もし、かれらの犯行が、判断力と常識のある人から扇動されたのであれば、その人はけっして、そのような役に立たない武器を使わせることはなかったであろう。(pp.599-600)

この犯行は、乱暴で薄弱な狂信者二人によるもので、またかれらは、最高の責任者であるバハオラからそのような行動は絶対避けるようにと強く忠告されていたのであるが、その後つづいた迫害と虐殺のはじまりとなった。その残忍さは、マザンデランとザンジャンでの残虐行為に匹敵するものであった。その犯行が起こした嵐で、テラン市全体は驚愕と苦悩のただ中に投げ込まれた。それまでに、度重なる迫害を生き抜いた仲間たちの生命も、この事件にまき込まれた。その結果、バハオラと有能な弟子たちのうち何人かは共に、不潔きわまる暗黒の地下牢に投げ込まれることになったのである。何人もが熱病にかかり、バハオラは、極悪の犯罪者にかげられるひじょうに重いくさを首にかけられ、その重圧で四ヵ月間苦しんだ。その残酷な仕打ちのなまなましい傷跡は、生涯消えることはなかった。

国王と国家機構が脅威にさらされたことで、ペルシャの聖職者全体が怒りで燃え上がった。かれらは、これほどの大胆な犯行には、即刻それ相当の刑罰があたえなければならないと考えた。政府とイスラム教を飲み込もうとしている潮流をせき止めるためには、これまで以上のきびしい処置が必要だとさわぎ立てたのである。バブの信教が始まって以来、信者たちは全国のいたるところで自制してきており、また、指導的立場にある弟子は仲間、暴力行為を避け、政府に忠実に従い、聖戦の意図はないことを明確にするように、くり返し訓示してきた。にもかかわらず、敵は、バブの信教の特質と目的を、政府当局に故意にあやまり伝えていた。そういう時期に、大業の信者が重大な過失を犯したため、敵はこれ幸いに、その非難を大業に向けてきたのである。ついに、為政者に、国家の基盤をおびやかしている異教の迅速な根絶を認識させる時期がきたように見えた。

国王が襲撃されたとき、シェミランにいたゴリ・カーン（総理大臣の弟）は、ただちにバハオラに手紙を書き、その事件を知らせた。「国王の母上は激怒されており、息子の殺害を試みたのはあなたであると、宮中でも民衆の前でも公言されています。さ

らに、かの女はアガ・カーン（総理大臣）をもこの事件にまき込もうとされており、かれを、あなたの共犯者であると非難されています。」そして、バハオラに、大衆の激情がしずまるまで、近くでしばらく身を隠すようにすすめた。アガ・カーンは、熟練した老人の使者をアフチェに送り、バハオラに仕え、バハオラの望まれる安全な場所への案内準備を命じた。(pp.601-602)

しかし、バハオラはゴリ・カーンの提案をことわり、使者の申し出も無視して、翌朝まったく平静に、ラヴァサンから当時シェミラン区のニヤヴァランに置かれていた国王軍の本営に向かったのである。そして、ニヤヴァランの近くにあるザルカンデェ村に到着した。その村にはロシアの公使館があり、バハオラの義弟のミルザ・マジッドが迎えにきて、自宅に滞在するように招待した。この義弟は、ロシア公使の秘書で、公使の家の隣に住んでいた。政府高官ハジ・アリ・カーンの従者はバハオラを認め、すぐ自分の主人に伝えた。そこで、ハジ・アリ・カーンは、バハオラの到着を国王に知らせた。

バハオラの到着の知らせに、国王軍の士官たちはびっくりした。ナセルディン国王も、自分の暗殺の扇動者として非難されている本人が取った大胆で思いがけない行動に大変おどろいた。そして、すぐ信頼できる士官を公使館に送り、その罪に問われている者（バハオラ）を引き渡すように要求した。ロシア公使は、その要求をことわり、バハオラに総理大臣の家に向かうように要請した。かれは、今の状況下ではその家が最適だと考えたのであった。バハオラがこの要請に同意したので、公使は、総理大臣に公式に伝え、こう警告した。「わが政府があなた委任するバハオラを安全に保護されるように、細心の注意をはらっていただきたい。そうされない場合は、あなたが責任を負うことになる。」(p.603)

総理大臣は、要請通りにすることを約束し、最高の敬意を表して自宅にバハオラを迎えた。しかし、自分の地位が危なくならないかと心配し、約束通りの歓待をバハオラにあたえることはできなかった。

バハオラがザルカンデー村を離れようとしていたとき、公使の娘は、バハオラに生命の危機がせまっているのを大変心配し、胸いっぱいになり、涙をおさえることができなかった。そして、いさめるように父にこう言った。「家に迎え入れた客を保護でき

なければ、父上の公使としての権限は何の役に立つのですか。」娘に深い愛情をいただいていた公使は、その涙を見て心を動かされ、バハオラの命をおびやかしている危機を、全力をつくしてそらすことを約束し、娘を安心させた。

同じ日に、国王の軍隊内は大さわぎとなった。暗殺未遂事件後、国王がきびしい命令を出したことで、でたらめなうわさが流れはじめ、近隣の住民の激情をあおりたてたのである。さわぎはテヘランにひろがり、大業の敵の心にくすぶっていた憎悪が炎となって燃え上がった。これまでに見たことがないほどの大混乱がテヘランをおそった。非難の一語、合図またはささやきだけで、無実の人びとが言語に絶するほどの激しい迫害を受けた。生命と財産の安全は完全に消えた。テヘランの聖職者の最高指導者たちは、政府で最大の影響力をもつ高官たちと手を組み、かれらの敵（バハオラ）に、致命的な打撃をあたえることにした。かれらにとって、この敵は、八年間国家の平安を大きく揺るがしてきており、どれほど巧妙な方法も、暴力によっても、かれを黙らすことはできないでいたのである。(pp.604-605)

バブがいなくなった今、バハオラが大敵となった。したがって、バハオラを捕らえ、投獄することが最初の義務だと感じた。かれらにとって、バハオラはバブの精神の再来であった。この精神により、バブは国民の生活と習慣を完全に変えることができたのである。ロシア公使は、バハオラを守るために予防策をとり、警告をあたえたが、バハオラの貴重な生命をほろぼそうと、固い決意をもって伸ばされた手を阻止することはできなかった。(p.606)

シェミランからテヘランに連行される途中、バハオラは数回衣服をはぎとられ、ののしりとあざけりの言葉を浴びせられた。真夏の炎天下、裸足で、シェミランから前述の牢獄まで歩かせられたのである。その途中どこにおいても、群衆から石を投げつけられ、悪態をつかれた。群衆は、バハオラは国王の敵であり、国家の破壊者であると信じ込まされていたのであった。テヘランのシア・チャール（暗黒の穴）と呼ばれる地下牢に連れて行かれる途中で、バハオラが受けた残酷な仕打ちを描写する言葉はない。地下牢に近づいたとき、老女が、石ころをバハオラの顔に投げつけようと、群衆の中から出てきた。かの女の目は、ほかの同年老女にはめったに見られない狂信的な信念で燃えていた。身体全体を怒りでふるわせ、石ころをもった手を上にあげながら、一行に追いつこうと走った。そして、護衛にこん願した。「セイエド・ショウハダ（エマム・ホセイン）に誓ってお願いだ。その男の顔にこの石ころを投げさせてくれ。」

バハオラは背後に近づいてきた老女を見て、護衛に言った。「この老女が、神から賞賛されると信じている行為をさせてあげよ。」(p.607)

バハオラが入れられた牢獄シア・チャールは、以前はテヘランの公衆風呂の貯水槽であった。のちに、凶悪犯を監禁する地下牢として用いられていた。中は真っ暗で、不潔きわまり、囚人も悪質で、人間が監禁される場所としては、最悪の場所であった。足にはさらし枷をはめられ、首にはくさりをかけられた。このくさは、そのとてつもない重さで、全国で悪名高かった。三日三晩、バハオラには食べ物も飲み物も与えられず、睡眠も休息もできなかった。その陰惨な牢獄には寄生虫がむらがり、ものすごい悪臭がたちこめていた。その匂いだけでも、そこに入れられた者の精神はつぶされてしまうほどであった。バハオラは、そのような状態におかれたのである。その悲惨さを見て、守衛の一人は哀れみを感じ、数回にわたって、ひそかに持ち込んだ茶をバハオラに飲ませようとした。しかし、バハオラはそれを拒んだ。家族もしばしば、バハオラに食べさせるために、食べ物を牢獄内に持ち込ませてくれるように守衛に頼んだ。最初は、どれほど頼んでも、きびしい規則をゆるめてもらえなかったが、徐々に、その熱心なこん願を聞き入れてくれるようになった。しかし、持参した食べ物が、実際バハオラに届いたかどうかはわかっていない。また、いっしょに投獄された仲間たちが飢えているのを目前にして、バハオラがその食べ物を口にしたかどうかもわかっていない。国王の怒りの犠牲者となったこれらの無実な人びとにふりかかった苦難よりきびしいものは想像できない。(pp.608-609)

国王暗殺を試みた若者サディク・タブリズの運命はまことに残酷であり、同時に屈辱的であった。国王を馬から引きずり落とし、剣で刺そうとした瞬間取り押さえられたのである。国王の従者二人が、この若者の正体を知ることなく、その場で殺害し、住民の興奮をさめるために、その遺体を二つに切り裂き、一つをシェミランの門、もう一つをシャー・アブドル・アジムの門に吊り下げ、公衆の目にさらした。国王にかすり傷を負わせた若者の仲間二人、ファソラ・ゴミとハジ・ガゼムは、残酷な仕打ちを受け、そのため死亡した。ファソラは、大変な虐待を受けたが、尋問に一切答えなかった。どれほど拷問されても沈黙を守っていたので、口がきけない者と思われた。ついに、いら立った迫害者は、かれののどに溶かした鉛を流し込んだ。こうして、かれの苦しみは終わった。(pp.609-610)

ハジ・ガゼムが受けた仕打ちはいっそう残忍であった。この不運な男は、ソレイマ

ンが、ひどい迫害を受けたと同じ日、シェミランで同じような拷問を受けた。衣服をはがれ、身体にいくつかの穴をあけられ、そこに点されたローソクを差しこまれて、行進させられた。民衆は、かれに向かってどなり、呪いの言葉を投げつけた。このように迫害者たちの心をかき立てる復讐の念は、飽くことを知らなかった。毎日、あらたな犠牲者が、無実の罪のために血を流すことを強いられたが、かれらには、罪に問われている理由はまったくわからなかったのである。テヘランの拷問屋が思いついたありとあらゆる巧妙な仕掛けで、それらの不運な人びとは残酷な拷問を受けたが、裁判にかけられることも、尋問されることもなかった。無実を訴え、証明する権利も一切無視されたのである。

当時、恐怖の日が毎日つづき、バブの弟子二人が殉教した。一人はテヘランで、もう一人はシェミランで殺害されたのである。二人共同じような拷問を受け、共に民衆の手で復讐された。逮捕された者たちは、さまざまな階層の人びとに分配された。それぞれ使いの者が毎日地下牢に来て、犠牲者を要求し、処刑場に連行し、民衆に攻撃の合図をあたえたのである。すると、男も女も、犠牲者に近づき、身体をバラバラに切断し、もとの姿がまったく消えてしまうまで細かく切り裂いたのである。その残酷さに、冷酷きわまる死刑執行人も仰天したほどであった。かれらは、人を殺すのに慣れていたのであるが、民衆が示したほどの残虐行為をしたことはなかったのである。
(pp.611-612)

飽くことを知らない敵は、犠牲者たちに身の毛がよだつような拷問をあたえたが、そのうち、最悪のものはソレイマン・カーンを死にいたらしめた拷問であった。かれの父親ヤーヤ・カーンは、モハメッド国王の父親ナエブス・サルタネに仕える士官であった。ソレイマンは、若いときから地位や官職に対してまったく気乗りがしなかった。バブの大業を受け入れて以来、まわりの人びとがささいなことに没頭しているのを気の毒に思い、また軽蔑を感じた。かれらの野心の空しさが手に取るように見えたのである。まだ若年のころ、首都テヘランの騒々しさを逃れ、聖なる町カルベラへの隠遁を切望した。カルベラで、セイエド・カゼムに出会い、熱心な弟子となった。このように、敬虔で、質素で、隠遁を愛好することがかれの主な特徴であった。シラズからバブの宣言がとどくまで、カルベラの滞在したが、この知らせをもたらしたのは、親友のアルデビリとメヘディ・コイであった。かれは、バブの教えを熱烈に受け入れ、カルベラからテヘランにもどり、タバルシの砦の一团に加わる予定であったが、到着が遅すぎたため目的を果すことができなかった。そこで、テヘランに留まり、カルベ

ラで身につけはじめた衣服を着つづけた。ところが総理大臣は、小型のターバンと、黒色のマントでおおわれた白いチュニックという姿に不快感をもち、かれに軍服に着かえるようにすすめた。そこで、かれは頭には羊皮でつくられた帽子をかぶさせられたのである。それは、かれの父親の地位にふさわしいものと考えられたのであった。さらに総理大臣は、政府の要職につくようにと主張したが、かれは、その要請を固くことわり、大半の時間を、バブの弟子たち、とくにタバルシの戦いを生き抜いた仲間たちと過ごした。そして、仲間たちにおどろくほどの思いやりと親切さを示したのであった。

かれとかれの父親の影響力は強大であったので、総理大臣はかれの命を取るところか、かれに対する暴力行為を一切さけた。かれが、親しく交際していたバブの弟子七人が殉教したとき、かれはテヘランにいたが、政府の官吏も一般の住民も、かれの逮捕を要求することはなかった。総理大臣も、かれがバブの大業に奉仕していることを知らされたが、かれとかれの父親と対立するよりも、無視することを選んだのである。
(pp.613-615)

ザイノル・アベディンの殉教後まもなくしてうわさがひろまった。それは、政府が死刑予定であった者らは、バブの秘書セイエド・ホセインとタヘレを含め、すべて釈放され、今後の迫害は完全になくなったといううわさであった。総理大臣についてもつぎのよううわさがひろまっていた。かれは、自分の死期が近づいていることを感じ、とつぜん恐怖感におそわれ、悔恨の苦しみの中で、つぎのように叫んだといううわさであった。「わたしは、バブの幻に取りつかれている。わたしが、かれの殉教の原因をつくったのだ。わたしは恐ろしい間違いを犯した。わたしに、バブとその仲間の血を流すように圧力をかけた者らの暴力を抑えるべきであった。今はっきり分かったが、国家のためには、そうべきであったのだ。」かれの後継者アガ・カーンも同じように、総理大臣の職務についたとき、自分とバブの信者の間に、永続的な和解をする予定であった。その準備をしていたとき、国王の暗殺未遂事件が起こり、その計画はつぶされ、首都テヘランは前例のない混乱状態となったのである。(p.615)

わたしは（著者）、当時八才であった最大の枝（アブドル・バハ）からつぎの話を聞いた。「わたしたちは、叔父ミルザ・エスマイルの家に避難しました。時折、市場に行くために家を出ました。門から道路に出るか出ないうちに、外で走りまわっていた同じ年頃の男の子たちが、わたしのまわりに群がって、『バビだ！　バビだ！』と叫ぶの

です。テヘランの全住民が、年齢を問わず興奮状態になっているのを知っていたので、かれらの騒ぎを無視し、そっと家に帰りました。ある日、市場を通過して叔父の家にもどろうとしていたとき、振り向くと、小さなごろつきたちが、わたしを追ってきていました。わたしに石ころを投げつけ、おどすように『バビだ！ バビだ！』と叫んでいたのです。この危険からのがれるための唯一の方法は、かれらをおどすしかないと思いましたので、わたしは向きを変えて、決然として、かれらに向かって突進しました。すると、かれらはこわがって逃げ去ってしまったのです。遠くから、叫びが聞こえてきました。『小さなバビが追っかけてくる！ ぼくたちはつかまって殺される！』家に帰りかけていたとき、ある人が、このように大声で叫ぶのを耳にしました。『よくやった。恐れを知らない大胆な子だ。お前の年頃の子が一人で、がきたちの攻撃に逆らえる者はいなかった。』その日以来、近所の少年から悩まされることも、不快な言葉を耳にすることもなくなりました。」(p.616)

混乱の中で、捕らえられ、投獄された人たちの中にソレイマンがいた。この時点で、かれの殉教の状況について述べたいと思う。ここで語る内容は、わたし自ら厳密に調べ、確かめたものである。また、その大部分はアガ・カリムに負うところが多い。アガ・カリムは、当時テヘランに居住しており、仲間たちが受けた恐怖と苦悶を共にしていた。かれはつぎのように語ってくれた。「ソレイマンが殉教した日、わたしは、ミルザ・アブドル・マジドとテヘランの集まりに出席していました。そこには、かなりの数の名士や著名人がおり、その中には、学問の長モラ・マムードがいました。かれは市長に、ソレイマンの死の状況について述べるように求めました。市長は、区長のミルザ・タギを指し、宮殿近くからナオの門外の処刑場までソレイマンを連行したのはかれであると述べました。そこで、ミルザ・タギはそのとき見聞したことをすべて話すことになりました。『わたしと助手は、九本のローソクを購入し、ソレイマンの身体に九つの深い穴を開け、それぞれの穴にローソクを突き刺すように命じられました。そして、それらのローソクに火を点し、ドラムとトランペットの鳴り物入りで、市場を通りぬけて処刑場まで連行し、そこで、かれの身体を二つに裂き、それぞれの断片をナウ門の両側に吊り下げるように命じられたのです。ソレイマン自身がこの殉教方法を選びました。国王は、政府の高官（ハジ・アリ・カーン）に、ソレイマンが事件に関わっていたかどうかを調べ、もし無実ならば、かれに信仰否認を説得するように命じました。もし、信仰を否認すれば、処刑はせず、最終的な判断を下すまで監禁しておくように、もし、そうしない場合は、かれ自身が選ぶ方法で処刑するようにと命じたのです。(pp.616-617)

調査の結果、ソレイマンの無実が明らかとなりました。しかし、信仰を否認するようと説得されたとき、ソレイマンはうれしそうに叫びました。<生命の血が、わたしの血管に流れつづけるかぎり、最愛なる御方への信仰を否定することは絶対にありえない！ エマム・アリが腐肉にたとえたこの世は、わたしの心の的なる御方から、わたしの心をうばうことは絶対にないのだ。>どの方法で命を断ちたいかと聞かれたとき、かれは即座にこう答えました。<身体に九つの穴をあけ、それぞれの穴にローソクを突き刺し、火を点して、テヘランの街路を歩かせてくれ。大勢の人びとを集めて、わたしの栄光ある殉教を目撃させよ。わたしの死の状況が人びとの心に刻まれ、かれらがわたしのはげしい苦悶を思い起こし、わたしが受け入れた聖なる光を認めることができるように。絞首台にたどりつき、この世での最後の祈りをしたあと、わたしの身体を二つに引き裂き、テヘランの門の両側に吊り下げてくれ。その下を通りすぎる大勢の人びとが、バブの信教が弟子たちの心に点した愛を目撃し、その献身の証拠を見るように。>

高官は、ソレイマンの望み通りに処刑するように死刑執行人に命じ、わたしには市場を通りぬけて、処刑場までかれを連行するように指示しました。死刑執行人は、購入してきたローソクをソレイマンに渡し、かれの胸に短刀を突き刺そうと準備していたとき、かれは、とつぜん、そのナイフを死刑執行人のふるえる手から取ろうと腕をのぼしながら言いました。<なぜ、恐れ、ためらっているのか。わたしが自分で、胸に穴をあけ、ローソクを突き刺して火を点したいのだ。>わたしは、かれから襲われるかも知れないと思い、従者に短刀を渡さないように命じ、また、かれの両手を後ろにまわしてくくるように指示しました。かれは、さらにこん願しました。<わたしの指で短刀を突き刺す場所を示させてくれ。これ以外には要請することは何もない。>

そして、胸に二カ所、肩に二カ所、首すじに一カ所、背中に四カ所の穴を開けるように頼みました。穴を開けられる間、かれは平然としてその拷問の苦しみに耐え、神秘につつまれた沈黙を守っていましたが、かれの目は、不動の確信に燃えているようでした。群衆のどなり声も、身体中に流れ出す血を見ても、沈黙をやぶることはなく、九本のローソクが各々の穴に差し込まれ、火が点されるまで落ち着き払っていました。
(pp.617-618)

準備がととのったとき、かれは背骨をまっすぐにして立ち上がり、同じ断固たる信念を顔に浮かべて殉教の場に向かって歩きだしました。まわりに集まってきた群衆は

かれにつづきました。数歩ごとに、かれは歩みを止め、あっけにとられた傍観者たちを見つめ、叫びました。＜今日、栄光の冠を得るために、わたしと共に歩んできた者たちの行列ほど威風堂々としたものはないであろう。バブに栄光あれ。バブは、愛する者らの胸に強烈な献身の炎を点し、国王の権力をしのぐ威力をあたえられた。＞時折、かれは熱烈な信仰の念に酔ったかのように、こう叫びました。＜昔、アブラハムは苦悶にあえぎながら、神に活力を求めて祈っていたとき、見えざる神の声を聞いた。[おお火炎よ。炎を弱め、アブラハムを守れ。] だが、このソレイマンは、荒れ狂う心の奥底からこう叫んでいるのだ。[主よ、わが主よ、あなたの火をわたしの内部で燃やしつづけ、その火炎で、わたしを焼き尽くしたまえ。]＞ローソクの火が傷口でちらつくのを見て、かれは強烈なよろこびで大声をあげました。＜わたしの魂を燃え上がらせた御方が、ここに来てわたしの状態を見て下さればと思う。＞そして、ソレイマンの状態を見て、肝をつぶされたように立ちすくんでいる群衆に向かって叫びました。＜この世のぶどう酒で、わたしが酔っていると思ってはならない。わたしの魂は、最愛なる御方への愛でみたされているのだ。その愛が、国王でさえうらやましく思う主権を、わたしがつもっていると感じさせるのだ。＞

死が近づいてきたとき、ソレイマンが口からもらした喜びの叫び声をはっきりと思い出すことはできません。おぼえていることは、二、三の感動的な言葉だけで、歓喜の絶頂時に観衆に呼びかけたものでした。そのときのかれの表情を描写することも、かれの言葉が群衆にあたえた影響も計ることはできません。(p.619)

ソレイマンがまだ市場を通りすぎていたとき、そよ風が吹きつけ、かれの胸に刺されたローソクの火があおられました。ローソクはすばやく溶け、炎は傷口まで達しました。二、三步後につづいていたわれわれは、かれの肌が焼ける音をはっきりと聞き取ることができました。かれの身体をつつんだ血と火炎は、かれを沈黙させるどころか、抑えられない熱情をいっそう高めたように見えました。そして、傷口をなめつくす火炎に向かって、つぎのように呼びかける声が聞き取れました。＜おお火炎よ。おまえは、とっくにわたしを苦しめる力を失った。早くわが身体をなめつくせ。おまえの炎の舌から、わたしをわが最愛なる御方へと招く声が聞こえるのだ。＞

熱烈さのあまり、かれの激痛も苦しみも消えたように見えました。火炎につつまれたかれは、征服者が勝利の場へと行進するように歩いていきました。興奮した群衆の間を、炎となった身体を進めていったのです。処刑台のもとに到着すると、ふたたび

群衆に向かって声をあげ、最後の訴えをしました。＜火炎と血のえじきとなっているこのソレイマンは、最近まで、この世があたえてくれるすべての恩恵と富を享受してきたのではなかったか。わたしが、この世の榮譽をすてて、これほど身を落ちぶれさせ、苦しみを受け入れた原因を皆知っているのか。＞その後、エマム・ハサンの廟に向かって身を伏せ、アラビア語で何かささやきましたが、わたしには聞き取れませんでした。祈りが終わるとすぐ、死刑執行人に向かって叫びました。＜仕事は終わった。さあ、処刑せよ。＞かれの身体がおので二つに切り裂かれるとき、かれはまだ生きていました。この信じがたいほどの苦しみにかかわらず、最愛の御方を称える言葉が、最後の息を引き取るまで口からもれつづけていました。』(pp.619-620)

この悲惨な話を聞いた者たちは、深く心を動かされました。細かいところまで熱心に聞いていた学問の長は、ぞっとして絶望のあまり両手をにぎりしめ、叫ぶように言いました。『この大業は、何と不可解で、何と不思議なものか。』その後は何も言わずに、立ち去りました。」

この時期の混乱つづきの中で、もう一人のバブのすぐれた弟子が殉教した。それは偉大で勇敢な女性タヘレで、かの女もテヘラン中に猛威をふるっていたはげしい嵐に巻き込まれた。ここで、タヘレの殉教の状況について語りたいと思うが、その情報は、信頼できる人びとから入手したものである。その中の何人かは、実際にその殉教を目撃した人たちである。かの女はテヘランに長期間滞在したが、その間、その都市の主要な女性たちから温かく迎えられ、大いに尊敬されていた。当時かの女は人気の絶頂に達していたのである。かの女が監禁されていた家は、女性の賛美者たちで取り巻かれていた。かの女らは、タヘレから知識を得たいと門に押しかけてきた。その中にはカラントールの妻がいた。(タヘレはカラントールの家に監禁されていた。)この妻は、タヘレを大いに尊敬し、女主人としてテヘランのよりすぐりの女性たちをタヘレに紹介し、異常なほどの熱意をもってかの女に仕えた。こうしてタヘレの女性たちへの影響が深まることを助けたのである。かの女と親密であった人びとが、かの女がつぎのように語るのを聞いた。「タヘレがまだわたしの家に滞在していたときでした。ある晩、かの女から呼ばれたので行ってみると、かの女は、真っ白な絹のガウンで盛装しており、部屋は甘い香りのする香水でみたさされていました。あまりにも様子が変わっていたので、おどろいたことを告げると、かの女はこう述べました。『わたしは、最愛なる御方にお会いする準備をしています。監禁の身であるわたしの世話や心配から、あなたを自由にしてあげたいのです。』わたしは、ひじょうにおどろき、タヘレと別れなけ

ればならないという思いで涙がこみあげてきました。タヘレはわたしを元気づけようとして、こう言いました。『嘆く時間はまだきていません。わたしの最後の望みを聞いてください。というのも、わたしの逮捕と殉教の時間が近づいているからです。あなたの息子さんに、わたしの処刑場まで来ていただきたいのです。そして、監視人や死刑執行人が、わたしのガウンをはぎ取らないように見守ってもらいたいのです。また、遺体を穴に投げ入れ、土と石ころで埋めてもらいたいのです。死後三日たつと、女性が訪れてきますので、この包みを渡してください。最後のお願いですが、わたしの部屋にだれも入れないようにしてください。今から、この家から出る呼び出しがくるまで、わたしの祈りをだれからも妨げられたくないからです。今日は断食します。最愛なる御方に会うまで断食を破らないつもりです。』かの女はわたしに、部屋にかぎをかけ、出発の時間までけっして開けないように、そして、かの女の敵が公表するまで、自分の死を秘密にしておくように頼みました。(pp.622-624)

わたしは、かの女を深く愛していましたので、その要請どおりにしました。かの女の望みを叶えてあげなければという強い思いがなかったならば、一瞬間でもかの女と別れなければならないようなことはしなかったでしょう。それから、かの女の部屋にかぎをかけ、抑えきれない悲痛な思いで、自分の部屋に閉じこもりました。タヘレの殉教の時間がせまっていることを思うと、わたしの心は引きちぎられるような感じがありました。絶望のあまり神に祈りました。『主よ、主よ、あなたのお望みであれば、かの女が飲みたいと望んでいる杯を逆さにしたまえ。』その日、夜まで、いたたまれなくなって、数回部屋を出て、かの女の部屋の入り口にそっと立ち、かの女の口からもれている言葉を聞き取ろうとしました。かの女は、魂が魅惑されるような美しい調べで、最愛なる御方を賛美していました。わたしの心の動揺ははげしく、立っていることができないほどでした。

日没から四時間後、ドアを叩く音がしました。そこで、いそいで息子のところに行き、タヘレの望みを伝えたところ、その要請をすべて実行することを約束してくれました。その夜、偶然夫は不在でした。息子は、アジズ・カーン（将軍）の従者が家の入り口に立っていて、タヘレの引渡しを要求していることを告げました。その知らせを聞いて、恐怖感でいっぱいになったわたしは、タヘレの部屋の入り口によるめきながら近づき、ふるえる手でかぎを開けました。すると、タヘレは、ヴェールをかぶって、部屋を出る準備をしていました。かの女は、歩き回りながら悲しみと勝利を表わす祈りを唱えていたのです。わたしに気がつくとすぐ、近づいて接吻しました。そし

て、わたしの手にダンスのかぎを渡し、『中のものは、つまらないものですが、あなたの家に滞在した記念におあげします。それらを見て、わたしを思い出し、わたしのためによろこんで下さい。』

タヘレは、この別れの言葉を最後に、わたしの息子に伴われて去って行きました。かの女の美しい姿が次第に遠ざかるのを見ながら、わたしは、悲痛な思いで立ちすくんでいました。かの女は、知事が準備した馬に乗り、息子と多数の従者に伴われて殉教の場となる庭園に向かったのです。

三時間後、息子がもどってきました。そして、涙で顔をぬらし、知事や下劣な将校たちをのろいました。わたしは、息子を落ち着かせ、そばに座らせて、タヘレの殉教の状況をくわしく話してくれるように頼みました。かれは、涙にむせびながら、こう答えました。『母上、わたしが見たことをどう述べていいのかわかりません。われわれは、市の門外にある庭園に直行し、そこで、ぞっとする光景を目にしました。知事と将校たちが、酒に酔って大声で笑いながら、どんちゃんさわぎをしていたのです。タヘレは馬からおり、わたしを呼んで、こう頼みました。<この人たちは、わたしを絞め殺すつもりです。そのために使ってもらいたいと思って絹のスカーフを以前から用意していました。これをあの酔っ払いに渡して、わたしの命を取るように説得して下さい。>(pp.625-626)

知事のところに行ったところ、相当酒に酔っていたかれは叫びました。<人が祝って楽しんでいるのをじゃまするな！ あのみじめで恥知らずの女の首を絞め、穴に投げ込め！>知事にそれ以上頼んでも無理だと思い、以前から知り合いの従者二人に、そのスカーフを渡しました。そこで、タヘレは望みどおりに自分のスカーフで首を絞められ殉教しました。その直後、庭師に遺体をかくせる場所を聞いたところ、最近掘りかけた井戸のある場所を教えてくださいました。ほかの者らの手をかりて、遺体を井戸に下ろし、かの女の望みどおりに、土と石ころで埋めました。タヘレの殉教を目撃した者らは、深く心を打たれ、悲しみに沈んで去って行きました。』(pp.626-627)

息子の悲壮な話に、わたしの目から涙があふれ出てきました。そして、感情を抑えることができず、意識を失って地面に倒れてしまいました。意識がもどったとき、息子もまた苦痛でいっぱいになっているのがわかりました。かれは、長椅子に横たわり

悲嘆にくれていたのです。わたしの状態を見て、近づき、なぐさめてくれました。そして、こう言いました。『涙を流すと父上にわかってしまいます。父上は、自分の占めている重要な地位を考えて、われわれを見捨て、関係を断ってしまうでしょう。涙をおさえないと、父親は、国王の面前でわれわれを憎むべき敵に魅惑された者らとして非難するでしょう。そして国王の許可を得て、自分の手でわれわれを殺害しかねません。大業を受け入れていないわれわれが、そのような運命に甘んじるべきでしょうか。われわれがすべきことは、タヘレを不純で、不名誉だと非難する者らから守るだけです。タヘレの愛をわれわれの心に留め、敵の中傷に対して、タヘレの高潔な生き方を実施すべきではないでしょうか。』(p.627)

息子の言葉で、わたしの心の動揺はしずまりました。そこで、タンスのところまで行き、タヘレがくれたかぎで開けました。そこには、最上の香水びん、じゅず、サンゴのネックレス、指輪が三つ置かれていました。指輪にはそれぞれ、トルコ石、カーネリアン、ルビーがはめられていました。かの女の所持品を見ながら、その波乱にみちた生涯について考えました。かの女の大胆さ、熱意、崇高な責任感、不動の信仰を感動にあふれながら思い起こしたのです。かの女の文学的才能、そして監禁、恥辱、中傷に耐えた不屈の精神に思いをめぐらしましたが、今や、その晴れやかな顔は、土と石ころの下に埋められてしまったのです。かの女がしばしば口にしていた言葉をわたし自らくり返しているうちに、かの女の情熱的な雄弁が思い出され、心が温まってきました。かの女の広い知識、コーランへの精通、信教への熱烈な忠誠心、熱烈な信仰の弁護、大業への奉仕、そして、耐えなければならなかった苦難と悲哀、仲間を示した模範、大業の進展に与えた刺激、同胞国民の心に刻み込んだ名前などなど、タンスのそばに立ったまま思い出し、これほど偉大な女性が、なぜ富と榮譽をすて、シラズから現われた名もない若者の大業の信者となったのか不思議に思ったのです。かの女を親族から切り離し、波乱の生涯を支え、最後に殉教の場へと運んだ力の秘密は何であったのでしょうか。それは、神の力にちがいません。神の御手がかの女の運命をみちびき、危機にはらんだかの女の生涯に道を開いたのでありましょう。(pp.627-628)

タヘレの殉教後三日して、約束どおり、女性が現われました。かの女の名前を聞いたところ、タヘレが述べていた名前と同じでしたので、依頼されていた小包を渡しました。この女性には以前に会ったことはなく、その後も会うことはありませんでした。」

その不滅の女性の名前はファテメで、姓はオンム・サルメで、ザキエとも呼ばれていた。生まれた年は、バハオラの生誕の年の一八一七年で、三十六才のときテヘランで殉教した。かの女の同時代の人びとは、かの女を適切に認めることができなかったが、将来の世代が、かの女の生涯について貴重な記録を残してくれることを願っている。また、将来の歴史家が、かの女の影響を十分認め、国家と国民にささげたその独特な奉仕について記録してくれるであろう。信教の信者が、かの女の模範に従い、その業績を語り、その書き物を収集し、その能力の秘密を明らかにし、世界の人びとから慕われるようになることを願うばかりである。(pp.628-629)

同じ激動の時期、テヘランで殉教したバブの弟子たちの中ですぐれた人物は、ホセイン・ヤズディである。かれは、マーカーとチェリグでバブの秘書をつとめた。バブはミルザ・ヤーヤに書簡を宛てたが、その中で、信教の教えに深く精通していたホセイン・ヤズディに教えを乞うようにすすめている。声望と経験があり、バブから最大の信頼を受け、バブと親しく交わったかれは、バブの殉教後、テヘランの地下牢で長期間監禁され、大変な苦しみを受けて殉教した。バハオラは、かれの苦難をやわらげるために、最大限の援助をし、毎月、必要経費を送ったりした。かれはまた、看守からも賞賛されていた。バブとの長期間にわたる親密な交際で、信教の理解は深まり、魂にも力がつき、それは生涯の終わりが近づくにつれて、より一層行動で表わされるようになった。かれは牢獄で横たわりながら、師バブと同じような死を迎える日を切望していた。バブと同じ日に殉教することが、最大の望みであったが、それは実現できなかったのも、バブと同じ殉教の杯を飲み干す時間を待ち望んでいたのもである。テヘランの高官たちは、幾度もかれを監獄と死刑から救い出そうとしたが、かれはそれをはっきりと拒否した。かれの目からは涙がとめどもなく流れていたが、それは、アゼルバエジャンの残酷な監禁の暗黒の中で光を放ったバブの御顔をふたたび見たいという熱望の涙であった。その御顔のかがやきはまた、冬の寒々とした夜を温めたのである。暗い監獄で、バブと過ごした喜びにみちた日々を思い出しているとき、かれの魂にのしかかってきた苦悩を除いてくれる御方が現われた。それはバハオラであった。ホセイン・ヤズディは、殉教の時間までバハオラと共に過ごすという恩恵にあずかったのである。このバブの秘書ホセイン・ヤズディを殺したのは、タヘレを殺害したサルダールであったが、その状況を説明する必要はないと思う。こうしてホセイン・ヤズディもまた、ほかの仲間と同様残酷な辱めを受けて、長い間切望してきた殉教の杯を飲んだのであった。(pp.629-631)

ここで、バハオラと恐怖の投獄を共にした残りのバブの弟子たちに、どのようなことがふりかかったかを述べてみたい。わたし（著者）は、バハオラの口から、しばしばつぎのように聞いた。「テヘランで、忘れがたい年に荒れ狂った嵐で倒された者らはすべて、われが監禁されていた地下牢シヤ・チャールの囚人となった。われわれは、ひとつの部屋に詰め込まれ、足をさらしかせにはめられ、ひじょうに重いくさりがかけられた。そこには異様な悪臭が立ちこめており、床は汚物でおおわれ、寄生虫がむらがっていた。その地下牢には一切光は射しこまず、氷のような寒気が暖まることはなかった。われわれは、二列に向き合うように並ばされた。仲間の囚人たちは、われが教えた句を毎夜、熱烈に唱えた。『神こそはわれを満たしたもう。まことに、神こそはすべてを満たす者でありたもう。』と一列が唱えると、もう一列が、『神を信頼する者らには、信頼させよ。』と答えるのであった。このよろこびの合唱は、夜明け時までとどろきつづけた。その響きは、牢獄をみだし、厚い壁を突き通って、それほど遠くないところにある宮殿の国王の耳にとどいた。『一体この音は何か？』と国王が叫んだとき、『バビたちが牢獄で唱えている聖歌です。』と従者は答えた。国王は、それ以上何も言わなかった。また、囚人たちが、残酷な牢獄に監禁されているにもかかわらず、熱烈に唱えつづける合唱を止めることもしなかった。(PP.631-632)

ある日、国王が囚人に分配するようにと命じた焼肉がもち込まれた。『国王は、約束を果すために、今日を選んで羊肉を送られた。』と従者は述べた。仲間たちは沈黙し、われがかれらに代わって返事するのを待った。われはこう応えた。『この贈り物をお返ししたい。われわれには必要でないのだ。』看守たち自身、その焼肉を食べたがっていたので、この返事に怒ることはなかった。仲間たちは皆空腹に襲われていたが、まことに英雄的といえる不屈の精神をもって、一言の不平ももらさず、この痛ましい状況に耐えた。ただ一人、モタヴァリという者が、国王が送ってきた焼肉を口にしたいという欲望を示しただけであった。神に賛美あれ。仲間たちは、国王の取り扱いに不満を言うどころか、賛美の言葉を絶え間なく口からもらしたのである。それは残酷な監禁の苦しさをよろこびに変えるものであった。(p.632)

毎日、看守が入ってきて、一人の仲間の名前を呼び、絞首台のところまでついでくように命じた。名前を呼ばれた者は、どれほどの熱望をもって、その厳粛な呼びかけに応じたことであろうか。くさりから解放されるとすばやく立ち上がり、よろこびを抑えきれず、われのところに来て、われを抱擁したのである。われは、来世での永遠の生命を確信させてなぐさめ、その者の心を希望とよろこびでみだし、栄光の冠を

勝ち取るために送り出したのである。それから、かれは残りの仲間の囚人たちを抱擁し、勇敢に生きたように、勇敢に死に向かったのである。このように一人ずつ殉教していったが、その度に、われに親愛感をもつようになった看守が、かれらの死の状況を知らせてくれた。かれらは皆、最後の時間まで、よろこびをもって苦しみに耐えたことをわれに教えてくれたのである。

ある夜、われと同じくさりにつながれていたアブドル・ヴァハブから起こされた。かれは、カゼマインからわれに同行し、テヘランで捕われ、投獄された仲間である。かれは、われが目をさましているかどうかを聞き、その夜見た夢を話しはじめた。『夢の中で、わたしは無限にひろがる美しい空間に舞い上がっていました。わたしには翼がついており、行きたいところにはどこにでも行けるようでした。魂は、恍惚とした喜び感でみたされており、その無限の空間をすみやかに、楽々と飛びまわることができましたが、それを言葉で表現することはできません。』われは、こう答えた。『今日は、あなたが大業に身を犠牲にする日だ。最後まで不動の信念をもちつづけるように祈っている。そうすれば、夢で見たとおり、無限の空間に舞い上がり、すみやかに、また楽々と、不滅の主権の領域に達し、＜無限の地平線＞なる御方を恍惚として眺めることができよう。』

その朝、看守が牢獄に入ってきて、アブドル・ヴァハブの名前を呼んだ。アブドル・ヴァハブは、くさりから自由になるとすばやく立ち上がり、仲間を一人ずつ抱擁し、われを腕でまき、心臓のあたりに愛情深く押しつけた。そのとき、かれは靴をはいていないことに気がついた。そこで、われの靴をあたえ、はげまして殉教の場へと送り出した。そのあと、死刑執行人がわれのところきて、若者アブドル・ヴァハブの精神をほめたたえた。この証言に、われはどれほど神に感謝したことであろうか。』(p.633)

この仲間たちの苦しみも、国王の命を狙った者らへの残酷な復讐も、国王の母上の怒りをしずめることはできなかつた。昼夜、かの女はバハオラの処刑を要求して、執念深くさわぎたてた。いまだもって、バハオラこそが暗殺事件の主犯であると信じていたのである。かの女は声をあげて要求した。「その男を死刑執行人に渡しなさい。国王の母であるわたしが、卑怯な罪を犯した者を罰することができないなど、これ以上の屈辱がありますか！」かの女の復讐への叫びは強まっていったが、それは報われない運命にあった。かの女の陰謀にもかかわらず、バハオラは救われたのである。やがてバハオラは監獄から釈放され、国王の主権をはるかにしのぐ王国を設立することが

できた。かの女には、そういったことが可能であるなど、想像もつかなかったのである。テヘランでその年に流された血は、バハオラの釈放の代償として支払わされたものであった。この血は、バハオラと共に投獄されていた勇敢な仲間が流したものであった。敵は、神から委任された目的を、バハオラが達成しようとするのを懸命に阻止してきた。バハオラは、バブの大業を受け入れて以来、その擁護を一度も怠ったことはなく、そのためもろもろの危機にさらされてきた。これらの危機は、バブの信教の始まりに、弟子たちが直面しなければならなかったものであった。さらに、バブの弟子の中で、最初に超脱と大業への奉仕の模範を示したのもバハオラであった。バハオラは、さまざまな危険に襲われたが、その命を救ったのは神の御手であった。神は、バハオラを特定の目的のために選ばれたが、それを公に宣言するにはまだ早すぎるとみなされたのである。(p.634)

テヘランを震撼させた恐怖は、バハオラの命がさらされた危機のひとつに過ぎなかった。テヘランの男性、女性、子供は、大業の敵が信者たちを残忍に追跡するのを見てふるえた。アッバスという名の若者は、以前ソレイマンの召使いをしていた。主人のソレイマンの交際は広がったので、アッバスは、バブの弟子たちの名前や住所と人数に通じており、かれもまた信教を信じ、熱心な支持者であった。そこで、敵は陰謀を実行するために、かれを利用することにした。騒動が起こったとき、敵はかれを逮捕し、知っている信者の名前をすべて当局に明らかにするように強いた。主人の仲間である信者たちを知らせれば報酬が貰え、そうしない場合は、残酷な拷問を受けると警告したのである。そこでアッバスは、執行官ハジ・アリ・カーンの従者に、要請どおりに、信者と名前と住所を知らせると約束した。そこで、テヘランの道路に連れ出され、バブの信者を指さすように命じられた。かれは、バブやその大業にまったく関係のない人たちを指さしたため、これまで会ったこともないような人びとが多数、従者に引き渡された。その後、かれらは高額なわいろを贈って自由の身となった。このように、貪欲な従者はアッバスに、高額な身代金を払えるような者らをとくに選んで、かれらに知らせるように強い、そうしなければ、命があぶないとおどしたのである。そして、搾取したお金を、アッバスにも分け与えると約束させたのである。(pp.634-635)

それからアッバスは、地下牢シア・チャールに連れ出され、バハオラに紹介された。それは、バハオラを裏切らせるためであった。アッバスは、以前数回主人ソレイマンに同伴してバハオラに会っていた。高官の従者は、かれに、バハオラを裏切れば、国

王の母上からたくさんの褒美がもらえるとも約束した。アッバスは、バハオラの面前に連れ出されるごとに、二、三分立ち止まってバハオラの顔をじっと見つめた後、自分はこの人に会ったことはない、と強く否認してその場を去ったのである。これに失敗した敵は、国王の母上の愛顧にあずかろうと、バハオラを毒殺することにした。家からバハオラのもとに運ばれてくる食べ物を途中でうばい、それに毒を混入したのである。このため、バハオラは何年も健康を損なわれたが、毒殺の目的は未遂に終わった。

敵はついに、バハオラを暗殺事件の主犯と見なすことを中止し、アジムにその責任を負わせることにした。そこで、アジムが犯行の張本人となったのであるが、敵はこの方法で、国王の愛顧を得ようとしたのである。高官ハジ・アリ・カーンは、これに大賛成であった。かれは、バハオラの逮捕には関わっていなかったので、アジムを主犯として告発する機会をとらえたのである。

ロシア公使は、代理を通して、この事件の行方とバハオラの状態を注意深く見守っていた。ついに、通訳を通じて、強い語調のメッセージを総理大臣に送った。その中で、総理大臣の行為に抗議し、使者を一人選んで、政府の代表と高官ハジ・アリ・カーンの代表同伴で、地下牢シア・チャールに行かせ、あらたに公認された指導者（アジム）に、バハオラの立場について、公に宣言させるように要請した。そして、こう書いた。「その指導者が宣言することは、それがバハオラを賞賛するものであれ、非難するものであれ、すべて即刻記録されなければならない。それが、この事件の最終判断の土台となされるべきである。」総理大臣は、公使の忠告に従うことを通訳に約束し、要請通り、かれらをシア・チャールに行かせる日まで決めた。(p.636)

国王暗殺未遂事件を起こしたグループの責任者はバハオラであるのか、という質問に、アジムはこう答えた。「この共同体の指導者はバブのほかにはいません。バブはタブリズで殺害されました。わたしは、その復讐に立ち上がったのです。わたし一人で国王暗殺計画を立て、実施したのです。国王を馬から引きずり落としたのは、サディクという若者でした。かれはテヘランの菓子屋で、召使いとしてわたしの下で二年間働いていました。この若者は、バブの殉教に復讐したいという念で、わたし以上に燃えていました。しかしながら、あせりすぎて暗殺に失敗したのです。」公使の通訳と総理大臣の代表は、アジムの言葉を書き取り、総理大臣に提出した。バハオラが釈放されたのは、主にこの文書による。

アジムは僧侶たちの手に渡された。かれらは、アジムをすぐ処刑したかったが、テヘランの僧侶の長ミルザ・アボルがためらっていたので、実行できないでいた。高官ハジ・アリ・カーンは、モハラム月が近づいてきていたので、僧侶たちを兵營の二階に集合させ、いまだにアジムの処刑に反対していた僧侶の長を出席させることに成功した。高官は、アジムもその場所に召し、判決が下されるまで待たせておくように命じた。アジムは、街路を乱暴に引っ張りまわされ、住民からあざけられ、ののしられながら連行されてきた。そこで、高官と僧侶たちは、巧妙な策略をめぐらせて、アジムに死刑宣告を言い渡すことに成功した。その後、こん棒をもった男が、アジムに走り寄り、頭を強く打ち、それにつづいて、群衆が棒きれや石ころや短刀でかれに襲いかかり、手足を切断したのである。国王の暗殺未遂事件後の動乱で殉教した者らの中に、ジャニ（パルパ）もいた。総理大臣が、かれに危害をあたえるのを反対していたので、ほかの敵からひそかに殺害されたのである。(pp.636-637)

テヘランで点された火炎は近隣の州にひろがっていった。その結果、多数の無実の人たちの財産は略奪され、悲惨な状態に陥れられた。この火炎は、バハオラの故郷マザンデランにも猛威をふるったが、それは、主にバハオラの所有財産を目指したものであった。バブの献身的な弟子で、ヌールの住民であったモハメッド・タギ・カーンとアブドル・ヴァハブの二人はこの動乱で殉教した。

信教の敵は、バハオラの釈放がほとんど確実になったことを知って残念がり、国王をおどして、バハオラを殺害する計画にまき込もうとした。そこで、ミルザ・ヤーヤの愚行が口実に利用された。かれが信教の指導者になろうと空しい努力をしてきていたからである。敵は、バハオラがマザンデランで保持している影響力を一掃するように国王に進言したのである。

これを聞いた国王は、暗殺事件で負った傷からまだ回復していなかったが、強い復讐の念をかきたてられた。そこで、総理大臣を召し、かれの故郷の親族が多数いる州の住民間で、秩序と規律を守れなかったことを叱責した。当惑した総理大臣は、国王の命令をすべて実施することを誓った。国王は、その州に数連隊を即刻派遣するように命じた。公安を乱した者らを容赦なく鎮圧せよ、という厳命であった。(p.638)

総理大臣は、その地方からの報告は誇張されたものであったことを十分知っていた

が、国王の命令に従わざるを得なくなり、ヌールのタコール村にホセイン・アリ・カーンの率いる連隊を派遣した。その地方にはバハオラの家があった。総理大臣は、甥のアブ・タレブを最高司令官とした。かれは、バハオラの異母弟ミルザ・ハサンの義弟であった。総理大臣は、村に野営中は細心の注意をはらうように忠告した。「兵士たちがやり過ぎると、かえってミルザ・ハサンの威信をそこない、あなたの妹を苦しめることになる。」そして、その村についての報告の実態を調べ、三日以上はその近くに野営しないように命じた。

つぎに、総理大臣は、連隊長ホセイン・アリ・カーンを呼び寄せ、細心の注意をほらい、賢明に行動するように忠告した。「アブ・タレブは、まだ若年で経験もない。とくにかれを選んだのは、ミルザ・ハサンの親族だからだ。かれは、妹のためにも、タコールの村民に不必要な危害をあたえることはないと信じている。あなたは、年令も上で、経験もある。従って、りっぱな模範を示し、政府と国民の利益のために奉仕すべきことをかれに銘記させなければならない。あなたと相談するまでは、いかなる軍事行動も絶対とらせないようにせよ。」さらに、総理大臣は、必要な場合の増援を、その地方の指導者たちに文書で指示しているので安心するように述べた。

誇りと熱意で興奮したアブ・タレブは、中庸を守るようにとの総理大臣の勧告を忘れ、住民と不必要な争いを起こさないようにという連隊長の強い願いも無視した。そして、タコール村に近いヌール地方に入るとすぐ、その村民への攻撃準備を命じたのである。連隊長は必死になって駆けつけ、攻撃をしないように懇請した。アブ・タレブは横柄に答えた。「どんな方策を取り、どのように国王に仕えるかを決めるのは、上官のわたしの方だ。」(p.639)

こうしてタコール村の防御のすべのない村民に攻撃がしかけられたのである。村民は、このとつぜんの猛攻撃に仰天し、ミルザ・ハサンに訴えた。ミルザ・ハサンは、アブ・タレブとの面会を申し込んだが、拒否された。最高司令官のアブ・タレブは、つぎのメッセージを従者に託した。「ミルザ・ハサンにこう伝えよ。わたしは、国王から、この村の住民を虐殺し、女どもを捕らえ、財産を略奪する任務を託されているのだ。しかし、あなたのために、あなたの家に避難した女どもには手をつけないことにする。」ミルザ・ハサンは面会をことわられたことで憤慨し、アブ・タレブと国王の行為を強く非難して家にもどった。その間、村の男たちは近くの山中に逃げ込んだ。残された女たちは、ミルザ・ハサンの家に行き、敵から守ってくれるようにこん願した。

アブ・タレブはまず、バハオラの邸宅に向かった。その邸宅は、バハオラが大臣であった父親から受け継いだもので、立派な家具と貴重品でかざられていた。かれは、兵士たちに、貴重品をすべて運び去るように命じ、運び去れないものは、その場で破壊するように指示した。こうしてテヘランの宮殿より壮大な邸宅は修復できないほどこわされ、梁は燃やされ、飾りは灰と化したのである。

つぎに、かれは住民の家屋に侵入し、貴重品をすべて自分と兵士たちのために略奪したあと、建物を全部破壊した。男たちがすべて逃亡したこの村は、放火されて全焼した。アブ・タレブは、強壯な男たちが逃亡したことを知って、近くの山を探索するように命じた。発見された者らは、射殺されるか、逮捕された。しかし、逮捕された者らは、遠くまで逃げられなかった少数の年輩の男たちと羊飼いであった。そのうち、男二人が山の斜面に流れる小川のそばに横たわっているのが発見された。かなり遠くの方であったが、かれらがたずさえていた武器が太陽の光できらめいていたため、見つかったのである。

兵士たちが小川までくると、二人は向こう岸で眠っているのがわかったので、かれらめがけて発砲した。この二人は、アブドル・ヴァハブとモハメッド・タギ・カーンで、前者は即死し、後者は重傷を負った。二人は、アブ・タレブのところに運ばれたが、重傷を負ったモハメッド・タギ・カーンの命を救うためには全力がつかされた。というのは、かれの勇敢さは、ひろく知れわたっていたので、勝利のトロフィーとして首都テヘランに連行したいと思ったからである。しかし、受けた傷のため、二日後にかれも死亡した。捕らえられたほかの数人は、くさりをつけられてテヘランに連行され、バハオラが監禁されていたと同じ地下牢に投げ入れられた。その中には、モラ・アリ・ババもいたが、ほかの仲間と共に死亡した。その地下牢生活があまりにも苛酷であったからである。（pp.640-642）

一年後、アブ・タレブは疫病に襲われ、悲惨な状態でシェミランに運ばれたが、家族の者でさえかれに近づこうとしなかった。屈辱感を感じながら淋しく病に伏していたとき、看病にきたのは、かれから侮辱されたミルザ・ハサンであった。死の直前、総理大臣も訪れてきたが、そのときベッドのそばに居たのは、かれから無礼に取り扱われたミルザ・ハサンだけであったのである。その日、この卑劣な専制者は、生涯いつくしんできた野心をすべて失い、失望のうちに息絶えた。

テヘランで起こった動乱の波紋は、ヌールとその周囲の地方でも感じられ、さらにヤズドやナイリズにまでひろがった。それらの町で、かなりたくさんバブの弟子たちが捕らえられ、残酷に殺された。その大激動の衝撃はペルシャ全体で感じとられたのである。さらに、その衝撃の波は、遠かくの地方の小村にまで押し寄せてきた。その結果、すでに迫害されていたバブの弟子たちにさらなる苦しみをもたらした。地方の知事や属官は、貪欲と復讐の念に燃え、富をふやし、国王の愛顧を受けるために、この機会をとらえようと立ち上がった。情けも節度も恥も無視して、どれほど卑劣で無法な方法であってもかまわず、無実の住民の財産を強奪した。また、正義や礼儀を無視して、バビ（バブの信者）と思える者らを逮捕し、投獄し、拷問にかけ、その勝利結果を、急遽テヘランのナセルディン国王に知らせたのである。(p.642)

ナイリズでは、動乱の影響は、支配者と住民がバブの信者たちを迫害しはじめたことで明らかとなった。国王暗殺未遂事件から二ヵ月して、ミルザ・アリという若者が見事な勇気を示し、そのため、アリ・サルダールという称号を得た。かれは、ヴァヒドとその支持者たちが殉教した戦いで生き残った人たちに、極度の心遣いを示したことで名を知られるようになった。しばしば、真夜中に家を出て、できるかぎりの援助を、苦しんでいる未亡人や孤児にあたえた。すなわち、かれらに食べ物や衣服を惜しみなくあたえ、また負傷者の看護をし、悲嘆に暮れている人たちをなぐさめたのである。ミルザ・アリの仲間の何人かは、この無実の人びとの苦しみを見て、はげしい怒りに燃え、ザイノル（ナイリズの知事）への復讐を決意した。ザイノルはまだ、ナイリズに住んでおり、バビたちに苦難をもたらした張本人だとみなされていた。仲間たちは、ザイノルが今後も苦しみをもたらそうとしていると信じて、かれの命を取ることにし、公衆浴場にいたかれに突然襲いかかり、殺害したのである。この結果、暴動が起こり、最終的には、ザンジャンの大虐殺の悲劇となった。

ザイノルの未亡人は、当時シラズに在住していた権力者ミルザ・ナイムに、夫の復讐をせき立て、自分の宝石全部と、かれの欲する所有品をすべて報酬として与えることを約束した。そこで当局は裏切り工作により、多数のバブの信者を逮捕し、その多くを残忍なむち打ち刑に処した。そして全員を投獄し、テヘランからの指示を待った。総理大臣は、投獄された者らの名前リストと報告を国王に提出した。国王は、シラズの代理の努力が成功したことに大変満足し、そのめざましい貢献に、十分な褒美をあたえ、逮捕された全員をテヘランに連行してくるよう命じた。(p.643)

この事件は大虐殺で終わったが、それにいたったさまざまな状況を記録するつもりはない。シャフィという人が別の小冊子に、その事件の詳細を正確に記録しているので、それを参照していただくように読者にすすめる次第である。バブの勇敢な弟子百八十人以上が殉教したことだけは述べておこう。同数の弟子たちが負傷し、動けない状態にあったが、それでもテヘランに向かうように命じられた。困難な旅で、生き残ったのは二十八人だけであった。そのうち十五人が、到着した日に絞首台に送られ、残りは投獄された。その後二年間、残虐行為を受けて苦しみつづけ、最後には釈放されたが、多くは故郷へ向かう途中で、監獄生活の苦難から疲労困憊し、息絶えたのであった。

シラズでは多数のバブの弟子たちが、タハマスブ・ミルザの命令で殺害された。迫害者たちは、殺害された二百名の頭部を銃剣に刺して意気揚々とファルス州のアバデ村に運んだ。かれらは、テヘランに運ぶ予定であったが、国王の使者から、それを中止するように命じられたため、アバデ村に埋葬することにしたのであった。(p.644)

女性は六百名いたが、その半数はナイリズで釈放された。残りは、二人づつ鞍なしの馬に強制的に乗せられ、シラズに送られた。そこで、はげしい拷問を受けたあと見捨てられた。多くはシラズに行く途中で命を落とした。残りは苦難に耐え、最後には自由の身となった。このように、信仰のために極度に苦しめられた勇敢な男女にふりかかったことを述べる時、わたしのペンは恐怖で縮み上がるのである。バブの弟子たちに対する理不尽な残忍さは、その痛ましい事件の最終段階で最悪の醜行となった。前に述べたザンジャンの包囲の恐怖、そしてホツジャトとその支持者たちに加えられた侮辱も、二、三年後のナイリズとシラズで起こった極悪な残虐行為に比べるとうすれてしまうのである。今後もっと能力のある人が、言語に絶する蛮行を詳細に記録に残すであろう。その内容がどれほど残忍なものであっても、それは、バブの大業が、信者に注入できた信仰の貴重な証拠の一つとして永遠記憶されるであろう。(p.645)

アジムの告白で、ついにバハオラは生命にせまっていた危機から解放された。アジムが国王暗殺の主な扇動者と自白して処刑されたことで、騒然としていた住民の怒りはやわらいだ。かれらの憤怒と復讐を求める叫びは、バハオラからそらされ、はげしい非難の声もかなりしずまったのである。テヘランの指導者たちは、それまでバハオラを国王の主敵と見なしていたが、暗殺事件には一切かかわっていないという確信を

固めてきていた。そこで、総理大臣ミルザ・アガ・カーンは、信頼できるハジ・アリを代理として、地下牢シアーチャールに行かせ、バハオラに釈放命令を伝えるように命じた。(pp.646-647)

この代理人は、地下牢のあまりのひどさに仰天し、悲痛な思いでいっぱいとなった。かれは、その光景を信じることができなかつたのである。バハオラは、寄生虫のむらがる床にくさりでつながれ、首はその重さでまがり、顔は悲しみにあふれ、髪はぼうぼうとし、衣服も汚れたままで、最悪の地下牢の醜悪な空気を吸わされていた。この様子に、かれの目から涙があふれてきた。暗やみの中で、バハオラの姿を認めたとき、こう叫んだ。「ミルザ・アガ・カーンにのろいあれ！ あなたが、これほど屈辱的な監禁を強いられておられることは、わたしには想像もつきませんでした。それは神もご存知です。総理大臣が、これほど残忍なことができるなど思いもよりませんでした。」そして、マントをはずし、バハオラに差し出し、「総理大臣と顧問に会われるとき、これを着て下さい」とこん願した。しかし、バハオラはその要請に応えず、囚人の衣服のまま、政府の建物に向かった。

総理大臣は、最初にバハオラにつきのように述べた。「わたしの忠告を聞き、バブの信教との交わりを絶っていたならば、あなたは苦痛も屈辱も味わうことはなかったであろう。」バハオラは答えた。「あなたの方で、わたしの勧告を聞き入れていれば、政局はこれほど危機に瀕するようにはならなかつたであろう。」(p.648)

こう述べて、バハオラは、バブの殉教のとき語った言葉を、かれに思い起こさせた。「点された炎は、今後はげしく燃えさかるであろう」という言葉が、総理大臣の脳裏を横切った。かれはこう述べた。「あなたの警告通りのことが起こりました。今わたしにどんな忠告をあたえますか？」バハオラは即刻答えた。「この国のすべての知事に、こう命ぜよ。無実の人びとの血を流すことを止め、女性を辱めたり、子供を傷つけたりすることを中止し、バブの信教の迫害を止め、その信者たちを一掃するという無駄な望みをすてるようにと。」(p.649)

その日、総理大臣は全国の知事に、残酷で恥ずべき行為を中止せよ、との命令を下した。その令状にはこう書かれていた。「これまで実施してきたことで十分だ。今後は住民を逮捕し、罰するのは中止せよ。国民の平和と平穏をこれ以上乱してはならない。」

政府は、国家にふりかかった災いを一掃するための最上策を審議し、その結果、釈放直後のバハオラを国外に追放することに決定した。すなわち、バハオラとその家族に一月以内でペルシャから離れるように命じたのである。

ロシア公使は、政府の計画を知るとすぐバハオラの保護を申し出、ロシアに招待した。しかし、バハオラはそれをことわりイラクに行くことを選んだ。バハオラは、カルベラからもどって九ヵ月後の一八五三年一月十二日、最大の枝（アブドル・バハ）とアガ・カリム（バハオラの実弟）をはじめ、ほかの家族のメンバーと共に、護衛の一団とロシアの公使一行に付添われて、テヘランからバグダッドに向けて出発した。
(p.650)

エピローグ

バハオラが自国からイラクに追放された時期ほど、バブの信教が衰退したことはなかった。バブが命を捧げ、バハオラが苦勞しながら進めてきた大業は、今にも消滅するかに見えた。その力は失われ、抵抗力も回復できないように思われた。失望と災難が、おどろくほどの早さでつぎからつぎへと、度をまして起こり、熱心な支持者の活力をうばい、希望をくもらしたのである。事実、ナビルのこの物語の表面だけを読み取る者には、最初のページから、敗北と虐殺、屈辱と失望の連続で、それも起こるたびに強烈となって行き、最後にはバハオラの故国からの追放で最高潮に達することを記述したにすぎないと思えるであろう。疑念をもつ読者は、この信教が天の威力を付与されていることを認めようとせず、バブがもたらした概念はすべて、失敗の運命にあると思った。バブが勇敢に推進した大業は無残な失敗に終わったかに見えたのである。そのような読者は、このシラズの不運な若者バブが残酷に殺害されたことを見て、その一生を、実りを結ばない、もっとも悲しむべき生涯の一例と見なし、それはまた、人間の宿命でもあったのである。その短い、英雄的な生涯は、流星のようにすばやくペルシャの天空を横切り、その間、全国をおおっていた暗やみに永遠の救済の光をもたらしたように見えたが、やがて暗黒と絶望の深淵に落ち込んだのであった。(p.651)

努力を進めるたびに、バブの魂に重くのしかかっていた悲しみと失望は深まっていた。聖なる都市メッカとメジナで、自らの使命をはじめて公に宣言するという計画は望み通りにはいかなかった。メッカの州長官は、ゴッドスからバブのメッセージを受け取ったが、軽蔑をもって、よそよそしい無関心さを示した。バブが心にいだいていた計画、すなわち、巡礼からカルベラとナジャフに成功裡にもどり、それらのシーア派の本拠地で大業を樹立する計画もまた完全にくじかれた。十九人の弟子にあたえていた指示も、大部分成就されないままであった。かれらは、節度を守るようにとのバブの勧告を熱意のあまり忘れ去り、そのためバブが抱いていた望みの実現を大いに妨げたのである。

賢明で機敏なモタメッド（マヌチェール・カーン、知事）は、バブの貴い生命にせまっていた危機を見事にかわし、だれよりも深い献身をもってバブに仕えた。そのモタメッドのとつぜんの死で、バブは、不誠実なゴルジン・カーンの掌中に移された。かれは、敵のうちでももっとも憎むべき、破廉恥な男であった。モハメット国王に会

見できる唯一の機会も、気まぐれで、卑怯な総理大臣アガシの妨害で失われた。その会見は、バブ自身が要請し、それに希望をかけていたのであるが。総理大臣は、すでに大業に対して大いに好意を抱いている国王がバブに会えば、自分の立場が不利になることを恐れたのである。

バブの激励で、主な弟子二人、モラ・アリとシェイキ・サイドがそれぞれ、トルコ領土とインドに信教を紹介しようとしたが、みじめな失敗に終わった。モラ・アリは努力をはじめてすぐ惨殺され、挫折した。シェイキ・サイドはわずかながら結果を生み出し、一人の男性がバブを受け入れたが、その奉仕は、ロリスタンでイルデリム・ミルザの裏切り行為でとつぜん阻止された。バブ自身は、宣言以来ほとんど監禁され、アゼルバエジャンの山中の砦に閉じ込められていた間は、強欲な敵に苦しめられていた信者たちから隔離されていた。(以上のもろもろの事件の中で)とくに、かれ自身の、激烈で、屈辱的な殉教の悲劇を見ると、この高貴な大業は、最低の恥辱に落とされたかに見えたであろう。バブの波乱に富んだ短い生涯の終末で、英雄的な努力も、その目的を達することができなかつたように見えたであろう。(pp.652-653)

バブ自身の苦難は激烈であったが、多数の弟子たちにふりかかった災難にくらべると、その一滴にすぎなかつた。バブは悲哀の杯を飲んだが、その後に残された者たちは、その残りを余すところなく飲まなければならなかつたのである。シェイク・タバルシでの大惨事では、もっとも有力な弟子ゴッドスとモラ・ホセインを失い、さらに、三百十三人の忠実な弟子たちも巻き込んだ。これは、バブがそれまでに受けた打撃のうち最悪で、すばやくせまりつつあつた生涯の終わりを暗黒で包んだ戦いであつた。残忍非道のナイリズの戦いではヴァヒドを失つた。ヴァヒドは、最高の学識者で、最大の影響力をもち、バブの弟子のうちで最高の業績をもつていた。かれの死は、大業のたいまつを掲げつづける弟子たちにとって、さらなる大打撃であつた。ナイリズの災難直後に起きたザンジャンでの虐殺で、信教の資源は枯渇してしまつた。弟子たちを支えていたホッジャトの死で、最後に残つていた指導者は消え去つたのである。これらの信教の指導者たちが、ほかの弟子たちより卓越していたのは、聖職者の権威をもち、学識が深く、勇敢で強力な性格をそなへたいたからであつた。バブの弟子たちの精華は、容赦のない殺戮で消され、残つたのは、奴隷にされた多数の女子供で、無慈悲な敵の支配下で苦しみにあえいでいた。信教の指導者たちは、知識と模範で、勇敢な弟子たちの心に点された炎を支えていたが、かれらもまた殺害され、その事業は、迫害された共同体にふりかかった混乱の中で放棄されてしまつたのである。

(pp.653-654)

バブの大業を推進できる能力を示した者たちのうち、残ったのは一人バハオラだけであった。ほかの者たちはすべて敵の剣に倒された。信教の名目上の指導者ミルザ・ヤーヤは、不面目にもテヘランの動乱の危機を逃れて、マザンデランの山中に身をひそめた。托鉢僧を装って、椀を手にし、危険な場所からギランの森へと逃げたのである。バブの秘書セイエド・ホセインとその共同者ミルザ・アーマドは、兩人とも、バブが著わしたバヤン書の教えと意味を理解し、またバブと親密に交わり、信教の教えに通じていたので、ほかの弟子たちの理解と信仰を深める立場にあったが、テヘランの地下牢シア・チャールにくさりでつながれていた。そのため、かれらを大いに必要としていた残りの弟子たちから完全に切り離されていた。この二人には残酷な殉教の運命が定められた。バブを幼少のときから、父親以上に深い愛情で世話をし、シラズで苦しんでいたバブに重要な奉仕をしてきた伯父も投獄されていた。かれは、バブの死後、二、三年生き延びることができれば、計り知れないほどの奉仕ができたはずであったが、獄中で、最愛の大業に奉仕をつづける望みを失ってわびしく過ごしていた。

バブの大業の燃える象徴であるタヘレも、その不屈の勇氣、はげしい気性、固い信仰、燃えるような熱意、深い知識で、ある期間、ペルシャの女性をバブの大業に勝ち取ることができたように見えた。しかし、遺憾ながら、勝利の寸前、敵の怒りの犠牲となったのである。タヘレの遺体が穴に落とされる時、そばに立っていた者らには、かの女の影響は完全に消されてしまったと思われた。バブの「生ける者の文字」と呼ばれる弟子たちの残りも、殺害されるか、獄中で足かせをかけられているか、または辺鄙な土地で人目につかない生活を送っていた。

バブが書いたおびただしい数にのぼる文献も、大部分、弟子たちにふりかかったと同様の屈辱を受けた。その多くは、抹消されるか焼き捨てられ、中には改悪されたものも少数あった。このように、大半は敵に略奪され、残りは、判読できない状態で、乱雑に、危険な場所にかくされていた。すなわち、生き残ったバブの弟子たちの間に散在していたのである。(pp.654-655)

バブが宣言し、全生命をささげた信教は、最低限に落ち込んだ。信教を攻撃してきた火炎は、その構造をほとんどほろぼしたかに見えた。死の翼がその上を舞っている

ようであった。その生命は、回復できないほど完全に根絶されるのではないかと思われた。暗雲がすばやく迫っている中で、大業を救ってくれる人物として光を投げかけていたのは、バハオラだけであった。バブの大業を擁護するために立ち上がって以来、バハオラは、明確なビジョン、勇気、英知を幾度となく示してきた。もし、ペルシャに留まることができれば、かれこそは、消滅しつつある信教を復活できると思えたが、そのような運命ではなかったのである。信教の歴史上、類を見ない大災難が、これまで以上の激烈さでふりかかってくるまで、この度は、バハオラ自身、その渦巻きに巻き込まれたのである。生き残った弟子たちが抱いていたわずかの望みも、その混乱の中でくじかれた。かれらの唯一の望みであるバハオラは、動乱の嵐で打ちのめられ、回復は不可能に見えたのである。バハオラは、ヌールとテヘランの全財産を略奪されたあと、国王暗殺事件の主犯として告発され、親族から見放され、以前の友人や賞賛者たちからも軽蔑され、暗黒の寄生虫のむらがる地下牢に入れられた。そのあと、家族とともに、国外に追放され、迫害された信教の唯一の救済者としての期待は、一時、完全に消滅したかに見えた。(pp.655-656)

ナセルディン国王が、自らを大業の破壊者として誇りに思ったのも不思議ではない。かれは、大業を公然と抑圧しつづけ、ついに、表面では根絶したと思ったのである。国王は、この大規模な流血の戦いのさまざまな局面を思い出しながら、自らバハオラの追放命令に署名したことで、人民の心を震撼した憎い異端の滅亡を宣告したと想像したのであるが、それも不思議ではない。そのとき、恐怖のまじないは解かれ、全国を荒らした波はついにおさまり、人民が求めている平和がもどってきはじめたと、国王は思ったのである。バブはもはや居なくなった。その大業を支えていた強力な柱もつぶされた。全国にちらばる多数の信者たちもおじけづき、疲れ果てた。指導者のいなくなった共同体の唯一の望みであるバハオラも国外に追放された。バハオラは自ら進んで、狂信的シーア派の本拠地の近くを追放先を選んだ。これで、王座について以来自分をなやましつづけてきた亡霊は、完全に消滅した。この運動はすばやく忘れ去られているという助言者らの言葉を信じれば、今後一切、この憎むべき運動について聞くことはない、国王は信じたのである。(p.656)

迫害を生き抜いたバブの信教の信者でさえ、大業の目的は達せられなかったと、一瞬、思ったかもしれない。さらに、雪におおわれたイラクとの国境の山々を越えて行くバハオラの一行のうちには、少数をのぞいて、同じように思った者もいたであろう。大業を四方八方から包囲した暗黒の勢力は、ついに勝利を得、若々しい栄光の王子が、

自国に点した光を消してしまったように見えたのである。

ともかく、国王の目には、一時、全国を襲った（バブの信教の）勢力は、政府軍の力で征服されたように見えたのである。バブの信教は、その誕生時から不運に会い、やがて、国王の武力に屈服せざるを得なかった。信教は打撃（国王の暗殺事件）を受けたが、それは当然報いを受けるに足るものであった。国王は、心配のあまり眠れない日々を過ごしていたが、今や、そののろいからも解放され、そのとてつもない妄想がもたらした荒廃から、国を建て直す事業に集中しはじめることができた。今後の真の使命は、教会と国家の基盤を強化し、同じような異端の侵入を防ぐことであると、思ったのである。異端は、今後とも国民の生活に毒を流しかねないからである。(p.657)

国王の想像は何と空しく、また何という誇大な妄想であったろうか。かれが潰したとあさはかにも想像した大業はまだ生きていた。そして、大動乱の中から、以前よりも強力となり、純化され、高潔となって出現するように定められていた。このおろかな国王には、大業はすばやく絶滅に向かっているように思えたのであるが、実際は、変革期の激烈な試練を通過していたのであった。この試練を通して、大業は、その高貴な運命の途上で、つぎの段階へと進んで行くようになっていたのである。その歴史で、これまで以上にかがやかしい新しい章が開かれようとしていた。国王は、抑圧により、大業の運命を封じてしまったと思ったのであるが、それは、進化における最初の段階で、時がくれば、バブが宣言したものより強大な啓示へと発展するものであった。バブの手で植えられた種は、しばらくの間、前例のないはげしい嵐にさらされたが、その後、国外の土壌に移植された。しかし、それは成長発展しつづけ、時期がくれば、大木となって、地上のすべての民族と国民の避難所となるように定められていたのである。バブの弟子たちは拷問を受けて殺害されたり、屈辱を受けて弾圧されたりした。弟子たちの数は減少し、信教の声は武力で黙らされ、その運命は絶望的となり、有能な弟子たちは信仰を捨てたりした。しかし、バブの言葉の殻に埋められた約束は、いかなる手もうばい去ることはできず、いかなる力もその発芽と成長をとめることはできなかったのである。(pp.657-658)

バブは自分の後に下される啓示の先駆者だと宣言したが、その啓示の最初のきざしは、バハオラが監禁されていたテヘランの暗黒の地下牢で、すでに認められた。バブは、その出現がせまっていることをくり返し言及していたのである。バブの重大な啓示から生み出された威力は、やがて、その栄光を十分に表わし、地球を取り巻くよう

になっていたが、それはすでに、死刑執行人の剣の下に、牢獄に監禁されていたバハオラの中に脈打っていた。はげしい苦しみの最中にあるバハオラに、「なんじこそは、神の代弁者に選ばれた」と告げる静かな声は、信教の滅亡を祝う準備をしていた国王の耳にとどくはずはなかった。この投獄で、バハオラの名に汚名をきせたが、それは、より屈辱的なイラクへの追放の前置きであると国王は信じていた。ところが実際、イラクはバハオラの運動の最初の活動場となった。その運動は、最初バグダッドで公にされ、後に、アッカの牢獄都市から、ナセルディン国王をはじめ、世界の為政者や国王に宣布されたのである。(pp.658-659)

国王は、バハオラに追放命令を出したことで、実際は、神の目的の推進を助けていたこと、そしてかれ自身はその手段にすぎなかったことに気づけなかった。さらに、自分の統治が終わりに近づいてきたとき、自分がその根絶に全力をつくした信教が復活することにも気がつかなかった。この復活で、信教の活力が示されたのであるが、国王は、失望の奈落にあったとき、信教がそれほどの活力をもっているなど信じることはできなかつたのである。国内、そして隣国のイラクとロシアだけでなく、東は遠方のインドまで、西はヨーロッパのトルコまで、信教の炎が再燃したことで、国王はあさはかな夢からさまされたのであった。バブの大業は、死からよみがえり、以前よりもはるかに強大な姿で出現したのである。バハオラの人格、その具現である啓示の力で、バブの大業にあらたなひずみがついたが、国王は、そのようなことを想像さえできなかつたのである。無活動状態であった信教が迅速に復活し、国内で強化されたこと。国外にも拡大していること。バハオラ自らイスラム教本拠地を居住地に選び、その中心で、おどろくべき宣言をしたこと。ヨーロッパのトルコで、自らの使命を公に宣言したこと。その宣言を書簡にして、地上の君主たちに送ったこと。その書簡の一通は、国王自らも受け取るようになっていたこと。その宣言が、無数の信者の心に熱意を喚起したこと。大業の中心が聖地に移されたこと。バハオラの生涯が終わりに近づくにつれて、嚴重であった監禁がゆるめられていったこと。東方の国々からバハオラの監獄を訪れる多数の訪問者や巡礼との会見を禁止するオスマン帝国皇帝の条例が解禁されたこと。西欧の思想家たちの間で探索心が生じたこと。バハオラの信者たちの間に分裂をもたらそうとした勢力が完全につぶされ、その主な扇動者に悲惨な運命がふりかかったこと。とくに、バハオラは、崇高な教えの書を多数出版し、それらは、ますます増加していく信者たちによって、ロシアのトルキスタン、イラク、インド、シリア、さらに遠方のヨーロッパのトルコまで伝えられたこと。以上が、信教は抑圧され、滅亡したと信じていた国王の目に、信教は征服不可能であるということ、確信させた主な要素であった。国王は、信教の根絶の努力が無駄であったことをかく

そうとしたが、それはだれの目にも明らかであった。国王は、バブの大業の誕生と苦難を目撃してきたが、今や、それが不死鳥のように灰からよみがえり、想像もできなかった業績に向かって進展しているのを目前にしていた。(pp.662-663)

ナビル自身も、この物語を書いて四十年以内に、過去のあらゆる宗教の結実であるバハオラの啓示が、これほど発展し、世界に広がり、認められる道を直進していることを想像できなかった。また、バハオラの死後四十年以内に、ペルシャと東方の国々を越えて最遠隔の地方にまで浸透し、全地球を一周するなど思いもよらなかった。さらに、この大業が、その期間内に、アメリカ大陸の中心にその旗をすえ、ヨーロッパの主要都市に進出し、アフリカ南部の辺境までとどき、遠隔のオーストラレーシアにも基点を設置するであろうという予言を聞いても、信じなかったであろう。ナビルは、信教の運命にたいする確信で燃えていたが、バブの廟を心に描くことはできなかった。かれは、バブの遺体が最終的にどこに安置されるか知らなかった。それが、カルメル山の中心に置かれ、世界の隅々から訪れてくる多数の訪問者たちの巡礼場所となり、光の標識となることなど想像できなかったのである。旧バグダッドの小道にあるバハオラの質素な住居が、その後、執拗な敵の陰謀の結果、注目をあびるようになり、ヨーロッパ列強国の代表が集まる会議で真剣に審議されることになるなど想像できなかった。最大の枝（アブドル・バハ）の力で、短期間にアメリカ大陸の北部の州が栄光あるバハオラの啓示にめざめるなど想像できなかった。ナビルは、この物語の中で、国王たちの暴虐をあざやかに描写したが、それらの王朝が、没落し、自分たちの敵（バブの信教）にあたえた苦しみを、自ら味わうことになるなど想像できなかった。かれは、信教に激しい迫害を加えた自国の聖職者機構全体が、自分たちが抑圧しようとした勢力によって、すみやかに打倒されるなど想像できなかった。イスラム教のソニ派の最高機関で、バハオラの信教を迫害したサルタンの位とカリフの位が、イスラム教の信者によって、容赦なく一掃されるなど、信じることはできなかった。バハオラの大業の着実な拡大と共に、行政機構が強化され、異なった人種や民族からなるユニークな共同体を世界に示すことができるようになるなど想像できなかった。その共同体は、世界の隅々にわたり、同じ目的をもち、活動は整合され、いかなる逆境にもそがれることのない熱意で燃えるなど想像がつかなかったのである。(pp.664-667)

過去と現在の業績をしのぐ偉業が、今後その貴重な遺産を委任された者らによって成し遂げられるであろうことをだれが知り得ようか。現在の社会の混乱から、われわれの期待よりもすみやかに、バハオラの世界秩序が出現するかもしれないと、だれが

想像できようか。その輪郭は、世界中のバハイ共同体の間で、すでにかすかに認められるのであるが。これまでの業績は偉大で、すばらしいものであったが、大業の黄金時代の栄光はまだ現われていない。黄金時代の出現の約束は、バハオラの不朽の言葉に埋め込まれているのである。この大業をいまだに苦しめる暗黒の力の猛襲ははげしく、その戦いは絶望的で、長引き、また、いまだもって強い失望感をもたらすものであっても、大業は、やがてほかの宗教が史上成し遂げた以上の勢いをもつようになる。

東西の社会が、世界的な同胞関係に結び合わされること、それは、過去の詩人や夢想家が歌ってきたもので、バハオラの啓示の中心として約束されているものであるが。すなわち、バハオラの法が、世界の諸民族と諸国民を和合させる永久的なきずなどとして認められること、また、最大平和の君臨が宣布されること。これらは、バハオラの信教が展開して行くときのかがやかしい物語の章に語られるものである。

この上ない光輝にみちた勝利が、努力をつづける大多数のバハオラの信者のために準備されていることをだれが知り得ようか。確かに、われわれはバハオラが建てた巨大な建造物にあまりにも近くにいるため、その啓示の進化の現段階では、その約束の栄光を十分想像することさえできないのである。無数の殉教者の血で染められた大業の歴史を考えると、われわれは鼓舞されずにはおれないのである。今後、どれほどの恐るべき勢力で襲われても、どれほど無数の災難で苦しまされても、大業の前進は阻まれることは絶対になく、バハオラの言葉に秘められた最後の約束が完全に実現されるまで進展しつづけるであろう。(pp.667-668)